Sweet&Bitter

みずの

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ｓｗｅｅｔ&ａｍｐ;Ｂｉｔｔｅｒ

【Ｎコード】
Ｎ６３７６Ｖ

【作者名】
みずの

【あらすじ】
高校２年の和美が片想いをする相手は、９つ年上の担任の教師だった。「不良教師」と生徒たちから怖がられるその教師は、俺様でツンデレ（？）な男だったけれど、和美はその意外な裏側を知って…。

※単独でも読めるシリーズですが、作者の別シリーズ「Ｓｗｅｅｔ&ａｍｐ;Ｃｏｏｌ」をご覧いただいてからだと、違った読み方ができるようになっています。

1　side：Kazumi

目の前が、真っ暗になった気がした。ずぶり、ずぶりと足元から何かに呑まれていく感覚に襲われる。コールタールの海に沈んでいってしまうような気さえして、私はもがくのを忘れてしまっていたほどだ。

何を…言われたのか一瞬分からなかった。真っ暗になっていく視界の中で、目前の白衣の男が煙草を片手にこちらを見下ろしているのが見える。私を瞬時に暗闇に突き落とした、その男の発したさっきの一言がずっと頭から離れない。

「あいつ、実は結婚してるぜ」

何度か反芻した頃には、私は頭まで闇にのまれていた。

＊＊＊＊＊＊

「なっちゃん！！」

バン、と乱暴に数学準備室のドアを開けると、中にいた2つの影が驚いたようにこちらを振り返った。てっきり数学教師しかいないと思っていた私は、反対に驚いて目を見開く。涙で濡れた顔を拭うことも忘れていたので、そこにいた2人は私を見て一瞬互いの顔を

見合わせた。
「あ、ごめんなさい…取り込み…中？」
どうやら、男子生徒が数学教師の名取先生に分からないところを教わりに来ていたらしかった。何となく気まずくて消え入りそうな声でそう言うと、その男子生徒は私を見てから先生……「なっちゃん」の方に向き直る。
「大体分かりました。ありがとうございます」
「おぅ、また分かんなくなったら来いよ」
煙草を灰皿に押し付けながら、先生はその生徒にそう声をかけた。軽く一礼した彼が、入口にいる私の方へと近づいてくる。
「どうぞ」
微かに微笑んで私を中へ促すと同時に、彼はそのまま数学準備室を出て行った。泣きすぎな私の顔を見て…気を遣ってくれたんだろう。

「…ごめんなさい、邪魔しちゃった」
後ろで閉められるドアを振り返りながら、私は部屋の奥にいる先生に声をかける。
「いや、ちょうど終わったところだ」
新しい煙草に火を点けながら、先生はニヤリと笑って見せた。
「で？お前はどうしたんだ？白石」
そう言って立ったままの私を見上げて、近くの椅子を勧めてくれた。

この学校には、「不良教師」と生徒に呼ばれる教師が2人いる。
一人はこの数学教師、名取貴弘。年は今年で２６歳になる…んだったと思う。１８０センチ以上ある長身に、細身の体。
女の子受けしそうな整った顔立ちで、口は悪いために「不良教師」なんて言われているけれど、男女問わず人気がある。親しみを込めて『なっちゃん』と呼んでいるのは私だけではない。

生徒の前だとしても数学準備室でパカパカ煙草を吸う辺り、「真面目」とは言いがたい。けれど相談をすれば生徒と目線を合わせて考え、答えてくれる。教師の中では浮いていることもあるらしいけれど、私たち生徒からしたら貴重な存在に違いなかった。

私も、その一人。
ひょんなことから接点を持ったこの数学教師に、いつしか相談するためによくここを訪れるようになった。

そして、うちの学校の「不良教師」は、もう一人。

「ユキと何かあったのか？」
なっちゃんが、そう名前を出す。
そう、もう一人の不良教師の名前は本城行禎。「ゆきさだ」という名前から、なっちゃんは「ユキ」と呼んでいる。いつも白衣を着た…化学の教師。なっちゃんとは正反対の、生徒たちから怖がられ恐れられている「不良教師」だ。
無口で無愛想、背はなっちゃんより更に高くて黙っていれば電柱みたいだ。短髪に髭を生やしていて、ハードボイルド系と言えば聞

こえはいいけれどただ柄が悪いだけとも言われている。年は今年26、なっちゃんとは偶然だけれど大学の教育学部からの親友らしい。

…そして、私が1年前から片想いをしている相手だ。そのことはずっと前からなっちゃんも知っている。

持っていたハンカチで涙を拭いながら、私はなっちゃんの斜め前の席に腰かける。けれど、さっきの本城先生の一言を思い出せば涙はとめどなく溢れてきそうだった。

本城先生は、私の気持ちになんて気づいていない。…というより、きっと興味もない。

そんなことは分かっているけれど…それでも、あの一言は胸にグサリと突き刺さった。

「私はね、別になっちゃんが実は隠れて結婚してようがなんだろうがそんなことはどうでもいいの」

前置きなしに、私はそう話し始めた。本城先生に言われたその内容に傷ついたわけじゃない。ただ、その一言を言えてしまうほど、彼が私に興味がないことを思い知らされただけだ。

「…ちょっと待て。色々と聞き捨てならねぇけど…まず話が見えねぇ」

煙草の煙を吐き出しながら、なっちゃんは目を細めて私を見る。

その言葉を受けて、私はさっきまでの化学室での本城先生とのやり取りを力なく説明した。

私は、本城先生が顧問をしている化学部に所属している。化学にそれほど興味があったわけではないから、入部した動機は明らかに不純だ。それでも先生を好きになったおかげで本気で取り組んで来たし、先生の担当する化学の成績だって上がっている。始まりはどうであれ、今はそれなりに部活を楽しんでやってきていた。

果てしなく無口なせいで、本城先生のことを好きになっても2人で話をする機会なんてほとんどなかった。何か話しかけても返ってくる言葉は少ないし、授業のことで質問をしても必要以上の説明は得られるはずもない。今日の部活中に偶然2人っきりになる機会があったのだけれど、例に漏れず会話が弾むことはなかった。…そもそも、自分のことを話すのが嫌いそうな先生に、何の話をすればいいのかわからなかった。…だから、私は無難に共通の話題になりそうなことを探したんだ。

「…で？」

そこまで聞いて、なっちゃんは机に肘をついた怠慢な姿勢で私の話の先を促す。

「それで……先生と話せそうなことって言ったら、なっちゃんのことしか思い浮かばなくて…」

友人関係でだって、共通の友達がいればその話題で盛り上がったりすることもあるくらいだ。だから、なっちゃんの話なら親友である本城先生も普通に話してくれると思った。だけどなっちゃんのこ

とを聞けば聞くほど、先生は無口になっていって…。本人でもないのに根掘り葉掘り聞かれて、うっとうしかったのかもしれない。

『…あいつ、実は結婚してるぜ』

煙草の煙を肺に溜め込んでから、先生はふーっと細く長い息を吐いた。実験に使った器具を片付けていた私は、その一言に手を止めて先生を見上げる。

『残念だったな』

そのトドメの一言で、察した。…勘違いされたんだ、と。

本城先生との話題を探す余りなっちゃんのことを話しすぎて、私が好きなのはなっちゃんだと勘違いされたんだ。

好きな人に、別の人のことを好きなんだと誤解されることがこんなに辛いとは知らなかった。目の前は真っ暗になり、時間を戻せるものならそうしたかった。

「…バカだなぁ」

話を聞き終えたなっちゃんは、一番にそんなひどい感想を漏らした。

「そんなこと、言われなくたって分かってるよ」

これ以上落ち込ませないでほしい。がくっと肩を落として、私はうなだれる。そんなこちらの様子を見て、なっちゃんは「いや」と答えながら短くなった煙草を再び灰皿に押し付けた。

「お前だけじゃなくて、ユキも」

「……先生も？」
言葉の意味が分からなくて聞き返したけれど、なっちゃんは聞こえないフリをしたのかそれには答えてくれそうになかった。新しい煙草を出そうとして、箱が既に空になっていることに気づいて小さく舌打ちをする。そしてその箱を、机の近くにあるゴミ箱に投げ入れた。

「…まぁ、とにかくだ」
煙草の代わりなのか、なっちゃんは手近にあった缶コーヒーを口にしながら続ける。話を改めたようで、私を横目でチラリと一瞥した。
「こういう仕事してるとよ、女子高生に告白されたりすることも少なくねぇんだけどよ」
話の矛先がどこへ向かうのか分からなかったけれど、私はなっちゃんの言葉に一つコクリと頷く。…でも、「教師だから」告白されるわけではないと思うのだけれど…「なっちゃんだから」じゃないだろうか。
「でもそういうのの大半は、こっちから見ても本気じゃないって分かっちまう。恋に恋してるって言うべきか…。なんかさ、子どもが珍しいおもちゃ欲しがってるようにしか見えねぇんだよな」
言われて、私は思い切り眉を寄せた。
「私は…」
反論しようとして言いかけると、なっちゃんはそれを片手を挙げて制する。こちらの言葉を遮って、先を続けた。
「分かってる。お前は初めからそういう感じじゃなかった。ユキのことを本気で好きだってのも分かってる。だけど…」
一旦言葉を切って、なっちゃんはもう一度コーヒーを飲み下す。缶を机の上にタンと戻しながら、椅子を９０度ほど回転させてまっすぐにこちらを見た。

「だからこそ、それくらいのことでつまずいてる場合じゃねぇだろ。教師に片想いする辺り、普通の恋愛よりハンディ背負ってんだ。勘違いされたって理不尽な言葉叩きつけられたって、跳ね除けてやるぐらいの覚悟でいなきゃまず報われねぇな」

いつもはおちゃらけた面を持つなっちゃんの、真剣な目。気づくと私は、深く大きく、首を縦に振っていた。

「…そうだよね」

小さく、同意するように呟く。

そう、ただでさえ報われる可能性の少ない恋なのに…。こんなところでつまずいている場合じゃない。

「ありがと、なっちゃん。ちょっと前向きになれそう」

言って、私は勢いよく椅子から立ち上がる。こちらのそんな言葉に、なっちゃんは再び唇の端を持ち上げて笑って見せた。

「おぅ、その方がお前らしいぜ」

つられるように笑って、私はお礼のつもりで軽く頭を下げる。そうしてそのまま数学準備室を出ようとしたけれど…ドアに手をかけようとしたところで、「白石」と再び呼び止められた。

「余計なお世話かもしれねぇけどよ」

椅子に座ったままの態勢で、なっちゃんはそう言いながらこちらを見上げる。

「好きな男に勘違いされるのが嫌なら、ちゃんと弁解するんだな」

「……え」

思わず目を大きく見開いて、私はそちらを振り返った。尋ね返し

て小さく声を漏らした私を、なっちゃんはじっと見上げる。そしてメガネを押し上げながら、真剣な目をしたまま続けた。
「勘違いされたくないなら、自分でちゃんとユキに『違う』って言え」
「……そんなこと…」
できるわけがない。ただでさえ、本城先生と2人で話す機会すらろくにないのに…。しかも、そんな弁解したって…先生はきっと私のことに興味はないだろう。無視されるか…冷たくあしらわれるか、どっちかに決まってる。

「でも、嫌なんだろ?勘違いされるの」
「…それはそうだけど…」
「だったら、自分で何とかしろ。アドバイスは他人でもできるけど、現状を変えるのは本人にしかできねぇんだからな」
「……」
なっちゃんの言うことは恐らく正しいのだろう。つまずいていないで前に進むためには…必要なことかもしれなかった。

「わかった。なっちゃんありがとう」
お礼を言うと、もう一度なっちゃんはこちらへ向けて唇を持ち上げて笑んで見せた。

＊＊＊＊＊

なっちゃんに励まされ、私は何とか本城先生に本当のことを聞いてもらおうと覚悟を決めた。それでも2人きりになれるタイミング

がそれほどあるとは思えないので、チャンスが来る時を待つことにする。とりあえずなっちゃんに泣きついたその翌日は学校が休みだったので、その間に気持ちに整理をつけて決心を固める。
明日からの学校で機会があれば、無駄にしないよう努力するつもりだった。

「ホントについてないよねぇー」
その日曜の休日、私は仲の良い友達と4人でファストフード店でお茶を飲んでお喋りに花を咲かせていた。そんな時、私の隣に座っていた由実が不満そうに言葉を漏らす。コーラの中の氷はすっかり溶けてしまっていて、由実はそれを口にするたびにまずそうな顔をしてみせていた。
「何が？」
と私の向かい側で智子が聞き返す。
尋ね返された由実は、肩を竦めて返して、再び飲んだコーラに眉を顰めて見せた。
「クラス替え」
短く答えて、プゥッと頬を膨らませる。

先週の月曜日はちょうど新学期の始業式で、私たちは2年に進級した。当然クラス替えも行われ、一週間新しい教室で慣れない緊張感をもって過ごした。だけど私と由実、智子、そしてもう一人の茜と去年から仲の良かったグループは、選択科目が同じだったのが功を奏したのか全員同じクラスになった。…だから…由実が不満に思うこともないと思うのだけれど…。

「何が不満なの？」

私と同じことを考えたのか、紅茶を飲みながら茜が小首を傾げる。
「私は４人同じクラスになれて嬉しいな」
いつもおっとりと控えめな茜は、そう言ってニッコリ笑ってみせた。
「４人に不満はないよ」
ショートカットの髪を揺らして、由実は唇を尖らせたままそう言う。その表情が子どもっぽくて、智子がクスッと噴き出した。
「ただ、担任が不満」
続いた由実の言葉に、私はドキリと胸が弾むのを感じた。

「最悪だよー、今年こそなっちゃんのクラスが良かったのにぃ。何でユキサダなんだよー」
そこで出た本城先生の名前に、私は更に鼓動が早くなるのを実感する。

本城先生は生徒からあまり好かれていない…というより、怖がられているから、恐らく担当のクラスになって喜んでいる人は少ないと思う。由実も本城先生よりなっちゃん派らしい。そのせいもあって、私は未だに仲の良いこの３人に本城先生に片想いしていることは言えずにいた。

「そう？私、本城先生あまり嫌いじゃないけど」
おっとりとした口調のまま、ニコニコと茜が言う。その一言に「げぇぇ」と失礼きわまりないほどに由実が何かを吐き出すかのようなリアクションを返した。
「茜、趣味悪」

「『嫌いじゃない』だけで、『好き』とは言ってないよ」
笑ったまま流すように受け答えて、茜はふと窓の外を見やる。
「……あれ？」
それから、何かを見つけたのか元々大きな目をグッと更に大きく見開いた。

「？」
その様子に気づいた私たち3人が、首を傾げながらその視線の先を追う。そして、茜と同じように大きく目を瞠った。
「……」
胸が、一瞬で震えるのが分かった。決してそれは良い意味での震え方ではなかった。
「…あれ、ユキサダじゃん」
隣からの由実の呟きが、余計に私の動悸を早くする。確かに、私たちの目に飛び込んで来たのは店の外の道路を歩いていく本城先生の姿だった。

休みの日だから、当たり前だけれど白衣は着ていない。いつものスーツでもなくて、ラフなシャツにヴィンテージっぽいジーンズを履いていた。ただ、問題なのはその隣。本城先生の腕に、自分のそれを絡めて歩く女の姿があった。

「あれって、確か…」
智子が記憶の糸を手繰り寄せるかのように眉を顰めて呟く。
「3年生の、先輩だよね…確か菅原先輩とかって言ったような…」
蘇ってくるのに時間がかかりそうな智子の記憶を待たずに、茜が続きを受け持った。…そうだ、校内で見たことがある女の人だ。た

だ学校で見るより私服は大人っぽく、セクシーな感じがモロに表立っていた。

「え、なに…付き合ってんの？」

信じられない、と言うような感じで由実が言葉を漏らす。それは私を含む誰もが思ったことで、私が一番信じたくないことだった。

誰もそれに答えられないまま、窓の外の本城先生と菅原先輩を見守っているしかなかった。…その時、だった。決定的な出来事が起こったのは…。

不意に、２人が立ち止まった。向かい合って何かを言っているようだ。

こちら側は菅原先輩の後ろ姿で、背の高い本城先生の顔は見えそうだったけれど先輩に合わせて俯き加減だったのではっきりとはわからなかった。…ただ、次の瞬間、ふと本城先生が菅原先輩の両方の手首を強く掴むのが見えた。

…そしてそのまま、わずかにかがんで顔を寄せる。

「！！…キス…！？」

思わずと言った感じに、由実が大声を上げた。その声に店内にいた何人もの人が振り返ってしまう。

慌てて口元を押さえた由実と、智子と茜が互いの顔を見合わせているのが分かる。

私だけは…信じられないその光景を、茫然と眺めている以外に術がなかった。

2　side：Yukisada

珍しく、その日は早朝から目が覚めた。いつもなら休みの日は気が済むまで寝ている方だ。気づけば太陽が空高く昇っていることもあるし、あまり早く目が覚める方ではない。しかしこの日ばかりは勝手が違ったので、早起きしてしまうほど今自分の精神状態が思わしくないのだと自覚させられる。

「…くそ」

ベッドから上半身を起こしてすぐ、サイドボードに置いてあった煙草に手を伸ばした。思ったより自分は機嫌がすこぶる悪いらしい。手が滑って一度で点かなかったライターにまでイライラしてしまう始末だ。

朝食を摂る気にもなれなかったので、俺はそのまま身支度だけを整えて家を出た。もうかれこれ5年近く住んでいるボロアパートのドアを乱暴に閉めて、朝早いというのに迷惑も考えずに音を立てて階段を下りる。アパートの前に止めてあった車に乗り込み、エンジンをかけるとそのまま学校へと向かった。

今日は日曜だから、部活の生徒以外はいない。仕事がはかどるので休みの学校は嫌いではなかった。

どうせ今日の自分では他に何もする気がしない。ちょうど残った仕事もあったことだし、学校でそれを片付けようと思った。

だがそんな俺の思惑も、数時間で破られることになる。静かすぎる校舎内の最も静かだった化学準備室で、仕事は思ったよりはかどっていたというのに…。昼前になって、その静寂が遠慮もなく破られてしまった。

「おつかれさん」

軽いノックの後、こちらの返事も待たずにドアが開けられる。そんな言葉と共に現れた来訪者を見て、俺は思わず口にした煙草を噛んでしまいそうになったほどだ。イライラする休日に、この悪友の顔は見たくなかった。

「……何しに来たんだ」

低く唸るように言うと、大学時代からの悪友・名取貴弘は俺に向けて「ゴアイサツだな」と呟いて苦笑して見せた。

＊＊＊＊＊

「これ、差し入れ」

化学準備室に入ってきながら、貴弘は手にしていた袋を軽く上げた。学校の近くにあるパン屋の袋で、ここのパンは結構うまいと生徒たちの間でも評判だった。

「どうせ今日もろくに食わずに仕事してんじゃねぇかと思ってさ」

俺の前に袋をバサッと下ろしながら、貴弘は隣にある椅子を引いた。勧めてもいないのに遠慮なくドカッと座り、まるでそこの住人のようだ。

「…悪いな」

短く答えて、俺は立ち上がる。近くにあるポットの元へと移動して、パックになっているドリップコーヒーをカップにセットした。…招かれざる客ではあるけれど、それなりにもてなさないと何を言われるか分かったものじゃない。

「何しに来たんだ、お前」

ドリップにお湯を注ぎながら尋ねると、貴弘は「うーん」と首を捻る。とぼけるつもりなのか否か、こちらからは判別が難しい表情だ。

「特に用事はないんだけどよ、今日機嫌悪ぃだろうなぁと思って様子見に来た」

「機嫌悪いのが想像できてるんなら来ないで欲しかったけどな」

サラリと答えてから、俺は貴弘の前に淹れたばかりのコーヒーを差し出した。「サンキュー」と短く礼を言いながら、あいつは肩を竦めてみせる。

「やっぱり機嫌悪ぃな」

揶揄するように言って、小さく苦笑を漏らした。

「そもそも、何で俺の機嫌が悪いと思ったんだ?」

自分の分のコーヒーも淹れ終わり、俺はそれを持って椅子に戻る。ギィっと音をたてながらそこに腰を下ろすと、隣で貴弘がコーヒーをすすりながらわざとらしく空を見据えた。

「それは内緒」

「…?」

眉を顰めて貴弘を睨みつけてみたが、あいつはそれに答える気はないようだった。これ以上尋ねても無駄なことは長年の付き合いで分かっている。時間を無駄にするのも信条に反するので、俺はその話題をそこで終わらせた。

そして、それからふと思い出す。

…そういえば…昨日……。

「貴弘」

改めて呼びかけると、あいつは自分が俺のために持ってきたはずのパンの袋をガサガサと開けながらこちらに目線だけを返した。中に入っていたパンを俺の前に並べ、そのうちの一つだけを自分の手に収める。

「なんだよ」

個包装を開きながら、貴弘は俺の呼びかけにそう尋ね返してきた。

「お前に、一つ謝らなきゃならねぇことがある」

前置きでそう言うと、貴弘は甘ったるい匂いをさせるメロンパンにかぶりつきながら俺を見据え返す。言葉はなく先を促され、俺もそこにあるパンに手を伸ばしながら続けた。

「昨日…とある生徒にお前が結婚してることバラしちまった」

「……」

言うと、メロンパンを頬張りながら貴弘は何かを考えるように一瞬俺から目を逸らす。そしてそれから、再びこちらに向き直った時には微かに唇に笑みを浮かべていた。

「知ってるよ、お前のクラスの白石だろ?」

「……聞いたのか」

「まぁ、ちょっと色々あってな」

肩を竦めてから、貴弘はその時のことを思い出しているのかわずかに目を細める。そして俺の方を振り返り、今度はニヤッと笑ってみせた。

「別に、構わねぇよ？お前も知っての通り、別に俺は結婚してること隠してるわけじゃねぇし」

「……だったら何で公にしないんだ」

「だって、生徒からも聞かれねぇしな。先生たちは元から知ってるからそれこそ人前で聞いてくることもねぇし」

「…この前Ｂ組の生徒に『彼女いるのか』って聞かれて否定してただろ」

「『彼女』はいねぇだろ？嫁は『嫁』だし」

貴弘が結婚したのは大学の教育学部を卒業してすぐのことで、相手は俺もよく知る女だった。大学時代、俺と貴弘が所属していたサークルの一年後輩。つまり、彼女の方は在学中に入籍したことになる。…それだけ急いでいたのにも奴らなりの理由と事情があったのだけれど、今となってはどうでもいいことだった。

「それよりさ、何でそんなにイライラしてるわけ？」

尋ねられて、俺は遠慮なく思い切り眉を寄せて返した。

「お前が女子生徒に俺のこと根掘り葉掘り聞かれるのなんて、いつものことじゃねぇか」

からかうような口調に、俺は更に眉間の皺を深くする。

「…お前、白石に何をどんな風に聞いたんだ」

「聞かなくても、それくらい分かる」

本当かはったりか定かではなかったけれど、何食わぬ顔で貴弘はそう続けた。

「いつもだったらそういう女子生徒は適当にあしらうユキサダくんが、白石にだけイライラしちゃったのは何で？」
「…何言ってんだ？お前の話を生徒に延々と聞かされてイライラするのはいつものことだ」
「…これまたゴアイサツだな」
「事実だからな、悪いな」
答えてフン、と鼻であしらうと、貴弘は再び何もかもを見透かしたかのような嫌な笑みを浮かべる。…何をどう勘違いしているのか知らないが、こいつのこういう顔は昔から嫌いだ。

「じゃあいつもだったらイライラしながらも適当に流せるユキサダくんが、
白石にだけは俺が結婚してることバラしちゃったのは何で？」
「……」
続いた貴弘の言葉に、俺はイライラが最高潮に達するのを自分で感じながら手にしていたパンを机の上に戻した。口にしないままそれを手放して、隣の貴弘を睨み据える。
「何が言いたいんだ、お前」
「別に？　分からないんだ、お前」
クッと笑って、貴弘は立ち上がる。最高に嫌味な笑い方だった。
「ただな、ユキ」
そのまま帰るらしく、あいつは椅子を机の中側に押し入れる。立ち上がってからポケットに手を突っ込み、座ったままの俺を見下ろした。
「いつまでもしらばっくれてると、痛い目に合うぜ」
「……何言ってんだ？」
「分からないなら、考えろってこと」
「……」

「あと、自分でも分からないイライラに苛まれる時は、周りの声をよく聞くんだな。そうすりゃちょっとは救われるぜ」
訳の分からないことを言い置いて、貴弘はそのまま「じゃあな」と手を振って部屋を出て行った。

「……何しに来たんだ、あいつ」
その後ろ姿を見送って呟きながら、俺は今日のうちで最悪な気分になっている自分に気がついた。

＊＊＊＊＊＊

せっかくはかどっていた仕事も、貴弘の余計な言葉で進まなくなってしまった。
「……」
イライラを沈めようとするために何本目かの煙草に火を点けたが、それもすぐに燃え尽きてしまう。
「…っ」
小さく舌打ちをすると、俺は短くなったそれを灰皿に押し付けて立ち上がった。ゆっくりと伸びをして、仕方なく今日の仕事は諦めてしまう。家に帰ってもすることなんてないけれど、それでも俺は帰り支度を整え始めた。

時刻は午後1時を少し回った頃で、まっすぐ家に帰るのも少しもったいない気がした。だから、乗ってきた車を駅前の駐車場に止め、街をブラブラしてから帰ることにする。最近行っていなかった本屋

で買いたいものはいっぱいあったし、たまにはと一人で買い物に繰り出した。

車ではなかなか通りづらいショップ通りを、急ぐわけでもなくただ歩いて行く。季節はまだ4月上旬だというのに、今日の天候では太陽の高いこの時間に外を歩けば、少し汗ばむほどだった。

「あれぇ、ユッキーじゃん」

とあるファストフード店の前辺りにさしかかった時、後ろからそんな声が俺の背中に投げかけられた。

聞き捨てならないその言葉に振り返ると、そこには不必要なほどミニスカートで足を出した一人の女。一瞬誰だか分からなかったが、どこかで見覚えはある。記憶の糸を手繰り寄せていくと、やがて思い当たる顔と一致した。

「…菅原…？」

呟くようにその名前を口にした俺に、彼女の方はニッと笑って返す。

「ユッキー、覚えてくれてるんだ。担任じゃなくて去年ただ化学担当だっただけなのに」

そうだ、確か3年の菅原だ。学校にいる時より露出の多い服を着て、普段より大人っぽく見えた。…と言っても、それ以上に何の興味も沸かなかったが。

「寒くないのか、お前」

階段でも上がれば下着が見えそうなほど短いミニスカートに、とりあえず忠告を兼ねて尋ねてやる。そんな俺に一瞬目を丸くした菅

原は、次の瞬間には「ユッキーおじさんくさい！」と爆笑して返してきた。…忠告したのはこいつの為じゃなく、俺自身の為だったんだが…。俺は昔から、自分でスカートを短くしておいて押さえながら後ろを気にして階段を上がる女子高生に憤りさえ感じるからだ。見たくないものを見せられて因縁をつけられたらたまったもんじゃない。

「ねね、ユッキーはどこ行くの？」
「本屋行って適当に帰る」
「えぇ、マジで！？一緒に行っていい？」
「何で？」
「だってあたし、ユッキーのこと好きだもーん」
あっけらかんとした口調で言われ、俺は自分でも意外なほど呆けた顔で菅原を見つめ返してしまった。…生徒に恐れられて敬遠されることは多々あったが、あけっぴろげにこんなことを言われるのは初めてだった気がする。……だからと言って、その軽い一言が俺の胸に響くわけもないのだけれど。

「帰って寝ろ。俺は一人で行く」
「えぇーっ、待ってよぉ」
さっさと歩き出してしまった俺に抗議しながら着いてきて、菅原は無遠慮に俺の腕を取った。甘えるようにそれに自分の腕を絡めてきて、俺は「おい」とそれを振り払おうとする。
「何してんだ」
「腕組んでんの」
「…それはわかってる」
ダメだ。こいつはまともに会話になるタイプの人間じゃない。呆れたようにため息をついて、俺はそれ以上拒むのを諦めた。そんな

俺が無駄な抵抗を辞めたのに気づいて、菅原はご機嫌な表情で俺の腕を引っ張っていく。

鼻歌まじりの菅原とは裏腹に、俺の気分は一向に晴れる予感もない。

さっきまでのイライラというよりは何かを全て諦めてしまったように…俺は今度こそ本格的に大きな息を吐き出した。

3　side：Kazumi

キス…していたと思う。

それを目撃した時から…翌日学校に行った後まで、私の頭の中からはそのことがずっと離れなかった。普通に話しているだけでは、あんなに顔を近づける必要もない。ましてや腕を掴む必要もない。そして何より、あんな風に腕を組んだりしない。

「昨日はすごかったねー」

昼休み中、由実が不意にそんな言葉を口にした。恐らく、今日朝からその話題をしたかったに違いない。

教室でお弁当を広げている時だった。その一言で何を指しているのか分かったけれど、あえて返事をしなかった。

「まさか教師と生徒が街中でチュウするとはねー」

私の様子に気づく素振りもなく、由実は何か感心したように一人でウンウンと頷きながら続ける。

「…でも…別にキスしてたとは限らないし」

ようやく小さく返すと、由実だけでなく智子や茜も意外そうにこちらを振り返った。

「あんな至近距離で、他に何があんの？」

本気で疑問らしく、目を丸くして由実が尋ね返してくる。「う…」とその返事に詰まった私は、返す言葉もなく口を噤むしかなかった。

「ねぇねぇ、もしかして本城と菅原先輩の話？」

いつの間に近くにいたのか、同じクラスの女の子がふとこちらに

声をかけてきた。名前は…クラス替えをしたばかりでまだ思い出せない。

「そうだけど…何か知ってんの？」

由実は知り合いなのか、親しい口調でその女の子に聞き返す。バレー部に所属している由実の部活仲間のようだった。

「私じゃないけど、昨日街で2人で腕組んで歩いてたの見たって人がいて、朝から噂になってるよー。キスしてたっていうのは今初めて聞いたけど……それって本当なの？」

尋ね返されて、由実が「うん」と返事しかける。それを見て内心で焦った私は、「ううん！」と由実を遮りながら力いっぱい答えていた。

「確かじゃないの！」

「…あ、そうなんだー」

私の勢いに一瞬圧されかけた彼女が、驚いた顔をしてからニコリと笑ってそう答える。そんな私の焦り様に、由実たちが怪訝な表情で首を傾げたのが分かった。

「…和美…？」

こちらの態度を疑問に思ったらしい由実が、不思議そうに私の名前を呼ぶ。

しまった、と思うのと、どう弁解しようかと瞬時に頭の中をグルグルと回るのが同時だった。何と答えようかと考えながら由実の方へ振り返った瞬間…、タイミングよく救いの手が降りてきた。

『2－A白石和美、至急化学実験室まで』

救いのはずのその校内放送の声に、私は思わずその場で目を見開いてしまう。それは間違いようもなく…本城先生の声だった。

「…行ってくる」

お弁当の包みを直してから立ち上がって、私は3人からの追及を受ける前にその場を後にした。

＊＊＊＊＊＊

深い深い呼吸を、何度も繰り返す。化学実験室の扉が、これほど重く感じたことは今までになかった。今まで2人きりになることはおろか、呼び出されることすらまずなかったのに…。どうして、このタイミングでそれらがそろってしまうんだろう。

「…失礼します」

恐る恐る扉をゆっくりと開くと、中で本城先生は窓枠にもたれかかって煙草を吸っていた。その姿があまりにも絵になりすぎていたので、思わず私は胸をドキリと弾ませてしまう。…緊張しているはずなのに、自分でも呆れてしまったくらいだ。

「来たか」

私を遠くから見下ろして、先生は近くにあった煙草を灰皿に押し付けて消した。

「お前、今日部活の当番だろ」
言われて、私は「あっ」と声を上げる。化学部で実験がある日は、当番が昼休み中にその日の実験で使う器具の準備をしておくのが常だった。
「すみません！忘れてました…」
「あぁ、これよろしくな」
謝った私に、やっぱり先生は興味なさそうに呟くと一枚の紙を差し出してきた。今日の実験内容と使う道具が書かれた紙だ。それを受け取って、私は急いで実験室の棚の方へと向かった。

先生は、その私の後ろ姿を見ているのか、それとも他の何かを眺めているのか…。私からは分からなかったけれど、少なくとも部屋を出ていきはしなかった。静まり返った部屋に、私が歩く音だけが響く。
そのしん、とした空気に緊張で胸が震えそうだった。

だから、不意に思い出した。
『好きな男に勘違いされるのが嫌なら、ちゃんと弁解するんだな』
この前のなっちゃんのそんな一言を。

2人きりになったらちゃんと話そうとは覚悟していたはずだったけれど、まさかその機会がこんなに早く訪れると思っていなかったから…。高まる胸の音と、激しく押し寄せる不安の波に押しつぶされそうだった。

きっと…確実に、本城先生は私の話に興味を示さないだろう。私

が好きなのがなっちゃんでもそうでなくても…先生にはどうでもいい話だから。だけど、私自身が誤解されるのが嫌だった。
無視されてもあしらわれても仕方ない、そう再び決めて、私は棚の前で先生の方を振り返った。

「先生」
呼びかけると、本城先生は「…何」と小さく返しながらこちらを見る。新しい煙草に火をつけて、ライターを胸ポケットに戻したところらしかった。
「あ、あの…この前の話なんですけど…っ」
思い切って切り出しながら、私は震えそうな手でぎゅっと拳を握った。そうしたら、震えが少しは抑えられそうだったから。

「私、別に名取先生が好きなわけじゃないんです…！」
一気にそれだけ言い切ると、緊張のあまりか先生の目が見られなくなった。その目から視線を少しだけ外して、私は握った拳に更に力をこめる。
「……」
…先生から、返ってくる答えはなかった。なんだかいたたまれない気分になって、「…あの…」と今度は弱々しく続ける。
「だから…誤解されたくなくて…」
そこまで言ってから、私は再び恐々と顔を上げた。ゆっくりと視線を上げていくと、黙ったままだった本城先生はまっすぐにこちらを見ている。その目が合った瞬間、ドキっと鼓動が跳ねたのを感じた。

「…分かった」
煙草の煙を吐き出してから、少し私から目線を外して先生はそう

小さく呟く。その返ってきた答えに、「…え」と私の方が目を見開いてしまっていた。

「信じて…くれるんですか？」

無視されたりあしらわれたりすることは予想していたけれど、すんなり返事をしてくれるとは思っていなかった。ましてや、私の言葉を肯定的に受け止めてくれるとも思っていなかった。だから思わず、そんな言葉が漏れ零れていた。

「だって、違うんだろ？」

静かな声だったけれど、先生の言葉に私をあしらうような響きはない。…本当に、信じてくれたんだ。どうでもいいと思うこともなく。

「……っ」

思わず何かがこみあげてきそうな胸を両手で抑えて、私は先生の言葉にコクコクと勢いよく頷いた。その私のリアクションに、先生がふと「…ははっ」と吹き出す。眉を下げたいつもと違う表情は、そう見られるものでもなくて…。こんな風に笑う先生は、今までに見たことがなかった気がする。

そんな先生に思わず見惚れていると、向こうも無防備に笑ってしまった自分に気づいたのか、すっといつもの無表情に戻ってしまった。

「…白石、実験道具ちゃんと揃えとけよ」

そう言い置いて、煙草を手にしたまま身を翻してしまう。…もしかしたら、先生は無愛想なだけじゃなくて照れ屋なのかもしれない。そう気づくと新しい先生の一面を知れて、思わず私は口元をほころばせてしまっていた。

「はい」と短く答えると、先生は隣の化学準備室の方へと入って行こうとする。
その後ろ姿を見送ろうとしてそちらを眺めていた私は、ふと思い出したことがあって「あ、あの！」と再び呼び止めてしまっていた。
「…？」
肩越しに振り返った先生が、私を見据える。

「昨日、街中で先生を見かけたんですが…」
ある意味、自分の弁解よりもこの話の方が緊張したかもしれない。胸の高鳴りを抑えつつ、私は言葉を継いだ。
「先生は、菅原先輩と付き合ってるんですか…っ？」
無遠慮かもしれないと思ったけれど、私はそう尋ねていた。一瞬驚いたのか目を見開いた先生が、私を見下ろす。それから、「…あー」と小さく呟いた。
手にした煙草から灰が落ちそうで、先生は反対の手に持っていた灰皿でそれを受け止める。
「なんか噂になってるらしいな、今朝から」
「えっ、あ、あの、私は誰にも言ってません！」
「わかってる」
あっさりと答えながら、先生は体ごとこちらを振り返った。
「うちの生徒が多いあんな駅前で一緒にいたら、誰に見られても勘違いされても仕方ねぇしな」
続いた言葉に、私は「…勘違い、ですか」と復唱して返す。
「そう」
煙草を再び口にしながら、先生は少し遠い目をしながら答えた。

「まぁ信じるのも信じないのもお前の勝手だけど」
「えっ、し、信じますよ！」

疑えばキリはないし、本当のことを話してくれる保証なんてない。それでも、同じそんな条件で先生は私の言葉をあっさりと信じてくれたんだから…。私が、先生の言葉を信じられないはずがない。

「…あ、でも…」

言い切った後だったけれど、私はもう一つひっかかっていたことがあって言葉を続けた。

「その時、先生と先輩が…その…」

「腕組んでたって？」

「…いえ、それもそうなんですが…それより…」

言い淀んだ私に、先生は小さく首を傾げてこちらを見る。…そんな目で見ないでほしい。まっすぐ見つめられると胸がいっぱいになって言葉が出てこなくなる。

「…キス、してるように見えたので…」

続けると、先生はちょうど煙草の煙を吸い込んだところらしかった。私の言葉に驚いたのか変なところに煙を吸い込んだらしく、「げほっ」と咳き込んだ。

「!?だ、大丈夫ですか？」

「…」

大丈夫だ、と言わんばかりに私に右手を上げて返して、先生は数回咳払いをして呼吸を整える。灰皿を近くの机に置き、吸っていた煙草をそこに押し付けた。

「何言ってんだ、お前」

いつも無表情、無口、無愛想の先生が、明らかに動揺しているようだった。でもその動揺は…バレて困るとかそういうのよりも、思ってもみないことを尋ねられて驚いているようだ。

「え、だって…そう見えてしまったので…」
「どこで？」
少し強い口調になった先生に、私は「…駅前のファストフード店です」と弱々しく答えた。昨日のことを思い出しているのか、先生はその言葉を受けて私から視線を外す。宙を見据えるようにしているのは、鮮明にその時のことを思い出そうとしているんだろう。
「…あー」
思い当たることがあったのか、先生はしばらくしてから小さくそう声を漏らした。それから、唇を少し歪めて笑う。その表情で私の方を再び見て、「お前、視力いい？」と不意に尋ねてきた。

話の先が変わった気がして、私は首を大きく傾げる。それでも「…いえ、悪いのでコンタクトです」と続けると先生は小さく頷いた。
「ちなみにハード？ソフト？」
「ハード…ですけど…」
意味が分からない。けれど先生の方は、私のそんな答えに満足そうだった。

「俺もハードなんだけど、あれって目にゴミでも入ろうもんならものすごい痛いだろ」
「そうですね」
頷きつつ、私はまだこの会話の意味がつかめない。不思議そうな表情をしていると、先生は苦笑を漏らして「つまりだ」と続けた。

「ハードコンタクトしてる菅原が目にゴミが入ったっつって痛がったから、『こするな』って腕掴んで見てやったんだけどな」
「…え！」
思わず化学実験室に響きそうなくらいの大声を上げて、私は先生を見上げる。

「ま、そういうことだ」
結論を出して一つ自分で頷いた先生は、私の反応を待つようにこちらを見る。
「…目にゴミ…」
言われてみたら、そうだとしたら全てが繋がる。先輩の両手を掴んだことも、顔を寄せたことも…。
「でも、まさかこんな漫画みたいな古典的な勘違いする奴いると思わなかったな」
おかしそうに笑う先生が、そう続けて私を見た。

「…なんだ…」
思わず小さく、私は呟いてしまう。安堵の息を漏らしたことは、先生にはバレていないようだった。

ただの勘違い、だったんだ。先生の言葉に嘘があるとは思えないから、私はそう納得することができた。そうして自然と、安心したからか笑みが零れる。

「知らなかったです、先生コンタクトなんですね」
笑いながらそんな風に別の部分への感想を漏らすと、先生は化学準備室へのドアノブに手をかけながら首を捻った。
「そんな笑うほど面白い情報だったか？」
言われて、私は思わず今度は「ふふ」と声を出して笑ってしまった。

笑顔になってしまうのは、先生のことをまた一つ新しく知ったか

らだ。好きな人のことなら、どんなささいなことでも知りたいと思って当然だと思う。

小さなことでも、知っただけで少し近づける気がする。それだけで、幸せを感じることができるんだ。

化学準備室に入っていく先生の後ろ姿を、私はさっきまでとは違う晴れやかな笑顔でただ見送った。

4　side：Yukisada

日曜日、結局まとわりつく菅原を振り切った頃にはどっと疲労が押し寄せていた。本屋の中で撒いたところまでは良かったが、消耗した体力と精神力は半端じゃない。…これだから、高校生の相手は疲れるんだ。

そんなジジくさい感想を内心で漏らしつつ、俺は止めていた車を拾って帰宅した。ただでさえ機嫌が悪かったところに余計な疲れまで感じてしまい、翌朝も仕事にならなかったことは言うまでもない。

月曜日、午前の授業がたった2コマで助かった。4限目の空き時間に化学準備室で仮眠を取ったら、幾分か気分は晴れた気がする。

「失礼しまーす」

部屋のドアがノックされたのは、昼休みになってからだった。明るい声を響かせながら、入ってくる一人の生徒。両手に1クラス分のノートを持っているせいで、少し開いていたドアを器用に背中で押し開けている。

「…お前、そのまま足で閉めるなよ、ドア」

嫌な予感がしてそう声をかけると、そいつはまさにそうしようと思っていたところだったのか行儀悪く右足を上げるところだった。俺の言葉に誤魔化すようにニコっと笑って返し、その生徒は足を下ろしてそっとドアから背中を離した。足で閉める必要もなく、支えをなくしたドアはゆっくりと閉まっていく。

「本城先生、課題のノート集めてきました」

「あぁ、そこ置いといて」

煙草を吸いながら手近の机を指差すと、その生徒は素直にそれに従う。俺が化学を担当している２－Ｆの、夏川悠花という生徒だ。去年も担当だったし、何よりこいつが人見知りしない性格なので話しやすい生徒ではある。

「7人提出できてません。これ名簿です」

さっと紙を出されて、俺は椅子に座ったまま夏川の顔を見上げた。

「お前、きっちり提出させろよ」

「無茶言わないでくださいよ。そんな権限私にありません」

そりゃそうだ。クッと笑って、俺はその名簿を受け取る。つられたのか少し笑ってから、夏川はふと俺の机の上を見回した。

「先生、もうお昼ですよ?ご飯食べないんですか?」

書類とパソコンしか並んでいない机の上を不思議そうに見やって、そう言う。

「面倒くさいからな」

自分の時間を消費する優先順位をつけるとするなら、食事は相当下になる。食べることがというよりも、買いに行ったり作ったりという手間の時間の方が無駄なんだ。

それが分かったからか、夏川は腕にかけていた小さな鞄から「仕方ないなぁ」と何か包みを出してきた。

「あげます。さっき調理実習だったんです」

カップケーキのようなものを、それなりにラッピングしたものだった。有無を言わさず俺の机の上に置いた夏川を見上げて、俺は肩を竦めて返した。

「いいのか?准一にやらなくて」

夏川が片想いをしているという3年の生徒の名前を出して、そう尋ねる。

「…いえ、ちょっと色々あって…。……って、本城先生までなんでそんなこと知ってるんですか!」

「噂って怖いよなぁ」

「…名取先生め～～！！」
俺が貴弘から聞いたと悟ったのか、夏川はここにはいないあいつへ向けて拳を握る。それに笑い返しながらカップケーキを受け取ると、俺は「悪ぃな」と夏川に短く礼を言った。

「それはそうと、本城先生」
ケーキを包んだフィルムをはがしていると、夏川が少し声のトーンを抑えて再び呼びかけてくる。「何」目線だけ返すと、あいつは首を少しだけ傾けながら続けた。
「朝から噂になってるんですけどね」
「…なんだよ」
「3年の菅原先輩と付き合ってるって噂…本当ですか？」
少しだけ顔を寄せてそう尋ねてくるこいつの表情を見ると、真顔なはずなのに目の奥がキラキラしている気がした。

……完全に、面白がってる。

「何だそれ」
「昨日、腕組んで街中歩いてたとか」
「…ふん」
くだらねぇ、そう言いかけた言葉と一緒にカップケーキを一口飲み下した。
「お前、どうせそんな噂信じてねぇだろ」
「あ、バレました？」
ニッコリ笑って、夏川は言う。

イイ噂もなく怖がられている俺のような教師でも、人懐こく話し

かけてくる生徒はたまにいる。昨日の菅原もそうだし、夏川もそうだ。ただこの夏川が異色なのは、今時の女子高生と違って教師をあだ名で呼ぶことも敬語を崩すこともほとんどない。
それなりの距離感を保ったまま、親しくできる頭の良い奴は俺も嫌いじゃなかった。

だから、分かる。
こいつがそんな噂を信じるやつかどうか。

「大体、その噂を聞いた誰かがそれを信じようが信じまいが俺は興味ないし」
「誤解でもいいんですか？」
「信じない奴は信じないだろ、お前みたいに」
そう返すと、夏川は「なるほど」とどこか感心したように一つ頷いて見せた。そしてそれ以上この話題を続けることを不必要だと思ったのか、「もう一個食べます？」と笑って聞いてくる。

「いや、もういい」
甘ったるいケーキをコーヒーで流し込みながら、俺は右手を振って応じた。

＊＊＊＊＊＊

夏川が化学準備室を後にして１０分ほどしてから、今日の部活当番が準備に来ていないことに気がついた。今回の実験は少しばかり面倒なものなので、用意する器具もそれなりの量だ。別に自分でやっても構わないのだけれど、教師というのは時に面倒くさいもので。

生徒のため、責任感を養わせるためとなれば、いちいち呼び出してやらせなくてはならない。
ここから職員室に戻って呼び出す時間があれば、自分でやった方が明らかに早いのに…だ。

化学部の当番票を机の中から出すと、そこにあったのは白石和美の名前だった。それを目にした瞬間、自分でも言い表せない不可思議な感情が渦を巻く。果たして不快だったのか、否か…自分でも定かではなかった。

『2－A白石和美、至急化学実験室まで』

職員室まで行き、呼び出しの放送をかける。視界の片隅で貴弘が何か言いたげな顔をした気がしたが、無視しておいた。

白石が実験室に来たのは、ちょうど5分ほどしてからだった。窓枠にもたれかかって煙草を吸っていると、「…失礼します」という控えめな声と共にドアが開けられた。中にいる俺と目が合うと、白石は少し肩を強張らせたように見えた。
…この前あんな態度を取った後だ。怯えさせていても不思議ではなかった。

「来たか」
だからこそ、逆に平然と俺は声をかける。
「お前、今日部活の当番だろ」

煙草を灰皿に押し付けながら言うと、白石は「あっ」とその事実を思い出して声を上げる。
「すみません！忘れてました…」
「あぁ、これよろしくな」
白石の言葉にそれだけ返して、俺は一枚の紙を差し出した。今日の実験内容と、必要な器具を書いた紙だった。ゆっくりとこちらに近づいてきた白石は、わずかに震えそうな手でそれを受け取る。

……そこまで怯えさせることをしただろうか。そう思うと、意味の分からない苛立ちがぶり返してきそうだった。

そのまま踵を返して、白石は教室の後ろの方にある棚へと向かう。その後ろ姿を見やって、俺は聞こえない程度にため息を漏らした。

やがて、俺が新しい煙草に火を点けた時…。棚の前まで歩いて行った白石が、不意に「先生」とこちらを振り返った。

さっきまでのこいつの態度から、まさか何かを必要以上に話しかけてくるとは予期していなかったので俺は思わず驚く。だが表面には出さず、無表情のまま「…何？」と小さく聞き返していた。
「あ、あの…この前の話なんですけど…っ」
持っていたライターを、ポケットに戻す。どこか緊張気味な白石がそう切り出した言葉を、俺は煙草を吸いながら目を細めて聞いた。

「私、別に名取先生が好きなわけじゃないんです…！」
思い切って、という風に言い切った白石は、その後すぐに俺から

視線を外す。だけど俺の方は、そんなあいつから目が離せずにいた。思ってもみないことを言われたせいかもしれない。

…いや、それだけじゃない。

もっと、こう…。

「……」

安堵のような何かを、感じたからだ。

……『安堵』？

自分で出した心の中での言葉に、俺は次の瞬間には首を捻る。…何で俺がホッとしなきゃならないんだ。

無言でそんなことを考えていると、「…あの…」と今度は弱々しく白石が続けた。

「だから…誤解されたくなくて…」

そう告げてから、白石はゆっくりと顔を上げる。生徒の中で学年一の美人と噂されるだけあった。整った顔立ちを少しだけ困ったように眉を顰めていたが、それでも逆に絵になっている。

そんな白石をまっすぐに見据えていた俺は、顔を上げたあいつと目が合ってからわずかにそれを逸らした。

「…分かった」

煙草の煙を吐き出しながら、そう小さく答える。だけどその次の瞬間、「…え」と白石本人が意外そうに声を漏らした。

「…信じて…くれるんですか？」

俺にとっても意外な言葉を返してきて、白石は目を見開いている。

確かに、普段の俺なら他人が誰を想おうが興味なんて持たない。だから弁解されたって、それを信じる信じないより以前に聞き流していたかもしれない。だけどこの時俺がそうしなかったのは…貴弘の昨日の言葉を不意に思い出したからだ。

『自分でも分からないイライラに苛まれる時は、周りの声をよく聞くんだな。
そうすりゃちょっとは救われるぜ』

…そんな、一言を…。

だからこそ、白石の言葉をもすんなりと受け入れることができたのかもしれなかった。

「だって、違うんだろ?」

問い返すと、白石は慌てて首を勢い良く縦に振った。その動作が余りにもオーバーリアクションだったので、思わず俺は吹き出してしまう。自分でも珍しく「はは っ」と声を出して笑っていた。

「……」

俺が笑っているのが珍しかったらしく、白石は呆けたようにこちらを見上げている。その視線に気づいて思わず我に返った俺は、小さな咳払いと共にいつも通りの真顔に戻した。

「…白石、実験道具ちゃんと揃えとけよ」

何となく勝手にきまずくなって、俺はそれだけ言い置いて踵を返す。煙草を持ったまま、実験室とドア一つで繋がった化学準備室の方へ移動しようとした。

そうしてそのままそのドアを開こうとした瞬間、後ろで白石が「あ、あの！」と俺を呼び止める声を発する。

「…？」

肩越しにそちらを振り返ると、さっきよりも白石が固くなっている気がした。それで気づく。…もしかしたら、怯えているというよりも…単に緊張しているだけなんだろうか。勘違いかもしれないその考えに、俺はそれでも心のどこかで胸を撫で下ろしている自分に気づいた。

「昨日、街中で先生を見かけたんですが…」

予想外の言葉を、白石の唇が紡ぐ。遠慮がちに口火を切ったようだったけれど、次の瞬間には勢いに任せるように拳を握って続けていた。

「先生は、菅原先輩と付き合ってるんですか…っ？」と…。

そんな一言に、俺は自分らしくもなく思わず目を見開く。そうして、ゆっくりとさっきまでの夏川との会話を思い出した。

「…あー」

そういえば、と、そんな呟きが漏れる。

「なんか噂になってるらしいな、今朝から」

手にした煙草の灰が落ちそうで、俺は灰皿でそれを受け止めた。そんな俺に、慌てた白石が声を幾分か大きくする。

「えっ、あ、あの、私は誰にも言ってません！」

「わかってる」
その言葉に即答して、俺は今度こそ体ごと白石の方を向き直った。
「うちの生徒が多いあんな駅前で一緒にいたら、誰に見られても勘違いされても仕方ねぇしな」
つまりは、白石以外にも何人かに目撃されていたんだろう。そうじゃなきゃ、昨日の今日でこんなに噂にはならないだろうし。

続けた言葉に、白石は「勘違いですか」と繰り返してきた。それに小さく頷いて返して、俺は少し目を細める。
「まぁ信じるのも信じないのもお前の勝手だけど」
それは、本音とは少し違う気がした。

何故かこの時、俺は言葉は冷静でも誤解されたくないと思っている自分に気がついた。……どうしてだろう。さっき夏川と話していた時に言った言葉は嘘じゃなかったはずなのに。他の誰かが誤解しようがなんだろうが、どうでもいいと思っていたはずなのに。

俺の言葉を受け止めた途端、「えっ、し、信じますよ！」と白石は再び即答する。その言葉に内心でホッとした途端、さっきの白石自身の「誤解されたくない」という言葉を思い出していた。
…今なら、その感情が分かる気がする。それがどこから来てどういう意味を持つ感情なのかは、わからなかったけれど。

「…あ、でも…」
言い切った後で、白石はそう遠慮がちに再び口を開く。
「その時、先生と先輩が…その…」
「腕組んでたって？」

「…いえ、それもそうなんですが…それより…」
夏川に聞かれたことを思い出しながら尋ねたが、白石は口ごもりながらそれを否定した。そして、言いにくそうに唇を歪める。その様子に軽く首を傾げて見やると、白石は少しだけ困ったように眉を寄せた。

「…キス、してるように見えたので…」
「!?」
続いた白石の言葉に、俺はちょうど煙草の煙を変なところに吸い込んだ。げほっと咳き込んで、瞬時に涙が浮かぶ。
数回咳払いを繰り返すと、白石が「大丈夫ですか!?」と慌てて俺に声をかけてきた。それに右手を上げて返して、俺は呼吸を整える。持っていた灰皿を机に戻しながら、煙草をそこでもみ消した。
「何言ってんだ、お前」
自分でも珍しく、明らかに動揺してしまう。
「え、だって…そう見えてしまったので…」
続けた白石は、自信なさそうに消え入りそうな声で呟く。

「どこで?」
少しばかり強い口調になってしまったのは仕方ない。俺が尋ね返すと、白石は「駅前のファストフード店です」と答えた。その答えを受けて、俺は昨日のできごとを思い出す。
…確か、菅原に声をかけられたのがそもそもその近辺で…。それから腕を組まれて歩き出したのは、はっきりと覚えている。

その、すぐ後…?それなら確か……。
「…あー」
呟きを漏らして、俺は思わず口元だけで笑ってしまった。

心当たりなら、ある。一つだけ。あの時結構な強い風が吹き抜けて行ったから。

思い出して、俺は白石の方を向き直った。そして尋ねる。「お前、視力いい？」と。

少し面食らったような顔をしたけれど、白石はすぐに持ち直した。

「…いえ、悪いのでコンタクトです」と、困惑しながらも真っ直ぐに答えてくる。

「ちなみにハード？ソフト？」

重ねて尋ねると、更に眉間の皺を深くした。

「ハード…ですけど…」

ためらいがちにも、静かにそう答えを寄越してくる。そんな白石の答えに、俺は満足そうに一つ頷いて返した。

「俺もハードなんだけど、あれって目にゴミでも入ろうもんならものすごい痛いだろ」

「そうですね」

軽く頷いた白石だが、まだ俺の話の意味がわからないらしい。不思議そうな表情で俺を見上げてくるので、思わず苦笑を漏らしてしまった。

「つまりだ、ハードコンタクトしてる菅原が目にゴミが入ったっつって痛がったから、『こするな』って腕掴んで見てやったんだけどな」

「…え！」

それまでの白石とは天と地ほどの差を感じさせるくらいに、大きな声を響かせて驚く。俺の言葉を聞いて目を瞠ったあいつを見つめ、俺は一つ頷いてやった。

「ま、そういうことだ」

信じるか信じないかは白石次第だったけれど、それは聞くまでもないことのようだった。

「…目にゴミ…」

驚いたような顔をしていたけれど、それでも白石はその事実を真実と認識して呟いている。

「でも、まさかこんな漫画みたいな古典的な勘違いする奴いると思わなかったな」

言って思わず笑ってしまい、俺はからかうように言った。それに困ったように笑った後、白石は「…なんだ…」と呟きながら小さく息をつく。…そのため息の意味がどんなものかは俺にはわからなかったけれど…。誤解が解けた安堵からか、俺も同じような息を漏らしていた。

もちろん、やはりどうしてこの時ばかりは誤解されたくないと自分が思ってしまったのかはわからなかったけれど。

……いや。

本当はわかっているはずだった。だけどこの時、分からないフリをした。

気づけば何かが壊れ、何かを失うことを知っていたからだ。得られるものは、きっとほとんどないというのに…。

それくらいなら気づかない方がいい。そう思って、俺はそれ以上考えることをやめにした。

今のこの空間の、ほんの一欠けら程度の幸せを壊したくなかったからだ。

1　side：Kazumi

「できたっ」
透明のフィルムでラッピングしたものに赤いチェックのリボンを巻いて、それをかざすようにして持ち上げる。
家庭科の調理実習で作ったばかりのそのシュークリームは、我ながらイイ出来栄えだ。料理系をやらせればクラスメイトの中では右に出るもののいない茜が同じ班だったのが救いだった。実際に私が手を加えたのはシューにクリームを詰める手伝いをしたくらいで、後はラッピングだけだったけれど。
「そういうラッピングは器用ね、和美は」
隣でそれを眺めていた智子がそう声をかけてくる。
「まぁね」と笑って頷いてから、私はそのシュークリームを自分の前に2つ並べた。

「和美、それ誰かにあげるの？」
尋ねられて、私は「えっ」と一瞬言葉に詰まる。
「な、なな何で？」
明らかに挙動不審になりながら聞き返すと、智子はそれに気づいたのか気づいていないのか…特に変わらずいつも通りに後ろを顎で指し示した。
「だって、皆誰かにあげるみたいだし」
調理実習室というその部屋では、確かにクラスの女子たちがキャッキャと楽しそうに騒いでいる。これが以前の実習メニュー「チンジャオロース」ならこうはいかない。好きな人にあげようかとウキウキできるのはシュークリームなどのお菓子系ならではだ。
智子も、特別意味があって聞いたわけではないようだった。それ

にホッと一瞬安堵しながら、私は「うん」と頷く。
「2個あるから、部活でお世話になってる先輩と先生にあげようかな…と」
「ふぅん」
聞いてきたもののそれほど私の返事に興味はなかったのか、智子はそれ以上追及してこようとはしなかった。小さく頷いたきりの彼女の後ろで、それまで不器用な手つきでラッピングに苦戦していた由実が顔を上げる。
「えっ、何なにっ？和美、その先輩のこと好きなのっ？」
「ち、違うよ！先輩はいっつも実験で2人組組まされる時に私と組まされてて…迷惑かけてるからっ」
それは嘘ではなく、事実だった。私のドジのおかげで先輩が何度迷惑を被ったかは数知れない。
「なぁんだ。つまんない」
由実は子どもっぽく唇を尖らせると、それっきり再びラッピングに取り掛かった。相変わらずうまくいかないらしく、時々「だぁっ」とか「のぁっ」とか訳の分からない奇声を上げている。

「由実ぃ、私もう終わったから先に教室帰るよ」
そんな由実を待ってるのが時間の無駄だと思ったのか、智子が椅子から立ち上がりながら自分の荷物を持ち上げた。茜は他のクラスメイトと話し込んでいるところだったので声をかけず、智子はそのままこちらを振り返る。
「和美は終わったんでしょ？なら一緒に戻ろう」
「あ、うん」
調理台の上に置いていたシュークリームと教科書を手にして、私も立ち上がった。こちらを振り向かないままの由実に声だけかけて、私はそのまま智子と実習室を後にした。

授業時間終了まで後１５分ほどあるので、まだ他のクラスは授業をしている最中だった。早めに実習を終えて帰る中、廊下はシンとして静かなものだ。声が響かないように、やがて智子が隣の私にしか聞こえないくらいに静かなトーンで「ねぇ」と話かけてくる。

その雰囲気がいつもと少し違った気がしたけれど、私はそれほど気にせず「ん？」と小首を傾げながら先を促した。

「和美って、本城のこと好きなの？」

「！？」

続いた智子の言葉は、まさかここで出るものだとは思っていなかったので思い切り面食らってしまった。大きく目を見開いて言葉を失った瞬間、そのリアクションこそが図星を指し示していてマズイものだったと我に返る。

だけどそこからとぼける演技をするほど私はしたたかでもなくて、言葉をなくしたまま智子を見つめ返してしまった。

「図星かぁ」

からかう響きはなく、ただ智子はニッコリと笑ってみせた。

「おかしいなとは思ってたんだよね、前に本城と菅原先輩が一緒にいるとこ目撃してから、様子がおかしかったし」

「…それは……」

「本城と菅原先輩が街中でキスしてたって面白がる由実に、一生懸命否定してたし」

「…う…っ」

「しかも本城本人に確認までしてきて、由実や私たちに誤解だって弁解してたし」

「……」

「まぁ、由実と茜はそれでも全く気づいてないみたいだけど」
「……ごめん」
「何で謝るの？」
うなだれるように呟いた私に、智子は今度はプッと吹き出してみせた。

「別に、親友だから何でも話せなんて思ってないよ。今回も知らないフリしてようかと思ってたんだけど…」
「…『だけど』？」
「なんか一生懸命ラッピングしてる和美がかわいくって、つい」
こういうところ、智子は大人だと思う。本当に私は心から3人のことを親友だと思っているけれど、それでも自分の話をするのは得意じゃない。そのことをちゃんと分かってくれるのだ。恐らく、今まで私自身に尋ねずにいたのも智子の優しさだったのだろう。

「あのね、話したくないわけじゃなかったんだよ。…ただ、ちょっと不毛だから反対されるかもしれないと思って…」
「…まぁね、教師相手じゃね」
「うん…」
しかも由実は本城先生のことがあまり好きじゃないみたいだったし。智子が本城先生のことをどう思ってるのかは知らないけれど、言いにくかったことに違いはない。

教室が近づいてきて、中に誰かがいる気配がしたのでその話は互いにそこで打ち切った。調理実習を一番に終えてきたのは私たちだったはずだけれど…違う授業を受けている男子が先に帰ってきたんだろうか？

智子と小首を傾げながらドアをガラリと開けると、そこにいたのは意外な人物だった。

……それも…2人。

「何してるんですか?先生たち」

教室の一番前の窓枠辺りにもたれかかったなっちゃんと、その近くで壁に背を預けて腕組みしている本城先生。授業でもないのに教室にいることが意外で、智子がそう声をかけた。

「密談」

煙草を吸っていたなっちゃんが、ニヤリと笑ってそう怪しく答える。さらりとかわされたことがわかったので、智子は「そうですか」と肩を竦めたきりそれ以上尋ねたりはしなかった。

「お前らこそ、サボリか?こんな時間に」

腕の時計と教室にかけてある時計を見比べて確認しながら、なっちゃんがそう聞いてくる。「失礼な」と眉を寄せた智子が、自分の席に荷物を置きながら持っていたシュークリームを持ち上げて見せた。

「調理実習、うちの班は優秀だったから早く終わったんです」

「へぇ、ここのクラスはシュークリームか」

「あ、そう言えば何人かなっちゃんに持っていくって言ってたから後で来ると思いますよ」

「ほー」

智子となっちゃんのやり取りを、私はドキドキしながら見守っていた。緊張の原因はもちろん話の内容などではなく…なっちゃんの傍にいる本城先生のせいだ。

2人の会話には全く興味がないのか、本城先生は煙草を吸って窓の外を眺めながら話に加わろうとはしなかった。

だけど……。

「ここのクラスと隣のクラスだろ…こりゃあ今日の俺の昼飯シュークリームに決定だな」

「…おい、ふざけんなよお前」

生徒にモテモテのなっちゃんがもらえるであろうシュークリームの数を頭で計算してそう呟いた瞬間、それまで黙っていた本城先生が低い声でそう口を開いた。

「何が？」

とぼけた表情でなっちゃんがそちらを振り返る。口にしていた煙草を噛み切りそうなほどの苦い顔で、本城先生はなっちゃんを睨みつけた。

「お前が食いきれないの分かっててそれでもホイホイ受け取るから俺までとばっちり食うんだろうが」

「じゃあお前、『先生食べてください』って持ってくる生徒の気持ちを『食いきれねぇ』って拒否すんのか」

「…ちょっと待て、お前が言うとなんか変な話に聞こえる」

大学の時から仲が良いというこの2人のやり取りに、私と智子は思わず声をたてて笑ってしまった。本当に、学校という場所に似つかわしくない教師らしくない会話だ。

頭痛でもしてきたのか、本城先生はこめかみの辺りに手をやる。長い指でそこを抑えながら、「とにかく」と言葉を続けた。

「受け取るなら受け取るで時間かけてでも日にちかけてでも、いい加減自分で全部食え」

「…いやぁ、シュークリームは日にちかけたらやばいだろ、腐る」

「とにかく、俺はもう手伝わねぇ。先月からお前のせいで甘いもの見たら吐き気がする」
どうやら本城先生はなっちゃんのせいで先月から調理実習のたびに被害を被っているらしい。吐き捨てるようにそう言いきって、再び煙草を口にする。

私は…さっきまで笑っていたはずなのに、表情から笑みを消してその先生の動作を茫然と見つめていた。手に持っていたシュークリームを落としそうになったのだけは、何とか意識を繋いで耐える。

（…本城先生…甘いもの嫌なんだ…）

さっきまでウキウキとラッピングしていた自分が、何だか遠い過去のようにさえ思えた。現実を思い知らされたかのようで、ショックを受けたのを隠す余裕すらなかった。俯きがちに、目線を下へ落とした…まさにその瞬間、だった。

「えぇー、本城先生受け取ってくれないんですか？」
智子が、少し大げさな明るい声でそんなことを言い出した。驚いて顔を上げたのは、私だけではなくなっちゃんもだ。本城先生だけは、わずかに首を傾げて智子を見据える。

その目線に全く臆することもなく、智子は私の方を振り返って続けた。
「担任だしお世話になってるし、本城先生に渡そうって話してたんだよねー、和美」
本城先生にバレないように、智子がかすかにウィンクをしてみせ

る。話を合わせるように訴えられたようで、私は「あ、うん」と頷いてしまった。

「そうなんです、これ…」

智子と一緒に、本城先生の近くまで行ってラッピングしたそれを差し出す。手が震えないかが心配だったけれど、緊張を通り越して生きた心地すらしなかったので、その心配は必要なかったみたいだ。

恐らく、智子は私がショックを受けたのが分かったんだろう。そして、もう自分では先生に手渡しできなくなってしまったことも。だからこそ…何でもないことのように明るく、あんなことを言い出してくれたに違いない。

…でも、これでも拒否されたらさすがに傷つくなぁ…。

なんて、弱気なことを考えていた時だった。

「…どうも」

私と智子の手から、本城先生が「それ」を受け取った。

「……」

「え、先生もらってくれるんですか？」

相変わらず大げさにキャッキャッキャッキャとした演技をしながら、智子がそう言う。

「自分宛のものはもらう。俺が嫌なのはあいつがもらってきたくせ

にこっちに寄越すからだ」
「だよなー」
本城先生の言葉に「ははははっ」と笑いながら、なっちゃんが同調した。…分かっているなら、自分で全部食べればいいのに。でも恐らく、なっちゃんの人気は尋常じゃないから自分で処理しきれないのも本当なんだろう。

「良かったね、和美」
バレないように耳元で智子が囁いてくれる。受け取ってもらえた嬉しさと智子への感謝で胸がいっぱいになりながら頷くと、そこでちょうど授業の終了ベルが鳴った。
「お、そろそろ行くか」
煙草を灰皿で消しながら、なっちゃんがそう言って本城先生を促す。同じように煙草を処理して、本城先生ももたれていた壁から体を離した。

「じゃあな、あ、お前ら俺が教室で煙草吸ってたこと言うなよ」
先に歩き出した本城先生の後ろで、なっちゃんは私たちにそう釘を刺す。
「別に言いませんけど、皆知ってると思いますよ」
冷めた口調で冷静に言い放った智子の言葉に、なっちゃんは「そりゃそうだ」と苦笑いを浮かべた。それからなっちゃんは、教室を出て行こうとしながらふと私の方を見る。智子にもバレない程度のアイコンタクトだったけれど、わずかな目配せに私は少し笑って頷いて返した。『良かったな』と、そう言っているように聞こえたんだ。

不良教師2人が出て行ってすぐ、教室にはクラスメイトたちが戻ってきて賑やかになっていく。さっきのお礼を長々と言うわけにもいかず、私は智子に「ありがとう」と一言だけ告げた。

恐らく、智子はあのシュークリームを2つとも彼氏にあげるつもりだったはずだ。

それを1つ減らしてしまったことを謝る意味もこめてお礼を言うと、智子は首を振ってただ笑っていた。

2　side：Yukisada

「あれぇ？」
妙に間延びした声が、不意に頭上に降ってきた。どれくらいの間ボーっとしていたのか定かではなかったが、その声でようやく俺は我に返る。ペンを手にしたまま意識を飛ばしてしまっていたらしい。
「いるじゃん、ユッキー。ノックしても返事ないんだもん」
化学準備室に入ってきたことにも気づかなかった生徒が、いつの間にかすぐ傍までやって来ていた。
３年の菅原だ。下の名前まではいちいち興味がなくて覚えていない。

「なんだ、何か用か」
持っていたペンを放り出し、俺はぐっと伸びをした。そこでようやく時計を振り返ると、時刻は記憶にある時から１０分ほど経過していた。
「別に、用はないよ。ユッキーに会いに来ただけ」
「……」
ニッと笑って言う菅原に、俺は特に言葉も返さなかった。その代わり、目線も返さない。振り向きもせずに机の上の書類に再び目を落とし、菅原が出て行くか次の言葉を紡ぐのを待った。

大体、この前からどうしてこいつが俺につきまとうのかが理解できない。去年までは、担任だったわけでもないしそれほど話す機会だってなかった。こいつが3年になって急につきまとってくるようになった。

「あれ？ユッキー、このリボン…」

菅原の方は俺のリアクションにくじける様子もなく、平然と話を変える。その声につられて顔を上げた俺の前で、机の上にあった赤いリボンを指に絡めとって見せた。

今日の午前中、調理実習を終えた白石からもらったシュークリームにつけてあったリボンだった。

「2年の白石さん、からのでしょ？」

「……」

何でそんなことまで分かるんだ、と一瞬驚いたけれど、顔には出さずに済んだはずだ。菅原は少し勝ち誇ったように笑むと、手近の椅子を手繰り寄せてから断りもなしに足を組んで座る。その横柄な態度を注意する気力もなく黙然と見やると、菅原は指からリボンをハラリと落とした。

「さっきうちのクラスの都築がさぁ、白石さんって子からこれと同じリボンしたシュークリームもらったって言ってたんだよねぇ」

都築とは、菅原と同じ3年で、俺が担当する化学部の生徒だ。実験で2人組を作る時には大体白石は都築と組むことになるので、シュークリームを渡したとしても不思議な関係ではない。

「私知らないんだけどさぁ、白石さんって超美人な子なんでしょ？」

「…さぁ。人の好みによるだろ」

「え、じゃあユッキーは？私と白石さんどっちが好みっ？」

「……さぁ」

軽く小首を傾げてはぐらかすと、菅原は「ずるーい」と訳の分からない抗議を返す。それを無視して、俺は再び目線を机の書類に戻した。

そんな俺から質問の答えは得られないと思ったのか、菅原は肩を竦めてわざとらしく吐息を漏らす。それから、「でもさぁ」と懲りずに話を改めてきた。

「白石さんって子、都築のことが好きなんだろうね」
「……は？」
思わず、一拍分は余裕で返事が遅れた自覚がある。面食らったように顔を上げると、俺はさっきまで目を逸らそうとしていたはずの菅原の顔を正面から見つめ返してしまっていた。
「だってさぁ、普通好きじゃなきゃこんなのあげないよ。皆好きな人にあげたがるって」
当たり前でしょ、と付け足して、菅原は俺を「そんなこともわかんないの」と少しだけ馬鹿にしたように見やる。
「都築にあげたいけど、バレるのも怖いからユッキーにもあげて、化学部でお世話になってる2人にあげた…みたいな風を装いたかったんじゃない？」
推測するというよりは確信めいた響きをのせて、菅原の声が俺の耳に届く。
「……」
無言のまま、俺は視線を菅原から机の上のリボンへと移した。それを目に留めた瞬間、あの時の白石の顔が脳裏をよぎる。

「ユッキー、かわいそうにー。カムフラージュに使われたんだねぇ」
手を伸ばした菅原が、母親が子どもにするかのように俺の頭を撫でるフリをした。それを無意識のうちに避け気味になりながら、俺は「…お前」と小さく呼びかける。
「用がないなら帰れよ」
「用ならユッキーとお話することでしょー」
「そういうのを『用がない』って言うんだ」
あしらうように言って煙草に火をつけようとしてから、俺は自分の胸がさっきよりも少し早鐘を打っていることに気がついた。それは…嫌な話を聞いた時に得る、少しの緊張感と焦燥感に似ている。
そしてその後に来る…いいようのない不快感と苛立ち。

「ぶーっ」
わざとらしく頬を膨らませて拗ねる菅原は、それでも帰る気配を見せなかった。だがさすがの菅原も、次の瞬間には重い腰を上げざるを得なくなった。俺の胸ポケットで、携帯電話が鳴ったのがわかったからだ。
「…はい」
立ち上がりながらそれに応じると、菅原は遠慮をしたようにようやく椅子から立ち上がる。バイバイ、と言うように手を振るあいつに片手だけを挙げて答えて、俺は窓の方へ向かいながら意識を電話の方へと集中した。

『お、ユキ?』
今日ばかりはこいつの電話で助かった。あぁ、と小さく答えながら返事を待つと、電話の向こうで貴弘は「良かった」と安堵の息を漏らしているようだった。
『まだ学校だろ?頼みがあるんだけどよ』
「頼み?」
『職員室の机の上に、重要書類を忘れてきちまってさぁ』
「……」
『お願い』
「……今どこだよ」
『家』
「……」
大きくため息をついてから、俺は「…30分で着く」と静かに告げた。

＊＊＊＊＊＊

はっきり言って、貴弘の忘れたものは職員室の机の上にポンと置いておいていいような書類ではなかった。だからこそ回収しないと思ったのもあるんだろう。あいつの希望通りそれを鞄にしまって、俺はすぐに学校を出た。

裏門の方にある教師専用の駐車場から車を出し、走り出す。学校から貴弘の自宅まではそれほど距離はないので、宣言した通りの時間でも余裕で着きそうだった。

しがない高校教師には不似合いな雰囲気の高級マンションのエントランスで、覚えてしまっている部屋番号を呼び出す。

『はい』

貴弘のものではない女の声が対応して、「…俺だ」と短く返事をした。もちろんカメラもついているんだろう。女の後ろで貴弘が「おぅ」と答える声がする。それに一瞬遅れて、傍の重厚なガラス扉が左右に開いた。

そこを抜けてエレベーターに乗り込み、5階で止まったそれを降りる。ある一室の前まで行って、面倒くさいと思いながらもエントランスから続いて本日2度目のインターホンを押した。

「はーい」

いやに明るい声に出迎えられ、ドアが勢いよく開けられる。

「久しぶりですね、ユキ先輩」

ドアを押し開きながら、その女…名取理沙はニッコリと笑った。俺と貴弘の大学時代からの後輩で、今は貴弘の妻だ。結婚する前からよく知っているため、俺は今でもこいつのことを旧姓の「拓巳」

で呼んでいる。

「貴弘は？」

「いますよー、どうぞ」

書類を届けに来ただけだから上がるつもりもなかったけれど、拓巳の雰囲気から断っても無駄だろうと悟った。促されるままに玄関で靴を脱ぎ、リビングへと通される。そしてその先には、この家の主がデカイ態度でソファに座っていた。

「おぅ、ご苦労さん」

ニッと笑って言う貴弘の頭に、持ってきた書類をバスっと叩きつける。

「他に言うことはねぇのか」

「…ありがとう」

観念したのか急に殊勝になって頭を下げる貴弘に、「はじめからそう言え」と言いながら俺は向かいのソファに座った。鞄をソファの横に置いた時に、素早く拓巳がキッチンから運んできたコーヒーを差し出す。…こういうところの回転の早さは相変わらずだ。

俺の目の前で、貴弘は受け取った袋を開けて中身を確認していた。そしてそれを何度か見やった後、「ユキ」と呼びかけながら立ち上がる。

「すぐにパソコンに入力しなきゃいけないやつがあるからやってくる。ちょっと待っててくれよ」

言われて、俺は目線だけを上げてあいつを見つめ返した。出されたコーヒーを一口飲んでから、小さく首を捻る。

「長居するつもりはねぇから、すぐに帰る。気にせず仕事して来い」

「えぇっ先輩、ご飯くらい食べて行ってくださいよっ」
俺の言葉に、貴弘ではなく拓巳の方が驚いて声を上げた。
「…俺にお前の作った飯を食えってのか」
「何言ってるんですかっ、大学時代だって食べてたじゃないですか」
「…貧乏学生って時々すげぇよな、何でも食える気がする」
「どういう意味っ？」
怒りながら笑うという器用な表情を見せつつ、拓巳は俺に向けて拳を振り上げるフリをする。そんな俺たちのやり取りを笑って眺めてから、貴弘はリビングを出て行った。

…さて、これで結局足止めを食らうことは決定したらしい。

どうせ何か用事があったわけでもないし、早く帰ったところで一人になれば思い出すのは嫌なことだろう。胸を掠めたあの時の不快感が蘇りかけて、俺はそれを苦いコーヒーで飲み下した。

そんな俺の表情から、勘の鋭い拓巳は何かを読み取ったのだろうか。さっきまで貴弘が座っていた辺りに腰を落ち着けながら、「ユキ先輩は」と呼びかけてきた。
「最近、どうなんですか？新しい彼女できました？」
「……いや」
「じゃあ好きな人は？」
「まったく」
「なぁんだ」
いきなりな話題を振っておいて、「なぁんだ」はどうなんだ。眉を寄せて、俺は拓巳を睨みつける。それでも動じる様子もなく、拓巳は同じようにコーヒーを啜ってみせた。

「ちょっと色恋を感じさせる憂い顔だったから、悩みでもあるのかと思ったのに」
「…どんな顔だ、そりゃ」
肩を竦めて、俺は苦笑いを漏らす。
胸を占めていたのは「不快感」であって、「恋愛」とはほど遠いというのに…。

でも、そうだ…。
さといこいつだったら、この言いようのない不快感の理由がわかるだろうか。貴弘に聞いても答えは出たかもしれないが、あいつにだけは聞きたくないという妙なプライドがあった。

「…イライラするんだ」
ポツリと呟いた俺に、拓巳は少しだけ目を瞠った。
「この前から」
続けた言葉に、あいつはまだ返事をしない。俺の話が一つ区切りつくまで、口を挟まないつもりらしい。

「理由はわかんねぇ。けど…」
「『けど』？」
拓巳が、そこで初めて俺の言葉を復唱する。すると何故か、自然とため息が零れた。

始まりは…そう、あいつが…白石が貴弘のことを色々と聞いてきた時だ。その後貴弘にも「イライラしてる」と指摘されたから…間

違いない。
そして、その後白石と話をして…互いの誤解が解けた時には少しホッとしたのも覚えている。だけどそれもつかの間、さっきの菅原の一言で…また振り出しだ。不快感と共に募る苛立ちは、留まることを知らない。

「……」
かいつまんで話すと、拓巳はこの上ないくらいに間の抜けた顔で呆けていた。女だというのに口も半開きになっていて、「おい」と俺は思わず注意を促す。
「何だその顔」
言うと、拓巳は今の自分のひどい顔に気づいたらしく、慌てて表情を整えて居ずまいを正した。それから、呆れたように俺に一言言う。
「重症ですね、先輩」
「……何がだ」
「いえ、分からないならいいんです」
この前の貴弘と同じようなセリフを言い、拓巳はそれ以上は何かを説明しようとはしなかった。
「ま、それだけ分かってれば大丈夫です。そのうち収まりますよ、そのイライラ」
根拠のないとしか思えない言葉を、無責任に口にする。

「ところで、先輩」
答えを提示するという選択肢は拓巳にはないらしく、話を変えるかのように呼びかけてきた。手にしていたカップをテーブルの上に戻しながら顔を上げると、拓巳はニッと笑ってみせる。イイ年をし

て、相変わらず子どもみたいな表情だ。
「せっかく来たんだから、一曲弾いてってくださいよ」
リビングの端を指差しながら、拓巳は俺にそう促した。

そこにあるのは、一台のピアノだった。
グランドピアノではなくアップライトピアノだが、質は結構良い方だと思う。手入れもされているらしく、埃一つなく磨かれていた。
ピアノの為に部屋を防音にしたことも知っていたが、貴弘も拓巳もそれほど弾けるわけではない。持ち主に満足に弾いてもらえることがなかなかない可哀想なピアノだったからか、俺は気づくと促されるままにソファから立ち上がっていた。

蓋を開き、椅子を引く。鍵盤を触るのは、どれくらいぶりだろう。

「リクエストは？」
「先輩が私の結婚パーティーで弾いてくれたやつ」
ニッコリ笑って、拓巳はそう言う。記憶の糸を手繰り寄せるまでもなく、俺はその曲を思い出した。

ジャズの、スタンダードナンバーだ。

弾き始めると、拓巳が普段より少し高めの声でピアノに合わせて鼻歌まじりに歌い始めた。ピアノの旋律を邪魔しない程度の、控えめな歌声だった。

テーマを終え、アドリブに入ると拓巳も歌をやめてこちらに聴き入る。重すぎず軽すぎず、滑らかな鍵盤を弾くのは久々なのに感触を体が覚えていた。コードをなぞる左手に合わせて、右手で「早技」と言われるアドリブを披露する。

何コーラス分かを弾き終えて一曲終わると、拓巳と共にいつの間にかいたらしい貴弘が拍手をして寄越した。

「さすが、うちの大学のジャズ研実力者」

からかうような貴弘の声に、俺は答えずにそっとピアノの蓋を閉める。

「私、この曲が一番好きだなぁ」

未だ夢から覚めやらぬようなうっとりとした表情で、拓巳はソファにもたれかかってそう言った。

「歌詞がいいんですよねー。『降っても晴れても君を愛そう、ずっと一緒にいよう』みたいな」

…極端な意訳だな、と思ったが、あえてツッコミはしなかった。

ソファに戻ると、拓巳が新しいコーヒーを淹れ直しながら続ける。

「先輩は、今そういう風に思える人…いないんですか？」

「…？」

眉を寄せて、俺は拓巳を見据えた。それが聞きたいが為に、こいつは俺にこの曲を弾かせたのだろうか？

「あいにく、そこまでロマンチストじゃないんだ」

「そうですか？男の人は意外に女よりロマンチストですよ」

からかうように言うと、拓巳は話をそれきりにして立ち上がった。

夕飯の用意でもするのだろう、カウンターキッチンの向こう側に消える。

「…何が言いたいんだ、あいつ」
顔を顰めてそれを見送ると、貴弘が苦笑いを寄越してきた。そのままこちらへ近寄ってきて、さっきまでと同じように俺の向かい側に座る。
「前に俺も言っただろう、『分からないなら考えろ』ってことだ」
「…は？」
「……お前をそこまで頑なにさせるのは何なんだ？教師と生徒だからっていうモラルか？」
「何言ってるんだ、お前」
本気で眉をひそめると、貴弘は今度は苦笑いを消してため息を漏らした。それから小さく、首を横に振る。
「誰にも本気になったことのない奴が本気になるとやっかいだな、って話だ」
貴弘の言葉はますます意味がわからず、俺はただ顔を歪めて首を捻るしかなかった。

3　side：Kazumi

その日は一日、なんだか落ち着かなかった。シュークリームを無事受け取ってもらえて満足だったはずなのに、その一大イベントが終わっても過度な緊張からか胸がドキドキしたままだ。

息苦しくなりそうなほどのそれに何度か大きく深呼吸をしていると、目の前にいた智子が意味ありげに笑った。こちらの胸の内はお見通しなんだろう。

「和美はさぁ、本城のどこが好きなの？」

放課後になって教室で雑談をしていた時、智子がふとそんなことを聞いてきた。ＨＲを終えてからかなりの時間が経ってしまっているため、教室にはもう他に誰もいない。誰に遠慮することもなく、智子の声のトーンは通常通りだ。

「『どこ』……？うーん…」

一口に言えと言われても、きっと言葉になんてできない。困ったように眉を寄せて、私は首を傾げて見せた。

声が好き、長い指が好き。たまに見せる笑った顔が好き。

けだるそうに煙草を吸う仕草とか、生徒にこわがられている割には実は生徒思いなところとか。そして何より……。

「キレイに泣く人だなぁ、と、思ったんだ」

「……え？」

小さく呟くように答えた私の言葉を聞きとがめて、智子が眉をひそめる。
「泣いたの？本城が？」
驚いたような声に尋ね返されて、私は苦笑いを返した。
「結果的には、『泣いてるように見えた』だけだったんだけどね…」
「いつ？」
「去年の入学式前の春休み」
「そんなに前から好きなの？」
意外そうに、智子は今度は目を見開く。恐らく、私が先生のことを好きになったのはそれほど前ではないと予想していたんだろう。
「うん。入学式前に…春休み中に、学校が見てみたくなったの。どんな風に部活してるんだろう…とか、少し覗くだけの気持ちで見に来たんだ」
「へぇ、知らなかった」
「制服も着てなかったし、学校の外側からグラウンドとかを覗いて…それから、帰ろうと思って学校の裏手にある公園の前を通った」
桜並木のキレイな、少し広めの公園だった。遊具もなく、ベンチが数個しか置いてないために遊んでいる子どもはいなくて…。そこにいたのは、吸われないまま燃え尽きそうな煙草を指に挟んだままの…哀しそうな顔をした男の人だった。
「哀しそうなのに不謹慎だけど…泣いている横顔がキレイだと思った。それで…気づくと、声をかけてたの」
「それが本城？」
「……うん。振り向いた先生は実際は泣いてなくて…私にそう見えただけだったんだけど…」
切なそうな目で桜を見上げていた先生は、ゆっくりとこちらを振

り返った。泣いていると思い込んでいた私は…相当的外れなことをたくさん言ったと思う。だけどそれでも…何とかしてこの人を慰めたい、と思ってしまったんだ。

「訳のわからないことを言って励まそうとする私に、先生は苦笑してた。それから、少しだけ話をして…そのまま別れたの。だから、先生は私のことなんて覚えてないと思う。私も、まさかここの教師だなんて思ってなかったから…」

それでも、私は覚えていた。…いや、覚えていたというよりは…そんな一瞬で、私は彼に堕ちてしまっていたんだ。

もう一度会いたい、という想いは叶ったけれど、あの日のことを本人に確かめる勇気はなかった。

「何で?本城も覚えてるかもしれないじゃない」

「制服着てなかったし、ここの生徒だと思ってなかったと思う。それに…入学してから見た先生は全くあの日とは違ってて…」

かなりの美形だけれど強面で、冷たそうな雰囲気からか生徒には怖がられている。あの日見た先生が、先生自身の弱い本当の姿だったんだとしたら…彼はそれを見た私に会いたくはないかもしれないから…。

「…そういうものかなぁ」

解せないというように、智子はわずかに首を捻る。それに苦笑いを返して、私は今でもはっきりと思い出せるあの日の先生の横顔を反芻していた。

＊＊＊＊＊＊

「あれ、白石？」

バイトの時間が近くなった智子とはそのまま教室で別れて、私は昇降口へ向かって廊下をトボトボと歩いていた。

後ろからふと声をかけられたのは、階段を下りようとした頃だった。振り返ると、そこにはいつも部活でお世話になっている都築先輩がいた。今日は部活がないのに遅くまで残っていたんだなぁ、と、自分のことを棚にあげて彼を見上げる。

「さっきはありがとう、うまかった」

暗に昼休み中に渡したシュークリームのことを指して、先輩はそう言ってニッコリ笑った。相変わらず爽やかな笑顔だった。

「いいえ、いつもお世話になってますから」

笑って返すと、先輩はふと私が手にしている鞄に視線を落とす。

「白石、今帰るとこ？」

「え？あ、はい」

「じゃあ駅まで一緒に行っていい？」

「え？…あ、はい…」

「やったぁ。待ってて、鞄取ってくる」

子どものように無邪気な顔で笑うと、先輩はこちらの返事を待たずに踵を返して走り出してしまった。

断る理由も特になかったので、仕方がない。ふぅ、とため息を漏らしながら、待っているしかないので近くの壁に背をもたせかけた。

もうほとんどの生徒が下校したか部活中で、校舎は静かなものだった。吹奏楽部の楽器の音だけが響くだけで、それ以外に音はほと

んどしない。
「でさぁ、実際はどうなわけぇ？」
…だからこそ…あの人たちの声が響いて聞こえてきてしまったんだ。

「何が？」
階段の下から、何人かの足音と声がする。何事かを尋ねられた女子生徒が、とぼけるように聞き返しているのが聞こえた。
「あの噂よぉ。あんたが化学の本城と付き合ってるって噂！実際はどうなの？」
出てきた名前に、私は思わず顔を上げる。それでピンときた。そこにいるのは…「あの」菅原先輩だ。

「またその話ぃ？」
「だって、舞ってば全然教えてくれないんだもん。友達でしょー」
「でもーぉ、本当のこと話しちゃうとユッキーにだって迷惑かかるかもしんないし」
続いた菅原先輩（舞という下の名前は初めて知った）の言葉に、私は思わず目を見開いた。

……それって…つまり……。

「なになにっ？じゃあやっぱりホントなのー？？」
「本城ってとこが微妙だけど…教師と付き合うなんてやるじゃん、舞」
「もっと早く教えてよねー、友達なのにさぁ」
3人ほどいるらしい友達が、まくしたてるように盛り上がっている。それに「まぁね」と満足そうに笑っている菅原先輩の顔が…見

えた。階段を上ってきて、私の視界に現れたからだ。

「…菅原先輩」

気づくと、自分でも無意識のうちに呼びかけてしまっていた。後のことなんて考えてない。どうする気かなんて自分でもわからなかった。ただ、そのまま素通りさせるわけにはいかなかった。

「誰、あんた」

菅原先輩の取り巻きの一人が、目を細めて私を睨む。こちらの只ならぬ雰囲気が分かったからだろう。

「菅原先輩に、お話があります」

あくまで冷静に、私は菅原先輩を正面から見据えた。

「……」

私のことを頭からつま先までを無遠慮に眺めて、菅原先輩は後ろにいる友達を振り返る。

「先に行ってて。後から行くから」

「……分かった」

何かを言いかけた取り巻きたちも、仕方なく譲歩した。私をも追い越して、そのまま階段を上がって行ってしまう。

「……で？」

残った菅原先輩は、私をまっすぐ睨みすえた。

「怖い顔して…あんた誰？」

茶色く染め上げられたパーマのかかった髪を弄びながら、菅原先輩はそう言う。

「2年の、白石和美といいます」
臆することなく名乗って、私は彼女にバレないように深呼吸をした。先輩の方は…その私の名前を誰かから聞いたことがあったのか、少しだけ目を見開いてみせる。それから、「…ふぅん」と意味ありげに笑った。

「で？何の用？」
短いスカートから伸びた彼女の足が、不機嫌そうに床をトントンと突く。ぐ、と改めて気合を入れなおして、私は「さっきのお話ですけど」と前置きして続けた。
「どうして、あんな嘘つくんですか？」
「…嘘？」
思い切り眉を顰めて、先輩は繰り返す。
「本城先生と付き合ってる、なんて嘘です」
言うと、先輩は再び私のことをジロジロと嘗め回すように眺めた。その視線に一歩も退かない決心をして、私は両足をわずかに開いて踏ん張るように立つ。
「…なるほどね」
やがて何かを納得したように呟いた先輩は、長い髪を後ろへかきあげながら続けた。

「カムフラージュだったのは都築の方か…」
「……え？」
「何でもない、こっちの話」
嫌味な笑みを口元に浮かべて、彼女は私を見据える。
「で、なんだっけ？ユッキーと付き合ってるなんて嘘つくなって？」
「はい」

大きく頷いて返すと、先輩は今度は声をたてて笑ってみせた。それから、ふっと厳しい表情に戻って私を睨む。

「なんであんたに嘘だなんて分かるのよ」
意外な言葉が返ってきて、私は思わず声を返すのを忘れて絶句してしまった。

「なんであんたが、嘘だなんて言えるの?あんたユッキーと私の何を知ってんのよ」
「……だ…って…」
ここまで開き直るように強く言われると思っていなかったので、私は思わず口ごもる。それでも、負けたくない。…負けられない。その一心で、私は再びキッと顔を上げた。

「先生が!…そう、言ってましたから!」
菅原先輩とは付き合ってないって……先生が私にそう言ってくれて…私はそれを信じたんだから。それを聞いた菅原先輩は、この上ないくらいに人を馬鹿にした表情をして、鼻で笑った。腕組みをして横柄な態度で…こちらを見下ろす。
「あんた、何言ってんの?」
「……え?」
「何でユッキーが、あんたなんかにホントのこと話さなきゃいけないわけ?」
「……」
「生徒と付き合ってるなんて、おおっぴらに言えることじゃないのはわかるよね?
だったら、あんたに何を尋ねられてもホントのことなんて言うわけないじゃん」
ガラガラと、何かが音をたてて壊れていく。あの時、先生は私の言葉を…私は先生の言葉を信じたはずのなのに。それでも、あの時の先生の珍しい笑顔ですら、音をたてて崩れ去っていってしまう。

「ユッキーさぁ、高級マンションに住んでるんだけど、男の人らしいっていうか…部屋が超汚くてさぁ」
階段の手すりに両手を置いて、菅原先輩は笑いながらそんな話をしだす。
「私が毎週末通って片付けてあげないと、大変なんだよねー」
「……」
「意外に寂しがりやだし、いっつも離してくれないし。エッチの時だって……」
「やめて！」
気づくと左手で、思い切りガンっと手すりを叩いていた。それに一瞬目を見開いた菅原先輩が、すぐにまたニッと笑ってみせる。
「知ってる？甘い物も超嫌い。シュークリームなんてもらって、迷惑そうにしてた」
「嘘…っ」
「嘘じゃないわよ。本人に聞いてみれば？まぁ、あんたなんかに本当のこと言うわけないけどねー」
ケラケラと笑って、菅原先輩は立ち尽くす私の横をすり抜けた。そして、横切るその瞬間…彼女はもう一度私の耳元で囁くように言う。

「あ、お願い。私とユッキーが付き合ってるって話は、内緒にしといてね」
ニコッと笑って嫌味を言う彼女は、もう悪魔にしか見えなかった。私の心を引き裂いて、最後の最後にダメ押しをする。

「……っ」

返す言葉なんて出てくるはずもなく、私は自分の唇を噛み締めた。

痛みすら感じることもないほど鈍った神経で、そこにただ立ち尽くすしかなかったんだ。

4　side：Yukisada

あの日、学校裏の公園の桜は満開だった。翌日の天気予報が雨を指していたので、花見をするならその日しかなかったと思う。元より「花見」なんて性分ではなかったけれど、何となく足をそちらに向けてしまっていた。４月頭の、新学期が始まる少し前の日だった。

『あの出来事』から丸３年、この季節が訪れれば自分の胸が痛むことは分かっていた。思い出しては軋む心に、それでも何故か俺は桜を見上げに行くのを止めることすらできない。自然と赴いてしまった足で、公園に踏み入る。ベンチに座って煙草に火を点けたが、それを口にする気にはなれなかった。

空を見上げた目が、ピンク色の花びらをも映す。吸われることのない煙草が、ジジと音をたてて短くなっていった。

泣きたいはずなのに泣くこともできなくて、俺はただそこでじっとしているしかなくて…。

知らぬ間に誰もいなかったはずの公園に一人の女が入ってきたことにすら、気づいていなかった。

『切なくなりますよね、桜って』

急に後ろから声をかけられて、俺は思わずビクリと肩を震わせた。

『……』

だけど次の瞬間にはいつも通りの冷静を装い、ゆっくりとそちらを振り返る。そこに立っていたのは、１９か２０歳くらいの驚くほ

ど整った顔をした女だった。
『咲いたと思ってもすぐに散っちゃうから…』
言いながら、女は俺にハンカチを差し出そうとする。そしてその寸前に俺の顔を見て…少し驚いた顔をしてから、手を引っ込めた。どうやら、俺が泣いているとでも思ったらしい。
気恥ずかしさをごまかすように、彼女は少し苦笑いを浮かべて俺の斜め前に立った。そして先刻までの俺と同じように、頭上の桜を見上げる。

『でも私、短いからこそ桜の花が好きなんです』
今度は本当の微笑みで、舞い落ちる桜の花びらを手にすくうように掴んでみせた。そして、そのままそれを俺の方へ差し出す。
『名残惜しいからこそ…、また来年このキレイな花を見るためにも頑張ろうって思えるから』
出された花びらを無意識のうちに受け取ってしまいながら、俺は彼女の顔を見上げた。陳腐な言葉でしか表現ができなかったけれど…恐ろしいくらいに綺麗な横顔だと思った。

『俺は…嫌なことを思い出すからあまり好きじゃない』
何故なのか、自分でも分からなかった。ただ、理屈で考えるよりも早く、無意識のうちに俺は女にそんなことを口にしてしまっていた。女が、少し驚いた顔で俺を見下ろす。
ベンチに座った態勢のまま…俺はそんな彼女の顔を見つめ返すことはできなかった。

『思い出しても、いいんですよ』
不意に、目を逸らしたままの俺の頭上にそんな柔らかい声が降り

注ぐ。

『人間は、忘れる生き物なんです。いつかは、その「嫌なこと」も忘れるんですよ』

『……』

手にしていた煙草がついに指を焦がしそうなくらい短くなっていることに気づいて、俺はそこで手近の灰皿にそれを押し付けた。その一連の動作を眺めながら、彼女が続ける。

『何度も思い出していくうちに…段々、「忘れられる」んです。痛みに「慣れる」と言ってもいいかもしれませんね』

…不思議な声だった。傷ついた胸に、温かさが染み渡っていくような…。

だから、思い出してもいいんです、と彼女は笑った。思い出せば思い出した分、一歩一歩、解放に近づくのだと…。

『……そんな風に、考えたこともなかったな』

気づくと少し、俺も笑えていた。

そんな話だけして別れた彼女の、名前くらいは聞いておけばよかったと後で後悔した。だけどそれもすぐに解決してしまうことになる。その数日後の高校の入学式、新入生の中にその子がいたからだ。

「……どこが19か20歳だ」

あの時彼女を見た瞬間に俺が抱いた印象に、自分で毒づく。高い背に整った顔、落ち着き払った雰囲気でとても高校生には見えなかったけれど…。制服を着た彼女は、俺の目にもようやく年相応に見

えた。

その瞬間、俺はあの日の出来事は自分の胸にしまっておくことに決めた。どうせ彼女は公園で慰めた大の男のことなんて覚えていないだろうし、もし覚えていたとしてもあれが自分の学校にいる「不良教師」と呼ばれる教師だったとは思いもしないだろう。お互いのためにも、あのことは封印しておいた方がいい気がしたんだ。

『お互いのため』……？

いや……

『俺』が『俺のため』に、あの時感じた温かさと胸に咲きかけた感情を、押し殺してしまいたかっただけなんだ。

そこまで分かっていながら、俺は「それがつまりどういうことか」は考えないようにした。そこに気づくと、やっかいだと思ったからだ。『分からないなら考えろ』と言った貴弘の言葉も、聞かなかったことにして…。

＊＊＊＊＊＊

一年前のその日、白石の言葉を受けたせいなのか…。今年の春、桜を見上げても俺の胸は痛むことはなかった。感じる季節に、４年前の『ある出来事』を思い出すところまでは例年通りだったが、だからと言って泣きたくなることもない。今年も思い出した分、この痛みから解放される日に近づいたと思えたからだ。

「全員、プリントは行き渡ったか？」

放課後の化学実験室、化学部の実験前に俺はグルリと室内を見渡した。白衣のポケットに手を突っ込み、実験器具を前にした生徒たちに確認する。

「じゃあ、各自始めてくれ」

俺の言葉を合図に、２人組になった生徒たちがカチャカチャと器具を忙しそうに動かし始めた。時折質問にくる生徒の相手をするために教壇に立ったまま、俺はそれを見下ろす。今日の実験はさほど難しくはないので時間もかからないだろう。

「白石ちゃん、こっちおいでよ」

教室の一番後ろの端、３年の鎌田が白石に声をかけているのが見えた。

「都築、委員会で遅れてくるんでしょ？それまでうちらと実験始めてよう」

鎌田は姉御肌というか…面倒見の良いタイプで、周りによく気を遣える。白石もそれが分かっているからか、「…はい」とニコリと笑って頷いた。

「……？」
また、だ。妙な違和感を覚える。

今日の朝から、どうも白石の様子がおかしい気がしていた。…と言っても、朝のＨＲでしか顔を見ていないからその途中は分からないが…。

元気がない…と言えばいいのだろうか。とにかく、笑っていてもいつもの笑顔ではなくて。昨日シュークリームを手渡された時はいつも通りだった気がするので、昨日の放課後にでも何かあったのだろうか？

「…白石」
自分でも考えるより早く、その名前を呼んでいた。
「…っ」
ビクリと、呼ばれた白石が肩を震わせる。やがて「はい」と小さく返事をしながら立ち上がったので、俺は「ちょっと」とこちらへ来るように促した。

ゆっくりと歩み寄ってくる白石に、隣の化学準備室を顎で示す。ついてきてその部屋へ踏み入った白石は、パタンと静かにドアを閉めた。それから、何かを堪えているかのように眉を寄せた表情で…決して俺の方は見ないようにしているのがわかった。

「お前、今日様子おかしいけど…何かあったのか？」
いつも通り煙草に火を点けながら、俺はそう尋ねる。

「……いえ」
短く答える白石に、俺は小首を傾げた。どう見ても何もないという表情ではないけれど…。
「まぁ、言いたくないんなら仕方ねぇけ……」
ど、と続けようとした俺は、ライターを胸ポケットにしまいながら再び顔を上げて、思わず言葉を飲み込んだ。目線を上げて見た白石の目から、大粒の雫が零れ落ちてきていたからだ。
「どうした?どっか痛いのか?」
自分でも珍しいほど少し焦りながら、俺はそう尋ねる。ブンブンと勢いよく首を振った白石は、「…すみませんっ」とだけ言い残すと先刻とは違うドアから廊下へと飛び出して行ってしまった。

「……」
残された俺は、しばらく茫然とそこに立ち尽くしてしまう。煙草は口からポロリと落ちかけ、慌てて火傷しないようにそれを受け止める。
「…なんだ…?」
一瞬、頭がついていかない。だけど、どうするべきか…自分がどうしたいのかはクリアに判断していた。

火を点けたばかりの煙草を灰皿に押し付け、白衣を翻して俺は勢いよく床を蹴る。廊下を走り出しながら、俺は白石の後を追った。

白石がどっちの方向に行ったのか全く見当もつかず、俺はかなり

校舎内を走り回った。やがて、中庭…もう誰も来ないような場所に、ポツンと立って泣いている姿を見つける。立ち止まって、俺は見つけた安堵感から胸を撫で下ろしながら見やった。

それから、中庭に踏み出しながら声をかけようと名前を呼びかける。

「白…」

「白石！」

俺の声をかき消すほどの大声で、反対方向から白石にかかった声があった。驚いてそちらを見やると、向こうの校舎の方から彼女に走りよる影が見える。委員会で部活に遅れてくると言っていた…都築だった。

そして瞬時に思い出す、昨日の菅原の言葉。

『その白石さんて子、都築のこと好きなんだろーね』

『カムフラージュに使われたんだね、ユッキー』

ザワザワと、胸を何かが騒ぎ立てる予感がする。泣いている白石を見つけて慌てて駆け寄った都築が、慰めるようにその頭を優しく撫でているのが見えた。そして俺の時とは違い、白石も都築の前から逃げ出そうとはしない。

「……」

ズキ、と、俺の中のどこかが痛む。

それ以上見ていたい光景であるはずもなく、俺は白衣を翻して校

舎の中へと戻った。

5　side：Kazumi

朝から…いや、昨日菅原先輩と会話をした後からずっとこらえていた涙が、留まることを知らずに流れだした。眉間に皺を寄せて無理をしてでも我慢するつもりだったのに、それもダメだった。本城先生に呼ばれて、至近距離でその顔を見て…。

「どうした？」なんて心配するような優しい声をかけられただけで、堪えきれなくなってしまった。

一番、泣きたくなかった人の前で。

しかもそれを、逃げるように振り切ってしまった。

優しい先生の顔を見た瞬間に、思い出したのは菅原先輩のことだったから…。もしかしたら先生は、教師としてではない顔なら実は彼女に見せているんだろうか、とか、あの時菅原先輩とは付き合っていないと言ったのはやはり嘘だったんだろうか、とか。色んな想いがグルグルと頭の中を回って止むことはなかった。

「白石！」

中庭で一人佇んで隠れるように泣いていると、そんな私をあっさりと見つけてしまった人がいた。慌ててこちらへ駆け寄ってきて、都築先輩は驚いたように目を見開いている。

「どうかしたのか？こんなとこで…」
いつも優しい先輩は、こんな時でも本気で心配してくれるような目をしていた。弱っている時に人の優しさは染み入るもので、私は更に涙が大きく零れるのを実感する。

「誰かに何かされた？」
聞かれて、大きく首を横に振った。…でも、いくら優しくしてもらっても本当のことなんて先輩に話せるわけもない。ただ首を振り続ける私に、先輩もそれ以上何かを聞きだそうとはしなかった。代わりに、親が子どもを宥めるように頭を優しく撫でてくれる。その手の大きさと温かさに、私はそれまで押し殺していた声をあげて泣いた。

泣きはらしたひどい顔で部活に戻れるはずもなく、気を遣ってくれた都築先輩が実験室にあった私の鞄を取ってきてくれた。どうやら本城先生にも何らかの言い訳をしてくれたようで、そのまま下校許可が出たようだ。親切にしてくれた都築先輩に改めてお礼を言い、私は学校を出る。沈みきった気分で家に帰れるはずもなく、私は何かに縋りたい一心で自宅とは別方向へ向かった。

学校の最寄り駅から、２駅分電車に乗る。降りて行き慣れた道を歩いて行くと、１５分ほどしてから住宅街にある一軒の戸建の前で立ち止まった。小さく深呼吸してから、インターホンを押す。それ越しな応対ではなく、直接開いた玄関のドアから「はーい」と智子が顔を出した。そしてそこに立ち尽くしている私の顔を見て、驚い

たように目を瞠る。

「えっ、和美!?どうしたのその顔!?…っていうか今部活中じゃ…」

言いかけた智子に、うわぁっと声をあげて再び泣き出しながら抱きついた。驚きながらも何とか受け止めてくれた智子が、「とにかくあがって」と背中をさすりながら中へ促してくれる。連れられるまま玄関にあがると、そこには2つの人影があった。

「和美…?」

智子と同じように驚いた顔をした、由実と茜だった。どうやら智子の家に遊びに来ていて、ただならぬ私の声を聞いて出てきてくれたらしい。

「とりあえず、私の部屋に行こう」

智子が私の手から鞄を取り上げながら、そう言う。小さく頷いて、揃って二階への階段を上がった。

＊＊＊＊＊＊

「そう、そんなことが…」

話を聞き終えた智子は、深いため息と共にそんな言葉を漏らした。一通りの話を終えた頃には、もう時刻は18時を回っていた。私の顔を見ただけで、泣いている理由を本城先生絡みだと察した智子が「もう話してもいいんじゃない」と言ってくれたこともあって、私は由実と茜にも今までの話を全て話すことができた。智子の時もそうだったけれど、私は何かきっかけがないと自分の話をするのが苦

手なのだ。

「和美がユキサダを…っ！？」

由実はひどく驚いていたけれど、特に毒づくこともなく真剣に聞いてくれた。いつも穏やかで優しい茜は、特に何も言わずに私を心配するような目で耳を傾けてくれる。それだけで、なんだかひどく安心できたのも事実だ。

「でもさぁ、何なの菅原！感っじ悪いあのギャル女！」

イライラした様子で、由実はまるで自分のことのように私の代わりに怒ってくれる。それをなだめるように片手を挙げて、智子は「うーん」と唸るように眉を寄せた。

「まぁギャルはおいといてさ、和美」

「…ん？」

話を聞いてもらって落ち着いてきたせいか、私はようやく止まり始めた涙をタオルで拭く。真剣な眼差しをした智子の方を向き直ると、厳しい表情で私を見た。

「それで和美は、そのギャルの言うことを信じるの？」

「…それは…っ」

私だって、信じたくないのが本当だ。だけど菅原先輩の言うことは正しくて……本城先生が私に本当のことを言わなくてはいけない義理はない。あの時、私に話してくれた先生の目が嘘をついていたとは思いたくないけれど…、それでも、先生が真実を話してくれたという保障はないんだ。

菅原先輩と付き合っているにしろいないにしろ、先生には「付き合ってない」と答える選択肢しかないはずだ。…そんなことも分からずに、疑いもせず真に受けてしまっていた自分が恥ずかしくもあ

った。

そんなことを考えていた私の頭の中まで見たみたいに、智子はもう一度大きく吐息を漏らした。

「ギャルの言うことが本当かどうかなんて、今は関係ないんじゃないの？」

「え……」

「確かに、ギャルと本城が本当に付き合ってたらショックだと思うけど…。でもね、本城が本当のことを和美に話す義理がないのと同じように、ギャルだって本当のこと言うとは限らないよ」

「……」

すっかり冷え切った紅茶を一口啜って、智子は「ね」と同意を求めるように首を傾げる。

「それより今問題なのは…気にかけてあげたのに目の前で泣き出された挙句逃げられた本城の方だよね」

「……っ」

「分かる？本城は何も知らないんだよ？何も分からないまま、そんな態度取られたら傷つくよきっと」

「智子っ」

何も言えない私の代わりに、ずっと黙っていた茜がそう智子を呼んだ。

「和美だって今辛いんだから…」

「辛いから言うの！辛かったら人を傷つけてそのままにしていいわけないでしょ！？」

いつも大人な智子が、珍しく声を荒げて言う。その言葉はグッと胸に突き刺さり、一瞬息が苦しくなった。

…確かに、そうだ。先生は私が先生のことを好きだとは知らない。菅原先輩との会話なんて、もちろん知るはずがない。そんな先生から逃げ出すなんて…先生はどう思っただろう。

「まぁ、確かに…弱ってる時にそれは傷つくかもなぁ」
行儀悪く胡坐をかいて座っていた由実が、ボソリと呟くように口を開いた。
「？」
茜と智子が、首を捻って由実を振り返る。その視線を受けて、由実は頭をかきながら続けた。
「いやさ、今日昼休み中に男子とサッカーしてて怪我したから保健室行ったらさ、ユキサダがいたんだよね」
「何しに？」
「ん？風邪気味だからって薬もらいに来てた」
智子の問いに、由実が答える。
「……」

…そう言えば…あの時の先生は、少しだけ声が掠れていたような気もする。それ以外はいつもと変わらない様子だったから、気に留めなかったけれど。

「謝ってくれれば？」
「えっ？」
智子だけでなく由実まで、急にそんな無謀な提案をしてくる。思い切り驚いて目を瞠り、私は思わず由実を真正面から見つめ返してしまった。
「だってさ、確かユキサダの家ってこの辺じゃなかったっけ」
「そうそう。具体的な場所は知らないけど、私もうちの近くだって

聞いたことある」
　智子も頷いて、由実の調子に合わせている。
「むむむ、無理無理っ。家まで押しかけるなんて…そんな無謀なことはできないよ」
　ただ謝るというだけでも尋常じゃない勇気が必要だというのに、家までなんて迷惑がられそうなことはできない。するとそう言うことも分かっていたのか、智子も由実も「だよね」とあっさり引き下がる。
「まぁ行くのは無理でもさ、次学校行ったら…えっと、月曜？謝った方がいいよ」
「…うん…分かった」
　言葉ではそう言いながらも、なかなか決心がつかないことは明白だった。土日の休みのうちに何とか覚悟を決めようと思い、私はうなだれ気味に頷いた。

＊＊＊＊＊＊

　由実と茜より、智子の家を早く出た。私の家が一番遠いからというのも理由の一つだけれど、由実たちが気を遣ってくれたようでもあった。私に一人で考える時間をくれたのかもしれない。

　駅までの道を、トボトボと歩く。もう辺りはすっかり真っ暗になっていて、歩く人は駅からこちらに向かってくる…つまり私と逆方向へ向かう人がほとんどだった。携帯電話が鳴ったのは、暗い住宅街を歩いていた時だった。着信は母親からのもので、ディスプレイ

に浮かんだ名前に首を捻りながら通話ボタンを押す。
「はい。どうしたの？」
『あ、和美？』
電話の向こうの母の声は、ひどい鼻声だった。

『今日、鼻炎がひどくって……ドラッグストアで薬買ってきてぇ』
元々アレルギー体質の母は、一般の人が悩む花粉症の時期以外でもひどい時がある。それほどひどいなら病院に行くなり市販薬を常備するなりすればいいのに、どこか無頓着なところがあって…。こうして学校帰りにお使いを頼まれることも少なくはない。

了解の意を伝えて通話を終わらせ、私はそのまま駅の方へ向かう。住宅街を抜ける頃に、確か夜遅くまでやっているドラッグストアがあるはずだった。そこへ寄り道することに決めて、携帯電話を鞄へしまう。

「あったあった」
闇の中に光る看板を見つけて、私はその中へと吸い込まれるように入っていった。静かな住宅街の入口に立っているせいか、今の時間にはそれほどお客さんもいないようだ。広い店内に何人かの会社帰りのサラリーマンがいて、すれ違いながら私は鼻炎に効く薬がある場所へ向かった。

「……え」
店内の奥の方、母がいつも使っている薬を見つけてそちらへ向かおうとしたところで…。私は見知った人影を見つけて、大きく目を見開いた。

私の小さな呟きが聞こえたらしく、その人物もこちらをゆっくりと振り返る。
「…先生」
鼻炎薬を置いた隣の、風邪薬を並べたコーナーで、本城先生も私を見て目を瞠った。

「……なんだ、今帰り？」
「……はい」
「不良」
「…うっ」
マスクをした先生が、そう言って小さく笑う。確かに寄り道をしてはいるけれど、「不良」と言われるほど遅くないし…とかなんとか心の中で言い訳しながら、私は先生の手にしたものを目に留めてしまった。
「風邪…ですか？声もひどいですね」
「ん？あぁ、部活の途中からひどくなってきやがった」

午前中はまだ元気そうに見えたから、本当に急になんだろう。労わるような目で先生を見つめながらも、私は学校でのことを思い出していた。

先生は、驚くほど普通だった。

まるで、私が泣いていたことも、先生から逃げ出したこともなかったかのように…。

でも、謝らなきゃ。

智子たちとした約束のことを思い出して、私は鼻炎薬を取りながら「…先生」と小さく呼びかけた。

「ん？」

何種類かの風邪薬を見比べながら、先生はこちらを見ないまま先を促す。その横顔を見上げて、私の方は目を逸らしてはいけない気がした。体の横につけていた拳を、勇気を振り絞るようにギュッと握る。

「さっき…学校で、すみませんでした」

言うと、まさか謝られるとは思っていなかったらしい先生が、驚いた顔でこちらを振り返った。

「ちょっと、色々あって不安定になってて…泣いてしまいました」

「……」

言葉を濁しながらも何とかそう言うと、先生は少し笑ったみたいだった。マスクで口元は見えなかったけれど…目が、そんな優しい光を灯していたから。

「まぁ、お前ら高校生も色々大変だもんな」

進路とかテストとか、と付けたして、先生は呟くように言う。

「相談したくなったら来なさい」

「…はい」

いつもとは似つかわしくない教師らしいセリフで、先生はそんなことを口にした。

…教師、なんだなぁと思わされる。

手を伸ばしても届かない存在なんだと、現実を突きつけられる気分だ。

「先生、風邪薬だったらこっちがおススメですよ」
再び沈みそうになる考えを払拭するかのように、私は改めて明るくそう言った。先生が迷っていたうちの一つを指差して、私は先生の方を振り返る。返事がすぐに返ってこないことを訝しげに振り向くと、その瞬間に私は大きく目を見開いた。

「先生！」
思わず、大声を上げてしまう。ガクン、と崩れるように力が抜け落ちた先生は、その場に膝をついた。その異変に駆け寄って支えようとして、私は驚いてしまう。

「あつ…」
多分、相当熱がある。触っただけでそれが分かるほどだった。学校からここまでくる間、そしてさっきまでの会話の間…ずっと無理をしていたんだろうか。

「…大丈夫だ」
熱のせいで一瞬眩暈がしたからだったのか、先生はすぐに立ち上がろうとする。気を失ったわけではないらしいことにホッとして、私はその大きな身体を支えようとした。
「先生、私家まで送りますから…タクシーで帰りましょう」
多分先生は歩くのも辛いだろうし、私だって男の人一人かついで帰れるわけもない。先生の家もこの辺だと言っていたから、運転手さんには悪いけれどワンメーターで帰れるだろう。

特に反対にも合わなかったので、私は表通りでちょうど走ってきたタクシーを停めた。

＊＊＊＊＊＊

「……」

タクシーの運転手さんに住所を告げ、先生はすぐに黙りこんでしまった。もう話す気力さえないのかもしれない。意識がないわけではないけれど、熱で混濁しているのかもしれなかった。

「お嬢ちゃん、おじさんが運んであげようか」

親切な運転手さんが、目的地に着いてから辛そうな先生を見て同情したのかそう申し出てくれた。先生の部屋はアパートの2階らしく、確かに私が階段を連れて上がるのは無理がある。ありがたいお言葉に甘えて、先生が言う部屋まで運転手さんが手を貸してくれた。

何とか寝室のベッドに先生を寝かせてから、スーツの上着とネクタイだけをはずしてあげる。本当は熱があるなら着替えさせた方がいいのだろうけれど、恋する女子高生にこれ以上は無理というもので…。先生の体に布団をかけ、買ってきた冷えピタを貼り薬を飲ませ、ようやく私は一息つく。

それからようやく、我に返った。夢中だったとはいえ、先生の部屋に入ってしまっていることに…。

「……」

グルリと見渡せば、先生の生活の匂いがする。２ＤＫのアパートは一人暮らしには贅沢な気がしたけれど、中も整然と綺麗に片付けられていた。男の人の割に意外に小まめなんだなぁ、と感心させられて、ふふ、と笑みが零れる。

「……？」

それから、はたと気づいた。

思い出したのは、昨日の菅原先輩の言葉だ。

『男の人らしいっていうか…部屋が超汚くてさぁ』

…どこが……？いや、それ以前に…。

『ユッキーさぁ、高級マンションに住んでるんだけど』

入ってきたのは明らかに築何年も経っている、どこにでもありそうなアパートだった。

『甘い物も超嫌い』

シンプルなキッチンの隅に、明らかに甘そうなチョコレートなんかが置いてある。

そして何より、毎週末女の人が通ってきているとは思えない部屋だ。

しばらくの間茫然としていた私も、やがてそれが何を意味するのかを認識する。

「…先生…」

一瞬でも、あの時の先生の言葉は嘘だったのかと疑った自分が恥ずかしかった。それが菅原先輩の作戦だったにしても、ハマリかけた自分が情けない。

「先生、ごめんね…」

熱のせいで呼吸の荒い先生の寝顔に、私はポツリと呟きを漏らした。

6　side：Yukisada

白い天井が、見慣れた高さにあった。ゆっくりと開いた瞳に初めに映ったのがそれで、そしてやがて視界にはコンポやら仕事用のデスクといったものが入ってくる。覚醒しきらない頭でそれを捉え、漠然とそこが自分の部屋であることを認識した。

ただそれ以上はまだはっきりせず、今が朝なのかどうかも判然としない。

…そうだ、確か金曜日の朝から喉の調子が良くなくて…。

部活中に悪化してきたそれに伴い、熱も出てきた自覚があった。

いつもより少し早めに部活を切り上げて、残った急を要する仕事だけを片付けて。

…それから……。

……それから？

首を捻りながらセミダブルのベッドを抜け出すと、服は上着とネクタイを外しただけの格好だった。窮屈なYシャツのボタンを外し、

汗で湿ったそれを乱暴に脱ぎ捨てる。風邪を引いていたのが嘘のように、体調はもうすっきりしてしまっていた。

カーテンの隙間から漏れる光は、どう考えても夜ではない。勢い良くそれを左右に引くと、どうも朝でもないようだった。高く昇った太陽が、こちらを照らす。それを眩しそうに、目を細めて見上げてから、俺はようやく室内のデジタル時計に目を向けた。

午前１１時５０分。…どうやら帰ってきてから半日以上、眠り続けていたらしい。それだけ眠れば体調もすっきりするわけだ。我ながら妙に感心しながら、クローゼットの方へ向かおうと足を方向転換させた。

「……」

その時に、視界にベッドが入ったせいでようやく気づいた。さっきまで使っていたはずの枕が、枕でなかったことに。冷たすぎないようにタオルで巻いて調節された、アイスノンだった。

「……？」

うちの冷蔵庫に、そんなものが入っていただろうか？…いや、仮に入っていたとしても、いくら熱で朦朧としていてもそれを出そうと自分の気が回るとは到底思えなかった。

小首を傾げて、俺はクローゼットから適当なＴシャツとジーパンを取り出す。手早く着替えて脱いだ服を洗濯機に放り込もうと部屋

を出たところで……思わず、俺は足を止めた。

「…なんだ…？」

驚いて目を見開いて、俺は半ば茫然と立ち尽くしてしまう。部屋を出たダイニングのテーブルに、突っ伏して寝ている姿があったからだ。授業中によく生徒がやるように、自分の腕を枕にして顔を横に向けて静かに寝入っている。

「…白石…？」

小さく思わず呼びかけてしまいそうになってから、俺はようやく思い出した。

そうだ、昨日…薬を買おうと帰りに寄ったドラッグストアで、白石に会った。学校で泣いてしまったことや俺から逃げてしまったことを謝られた記憶もある。その直後、自分が熱で立っていられなくなってタクシーに乗ったことも。

テーブルの上に置いてある薬やら冷えピタやらに気づいて、恐らく白石がずっと看病してくれていたらしいことに気づいた。

「……」

何とも形容しがたい感情が胸に沸きあがりそうになり、俺はそれを必死で抑えて部屋へ戻った。洗ってしまいこんであった毛布をクローゼットから取り出し、それを白石の肩にかけてやる。

「…ん……」

小さな声を出して、毛布の下で白石が少しだけ身じろぎした。だけどそのまま起きてしまうこともなく、向きを変えてまた静かな寝

息を立てて眠る。起こさずにすんだことに少しだけ安堵の息を漏らして、俺はその寝顔を見下ろした。透き通るくらいに白い肌に、艶やかな黒髪が映えるようにかかっている。その隙間から覗く瞼が、安心しきったように閉じていた。恐らく、夜通し看病して疲れているんだろう。

言いようのない申し訳なさが込み上げそうだったけれど、それよりもさっきからごまかしきれないほど己の胸中を満たしてしまった感情があった。

「……ありがとな」

流れるような髪に撫でるように一瞬だけ触れて、俺は小さく呟いた。

＊＊＊＊＊＊

熱いシャワーを頭から浴びて汗を流しても、払拭しきれない想いがあることは明白だった。着替えなおして浴室から出ても、白石はまだ変わらない態勢のままそこで眠っていた。音をたてないようにキッチンでミネラルウォーターのボトルを取り、テーブルの上の薬をそれで流し込む。空腹の時に薬を飲むなと、起きていれば怒られそうな気もした。

部屋へ戻り、何となく手が手近のコンポへ伸びる。いつもよりも音量を絞り、もう何年も聴いていなかったＣＤをクローゼットの奥

から取り出した。それをコンポに挿しこみ、プレイボタンを押すとやがて静かなピアノの音が流れ始める。その柔らかい音に乗って、渋めの男の声が聴こえてきた頃に俺はデスクの椅子に腰掛けた。それから、首ごと顔をあお向ける。

耳を澄まして聴くその男の歌う歌詞は、甘い以外の何ものでもなかった。雨が降ろうが晴れようが、何があってもただ一人の女を愛することを誓った歌だ。

『先輩は、今そういう風に思える人はいないんですか?』

不意に、拓巳のそんな一言が脳裏をよぎった。

過去の恋愛は、思い出したいものなんて何一つなかった。だから正直、拓巳がこの曲が好きだと言った時は理解できなかったほどだ。この歌詞に自分の感情を重ね合わせてみるなんて、無駄なことでしかなかった。

だけど、今は……。

かつて拓巳が「色気がある」と評した男性ジャズシンガーの声を聴きながら、俺は後ろを振り返る。子守唄がわりにでもなっているのか、全く起きる気配のない白石が変わらずテーブルで眠っていた。

その寝顔を見ただけで、今はこの歌詞の意味も少しは理解できる気がした。

そう、全ては無駄だったんだ。

白石が貴弘の話ばかりするのにイラついた理由に自分で気づかないフリをしたこと。そして、白石が都築を好きかもしれないことに対する負の感情を押し込めたことも。泣いた彼女を慰めるのが、自分じゃなくて都築であった現実を見ないようにしたことも。

気づかないフリをしていたって、いつか思い知らされる時が来るんだから。

どんなに否定したって、目の前にいて沸き上がる愛しさだけは自分でもさすがに知らないフリはできない。

「……まいったな」

ようやく気づいた自分の感情に、俺は吐息まじりに項垂れた。

7　side：Kazumi

夢を、見た。

覚醒していく頭ではもう内容ははっきりと思い出せないけれど、どこか幸せな夢だった気がする。…たとえば、先生にお礼を言われるような。「ありがとう」と、低い声で囁いて頭を撫でられたような気がした。

「おはよう」

目覚めていく中で、うつろな顔を上げるとそんな声がかけられた。

「！」

夢ではないその声に、私は一気に現実に引き戻される。

「お、おお、おはようございますっ」

慌てて上体を起こすと、私の後ろで毛布がバサッと音をたてて落ちた。

どうやら、先生がかけてくれていたみたいだ。看病していたはずがすっかり眠ってしまっていた現実を認識して、私は顔が赤くなるのを感じた。

「すみません…っ、先生も大分落ち着いてきたんで始発で帰ろうと思ってたんですけど…っ」

今、何時だろう。最後に記憶にあるのは、朝の5時前だ。夜通し辛そうだった先生がその頃には呼吸も楽そうになってきていたので、6時前の始発で帰るつもりだった。

私の探しているものが分かったのか、先生はリビングにしている部屋の壁を指差した。そこに、白い掛け時計がある。
「昼の1時」
「……すみません」
どれだけ寝れば気がすむのだろう。自分で思わずツッコミを入れてしまったけれど、先生はそれほど気にしていないみたいだった。キッチンに置いてあったコーヒーメーカーから、保温してあったらしいコーヒーを淹れてくれる。

お礼を言いながら差し出されたカップを受け取ると、「こちらこそ」と先生が呟くように言った。
「？」
首を傾げながら見上げると、先生は自分もマグカップを手にしながら続ける。
「看病してくれたんだろ？悪かったな、面倒かけちまって」
「え、いえ、それは全然…」
私がしたことなんて、大したことでもなかった。冷えピタでは間に合わずに冷凍庫の奥から発掘してきたアイスノンを枕代わりにし、冷たく絞ったタオルをおでこにのせていたくらいだ。

受け取ったカップからじんわりとコーヒーの温かさが伝わってきて、私はそれに浸るように少し力を込める。それっきりまた黙り込んでしまった先生は、昨日の状態が嘘のように回復しているように見えた。私から少し離れた窓辺近くにもたれかかって、天気の良い外を少し眩しそうに眺めている。すっかり元気そうな先生に少し安堵の息を漏らしてから、自分のとんでもない状況を改めて再認識する。

昨日の先生の状態からは仕方ないとはいえ、男の人の家に上がりこんでしまったこと。早めに帰ろうと思っていたのに結局眠って長

居をしてしまい、逆に迷惑をかけてしまったんじゃないかってこと。

自己嫌悪に苛まれそうになりながらも、私はチラリと目線を上げる。再び目に捉えた先生は、いつもとは違う黒縁の眼鏡をかけていた。そう言えば、前にいつもはコンタクトだと言っていたっけ…。学校では見られないその姿に、それだけで胸が高鳴ってしまう。

「白石、腹減っただろ」

ぼんやりと見惚れていると、不意に先生がそんなことを言いながらこちらを振り返った。

「えっ、あ、は、はいっ」

見つめていたことがバレたんじゃないかと瞬時に不安になって、私は不必要なほど慌ててそんな返事を返す。それに一瞬目を丸くした先生は、私の大げさなリアクションに「…ふは」と吹き出すように笑った。

「よし、なんか食いに行くか」

続けた先生は、壁から背を離して悠然と歩きだそうとする。

「えっ、先生、まだ寝てた方が…」

確かに元気そうではあるけれど、昨日あれだけの熱があったんだから…。ふと心配になってそう言ったけれど、先生はこちらを振り返りながらわずかに小首を傾げてみせた。

「寝すぎで余計にだるいんだ」

「……そうですか」

それなら、仕方ない…のだろうか。言葉通り起きている方が元気そうな先生の横顔を見上げて、私は自分を納得させるように心の中でそう呟いた。

病み上がりの先生には申し訳ないけれど、まだもう少し一緒にい

られるという事実に嬉しくなってしまう。高鳴りそうな胸を抑えつつ、私は急いで椅子から立ち上がった。

＊＊＊＊＊＊

先生の家から一番近いのは土曜の昼ピークを越したファミレスだった。智子の家からもごく近くなので、見つかりでもしたら明日あたり質問攻めにされそうだ。そんな緊張感も相まって、私の胸は悲鳴を上げそうなくらいにドキドキしっぱなしだった。

大体、先生とファミレスというのがイメージで結びつかない。恐らく彼女とこんなところにはあまり来ないんじゃないかという気がしたから、私のためにここを選んだのかもしれない。そう思うと少し複雑な心境ではあったけれど、私はそれを振り切るように小さく頭を振ってごまかす。向かいに座った先生は、そんなこちらの様子に気づく素振りもなくメニューを開いていた。

相変わらず無口な先生ととぎれながらの会話を少しずつしているうちに、頼んだ品物はすぐにアルバイトのウェイトレスさんによって運ばれてきた。トマトソース系やミートソースは好きな人の前で上手に食べるのが困難なので、私はあえてクリームソース系のパスタを選択した。この日ばかりは自分のチョイスに間違いはないと思う。

先生の方は、ハーフサイズのクラブハウスサンドとコーヒーとい

うなんだかイメージにそぐわないメニューだった。どちらかというと、なっちゃん辺りが気取って食べそうな感じだ。それが分かったからか、先生はブラックコーヒーを一口飲んでから「昔からだ」と呟くように言った。

「え？」

聞き返すと、カップをソーサーに戻しながら先生が続ける。

「お前さ、具合悪くて食欲ない時でも『これなら食べられる』ってものあるだろ？」

「あ、はい…おかゆとかですかね」

「そうそう。でも昔から粥が苦手で、病人食みたいなのが嫌いなんだ。食欲なくても、サンドイッチなら食えるんだよな、これが」

続いた先生の言葉は、どこか我儘な子どものようで私は思わず笑ってしまった。

元気そうには見えるけれど、やはりまだ食欲はないということらしい。だからハーフサイズにしたんだろう。あの量じゃ茜のように小食の女の子じゃないと満腹にはならないかもしれない。

「大丈夫ですか？」

尋ねると、「え？」と聞き返される。

「食欲、ないんですよね」

首を捻りながら聞くと、先生はサンドを手にしながら「…あぁ」と小さく呟いた。

「でもどうせ薬飲まなきゃなんねぇしな」

私をチラリと見やって、先生は眼鏡ごしに少し目を細めてみせる。あのまま家を出ようとした先生の後ろで、私が慌てて薬を鞄に入れてきたのに気づいていたらしい。首を竦めながら、私は鞄からそれを取り出した。先生のグラスの横に置くと、あちらも小さく肩を竦

める。
「薬嫌いなんだけどな、ホントは」
「そういうこと言ってるとぶり返しますよ」
たしなめるように言うと、先生は説教された生徒みたいだと自分で思ったのか、苦笑いを返してきた。

気のせいかもしれないけれど、今日の先生はいつもよりどこか話しやすい気がした。学校じゃないから、だろうか。無口で壁のようなものを感じさせる普段とは、どこか違う気がして…。それは先生が本調子じゃないからかもしれなかったけれど。

結局サンドイッチを半分で断念したらしい先生が、私が置いた薬に手を伸ばす。グラスの水でそれを飲み干して、小さく息をついた。それから、少し不自然に何かに気がついたかのように不意に動きを止める。
「…？」
パスタを口に運びながらその一連の動作を見ていた私は、小さく首を捻った。だけどその後で、すぐに気がつく。先生の動作が止まった瞬間、店内のＢＧＭが変わったんだということに。

ファミレスなのに高級感を出すだめなのか、その店はずっとジャズを流し続けていた。そのＢＧＭの曲が変わった途端、先生がどこか遠い目をする。わずかなその一瞬を、私は見逃さなかった。
「先生の部屋でも流れてた曲ですよね」

紅茶を飲みながら、私は思い出しつつそう尋ねる。起きた時、先生の寝室の方のコンポから控えめな音で流れていた曲と同じだった。アレンジは少し違うけれど、何となく分かる。先生の部屋ではその曲がリピートになっていて、何度もかかっていたから…。

「ジャズ分かるのか」

少し驚いたように、先生は目を見開いた。確かに、一般的に多くの女子高生が興味を持つジャンルではない。

「詳しくはないんですけど、うちは両親が好きなので結構聴かされてきましたから」

答えると、「ふぅん」と先生は机に片方の腕で頬杖をつきながら応じた。

「いい曲ですよね、曲名はなんて言うんですか?」

尋ねると、ニッと小さく笑った先生が、「宿題」と容赦のない一言を口にする。えぇーっと抗議したい気分だったけれど、先生の表情からそれ以上食い下がっても教えてもらえなさそうな予感がした。もしかしたら、先生が一瞬動作を止めたくらいだから何か濃い意味合いのある歌詞なのかもしれない。帰ってから調べることにして、私は紅茶のカップをテーブルに戻した。

「ところでお前さ」

話題を変えようと、先生が改めて私に呼びかける。

「今日、なんか予定なかったのか?」

尋ねられて、今度は私が首を傾げる番だった。

「いえ、特には何も…」

用事がない、というのも寂しい女子高生だと思われるだろうか。内心でチラリとそう思ったけれど、嘘を言う必要もなかったので素直にそう答えた。

「そうか」
頬杖をついた体勢のまま、先生は窓の外を眺めて呟く。
「じゃあ、どっか行くか」
「え！？」
続いた先生の言葉に、私は思い切り驚いて大きな声を上げてしまった。

どこか…って、どこだろう！？そもそも、先生がそんなことを言い出すなんて信じられない気分だった。だってそれじゃまるで……。

「看病してもらった礼。どこでもいいぜ」

続いた先生の言葉に、私は内心で続けかけた言葉を勢いよく飲み込んだ。なんだ、と変な焦りから解放されて今度は少しがっかりした気分になる。『礼』……それはそうだろう、それ以外に意味なんてあるはずがない。

「…つっても、お前昨日も家に帰ってないんだからそういうわけにはいかないか」
咄嗟に答えが出てこなかった私を見て、先生はどう捉えたのか自己完結するようにそう言った。
「え、いえ！それは全然問題ないんですが…！」
家には、昨日の夜の時点で智子の家に泊まることになったと連絡を入れてある。母に頼まれていた鼻炎薬も、ちょうど帰宅途中だったらしい弟に頼んで買って帰ってもらった。元よりうちは門限やらには緩い方で、今日きちんと９時か１０時に帰れば問題はないだろう。

「それより…先生はやっぱり寝てた方が…」
「別に、体調はもう大丈夫だけどな」
言いかけた先生が、そこで一度言葉を切って私を見る。
「まぁ、嫌なら別にいい」
「えっ、嫌なわけないじゃないですかっ」
続いた先生の言葉に、私は大慌てで否定した。大きな声を上げて首を振った私を見て、先生は少しだけ唇の端を持ち上げて笑う。

……やられた。

赤くなって小さくなった私の前で、先生は声を押し殺して笑っていた。

「で、どこがいい？」
ひとしきり笑いを堪えた後、先生は改めてそう尋ねてくる。『どこ』…がいいんだろう、こういう場合。先生が想定している範囲が想像できなくて、私は小さく首をかしげた。

どこでもいいと言ったって、まさか先生が遊園地に行ってくれるとも思えない。動物園だってなんとなくイメージじゃないし、映画なんてカップルみたいなこと考えてもいないだろう。うーん…と散々悩んだけれど答えが出なくて、私は再び顔を上げる。先生を正面から見据えて、既に冷え始めた紅茶のカップに手を伸ばした。

「先生、休みの日によく行くところとかないんですか？」
「…え？」
「先生のおすすめの場所に行ってみたいなぁ、と思って」

我ながら名案だと思い、そう提案してみる。先生のプライベートに立ち入るようで気が引ける部分もあったけれど、知ってみたい気持ちも当たり前のようにあったから。

「……」

私にそう言われた先生は、少しの間黙り込んでしまった。頬杖をついたまましばらく思案し、やがて再びこちらを振り向く。
「最近行ってねぇけど…行ってみるか」
「どこですか？」
「……着いてのお楽しみ」
言って、先生は胸ポケットから携帯電話を取り出した。「？」と眉を持ち上げてそれを眺めていると、「色々と準備がいるからな」と先生が呟く。そしてそれからどこかへ電話をかけ、携帯を耳にあてた。

「あぁ、俺。お前今からちょっと出てこれるか？」
学校で聞くよりも少しだけ柔らかい声音になり、先生は向こう側にいる誰かと話をしている。その声のトーンに、私は一瞬ドキリとした。それが聞いたことのない響きだったことと、電話から漏れ聴こえてくる向こうの人の声が女の人のものだったからだ。

「ちょっと頼みたいことがあるんだけど」
瞬時に、頭が白くなっていくのを感じる。先生が電話の相手と話している会話も、この時には聞こえなくなるくらいに…。

＊＊＊＊＊＊

電話を終えた先生とファミレスを出て、一旦先生の家に戻る。すぐには出かけずまだ準備があるらしく、「もうちょっと待っててくれ」と言われた。大人しくソファで待っていると、一度だけ先生が私の顔を覗きこむ。

「……どうかしたか？」

聞かれて、さっきの電話が思ったよりショックだったことに気づいたけれど私は大きく首を振って笑って見せた。

…いちいち、気にしてなんていられない。先生みたいな大人な人には、私の想像できない色んなことがあるに決まっているんだから。菅原先輩が彼女じゃなくたって、先生には恋人がいるかもしれない。女の人が頻繁に来ているような部屋には見えなかったけれど、それも家にはなかなか招き入れない事情があるのかもしれないし…。

そう、そう言えば、恋人がいるかどうか確認したことがなかった。私が聞いたのは菅原先輩と付き合っているのかということであって、彼女がいるのかではなかったから…。たとえそういう事実をこの後知ることになったとしても、覚悟しておこうと決めて私は先生にさっきまでと同じように振舞うことにした。

やがてアパートのインターホンが鳴らされたのは、４，５０分してからだった。それまで、私が質問して先生が答える形で雑談まじ

りに部活やら化学の授業やらの話をしていた。チャイムの音で立ち上がった先生が、そんな会話を一時中断して玄関の方へと向かう。

その後ろ姿を見つめながら、私はバレないように大きく深呼吸をした。…さっき、覚悟したとおりだ。何があっても…誰に会わされようと、ショックは受けないと決めた。

「お邪魔しまーす」

しばらくして先生より前を歩いて部屋へ入ってきたのは、予想通り女の人だった。２０代半ば…くらいだと思う。ロングの髪をキレイにアップにした、かわいくも美人でもある魅力的な人だった。メイクだって濃すぎないのに映える感じがしたし、なんというか…雰囲気からして好感を持ってしまうような人。

部屋の隅に座っていた私を捉えて、彼女はニコリと笑った。

「はじめまして」

「あ、こちらこそ、はじめまして…っ」

つられるようにペコリと頭を下げる。そして慌てて名乗ると、後ろからやってきた先生が「拓巳っていうんだ、こいつ。悪いな、すぐ連絡取れるのがこいつしかいなくて」と私に紹介してくれた。

「理沙って呼んでね、和美ちゃん」

笑って言って、理沙さん…は、私の近くに持ってきた大きな鞄を置く。

「さて、はじめましょうか」

ニッコリ笑った理沙さんの言葉の意味が分からずに、私は目を丸くした。後ろに立つ先生と交互に見比べたけれど、先生は何食わぬ顔でそこに立っていただけだった。

「…あの～、理沙さん…」

数十分後、私は困り果てた声で彼女を呼んだ。そういう反応は無視することにしているのか、理沙さんは聞こえないフリをしながらも私が呼んだ方へ近寄ってくる。

なぜか私は、理沙さんに指示されるままに先生のアパートの洗面所で手渡された服を着せられていた。

「着終わった？」

聞きながら洗面所に顔を出した理沙さんは、私を眺めて「あ、かわいいかわいい」と満足そうに笑う。着替えるどころか、理沙さんの命令でシャワーまで借りたのだから私としては恐縮しまくりだった。

『夜中ずっと看病させたのにシャワーも貸してあげてなかったんですか？先輩最低っ』

来てすぐに事情を聞かされた理沙さんは、先生に対してそう声を荒げていた。夏でもないからそれほど汗もかいていないし、朝帰る予定だったから私はそれほど気にしてはいなかったのだけれど、確かにこれからまだ出かけるとなると借りられた方がありがたい。だけど、それも先生の家の…となると私としては緊張感が倍以上に違ってくる。

「どうせおっさんくさいシャンプーしかないと思って持ってきたの」と言いながら理沙さんがくれたシャンプーとリンスを使わせて

もらい、確かにありがたかった。
だけど、だ。

「理沙さん、これはちょっと…」
渡された服というのが、高校生の私が着るにはもの凄く露出度の高いベアワンピだった。裾はバルーンになっていてかわいいのだけれど、かなり丈が短い。
「露出高いって？大丈夫、ほら、ロングカーデも持ってきたから」
…そういう問題なんだろうか。長めのカーディガンを広げて見せながら、理沙さんは首を小さく傾けながらかわいらしく「どう？」と聞いてくる。
「ロングブーツもあるから大丈夫よ」
確かにコーディネートもかわいいけれど、着慣れないせいか緊張してしまう。いつもはどちらかというと肌は見せない服を着ることの方が多いからだ。

「着替え終わったらこっち来て」
手招きされて洗面所の外へ促されたけれど、そこに先生がいると思うとなかなか勇気が出てこない。短すぎるワンピースの裾を一生懸命伸ばしたい心境にかられながらまごついていると、理沙さんはそこで気がついたように「あぁ」と笑ってみせた。
「先輩なら、いないから大丈夫よ」
「えっ？いない？」
「うん、女の子が着替えるんだから出てけって追い出したから」
ウィンクして、理沙さんはそう言う。一瞬目を丸くした後、私もつられるように笑ってしまった。

さっきからも気になっていたのだけれど、もしかしたら理沙さんは先生と、私が気にしていたような関係ではないんじゃないだろうか。敬語だったことと呼び方が『先輩』だったから、ふとそう思ってしまう。

「大学時代のね、後輩なのよ私」

まさか私の考えていることが透けて読み取れたんだろうか。タイミングよく、理沙さんはそう言った。

驚いて目を見開くと、理沙さんはまた微かに笑う。

「和美ちゃんにさっき初めて会った時の表情で、誤解されたんじゃないかと思って気になってたの」

「え、誤解…？」

「私のこと、先輩の彼女か何かだと勘違いしなかった？」

「！……」

「やっぱり、図星？」

少しからかうような表情をして見せてから、理沙さんは苦笑いを浮かべた。

「それはないから、安心して」

勧められるままダイニングにある椅子に座ると、理沙さんはドライヤーを取り出してくる。髪を乾かしてもらいながら、私はされるがままに「…はい」と小さく頷くしかなかった。

…ということは、バレてるんだろう。理沙さんには、私が先生を好きだということが。

そう思うと恥ずかしかったけれど、口止めしたり言い訳したりす

るほうが何だか自分が痛々しい気がしたのでやめておいた。

理沙さんは、私の髪をセットしてメイクまでしてくれながら色んな話をしてくれた。先生とは教育学部時代に知り合ったこと、そして理沙さん自身も隣の市で高校教師をしていること。年の離れた弟を溺愛しているのだけれど、最近弟の方が姉に素っ気無くなってきて拗ねていることなんかも。そのどれもが話上手なせいか楽しくて、私はずっと笑ってそれを聞いていた。

「さて、完成」

私の顔を覗きこんで、理沙さんは満足そうに笑った。普段あまりメイクをして学校に行くことがない私は、これほど丁寧にしてもらったのは七五三以来じゃないだろうか。着慣れない服と髪型のせいで気分も普段と違うけれど、それは決して嫌なものでもなかった。

「先輩もびっくりするわよー、きっと。行ってらっしゃい、楽しんで来てね」

メイク道具やらを片付けながら、理沙さんはそう言う。

「え、理沙さんも一緒に行くんじゃないんですか？」

目を瞠って尋ねると、理沙さんはこちらを振り返って同じように驚いた顔をしていた。それから、プッと吹き出す。

「私は先輩に『服貸して』って頼まれただけだから。ま、制服じゃ行けないところだしね」

「え……どこに行くか理沙さん知ってるんですか？」

「うん、知ってるけど…和美ちゃんは着いてからのお楽しみにしたほうがいいかもね」

持ってきたバッグを閉めて、理沙さんは小さなかわいいバッグを私に手渡す。
「これもどうぞ」
全身一式借りてしまうことになって、私は申し訳なさから「すみません」と頭を下げた。首を振って応じた理沙さんに促されて、私も揃って玄関の方へと向かう。

先生は、アパートの下の駐車場のところで待ってくれているらしい。借りたロングブーツを履いて、私は高鳴る胸を押さえながら玄関のドアを開いた。

「先輩、お待たせー」
借りていたらしい鍵で部屋のドアを閉めながら、理沙さんは二階から下にいる先生に大きく手を振った。その声に先生がこちらを振り返ったのが分かったので、私はドキリとしてしまう。見られたくないような…でも見てほしいような、複雑な感情が渦巻いた。気恥ずかしさから顔を背けたけれど、先生は「おう」と短く返事をしただけだった。

「へぇ、化けるなぁ」
私が階段を降り始めた次の瞬間に、そんな失礼なコメントが先生の後ろから聞こえてきた。眉を寄せて顔を上げると、無表情の先生の向こう側にもう一つの見知った顔。
「なっちゃん!?」

大声を上げて驚くと、そこにいたなっちゃんはニヤリと笑って見せた。

「なに、貴弘。あんた学校で『なっちゃん』なんて呼ばれてんの？」

後ろから私に追いついてきた理沙さんが、なっちゃんに笑いながらそう声をかける。「かわいくて似合わない」と続けた理沙さんに、なっちゃんも「うるせぇ」と笑っていた。

理沙さんは、なっちゃんとも知り合いなんだろうか…と首を捻ったけれど、そう言えばなっちゃんと本城先生も大学時代からの親友なんだから当然かもしれない。理沙さんにとっては、なっちゃんも先生も大学時代の先輩なんだろう。

「え、でも何でなっちゃんがここに？」

尋ねると、なっちゃんは自分の車の運転席側に移動しながら理沙さんを顎で指し示す。

「そこのコワイお姉さんに頼まれたんだよ。イカツイお兄さんに呼び出されたから送ってけってな」

「誰がよ！」

「誰がだ」

理沙さんと先生のツッコミが同時になっちゃんに対して発せられた。思わず私は声を上げて笑ってしまう。肩を竦めてそのまま運転席に乗り込んだなっちゃんに続くように、理沙さんもそちらに行こうとした。

だけど、

「あ、和美ちゃん」

私を追い抜かそうとした瞬間に、理沙さんがふと足を止める。

「さっき、これを一番に見せれば良かった。簡単に誤解とけたのにね」

言いながら、理沙さんは私の目の前で左手を掲げて見せた。先生となっちゃんには聞こえないくらいの、小さな声で。見せられたその左手には、薬指にシルバーのシンプルな指輪が光っていた。

「結婚してるの、私。貴弘と」

「…えぇぇっ！？」

あまりの衝撃の告白に、私は目をこれ以上ないくらい大きく見開く。そんな驚いた私を取り残して、理沙さんは「じゃあね」とおかしそうに笑いながら行ってしまった。２人を乗せた車が走り出してからも、驚きのあまり茫然と取り残されてしまう。

「白石？行くぞ」

本城先生に声をかけてもらうまで、私は自分を失ったままだった。

絶対、わざとだと思う。理沙さんが、最後まで言わなかったのは……。

でもそのおかげで、妙な緊張は吹き飛んでしまっていた。今なら先生の顔も直視できる気がする。

促されるままに先生の車の助手席に乗りながら、私は心の中で理沙さんに感謝した。

8　side：Yukisada

「この前言ってた先輩の『イライラ』の原因って…和美ちゃん？」
白石を浴室へ追いやった直後、ニヤニヤした笑みを浮かべながら拓巳がそう尋ねてきた。
「……」
この時までずっと吸っていなかった煙草に火を点けながら、俺は「…まぁな」と小さく答える。長年の付き合いで隠してもごまかしても無駄だと知っているからだ。
「…ちょっと先輩、私と2人きりになった瞬間に煙草吸うってどうなんですか。私に失礼でしょ」
「……はぁ？」
「だって先輩、昔から好きな女の子とか付き合ってる子の前ではあんまり煙草吸わないですもん」
「……被害妄想だろ。気にしすぎだ」
答えて、俺はふーっと息を吐き出した。
「でも先輩、その癖、和美ちゃんの前では辞めた方がいいですよ」
「…？」
「だって先輩、どうせ学校でもスパスパ吸ってるんでしょ？急に和美ちゃんの前でだけ吸わなくなったら変だもの」
「……ご忠告どうも」
壁にもたれかかりながら、俺は拓巳の横に並びながら流すようにそう応じた。

「…と、いうことはー」
俺の隣でわざとらしく人差し指を立てながら、拓巳は探偵さながらのようなポーズを取る。横目で俺をチラリと見てから、またあの嫌なニヤッとした笑いを口元に浮かべた。

「先輩、認めたんですねー。彼女のこと好きだって」
「……」
……しまった、と思ったけれど、敏い拓巳にはやはりごまかしたって無駄だった。
「でも噂通りすっごくキレイな子ですね、和美ちゃん。びっくりしちゃった」
美人は美人なのだろうけれど、俺は別にそこで好きになったわけじゃない。だから、「そうか？」と受け流すように短く返しただけだった。

「美人ですよー。先輩の学校の生徒ってカワイイ子多いですねぇ」
「…って、他に誰か知ってんのか？」
「愛海ちゃん」
「…あぁ」
拓巳の弟の彼女である女子生徒の名前に、俺は小さく相槌を打つ。
「あと、ハルカちゃん」
「…夏川？」
眉間に皺を寄せて、俺は尋ね返した。

「会ったことあんのか？」
「今日のお昼頃、初めて会いました」
「ふぅん？」
「街中で転んで、彼女にアイスコーヒーぶちまけちゃって」
「……何やってんだ、お前」
えへへ、と笑う拓巳に、俺は呆れたようにそう言う。

「迷惑かけた相手が貴弘のクラスの生徒で助かりました。しかもすっごくイイ子だったし」
「そうか」
短く応じて、俺は小さく頷いた。

目を細めて煙草を吸い、「そういえば」と改めて隣を横目で見やる。
「その貴弘はどうした？ここまで来てんだろ？」
「下で車の中で待ってるって。女の子が着替えたりメイクしたりするわけですからねー」
そこでようやく、拓巳は手にしていた携帯電話をパカッと開いた。どうやら電話やメールをするわけではなく、時間を確認しただけのようだ。

「じゃあ、先輩もそろそろ出て行ってもらえます？着替えた和美ちゃんが出てきにくいだろうし」
「ってお前、とんでもない服持って来たんじゃねぇだろうな」
「そんな、女子高生にとんでもないもの着せるわけないじゃないですか」
しらっと拓巳は答えたが、それがどこかうさんくさい気がした。肩を竦めて、俺は煙草と共に携帯灰皿を手に壁から身を起こす。
「用意できたら降りてこいよ」
鍵を渡して、一足先に玄関から外に出た。

もうすぐ夕方になるからか、日が少しずつ傾き始めていた。不必要なほど明るいオレンジ色をたたえるそれに、俺は眩しそうに目を

細めた。

慣れた足取りでアパートの階段を下りると、俺の車の隣に一台グレーの車が停まっている。見覚えのあるその車の中には、運転席でシートを倒して眠っている貴弘の姿があった。

「……」

窓ガラスをコンコンと軽く叩くと、本当に眠っていたのか目を閉じていただけなのかはわからないが、貴弘がゆっくりと目を開いた。外に俺の姿を捉えて、シートごと身体を起こす。

「よう」

ドアをガチャっと開けて、地面に降り立った。

「使ってくれるじゃねぇか、人の嫁を」

「なんか都合悪かったか？」

「いや、全然」

とりあえず最初には因縁をつけないと気が済まないんだろうか。笑いながら、貴弘は首を振ってそう答えた。

その後、どうせ鋭いこいつのことだろうから拓巳同様、俺の感情の変化に気づいてからかってくるだろうと覚悟していた。だがそんな予想に反して、貴弘は口うるさい教頭がどうだのこうだのとくだらない話を2，3しただけで特に白石のことを口にしたりはしなかった。

「……」

互いに煙草を吸いながら、たまに短い沈黙が下りることもある。それでも貴弘は、からかうどころか何かを尋ねてくることもなかっ

た。

そうだ、しばらく忘れていたけれど…こいつはこういう奴だ。俺が自分の想いに自覚していなかったりすればからかったり意味深なセリフを寄越してきたりする。それでも本気になったと分かれば、それについてどうこう言うほど無神経な男ではない。

「……気持ち悪ぃな」

俺に対する貴弘の気遣いなのだろうが、思わずポロリとそんな感想が唇から零れ落ちてしまっていた。

「はぁ！？」

急に俺が失礼なセリフを吐いたせいで、貴弘はこの上ないくらいに眉を顰めて顔をゆがめる。

「いや、別に」

笑って首を振って返し、俺は吸っていた煙草を携帯していた灰皿でギュッと消した。

その時、だった。

「先輩、お待たせー」

アパートの二階でドアの開く音がして、そちらを振り返った瞬間に拓巳の声が降ってくる。鍵を閉めながら手を振る拓巳の隣で、白石が困惑したような表情でこちらを見下ろしていた。…いや、というより、何か気まずいらしく目線はわずかに逸らしていたけれど。

「おう」
短く応じて、俺は貴弘の車から離れて隣の自分の車の方へ移動する。白石の方には、一瞬目をやったがすぐにこちらも逸らしてしまった。制服じゃなければいいと頼んだだけなのに、拓巳のやつが不必要なほど化かしてしまったからだ。学校で会っている「生徒」というよりは、去年の入学式前に会った時の大人っぽい印象だった。

「へぇ、化けるなぁ」
俺がその姿にコメントできないでいることが分かったからだろう。貴弘が、代わりに白石をからかうようにそう声をかけていた。貴弘までここにいることを知らなかった白石は、その姿を捉えて驚いて目を見開いている。そして階段を降りてきて、しばらく貴弘と拓巳と楽しそうに話をしていた。

そんなあいつらが車で走り去るのを見送った後、俺は白石を自分の車の助手席に乗せる。最後に拓巳と何事かをヒソヒソと話していたようだが、そのせいかどこか茫然としているようでもあった。
「…どうかしたか？」
運転席に座りながら、俺はそう尋ねる。鍵を差し込んで回すと、いつも通りエンジンのかかる重低音が響いた。

「先生、何で最初に言ってくれなかったんですか？」
「…何を？」
尋ね返さなくても白石の言いたいことは何となく予想できていたが、俺はあえて聞き返す。いつもは下ろしている長い髪を巻いて少しアップにしている白石は、その髪を手で直しながら続けた。
「理沙さんが、なっちゃんの奥さんだってことです」
「言わなかったか？」

「言いませんでした」
しらばっくれて、俺は笑う。白石がシートベルトをしたのを確認してから、車を前方へ発進させた。

「せめてフルネームで紹介してくれたら、私でも予想できたかもしれないのに」
「『拓巳』だって紹介しただろ、初めに」
「だって理沙さんの苗字は『名取』ですよね？」
「俺と知り合った時は『拓巳』だったんだ」
子どもみたいな言い訳をすると、ようやく白石も思わずといった感じでプッと吹き出す。

それから、「大人で美男美女でお似合いですね」と2人について感想を漏らした。
「そうか？俺から見たらあいつらガキだぜ。美男美女かどうかは知らねぇけど」
答えると、白石は何がおかしかったのか声を上げて大笑いしていた。

車を走らせたのは1時間ほどだった。その間に白石が「どこに行くんですか」という質問をしたのは、意外にもたった1度だけだった。もっとしつこく尋ねられるかと思っていたけれど、その1度目に「着いたら分かる」と返事をしたせいかもしれない。俺の一言で、それ以上聞いても答えが得られないと分かったんだろう。

最近行っていなかった道を行くと、以前の記憶通りに駐車場があった。そこで車を停め、白石を降ろす。車から降り立ったあいつは、どこへ連れてこられたのかと少し周りをキョロキョロとしていた。だがそこに不安そうな表情はなく、どちらかというと好奇心の方が強いようだった。

「白石、こっち」

放っておくと周りを見渡していてついてこなさそうな白石に声をかけ、俺は屋外の駐車場を出て歩き出す。家2，3件分歩いた先に、その入口はあった。地下へと続く細い階段。更に薄暗いそれは、女子高生なら不安になりそうなものだ。

だが振り返った俺を見る白石はニコニコ顔で、どうやらそんなものとは無縁なようだった。俺が教師じゃなかったら、ここまで全面的に信頼されたかどうか怪しい。

階段は段差が高いのと幅が狭いのとで、白石は下りる時に少し怖がっていたようだった。2、3段ほど先を行きながら、手を差し出してみる。それに掴まるように握り返してから、白石は困ったように首を傾げた。

「…先生、あんまり早く下りないでくださいね」

「そんなに怖いか？階段が」

「いえ、そうじゃなくて…あんまり先に下りられて振り返られると…」

言われて、俺は白石が何の心配をしているのかそこでようやく気づく。

「アホか、お前。余計な心配すんな」

「だって、私普段こんなミニスカート履かないから…！」

恥ずかしさからなのか泣きそうな声で言う。それに苦笑いを返し

てから、俺は繋いだ手はそのまま、できるだけ後ろを向かないようにして階段を下りた。

一度１８０度折れるその長い階段を下りると、そこには一つの重厚なドア。それを押し開くと懐かしい匂いと共に感覚が蘇ってくる。

酒と煙草の匂いと、澄んだ音。薄暗い店内を照らすのはオレンジ色の照明だけで、そこには独特の世界観がある。隣の白石を振り返ると、あいつはドアを開けた瞬間に「わぁ…！」と嬉しそうな顔で目を輝かせていた。

「先生、ここって…！」

「俺が大学の時によく来てた、ジャズバー」

ステージには一台のグランドピアノ。まだ始まっていないが、今日はどうやらトリオの演奏があるらしい。ピアノの隣にドラム、そしてウッドベースが用意されていた。

「ユキ…!?ユキじゃん!」

客はまだまばらにしか入っていない。そんなバーのテーブル席に座ろうかと思っていたら、ふとそんな声に呼びかけられた。ジャズバーという静かに音楽を愉しみたい空間で、こんな不似合いな声を張り上げるのは…。

「修司?」

振り向くと、バーテンダーの格好をした小塚修司がそこに立っていた。

＊＊＊＊＊＊

「修司、アルコールなしでドリンク２つ」
テーブルに案内されてそうオーダーすると、修司は「了解」と言って二ヤッと笑った。それから俺の隣に座った白石の方を向いて、人懐こい笑顔で話しかける。
「はじめまして、小塚修司といいます。ユキの大学時代のサークル仲間で、今はバーテンダーやってます」
「あ、白石和美です」
慌ててぺこっと白石が頭を下げると、案の定修司は今度は馴れ馴れしく俺の肩に腕を回した。
「めっちゃかわいい子じゃん！どこで知り合ったん？」
「手出すなよ、うちの生徒だ」
「え、って君、じゃあ高校生！！？」
驚いて修司が再び白石を振り返ると、あいつは少し困ったように小首を傾げている。
「…見えませんよね、やっぱり。昔から老けてるって言われてて…」
「え、いや、違うっ。大人っぽいってこと！キレイだから！」
慌てて言い直す修司に、白石は気分を害した様子もなくニッコリ笑って返した。……その笑顔は恐らく、大体の男にとって反則だろう。

「ってユキ、生徒連れてくるって…どんな教師だよお前」
「うるせぇな、早くドリンク持って来いよ」
「お前が女の子連れてくるなんて珍しいと思ったんだよな」
感心したように言いながら、修司はゆっくりと立ち上がる。その

言葉にどこか嫌な予感が胸をよぎったけれど、俺が制止するより早く修司がセリフを継いでしまっていた。

「昔っから自分の女がここに来るの嫌がってたのに…。一回由香子さんとか、めっちゃお前に怒鳴られて…」

「修司！」

何気なく口にした言葉だったんだろう。しばらく俺の周囲では誰も出すことのなかった名前に、思わず修司の名を怒鳴りつけて制していた。

「あ、悪ぃ…」

口をついて出てしまっただけだった言葉を後悔して、修司は我に返り唇を引き結ぶ。

「ごめん、和美ちゃんも。気にしないでね」

繕うようにニッコリ笑ってから、修司は今度こそカウンターの向こうへと消えていった。

「……」

修司が去ってからも何となく沈黙が落ちてしまったが、何かを弁解するにもおかしい気がしたので、俺は白石にかける言葉も見つからずにいた。場面を取り繕うにもいい話題がとっさに出てこず、黙り込んでしまう。

だけどそんな状況を打破したのは、白石の方だった。

「先生、もしかしなくてもあそこのステージで生の演奏が聴けるんですか？」

店内の雰囲気も気に入ったのか、辺りを見回しながらそう尋ねてくる。「あぁ」と短く返すと、白石は楽しみに待つ子どものようにパァッと顔を輝かせた。

「私、生でジャズ聴くの初めてですっ」
俺に気を遣っているのか、それともさっきまでの会話に全く興味がないのか…。どちらかは分からなかったけれど、白石はさっきの修司の言葉に気にしている素振りはなかった。

……当たり前、か。

馬鹿馬鹿しい感情を抱きそうになり、俺は小さく頭を振る。

修司がドリンクを持って来る頃、店内に客が増え始めた。そしてそれを見計らって、2人の男と1人の女がステージに上がる。神経質そうな色白の眼鏡の男はピアノに、坊主のごつい男はドラムの前に座った。真紅のドレスを着た女は、その細い体に不似合いなほど大きなウッドベースを慣れた手つきで軽く持ち上げる。

「はじまるぞ」
ステージを顎で示すと、白石は口元で両手を合わせながら、キラキラした目でそちらを見ていた。それを見やってから俺もステージ上の3人に集中すると、意識はすぐに前方から押し寄せる音の波に飲まれていった。

9　side：Kazumi

ジャズには詳しくないけれど、初めて聴いたその生の演奏がどれくらいすばらしいのかは何となく感じ取れた。どこにあんな大きな楽器を支えるだけの力があるのだろうと思わされるくらいに細い女性は、太く深く、それでもどこか繊細な音をウッドベースから奏でていた。

スキンヘッドの男の人のドラムの音と、ピアノの人の音が3つ合わさって、流れるような音楽を刻む。呼吸が合っていると言えばいいのか…ピタリと合わさったその音は心地よく耳に届いた。中には聴きなじみのある曲もあり、ジャズに精通していない私でも楽しめる。普段はベタな邦楽ばかり聴いている私だけれど、それらとは違いジャズには妙な色気を感じさせられた。

どこか艶っぽいその音楽に耳を傾けていると、時間はあっという間に過ぎてしまった。

数曲を終えて、3人組がステージを下りる。食い入るように見つめて聞き入っていた私は、少し明るくなった客席側の照明でやっと我に返った。

「楽しんでたね、和美ちゃん」

ちょうど料理を運んできてくれたところだったらしい修司さんが、ウィンクしながらそう声をかけてきてくれる。

「はいっ、楽しかったです」

ニッコリ笑って答えると、トレイを持った修司さんは「そう」と満足そうに頷いた。

「あ、ユキ、マスター帰ってきてるぜ。挨拶して来いよ」
「ん？…あぁ」
思い出したように言った修司さんの言葉に、先生は半ば乗り気じゃないような声で小さく頷く。
「なんだよ、その返事」
修司さんも私と同じ感想を持ったらしく、一向に立とうとしない先生の腕をつついた。
「…あの人話長ぇんだよな」
吸わないまま置いてあったテーブルの上の煙草の箱とジッポを持って、先生は呟きながらゆっくり立ち上がる。
「白石、悪いな。ちょっと待っててくれ」
「あ、はい、どうぞごゆっくり」
トレイを手にした修司さんと共にカウンターの方へと向かう先生にそう声を返してから、私はその後ろ姿を見送った。

「……」

暗めな店内に一人残されて、私は小さく息をつく。生演奏が終わって、元のレコードから流れる音楽に戻った店内は私を我に返らせるのに十分だった。考えないようにしたかったのに、思い出してしまう。それは、ライブが始まる前に修司さんが漏らした一言についてだった。
『由香子』さん。

確かに修司さんは、そんな名前を口にした。それに対する先生のリアクションから、何となく聞かれたくない話なんだろうということが分かった。だから、本当は気になって仕方ないのに全く気にしてない風を装うしかなかったんだ。

「和美ちゃん」

ドリンクのストローを弄んでボーっと考え事をしていると、不意に呼びかけられた。それに気づいてハッと顔を上げると、そこには修司さんが立っている。手にはさっきと同じ料理を手にしていたけれど、服装は違っていた。タイとエプロンを取り、さっきまでよりラフな格好だ。それを見上げて目を丸くしていると、修司さんはまた少し笑って先生が座っていた辺りを指差す。

「俺今から休憩なんだけど、ここで飯食ってもいい？」

「あ、はい、どうぞ」

別にスペースは十分あるのに何故か少し横に寄ってしまいながら、私は隣を手で示した。「ありがとう」とあのニッコリ笑顔で言って、修司さんはそこに座る。

「こんな時間に休憩になるものなんですか？」

ライブも終わったばかりでまだお客さんも多い。小首を傾げながら尋ねると修司さんは私と同じように首を傾けた。

「マスターに言って、ムリヤリぶんどったの」

お茶目に言われて、私は「あはは」と声をたてて笑ってしまう。それから気づいた。もしかしたら修司さんは、先生が行ってしまって私が一人取り残されたから気を遣って来てくれたのかもしれない。

「…ありがとうございます」

うぬぼれかもしれないので理由はいわずにお礼を言うと、修司さ

んは一瞬だけ目を丸くした。だけどそれから、次の瞬間には唇だけを持ち上げてニヤッと笑う。
「やっぱり面白くてイイ子だね、和美ちゃんは」
その表情に、私の予想はどうやらはずれていなかったらしいことを知った。

何気ない世間話をしながら修司さんと並んで食べる食事は楽しかった。先生と友達だと言っていたけれど、先生とはどうやら正反対な性格のようだ。明るくて話上手で、会話が途切れることがなかった。

「じゃあ和美ちゃんは、貴弘の生徒でもあるんだ?」
「あ、はい、違うクラスの担任ですけど」
「あいつとユキ、面白いでしょ」
「はい、とっても」
修司さんはなっちゃんとも仲が良かったらしい。最近は会っていないようで、「懐かしいなぁ」と言いながら目を細める。
「じゃあ修司さんは、理沙さんとも知り合いですか?」
「理沙?理沙って貴弘の嫁の?和美ちゃんあいつのことも知ってんの?」
「はい」
「そっかぁ、あの夫婦色んな意味で『濃い』でしょ」
そう言った修司さんと、思わず顔を見合わせて笑ってしまった。
確かに、なっちゃんと理沙さんはステキだけど個性的な夫婦だったからだ。

「大学の時はあいつら3人いつも一緒でさぁ。俺もたまにそこに混

ざったりしてたんだ」
「へぇ…」
「まぁあの夫婦は言い合いながらも仲良いし、ユキもあの2人の中で何気にイイ中和剤みたいな感じでさ」
「あ、そんな感じですよね」
「そうそう、サークル名物みたいな感じだった」
思い出して懐かしそうに笑う修司さんの表情はどこか穏やかで、私までなんだか幸せな気分になってしまう。だけどすぐに、ハッと私は動きを止めてしまった。さっきの修司さんの言葉に、引っかかる部分があったからだ。

「…修司さん、『3人一緒』って言いました…？」
確認するように尋ねると、修司さんはフォークを口に運びながら横目で私を見た。それから、私の言いたいことが分かったからか口元に薄い苦笑いを浮かべる。
「『由香子さん』のこと？」
ストレートに尋ねられて、私はためらいがちに小さく頷くしかなかった。

その名前を出した時の修司さんの口ぶりからして、『由香子さん』が大学時代の先生の恋人だったんだろうということは何となく想像できていた。でも、大学でいつも一緒だったと言ったのは「なっちゃん」と「理沙さん」と「先生」だけ。そこに、彼女はいなかったんだろうか…？

「何気に鋭いね、和美ちゃん」
「…すみません」
「何で謝るの？」

笑って手を振って、修司さんは手にしていたフォークを置く。それから、少し昔を思い出すように目を細めてから続けた。
「由香子さんは、同じ大学だったわけじゃなかったから」
まだこの後仕事があるから、もちろんアルコールは修司さんも飲めない。ジュースのようなドリンクを飲みながら、修司さんは小さくそう言った。

「ユキの彼女だったけど、その時はもう社会人だったから」
「……そう…なんですか」
そもそもどこで知り合ったのかとかは、修司さんも知らないらしい。
「…いや、知らないって言うより…あいつあの時結構顔が広かったからなぁ。わかんないんだよね」
言葉は選んでいるけれど、どうやら修司さんの知っている先生は色んな女の人と付き合いがあったようだった。
「本気で誰かと付き合ったりする奴じゃなかったから、由香子さんと付き合い始めた時は正直びっくりしたな」
そう言えば昔なっちゃんに、ちらっとそれらしい情報は聞かされたことがあった。

『あいつ昔結構遊び人だったけど…お前それでもいいのか?』

私が本城先生のことが好きだと知った時、確認するようになっちゃんにそう聞かれた。あの時は…盲目状態だったから、ただ当然というように大きく頷くしか答えは持ち合わせていなかったっけ。

「由香子さんと付き合ってる時は…遊んでなかったんですか?先生」
「『遊んで』って…和美ちゃん。…参ったなぁ」
ストレートに聞いた私に、修司さんは言葉通り困ったように頭を

掻いた。苦笑を浮かべて、ソファの背もたれに深めに腰掛ける。
「そうだなぁ…その時は、ちゃんと由香子さんだけと付き合ってたよ」
「……」
修司さんのその答えに、私は覚悟していたせいかそれほどの大ダメージを受けずに済んだ。ただ少し胸のどこかでキュッと何かが締め付けられるのを感じただけだ。

「でも、ユキがどれだけ本気だったのかはわからないけど」
「…え？」
続いた修司さんの言葉に、私は思わず目を見開いた。そんな私を振り返った修司さんが、足を組みながら言葉を継ぐ。
「さっきも言ったでしょ、由香子さんがここに来た時、すんげぇ勢いで怒鳴ってたんだよね」
「…それは…どうしてなんですか？」
「…うーん」
私に尋ね返された修司さんは、小さく首を傾げて少し思案するような表情を浮かべた。

「ユキは自分の考えとかはっきり言わないから正しい解釈かどうかはわかんないけど」
そう前置きして、修司さんは続ける。
「ユキはさ、もうジャズバカってくらい大学時代ジャズに没頭してたわけ。大学の連中とも頻繁にここに通ってたし…。でも由香子さんは、ジャズに特に興味なかったんだよね。ユキは、ジャズが好きじゃない人にここに来てほしくなかったみたいだった」
「……」
「ほら、男って良くあるじゃん。仕事とかに必死になってそのテリ

トリーに女に入られると嫌な奴。ユキの場合は、自分の趣味の域に彼女に入り込んで欲しくなかったんだと思うんだよね」

それから修司さんは、少し苦い顔をする。歪んだ表情が、当時の先生の感情を表しているようだった。

「ユキも、若かったんだよ。譲れないものがあったんだ。だから、よくありがちなあれ。『趣味と私とどっちが大事なの』みたいなことよく言われてたな」

「……」

「そのせいか貴弘なんかはユキに昔からよく言ってたよ。『お前は誰のことも本気で好きになったことがない』って」

それは……本当に「そう」なんだろうか？彼女に踏み込まれたくない自分の領域があったからと言って…それが『本気じゃなかった』ことに繋がるんだろうか？なっちゃんの言葉の意味は…考えても私には理解できそうになかった。

「ま、そんなわけだからさ」

話を改めようとしたらしく、修司さんはそこで故意に明るい声のトーンに戻した。

「そんなユキがここに女の子連れて来たからびっくりしちゃったよ、俺は」

「…え、でもそれは…」

私が生徒であって彼女でないからだし、そもそも私が先生に『ジャズに興味がある』らしいことを言ったからで…。声にはしなかったその言葉を、修司さんは言わなくても何となく読み取ってくれたようだった。

「それでも連れて来ないよ、今までのあいつだったら」

笑いながら言って、修司さんはそこで口を噤む。それを合図のように感じ取って顔を上げると、なるほど、先生がマスターとの会話を終えてこちらに戻ってくるところだった。私も何となく言葉を継ぐのをやめ、手元にあったグラスに手を伸ばす。それを一口飲むのと、先生が戻ってきたのがほぼ同時だった。

「やっぱ長ぇよ、あの人の話」

疲れたような表情をわざと浮かべながら、先生は修司さんにそう言った。無口な先生は、よくお喋りをする人との長い会話は不得手なのだろう。それでも先生が、本当はそんなお喋りなマスターのことが好きなのは良く分かる。

「何だって？マスター」

笑いながら聞き返した修司さんに、先生は吸っていた煙草を灰皿に押し付けて消しながら肩を竦めて見せた。

「なんかやる気になってるぜ、あの人」

「そりゃーユキが来たらそうだろうな」

ポケットに入れていたらしい煙草の箱やら携帯電話やらをテーブルの上に置いて、先生も苦笑いを浮かべる。それから、今度は私を見下ろして言った。

「悪ぃ、白石。もうちょっと待っててくれ」

「？はい」

修司さんもそれが分かっていたからか、席を立とうとはしなかった。先生がまたどこかへ行ってしまいそうなので私の相手を引き続き請け負ってくれるようだ。

「和美ちゃんは、もちろん見るの初めてだよね」

「？何がですか？」
先生が再びテーブルを離れていくのを見送りながら、修司さんの問いに私は小首を傾げる。視界の片隅では、マスターがどこかウキウキとした足取りでカウンターよりこちら側に出てくるのが見えた。
「ユキがピアノ弾くとこ」
「えっ！？ピアノ！？」
思わず大声を上げて驚くと、修司さんはこちらを見ないまま笑っていた。目を丸くして先生の後ろ姿を追うと、先生は店の隅に座ってお酒を飲んでいた誰かに声をかけている。どうやら、さっき演奏していた3人組の一人、スキンヘッドのドラムの人だった。

何事かを話した後、スキンヘッドの人が先生の言葉に笑って頷いている。そうして立ち上がったかと思うと、本当に先生とその人はステージに上がってしまった。それについていくように、マスターが店の奥からさっきの女性と同じように大きなウッドベースをかついで来る。

「先生、ピアノ弾けるんですか！？」
「って和美ちゃん、あいつジャズバカだって言ったでしょ？俺」
「いえ…てっきり聴くのが好きなんだとばかり…」
「言ってなかったっけ、俺らがいたサークルってジャズ研なの。聴くだけの奴もいたけど、ユキの実力はすごいよ」
「…聞いてませんでした…」
サークル仲間とは聞いていたけれど、そう言えば内容までは聞いていなかった。だけどそれなら、修司さんがここで働いている理由も分かる。

そんな話をしているうちに、先生がピアノの椅子に座った。学校

でももちろん見たことのないその姿は、明らかにサマになっていて思わず見惚れてしまうほどだった。さっきの神経質そうな線の細いピアノの人とは、正反対の印象を受ける。鍵盤に手を乗せた先生は、ベースを構えたマスターとスキンヘッドのドラムの人となにやら目配せをした。

そして三人が同時に息を吸い込んだように見えた次の瞬間…言い合わせたように、綺麗なハーモニーが楽器から奏で出る。

「わぁ…」

その一瞬だけで、鳥肌が立ちそうなほどの音。ゾクッと背筋が震える感覚が駆け抜ける。それは、さっきの3人組とまた違った緊張感を持った音だった。

「ジャズってさ、コード進行さえ知ってればその場で誰とでも合わせられるのが長所」

ステージ上の先生を眺めながら、修司さんがそう言う。なるほど、そうでもなければ普通は初対面らしい人同士がこんなに合わせられないだろう。

「…ユキにしては珍しいチョイスだな」

修司さんが、テーブルに片肘をついた格好で嘆息気味にそう言った。どうやら先生が選んだらしい曲目について言っているようだ。つられるように曲に集中すると、先生のピアノが、切ない…だけどどこか深いメロディーを奏でる。それに耳を傾けると、アレンジは違うけれど私にも聞き覚えのあるものだった。

「これ…」

呟くと、修司さんがわずかに目を瞠る。

「和美ちゃん知ってる曲？ジャズ詳しくないんじゃ？」
「あ、これだけは先生が流してたので…」
「……ふぅん？」
修司さんが眉間に皺を刻んで呟き返した時、曲はテーマと言うらしい一通りのメロディーを終えて先生のピアノソロにさしかかった。

長い指が、左手でコード進行の和音を、右手で滑らかな旋律を叩く。聞き惚れて見惚れて、私は半ば茫然と音の渦に引き込まれて行った。見たことのない先生は、見たことがないくらいに格好良くて…。いつまでも戻ってこれないんじゃないかというほど取り込まれていた私を現実に戻したのも、また修司さんの声だった。

「知ってる？この曲の歌詞」
聞かれて、私は小さく首を振る。
「雨が降っても晴れても、この先何が起ころうが彼女一人を愛するって歌。確か「幸福な時も不幸な時も、金があってもなくても、雨が降っても快晴でも、いつも一緒にいよう」みたいな歌詞だったな」
大分要約するとだけどね、と付け足して、修司さんは小さくウィンクして見せた。
「ユキ、昔は「この曲は理解できない」って言ってたんだけどな。理沙にせがまれて、あいつらの結婚パーティーの時は特別に弾いてやってたけど」
「……そうなんですか…」
今日、先生の家で目が覚めた時にはずっとリピートされていた曲。好きでもなく、理解もできない曲ならそんなことはしないと思うのだけれど…。

「こりゃ好きな子でもできたかな」
修司さんは、そう言ってから「ね」と同意を求めるように私を見た。修司さん特有のニッコリ笑顔を向けられて、私は返事に困る。彼は言外に何かを言いたそうだったけれど、私にそれを読み取れるほどの鋭さはなかった。
「…そうなんですかね」
曖昧に答えて、胸が早鐘を打ち始めるのを感じる。先生に好きな人ができていたら…そう思うと妙な焦燥感に襲われたからだ。

修司さんは、私の答えにそれ以上何も言わなかった。再び前を向いて、ステージの先生を見据える。
「おーおー、楽しそうにしちゃって」
修司さんの代わり…と言うべきなのか、そんなステージ上の先生に対する第三者の声が降ってきたのはそのすぐ後のことだった。

私と修司さんが同時にその声のした方向を振り返ると、そこには2つの影が立っていた。
「貴弘！」
「理沙さん！？」
私たち2人の驚きの声が重なると、そこに立っていたなっちゃんと理沙さんは似た者同士なニヤッとした笑みを同時に浮かべてみせた。

「あれ、なっちゃんたちここには来ないってさっき…」
驚きのあまり戸惑い気味に言うと、修司さんを挟んで私とは反対側へ座りながらなっちゃんがチッチッと指を振る。
「お前とユキが2人でここに来るなんてそんな面白いこと見逃すわ

けねーじゃん」
　明らかに悪趣味なセリフを吐くなっちゃんは、時代劇に出てくる越後屋のようだった。
「ちょっと変装して店の隅っこに隠れてたら、全然気づかないんだもん」
　そう言う理沙さんは、……ということはお代官さま？怒られると思うので言わないけれど。

「え、俺も全然気づいてなかった」
　修司さんの言葉に、なっちゃんが笑う。
「お前以外のバーテンダーとマスターは気づいてたぜ」
　そう言われて、修司さんは「マジですか」とがっくりと肩を落として見せた。

「…に、してもだ」
　移動する時に持ってきていた自分のドリンクを飲みながら、なっちゃんは長い足を組む。グラスをテーブルに戻すと膝の上で指も組んで、少し笑いながらステージ上を眺めた。
「楽しそうに弾くよな、珍しく笑ってるよ」
　言われて私もその視線を追うと、ベースのソロにさしかかったその時、先生は確かにピアノを弾きながら笑っていた。見たこともないような嬉しそうな笑顔で。マスターとドラムの人と呼吸を合わせ、楽しそうに音を奏でていく。

「なんだかこっちも楽しくなりますよね」
　先生を見つめたまま…私は素直にそんな感想を漏らしていた。

「だな」
「そうだね」
なっちゃんと修司さんが、同時に私の言葉に頷いてくれる。

…不思議な気分だった。あの先生の笑顔だけで、本当に私の心のどこかが温かくなったんだ。

先生に好きな人がいようがいまいが、今はそれすらどうでもいいと思えるほどに。嬉しそうに笑っている先生がそこにいるだけで、この時は幸せな気分だった。

恐らく、今の私ならこの曲に惹かれた理由も分かる気がする。

降っても晴れても、この先何があっても…きっと私は先生のことが好きだからだ。

1

その日、私は焦っていた。

昼休みが残り少なくなってきて、もうすぐ午後の授業が始まってしまう。それが終わればすぐに部活が始まるというのに、未だその化学部で出された課題が終わっていない。

「おい、お前それ、どうやったらそんな結果になるんだ」

呆れたような声が頭上から降り注いできて、頭の中は更にパニック状態だ。まぁ最も、提出するべき相手がここでこうして私の課題が終わっていないのを見ているのだから開き直るという手もあるのだけれど…。

「…やっぱり間違ってます？」

昼休みの化学準備室で、肩を竦めながら私はムリヤリ走らせていたシャーペンを止めて顔をあお向ける。見上げると本城先生は思ったより近くにいて、私のノートを見下ろしていた。

「全然違う」

低い声が遠慮の欠片もなしに突き刺さる。う、と言葉に詰まってどうしようかと迷っていると、呆れられたかと思った先生が私のシャーペンをひったくった。

「ほら、ここでこういう化学式が出てきてんだから、こっちはだな…」

サラサラとノートに化学式と文字を連ねていく先生が、思いのほか近い。普段はそれほど気づかない程度だけれど、ここまで近くにいると先生がつけているらしい香水の匂いまでよくわかる。男性香水特有の嫌な匂いがなく、石鹸のようなシンプルな匂いの香水。そ

のいい香りからも先生が極至近距離にいることを実感させられて、思わず胸が高鳴った。

「…だから、こうすれば答えが出るだろ？」

「え、は、はいっ？」

緊張のあまりろくにまともに聞けていなくて、思い切り返事が空振りする。それに気づいたのか、先生が「…お前聞いてたのか？」と目を細めて聞いてきた。

「き、聞いてましたよ」

「じゃあさっきの説明でやってみろ」

そう言う目の奥が笑っているから、恐らく満足に聞いていなかったのはバレているんだろう。

「…う…もう一度ヒントを…」

「……お前ホントにバカだな」

問題が解けないことにではなく、『聞いていた』と主張したくせにヒントを要請した辺りに先生はそんな遠慮のない言葉を言い放ったようだった。

お昼のお弁当を持ち込んでまでここで頑張っているのに、課題が終わる気配はない。それも先生が「極力自分で解く努力をしろ」なんて突き放したことを言って３０分以上相手をしてくれなかったせいだ。

でもやっと教えてくれたヒントを聞き逃す辺り、私もやっぱりバカだと自分でも思う。そんな私の思いなんて知るはずもなく時計は容赦なく時を刻んでいった。「これはもう無理だ」なんて諦め始めた時に、私は自分の机に戻っていった先生にチラリと視線を送った。

「先生、こんなバカな私が部活までにちゃんとこれできたら何かご褒美くれます？」

冗談で試しに言ってみると、先生は向こう側でふと顔を上げる。一部の生徒を怖がらせているとまで言われているいつもの無表情で、一瞬小首を傾げた。それから、私の言葉を受けてニッと笑ってみせる。

「いいぜ、そこの引き出しに昨日苑崎先生が置いて行った飴が入ってるぞ」

「……先生、私子どもじゃありません」

今時の高校生が飴一つくらいで喜ぶとでも思っているんだろうか。がっくりしたように言い返すと、先生はおかしそうに笑っていた。

先生に初めてジャズバーに連れて行ってもらったあの日から、既に一ヶ月ほどが経過しようとしていた。もちろんその間学校以外で会うことなんてなかったし、ジャズバーにあれ以来連れていってもらえたわけもない。だけど確実に、私は先生との距離が縮まったことを実感していた。今までは、見ているばかりで近づけない存在だったから…。話をするにも内容に困っていたし、先生自身も無口なせいか壁を感じていたから。

だけど先生の趣味もわかったせいか、随分話しやすくなった気がしていた。何より、嘲笑や冷笑も含めてだけれど、先生はよく笑ってくれるようになった気がする。あの日ピアノを弾いていた時ほどの幸せそうな笑顔はなかなか見れないけれど、それでも笑って話をしてくれるようになっただけで私は満足だった。

「和美、課題終わったの？」
昼休み終了で渋々と教室へ戻った私に、智子が声をかけてきた。
「全然、ダメ」
結局ほとんど進まなかったノートを机に投げ出しながら、私は手でバツを作る。それを見て智子の隣にいた由実も笑ってこちらを見た。
「ユキサダに教えてもらえなかったん？あいつやっぱりドSだな」
「…いや、教えてもらえなかったというか教えてもらえてたというか…」
なんといえばいいのか分からずに口ごもると、そこにいた茜も含めて3人は「何それ」というような顔をした。曖昧に笑ってごまかした私に、茜が「あ」と声を上げる。
「そういえば和美、昼休み中に先輩が来てたよ」
「先輩？」
「ほら、何ていう名前だったっけ……化学部で和美の面倒よく見てくれてる…」
「都築先輩？」
「あ、そう、その人」
思い出してニッコリ笑った茜と対称的に、私は首を傾げた。
「都築先輩が？何の用だろ」
「また5限が終わったら来るって言ってたけど…」
「え、ホントに？5限の休み時間が唯一課題をやる最後のチャンスなのになぁ…」
眉を寄せたけれど、茜にそう言っても仕方ないことは自分でも分

かっている。

先生がノートに書き連ねてくれたヒントを手がかりに、私は5限の古文の間にこっそり内職をする覚悟を決めるしかなかった。

＊＊＊＊＊＊

「あ、白石」

5限の休み時間になってすぐ、予告通り都築先輩が現れた。背がそれほど高くない先輩は、私が少し背伸びをすれば同じくらいになりそうだ。どちらかというと真面目な雰囲気を醸し出す容姿をしているけれど、顔が整っているせいなのか…小奇麗というか、暗めな印象はない。いつも人当たりの良い笑顔を浮かべていて、話しやすい先輩だ。

「ごめん、急に訪ねてきて」

「いいえ、どうかしましたか？」

ニッコリ笑って聞き返すと、先輩は少し周りをキョロキョロと見渡す。あまり人に聞かれたくない話のようで、それを察した私は廊下の隅の方へ移動した。ここなら少し暗くて、誰も用事がないのに来たりしないだろう。

「ありがとう。実は…お願いがあって」

「私に…ですか？」

尋ね返すと、先輩はコクリと頷く。それから、「…実は…」と少し照れたように言いにくそうにしながらも話してくれた。

「妹が、もうすぐ誕生日なんだ」
「あ、そうなんですか」
先輩に妹さんがいたというの自体初耳だった。短く相槌を打ちながら、私は続きを待つ。
「それで…何かプレゼント買いたいんだけど、何を買ったらいいか分からなくて…」
「妹さんっておいくつなんですか？」
「年子だから、一個下なんだ」
…ということは、私と同じ年のようだ。随分仲が良い兄妹なんだな、と思って、私は唇を持ち上げて微笑んだ。
「妹さんが好きなものって何ですか？」
私が相談に乗ってもいいと思ったことが分かったのか、先輩はパァッと顔を明るくした。仮にも年上の男の人に対して失礼かもしれないけれど…かわいらしい感じだ。

「なんかかわいい雑貨とかが好きらしいんだけど、俺そういう店ってよく分からなくて…」
「あ、雑貨だったら私も大好きです。駅前にかわいいお店がありますよ」
地図書きましょうか、と言うと、先輩は少し困惑したように苦笑いを浮かべる。その表情の意味が分からずに小さく首を捻ると、先輩は「…うん、実は…」と言いにくそうに改めた。
「できれば、一緒に行ってもらえないかと思って…」
「えっ？」
そうくるとは思っていなかったので、私は思わず大きく目を瞠る。…でも…それは当たり前かもしれない。場所を教えたとしても、先輩一人では行きづらい店構えだからだ。一緒に行ってほしいわけでもないなら、そもそも相談なんてしてこないに違いない。
「えぇっと…いつ、ですか？」

「俺はいつでもいいんだけど…あの、来週の月曜が誕生日だから、それに間に合えば」

正直に言えば好きな人がいるのに他の男の子と出かける気にもならなかったしその意味もわからなかったけれど、先輩には普段迷惑をかけまくっている申し訳なさと既に半分ほど相談に乗ってしまったという責任感もあって、私は小さく頷くしかなかった。

「じゃあ、今週の土曜の放課後とかでどうですか？」

尋ね返した途端、先輩の顔が瞬時に明るくなる。

「うん、じゃあそれで…。ありがとう、白石」

ニッコリ笑って言われて、思わず私もつられてしまう。微笑み返すと先輩は「あ、でも…」と少しためらいがちに言葉を継いだ。

「来週半ばから中間テストなのに、時間とらせてごめん…」

「いいえ、駅前で買い物くらいなら大丈夫ですよ」

笑ってそう返した時、休み時間終了のチャイムが鳴る。目線を上げてそれを聞いた後、先輩は再びこちらを向き直った。

「ホントにありがとな、白石。…じゃあ後で部活で」

「はい」

笑って返して、私は先輩が自分の教室へ帰っていくのを見送る。

「誕生日プレゼント、かぁ…」

妹思いの先輩だなぁと感心しながら、なんだか少し羨ましくなる。私の弟だったら、そんな健気なこと考えるわけもない。それから、ふと「そういえば」と思い当たった。

中間テストに気を取られて忘れていたけれど…それが終わって少し経てば、私の誕生日もやってくる。

「……」

決して物が欲しいわけじゃないけれど、自分の生まれたその特別な日、一人だけそれを一緒に祝ってほしいと思える人の顔が思い浮かんだ。

「……無理に決まってるけど」

首をすくめて、私はひとりごちる。それから今日の最後の授業の教師がやってくる前にと、教室へと戻って行った。

＊＊＊＊＊＊

「じゃあ、今日は以上」

放課後の部活を終えた頃、本城先生のそんな言葉を合図に部員たちがバラバラと立ち上がり始めた。5，6限でなんとか課題を終えた私は、皆と一緒に無事提出できた後だ。それを誇らしげに思っていたところだけれど、帰ろうとした瞬間に「白石」と先生の低い声に呼び止められる。

「はい？」

振り返って見上げると、先生は教壇にもたれかかってこちらを見下ろしていた。その顔が少し威圧感を感じるものだったので、私は思わず肩を竦めてしまう。

「ちょっとお前残れ」

周りにいた同級生が、「和美またなんかやったん？」と笑いながら声をかけていく。それでも誰も一緒に残ってくれるわけもなく、非情な友人達は手をひらひらと振って帰っていった。

「…先生、私何かしましたっけ」

実験室から準備室の方へと移動する先生についていきながら、私は控えめな声でそう尋ねる。自分の机という所定の位置まで移動してから、先生はようやくこちらを振り返った。それから、近くの椅子を私にも勧めてくれる。昼休みに私が課題をやるのに使っていた席だ。

「お前、よく課題出せたな。あの状況から」

「はい、苦労しました」

何食わぬ顔でそう答えると、先生は小さく吐息を漏らす。そうして机の上に置いてあった生徒たちのノートから私の分を取って、ポンと私の頭を軽く叩いた。

「…あの状態から部活の時間までに間に合うとは思えねぇんだよな」

「……あ…」

しまった。そう思ったけれど顔に出てしまっていて、取り繕うこともできずに絶句してしまう。そんな私の様子を見て、先生は唇を持ち上げて嫌な笑みを浮かべた。

「お前、5，6限まともに授業受けてねぇだろ」

「……すみません…」

内職してました、と公言しているようなものだと、どうして気づかなかったんだろう。身を小さくして謝ると、先生はその私のノートをパラパラと捲る。問題の課題のところを開いて、私の目の前の机にパンと置いた。

「しかもそれで合ってるならまだしも、ちょっと間違ってる」

「…うっ…」

言葉をなくして萎縮している私を見て、先生はようやく吹き出すように笑う。

「すぐ直せるだろ。ここでやってから帰れ」

「……はぁい」

返事をすると満足そうに小さく頷いて、先生は自分の机の方に戻って行った。

それから、付け足すように素っ気無く言う。
「まぁ、ちゃんと提出しなきゃと思って頑張ったところは偉いけどな」
「…ありがとうございます」
「だからって他の授業をないがしろにしていいわけじゃねぇからな」
「…う…っ分かってますよぉ」
鞄から筆箱を出しながら、私は少しだけ唇を尖らせた。それを見ておかしそうに笑ってから、先生は自分の仕事に取り掛かろうとする。だけどその一瞬、ふと「そうだ」と動きを止めた。
「？」
こちらへ戻ってくる先生を不思議そうに見上げていると、先生は私の机のところで立ち止まる。そしてそのまま脇の引き出しを開けて、何かを取り出していた。
「やるよ」
その何かを手渡され、私は目を丸くする。手のひらにのせられたそれは、小袋に入ったかわいいキャンディだった。
「何ですか、これ」
「何ですかって…課題出したらくれって言っただろ」
首を傾げて返事をしてから、先生は今度こそ本当に自分の机へ戻る。椅子に座ってノートパソコンを立ち上げるその一連の動作を眺めてから、私は思わず苦笑いをした。
「私が言ったのは『課題を提出できたらご褒美ください』です」
「だから、飴やるって言っただろ」
平然と答えた先生の言葉に、私はわざとらしく頬を膨らませる。まぁ元より本当にご褒美なんてもらえると思ってなかったから、何が欲しいと具体的に決めて言ったわけじゃなかったのだけれど…。

「…ありがとうございます」
とりあえずお礼を言ってそれをもらうことにすると、先生はパソコンで何かを打ちながら答えた。
「礼なら苑崎先生に言え」
…そういえば、苑崎先生が置いて行った飴だとかなんとか言ってたっけ…。本城先生の少しまとはずれな言葉に苦笑を浮かべながら、そんなことを思い出した。

「ところでお前、内職するくらいだから5，6限の古文と英語の中間テストは余裕なんだろうな」
飴を鞄にしまっていると、先生はそんな嫌味を寄越してくる。う、と再び言葉に詰まると、先生はこちらを見ずに書類に目を落としたまま続けた。
「楽しみだな、来週のテスト」
「…意地悪言わないでください～」
「古文と英語と俺の化学、平均点以下だったら罰受けさせるからな」
「……え…罰ってなんですか」
先生の不穏な言葉に恐る恐る聞き返すと、先生は少しだけ笑ってみせる。

「何がいい？ここの掃除と俺の仕事の雑用と……」
「テスト、頑張りますっ」
気合を入れるようにそう答えると、先生は今度は声をたてて笑った。

…本当は、先生と一緒にいられるなら雑用でも掃除でも何でもやるところだけれど…。

そこは、あえて言えるわけもないので黙っておく。

代わりに、ふとあることを思いついて「あの」と再び声をかけた。
「ご褒美」という響きと、さっきの都築先輩が出した「誕生日」という言葉を思い出したせいでひらめいたのだ。
「先生、今度の中間テストで化学が８０点以上だったらご褒美くれます？」
目を輝かせながら聞くと、先生は「はぁ？」と怪訝そうな顔で私を見る。
「お前な、俺の話聞いてたか？お前が条件出す立場じゃねぇだろ、この場合」
「先生が約束してくれたら頑張れますっ」
ニッコリ笑って言うと、先生は目を細めて口を噤んだ。
「……何が欲しいんだよ」
そして観念したかのように、私を見据えながらそう聞いてくれる。

欲しいのは、物じゃない。ただ先生と、一緒にいたいだけだ。バカな夢だと分かっていても、もうすぐ来る誕生日という特別な日なら、それが叶うかもしれないという期待を込めて。

「私、テストが終わった後の６月１日が誕生日なんです」
「へぇ…オメデトウ」
明らかな棒読みで返してくる辺り、先生は性格が悪いと思う。それでもそんなことにめげるわけもなく、私は笑ったまま続けた。
「８０点以上取ったら…その日、またあのお店に連れてってくれませんか？」
そう言うと、先生は一瞬目を瞠った後呆れたようにため息を大き

く吐き出す。大きく肩を竦めて、バカにしたように私を見た。
「お前バカだな」
…実際バカにされていたようだ。そんな言葉を吐いてから、先生は私から目線を逸らして再びパソコンに向き直る。

「あの時は特別だっつったろ。仮にも教師があんなとこに何度も生徒連れていけるわけねぇだろ」
「でも…！」
食い下がるように声を上げて、私は訴えた。
「私、あそこが気に入っちゃったんです。マスターも修司さんもいい人だし…ジャズもすごくステキだし！でも高校生だから一人でなんて行けないし……誕生日くらい、自分の好きなところで過ごしたいです」
「……」
「もし先生が連れて行ってくれないんなら、その辺で大人の男の人を捕まえて…」
「おい待てこら、教師を脅す気か」
淀みなく続けていた私に、先生は不機嫌そうに顔を歪めてため息をつく。

…まずい…本当に怒っちゃったかな？

そう思ったけれど、先生は意外にもその次の瞬間にはパソコンからこちらへ視線を移した。

「…９０だ」
そして、苦い顔をして小さく呟く。

「…え？」
聞き直すと、先生が舌打ちまじりに譲歩の言葉を口にした。
「９０点以上だったらな、言うこと聞いてやる」
そんな先生の言葉に、私はパァッと顔中に明るい笑みを浮かべる。
「ありがとう、先生っ」
「礼は点数取れてから言え」
「はい、私メチャクチャやる気出てきましたっ」
「…そーかよ、そりゃ良かったな」
興味なさそうに呟いた先生に、それでも笑顔な私。やり直さなくてはいけない課題すら、既にこの時には大した問題ではなくなっていた。

2

「すごい、和美。もうこんなに解いたの？この問題集」
心の底から感心したように、智子が私の使っている問題集を捲りながら呟いた。しかも数ページの間全問正解しているのを見て、更に嘆息まじりに褒めてくれる。
「ちょっとね、私の今回の気合の入り方はいつもと違うの」
少しばかり得意気に答えて、私は「ふふ」と笑ってみせた。

先生との約束から数日、テストを来週に控えて私は化学のテスト勉強に没頭していた。何がなんでも９０点以上を取りたくて…でも他の科目もおろそかにできるわけもなく、今までにないくらいテスト勉強をしている気がする。

「ユキサダと何かあったん？」
ニヤッと笑いながら、由実も聞いてくる。教室の中だけれどざわめいているため、誰もこちらの話に耳は傾けていないようだ。それを確認してからニッコリ笑って、私は頷く。
「点数が良かったらご褒美くれるって約束してもらったの」
「へぇー…あのユキサダがねぇ」
ご褒美の内容までは言わなかったけれど、私の答えに由実はどこか感心したように頷いていた。

「そういえば和美、明後日の土曜日例の先輩とデートなんでしょ？」
智子が思い出したように、急にそんなことを口にする。放課後のおやつのつもりなのか、チョコレートをつまみながら聞いてきた。

「デートじゃないよ」
思わず眉を寄せて、そう答える。
「妹さんの誕生日プレゼント買いに行くのに付き合うだけよ」
智子から取り返した化学の問題集の続きを解きながら、私は唇を尖らせて言った。
「…ホントに妹なんているんだか」
私の正面で、由実もそう言って小さく首を傾げてみせる。

「あ、それはホントみたいだよ」
それまで黙っていた茜が、由実の言葉に反応して顔を上げた。
「うちの家庭科部の先輩に都築先輩と仲良い人がいるんだけど、その人からすんごい妹と仲良いって聞いたことあるから」
「…ふーん、なんだつまんない」
由実はいつもの感想を漏らしながら、肩を竦める。そんなやり取りを眺めて笑っていた智子が、不意にそこで表情を素に戻した。少しだけ、厳しい顔つきになる。

「でも和美、色々と気をつけなさいよ」
「『気をつける』？」
チョコレートの箱を差し出されて、私はそれを一粒受け取る。口に放り込みながら問題集を眺めたまま、智子の言葉を復唱した。
「その先輩、確実に和美のこと好きでしょ」
いきなりな智子の声に、私は思わず目を見開く。そしてそのまま一瞬固まってしまってから、口元に苦笑いを浮かべた。
「……やっぱり？」
問い返して、思わず吐息を漏らす。

うぬぼれるわけじゃないけれど、自分に向けられる好意がどういうものか理解できないわけじゃなかった。今まではそうでもなかったのだけれど、ここ最近の先輩の様子は特に分かりやすい気がする。

確信したのは今回の買い物に付き合う話の時で、それまではそれほど気にしていなかったのだけれど…。

「あんまり仲良くすると、本城にも誤解されるかもよ」
「…え、そうかな…」
「そうでしょ。しかも逆もありえる。あんまり仲良くすると、先輩に本城のこと好きだって気づかれるかもよ」
「……う…」
想像してみれば安易に予想できる展開すぎて、私は言葉を失った。そこまでは正直、注意していなかったからだ。

「なんだ、楽しくなってきたなぁ」
私が少し困った表情をしたからか、由実がさっきまでの「つまらない」という感想をひっくり返してそう呟いた。嬉しそうな笑顔に、「全然楽しくないっ」と私は頬を膨らませる。

この時は本当に、智子の心配が現実のものになるとは夢にも思っていなかった。

＊＊＊＊＊

あの後部活に向かった3人と別れて、私は化学準備室へ足を向けた。今日はうちの化学部は休みの日だけれど、問題集を解いていて分からないところが出てきたからだ。質問したいのは嘘ではなく事

実なのだけれど、それすら口実にして先生に会えると思うと足取りが軽くなる。スキップまではしないけれど軽やかに向かい、私は化学準備室のドアをノックした。

「はい」と低い声が返ってきて、私はドアに手をかける。ほころびそうな口元を必死で引き締めて、「失礼しまーす」とそれを開けた。

「おぅ」

いつもの椅子に座って仕事をしていた先生が、少し目線を上げた後またパソコンにそれを戻す。吸っていた煙草が短くなったのか、手近の灰皿に押し付けた。無言のまま用件を促された気がして、私はゆっくりと先生の机に近づく。

「質問に来ました」

言って問題集を持ち上げると、先生は肩を竦めてキーボードを叩きながら言った。

「…精が出るな」

ご褒美目当てにテスト勉強を頑張っていることを揶揄されたようだ。

しばらくカタカタと何かを入力していた先生は、キリのいいところで「どれ」と目線を上げる。座ったままの先生の前に問題集を開いて見せて、私は手にしていたシャーペンで持っていたノートに文字を連ね始めた。

「…って、ここまでは分かるんですけどこの先のここの部分が解答例見ても理解できなくて…」

一緒に持っていた解答集も開いて、私は行き詰った部分を示す。

「あぁ、これは…確かにここの解答例ちょっと省略してんな」

言いながら、先生は持っていた自分のペンで簡潔にされた解答集

よりも詳しい説明を書き始めた。前から思っていたことだけれど、先生は意外に字がキレイだ。…多分、昔書道でも習ってたんじゃないかっていう感じの…流れるような字体を書く。どこかの数学教師も少しは見習った方がいいんじゃないかと思うけれど、怒られそうなので口にしたことはない。

「…で、これで分かるだろ？」

一通りの説明をして、先生は私にそう尋ねた。言われて、私は嘆息しながら大きく頷く。さすがに先生の説明は分かりやすくて、中途半端な解答例を載せる問題集に若干腹が立ったほどだ。

「やっと分かりました！ありがとうございます」

「じゃーこっち解いてみろ。さっきの応用だから」

隣のページの問題を指して、先生は再びパソコンに向き直る。「はぁい」と返事をして近くの机に向かい、私はそこにノートと問題集を広げた。

「お前すげぇやる気だな」

椅子に座った私に、先生がふとそんな言葉を投げかける。指定された問題文を読みながら、私は「ご褒美かかってますから！」と自信満々に答えた。

「そんなに修司に会いたいんなら連絡先教えてやるぜ」

「…先生、私確かに修司さんには会いたいですけど、それだけが目的じゃないですよ」

「分かってるよ。冗談だろ」

真顔でそんな冗談を言わないで欲しい。頬を膨らませながらそう思った瞬間に、それが伝わったのか先生が薄く苦笑いを浮かべた。

「いや、質問内容がずいぶん変わってきたと思って」
「…え？」
「大分勉強してんな、って感じの質問をするようになったからな、お前」
先生はキーボードを打つのがとても速い方だと思う。止まることを知らないように流れるような音をさせながら、そう続けた。
「そういうのってやっぱり分かるものなんですか」
聞くと、「当たり前だろ」と短く答える。
「前のお前は、全く勉強してないのが丸分かりだった」
「…う…っ」
「気にすんな。質問してくる生徒の大半はそんなもんだ」
笑ってそう言うくらいなら、わざわざそんなこと言わなくてもいいのに。
「…先生の意地悪」
「話かけといてなんだけどな、さっさと解け」
私の抗議を完全に無視した先生は、本当に理不尽なセリフをこちらに投げて寄越した。

さっきよりも更に大きく頬を膨らませて、私は問題に向き直る。先刻の先生の説明のおかげか、応用問題と言っても今度はかなりすんなりと解くことができた。先生に見せても合格点がもらえて、私は満足そうに笑う。そんな私を椅子に座ったまま見上げ、先生は「あ」と小さく声を上げた。
それから、机の引き出しを引く。数日前に課題を提出した時に飴をくれた時と同じ感じだった。

「ほら、今日のご褒美」
冗談っぽく言いながら取り出した何かを、そのまま手渡される。

受け取ったそれを見ると…クリアなプラスチックケースに入ったCDだった。黒を基調とした…モノトーンのシックなジャケット。すぐにそれが何かを理解して…私はパァッと自分の顔が明るくなるのを感じた。

「聴きたいって言ってただろ、それ」
「はい…！ありがとうございます」
あれからジャズに興味を持つようになった私は、先生とよく色んな話をするようになった。家では父親のコレクションを漁ってCDやレコードを聴き、私自身、先生のことを抜きにしてもジャズにハマってきていたのは本当だ。
先生は当然とてもジャズに詳しくて、色々と詳しく教えてくれた。持っているCDの数も尋常じゃないようで、私がちょうど聴きたがっていたものはもちろん持っていたらしい。
私がとある曲は、父も持っていたけれどそれとは違う人の演奏が聴きたかったのだ。この曲で特に有名なピアニストがいたのだけれど、父のコレクションにはそれは入っていなかったから。

「いい曲ですよね、これ」
「失恋の歌だけどな」
サラリと答えて、先生はニコニコ顔の私を一瞬固まらせた。…全く、絶対に一言意地悪を言うんだから。

「どうでもいいけどお前さっさとそれしまっとけよ。あと没収されんなよ」
「はぁい」
返事をしながらも、私はケースを開く。「おい」と目を細めてこ

ちらを見る先生を無視しながら、曲の解説カードを手に取った。
「先生、すごい！ライブバージョンなんですねこれ」
「…お前、人の話聞いてねぇな」
嬉々としてカードを眺める私に、先生は諦めたように苦笑いを浮かべる。
……ちょうど、その時だった。

「失礼します」
ノックと共に、部屋のドアが開けられる。先生と同時に目線を上げると、そこにいた人も私がここにいることに驚いたのか少し目を見開いた。
「おぅ、どうした」
先生が、私が来た時と同じように訪れた生徒に尋ねる。そこにいた都築先輩は…ドアを閉めながら、「質問があって」と答えた。

「白石も来てたんだ」
部屋の中へ入ってきながら、先輩は私に向かってニコリと笑う。
それから…私の手の中のＣＤを見て、少し目を丸くした。
「先生の？」
この状況で持っていたらそう気づいて当然だろう。いつもの微笑みを口元に浮かべながら、先輩は私にそう尋ねてくる。

「…え、はい…」
と首を竦めながら弱々しく答えると、先生が都築先輩の向こう側で「バーカ」と私に向けて口をパクパクさせていた。
確かに、教師と生徒が授業にも関係のない物の貸し借りをするな

んてなかなかないことだから、あまり知られて良い情報ではないだろう。

「何のCD？」
「えっと…ジャズピアノで…」
「白石ジャズ好きだったんだ？」
「はい…というか、最近目覚めたというか…」
口ごもりながら答える私は、相当怪しかっただろう。だけど先輩はそんなことを気にもしていないのか、依然ニコニコしていた。
「言ってくれれば貸したのに。俺もジャズ好きで結構持ってるんだ」
「そうなんですか…」
「うん。先生に借りるよりは借りやすいだろ？」
最後のその一言は、先生には聞こえないように先輩は声を潜めた。確かに、一般的には教師よりもいつも面倒を見てくれている先輩からの方が借りやすいだろう。そう思って気を遣ってくれたのかもしれないけれど…私は曖昧な笑みを返すしかなかった。

「都築、何の質問だ？」
椅子に座った態勢のまま足を組んで、先生はポケットから煙草の箱を取り出した。持っていたライターで火をつけて、口元の煙草に灯す。
「あ、昨日の実験の結果と考察をまとめてたんですけど…」
先生の方に歩いていきながら、先輩は鞄からノートを取り出した。

それを眺めて、私はカードをCDケースに戻す。問題集とノートと一緒に持って、小さくため息を漏らした。

邪魔をするわけにはいかないし、ここは退散するしかないだろう。本当は、もっと先生と一緒にいたかったけれど…。私だけの教師ではないのだから、そういうわけにもいかない。

ノートを出しながら、都築先輩がふとこちらを見た。帰り支度をしようとしていた私に気づいたらしく、少し笑ったように見える。

「？」

その表情に小さく首を傾げると、先輩はまたニコリと笑って再び口を開いた。

「白石も一緒に聞く？昨日の実験よくわかんないって言ってただろ」

「え、いいんですかっ？」

先輩のありがたい申し出に、私は瞬時に沈みかけていた気持ちが浮上するのがわかった。

なんでもいいから、少しでも長く先生と一緒にいたい。動機が不純でもなんでも、そんなことはどうでも良かった。

「あの、ちょっとだけ待っててもらえますか？昨日の実験ノート、教室にあるんですっ」

「うん、行ってらっしゃい」

「……」

笑って言ってくれる先輩の向こう側で、先生は何も言わずに煙草の煙をフーっと吐き出していた。

嬉しさのあまり、私はこの時盲目状態で…。先生の無言がどんな意味を持っていたのか、ということになんて気づくはずもなかった。智子にも、散々忠告されていたというのに、だ。

まさか私のこの態度で、先生にとんでもない誤解を植えつけていたなんてこと分かるはずもなかったんだ。

3

土曜日は、梅雨入り間近さを感じさせないほどの快晴だった。空は青く、高く。雲は流れるように早い速度で形を変えていく。そんな気持ちの良い日の放課後、私は約束通り都築先輩と駅前へと向かった。

雑貨と一口に言っても、選びきれないほど物は多い。妹さんはどういったものが好きなのかを尋ねると、先輩は小さく首を捻って答えた。

「あいつピアスしてるんだけど、ピアスケースとかなんかそういうのが欲しいって言ってたかな」

買い物に出る前に、と一緒に入ったファストフード店で昼食をとりながら先輩はそう言う。

「じゃあ、そういうの探してみましょうか。雑貨屋さんにかわいいのあったと思いますよ」

「ありがとう、白石」

先輩一人では入りづらい店に違いはない。「いいえ」とニッコリ笑って応じて、私はアイスティーのストローに口をつけた。

「白石はピアスとか開けてないんだ?」

ふと話題を変えた先輩に、私は小さく頷く。

「ホントはかわいいし開けてみたいんですけどねー。ちょっと勇気がなくって」

「ちゃんとやれば全然痛くないらしいけど」
「でもなんかこう…開けた瞬間耳元で音がするのかなぁ、とか思うと背筋が…」
その時の様子を想像するだけで、身震いがしてくる。小さく身を竦めた私の様子に、先輩は今度は声をたてて笑った。

「あ、そうだ、今のうちに…」
不意に、思い出したように先輩が再び声をあげる。手元のポテトを食べながら小さく首を捻ると、先輩は隣の椅子に置いてあった鞄へ手を伸ばした。先輩がそこから取り出したのは、小さな袋。ウェットティッシュで手を拭いてから受け取ると、中にはＣＤらしきものが数枚入っていた。
「ジャズ好きだって言ってたから」
ニッコリ笑って、先輩は言う。
「俺のお勧めのＣＤ。良かったら聞いてみて」
言われて、私はまたいつもの曖昧な笑みを浮かべた。
「ありがとうございます」
言うと、先輩はこちらの気持ちには気づくわけもなく笑ったまま「いいえ」と返事を返してくれた。

正直、複雑な面もあった。確かに、ジャズは好きだし色んなＣＤを聴いてみたいとも思う。でも先生と共通の話題だったから余計に楽しかったというのもあって…。そこには誰にも入ってほしくなかったという、我儘な想いもある。
だけどそれを表に出すわけにもいかず、私はお礼を言ってそれを

受け取った。

ファストフード店から、目的の雑貨屋さんまではそう遠くはなかった。お昼を食べ終えてからまっすぐにそこへ向かうと、もうその雑貨屋さんは女子高生たちで混雑している。その人ごみを縫うようにして店内へ入りながら、先輩と目的のものを探した。

ピアスケース以外にもかわいいものはいくらでもあって、私は自分のものを買うわけでもないのに目移りしてしまう。

「これなんかどう？」

ピアスケースでもないブタのぬいぐるみを引っ張ってきて、先輩は笑う。私も思わず吹き出すように笑ってしまった。ブタはブタでもかわいいブタなのだけれど、先輩にはどこか不似合いだったからだ。

「あ、これなんかかわいいですよ」

私が手にしたのは「ピアスケース」ではなかったけれど、蝶をモチーフにしたスタンドで、ピアスをさして保管できるものだった。私がピアスをしていれば、欲しいくらいだ。

「そっか、じゃあそれにしようかなぁ」

手にとった先輩が、まじまじと見つめながら呟く。

「先輩、とりあえず一周して、他のものも見てみましょうか」

候補はあがったので、後はゆっくり他も見てみればいい。そう提案して、私は更に店の奥の方へと移動した。

「白石はやっぱりこういう店来ると欲しいものとか多い？」

「いっぱいありますよー」
私についてくる先輩に笑って応じながら、手近のものを指差した。
「そこのクッションカバーもかわいいし、ブックスタンドも魅力的だし…」
こういうお店に来るとお金がいくらあっても足りない。
「あ、でもあそこのアロマキャンドルもかわいいっ」
見ているだけでも、ウキウキして心が弾んでくる。我を忘れて楽しみそうになって、私はそこでハッと自分の状況を思い出した。
「…すみません、ちょっと浮かれちゃいました。妹さんのプレゼントでした」
苦笑い気味に言うと、先輩も笑う。
「いや、いいよ。俺も楽しいし」
笑って答える先輩の表情に、その時ようやく一瞬胸が痛んだ。

今日、学校を出る時に智子に言われていた言葉を思い出したからだ。『あんまり期待もたせるようなこともしないようにね！』と。先輩が自分のことを好きなのかもしれないと気づきつつあるからこそ、そこは気を遣わなければいけないところだった。

思えば、すれ違う女の子たちは友達と来ているか、それかカップルで来ているかのどちらかだ。周りから見れば当然私たちもそう見えるだろうし、なんだかそのせいで逆に罪悪感すら感じそうになる。

「白石、俺やっぱりさっきのにしようかな」
とりあえず狭い店内を一周した頃、先輩がこちらの胸の痛みには気づくはずもなくそう言った。
「あ、はい」

我に返って慌てて返事をしながら、私は先輩を見上げる。
「さっきの蝶のやつ」
ピアススタンドのところまで戻りながら、先輩はそう続けた。

会計してくるから待ってて、という先輩の言葉通り、私は店内を見回しながらそれを待つ。手にした携帯ホルダーはとてもかわいかったけれど、それももう私には見えているようで見えていなかった。ただ、やはり安易に引き受けてしまったかな…と少しの後悔と罪悪感に苛まれる。だけど先輩のこの買い物に付き合うのは成り行き上仕方のなかったことで…。そう自分に言い訳したい気持ちも少しはあった。

「お待たせ、ありがとう付き合ってくれて」
かわいいラッピングをしてもらったらしい先輩は、その袋を手にこちらに戻ってくる。私の感情は悟られないようにニッコリ笑って応じながら、出口の方へと向かった。並んでそこを出て、他愛もない話をしながら駅の方へと向かう。来週からはテストがあるし、今日はテスト前最後の週末だ。先輩の方も、これ以上私を拘束するつもりはないようで言い合わせたわけではないけれど互いに帰路の方へと向かった。

「そういえば、部活の課題やった?」
先輩の言葉に、私は小さく頷く。
「テスト後にやる実験の予想ですよね。一応、できたと思うんですけど…」
「俺も、『一応』って感じ。それにしてもテスト前に課題出すなんて本城はやっぱり鬼だよなー」

先輩の口から出てきたその名前に、私は一瞬ドキリとした。別になんでもないような話題に出てきただけなのに、さっきの罪悪感のこともあって複雑な心境になる。

「そういえば本城といえば、最近変わった気しない？」

「……え？」

「なんかちょっと前より、話やすくなった気がするんだ」

続いた先輩の言葉に、私は少しだけ目を見開いた。

「そう…ですか？」

「うん……って、あれ？」

不意に、そこで先輩が急に足を止める。小首を傾げながら前方を見据え、「噂をすれば」と小さく呟いた。「え」とその視線の先を追って、私は大きく目を瞠る。その先にいたのは…見間違えるはずもない、人より高い長身。

「本城先生っ」

私が驚きのあまり固まっている隣で、都築先輩はそう先生に呼びかけてしまった。

驚いたのは、こんな場所で先生に出会ったからだけじゃない。先生の隣に…あの人がいたからだ。

「菅原？」

都築先輩もそれに気づいて、少しだけ眉を持ち上げた。先輩の声に反応して、少し離れた場所にいた先生と菅原先輩がこちらを振り返る。先生も私たちを見て…驚いたように珍しく固まっていた。

「あれ、都築に白石さんじゃーん」
今日もミニスカートな菅原先輩は、先生の向こう側からこちらへ歩み寄ってくる。

…どうして……先生とこの人が今日も一緒にいるの……？

少し勝ち誇ったような表情をしている菅原先輩は、都築先輩の前までやってきた。
「なになにー？もしかして2人付き合ってんのー？」
今時流行らないほど焼いた肌に白い歯を見せながら、菅原先輩は笑いながらそう言う。…私が先生のことを好きなのは知っているくせに……この言葉だ。
「いや、付き合ってはないけどデート」
ニッコリ笑って、都築先輩は生真面目にそう答えていた。

「そうなんだー。でもなんか時間の問題って感じー？2人ちょーお似合いだよー」
ライバルはこうやって蹴落とすことにしているんだろうか。わざとらしくニコニコしながらそう言った菅原先輩は、そこまで言って後ろを振り返った。
「ね、ユッキー。お似合いだよねー？」
「……」
菅原先輩に同意を求められた先生は、無言のまま特には答えずに持っていた煙草に火をつける。

菅原先輩と先生が付き合っているとは信じてない。だけど、2人

が自分の知らないところで会っていたという事実だけで胸が痛んだ。
どうせ、菅原先輩がまた無理言ってついてきただけに決まっているけれど。そう分かっていても、割り切れるほど私に余裕なんてない。

そして、何より…。

「じゃあな、菅原。先生さよなら」
都築先輩は、そう2人に声をかけて再び歩き出す。…私の手を、引きながら。

何より、先生にこんなところ見られたくなかった。

そう思うだけで、胸が軋んで悲鳴を上げる。

「……」
先生は、最後までこっちを見なかった。都築先輩の挨拶に小さく手を挙げただけだった。

「びっくりしたなぁ」
2人の姿から遠く離れた辺りで、都築先輩はそう呟いて少し笑う。
「やっぱりさぁ、付き合ってるって噂ホントなんだな、あの2人」
続けて言う先輩の言葉に、私はもう一度胸が痛んだ。

「でも…」
さりげなく繋がれた手を離しながら、私はようやくそこで小さく声を出すことができた。
「先生は…付き合ってないって言ってました」
搾り出すようにそう言ったのは、自分に言い聞かせたかったのかもしれない。

告げた瞬間、先輩は少しだけ目を見開く。それから少しの間の後、プッと吹き出すように笑った。
「白石～、そんなの、先生が『付き合ってます』なんてホントのこと言うわけないよ」
「……」
それきり黙りこんだ私に、ふと先輩もそこで真顔になる。

「言うわけない」
どういう意味があるのか分からなかったけれど…先輩は、念を押すかのようにもう一度その言葉を繰り返した。

＊＊＊＊＊＊

翌週の月曜日。私は多分、ひどい顔をしていたと思う。

テスト勉強疲れだけではない疲労を感じていて、精神的にも限界が来そうだった。ふとした瞬間に気を抜けば…あの時の先生と菅原先輩が一緒にいた姿を思い出してしまう。それを振り切るように頭を大きく振る仕草を、今日何度繰り返しただろう。

その日部活を終えた頃、周りの先輩たちも私の様子が少しおかしいことに気づいていたようだった。

先生は、朝からびっくりするくらい普通だった。でもそんな先生に声をかけるのも怖くて、今日は私から一度も化学準備室に顔を出せてはいなかった。

「白石ちゃん、大丈夫ー?」

私の様子に気づいた鎌田先輩が、顔を覗きこむようにしてそう尋ねてくる。いつも周りのことに気を配る…とても優しい先輩だ。私を含め、後輩たちの良き姉のような存在だった。

「今日元気ないねぇ。あ、そうだ、この後カラオケでも行かない?」

今日も気を遣わせてしまったらしい。そう言う優しい鎌田先輩に、その後ろにいたもう一人の女の先輩が「ちょっと鎌田」と呆れたように声をかけた。

「明々後日からテストだよ?そんな時にカラオケなんて何考えてんの」

「えーちょっとくらい大丈夫だって。それに悩んだ頭で勉強したって無駄だよ。発散しないとー」

実験器具を片付けながら、先輩はそう言う。この楽観的なところが鎌田先輩の良いところでもあり…私は好きだった。

「ああ言ってるけど…どうする?和美ちゃん」

もう一人の先輩に尋ねられて、私は力なく笑った。

こんなにも気を遣ってもらって…それを無下に断ることなんてで

きるわけもなくて。「行きます」と答えると、鎌田先輩は満面の笑みを浮かべた。

「よしっ、せっかくだから都築も誘ってやろっ」

続けた先輩の言葉に、私は「えっ」と一瞬焦る。

正直…もうできれば都築先輩と学校の外で遊んだりは控えたい。一昨日のことを思い出して、私は苦い表情で眉を顰めた。それでも、鎌田先輩にそれを告げるわけにもいかない。焦りながらも止めることもできず、困惑するしかなかった。

「来るかなぁ」

もう一人の先輩が、鎌田先輩の言葉にそう呟く。

「来るよ。白石ちゃんいるんだから」

さらっと答えた鎌田先輩のセリフに、私は思わず顔を上げた。

……そっか…周りの人も気づいてたんだ…。

私がそう思った瞬間には、鎌田先輩は少し離れたところにいた都築先輩の肩を叩いていた。

「都築、ちょっと今からカラオケ行かない？」

「カラオケ？テスト前に？」

吹き出すように笑った都築先輩が、小さく首を捻る。

「そ。白石ちゃんの元気がないから励まそう会なの」

「…ふーん…」

頷きながら、先輩がこちらを向くのが分かった。それに反応するように…私は思わず目を逸らしてしまう。そうした後に、露骨だったかもしれないと後悔したけれど。

「や、今日はやめとく」

都築先輩から目を逸らした私の耳に届いたのは、そんな返事をする声だった。

「えー、なんでぇ」

鎌田先輩の抗議の声に、都築先輩は少し笑ったようだ。

「ちょっと、これから本城に質問したいことがあるんだ」

「うへぇ。化学熱心だねぇ、あんた」

「ありがとう」

辟易したような鎌田先輩の言葉を笑顔で受け流しながら、都築先輩は笑う。

そのやり取りに、私は申し訳ないけれども少しホッとしてしまった。都築先輩には悪いけれど、これ以上彼とは必要以上に親しくしない方が良いだろうと思ったから。

安堵の息を漏らして…私は帰り支度を進める。

「……あ」

その際に、教室にノートを一冊忘れてきていることに気がついた。

どうしたの、と言うように首を傾げる鎌田先輩に、「すみません」と謝る。

「ちょっと忘れ物取ってきます。すぐに行きますから」

「分かった。じゃあ昇降口で待ってるね」

鎌田先輩たちに軽く頭を下げて、私はそのまま化学実験室から出

た。

長い廊下を抜けて、私は教室がある隣の校舎へと向かう。電気はついているというのに、もう薄暗くなってきていて生徒もほとんどいないためどこか不気味さもあった。足早に廊下を駆け抜けて、自分の教室へ急ぐ。こちらの校舎は部活には使われていないため、静かなものだ。自分の足音すら大きく響いて、気持ちの良いものではなかった。

そんな足音が自分のものだけではなくなったのは、階段を上がっている時だった。上の方から、誰かが下りてくる音がする。目線を上げてそちらを見やると、向こうも同時にこちらに気づいたようだった。

「……あんた…」

その人影は、私を見てそう呟くと不機嫌そうに眉を寄せた。

「……」

その顔を見た瞬間に、考えたくなかった色んなことが波のように押し寄せてくる。不快感すら感じそうなそれに苦々しく顔を歪めながら、私は歩く速度を更に速めた。…できれば、話なんてしたくなかったから。

「…っ」

だけど、無視して通り過ぎようとした瞬間に菅原先輩は私の腕を勢いよく引っ張った。

「何するんですかっ」
階段から落ちそうになりながら、必死でこらえる。もちろん落とすつもりだったわけではなかったので、先輩は私の腕から手を離さなかった。私が態勢を立て直したのを見てからようやく手を離して、鼻であしらうように笑ってから腕を組む。
「こっちのセリフだよ」
凄むような低い声を出しながら、先輩は私を睨みつけた。

「あんたさぁ、どういうつもり？ユッキーのことが好きなのに都築にも手出してんの？」
「…！？」
恐らく、この前のことを言っているんだろう。思い切り眉を顰めて、私は先輩の顔を見据えた。
「あんたこないだ私に偉そうなこと言ったけどさ、自分だって褒められないことしてんじゃん？」
「…ちが…」
「都築が自分に気があるの知っててデートしたんでしょ？サイテー」
違うと言いたいけれど、はっきりとは声にならなかった。理由はどうあれ、都築先輩の気持ちを知りながらも一緒に出かけてしまったのは事実だからだ。

「ま、残念。ユッキーあんたたち2人がデートしてんの見てもショックも受けてなかったし」
「……っ」
「あんたに少しでも可能性があったら、ユッキーもちょっとは傷ついてくれたかもしれないのにね」
笑いながら言うその菅原先輩の顔は、意地悪く歪んでいた。でも…何も言い返せない。先生が私になんて気がないこと、先生が傷つ

いてもくれないこと、そんなことは分かりきっていたことだから。

「サイテー女は手ぇ引きなよ。ユッキーは私が幸せにしてあげるからさぁ」

ニヤニヤしながら言う先輩は、畳かけるように続ける。

「あんたにユッキーのこと好きだなんて言う資格は……」

「菅原」

先輩が言いかけたその瞬間、階段の上から第三者の声がした。

先輩と同時に振り返ると、そこには一人の男子生徒が立っていた。

ハッと目を瞠った私と、口を噤んだ菅原先輩。……もしかして、聞かれた……？

「何」

私に畳みかけるチャンスを奪われて、菅原先輩は不機嫌そうにその人を見上げた。

地毛っぽいのに、少し薄い色素の髪。真面目すぎずルーズすぎずに着こなした制服は薄手のニットのベストを着ているせいで学年別の襟章がなかったけれど、履いている上履きで3年生であることがわかる。菅原先輩と同じクラスか何かなのだろうか…。ゆっくりと階段を下りてきながら、その人は無表情のまま続けた。

「学年主任の澤田が探してた。職員室」

平然と言うその人の様子に、私は少しホッとする。

…どうやら…この様子だと聞かれてなかったみたいだ。

「澤田が何の用よっ」
「さぁ。俺は見つけたら呼んでこいって言われただけだから」
小さく首を傾げてから、その男の人はそのまま私と先輩の横をすり抜けようとする。その横顔を眺めて、私は何となく確信した。
…もし聞かれていたとしても、この人はきっと誰かに喋ったりはしない。不思議と、そんな風に思わされる雰囲気を持った人だった。

「うっざいな、こんな時に！」
八つ当たりまがいに言いながら、菅原先輩は階段を下り始める。
「つうか律儀にそれを言いにくるあんたも超うざい！」
「……それはどうも」
本気で八つ当たりな先輩の言葉に、男の先輩は気を悪くした様子もなく肩を竦めただけだった。

それどころか、口元に薄く笑みを浮かべている。その余裕さが気に入らなかったらしく、菅原先輩は乱暴な足音をたてながら駆け下りていった。

「……っ」
関係ないこの先輩にまで、あんな八つ当たりな態度を取るなんて…。菅原先輩の自分本位さに腹が立って、私は一言文句を言いかけた。何を言うかは決めていなかったけれど、声を出そうと口を開く。だけどその瞬間に、男の先輩が私の肩をトントンと叩いた。
「いいよ、別に」
「でも…っ」

「いいんだ、こっちも悪いし」
「…え？」
「嘘だから。澤田が呼んでるなんて」
言って、先輩はそのまま再び階段を下り始める。その言葉の意味がわからずに一瞬茫然としてしまってから…私は、ようやくどういう意味か理解した。

「…あの…っ、ありがとうございました」
ペコリと頭を下げると、その先輩は少しだけ笑う。首を振って、そのまま今度こそ階段を下りて行った。

やっぱり…聞かれてたんだ。

それで…通りすがりなだけなのに助け舟を出してくれたんだ。

多分、この人は今日の話を誰にもしないだろう。噂にしてしまうような人なら、そもそも私を助けてくれたりしないだろうから。

「…」
向こうからはもう見えないと分かっていても尚、私はもう一度その人へ向けて深々と頭を下げた。

3.5 side:???

待ち合わせは、6時だった。それより一足先に教室へ戻り、机の中に忘れていた文庫本を取りにいく。段々と暗くなってきていた外の空の色は、もうその光を校舎の中まで伸ばさない。落ちかけた暗闇を照らすのは、校舎内の古い蛍光灯だけだった。

その校舎での部活もなく、放課後のそこは静かなものだった。恐らく、残っている生徒がいるのかどうかも怪しい。外と体育館からは運動部の声が聞こえてきていたけれど、こちら側は物音一つしなかった。

誰もいない教室で自分の席まで行き、置き忘れていた本を手に取る。そしてそのまま電気を消して、俺は来た道を戻った。ほとんど足音も立てずに、静かに歩く。意識してそうしていたわけではなかったけれど、そのせいですぐに異変には気づいた。

「…？」

階下で、言い争うような声が聞こえてくる。誰もいないと思っていた校舎内に、その声はこちらのそんな考えを裏切るように響いていた。

「都築が自分に気があるの知っててデートしたんでしょ？サイテー」

次の瞬間に耳に飛び込んできたのは、そんな声。不必要なほど大きく、高く響くこの声には聞き覚えがあった。同じ学年：隣のクラ

スの、菅原舞のものだ。去年一度だけ、同じクラスだったこともある。

（都築…？）

菅原が口にした名前に、俺は眉を寄せた。都築も去年同じクラスだった。彼とも菅原とも特別仲が良かったわけではなかったので、話の内容に興味があったわけではなかった。

だけど…。

「ま、残念。ユッキーあんたたち2人がデートしてんの見てもショックも受けてなかったし」

続いた菅原の言葉に、俺は少しだけ眉を持ち上げた。

『ユッキー』…菅原がそう呼ぶ相手に、覚えは一人しかいない。その名前が出てきて…初めて気づく。あまり他人が聞いて良い話じゃないことに。恐らく、近くに他には誰もいないだろうけれど。

「サイテー女は手ぇ引きなよ。ユッキーは私が幸せにしてあげるからさぁ」

階段の上部から下を覗き込むと、そこにいたのは予想通り菅原と下級生の女子だった。見たことのある子のような気もしたけれど…元々女子の顔を覚えるのは得意じゃない。分かったのは、ただ菅原が理不尽に絡んでるんだろうなってことだ。

「あんたにユッキーのこと好きだなんて言う資格は……」

「菅原」
タイミングは、ここしかないだろう。もしこれ以上誰かが来たらまずいし、何より隠れていたってしばらく動けなくなってしまう。何かを言いかけた菅原の言葉を遮るように、俺は階段を下りながら声をかけていた。

そこにいた2人が、同時にこちらを振り返る。内心で苦笑いを漏らして、俺は平然と続けた。
「学年主任の澤田が探してた。職員室」
何食わぬ顔で言うと、この上ないくらいに不機嫌に菅原の顔が歪む。
「澤田が何の用よっ」
吐き捨てるように言いながら、菅原は俺を睨みつけてきた。
「さぁ。俺は見つけたら呼んでこいって言われただけだから」
平然と嘘をついてしまいながら、俺は小さく首を傾げる。そして何も聞いていなかったフリをしながら、そこを通り抜けようとした。

その瞬間、菅原に絡まれていた彼女の顔を見やる。整いすぎた顔に、一瞬安堵のようなものが浮かんだのが分かった。

「うっざいな、こんな時に！」
ライバルを蹴落とそうとしているところだったんだろう。邪魔をされて機嫌の悪い菅原が、俺より先に階段を下りて行ってしまいながら苛立ちの声を上げた。
「つうか律儀にそれを言いにくるあんたも超うざい！」
この言葉には、思わず俺も笑わずにはいられなかった。唇に少し

だけ笑みを零してしまいながら、「それはどうも」とその言葉を受け流す。そんな俺の反応が余計にお気に召さなかったらしく、菅原はそのままドスドスと音を立てながら姿を消してしまった。

その菅原に、それまで黙っていた彼女が何事かを言おうと前のめりに階段の下を追おうとした。…恐らく、八つ当たりまがいの言葉を投げつけられた俺をかばおうとしたんだろう。

「いいよ、別に」

彼女の肩を軽く叩いて、俺はそれを制止する。

「でも…っ」

「いいんだ、こっちも悪いし」

「…え？」

目を丸くして聞き返した彼女に、俺は小さく答えた。

「嘘だから。澤田が呼んでるなんて」

言って、俺もそれまでと同じ歩調で階段を下り始める。言っている意味がわからなかったのか、一瞬彼女が黙りこんだ。それならそれでいい、と思って、俺はそのまま下りていく。だけどしばらくの沈黙の後、「あのっ、ありがとうございました」と慌てて彼女は頭を下げた。

首を振って応じて、俺は今度こそそこを後にする。菅原にまた出くわすのも面倒なので、隣の校舎を通る際に職員室の前を抜けるのは避けておいた。代わりに、科目ごとの部屋が並んだ廊下を進んで行く。

教師たちも部活に顔を出しているか職員室にいるかしているらし

く、その廊下も静かなものだった。ただ、一つだけ電気の漏れた部屋がある。プレートを見上げるとそこには『化学準備室』とあって、俺はさっきの菅原と彼女の会話を思い出した。

「……」

ちょうど、その時だった。

「本城先生」

低い声が、その部屋の中から漏れてくる。決して大きすぎることはないけれど、何かを決心したような重い響きを持った呼びかけだったのではっきりと聞き取ることができた。その声には聞き覚えがある。さっき菅原の言葉にも出てきていた…都築のものだ。

「お聞きしたいことがあるんですが」

どう考えても授業の質問なんかではないその声のトーン。さっきの菅原と彼女の話と合わせてみれば、大体の事態は想像がついた。

「……」

それ以上盗み聞きするのは趣味じゃないので、俺はそのままその部屋の前を通りぬける。角を曲がったところで、俺は自分が待ち合わせしていた張本人とぶつかりそうになってしまった。

「遅い！」

ぶつかりかけたのが俺だと気づいて、彼女は眉を寄せてそう言う。

「ごめん」と言いながら携帯の時計を確認すると、確かに6時を少

し回っていた。たとえ数分でも待つことができないのは、いつものことだ。じっとしていられない性格らしく、わざわざ待ち合わせだった剣道場からこちらへ来ようとしていたらしい。

「帰ろ帰ろ。お腹すいちゃったぁ」

いつものことなのでそれほど機嫌を損ねたわけでもないらしい。次の瞬間にはフッと表情を変えて俺の腕に自分のそれを絡めながら、彼女はそのまま俺が来た方向へ歩き出そうとする。

「…ちょっと待った」

だけどそっちに行けばまた化学準備室の前を通ることになるし、下手をしたら菅原とも遭遇しかねない。組まれた腕を引き戻しながら、俺は後ろを指差した。

「愛海、こっちから行こう。面倒くさいから」

「??なに、『面倒』って」

「いや、こっちの話」

肩を竦めて歩きだした俺に、彼女は釈然としない表情をしながら小走りについてくる。

「ねぇ、なんの話よ」

「……」

何も答えないのも、逆に引いてもらえないらしい。観念して、俺は唇の端を持ち上げて答えた。

「ユキ先生も大変だ、って話」

「……本城？」

中途半端に言ったせいで、彼女は先生の名前を復唱しながらも「わけがわからない」というように首を捻る。俺はと言うと、それを見て小さく苦笑いを浮かべるだけだった。

4

あの後、鎌田先輩たちとカラオケに行ったけれど気分が晴れるはずもなかった。気を遣ってくれた先輩たちには申し訳なさでいっぱいで…せめて無理をしてでも笑おうと努力したのにも気づかれていただろうか。2時間ほど歌って帰路に着く頃には、私は精神的にも疲労を感じていた。

重い足取りで、自宅へと向かう。今日は母が夜勤の日で、夕飯を準備するのは私の当番だ。疲れてそのままベッドに倒れこみたいところだけれど、先に帰ってきているだろう弟の祥太郎がそうはさせてくれないに違いない。

自宅近くの最後の角を曲がりながら、私は小さくため息をついた。ぐるぐると頭の中を駆け巡るように思い出されるのは、菅原先輩の言葉ばかりだ。都築先輩の気持ちを知っていながら一緒に出かけて最低だと…そんな私は先生のことを好きだという資格もない、と。一つも言い返せなかったそんな言葉が、胸をえぐるように突き刺さっていた。

「さいってい！」

そんな私の心を見透かされたような声が聞こえたのは、家の門の近くに来た時だった。一瞬自分のことを言われたのかと思い、私は顔を上げながら目を丸くする。声の主を急いで探すと、その女の子は私の前に立っていた。…こちらに背を向けて。

それと同時に、乾いた平手打ちの音。思わず一瞬目を閉じて肩を竦め、自分が殴られたかのようにその音に感情移入してしまう。
「あんたなんて地獄に落ちろ！」
凄まじい捨て台詞を吐いたその女の子が、踵を返した。振り返った彼女が、目を開いた私に気がつく。ハッと少し気まずそうな顔をしたけれど、そのまま走り去るように駆けて行った。

「…なんの修羅場？」
呆れたように、私はそこに取り残された弟に声をかける。玄関のドアの前で立っていた祥太郎は、私の問いかけに少し気まずそうに苦笑いを浮かべて見せた。

＊＊＊＊＊＊

祥太郎は、昔からモテる。運動神経も頭も良い方だし、姉の私には分からないがルックスだってすれ違う女の子が振り返るほどだ。2つ年下の中学3年とは思えないほど大人びている。加えて女の子には平等に優しいらしく、影が絶えることがない。
今まで家に連れてきた女の子も、何人いただろうか。そのせいか、今日のようなことを目にするのも初めてではなかった。

「いて、いてぇって姉ちゃん」
家の中に入ってすぐ、私はソファに座らせた祥太郎の頬に冷たい

タオルを押し当てた。時間がたつにつれて赤みが増してきているので、冷やさないと大変なことになりそうだった。
「文句言わない」
相当冷たいのだろう。タオルを押し当てられた側の目を閉じながら、祥太郎は顔を歪めていた。

「あの子、新しい彼女？」
祥太郎の傍から立ち上がりながら、私は何気なくそう尋ねる。特別興味があったわけでもなかったけれど、聞かない方がわざとらしいか思ったからだ。
「いいや？」
ソファに尊大な態度で座った祥太郎は、平然とそんな答えを寄越してきた。背もたれにだらしなくもたれかかって、足を組む。
「さっき勝手にここまで来たんだよ。そんで平手打ちされた」
「…あんたが何かしたんでしょ」
「何もしてないよ。『好き』だって言われたから俺は好きじゃないって言っただけ」
「……」
呆れたように祥太郎を見て、私は目を細めた。…世間ではそういうのを『何かした』って言うんじゃないだろうか。

「…もうちょっとさ、言葉の選び方があるでしょ？」
「もちろんそのまま言ったわけじゃないって。もっとソフトにオブラートに包んで言いましたよ」
タオルを片手で持ったまま、祥太郎は「姉ちゃんコーヒー淹れて」とついでのように我儘を言う。ため息まじりに食器棚からマグカップを出しながら、私は小さく首を捻った。
「じゃあなんでああいうことになるわけ？」

普通に告白されて、丁重に断って…ではあんな風にはならないだろう。インスタントコーヒーをカップに淹れながら、私は祥太郎にそう尋ねた。

「期待させたから、だってさ」

「……え？」

思わず眉を寄せて、私は祥太郎の顔を見つめ返してしまう。

「俺さ、女の子大好きじゃん？それこそ皆好きっていうかさ」

…そう。祥太郎は、よく言えば誰とでも仲良くできるけれど、博愛主義者というか…。誰にでも良い顔をするから人当たりはいいけれど、それは誰のことも好きじゃないことの現れのような気がして、私はそれを彼の欠点だと思っている。誰に対しても優しくできるのはいいことかもしれないけれど、祥太郎の場合は度が過ぎているのだ。

「だから、別にさっきの子にも皆と平等にしてたつもりだったんだけどさ」

「…うん」

「向こうは、その優しさを勘違いしたらしい」

お湯を注いだマグカップを手渡すと、「サンキュ」と言いながら祥太郎は続けた。

「それで『私の気持ちに気づいてたくせに優しくしてたなんて最低』って言われたわけだ」

「……なるほど」

小さく頷いて、私は自己嫌悪に陥りそうになる。姉弟そろって、同じような状況に感じられたからだ。

「…それはさ、やっぱり祥が良くないよ」
菅原先輩の言葉を思い出しながら、私はなだめるように祥太郎にそう言う。その女の子と都築先輩がかぶったように感じられて、なんだか申し訳ない気分にさえなった。

「…何で？」
目を細め、祥太郎はコーヒーを啜る。少し不機嫌そうに眉を寄せながら、唇を尖らせてこちらを見た。
「何で俺が、彼女にそこまで気を遣わなきゃいけないの」
誰にでも優しい男にしては、冷たいセリフ。少し意外で目を見開きながら、私は祥太郎を見つめ返した。

「好きなら好きって言えばいいんだ。『態度で表してるんだから分かるでしょ』って、そんなのそっちの勝手だよ。分かる？姉ちゃん。恋愛は頑張った奴だけが幸せになれるんだよ。想いを口にする勇気もないくせに、相手にはその想いを理解して優しくしてほしいなんて自分勝手すぎるだろ」
「……」
「彼女が最初から『好き』だって言ってきてたら、俺だって必要以上に優しくしないよ。それを言わずに接してきて、俺の優しさを勘違いされたっていい迷惑だ」
きっぱりと言い切る祥太郎は、珍しく真剣な目で怒っているようだった。あまり怒りという感情を表さないタイプだから…。それも少し意外で、私は思わず祥太郎から目線を逸らす。
「でも……私は…」
それでも私は、都築先輩にひどいことをしたんじゃないかと罪悪

感を抱かざるを得ない。祥太郎の言うことが正論だということもわかる。だけど、菅原先輩に言われたことも的を射ていると思わされたから。

「…っ」

祥太郎の話をしていたはずなのに、自分に置き換えて口にしそうになってしまったことに気づいて私はハッと我に返った。慌てて口を噤み、立ち上がる。取り繕うように「夕飯の用意するわ」とキッチンへ向かおうとしたけれど、そんな私を祥太郎が見上げていた。

「姉ちゃんの元気がないのもそれが理由？」

さっき口走りかけた一言で、私が同じような状況に立たされていることに気づいたんだろう。…相変わらず、姉に似ず敏い子だ。

「簡単なのでいいよね、私この後テスト勉強あるから」

祥太郎の言葉に答えずに、私は近くに置いてあったエプロンに手をかける。冷蔵庫から野菜を取り出しながら、その話を終わらせようとした。

だけど…。

「姉ちゃんが俺と同じような状況だとしたら、悪いのはその男の方だよ」

「……」

「だってさ、好きだって言われたら断りようもあるけど、告白もされてないのに邪険にできないでしょ？姉ちゃんだって」

「…それは…」

確かに、都築先輩の気持ちに何となく気づいているからと言って、うぬぼれるように冷たい態度を取るわけにもいかない。困ったように眉を寄せる私を見て、祥太郎は少し優しく笑ってみせた。

「言っただろ、幸せになりたきゃ伝えるしかないんだよ。姉ちゃんがその男と正面から向き合うのは、告白された時でいい」

「……祥…」

呟きながら、私はなんだか涙が滲んできそうになっているのに気がく。あんなに重くのしかかっていた菅原先輩の一言が、少しだけ軽くなったようにさえ感じた。

「…私も、幸せになれるかな…」

思わずと言った感じで漏らした言葉を、祥太郎はしっかりと聞いていたようだ。少しだけ目を見開いた後、唇を持ち上げて笑う。

「当たり前だろ。ちゃんと伝えれば、の話だけど」

「伝える資格、あるかな」

「資格？」

菅原先輩には、その資格がないと言われた。それを思い出して言うと、祥太郎は意外そうに眉を持ち上げて私の言葉を復唱した。

「だって、他の人と一緒にいるところを見られちゃったし…。それでも、伝える資格あるかな」

もうほとんど、私は祥太郎にというより自問しているような気分だった。

都築先輩の気持ちに何となく気がつきながらも、出かけてしまったのを先生に知られているのに…。そう思うと不安になったけれど、

祥太郎の笑顔がそれを一蹴した。
「資格なんて関係ない。好きだって言うのに誰の許可もいらないよ」
「……」
「ま、唯一姉ちゃんが伝えたらダメな相手がいるとしたら…」
ニヤッと笑って、祥太郎は少し空気を軽くする。…この子、大人びているとは思っていたけれどこんなにも大人な考えをする子だったっけ…。
「彼女もちとか妻子もちとか、他人の男ぐらいかな。それだけは絶対やっちゃダメだ。俺も彼氏いる子にはさすがにしないし」
冗談っぽく言って、祥太郎は笑った。

つられるように、思わず私も笑ってしまう。
「…ありがと、祥太郎」
照れくさいのであまり大きな声では言えなかったけれど、祥太郎の耳にはきちんと届いただろう。

「さて、ご飯作ろうかなっ」
さっきよりも元気を取り戻しながら、私は腕まくりをする。
「急いで作るね。簡単なのでいいでしょ？」
先刻と同じ問いを投げかけると、祥太郎は小さく首をすくめて見せた。
「姉ちゃんの作るご飯が簡単じゃなかったことあったっけ」
「……やっぱりかわいくない、あんた」
唸るように低い声で言うと、祥太郎は声を上げて笑った。

＊＊＊＊＊

私はそれまで、告白をゴール地点だと考えていた。というより、むしろ告白することなんて考えたこともなかったかもしれない。教師と生徒という立場で、それを受け入れてもらえるとも思っていなかったし…。だからこそ、告白をする時が来るとしたらこの恋が終わる時だと思っていたから。

だけど、そうじゃないんだ、と…。祥太郎の言葉を受けた今ならそう思える。

想っているだけじゃ、きっと傷つく資格もないんだ。伝えて始めて、傷ついたり笑ったりすることを自分に許せるのかもしれない。

「…よしっ」

先生とは、頑張って今まで通りに接しよう。気合を入れて、私は深呼吸をする。

ジャズの話や修司さんの話、なっちゃんや理沙さんの話…きっと前より話題は尽きないはずだから。

そしてテスト後の来週の誕生日、本当にあのお店へ連れて行ってもらえたら…。その時に云おう。自分の想いを。1年以上温めてきた、秘めたこの気持ちを…。

「なんか今日、和美すっきりした顔してない？」
翌日の学校で、由実が小首を傾げながら私にそう聞いてきた。
「うん、ちょっとね」
気合を入れた私は、返事をするにも毅然と答えて小さくガッツポーズをして見せる。
「なんかよくわかんないけど気合入ってるね。…あ、日直だからか」
日誌を書いている私を見て、由実はそう少し見当違いなことを言って笑った。

でも確かに、日誌を出しに行くだけでも先生と話ができる機会になる。それだけでも嬉しくて、私はさっきから急いでそれを広げて書いていた。

今日のクラスの出来事を記入し、勢いよく立ち上がる。
「行ってくるっ」
もう一人の日直には「出しておくからいいよ」と言っておいて、私は見送る由実に手を振って教室を飛び出した。

現実が甘くなかったことを知るのは、この後すぐ。

化学準備室のドアをノックして入った時、そこにいたのはいつも

の先生だったはずなのに…。

「何」

煙草を吸いながら、椅子に座ったまま先生は私に尋ねる。いつもの「何」とは違う…どこか冷たい空気を帯びた言葉だった。

「あ、あの…日誌を持ってきました…」

思わず気圧されそうになりながら、私は何とかそれだけ口にする。煙草の煙を吐き出した先生は、再びそれをくわえながらパソコンのキーボードを打ち始めた。

「そこに置いといて」

短く、そう言う。一度もこちらを見ないままに…。

それはまるで、ちょっと前までの他人に壁を感じさせる先生に戻ってしまったみたいだった。最近では、ようやく笑ってくれるようになってきていたのに…。あの日笑いながらピアノを弾いてくれた人と、同じ人だと思えないほどに。

「…まだ何かあんのか？」

日誌を置いても尚、硬直したように動けずにいた私に先生がそう尋ねる。…冷たい、声。こんな声の先生知らない。

「…いえ、失礼します」

ペコリと頭を下げて、私はそこを後にする。先生はとうとう、一度も私の顔を正面から見ることはなかった。

「……っ」

廊下を走って戻りながら、涙が浮かんでくる。だけどそれを流してしまうわけにもいかず、私は必死でそれを堪えた。

どうして…。

そんな思いだけが、胸の中を駆け巡る。

どうしてなんですか、先生…。

5

天気は晴れているのに、空が灰色に見えるのはどうしてだろう。自分の気分が落ち込んでいるからなのか、涙で視界がぼやけそうだからなのか。自分の席から見えるそんな窓の外を見上げながら、私は漠然とそんなことを思った。

「機嫌でも悪かったんかね」

由実が、私の前の席に座ってこちらを向いたままポツリとそう呟いた。

日誌を持っていって帰ってきた私の様子がおかしいことに気づいたらしい由実は、教室から他の人たちがいなくなるのを待って私の話を聞いてくれた。本城先生とのさっきまでのやり取りを聞き終えて、由実が漏らした感想はそんな一言だった。

「試験前とか試験中って、生徒だけじゃなくて先生たちだってピリピリすんじゃん?」

慰めるつもりで由実はそう言ってくれたのかもしれないけれど、私はその言葉に頷くことはできなかった。

機嫌が悪いとかそんな理由で…生徒にああいう態度を取る人じゃないと思うからだ。

「じゃなきゃさ、和美。そもそも本城と最後に話した…つーか会っ

たのは都築先輩と出かけた時なんでしょ？」
　由実の問いに、今度は私は小さく頷く。気を緩めると涙が出そうだったので、眉間に作った皺に力を込めて必死でこらえたままだった。

「それってさぁ、都築先輩と出かけたことが気に入らなかったってことじゃない？そうだとしたらユキサダの奴、妬いてるだけなんじゃないの？」
　小首を傾げてブリックのコーヒー牛乳を飲みながら、由実はそう言った。
「だってさぁ、それ以外でユキサダが和美に冷たい態度取る理由なんてないじゃん？」
　確信したように言い切った由実だったけれど、私は小さく吐息を漏らす。…私には、分かっていたからだ。先生が、由実の言うような理由で冷たくしているわけではないことを。

「違うよ、それは」
　小さく否定して、私は唇を噛み締めた。

　あれは…『嫉妬』とかそういう感情じゃなかった。

　もっと……そう、確固たる『拒絶』。

「なんか本当に…私と話したくなかったんだと思う。嫉妬とか八つ

当たりとか…そういう感じじゃなくて」
「だったら余計に意味わかんなくない？和美が何したって言うんだろ」
それは…確かに私も疑問だったけれど。確かに最近は私が先生の周りをチョロチョロしていたから、そういうのがうっとうしいとか理由は考えればなくはなかったけれど…。でも、急に態度を変えるほどのことではない気がする。私が迷惑だったら、先生はそもそもCDを貸してくれたりしないだろうし、徐々に距離を取るに違いないから。

「まぁ、ちょっと様子見てみたら？」
椅子から立ち上がりながら、由実は言う。明後日からはテストが始まるし、私もあまり由実を拘束するわけにもいかない。自分も立ち上がりながら、私は小さく頷いた。
「もしかしたら今日のは気のせいで、次は普通かもしんないしね」
励ますように言う由実は、そう言って私の背中をバンと大きく叩いた。

とりあえず、私はテストに集中しなきゃいけない。だけどなかなか手につくはずがないのも事実で、寝不足な上に疲労がきて状態は最悪だった。加えて、事態は私が思っているより最悪な方向へ進んでいるようだった。

由実の言うように、この前の先生の態度が気のせいならどれだけ良かっただろう。…いや、気のせいじゃなくても、話しかけようと

思えばそれができるだけマシだったのかもしれない。

あの後から先生は、化学準備室にいなくなった。いつもなら煙草も吸えない、うるさい教頭のいる職員室を嫌って準備室にこもっていたのに。あれからは授業中以外は職員室にしかいないようで、話かける機会すらなくなってしまった。生徒は、テスト前と期間中は許可なく職員室に出入りできないからだ。ＨＲを終えれば先生はすぐに戻ってしまうし、一瞬の隙さえ与えてくれない。

（これは…避けられてる？）

そう思うのは自意識過剰だろうか。でも、他の生徒に話しかけられた時はそれなりに今まで通り応じている気がしたんだ。元々なっちゃんのように人当たりの良い先生じゃないから、はっきりと確信を持つことはできないけれど。

仕方なく、一度も話しかけることもできないまま私はテスト期間を終えた。その間は部活もなかったので、都築先輩と顔を合わせることもなかった。先生の都合でテスト後も一週間部活はないということだったので、私は不安と安堵という矛盾した想いを同時に胸に抱えた。

そして、テストが終わって翌週。早速どの授業でもテストの答案が返ってくる。直前に色々なことがありすぎたせいで私のそれはどれも散々なものだった。ただ…。

「白石」

大好きなはずの低い声に呼ばれたのに萎縮しそうになりながら、私は小さく返事をする。歩いて行った先の教壇の前で、本城先生に化学の答案を返された。手渡す時も、先生はこちらを見ようとはしない。

「……」

その横顔に、胸が少しだけ痛んだ気がした。

そこを抑えながら、私は自分の席へと戻る。次に呼ばれた子とすれ違いながら、渡された答案の点数を確認した。

（92…）

ホッと安堵の息を漏らし、私は自分の席の椅子を引く。精神状態は最悪でテスト勉強に集中できなくても、化学だけは死ぬ気で頑張ったからだ。

先生と、約束したから。もし約束の点数も取れなかったら、今度こそ本当に話かける機会を失ってしまう予感があったのだ。

できれば、もう一度ちゃんと先生と話がしたい。借りていたＣＤも返さなくちゃいけないし、何より…。

先生が、何を考えているのかを知りたい。そして許されるなら自分の想いを少しでも伝えたい。それができるのは、この答案が最後の口実だと思った。

化学はその日の最後の授業で、後はＳＨＲだけだった。相変わらず、先生はＳＨＲを終えるとさっさと職員室へと戻って行ってしまう。

「……」

その日も話すきっかけすらもらえず、私は小さく吐息を漏らした。

「和美、大丈夫？」

部活に行く準備をしながら、智子がそう尋ねてくる。うん、とそれに小さく頷いて、私も力なく帰り支度を始めた。私の方は部活もないし、先生と話もできないなら長居をする理由もない。智子たちを見送って、そのまま帰ろうとした……その時、だった。

『２－Ａ　白石和美』

鞄を持ち上げた瞬間に流れた校内放送に、私は大きく目を瞠る。

『至急化学準備室まで』

聞きなれた、低い声。まさかそんな呼び出しを受けるとは思っていなかったので、私は驚きの余り一瞬声を失ったほどだ。だけど何とかすぐにそこから立ち直り、顔を上げる。ここでこうしていたって仕方ないし、自分にとっても絶好の機会がきたんだと思うことにした。

鞄を手にしたまま、小走りに化学準備室へと向かう。テスト前には教師の元を訪れる生徒が多かったので雑然としていた各教科の部屋が並ぶ廊下も、テスト明けの今は静かなものだった。人のほとん

どいない廊下を進み、行き慣れたはずの場所で足を止める。ドアの前に立つと言葉にならないほどの緊張感が押し寄せてきて、私は小さく息を飲んだ。

それから、深呼吸をする。吐き出すのと同時に腕を持ち上げ、控えめだけど聞こえるくらいの大きさでそのドアをノックした。

「どうぞ」

先生の声と同時に、「失礼します」とそこのドアを開ける。いつも通り椅子に座っていた先生は、窓の方を向いて煙草に火を点けているところだった。赤い光を灯したそれから、薄い煙が立ち上る。先生は唇からそれを吐き出しながら、ゆっくりと椅子を回転させてこちらを振り返った。

「…白石」

何気ない呼びかけすら、私は緊張に身を強張らせる。何を言われるのかと身体を竦めた私に、先生は少しだけため息をついたようだった。その表情に、何となく読み取ってしまう。

分かっていたことだけれど、いい話じゃないことは確実だ。

「あ、あの…っ」

今すぐその話をされるには少し覚悟が足りなくて、私は先生が次の言葉を続ける前に声を出してしまっていた。私が先に口を開いてしまったせいで、先生が開きかけた唇を閉ざす。代わりに、そこに煙草を咥えた。

放っておくと沈黙が降りてきそうな空気。それを打ち破るように、私は鞄に手を入れる。そこから借りていたＣＤを取り出して、先生の方へ差し出した。

「これ、ありがとうございました」

緊張した面持ちで、私はお礼を言いながら先生を見る。

「……」

手の中のそれを一瞥しただけで、先生は無言だった。そのまま、受け取らずに再び椅子を回転させてあちらを向いてしまう。それから小さく呟くように言った。

「やるよ、それ」

言われた言葉の意味が一瞬分からずに、私は「…え」と目を見開く。

「９０点以上取ったご褒美の代わり」

「……え？」

「呼び出した話ってのはそのことだったんだ」

続けた先生は、こちらを見ないままフーっと長い息を吐き出した。

それはつまり…誕生日の日にジャズバーに連れて行ってくれるという約束は守れないということ…？目を見開いたまま立ち尽くした私は、茫然と体の横で拳を握る。そうして力をこめていないと、真っ白になりかけた意識を持っていかれそうだったから。

「どうして…ですか？」

小さく尋ねた私の前で、先生はゆっくりと立ち上がる。外の方を向いたまま、煙草に手をやった。紫煙を燻らせるその姿は、いつも以上に絵になっているというのに…。余計に、遠い存在に感じられ

る。

「悪いな」

答えになっていない返事に、私は大きく首を振った。

「だって、先生あの時約束してくれたじゃないですか！」

「…だから、謝ってんだろ」

明らかに言葉と不似合いな口調で続けた先生は、不機嫌そうにだけれどようやくこちらを振り返る。その目はこちらを見ないままだったけれど、拒絶という壁を感じさせるのはこの前と同じだった。そのひんやりとした冷たい空気を感じながら、私は息を飲む。

先生は、約束を破るような人じゃないと思う。…というより、破るくらいなら元々約束なんてしない人だと思う。そうだとしたら…先生が頑なに拒む理由が何かあるはずなのに。

「……理由を教えてください」

言うと、先生は小さく息を吐き出した。煙とは違う…今度は本当のため息だ。

「2時間だ」

呟くように言った先生は、諦めたように重い口を開く。

「え？」と眉を寄せた私に、先生は続けた。

「昨日、校長と教頭に呼ばれて2時間説教された」

急な話に、私は再び目を丸くする。

「菅原とのことが噂になって、とうとう耳に入ったらしい」
事実じゃないことなのに…いや、事実じゃないからこそ、校長先生たちに注意を受けたのかもしれない。その時のことを思い出したのか、先生は苦々しく表情を歪めた。
「教師としての自覚を持って行動しろってな」
言って、先生は短くなった煙草を灰皿に押し付ける。
「それが理由」
そこでようやく、先生は私の目を見て告げた。

…『嘘』だ。

根拠はないけれど、私の直感がそう告げる。校長先生たちにお説教されたのは本当だろうけれど、それだけが理由だとは思えない。それこそ、それを理由に断るくらいなら先生は最初から約束なんてしなかったに違いない。

「分かったら帰れ」
短く言い放つ言葉は、私の胸に突き刺さる。
「…私は…」
搾り出す声に、喉が渇いて焼きつきそうだった。

「先生は、約束を破るような人じゃないって知ってるから」
はっきりと告げると、先生が少しだけ目を見開く。だけどそれも一瞬のことで、次の瞬間にはまた体ごとあちらを向いてしまった。
「待ってますから。ずっと…！先生が来るまで！」
言い切った私は、大きく息をつく。肩越しに少しだけこちらを振り返った先生は…表情は見えなかったけれど、相変わらず私との間

に壁を作っていた。

「行かないぜ、俺は」

最後通告のような先生の言葉が、冷たく冷たく室内に静かに響いた。

6

6月1日、17回目の誕生日を迎えるはずのその日、空はまた暗いグレーに染まっていた。今の自分の心境を鏡にでも映したかのような色だ。…この色は、どうしても好きになれない。光るような青い色を見たかっただけなのに。

「和美」

ずっと授業なんて身に入らないままだった私に、放課後になって智子が声をかけてきた。控えめなその声に振り返ると、案の定心配させてしまっている顔。

「ホントにいいの？和美さえ良ければ、私今日は部活を休んでも…」

優しい智子の言葉に、私は無理にでも口元に薄く笑みを浮かべて大きく首を左右に振る。

「いいの、大丈夫」

「でも…せっかく誕生日なのに」

先生と過ごすことができなくなってしまった今日。ただでさえ予定がなくなった上に、大好きな人に完全に拒絶されていて…智子は本気で心配してくれていた。

智子の申し出は嬉しかったけれど、それでも部活を休ませてまで落ち込んだ私に付き合わせるわけにはいかない。それに、一人になりたい気持ちもどこかにあった。

尚も心配そうにこちらを見つめる智子の視線を感じながらも、私は帰り支度をする。机の中の教科書を鞄の中へ移していると、その中に化学の教科書があるのが目に入った。

「……」

今日の授業中も、一度も目を合わせてもらえなかったな…。漠然とその時のことを思い出しながら、胸が痛む。

「白石」

低めの声に呼ばれたのは、その時だった。声のした方を振り返ると、その主は教室のドアのところに立ってこちらを見ていた。

「…都築先輩」

手招きされて、私はためらいながらも鞄を机に置いてそちらへ向かった。

ほとんどの生徒は部活へ向かうか下校してしまっている時間になっていた為、呼ばれた廊下に人気はほとんどない。それでも何となく廊下の隅の方へ移動しながら、私は内心でため息を漏らした。…今は、都築先輩にもできれば会いたくなかったからだ。

「どうかしたんですか？」

それでもそんな感情を態度に出すわけにもいかず、私は無理に笑って聞いてみる。先輩が私を訪ねてここまで来ることは今までに何度も会ったので、珍しいことではないのだけれど。

「うん、ちょっとこれを渡したくて…」

言われて差し出されたのは、ピンク色のかわいい袋だった。見覚

えのあるその袋に…すぐにピンとくる。これは、あの例の雑貨屋さんのものだ。

「…え…っと…？」

意味がよく分からずに驚いて顔を上げると、先輩はそれを差し出したまま照れくさそうに笑う。

「今日誕生日だろ？おめでとう」

「…あ」

沈みすぎた気分のせいで、ふとした瞬間には自分が誕生日だということすら忘れそうになってしまう。先輩の言葉で思い出したそれと、目の前に出されたそれがようやく線で繋がる。

先輩が妹さんにと買っていたピアススタンドの包みより、少しそれは大きかった。…つまり…またあそこへ行って私が欲しがっていたものを買ってきてくれたということなのだろうか。

「えっと…深く考えずに受け取ってもらえると…」

いつまでも手を伸ばさない私に、先輩は苦笑い気味に言った。『深く考えずに』…ということは、普通に先輩の気持ちに気づかないフリをして受け取ればいいということだろうか？

「……」

小さく、私は頭を振った。…そんなこと、さすがにできるわけがない。物をもらうのはそこにこもった気持ちごともらうことのような気がしたからだ。

「白石…」

「すみません、先輩」
私はやっぱり、先輩の気持ちはどうしても受け止められない。それに、まだ自分の気持ちすら先生に伝えていないのに…。人の気持ちを受け入れるだけのキャパシティを持ち合わせていなかった。

『おめでとう』と、言ってくれるのがあの人だったらどれだけ良かっただろう。先輩には本当に申し訳ないことだけれど、そう思ってしまう自分も心のどこかにいて…。そんな残酷な気持ちを持ったまま、先輩に笑顔を向けるわけにもいかなかった。

「…」
先輩もさすがに笑みを消して、ふと真剣な面持ちになった。その表情をまっすぐ見つめ返すこともできず、私は少しだけ目線を逸らす。…だけどそのせいで、窓の外に一つの影を見つけてしまった。

（…先生）
3階のここから見えた先生は、帰り支度をした後らしく下を歩いていた。もちろん、こちらに気づくはずもない。まっすぐに向かっているのは…恐らく教員用の駐車場の方。帰ってしまうんだとすぐに気づくと、それまで抑えていたはずの感情がぶわっと蘇ってきそうだった。

私は、やっぱり先生と一緒にいたい。それが叶わないなら、せめて先生にどうして私を避けるのかちゃんと聞きたい。…その理由が

聞けなくても…自分の想いは伝えたい。頑張らないまま、全てが自然に消えて終わってしまうのだけは嫌だったからだ。

「…先輩、すみませんっ」

頭を下げて謝って、私は踵を返す。先生を、追いかけなきゃ。頭の中はそれだけでいっぱいだった。

「……」

私のさっきまでの視線の先を追ったらしい先輩が手を伸ばしたのは、私が走り出そうとした瞬間だった。

「！」

グイ、と手首をつかまれて、そのまま引っ張られる。

「……本城のとこに行きたい？」

後ろから私を抱き寄せた先輩は、ぎゅっと腕に力をこめながらそんな言葉を耳元で囁いた。先輩が手を離したプレゼントが、床に落ちて固い音をたてる。

「…え？」

驚いて目を見開いた私だったけれど、それはつまり先輩が私の想いに気づいていたのだと理解した。

「どうせ避けられてるんだろ？行ったって無駄だよ」

「……先輩…」

『無駄』という言葉に胸を突かれそうになりながらも…私は次の瞬間にはハッと顔を上げた。先輩…どうして私が先生に避けられてることを知ってるの…？

「俺が、言ったから」
私の胸に浮かんだ疑問を読み取ったのか、先輩はそう続けた。
「……どういう…ことですか？」
声を絞りだしながら、そう弱く尋ねる。私の問いを受けて、先輩はぎゅっと更に自分の腕に力をこめる。

「白石が本城のことを好きなんだろうってことは分かったから…聞いた。先生はどう思ってるんですかって」
「……っ」
「どうも思ってない、普通の生徒だって言ってた。だから、頼んだんだ。だったら期待をもたせるような接し方しないでくれって」
「……」
それで、先生のあの態度…？納得できるような、できないような…複雑な感情が胸の中で渦を巻く。

「……」
…やっぱり、先生本人に聞きたい。そう思った私は、ぶん、と勢いよく先輩の腕を振りほどいた。
「白石！」
勢い余ってよろけそうになった先輩は、走り出そうとした私に再び声をかける。
「言っただろ、先生は…何とも思ってないって言ってたんだよ！」
先輩の必死な声に…私は泣きそうになっているのをこらえながら振り返った。
「それでも…！」

先生が私のことを何とも思ってないことなんて知ってる。だけど、だからこそ…。

「先生本人の口から聞かなきゃ、諦められません！」

先輩にというより…私自身に言い聞かせるように、大声ではっきりとそう口にする。走り出した私に、先輩はそれ以上引きとめようとはしなかった。

…先生。

避けるのは、本当に都築先輩に言われたから？

それとも、私の気持ちが迷惑だから？

必死で走りながら、私はとうとうこらえきれずに涙を流す。溢れるそれで顔がぐちゃぐちゃになっているのが分かる。今もう校舎内にほとんど人がいないのだけが救いだった。

2階への階段を降りて、窓の外を一度確認する。先生は、もう大分向こうへ行ってしまっていた。

「…先生っ！」

ガラッとそこの窓を開けて、私は大声で呼ぶ。だけど振り向きもしない先生は、そのまま駐車場の方へと向かって行った。

…もう…ここからじゃ声も届かない。再び踵を返して、私は1階

への階段を急いだ。

「…おっと」

1階の廊下に降り立って角を曲がろうとしたところで、誰かにぶつかった。「すみません」と謝りながら顔を上げたけれど、今はとにかく急ぎたかった。早くしないと、先生が行っちゃう。気持ちだけが焦りながら、私は再び走ろうとした。

「待て、白石」

ぶつかったその相手が…私の腕を掴む。驚いて振り返ると、そこにいたのはなっちゃんだった。

「なっちゃん、ごめんっ。ぶつかったのは謝るから…」

「そうじゃなくて、どうしたんだお前」

ぐちゃぐちゃの顔で、私は首を横に振る。

「今はとにかく行かせて！」

叫ぶように言ったけれど、なっちゃんは手を離してくれなかった。代わりに…低い静かな声で、「ユキのとこか」とため息まじりに呟く。

「行かないと後悔するの！早くしないと先生が行っちゃう！」

「…ダメだ」

気持ちだけが先走って、前へ進もうとする私になっちゃんは低くそう言った。都築先輩とは違って…なっちゃんなら行かせてくれると思ったのに。そう思って目を見開いた私は、次の瞬間にはなっちゃんの腕に抱きしめられていた。…さっきの、都築先輩と同じように。

「なっちゃん…！？」

だけど、先輩の時のように勢いだけでは振り切れない。ものすごい力に抗うこともできずにいた私を、なっちゃんはそのまますぐそこにあった資料室に押し込んだ。

＊＊＊＊＊

自分の想いが溢れて私をぎゅっと抱きしめた都築先輩と違って、なっちゃんの抱きしめ方は私を羽交い絞めにするような感じだった。まるで、飛び出して行こうとしたペットを押さえつけるような感じ。資料室に押し込まれて、もうきっと本城先生に追いつくことはできない。吐息まじりに諦めて力を抜いた私に気づいて、なっちゃんはようやく離してくれた。

「とりあえず、ちょっと落ち着け」

誰かが入って来れないように鍵をかけながら、なっちゃんは手近の椅子に私を座らせる。

「…ごめんなさい」

取り乱していたのがようやく落ち着いてきた頃に、私はなっちゃんにそう謝った。壁にもたれかかったままこちらを見下ろしたなっちゃんの方は、椅子に座ろうとはしなかった。立ったまま腕を組み、ため息を漏らしながら口を開く。

「で？何があったんだ？」

聞かれて思わず目線を逸らしてしまった私に、なっちゃんは今度はもっと大きな吐息を漏らした。

「…まぁ、ユキから大体のことは聞いてるけどよ。お前も話してみろよ。順を追って話してるうちに見えてなかったものも見えるかもな」

言われて、私はふと顔を上げる。

…そっか、なっちゃんは先生の親友なんだから、何かを聞いていてもおかしくはない。ただ、先生がなっちゃんに話した内容は私に教えてくれることはないだろう。それでも…確かになっちゃんに聞いてもらうことで見えてくるものもある気がした。

ポツリポツリと、私は小さい声でだったけれど一連の流れを話す。先生と約束していたこと、それが守られなかったこと。急に避けられてしまって、私にはその原因が分からないこと。それと…都築先輩のこと、菅原先輩のこと。

「…なるほどね」

聞き終えたなっちゃんは、かけた眼鏡の位置を直しながら呟いた。

「どうりでユキが最近仕事熱心なわけだ。お前のこと避けてたんか」

小さく頷きながら言うなっちゃんに、私は思わず目を丸くする。

「…って、なっちゃん…先生から聞いてるんじゃ…？」

尋ねると、なっちゃんは直した眼鏡の向こうで少し笑って見せた。

「ユキが俺にそんな話するわけねぇじゃん」

「！？…ひど、騙したのっ？」

思わず大声を出しそうになった私に、なっちゃんは「しぃ」っと口元に長い人差し指を立ててみせる。確かに、鍵のかかった部屋から声が聞こえてきたら近くを誰かが通った時に怪しまれる。

「まぁ、それはおいといて、だ」
「ひどいっ。おいておける問題じゃないです」
「とりあえずおいとけ、今は」
自分勝手なセリフを口にしながら、なっちゃんは小さく首を傾けた。

「そんでお前は、なんでユキに避けられてると思う？」
聞かれて、私は眉間に皺を寄せる。…まだ、自分なりの答えも出てない部分だったからだ。

「都築先輩は…自分が言ったからだって言うんです」
「うん」
「先生は…菅原先輩とのことを校長先生たちに説教されたからだって…」
「…うん」
「でも私は…正直、分からなくて」
どっちの言うことも本当かもしれない。でもどっちの言うことも、違う気がする。根拠のない勘だけれど…そんな予感がしていた。

「それが、正解」
はっきりとそう告げたなっちゃんのそんな言葉に、私は思わず顔を上げた。

「都築が『白石と親しくするな』って言ったからって…それだけでお前を避けるような奴じゃない、ユキは」

「…はい」
「だけど、都築の言葉が一つのきっかけではあるかもな」
「……『きっかけ』…」
その言葉を繰り返すと、なっちゃんは小さく頷いた。

「それと、ユキが校長と教頭に散々説教されたのも本当。だけどそれだけでお前を避けるわけない」
「……はい」
「でもそれもきっかけの一つ」
「……」
「でもその二つだけが原因なら、お前に悟られないように徐々に距離を取ればいい。そういうところあいつは上手いからな」
「……」
…ということは…。

「私を避ける理由が、まだ他にあるってこと…？」
問いかけるように尋ねたけれど、なっちゃんは頷きはしなかった。
だけどその無言が、逆に私の言葉を肯定しているようだ。

「…あいつの傷は深い」
「……え？」
やがて再び口を開いたなっちゃんのそんな言葉に、私は思わず目を見開いて聞き返した。そんな私から少しなっちゃんが視線を逸らしたのは…気のせいじゃないだろう。

「お前なら、それを癒してやれるかと思ったんだ」
それが、なっちゃんがずっと私を応援してくれていた理由…なん

だろうか？

「まさか、逆にここまでお前が傷つけられるとは思ってなかった」

「…なっちゃん…」

「ごめん」

いつも俺様ななっちゃんにしては、珍しい言葉。その優しさに思わず泣きそうになってしまいながら、私は慌てて首を横に振った。

「私なら、大丈夫だから」

それは、嘘じゃない。確かに精神的にはボロボロになりそうだったけれど、まだ…頑張れる。というより、私はまだ何もしてきていないはずだ。先生が何を考えて、何を見ているのか…。なっちゃんの言う通り癒えない傷を抱えているのが私を避ける原因なら…それを知りたい。

「なっちゃん、私行くね」

もう、帰ってしまった先生に追いつくことはできないけれど。それでも私には、やらなきゃならないことがまだある。

先生を、待ちたいんだ。きっと、約束を守ってあの場所へ来てくれると信じて…。

「……」

小さく頷いて、なっちゃんは今度は止めようとはしなかった。それに少しだけ笑って私も頷き返して、資料室の鍵を開ける。

急いで教室へと戻って鞄を持った私は、約束の場所へとただ急いだ。

7

…嘘…でしょ。

茫然と、私は立ち尽くす。目の前に広がるのは一枚の紙。
無造作ではなくむしろ小洒落た風に貼り付けられたそれを、恨めしそうに眺めてしまった。

学校を飛び出して、まっすぐにジャズバーへやって来た。覚えているそのバーのある地名から最寄り駅を調べだし、電車を乗り継いで来た。それなのに、ようやくたどり着いたそこは地下へ下るあの階段の入口にシャッターが閉ざされてしまっていたのだ。そこに貼り付けられた紙に、『マスターの都合により臨時休業致します』の意の挨拶文。

…ついてない。

ガクリと肩を落として、私はそのシャッターにもたれかかった。
カシャンと音をたてたそれが、迷惑そうに軋む。

先生の姿は、あるわけもなかった。
『行かないぜ、俺は』
あの時のそんな一言すら反芻される。

表通りから一本裏に入った通りにあるので、そこは静かなものだ。たどりついた時刻はもうすぐ6時になろうとしている頃で、段々と空が薄く闇を落とし始めていた。…自分は、何時まで待てるだろうか。

…いや、何時までも待つつもりだった。制服で中に入れないのは分かりきっていたので、店の前で先生を待つつもりでいた。それならば店が開いていなくたって同じ条件だ、いつまででも待てる。休業の紙を恨めしそうに見上げるのはやめて、私は自分を奮い立たせる意味で小さく首を振った。

「……」

うずくまるようにしてそこに座り、鞄を抱え込む。そうしていると、たまに「お嬢ちゃんどうしたの?」とニヤニヤしたサラリーマンが声をかけていくこともあった。聞こえていないフリをして無視していると、それ以上近寄って来られることもなかったけれど。

6月になって大分日が落ちるのが遅くなってきたと言っても、手首の時計が7時を指す頃にはもう辺りは真っ暗になり始めていた。元々天気が良くなかったということも手伝って、街があっという間に闇色に染まっていく。

「…さむ…」

今日から衣替えだったのが良くなかった。ブレザーは家に置いてきてしまったし、ニットのベストも夜にはあまり役に立たない。加えてそんな寒さに身震いした頃には、私は頬にポツリと落ちる雫に気がついた。

「…最悪…」

見上げると、そこにはポツリポツリと透明の雨が降ってきていた。徐々に地面を濡らしていくそれが、すぐにザーッと激しい音に変わっていく。慌てて身を縮めて数歩隣へ移動したけれど、そこには短い庇のようなものがあるだけで、屋根があるわけではない。ほとんど雨宿りの役目を果たしてはくれず、頬を冷たい雨が打ち付けていった。

…冷たい。

鞄の中から大きめのハンドタオルを取り出して、頭に乗せることしか凌ぐ方法はなさそうだった。

先生は…やっぱり来てくれないんだろうか。

きっと来てくれると信じたいところだったけれど、そう弱気になりかけたのは7時半になる頃だった。雨で額に張り付いた前髪をうっとうしくかきあげて、私は思わず吐息を漏らす。

どうしても、今日先生に会いたかった。会って話がしたかった。
もうジャズバーで先生のピアノが聴きたいなんて当初の夢は忘れてしまっていた。
ただ、会ってもう一度話がしたい。それだけなのに、どうして叶わないんだろう。
私は、そんなに無謀なことを願っているんだろうか？

「……っ」
もう、頬を伝っていくのが雨なのか涙なのか自分でも分からなかった。込み上げてくる嗚咽をこらえることしかできなくて、私は膝をかかえこむ。そうしてどれくらいの間小さくなっていただろう。

…やがて、雨がやんだ。

いや、雨の音は相変わらずだったのに、私の頭上に降らなくなった。
「…？」
目線をあげかけた私の頭に、続いてパサッと何かが降ってくる。
温かいその感触に、それがつまり大きなバスタオルだと気づいて私は力ない目を頭上に向けた。
「…風邪引くよ」
いつもの笑顔は見せてくれず、そこに立っていた修司さんは真顔でそう言った。

＊＊＊＊＊＊

「和美ちゃん、帰ろう」

…先生じゃ、なかった。

そう思ってまた膝をかかえてそこに顔を埋めた私に、修司さんは優しくなだめるように言う。ブンブンと首を横に振って応えて、私は心の耳を閉ざした。修司さんの声が聞こえないフリをして、自分の身を抱える腕にギュッと力をこめる。

どうして修司さんがここにいるのか…考えるまでもなかった。…きっと、先生に頼まれたからだ。それはつまり…彼がここに現れたということは、逆に言えばもう先生はここに来ないということで…。それが分かっていても、私はどうしてもここを動く気にはなれなかった。

「和美ちゃん」

前に会った時より少し厳しい口調で、改めて呼ばれる。分かってる。修司さんは本気で私の心配をしてくれているだけなんだ。

「…っ」

それでも、私は首を横に振るしかなかった。

「……」

どれくらいそうしていただろう。私に目線を合わせてかがんでくれていた修司さんが、フーっと長いため息をついた。

「…分かった」

持っていた傘を私に握らせて、立ち上がる。

「ちょっと待ってて」
踵を返して、修司さんはひどい雨の中を走り出して行ってしまった。

そんな彼が戻ってきたのは、１０分くらいしてからだっただろうか。その間も一歩も動く気になれず、私はまるで忠犬のようにそこに居座り続けた。微動だにしていない私を見て少し困ったように笑った修司さんは、戻ってきてすぐに私に何かを差し出してくる。
表通りにあるコーヒーショップの、温かいココアだった。

「何時まで待つつもり？」
私にそれを手渡しながら、修司さんはそう尋ねる。
「……何時までででも」
弱々しく答えながら、私は寒さと冷たさで震えそうな手でそれを受け取った。

「それはダメだ」
私の隣に座りこみながら、修司さんは言いながら自分の手にしたカップに口をつける。匂いからブラックコーヒーなのだと想像できた。
「和美ちゃんがあまりにも頑固だから、ユキが来るまで俺も付き合うよ。でも、高校生だから９時まで。それで来なかったら俺が送っていくから帰ろう」
譲歩するように提案されて、私は困惑したように眉を寄せる。
「…せめて今日のうちは待ちたいです」
「……じゃあ間を取って１０時まで」
どこが「間を取って」なのか理解できなかったけれど、私はそれ

以上ツッコミを入れる気にはならなかった。頷くこともしなかったけれど反論しなかったので、修司さんも納得してくれたようだ。

「…ごめんなさい」

譲れない部分は言葉通り譲れないので、代わりに私は小さく謝る。するとようやく修司さんはこの前会った時と同じような笑顔を向けてくれた。

「俺は別にいいんだよ」

頭に乗せられたバスタオルで、修司さんは私の頭を優しく拭いてくれる。

「かわいいお嬢さんのお相手ができて光栄です」

笑って冗談を言う修司さんの言葉に、ようやく私も少しだけ笑い返すことができた。

修司さんと2人になって少し心強くなったせいなのか、雨音が少し落ち着いた気がした。地面を叩くその雫の跳ねる様を、2人で言葉なくただ眺める。一本の傘は修司さんが持ってくれていて、更にこちら側に傾けてくれている気がする。申し訳なくて謝りそうになったけれど、それ以上言うと逆に怒られそうにも思えた。

「…和美ちゃんはさ」

やがて、長い長い沈黙の後に修司さんが重そうに口を開く。それまでは、遠慮して私に話しかけるかどうか考えていたのかもしれない。

「何でユキにそこまで本気なの？」

尋ねられて、私は少しだけ目を瞠る。そのまま横を振り返ると、

修司さんは「…いや」と唇を歪めた。

「ごめん、言い方が悪かった。ユキがイイ奴なのは俺ももちろん知ってる。でも、あいつちょっと難しいタイプでしょ？和美ちゃんみたいな子がわざわざ好きにならなくても…って思うんだけど」

「……」

「しかも教師でしょ？同じ学年とかにもっと付き合いやすい奴いるでしょ」

当然の疑問だと思う。嫌味でもなんでもなく、修司さんが普通にそう思っているのが分かる。

「俺から見てて、和美ちゃんは『先生好きー』みたいなミーハーな女子高生とは違うみたいだし」

付け足すように言って、修司さんはまたコーヒーを一口飲んだ。

「……」

でも、一言で答えられる質問でもなかった。どうして本気なのか……そう聞かれると、『本城先生だから』としか言えないような気もする。ただその意味を説明するのが困難なので、私は思わず黙りこんでしまった。

「…ユキは、難しいよ」

私が答えなかったせいなのか、修司さんは今度はポツリとそんな呟きを漏らした。

「抱えてる傷が深すぎる」

今日のなっちゃんと同じことを…口にした。

「和美ちゃんは、それを受け入れられる？癒す覚悟がある？」

わざと、意地悪な聞き方をしているようだった。修司さんにしては珍しい言い回しだとも思ったけれど、それは逆に修司さんがそれだけ先生のことを心配していることの表れでもあった。

「…分かりません」
正直に、答える。囁くほどでしかなかった声に、修司さんは少し目を見開いた。
「先生の傷を『受け入れる』とか『癒してあげる』とか…そんなことと考えたこともなかったから」
再び膝に顔を埋めて、私は続ける。
「ただ…私は先生と一緒に傷ついて、笑って…って、そんなことしかできないと思います」
癒してあげるなんて、うぬぼれたこと言いたくない。せいぜい自分にできるのは、『一緒に』泣いて笑うことだけだ。

「……」
私の答えを受けた修司さんが、少し口元に笑みを浮かべる。控えめに笑っていたけれど、どこか本気で嬉しそうだった。
「…由香子さんに聞かせてやりたかったな、そのセリフ」
「……え？」
聞き逃しそうになったその声に、私は思わず眉を寄せる。それをスルーした修司さんが、不意に顔を上げた。

「…8時50分。いい時間だったね」
修司さんの言葉の意味が分からず、私も顔を上げる。そうして隣の彼を見やると、修司さんは通りの向こうを見ていた。

…そこに、一つの影。

「じゃあね、和美ちゃん。約束の時間だ」

立ち上がった修司さんが、再び傘を私に握らせた。

私はというと…その向こうの影に目を奪われていて…。そのまま立ち去ろうとする修司さんに、お礼を言うことすら忘れてしまっていた。

「ユキ、バトンタッチ」

傘も持たずに歩き出した修司さんが、先生の横をすり抜ける時にその手から傘を奪い取る。それに抵抗することもなく譲り渡した先生が、代わりに雨に打たれることになった。

「…」

ボソリと何かを修司さんに囁いた先生が、そのままこちらにやって来る。私はまるで、スローモーションを見ているようにそれを眺めていた。胸のどこかでは信じられないという気分があって、自分の目を疑ってしまう。

正直、修司さんが来てくれた時点で半ば諦めていたから。それでも自分が納得できるまでは帰りたくなくて、意地になっていたから…。

「…先生…」

自分が夢を見ているわけではないことを確認するため、私は小さく呼びかける。相変わらず険しい顔をした先生は、それに応えるこ

ともなかったけれどまっすぐにこちらに歩いてきてくれた。その姿に、夢ではないことをゆっくりと理解する。会いたかったその姿に、私は再び涙が溢れ出すのを実感した。

「…先生！」

叫んで、私は立ち上がると同時に走り出していた。傘とバスタオルが地面に落ちて濡れたけれど、今はそんなことはどうでも良かった。水たまりを蹴って、しぶきが跳ねることすら気にならなかった。

「…っ」

体当たりするように、私はその大きな体に抱きついた。温かい腕の中で、こらえきれずに涙が次から次へと溢れてくる。

そうして私は、しばらくの間子どものように声を上げて泣いた。

8　side：Yukisada

『先生は、白石のことどう思ってるんですか？』
『何とも思ってないなら、期待させるような態度で接しないでほしいんです』
『教師じゃできなくて、同じ生徒の俺なら彼女にしてあげられることはいくらでもある』

都築の言葉を思い出すたび、俺は自分の中での苛立ちが大きくなっていっていることに気がついた。
…いや。苛立ちというよりも、自分の傷を抉られるようで目を背けたかっただけかもしれない。

「…ちっ」
ジッポで火を点けた煙草から、煙が立ち上る。その煙が目にしみるようで、俺は思わず眉を寄せた。

『あなたは、彼女のことどう思ってるんですか？』
都築の言葉に付随して思い出されたのは、４年前のあの男の言葉だった。俺を目の前にして、怯えたように小さくなった男。丸い縁の眼鏡をかけた、絵に描いたような真面目そうな男だった。
怯えて震え上がっているのに、土下座をした態勢でも俺に投げかける言葉は一歩も退かない勇気を振り絞っていた。
『あなたにはできなくて、僕なら彼女にしてあげられるってことも

あると思うんですっ』
だから?と思った覚えもある。
それ以上その男の言葉を聞きたくなくて、蹴り上げたくなった衝動を必死で抑えたことも。

…ただ、あの時も今回の都築とのことも…。

本気で俺が殴り飛ばして蹴飛ばしたかったのは、相手じゃなくて俺自身だったんだ。

＊＊＊＊＊＊

「やっぱりここにいたな」
何杯目かのコーヒーを飲みながら外を眺めていた俺に、ふと声がかかった。顔の向きはそのまま、俺は目線だけを上げる。そこにいたのは声の通り、今できれば会いたくない奴だった。

「あ、俺もコーヒー」
ちゃっかり俺の前に座って、貴弘はそう注文する。いちいちリアクションするのも面倒で、俺は頬杖をついたまま無視することを決めた。

「随分お早いお帰りでしたねぇ、本城先生」
椅子の背もたれに尊大な態度でもたれかかりながら、貴弘は嫌味

っぽく言う。
「そのくせ来てるのはここだもんな」
貴弘の言葉に、答えないまま俺は外を眺めていた。

昔から、ジャズバー以外でよく来るとしたらこの穴場のカフェだった。静かな上に、ほとんど常連客しか来ない。長居してもマスターもウェイトレスも迷惑そうな顔一つしないし、むしろいつでも歓迎してもらえる。必要以上に干渉されることもないので、余計な人間に会いたくない時はここに来ることにしていたのに…。

「…お前が来たら意味ねぇだろ」
八つ当たりまがいなことを毒づきながら、俺は舌打ちする。
「？」
貴弘はそんな俺の胸の内を知ってか知らずか、唇を持ち上げて笑っていた。

「お前、ここでこんなことしてる場合じゃねぇだろ」
タイミングよく運ばれてきたコーヒー。ウェイトレスに笑顔で軽く礼を言いながら、貴弘は俺にそんな言葉を投げかけてきた。ミルクを注ぎこんで、スプーンで半ば乱暴にかき回す。

「白石待ってんだろ？早く行って来いよ」
「…お前、何でそんなこと知ってるんだ」
相変わらずな情報通…と言えば聞こえはいいが。俺からしたら余計なおせっかい焼きなこいつは、一体どこからそういう情報を得るのだろう。

「本人に聞いたから」
そんな言葉を受けて、俺は思わず頭を抱え込みたい心境に駆られた。…白石と貴弘の仲が良いのもこちらとしては考えものだ。

「俺は行かねぇって言ってある」
「それでも待つって言われたんだろ」
「……」
あっさり返されて、俺は思わず返答に詰まった。言葉を返さない代わりに、再び窓の外を見やることで貴弘との距離を保とうとした。

…そう、そもそも白石のその頑固さが俺の中では想定外だった。

約束を守れないと言ったからといって…どうしてそこまで固執するのか。白石からしたら、俺に「約束も守れない嘘つき」というレッテルを貼りつけて終わりな話ではなかったか。俺の予想が正しければ、白石は都築のことが好きなはずだ。都築に「一緒に説明を聞くか」と誘われた時は嬉しそうにしていたし、何より土曜日の放課後に一緒に出かけていたほどだ。別に誕生日に俺とジャズバーに執着しなくてもいいはずなんじゃないか。

そう思った瞬間、あの日の都築とのやり取りが再び蘇ってくる。思い出したくなかったそれに眉を顰め、俺は無意識に胸の辺りに手をやった。

『先生は、白石のことどう思ってるんですか？』
急に尋ねられたそんな質問に、思わず目を見開いたのを覚えている。誰にもバレていないと思っていたはずが、都築にはバレてしまったのかと内心で少し焦った。
『何言ってんだ、お前』
ため息まじりに煙草の煙を吐き出しながら、そう言い返した。
『…白石は、先生のことが好きなんだと思います』
急にバカなことを言い始めた都築の顔は、それでも真剣だったけれど。
『何とも思ってないんなら、期待させるような態度で接しないでほしいんです』
『……そりゃお前のことだろ』
『？』
『白石が好きなのは、どう見てもお前だろ。くだらねぇ心配してんじゃねぇよ』
何が悲しくてこんなセリフを吐かなきゃいけないんだ。内心でそう毒づきながら、俺は自分にトドメを刺すようなセリフを口にした。
『…本気でそう思ってるんですか』
少し呆れたような、都築の言葉。俺からしたら、こいつが何を心配しているのか理解できない。こいつは何を怖がっているのか…。本気で白石が俺のことを好きだと思っているのか。
『……』
応えない俺に、都築は長いため息を漏らした。そして、もういいと言わんばかりに肩を竦めてみせる。
『まぁ、いいです。俺、先生には負けませんから。教師じゃできなくて、同じ生徒の俺なら彼女にしてあげられることはいくらでもある』

『…だから、あいつが好きなのは俺じゃねぇっつってんだろ』
俺の言葉を聞かずに自己完結させようとする都築の言葉が、それでも胸を抉るように引っかかったのは事実だけれど。

「…なぁ」
そんな回想をしていた俺は、貴弘の控えめな呼びかけでハッと我に返った。ごまかすように、ブラックコーヒーの注がれたカップを持ち上げる。それに口をつけると、生ぬるくなったマズイ味が口いっぱいに広がった。

「何で白石が、お前とジャズバーに行くのにそこまでこだわってると思う?」
貴弘の問いに、俺は苛立ちを隠せなかった。顔を歪めたまま足を組み、眉間に皺を寄せる。
「知らねぇよ。最近ジャズにハマッてるからだろ」
イライラしながら答えて、俺は指に挟んでいた煙草を口元にやった。その返事を受けて俺の様子を眺め、貴弘は小さく息をつく。

「んじゃあ、質問変える。お前が露骨に白石を避けてるのは何で?」
「……」
「都築に『期待させるな』って言われたから? それとも、白石が都築のことを好きだと思ってるから?」
「……」
「校長に菅原とのことを説教されたから、特定の生徒と親しくしない方がいいと思った?」
「……るせぇ」

「それとも、４年前のことを思い出すから？」
「うるせぇって言ってんだよ！」
気がつくと、俺は大声を上げながら身を乗り出していた。向かいに座る貴弘の胸倉を掴み上げる。

だけどそれも一瞬のことで、すぐにここが静かな店内だったということを思い出した。幸い今は他に客もいなかったからか、マスターもウェイトレスも見ないフリをしてくれたようだ。殴り合いのケンカにでもなれば、さすがに追い出されていただろうけれど。

「図星、か」
力を抜きかけた俺の手から自分のシャツを引き戻して、貴弘はそう呟いた。わざと無神経なセリフを吐きながら、あいつは唇を歪めて笑う。
「でもそのことが、白石に何の関係があるんだよ」
「……」
「お前のやってることは単なる八つ当たりだろ」
うるさい、うるさい！！
そう怒鳴ってしまいそうになるのを何とか堪えながら、俺は思い切り肩を上下させて怒りを静めようとする。拳にそれを乗せるのは簡単なことだけれど、ここで貴弘を殴ったらそれこそ八つ当たりだ。

「じゃあ、俺帰るわ」
本気で何しに来たんだと、聞いてやりたくなる。そんな俺の感情も見向きもしないまま、貴弘は平然とした面持ちで立ち上がった。
「あ、ついでに言わせてもらうけどよ」
俺の分までまとめて伝票を拾い上げながら、続ける。

「お前、いつまでそうしてるつもり？」
「…あぁ？」
眉を寄せて不機嫌そうに顔を歪めながら、俺は立ち上がったあいつを見上げた。

「いつまで、もういない女のこと引きずってんだよ」

…言いたいことを言ってくれる。

そう言い捨てた貴弘は、こちらの返事なんて待たないまま踵を返して帰って行った。…いや、俺が何か答えられるわけがないと分かっていたんだろう。

「……くそっ」
机の脚を蹴り飛ばしたい衝動にも駆られたけれど、それを必死で押し込める。そんな俺に同情したのか、ウェイトレスがタイミングを計ってコーヒーのおかわりを持ってきた。

＊＊＊＊＊＊

7時頃になって、俺はようやくその店を出た。マスターに迷惑をかけたことを謝ったが、向こうはさほど気にしていないようで「若いっていいな！」と豪快に笑っていた。店の脇にある駐車場に向かおうと扉を開けると、予想に反してかなりの雨が降っている。一瞬驚いて目を見開いてから、俺はふと胸のどこかで何かがひっかかるのを感じた。

まさか…という思いと、あいつなら雨くらいで帰らないだろうという確信に近い思いがある。思ったより頑なところがある性格をしているせいで、これくらいの雨では退かないかもしれない。嫌な予感がして、俺は車に乗り込みながら携帯電話を取り出した。

電話帳から出した一つの番号にコールすると、相手はすぐに出た。仕事中なら出ないだろうと思ったけれど、運が良かったのかもしれない。

『珍しいな、ユキから電話なんて』

電話の向こうで、修司はのんきに笑ったようだ。

「修司、今日そっちに白石行ってねぇか？」

『ん？和美ちゃん？』

「あぁ、店の中にいるならいいんだけど、制服で入れなくて店の前に立ってるかもしれねぇんだけど」

『…え、ちょっと待てよ、ユキ』

言葉を継ごうとする俺を、半ば慌てたような声で修司が制した。

『今日、うちの店臨時休業だけど』

「…え？」

どうりで、修司が簡単に電話に出たわけだ。タイミングよく休憩

だったりしたわけではないらしい。
『しかも何で和美ちゃんが一人で？……なんかあった？』
「……」
俺は答えなかったけれど、修司は電話の向こうで細く長いため息を吐いた。事情は分からなくても…俺の状況は理解できたのだろう。

『…分かった、迎えに行けばいいんだろ』
「悪い」
『いいよ、別に。家から近いし』
「修司」
通話を終わらせようとした修司に、俺は改めて呼びかける。ボタンを押しかけた手を止めたのか、修司は俺の言葉の続きを待った。
「もし白石が帰らないって言ったら…はっきり言ってほしいんだ。俺は行かないって」
『……よくわからないけど…その辺は俺の判断でやらせてもらうよ』
言い切ってから、修司は少し笑う。
『また連絡する』
「……悪いな」

そうして通話を終わらせる頃には、雨足は本格的になっていた。フロントガラスを叩く音が、まるで何かのメロディーを奏でるようにリズミカルだった。

何となくそこから動く気になれず、しばらくそうして雨の音に耳を傾けていた。そうしていれば、幾分か癒される気がしたんだ。だけどそんな静寂を破ったのは、携帯電話の着信音だった。
「はい」

相手はもちろん修司だった。さっきの通話から、２０分ほど経った頃だ。

『ユキ、和美ちゃんコーヒーとココアだったらどっちが好きだと思う？』

「……」

どこかのんびりした声の修司だった。思わず脱力しかけながらも、前に白石自身が言っていたことを思い出しながら「ココアだろ」と小さく答える。その問いはつまり、やはりその場所で白石が俺を待っていたということを示している。

『帰らない、って言ってるよ』

「……」

『ちなみに、ユキが言ってた通りのことは言わなかった』

「修司…っ」

悪びれもせず、平然とした口調。こいつのこういうところはある意味貴弘より食えない。

『いい？ユキ。俺、９時までは一緒に待つことにした。それ過ぎたらお前との約束通り、ちゃんと連れて帰るよ』

「……」

『さすがに雨でびしょぬれの子をそのまま帰すわけにはいかないから、ユキが来ないなら俺の家連れて行っちゃうけど』

「……お前なぁ」

『じゃあ、待ってるから』

最後にはおかしそうに笑って、あいつは通話を一方的に終わらせた。……家に連れて行くだなんて、そんなこと実際にはしないくせに。

それが修司の手だと分かっていながらも、無視することもできない。

「……っ」

舌打ちまじりに鍵を差込、俺はエンジンをかけて車を乱暴に走らせた。

9

長い…長い時間だった。

実際には数分だったのだろうけれど、私にはその間が永遠にも感じられるほど長くて…。留まることを知らない涙に、声は押し殺すことすらできなかった。ただ、子どもみたいに泣きじゃくるだけ。

私に抱きつかれた先生は、その間微動だにしなかった。私を受け止めるでもなく、受け入れるわけもなく。ただ、腕を所在なさそうに持て余しただけだった。

やがて、ほとんど人通りのないこの裏通りにも一次会帰りらしいサラリーマンがやって来た。それをきっかけに、私たちはどちらからともなくパッと離れる。酔っ払ったサラリーマンが訝しげにこちらを見ていたけれど、先生はそれを気にする様子もなく身を翻した。

「帰るぞ」

短く、一言だけ言い置いて…。

近くにあるお店の駐車場に、先生は車を停めていた。その前までやって来て、先生はリモコンで車の鍵を開ける。ずぶ濡れの格好で車の中に入るのは気が引けてしまったけれど、そう思って躊躇して

いるうちに後ろから先生に押し込むように乗せられてしまった。

「……」

修司さんに借りたバスタオルと傘を、先生は乱暴に後部座席に投げる。代わりに、新しいタオルを引っ張ってきて私の頭に乗せた。

「このまま家まで送ってくから、親への言い訳ぐらい考えとけよ」

車のエンジンをかけて一番先に暖房をつけながら、私に向けてそう言った。

…相変わらず、冷たい声。それとは反対に、暖房は暑過ぎるほど強くつけられていた。恐らく、寒さと雨の冷たさで震えていた私の為にだろう。乗せられたバスタオルで自分を包み込みながら、私はそれでも未だ涙を止められずにいた。

「……何で泣くんだ」

車を走らせてしばらくして…先生は短くそう言う。信号待ちになってから、煙草に火を点けた。そう言えば…前に乗せてもらった時は一度も吸わなかったっけ。煙草を口にする先生の横顔が、何かにイラついたように不機嫌に歪んでいる。

『何で』…？

聞かれてから、自分に問い直した。どうして私は泣いてるんだろう。

先生に、ここ数日冷たくされたから？
先生が、約束を破ろうとしたから？

浮かぶ要素はいくつかあったけれど、そのどれもが違うということを自分は知っていた。

「…先生が…来てくれたから」
胸に浮かんだ一番の答えを、私は小さく…でもはっきりと口にした。
「……」
だけど返ってくる答えは、なかった。

再び車内に落ちた沈黙。先生の吸う煙草の匂いだけが充満していく。その匂いも嫌いじゃなかったはずなのに、今日はやけに目に染み入りそうな気がした。

「行かねぇって、言っただろ」
やがてポツリと、先生が言う。
「でも…来てくれたじゃないですか」
「魔が差しただけだ。あそこで何かあって俺のせいにされても後味悪ぃしな」
サラリと答えて、煙草の灰を灰皿に落とした。黒と白の入り混じったそれが、ポトリと落ちるのを何気なく見やる。

「お前さ、何がしたいんだよ」
不機嫌そうに煙草を再び口に咥えながら、先生はそんな質問を口にした。言われている意味がよくわからなくて、私は思わず先生を凝視してしまう。冷たいその横顔は、紫煙を吐き出しながらも前を見据えたままだった。

「何って…どういう意味ですか？」
尋ね返すと、先生は今度は煙草のせいではなく本気でため息を吐き出す。
「そんなにあのジャズバーに行きたいなら修司にでも頼め」
「…っ」
「それか都築にでも言えば、付き合ってくれんじゃねぇか？」
嫌味なのか、本気で言っているのか…。どちらかは分からなかったけれど、私の胸を突き刺すのには十分だった。

「私は…別にあのお店に行きたくて意地になってるわけじゃないです」
これ以上泣きたくなくて、堪えようと眉間に皺を寄せる。すると睨みつけるように先生を見据える結果になった。そんな眼差しのまま、私は搾り出すように声を上げる。
「私は…先生と話がしたかっただけです」
言うと、目の前の先生はハンドルを右に切りながらわずかに鼻を鳴らした。

「話って、何の」
まるで「俺には話すことなんて何もない」と言わんばかりの口調。
拒絶されそうな壁を感じながら、私はそれでもぐっと顔を上げた。
「先生の態度が急に変わった気がして…その理由が知りたかった」
力を込めていないと、涙がまた溢れ出しそうだ。
「私は、先生が何を考えているのか…何を思ってるのか…それだけが知りたいんです」
…やっと、言えた。避ける先生と、向き合いたかっただけなのだと…。

「…別に、何も考えてねぇよ」
取り付くしまもないというのは、こういう人のことを言うのだろうか。何も考えてないはずなどないのに、先生は頑としてそう言い張る。
「言っただろ、女子生徒と親しいって勘違いされて校長に説教されんのが嫌なだけだ」
短くなったらしい煙草を灰皿に押し付けながら、続けた。
「嘘」
「嘘じゃねぇよ」
呟いた私に、先生はイライラしたように反論する。何度目かの信号でブレーキを踏みながら、「それより」と話を改めた。新しい煙草を箱から取り出しながら、ジッポで火を点ける。

「俺より、都築とちゃんと話した方がいいんじゃねぇのか」
「……え？」
言われた意味がわからずに目を丸くすると、先生は目を細めて煙を吐き出しながら言った。
「お前がそんなんだから、都築が余計な勘違いすんだろうが」

ジッポを胸ポケットの中に戻しながら、先生はそれでもこちらを見ないままだった。
「…勘違い…？」
「お前もな、都築のことが好きならそっちとちゃんと向き合え」
そこまで言われて、ようやく気がついた。先生は…私が都築先輩のことを好きだと思ってるんだ、と。

「俺のところに直談判に来るくらいだ。お前ら2人共、相手間違えてんだよ。お互いにちゃんと話し合えば両想いになって万々歳だろ」
イラついたような先生の声は、どこか投げやりにも聞こえた。吐き捨てるような言葉は、本心なのか私には計り知れなかったけれど。

「…先生…」
「あ？」
やっぱり、智子の言うとおりだったんだ。私の行動のせいで、都築先輩には先生のことが好きだと感づかれ、先生には先輩のことが好きなんだと勘違いさせてしまった…。
「私が、都築先輩のこと好きだと思ってるんですか…？」
恐る恐る、そう尋ねる。できれば肯定されたくなかったけれど、答えは当然のように想像できた。

「…だってそうだろ？」
前を見たままの先生の横顔は、私になんて興味ないようにも見えた。
やっぱり。思わず私は、愕然とする。そんなつもりじゃなかった

とは言っても、完全にこれは自業自得だった。

「……」

だから、挽回するのも自分の手でどうにかするしかない。突き放すような先生の声に胸はズキズキと痛んだけれど、私は気づかないフリをした。

「…私は…」

焼け付きそうなほど緊張で乾く喉から、声を絞る。先生がこちらを見なくても、私は目を逸らさないと決めた。

「先生が思うほど、お人よしじゃありません」

溢れそうな涙を必死でこらえる。少しでも気を緩めたら、一気に流れ出そうだった。

「本当に私が都築先輩のことが好きなら、好きでもない先生とちゃんと話したいなんて思わない」

正面からちゃんと向かい合って話したいと思えるのは、先生のことが好きだから。そこに誰かのことを考える余裕なんて、1ミリだってないんだ。

「……」

私の言葉の意味を瞬時には理解できなかったのか、先生が真意を探ろうとしたらしく、思わずといった感じでこちらを見た。

…ようやく、私を見てくれた。その事実だけで、私を奮い立たせ

るには十分だった。

「他の人のことなんて考えられない。私が好きなのは本城先生です」

云う時は、絶対泣かない。胸に決めていたことを実行するために、私は眉間に更に力をこめた。

一瞬驚いた表情をした先生だったけれど、その時ちょうど後続車からクラクションを派手に鳴らされた。その音に我に返ったように前を向き直り、信号待ちしていた車をアクセルを踏んで再び走らせる。私の方は、それでも目を逸らさなかった。少し動揺したようにも見える先生の横顔を、ただじっと見つめる。

「……」

それでもそう見えたのはほんの一瞬のことで、次の瞬間には先生はまたさっきまでと同じ固い表情で前を見据えていた。返ってくる言葉はない。

だけど私は、待つ以外に何もできないことを知っていた。だから、膝の上で握った拳に力をこめるだけ。

「…着いたぞ」

どれだけ黙り込んでいただろう。やがて先生が発した声は、私に

対する「返事」ではなかった。
その言葉に私も我に返って辺りを見渡すと、確かにいつの間にか家の前までたどり着いてしまっていた。

「…先生」
「そのタオルは持ってっていい。返す必要もねぇから」
「先生！」
窓枠に肘をついて、先生はあちら側を向いてしまう。その頑なな拒絶に、私は思わず声を荒げていた。

『答え』すら、出してくれないの？受け入れてもらえるなんて思ってない。
それでも……。

「白石」
胸の奥が、痛みからかツンと熱くなっていく。こみあげてきそうなものを必死で抑えていると、先生が向こうを向いたまま私の名前を呼んだ。
それから…痛烈な一言。
「…さっきの、聞かなかったことにする」
「！……」
逸らさないと誓った瞳に、瞬時に涙が溢れ出した。抑えきれずに零れだしたそれが、頬を伝って手の甲を濡らす。

受け入れてもらえなくても、伝えたかった。でも、なかったことになんてされたくなかったのに…。

「先生っ」
こっちを、向いてもくれないなんて。
「先生！」
ちゃんと失恋させてもくれないなんて…。

胸の痛みが悲鳴をあげながらも先生を呼ぶと、次の瞬間、先生はガンッとものすごい音をたててハンドルに拳を下ろした。その勢いに恐怖すら感じそうになって、私はビクリと肩を強張らせる。
「いいから降りろ！」
怒鳴るように言われて、私は身を震え上がらせた。そして次の瞬間には、さっきまでとは比にならない涙が溢れ出す。

「……っ」
口元を押さえ、バスタオルを掴んだまま私は言われた通りドアを開けた。

そうして外に飛び出してドアを閉めた瞬間、先生はまるで何かから逃げるように車を走らせて行く。

残された私は、その場にうずくまって泣いた。

全身に降り注ぐ雨が痛い。

先生を待っていたあの時よりも、それは遥かに冷たく感じられた。

1

私の17歳の誕生日は、最悪な一日となって終わった。生まれて初めての告白は、受け入れてもらうどころか…いや、返事をもらうどころかなかったことにされてしまった。

「〜っ」

涙は留まることをしらず、これだけ泣いてもよく涸れないものだと感心させられるほどだった。

濡れた身体を温めるために、私は帰ってすぐにバスルームへ駆け込んだ。そしてその後は、リビングにいる家族に挨拶だけして自室にこもる。その頃にはなんとか涙は洗い流せていたと思うけれど、母親辺りは私の異変に気づいていたかもしれない。

何か言いたそうに私を見上げていた祥太郎も、ソファに座ったまま口を開きかけたけれどやがてそれを閉ざした。…恐らく、気を遣ってくれたんだろうと思う。

「……」

真っ暗な部屋の中、ベッドに横になるとまた視界がゆっくりと滲んでいく。頑なな先生の態度と冷たい声を思い出すだけで、胸が痛んだ。生温かい涙が横に流れ、やがてシーツを濡らしていった。

眠れるはずなんて、なかった。今までどんなに落ち込んでも一睡もできないことなんてほとんどなかったのに…。結局ろくに眠ることもできずに、私は朝を迎えることになってしまった。

正直、先生とどんな顔をして会えばいいのか分からなかった。完全に拒絶された私はもうこれ以上近くへ行くことも許されないだろうし、そうする勇気もなかった。だけどサボッてしまおうかという考えだけは、思い浮かばなかった。ここで学校を仮病で休んだりしたらそれこそもう二度とまともに顔を見れなくなる気がしたからだ。

「おはよう」

朝のＳＨＲの時間になって、そんな挨拶と共に教室に入ってきたのは副担任の相澤先生だった。高いヒールを鳴らして、教壇に立つ。誰もが一瞬、クラスメイトたちの顔を見合わせた。

「出席取ります」

言って名簿を開きかけた先生に、一番前にいた男子が「せんせー」と声をかける。そちらを見やった相澤先生に、その男子が椅子に横向きに座った態勢のまま尋ねた。

「本城は？休みー？」

その何気ない問いに、私はそれでも胸がドクンと緊張して悲鳴を上げるのを感じる。名前を聞くだけでもこれなのに、本人を前にしたら私の心臓は破裂してしまうんじゃないだろうか。

「ちょっとした用事があるの。１限目の途中からはいらっしゃいます」

「なーんだ、今日の化学休講になるかと思ったのに」

「それと、『先生』をつけなさい」
サラッと注意を受けて、その男子生徒は肩を竦めて舌を出した。
先生たちが仕事の関係で始業時間に来られないことはたまにだが今までにもあったことだ。どうやら私を避けて休んだりしたわけではなさそうだと思って、内心で少しホッとする。これ以上避けられたら、本当にこの上ないくらい落ち込んでしまいそうだ。

出席を取る相澤先生の声を頭の片隅で聞きながら、私は小さくため息をついた。

＊＊＊＊＊＊

「和美、大丈夫？」
２限目を終えた休み時間、茜が体操着を手にしながらこちらへ近寄ってきてそう聞いてくれた。…そう言えば、３時間目は体育だ。しかもバスケというなかなかハードな種目で、今の私には気が重い。

「顔色悪いよ？保健室行く？」
尋ねられて、少し私は考える。１限と２限はなんとか耐えたけれど、さすがにここへ来て睡魔はピークに達しているし、睡眠不足と貧血気味のせいで眩暈までしてきていた。確実に体育は出られないだろう。
「…うん…そうしようかな」
茜や智子、由実にはまだ何があったのか話せていない。それでも私の様子から、良くないことがあったんだろうという推測はしてくれているようだった。気遣うようにこちらを見る３人に、力なく笑

ってみせる。

「ちょっと、寝させてもらってくる。…4限には戻ってくるから」

自分に言い聞かせるように、私はそう言った。教室の前に貼ってある時間割表を見据えながら…。今日の4限のところに『化学』と書いてあるのを確認してから、茜がまた心配そうに眉を寄せた。

「大丈夫」

そう言い置いて、私はそのまま教室を後にした。

保健の先生に睡眠不足で気分が悪いと事情を話すと、苦笑いをしながらもベッドを一つあけてくれた。他には誰もいなくて、室内は静かなものだ。先生が何やら書類を書く音がするくらいで、そのリズミカルな音が逆に心地よくて私はすぐに意識を失うように眠ってしまった。

…そして、夢を見た。

真っ暗な闇の中を、必死で走っている夢。

やがてその先には小さな光が灯り、私は何かに追われるように…何かから救いを求めるようにそこをただがむしゃらに目指す。

足がもつれて転びそうになるほど、死に物狂いだった。何から逃げていたのかは…定かではなかった。

光が、ごく近くまで近づいてきた。
そしてその中に、一つの影が立っていることに気がつく。
「…！先生！」
一生懸命、その名を呼んだ。聞こえることはない、振り返ってくれることはないと知っていながらも…。

何度声が嗄れるほど叫んだだろう。幾度目かのその声に、やがて先生がゆっくりとこちらを振り向いた。そして、私に気づいて唇を持ち上げて笑ってくれる。それだけで胸がキュっと締め付けられるような感じがした。

「先生…」
先生は、笑っていた。あの日ピアノを弾いて聞かせてくれた時のような…幸せそうな笑顔で。それから、長い両腕を私に向けて大きく広げる。まるで「おいで」と言われているようで、私はそちらへ向けて涙を流しながら走り出した。

……そこで、夢が覚めた。

ハッと我に返ると、眠りに落ちる前と同じ白い天井が見える。薬品独特の匂いがして、保健室で眠っていたはずであることをゆっくりと思い出した。

「……」

目尻に触れると、夢を見て泣いていたのか涙の跡があることに気づく。それから夢の内容を再び思い出して…私は、また泣きそうになった。

夢の中では…振り向いてくれるんだ。現実には、一度もこちらを見てくれることはなかったのに。

夢は願望を見ると、誰かが言っていたことを思い出した。どうせなら正夢になってほしい。…そう願いたかった。

「…あ、時間…！」

一体どれくらいの間眠っていたのだろう。現実に意識を戻しながら、私は慌ててベッドから降り立った。

涙の跡を拭いて、白いカーテンをサッと引く。保健の先生にも寝かせてもらったお礼を言おうとしたけれど、そこに先生の姿はなかった。私がカーテンで仕切られたベッドから出てきた音で、室内にいた一人の男子生徒がこちらを振り返る。誰かが寝ているとは思っていなかったのか、少し意外そうに目を見開いていた。

「…びっくりした、白石いたんだ」

背の高い、いつでも穏やかな笑みを浮かべた男子だ。去年同じクラスだった…向井くんだった。

「…うん…ちょっと寝させてもらってたの」
泣いていたことには、気づかれないだろうか。もう一度目の辺りが濡れていないかさり気なく触れて確認しながら私はそう答えた。
「それより、今何時？」
ぐるりと見渡して保健室内の時計を探そうとしたけれど、私がそれを見つけるよりも向井くんが答える方が早かった。
「１２時過ぎたとこ」
「え…っ」
驚いて、私は大きく目を瞠った。

どんなに気まずくても、本城先生の化学の授業には出ようと決めていたのに…。どうやら私は体育を通り越して、４限の化学の時間まで眠ってしまっていたようだ。

「具合悪いの？大丈夫？」
相変わらず誰にでも優しいらしい向井くんは、何やら消毒液を取り出しながらそう尋ねてくれた。
「うん、単なる睡眠不足だから」
苦笑い気味に言うと、向井くんは「そっか」と少しだけ笑って返す。
その手には、すり傷があった。手のひらを怪我したらしく、かなりの広範囲で血が滲みでている。
「私やろうか？」
聞くと、向井くんは少し考えた後で「…いや」と答える。
「左手だから、大丈夫」

ありがとうと付け足して、向井くんは作業に戻った。恐らく、彼も体育の授業か何かで怪我をしたんだろう。

「そういえば…保健の先生は？」

聞くと、向井くんは消毒液が染みるのか少し眉を寄せながら口を開く。

「俺が来た時にはいなかったよ。不在の札がドアにかけてあったし」

「…ここの先生っていないこと多いよね」

「俺も同じこと思ったとこ」

今度は声をたてて笑う彼と顔を見合わせて、思わず私も笑ってしまった。その優しい笑顔に、少しだけ癒された気がする。私と先生の事情を何も知らない人とこうして話をしている方が…今はなんだか楽な気もした。

「…あのさ、白石」

少しの間互いに笑い合った後で、ふと向井くんが表情を戻した。不意に眉を寄せて、何か思案するように呼びかけてくる。

「ん？」

先を促すように聞き返すと、向井くんは少し言いづらそうに続けた。

「白石に関係ないことかもしれないけど……実はさっき……」

「？」

小首を傾げた私に、だけど向井くんはそこで口を閉ざしてしまう。

「……いや、ごめん。何でもない」

何か思うところがあるらしく、それきり再び私に背を向けて自分の消毒作業を続けた。

「……？」

『さっき』…？何だろう？

聞き返したい気持ちはあったけれど、向井くんの雰囲気からそれ以上尋ねても答えは得られそうにないと判断した。

「変な向井くん」

小首を傾げて言うと、向井くんは「ごめん」ともう一度言いながら苦笑いを漏らす。

結局彼の言おうとした言葉は、聞けないままだった。

2　side：Yukisada

『お前には誰も幸せになんてできない』
昔自分にそう言ったのは誰だったか…。

『お前自身が幸せになる資格もない』
言い聞かせるように説かれた言葉は、突き刺さるように今も自分の胸に残っている。

…そう。

そう俺に言ったのは、確か……。

「本城先生」
高めの声に呼びかけられて、俺はハッと我に返って顔を上げた。
授業中の職員室。今はちょうどどこのクラスも受け持っていないため、職員室で雑務を片付けていたところだった。
「顔色が優れないようですけど…大丈夫ですか？」
そう言ってコーヒーを差し出しながら、うちのクラスの副担任、相澤沙織はそう尋ねてきた。「どうも」とそれを受け取って、俺は再び机の上の書類に視線を落とす。

「単なる寝不足です」
「そうですか」
答えると、相澤はニコリと笑って隣の自分の椅子を引いた。

彼女も、今はどこのクラスも受け持っていないらしい。担当の英語の教材を広げながら、仕事を始める。
「あぁ、相澤先生」
思い出しながら、俺は再び呼びかけた。振り返った彼女が、少し首を傾げてみせる。
「今朝はＳＨＲありがとうございました」
言うと、「いいえ」ともう一度ニコリと笑った。
「とんでもないです。校長先生から頼まれてた雑務、終わりました？」
「何とか、おかげさまで」
答えて俺は、再び自分の仕事に戻る。

そう、偶然にも今朝は朝一でやらなくてはならない仕事が舞い込んできて、定刻通りに学校に出勤することができなかった。おかげで白石と顔を合わせなくて済んだ…と安堵している自分と、そのせいで余計に今日の化学の授業で会うのが気まずくなる予感がしている自分がいた。
まぁ元より、生徒は他にもたくさんいる。私情を出して授業を行うわけにもいかないので、いつも通りを装うしか俺には術はないのだけれど。

仕事をしている途中で少しでも集中力を欠けば、すぐに昨日の白石の泣き顔を思い出す。そういえば、結局最初から最後まで泣かせていた気がする。

「……」

自己嫌悪に陥りそうになったりもしたけれど、そうして落ち込むことすら今の自分には許されない気もした。

…正直、まさかあんな告白を受けるとは思っていなかった。あいつが好きなのは都築なんだと俺は本気で思っていたし、それが一番自然だと考えていたから。

…そう言えば、自分の気持ちを云う時だけはあいつも泣いてなかったな。ふとそんなことに気づくと、胸がより一層痛んだ気がした。

そこで、3時間目終了のチャイムが鳴る。次は自分のクラスで化学の授業がある。ため息まじりに授業の準備をして、俺は始業のベルと同時に教室に入れるように職員室を後にした。

「きりーつ」

日直の号令で、生徒たちが立ち上がる。

「礼」

一礼して席についた生徒たちを眺めてから、俺は出席簿を開いた。

「欠席は島村だけだな」

言いながらチェックをして、ふと顔を上げる。それから、真ん中の列の後ろの方の座席がぽっかりと空いていることに気がついた。

あそこは……。

「白石はどうした？」
誰とはなしに尋ねると、前の方の席で江口由実が手を挙げた。
「具合が悪いそうで保健室でーす」
白石の仲の良い友達の一人だ。間延びするように言いながらも、目はまっすぐに俺を睨み据えている。昨日のことを既に聞いているのかどうか定かではなかったけれど、俺が関係していることぐらいは分かっているんだろう。
「そうか。授業始めるぞ」
何でもないことのように言って、俺はすぐに教科書を開く。
その日の授業中、江口がずっと不満そうに睨みつけてくるのには思わず苦笑いしかけた。白石の友達の中では、江口が一番分かりやすい性格をしていると思う。

「…ここまで、ちゃんと復習しとけよお前ら」
授業が半分ぐらい進んだところで、俺は当初の予定通り教科書を閉じた。
「よし、じゃあ小テストやるぞ」
「えっ、聞いてねぇよ先生」
「言ってねぇからな。おら、隣と机離せよ」
うげっという表情で絡んでくる生徒を適当にあしらって、俺はそう指示をする。

一様にブーイングを起こしながらも、言われた通り隣との間隔を取り始める辺りこいつらは素直だと思う。残り時間いっぱい使わせるつもりで問題用紙を配ると、それぞれテストに取り組み始めた。
教壇からその様子を眺めていたのは、１０分くらいだっただろう

か。集中しきっている生徒は恐らく気づかなかっただろう。そっと俺は教室を抜け出た。俺がいなくなったところで、あいつらは騒ぎ始めたりカンニングをしたりすることはないと分かっている。

こういう時、やはり進学校の生徒はやりやすい。

白衣を翻して、俺は廊下を音をたてないように歩いた。隣のクラスからはまた貴弘が授業の合間にバカ話をしているのか、生徒たちのドッと笑う声が聞こえる。その前を素通りして、さしかかった階段を足早に降りた。

隣の校舎の1階の一番奥。目的の場所にたどり着くと、そこのドアには「担当不在」の札がかけられていた。…いつも思うが、この学校の保健医がここにきちんといたことの方が少ない気がする。それでも評判の悪くない保健医の顔を思い出しながら、俺は小さく肩を竦めた。

「……」

中は、静かなものだった。物音一つしない、誰もいない。

ベッドの一つにカーテンの仕切りがされていたので、恐らく白石はそこにいるのだろう。

来て、どうするつもりなのかはあまり考えていなかった。昨日散々傷つけておいて、できる話も何もない。ただ、やはり自分のせいで体調を崩させたのかと思うと心配にもなったのは当然で、様子が見たくなっただけだ。できれば、眠っていてくれとさえ思う。

カーテンのすぐ傍まで移動すると、中からは微かだけれど規則正しい呼吸が聞こえてきた。

「……」

恐らく、本当に眠っているのだろう。安堵の息を漏らして俺は胸を撫で下ろす。それから、音をたてないようにそっとカーテンを引いた。

そこで横たわっていた白石は、恐ろしく白い顔をしていた。貧血気味なのか、それとも俺と同じ睡眠不足なのか…。どちらにせよ、やはりあまり体調は良くないのだろう。あれだけ雨に打たれて風邪を引くんじゃないかとさえ思っていたから、熱がないだけまだマシだったかもしれない。

たまに、何か夢を見ているのか眠ったまま眉を寄せる。苦しそうに少し唸るような表情を見せていた。それをなだめるように、俺は思わずその髪に触れていた。梳くように撫でると、白石の唇が微かに動く。

「……せん…せい…」

「!?」

起きているのかと思って一瞬手を引き戻しかけたけれど、どうやら眠ったままのようだ。ホッと息をついてから、俺は余計に胸が痛むのを感じる。こんなに辛い思いをさせているのは自分だと、自覚があったからだ。そんな白石の目からは、眠っているのに涙が一筋零れ落ちた。

「……」

その頬を包みこむように触れて、親指で涙を拭ってやる。少しだけ身じろぎした白石は、それでも目を覚ますことはなかった。

本当なら、昨日のあの時だって俺も自分の気持ちを云ってしまいたかった。それでもそうできなかったのは、俺の弱さ故だ。分かってる。…分かっているけど、どうしようもない。またもう一度昔と同じように、今度はこいつを傷つけるようなことはしたくなかったからだ。

「…っ」

いつぶりだろう。思わず、泣きそうになる。

同じように泣きそうな表情で眠る白石に、引き寄せられた。髪を梳くようにしながら、色の薄い唇に一瞬だけ自分のそれを重ねた。

「……ごめんな…」

聞こえないとわかっているけれど、俺はそう呟いた。そしてそのまま、身を翻す。

眉間に皺を寄せていなければ、４年前のあの時涸れたはずの涙が零れだしそうだった。

飛び出すように開けた保健室のドア。

「っ」

ちょうど入ってこようとしていた生徒がいたらしく、俺は出ようとした瞬間に思い切りぶつかってしまった。
「…悪い」
「いえ、こちらこそすみません」
泣いてはいなくても泣きそうな俺の顔に気づいたのか、そいつが謝りながらも少しだけ驚いた顔をしているのが分かった。
…貴弘のクラスの、向井直。どちらかというと、やっかいな人間に見られなくてすんでよかったという思いもある。謝る向井にできるだけ今の顔を見られたくなくて、俺はそのまま早足にそこを後にした。

＊＊＊＊＊

携帯電話にメールが入ったのは、放課後になってすぐだった。『仕事が終わったらすぐうちに来てー』と、緊張感の欠片もないメール。ため息まじりにそれを見て携帯を畳み、俺はそれを胸ポケットに押し込む。…乗り気ではなかったが、昨日の礼を改めて言わなくてはならないと思っていたから行くしかないだろう。

仕事を終えてその呼び出されたマンションに着いた時、時刻は１８時を回るところだった。オートロックでもないので、昔からの習慣でチャイムも鳴らさずそのままドアを引いた。玄関に入った瞬間、そこに主以外の靴が並んでいることに気がつく。それに思わずため息を漏らして、俺は遠慮なくリビングへと上がりこんだ。

「お、来た来た、人でなし」
「ろくでなし」
「人殺し」
「……」
明らかに最後の一つは違うだろう。ツッコミを入れるのも面倒で、俺はとりあえず言った張本人の頭をはたきながらその隣に座った。

叩かれた貴弘はそれでも笑いながら、ビールの缶を片手にしている。まだ18時だというのにすっかりできあがりそうになっているところが空恐ろしい。

「修司、これ悪かったな」
昨日預かったバスタオルを返しながら、俺はメールをしてきた張本人にそう言った。
「傘は玄関のとこに置いてきた」
「あー、うん、了解」
笑って立ち上がると、修司は冷蔵庫から新しいビールを持ってくる。俺に手渡しながら、向かい側に座った。

男一人暮らしの狭いキッチンでは、拓巳が何やら夕食の準備をしていた。俺に『ろくでなし』発言をしたあいつは、それでも素知らぬ顔でフライパンの上の物をひっくり返している。その姿を見て、思い出す。先月そう言えば、拓巳が妊娠した報告を受けたことを。取り出しかけたポケットの中の煙草を諦めて、俺は代わりにビールの缶を開けた。

「昨日、大丈夫だった? 和美ちゃん」

尋ねてくる修司に、俺は「あー」と曖昧な声を漏らす。
「悪かったな、ホントに。助かった」
「いや、俺は大丈夫なんだけどさ」
笑って言う修司は、答えをはぐらかされたことに気づいているはずだった。それでもそれ以上追求しようとしなかったのは、こいつの優しさ故だ。

「大丈夫なわけねぇだろ」
代わりに、優しさの欠片もない奴が口を挟む。
「泣きはらした顔で数学の授業中も上の空。こっぴどいフリ方したんだろ、お前」
いつもよりやけにつっかかるような言い方は、貴弘がどうやら本気で怒っているらしいことを物語っていた。
「えっ、先輩、和美ちゃんのことフッちゃったんですか？何で！？」
「それがこいつのわけわからねぇところだ」
拓巳の驚きの声に、貴弘が不機嫌そうに応じる。

「お前さ、何が引っかかってるわけ？」
つまみを口に放り込みながら、貴弘は眼鏡の向こうで鋭く俺を睨みつけた。
「白石が好きなのは都築じゃなくて自分だって分かったんだろ？それでも受け入れられないっておかしいんじゃねぇの」
「……お前に関係ねぇだろ」
ビールを呷って、俺は低くそう答える。
「大体、何でお前がそこまで事情知ってんだよ。白石はお前にそこまで何でも話すのか」
「んなわけねぇだろ。昨日お前との約束の場所に行くって言ってた時のあいつの顔見れば、告白するなってことぐらい嫌でも想像でき

る」
「……」
貴弘から視線を逸らし拓巳と修司とを見比べてみたけれど、どうやら2人も白石が俺のことを好きだということを知っていたようだった。
「…っ」
小さく舌打ちして、俺はこの上ない居心地の悪さを感じた。

「お前やっぱり、まだ引きずってんだな」
馬鹿にしたように鼻を鳴らして、貴弘は言う。
「昨日も言ったけどよ、白石には関係ねぇ話だろ」
「……」
「お前、まだ由香子さんに未練があんのか」
「…っ」
貴弘の言葉に、俺はギッと睨みつけ返す。拓巳が少しオロオロしてこちらを伺っているのが視界の片隅に映った。
「その名前を出すなって言ってあるだろ！」
怒鳴るように言うと、貴弘はそれでも萎縮すらせずにあざ笑う。
「ほらな、その反応が引きずってる証拠だ」
馬鹿馬鹿しい、と付け足して、貴弘は俺から目を逸らした。

「お前に何が分かるんだ」
言うと貴弘は目を逸らしたまま首を竦める。
「何も分かんねぇよ。ただ過去から目を背けて逃げてる奴の言うことなんて分かりたくもねぇ」
「…！」
ギッと唇を噛み締め、俺は思わず拳を握りしめていた。次の瞬間、バンッと乱暴にテーブルを叩く音が響く。何が起こったか一瞬分からず、俺は自分でも無意識のうちに握った拳をそこに叩きつけたん

だったかと本気で思ったほどだ。

「……」

貴弘も俺も、目を見開く。テーブルを叩いたのは俺でもあいつでもなかった。

「…いい加減にしろ、貴弘」

怒った目をした修司が低い声でそう言った。

「いくらなんでも言いすぎだ」

「『言いすぎ』？」

修司の言葉すら、貴弘は鼻で笑う。テーブルに拳を振り下ろした態勢のまま、修司は貴弘を見据えた。

「お前が言いたいことも分かるよ。だけど言いすぎだ」

「……」

「ユキは、屈折しすぎだよ。俺もそう思う。だけど、貴弘はまっすぐすぎる。正論なら何を言ってもいいわけじゃない。お前のは度が過ぎれば単なるキレイごとだよ」

こんな風に貴弘にくってかかる修司を見ることは今までになかったので、俺は思わず自分のことなのに傍観してしまう。拓巳も、意外そうに目を見開いたまま固まっていた。

「もっと人間らしい感情、理解できない？正論とキレイごとだけじゃ説明できないことだっていくらでもある」

「……」

「ちょっと頭冷やせ、２人とも」

言い切って、修司は喉を潤すためにビールを注ぎこむ。それを見

やっていた貴弘は、何か思うところがあったのか黙り込んだままだった。

「…帰るぞ、理沙」

やがて、そんな一言と共に立ち上がる。修司はそれを止めようとしなかったし、拓巳はその言葉に慌てて頷いた。

今は俺と貴弘を離した方がいいと判断したんだろう。拓巳と修司は、何か短くアイコンタクトをしたようだった。

「最後に1つだけ聞くけどよ」

少しクールダウンしてきたのか、声のトーンを落として貴弘は肩越しにこちらを振り返った。俺に向けた言葉を、低い声で放つ。

「いつから、白石がお前のこと好きだったと思う？」

問われて、俺はわずかに目を瞠った。

それは、確かに昨日から考えてみていたことだ。だけど正解なんて分かるはずもなかった。

「…知らねぇ」

俺も段々と落ち着きを取り戻しながら、続ける。

「どうせ最近じゃねぇの？修司んとこのジャズバー連れて行ってやったから、とか」

思い当たるとすれば、そこくらいしかない。女子高生に「恋に恋させる」分には十分な要素だっただろうから。

「お前さ、白石が他の生徒と同じようにミーハー気分でお前のこと

好きだって言ってると思ってるだろ」
「……」
半ば図星を指されて、俺は返す言葉もなく口を噤む。
「白石がお前のこと好きになったのは…去年の入学式前だ」
「…？」
眉を寄せて、俺は貴弘の背中を凝視した。

「会ったんだろ？入学式前に、学校裏の公園で」
「！」
それは、貴弘が知るわけもないはずのことだった。俺は一度も話したことがないんだから。つまり、白石本人から聞いているということで…。あの時のことなんて、あいつは覚えていないと思っていたせいで俺は思わず動揺してしまう。

「じゃあな、バカユキ。お前も頭冷やせよ」
「…どっちがっ」
言いかけた言葉を、修司に制止された。拓巳もこれ以上はまずいと思ったのか、貴弘の背中を押し出すように帰っていった。

「ユキ、明日貴弘に謝りなよ」
2人が帰った後、修司が片づけを始めながらそう言う。
「お前どっちの味方なんだよ。さっきは俺の肩持ってただろ」
「俺はどっちの味方でもないよ」
笑って言いながら、修司は空になった缶を集め始めた。
「喧嘩両成敗ってこと」

「……ふん」
「貴弘もさ、悪気があるわけじゃないんだから…。あれでユキのこと心配してるんだ」
「……」
「それ以上に、和美ちゃんのことが心配なんだろうけどね」
「…わかってるよ」
貴弘があんなにも突っかかってくるのは、俺と白石のことを本気で考えてくれているからだ。そんなこと、頭では分かっているんだが…。

「……あ」
そこで、不意に思い出した。

『お前には誰も幸せになんてできない』
『お前自身が幸せになる資格もない』
あの時、そう俺に言ったのは誰だったのか。

そう、４年前のあの時俺にそう言ったのは…。

由香子を失くした時の、俺自身だったんだ。

3

故意にではないけれども化学の授業をサボってしまった私は、そのせいで余計に先生と顔を合わせることができなくなってしまった。その後のＨＲでも授業でも、少し目線を外して黒板を見るか、下を向くか。それくらいしかできずに、その目を見る勇気はなかった。

大好きだったはずの低い声が、塞ぐわけにもいかない耳に届く。それだけで胸は締め付けられるように痛み、あの日の苦しみが蘇ってきそうなほどだった。

いつまでそうしているつもりか、自分でも分からなかった。このままでいいはずはないけれど、まだまともに先生の顔を見ることはできない。来週からは部活が始まってしまうので、顔を合わせる機会は格段に増えてしまうというのに…。

事態がより悪化したのは、ある日の昼休みだった。次の授業が移動教室だったのだけれど、私は古文の教師に頼まれた雑務を終わらせていたら授業時間ギリギリに移動することになった。もう智子たちは先に行っているだろう。手提のバッグに次の授業で使うノートやらペンケースやらを急いで入れて、それと共に美術道具を手にする。チャイムが鳴る寸前の教室を飛び出して、私は長い廊下を急いだ。

「…きゃっ」
角を曲がろうとしたところで、勢いよく誰かにぶつかってしまう。反動で思わず後ろに尻餅をついてしまいながら、私は「すみません…」と謝りながら顔を上げた。ぶつかった相手は、同じようによろけたようだけれど私のように本格的に床にお尻をつけてしまうほどではなかったようだ。
「廊下は走らないのよ？」
苦笑いをしながら、うちのクラスの副担任である相澤先生は私に手を差し伸べてくれる。

「すみません」
もう一度謝って、私はその手を取った。そうして立ち上がりながらも、手にしていた鞄の中身が辺りに散乱してしまっていることに気づく。慌ててそれを拾おうとペンケースに手を伸ばすと、先生は手伝おうとしてくれたのか長い髪を耳にかけながら私と同じように床にかがんだ。

「……」
その相澤先生が、何かを拾おうとした手を一瞬止める。その動きにわずかに首を捻りながら手元を見て、私はハッと目を見開いた。先生が拾おうとしてくれた物は…一枚のＣＤだった。

「…没収」
唇を歪めて苦笑を浮かべながら、相澤先生はそのＣＤを手にする。他にもＣＤやら雑誌やらを持ち込む生徒なんていくらでもいるけれど、こうして目の前にしては先生も黙殺するわけにはいかないんだ

ろう。

「……あの…それは…っ」

没収されても文句を言える立場ではないのだけれど、そのCDだけは私としてはマズイものだった。

…あの日…本城先生に「もう返さなくていい」と言われたジャズのCD…。借りた時の嬉しかった気持ちやら何やらを思い出したおかげで、今でも毎日鞄に入れて持ち歩いてしまっていたんだ。…あんなにはっきりと拒絶された後なのに、自分でも諦めが悪いとは思うけれど…。

「没収って言っても形だけよ。預かっておくから、放課後には取りに来なさい」

優しくて生徒に評判の良い相澤先生は、そう言ってニッコリ笑った。確かまだ24歳くらいで、いつもオシャレなスーツを着こなした美人の先生だ。だけど、そんな優しい先生の唇から次に放たれたのは私には残酷な言葉だった。

「でも、担任の先生には報告しなきゃいけないから…」

まだ散らばったままだった残りのノートや教科書を拾い上げながら、相澤先生は続ける。

「これは本城先生に預けておくわね」

「……っ」

私と本城先生にあんなことがあったなんて知らない相澤先生は、何でもないことのようにそう言って踵を返す。もちろん、先生は何一つ間違ったことは言っていない。そんなこと分かっているんだけれど…。

「……どうしよう…」
5限の始業ベルが鳴る中、私は立ち尽くしたままそうポツリと呟いた。

＊＊＊＊＊＊

放課後になるまで散々迷った。
由実には、「取りに行くしかないじゃん」と言われ…。
智子には「返したと思って取りに行かなきゃいいじゃん」と言われた。茜だけは、言葉なくただ私を心配そうに見守ってくれていた。

どうすればいいのか答えは出なかったけれど、渋々ながらも私はゆっくりと足を職員室へ向ける。散々迷って俯き加減に歩いている間も、ずっと頭の中はグルグルしていた。

恐る恐る覗いた職員室、廊下から見える範囲に本城先生の姿はなかった。
「……」
ホッとしたような、そうでもないような…複雑な心境で私は眉を寄せる。そこに丁度通りかかったなっちゃんが、「お、どうした」と声をかけてきた。
「…えっと…本城先生に用があって…」
なっちゃんの背に合わせて顔を仰向けながらも、私はその目を直

視することができなかった。なっちゃんは、きっと私が先生にフラれたことはわかっているだろうから…。

「ユキならこの時間は化学準備室だろ」

言って、なっちゃんは私の頭の上にポンと手を置く。言葉はなかったけれど、何だか慰められている気分だった。

「…そう…だよね」

小さく答えて、私は「行ってみます」と続ける。職員室に入っていくなっちゃんとはそのまま別れて、踵を返した。

…足取りが、重い。

教科棟の方へ移動しながら、私はため息まじりに歩いて行った。

たどりついた化学準備室。周りには人気がなく、静かなものだった。何度か大きく深呼吸を繰り返し、私は握った拳に力をこめる。そしてその手でドアをノックしようと、最後にもう一度息を吸い込んだ。

…ちょうど、その時だった。

「今日、白石さんから没収したものです」

中から、相澤先生の声がした。その声に…私は思わず手を止める。ちょうどタイミング悪く、相澤先生があのCDを持ってきたところらしい。

「目の前で彼女が落としてしまって没収せざるを得なかったので…。取りに来ると思うので返してあげてください」

それに返す本城先生の声は、聞こえない。今ここに入っていくのはどうかと思えて、私は仕方なく出直すことを決めた。

「それにしても…かわいいですよね」

身を翻そうとしたけれど、クスリと笑いながら言ったような…相澤先生のその一言が聞こえる。なんとなくその言葉に足を止めてしまい、私は息を潜めてそこで耳を傾けた。

「ジャズなんて…きっと白石さんの趣味じゃないだろうし。彼女の想い人がきっとジャズ好きなんでしょうね」

「……っ」

確かに、ジャズが好きな女子高生はそれほど多くはないだろう。それでも私が好きになったのは、何も先生と共通の話題が欲しいからという動機だけじゃない。あの日先生の家で流れていた音楽と…先生自身の指が奏でるメロディーに魅せられたからだ。

「好きな人の好きなものを好きになりたいなんて…とってもかわいい」

続けた相澤先生の言葉の真意は、分からない。閉ざされた扉の向こうでは表情も見えないし、声からは判別もできない。…でも…何故か褒められている気は全くしなかった。

「ね、本城先生。高校生ってやっぱりまだまだ子どもでかわいいですよね」

「……」

先生が、それにどう答えたのかは全くわからなかった。低い静かな声はここまで届かなかったし、それに応じる先生の「答え」を聞きたくない気持ちもあった。

（『子ども』…）

大人な先生たちから見れば、そうかもしれない。でも私は…それでも真剣に好きなのに。

先生も、私の想いは子どものおままごとみたいなものだと思ってるんだろうか？

「…っ」

そう思うと、胸がギリ、と鈍い痛みを訴えた。

それ以上相澤先生の言葉を聞きたくなくて、私は今度こそ来た道を戻った。

＊＊＊＊＊＊

CDを諦め、私は家へ帰ろうと校門を抜ける。梅雨の時期だから天気は悪く、いつ降り出してもおかしくない曇り空だ。折りたたみの傘が鞄に入っていることを確認しながら、私は駅への道を急いだ。

目の前に白い車が一台停まったのは、もうすぐ駅に着くという頃だった。スーッと停まったそれに、私はわずかに目を見開く。何で自分の目の前に、とか、一瞬で疑問はいくつも浮かんだけれど…。その次の瞬間には、それらの問いは全て解決してしまった。

「こんにちは、和美ちゃん」

助手席の窓を開けて、運転席の方から身を乗り出した修司さんが笑顔を見せる。驚いて目を丸くした私は、促されるままに助手席に乗り込んだ。

「この前は…すみませんでした」

迷惑をかけてしまったことは気になっていたけれど、修司さんの連絡先は一切知らなかったのでこの時までお礼を言うことは叶わずにいた。一番にそう言って頭を下げた私に、修司さんは人好きのするあの笑顔でニッコリと笑う。

「全然。気にしないで」

言って、車を走らせた。

「この後何か予定ある？良ければちょっと付き合って欲しいんだけど」

夕日が眩しいのか、修司さんは傍らからサングラスを取り出す。ちょうど真正面からの光が眩しくて、私の方のサンバイザーを下ろ

してくれた。
「あ、はい、大丈夫です」
小さく頷いて応じたけれど、私はどうして修司さんが私を誘いに来てくれたのかまだ理由が分からなかった。小首を傾げながら隣を見たけれど、修司さんの横顔からはそれは読み取れない。

「ちょっと遠出なんだけどさ」
代わりに、そんな言葉を投げかけてきた。
「なんかすごい評判の良いカジュアルイタリアンの店がオープンしたらしくて。行ってみたかったんだけど、誰も捕まらなくて」
苦笑い気味に言いながら、修司さんはハンドルを右に切る。ウィンカーの音が車内に流れるジャズのリズムと重なった。
「和美ちゃんが最後の頼みの綱なんだ。付き合ってくれる？」
一人じゃさすがに寂しくて行けないし。と付け足して、修司さんはまた笑う。その言葉を受けて、ようやく私は全てを理解した。

恐らく、誰も捕まらなかったなんて嘘だろうということ。そして、きっと修司さんが私を心配して様子を見に来てくれたんだっていうこと。

そう気づくと、私も少しだけ微笑み返していた。
「修司さんって、モテそうですよね」
言うと、前を向いたままだったけれどサングラスの下でわずかに目を見開く。「俺が？全然」ニヤッと笑って言う辺り、やはり本当はモテるんだろうと思う。

「あ、でも私、制服ですけど…」

「大丈夫だよ。堅苦しい店じゃないし、それに制服は正装でしょ」
「…はぁ…」
そういう意味でもなく、ただ２０代半ばの男の人が制服の女子高校生を連れることに抵抗があるんじゃないかと思ったんだけれど…。意外に修司さんはその辺は気にしないようで、平然とそんな風に答えてくれた。

お言葉に甘えることにして、私はそれまでより少し深くシートに座り直す。なっちゃんや先生の車と違って煙草の匂いすらしないその車内は、少し広めでとてもキレイに掃除されていた。恐らく、修司さんは結構車が好きなんだと思う。

「ところで、風邪引かなかった？この前」
話を戻して、修司さんはそう尋ねてくれる。瞬時にあの日の痛みが蘇ってきそうだったけれど、悲しい顔は見せたくないので微かに微笑み返した。
「はい、大丈夫でした。昔から体は丈夫なんで」
「ははは、そりゃ頼もしい」
笑って言う辺り、修司さんとしては私が風邪を引くだろうと予想していたらしかった。それはそうだろう。結構な雨に降られたのだから…。

「…修司さん」
改めて呼びかけると、修司さんはちょうど車を信号待ちで停止したところでチラリと横目で私を見た。それに気づかないフリをして、私は膝の上でつくった拳にキュッと力をこめる。
「…あの、私、先生にフラれちゃったんですけど……聞きました？」

俯き加減で目は合わせないまま、私はそう尋ねた。それに少しの沈黙の後、修司さんは再び車を走らせる。窓枠に右肘をついた体勢でハンドルを操作しながら、まっすぐの道を突き進んでいった。

「…いや」

小さく、答える。

「詳しくは聞いてない。何となくあの後のユキの様子で俺も貴弘も気づいちゃったけど」

「…そう…ですか」

確かに、先生は自分からは話さないかもしれない。それでもなっちゃんと修司さんなら、感づいて悟りそうだ。

「それが…フラれたというか…そもそも相手にもされなくて」

智子たちにも、まだ辛くて詳しくは話せていない事実。だけど誰かに聞いてほしかったという矛盾した想いもあって、私はこの時初めて綻るような思いで口にしていた。

「告白…したんですけど、『聞かなかったことにする』って…」

思い出しただけでも涙が出そうだった。だけどそれも何とか堪えて、私はあの日の先生とのやり取りをそう話した。本当にそこまでは予想していなかったらしい修司さんは、私の言葉に少しだけ目を瞠る。意外そうに眉を持ち上げた後、それでも口を挟むことなく私の話を聞いてくれた。

「…修司さん、あの時言いましたよね…先生の傷は深いって…」

「……」

前を向いたまま、修司さんは無言で小さく頷く。それを確認してから、私は伏せ目がちに呟いた。

「それって…一体どれくらいなんですか?私の告白を、聞かなかったことにしたいぐらい?答えを出すまでもなく…なかったことにし

たいくらい？」
「……」
黙ったまま、修司さんはしばらく答えなかった。
少しの間思案するように眉を寄せて…ただ車を走らせる。やがて夕日が更に傾き段々とオレンジ色の空に影が差すまで、どちらも口を開こうとしなかった。

「…和美ちゃん」
どれくらいの沈黙だっただろう。
流れていたジャズのＣＤが一周したらしく初めに戻ったところで、それを合図にしたかのように修司さんが再び口を開いた。
「はい」
少しだけ姿勢を正して答えると、修司さんは前を向いたまま続ける。

「ユキと由香子さんが、どうして別れたのかは俺からは話せない」
「……はい」
「でも、２人がどういう付き合い方をしてたのか…それだけは教えてあげられるよ」
言って、修司さんはようやくこちらを振り返った。

…その目は…もうさっきまでのように笑ってはいなかった。

4

「大学の時、出会ったユキは…もう結構な遊び人だった」
オープンしたばかりというそのイタリアンのお店は、かなりの盛況ぶりだった。他愛もない話をしながらその列に並び、ようやく席に通された時にはもう辺りはすっかり暗くなっていた。お互いにアルコールは飲めないので、ソフトドリンクで乾杯をする。そうしてからしばらくした後、修司さんはさっきの車での会話の続きをと思ったのか、急にそんな話を始めた。

「でも二股とか三股とか…浮気とかそういうんじゃなくて。相手の女の子たちもお互いが遊びだって分かってる感じっていうのかな…。それぞれ割り切って遊んでたから、修羅場になるような事態はなかったけどね」
先に運ばれてきた大皿のサラダを取り分けながら、私はそんな話を黙って聞く。
先生は昔女遊びが激しかった…というのは前から耳にしていたせいか、そこでいちいち傷つくことはなかった。

「誰とも付き合ってないのに周りにはいつも女の子がいるような…そんな感じ」
苦笑い気味に言った修司さんは、「ユキは一番モテたからね」と付け足した。

…今生徒たちから「不良教師」と恐れられている先生からは想像もできない。

「そんなユキが、急に由香子さんと付き合い始めた時はびっくりしたよ。遊んでた女の子たちともパッタリと途絶えて、本当に一人と付き合い始めたから」

サラダの小皿を修司さんの方へ差し出すと、「ありがとう」と言いながらそれを受け取る。それから、小さくため息をついたようだった。

「前も言ったけど、由香子さんとどこで出会ったのか…とか、詳しいことは俺も知らないんだ。ただ…始まりは、由香子さんの一言だったみたい」

「…一言…？」

「そう」

頷いて、修司さんは昔先生に聞いたという由香子さんの言葉を復唱した。

『かわいそうな人』

『どうしてそんな…自分の身を削るような他人との関わり方をするの？』

『本当は誰かに本気で愛してほしいし、愛したいんでしょ？』

「詳しくは知らないけど、そもそもユキは遊び人タイプじゃないはずなんだ。だけどああなってしまったのは…恐らく、俺と出会うよりもっと前に何かがあったんだと思う。でも多分…自分でもそんな人付き合いの仕方に疑問はずっと持っていて…。そこに由香子さんが、そんな風に言ったんだと思う」

修司さんは、そこまで言ってサラダを口に運ぶ。私はというと、フォークで野菜を刺そうとした手を…何となく止めてしまっていた。

「由香子さんは俺達より4つ上で、その時もう社会人だった。でもすごく小さくてかわいい人で…男だったら、守ってやりたくなるタイプの容姿っていうのかな…そういう人だった」

そこで初めて、胸がギュッと締め付けられる感じがした。そこから想像される『由香子さん』が、あまりにも自分とかけ離れたタイプだと思ったからだ。

「…まぁユキは、どっちかっていうとそういう小動物系の女の子はあんまり好きじゃないはずなんだけどさ」

苦笑い気味に言う修司さんには、もしかしたら私が一瞬傷ついたことを感づかれているんだろうか。

「考え方も、やっぱり社会人だけあって大人だなと思ったよ。色んな面で社会人経験があるっていうのは学生の俺たちなんかとは違うんだ。母性とも言うのかな……由香子さんは、包み込んでくれるような人だった」

「……」

「…と、俺も貴弘も思ってた」

「…え？」

「多分、ユキ自身も」

続いた言葉に、私は眉を寄せた。そこで、ウェイトレスが大皿のスパゲティを運んでくる。私のリクエストでオーダーしたクリームソースベースのそれは、温かい湯気を立ち上らせていた。

そのお皿の上を見つめながら…それでも修司さんは別の何かを「

見て」いるようだった。頭の中にある過去の映像を…思い出しているのかもしれない。

「2人はすごく仲が良かったけど……由香子さんが変わり始めたのはいつだったかな。ユキの周りのもの全てを憎むようになった。ジャズも、周りにいる女友達でさえも」

「……っ」

「多分、付き合い始めはユキのことを癒してあげたかったんだと思う。さっきも言ったけど、それはきっと彼女の母性本能だったんだ。だけど…付き合っているうちに、自分だって甘えたくなる。でも年上だから…とか色々考えてしまううちに、甘え方が分からなくなったんだろうね」

私が動くより先に、今度は修司さんが先にパスタのトングを手にした。脇においてある取り皿に取り分けてくれるけれど、さっきから食事は互いに進んでいない。

「我慢していたものが爆発してからは、ユキは大変だったよ。一番引き金になったのは理沙だったかもしれない。貴弘の彼女だったから、ユキの近くにもいたから」

「…理沙さん…」

「理沙とメールでもしようもんなら、手がつけられなくなるんだ」

「……」

「泣いて叫んでユキを責めて……家の中の物を投げたりして」

「……浮気したわけでもないのに…ですか？」

「うん。女友達でもダメ。だって、ユキの趣味だった『ジャズ』だってダメなくらいなんだから」

そう言って、修司さんは由香子さんが『ジャズ』に先生を取られてしまうんじゃないかと思ったんだろうと続ける。

「元々遊び人だったユキを知ってるから…余裕を装って付き合い始めたけれど、いつか捨てられるんじゃないかと不安だったんだろうね」

「……そんな…」

「前に和美ちゃんに言ったよね。ユキは…自分の趣味のジャズの領域に女の子を踏み入らせなかった、って」

「…はい」

「それは本当なんだ。でも由香子さんの時の場合は…、自分の領域に踏み入られたくなかっただけじゃなかったと思う。由香子さんがジャズに嫉妬して狂うと思ったから…近寄らせたくなかったのもあると思うんだ。由香子さんは、段々とユキの目に映るものが自分以外にもあることが許せなくなっていってた。それは…他人の俺から見てもかなり病的だったよ」

「……」

そこで一度だけ、修司さんはわずかに目を伏せた。

『今日もライブ!?どうして、ジャズばっかり…ピアノばっかりなの!どうして私と一緒にいてくれないの!?』

『来週の休みに一緒に出かけるんだからそれでいいだろ』

『じゃあ私も今日そのジャズバーに行く』

『いい加減にしろよ!ジャズが嫌いなら来なきゃいいだろ!他の連中も迷惑だ』

そんな言い争いはしょっちゅうだったと、修司さんは続ける。

そうか…そこでたとえば本当に由香子さんがバーに来て、何の罪もない女友達を敵視したりすることを懸念したのかもしれない。

「だけど一度だけ本当に由香子さんが勝手にそこに来たもんだから…ユキの怒り方は凄まじかったよ」

…それが、前に修司さんが言っていた話だったんだろう。

「俺も貴弘も、別れた方がいいって何度も言った。貴弘は特に…理沙のこともあって、由香子さんのことを良く思ってなかったから」
　由香子さんの束縛が原因で…2人は更にケンカが増えていったらしい。その時のことを思い出しながら、修司さんは苦い表情を浮かべる。
「ユキもさ、我が強いところあるから…言い争ってることなんてしょっちゅうだった」

「でも、ユキは別れなかった。由香子さんの束縛が激しくなっても。これは俺と貴弘の予想だけど…本気で彼女のことが好きだとかいうよりは…それはもう情のようなものだったんじゃないかと思うんだ」
　そこで一度言葉を切った修司さんが、まっすぐにこちらを見つめてきた。
「…なんでか分かる？」
　尋ねられて、私は小さく首を横に振った。
「ユキが女遊びばかりしていて自分を省みなかった時…由香子さんに救われたことは、事実だから」
　そう言って、修司さんは手にしていたフォークを一度お皿の上に置く。ドリンクの入ったグラスを手にして、ストローから流れるそれを口に含んだ。潤すように飲み込むと、再び吐息まじりにコースターに戻す。

「でも、由香子さんのその束縛は本当にひどかったから…ユキも正直参ってたよ。だけどユキは…そこでどうなったと思う？」

急に尋ねられて、私は一瞬黙した。言葉を返せないなりに、少し思案する。

「……」

そうしても得られる答えは自分の中にはなく、小さく首を横に振って返した。

そこで修司さんは、先刻までよりも少し深く息を吸った。

「自分を、責めるようになったんだ。由香子さんがそういう風になったのは自分のせいだって…」

「！……」

「でもさ、自分のせいだ、自分がもっと彼女に優しくしてあげれば……ってそう思ったとしても、だからと言って急に全面的に彼女を受け入れられるようになれるわけじゃないんだ。ユキ自身だって、束縛に疲れる時ももちろんある。そうすれば彼女に冷たくあたってしまう。でもそうすればそうするほど、狂う彼女を見て自分を責める。…そんな悪循環に陥ってた」

「……」

「まぁその後、別れる時にも色々あって…詳しくは俺が話すことじゃないけど。とにかく、そういう感じだったからユキはきっと……」

一度言葉をそこで切って、修司さんは少しだけ私から視線を外した。

「自分が人を愛するってことに…ひどく臆病になってるんだと思う」

「……」

無言のまま、だけど私の方は修司から目を逸らせずにいた。

「多分、ユキは誰のことも幸せにできないと思ってる。そうする資格もないと思ってると思う」

修司さんの言葉は、どこか切なげに響いた。それは彼が本気で先生のことを心配しているからなんだろう。そう思うと、その切なさが伝染したかのように胸がどこかでキュンと音をたてた。

「俺が話せるのは、これくらい。だからユキは、和美ちゃんの告白をなかったことにしたかったんだと思う」

「……」

「和美ちゃんを幸せにする自信も、和美ちゃんに愛される自信もなかったから」

「……」

「……和美ちゃん？」

黙り込んだまま返事をしない私に、修司さんは小さく呼びかける。

「……た」

「……え？」

呟きはろくな声にならず、私の声にならない声を拾おうと修司さんはそう聞き返してきた。わずかに眉を上げて、こちらを怪訝な表情で見やる。

「…頭にきました」

修司さんの話を聞き終えての正直な感想を、私は思わず口から零れ落としていた。

「……は？」

思っていたリアクションとは全く異なっていたんだろう。修司さんが、意図せず聞き返しながら口をポカンと開ける。その目を見つめ返して、私は眉を寄せた。素直なその言葉に反することなく、表情も素直に表してみる。

「先生と由香子さんの事情は分かりました。先生が傷つくのも分かります。でも……」

怒りと悔しさが込み上げてきて、私は思わず一度唇を噛み締めた。そんな顔を、修司さんが意外そうに食い入るようにして見やる。

「私、先生に『幸せにしてほしい』なんて思ってません。先生に『人を愛し人に愛される自信』があるかどうかなんて関係ないです」

本気で、腹が立つ。

先生になのか、自分になのかは区別が難しかった。

「私が、先生のことを好きなだけだから…」

あの人に幸せにしてほしい、なんて思わない。

あの人を幸せにしてあげたい、なんてうぬぼれたくない。

…ただ、一緒に幸せになりたいだけなんだ。

それなのに…先生は私から逃げた。答えも出さず、考えることすら放棄して。そう思うと、先生自身にも…そういう答えしか出してもらえなかった自分自身にも、腹が立った気がした。

「……和美ちゃんは…」

目を見開いて私の言葉を聞いていた修司さんが、どこか感心したような…どこか呆れたような複雑な声を出した。それから、苦笑まじりにだけれどキレイな目を細めて笑う。

「さすがだね。…本気で由香子さんに聞かせてやりたかった、そのセリフ」

いつかと同じ言葉を…修司さんは口にした。

怒りでいっぱいの胸中は、極度の興奮状態からかなかなか冷めそうにはなかった。ただ、自分の今するべきことは分かっていたから、頭の中のどこかでは冷静な判断もできる。そうして、自分が今どうしたいのかも…。

「修司さん、一つお願いがあるんですが…」

少しだけ遠慮気味に切り出すと、修司さんは少しだけ首を傾げてまっすぐに私を見つめ返した。

5　side：Yukisada

携帯電話が鳴ったのは、夜7時を回った頃だった。ソファに座り見るとはなしに点けていたテレビでは、くだらないお笑い芸人が見飽きたネタを披露している。傍らに置いてあった電話が何の捻りもない着信音を鳴らして、俺はそれに手を伸ばした。

開くと、そこには修司の名前。わずかに首を傾げながら、通話ボタンを押す。

「はい」

『ユキ？今何してるー？』

間延びしたような声の向こう側では、人ごみの中にいるのかざわめきが聞こえてきていた。どうやら今日は仕事は休みらしい。あいつが店にいる日だったら、こんな時間に外にはいないはずだから。

「何って…テレビ見てる」

リモコンでそれの電源を落としながら、俺は自分でも不思議に思うくらい素直に答えてしまっていた。

『ふぅん…おもしろい？』

「いや、全然」

今世間で一番注目されていると言われているお笑い芸人だったので、本人が聞いたら怒るかもしれない。それでも俺にはクスリともできないネタだったので、バカ正直にそう答えていた。

『ユキ、これから出かける予定ない？』

「7時に家でのんびりしてんだぞ。あるわけねぇだろ」

『それもそうか。じゃあさー、これから行っていい？結構高値のワ

インが手に入ったんだけど』
「……お前今どこにいるんだ？」
『車で３０分もすれば着くところかな』
「…酒飲むのに車で来る気か」
『いいじゃん、泊めてくれたって』
笑いながら修司はそう言う。それに「仕方ねぇな」と呟いて返事をすると、あいつは「じゃあ今から行く」と言い置いて通話を終わらせた。

修司が酒を持って来るなんて、どれくらいぶりだろう。それでも大学時代にはよくあることだったので、俺はさしてこの時その申し出を疑問に思うこともなかった。

家のチャイムが鳴らされたのは、予告通り３０分を過ぎた頃だった。今までなら鍵さえ開けていれば勝手に入ってきていたのに、何を遠慮してんだと思う。面倒くさいと思いながらも玄関まで赴き、そのドアを開けた。
「……こんばんは」
そこに立っていた人物が真顔でそう挨拶した瞬間、俺は思わず硬直してしまう。

…なんで…白石がここに立ってんだ…？

一瞬で浮かんだ疑問は、だけど次の瞬間には消えてしまっていた。

…そうか、修司だ。

あいつが俺が家にいるかどうかの確認と、足止めをしたに違いなかった。

「……」

無言のままドアを閉めようとすると、白石がバッとそこに鞄と自分の身を挟みこむ。

「…あぶね…っ」

思わず声に出してしまってから、俺はその行動に驚いて目を見開いた。

どちらかというと、白石はこんな無謀な行動に出る奴じゃないはずだからだ。ドアを閉めさせないようにするあいつのそれに負けて、俺は代わりに眉を顰めた。

「先生、話があるんです…っ」

「俺はねぇって言ったはずだ」

冷たく言い放ったけれど、白石は頑としてそれを聞き入れない表情をしていた。

あの雨の日からここ数日、俺の顔すら見れなかった奴の眼差しとは思えない。それくらい力強い…意志の強い瞳が、射抜くようにこちらを見据えてくる。

「先生にはなくても…私にはあるんです！」
「玄関口でわめくな。近所迷惑だろ！」
こっぴどくフッたのに、今更何の話があるのか俺には見当もつかなかったけれど…。どちらかというと、傷ついてももう二度と俺に近寄ってきてくれない方が救われたのに。手の届きそうな距離にいられると、確固たる決意も崩れ去りそうになる。

「…由香子さんの話、聞きました」
俺のさっきの言葉を受けてか、白石は声のトーンを少しだけ落としてそう言った。思わず俺は、その一言に目を瞠る。誰に、とは白石は言わなかった。それでも分かる。そんな話をできるのは修司だけだ。

「…あの野郎…っ」
唇を噛み締めながら呟いたが、ここにいないあいつには届くはずもない。そんな俺の様子を見ていた白石が、まっすぐこちらを見上げてくる。

「先生の…昔の傷とか…悲しみとか苦しみとか…きっと、私なんかじゃ想像できないくらいのものだと思います」
ドアを開けた態勢でいた俺の腕を、白石はガシっと正面から掴んだ。縋るわけでもなく…媚びるわけでもなく、ただ目を背けたがる俺に自分の方を見させようとしているようだった。
「その話はしたくねぇ！その名前も出すな…っ」
「…先生っ」
「お前まで、俺が過去から逃げてるって言うのか」
噛み締めた唇がギリ、と音をたてた気がした。間近で見上げられても、俺はその目を見つめ返せない。わずかに視線を逸らして、そ

う答えるのがやっとだった。

「…そんなこと言いません」

やがて、白石がそんな言葉を返してくる。顔を背けたまま、俺はその一言にもう一度微かに目を瞠った。

「過去から逃げて何が悪いんですか？過去の思い出に傷ついて何が悪いんですか！私が言いたいのは…怒ってるのは、そんなことじゃありません！」

どうやら、本気で白石は怒っているようだった。そこにようやく気づいて、俺はハッと顔を上げる。…やっと、そのまっすぐな目を戸惑いながらも見返せた気がした。

「過去の傷から逃げたって構わない。ただ、それを盾に全てから逃げ出そうとするのが許せない！」

白石の揺ぎ無い一言は、俺の胸に鋭い刃を持って突き刺さるようだった。

「由香子さんとの話…全部聞けたわけじゃありません。多分、まだ私の知らないところもいっぱいあると思います。それでも…その過去から逃げる先生が、だからといって『今』から逃げていいわけじゃない！」

俺の腕を掴んだ白石の指に、グッと力がこもる。ほんの女子高生のはずなのに怒りからかその力は相当なもので…俺は思わず痛みから眉を寄せたほどだ。

「私は、『今』先生に告白したのに……！私の言葉を、なかったことになんてさせません！」
「…っ」

言い切った白石の言葉に呼応するように、その後ろの階段がカンカンと音をたてる。誰かが上がってくる気配がして、俺は白石の頭越しにそちらに目をやった。やがて、同じ高さに並ぶ一つの影。
「…修司…っ」
今回の件の元凶の顔を見つけて、俺は思わずその名を口にする。白石も驚いたように振り返ったけれど、当の修司は苦笑いを浮かべていた。

「ごめんな、ユキ」
騙したことを謝っているらしい。
「和美ちゃんも、ごめん。先に帰ってるって約束したけど…やっぱり放っておけなかった」
「修司さん…」
後ろを振り向いた白石が、俺を掴む手から力を抜いた。スルリと垂れ下がったそれに、俺は腕を解放される。

「どこまでも頑固なユキに、一つだけ言っておきたいことがあって」
「……」
言葉は返さずに、俺は修司を睨むように見つめ返した。それにもう一度苦笑を漏らして、修司は一歩だけ近づく。

「ユキはさ、由香子さんのことを幸せにしてあげられなかったって

悔やんでるんだよね」
「…っ」
その名前を出されたくないことは知っているはずなのに。修司は、あえてそこで口にする。もう俺をどこにも逃がさないために…。

「だから、もう自分は誰も幸せにしてあげられないって思ってるんだろ？」
「……修司…っ」
「そんなユキに、俺が感動したセリフを教えてあげようと思って」
「……？」
眉を寄せて、俺は訝しげにあいつを見る。その次の瞬間笑った修司は…もうさっきまでの苦笑いではなかった。どこか嬉しそうに…柔らかく笑う。

「『私は先生に、幸せにしてほしいなんて思ってません』」
「……しゅ、修司さんっ」
それまで黙って事の成り行きを見守っていた白石が、そこで慌てて声を上げた。裏返りそうなほどの高い声が、つまりそのセリフがこいつのものだということを物語っている。

「ユキ、和美ちゃんはさ、お前に幸せにしてほしいわけじゃないんだって。ユキを幸せにしてあげたいわけでもないんだ」
「……」
「ただ、一緒に幸せになりたいだけだって」

その一言に、俺はハッと目を見開いた。
すぐそこにいる白石の顔は見れなかったけれど、自分のセリフを復唱される恥ずかしさからか耳を塞いでいるようだった。そんな俺達2人を見比べて、修司はニッコリと笑う。
「俺が伝えたかったのは、そのことだけ」
じゃあね、と踵を返すその後ろ姿は、こちらの返事を待たないままに階段の向こうへ消えていった。

「……あの、あれはそのぉ…」
さっきまで威勢の良かった白石は、自分の言葉をなぞられたことが恥ずかしかったようで言い訳するように口ごもる。耳まで真っ赤になり、熱さからか自分の顔を白い手で仰いだ。
「……」
俺はというと、口元に手を当てたまま思わず黙り込んでしまう。こいつが口にしたというその一言で、気づかされたからだ。

…どうして、俺も由香子も…相手にどれだけのことができるのかということばかりに固執していたのか、と。相手を幸せにしてやりたいと願う余りに、逆にその分相手に求めるものもでかくなってしまっていたんだ。本当は、してやったりしてもらったり…そんなことを望む関係性じゃないはずなのに。白石の言うように、一緒に幸せになれればそれで良かったはずなのに…。

「…あの、先生…」
黙り込んだ俺に、おずおずと白石が声をかける。さっきまでの勢

いはどうやらなくなったようだった。どこか遠慮気味に…少し困ったような表情で首を傾げる。

「生意気なこと言ったのは分かってますけど…でも、それが私の本音なんです」

ぎゅっと胸の前で鞄を抱え込む腕に力をこめ、白石はそう言った。

「それとも…やっぱり先生も、高校生の言うことなんて子どものままごとみたいなものだと思いますか？」

……先生『も』……？

白石の言葉がどこに由来するものなのか瞬時には理解できず、俺は小さく首を捻る。そんなこちらの様子には気づいた素振りもなく、白石は言葉を継いだ。

「高校生の恋愛なんて…どうせ本気じゃないって…子どもが夢見てるみたいなものだって、思ってます？」

尋ねるその瞳が、わずかに切なそうに揺らぐ。その目に、瞬時にまたぶわっと記憶の波が寄せてきた。

あれは…由香子に出会う、もっとずっと前。

今の白石と同じ目をしていたのは…。

「……」

ドアを開けたままの態勢だった俺は、それを更に向こう側へ押す。
白石が通れるくらいの幅に広げて…顎で中を指し示した。

「…入れよ」

蘇ってきた記憶。
こいつと同じ目をしたのは、あの時の自分だった。

6

家の中を指し示されて、私は思わず一瞬だけ躊躇した。

引き返したくなったわけじゃない。ただ、先生の目を見ればこの後どうなるかが分かったからだ。

…先生は、多分自分の過去の傷を話してくれるんだと思う。私の言葉を受けて…私から逃げないでいてくれるんだと思う。ただそれは私にとってはきっと本格的な失恋を意味していて…。意気込んでここまで来たわりに、足はためらうようですぐには動いてくれなかった。

「……」

ドアを開けた先生が、無言のままグイっと私の手首を掴む。半ば強引に引っ張られるようにして、私はその中へ招かれることになった。先生はそのまま決して長くはない廊下を突き進む。リビングについてソファの前まで来たところで、ようやく私の手を離した。

座るように手で合図されて、私は遠慮がちにそこに腰を下ろす。胸は自分のではない気がするほど、高く高く鼓動を打っていた。自分の胸の音が聞こえてきて、先生にも気づかれるんじゃないかというほど。先生に自分と向き合ってほしい…振られるにしてもちゃんと振られたい、そう思っていたはずなのに、緊張で震えそうだった。

「さっきの質問だけどな」
不意に先生が、そう話を切り出す。私から少し離れた、窓辺に背中をもたれさせていた。煙草を吸うわけでもなく…ただ代わりに口元を手で覆う。何かをゆっくりと考えながら言葉にしているようにも見えた。

さっきの質問…。
私が、「高校生のままごとみたいなものだと思ってるのか」と尋ねたことのようだった。

「…そんなこと、思ってない」
何かを噛み締めるように苦い顔をして、先生は呟いた。

その表情は…私ではなく、自分の中にある何かに対するもののようだった。先生の中で、思い出した何かがあるのだろう。歪んだ表情に、少しだけ痛みに耐えるような色が浮かぶ。

「俺も、高校時代は同じことを考えたことがある」
「……え？」
続いた言葉に、私は思わず目線を上げた。

けれど俯き加減の先生とは、目が合わなかった。

「高校の時、俺は女子大生と付き合ってた」
当時を思い出したのか、少し遠い目をしながら先生は急にそんな話を切り出す。
「……」
言葉も返さずに黙ってそれを聞いていた私は、膝の上に置いていた手でぎゅっと拳を握りこんだ。

「年は4つくらい上だった。俺が中学の時通ってた塾の講師をしてて…それで高校に入ってから、そのまま付き合いだしたんだ」
そこで一度言葉を切った先生が、少しだけ自嘲気味な笑みを浮かべる。
「1年くらい付き合ってたかな。俺は真剣に付き合ってるつもりだったけど…」
嘲るように歪めた唇が、続けた。
「向こうはそうじゃなかった」

「……」
私は、口を挟めるわけもなくただ無言で先生をまっすぐ見上げる。
少しだけ顔をあお向けた先生は、目を閉じたままふーっと長い息を吐き出した。

「ある時、彼女とその友達が話してるのを偶然聞いちまったんだ」

『ねぇあんたさぁ、コーイチとより戻したってホント？』
『え？あぁ、より戻したっていうか…別に別れてないし』
『えー、でもあんたあのイケメン高校生と付き合ってるじゃん』
『あぁ、ユキ？んーまぁ確かに付き合ってるんだけどさ。なんつーの？コーイチとちょっとうまく行ってなかったから、その間遊ぼうかな、と』
『えー、ひどっ』
『だって高校生だよ？マジになるわけないじゃん。なったら犯罪でしょー。学生時代の年の差って大きいし』
『まぁね。高校生なんて子どもだもんねー』
『そうそう。コーイチより体力ありそうだし、調教の仕方によっちゃエッチだってうまくなると思って遊んでみただけー。でももーいいよ、最近コーイチとうまくいってるし。あいつにバレる前にユキは捨てる』

「…ひどい…」
素直な感想が、私の唇から漏れ零れた。その時の先生の痛みは想像に難くなくて、気を抜けばこちらが泣きそうになる。そんな私と、先生はやっぱり目を合わせなかった。
「あの時ほど自分の女を見る目のなさを実感したことはねぇな」
そう言ってまた、自分をあざ笑うかのような笑みを浮かべる。

「そこからは、何を信じていいのかわからなくなった。女と付き合うにしても、真剣に付き合うのがバカバカしくなった。だから…表向きだけの、後腐れない遊び方をする方が傷つかなくてすむと思った」
…それで…大学時代の先生は結構遊び人だったって修司さんが言

ってたんだ。高校時代に受けた傷が大きすぎた余り…そういう人付き合いの仕方しかできなくなって…。

「好きだ、愛してるなんて言わなくてよくて、ただ自分の都合の良い時だけ一緒にいる。女とはそういう付き合い方をした方が楽だと思った」

ズキン、と、私の胸が刺さるような痛みを訴えた。先生に…そんな悲しいこと言ってほしくない。

「でも、それが本当にいいとは思ってなかった。だけど抜け出すこともできない。そんな時…由香子に会って、あいつに言われたんだ」

『かわいそうな人』

『どうしてそんな…自分の身を削るような他人との関わり方をするの？』

『本当は誰かに本気で愛してほしいし、愛したいんでしょ？』

「はじめは、『何だこの女』と思った。それから…次は怖くなった。一瞬にして俺の全てを見透かされた気がしたから」

「……」

「だけど、あいつは言ったんだ。『私は大丈夫だよ。絶対君を裏切ったりしない』」

…それが、修司さんの言っていた母性本能があって包容力のあった『由香子さん』。きっと、先生のことを放っておけなかったんだろう。

「それから付き合い始めて…って、由香子のことは修司から聞いてんだっけな」

そこでようやく、確かめるように先生は私を振り返った。それに答えるように、小さく頷く。

「…少しだけ。はじめはとっても仲が良かったけど…だんだん由香子さんの束縛が激しくなっていった、って」

言葉にして、大丈夫なのかと少し不安だった。他人に改めて言われると…現実を突きつけられた気がして先生が余計に辛いんじゃないかと思ったから。だけど先生は…この時、特に変わった様子もなく軽く頷き返してくれた。

「段々と由香子はおかしくなった。ジャズも…俺の周りの大した関係のない女にまで矛先が向いた。…出会った頃の大人で余裕のあるあいつとは大違いだった」

「…だけど…それでも、好きだったんですよね？」

尋ねた私に、先生は今度はかすかに苦笑いを浮かべる。

「…どうかな」

小さく、そう呟いた。

「だけど、由香子がおかしくなったのは俺のせいだと思った。俺が

ジャズに没頭するから…由香子がおかしくなるんだ、って。だけど俺にとってはピアノも捨てられなかったから、せめてその分、空いた時間はできるだけ由香子と一緒にいるようにしてた」

それでも…由香子さんにとっては、足りなかった…ということなんだろうか。由香子さんは、自分だけを見て欲しかったのかもしれない。

「自分のせいだと思いながらも…いつもあいつに優しくできたわけじゃなかった。俺だってストレスが爆発することがあったから、ケンカも当たり前だった。どうして自分だけじゃダメなのか、泣いてそう叫ぶ由香子を本気でうっとうしく思ったこともある」

「……」

「別れる時がきたのは、そんなある日だった。桜が満開になったとニュースでやっていたから…ちょうど春だ」

修司さんには、その話は聞けていない。彼は「それは自分が話せることじゃない」と言っていたし、私も聞いていいことではないと思ったから。

きっと、そこに先生の一番深い傷があるんだろう。

そう思ってわずかに姿勢を正すと、私はゴクリと息を飲んだ。

『ユキ、今週末の土曜日…車でお花見に行かない？』

『…言っただろ、明日から俺はサークルの合宿があるって』

『でも…土曜日は最終日でしょ？少しくらい早く帰ってきてくれた

って…』
『あのなぁ、俺だけじゃなくてバンドの連中だっているんだ。そんな勝手なことできるわけねぇだろ！』
『でも……日曜日は雨だから、土曜日見に行かないと桜も散っちゃうよ…』
『知るか、そんなの。友達とでも見に行って来いよ』

「元々由香子は合宿に行くこと自体を快く思ってなかった。だからこそ…俺にはそのお願いがうっとうしくて仕方なかったんだ」
振り切るように合宿に行ってしまった先生。

「泣いて俺の名前を呼ぶ由香子とまともに会話をしたのは…それが最後だった」
「……え……？」
続いた言葉に、私は思わず目を見開く。由香子さんとそのまま別れた…ということなんだろうか？

「合宿の最終日、予定を早めに消化していたおかげもあって修司が言った」

『ユキ、今日一足先に帰ったら？もう予定は終えてるしさ』
『……』
『由香子さん、今日桜見に行きたいって言ってたんだろ？』
『……悪ぃな』

「サークルのメンバーも快く送り出してくれたから、俺はその日急いで家に帰った。冷たくあしらって出てきたこと…後悔もしてたし、

気になってもいたから」
　夕方には家に着くから、夜桜なら見にいけるかもしれない。そう思ったんだと、先生は付け足した。

「だけど…戻った家で待っているはずの由香子は、そこにいなかった。もしかしたら出かけてるのかもしれない…そう思って携帯に電話もしたけれど、全く出ない。仕方なくそこで俺は帰りをただ待つことにした」
「……」
「俺の携帯が鳴ったのは、真夜中になってからだった」
　連絡の一つもないなんてこと、由香子さんには今までなかったらしい。段々と心配になってきていた先生は、その時まで部屋で微動だにしなかったようだ。

「かかってきた電話は、由香子の親友の靖子さんからだった」

『ユキくん？あの…今大丈夫？』
『はい。…どうかしました？』
『…あのね、落ち着いて聞いてね。実は由香子が…事故にあって』
『！？』
『ユキくん？大丈夫？……ユキくんには…まだ言わない方がいいかと思ったんだけど…』
『それで、怪我は！？』
『…あ、うん…頭を打ってるけど、とりあえず大丈夫みたい。今は病院で眠ってる』

「命に関わる事故じゃなかったと知って、俺はひとまずホッとした。そしてそれから慌ててそこへ行って…真夜中なのにも関わらず、病

院の方に無理を言って病室に通してもらったんだ」

…そこで…何かがあったんだ。なんとなく予感がして、私は緊張からか息を飲んだ。

「看護師に病室まで案内してもらう途中の会話で…俺は自分の耳を疑った」

『すみません、無理言って通してもらって』

『いいのよ、心配なのも分かるから。さっきもご両親が来られてたわ』

『そうですか…』

『でも…本当に意識が戻って良かった。車、結構なスピードが出てたらしいから、不幸中の幸いだったわね』

『……』

『彼氏さんの方も、怪我は大したことないそうよ』

『……え？』

「…え？」

思わず私は、回想の中の先生と同じような声で聞き返していた。

目を見開き、一瞬頭がついていかない。ニッコリ笑って悪気なく言う看護師の様子が、見たわけでもないのに安易に想像できた。

「…彼氏……？」

尋ねた私に、先生ははっきりと頷く。
「事故に遭った由香子は、男と一緒だった」
「……そんな……」
見開いた目に映る先生は、再び小さく息を吐いた。

「由香子が事故に遭ったのは、あいつが行きたがっていた桜の名所へ向かう途中の山道だった。
出していたスピードのせいでカーブを曲がりきれずに…って、聞いてる」
「……」
「それで全てが理解できた。靖子さんが、『ユキくんにはまだ言わない方がいいと思ったんだけど』と言っていた理由。それから、どうして由香子がその男とそんなところにいたのかということ」
「……それは…？」
「俺が行かないと言った桜を見に、その男と行くことを選んだんだ」

「……っ」
…思わず、それまでなんとかこらえていた涙が溢れてきた。

話を聞いているだけの私ですらこんなにショックなのだから…先生の受けた衝撃は計り知れない。

「……」
そんな私を見た先生が、窓から背を離す。ゆっくりとこちらへ歩み寄ってきて…私の隣に腰を下ろした。

それから…長い指をこちらに伸ばす。大きな手で私の頬を包みこみ、その親指で零れ落ちる涙を拭ってくれた。

「最悪なのは、ここからだ」

先生が、私の目をまっすぐに見つめながらそう呟く。

これ以上…まだ何かあるの…？

私の胸は、その話の先を聞いても耐えられるだろうか。

先生の手の温かさを頬に感じながら…私は零れる涙を止めることすらできなかった。

7

「その日は結局由香子は眠っていたから…顔を見て帰るしかなかった。翌日改めて病院に行った俺は、正直どうやってそこまで行ったのかも覚えてない。それくらい…頭が真っ白だった」

私から手を離して、先生はそう言う。自分の太腿に乗せた腕で頬杖を着き、手で口元を覆うその姿勢は…何かに耐えているようにも見えた。

「気づくと、病室にいた。心配してついてきてくれてたのか、後ろには貴弘と修司もいた。そうやって何とか辿り着いたらしいそこで…俺はもっと残酷な事実を目の当たりにした」

『…ユキくん』

『……靖子さん、昨日は…』

『…ごめんね、他の男と事故に遭ったなんて…黙っておくのも伝えるのも残酷だと思ったんだけど…』

『…気を遣わせてすみません。あの…由香子は…』

『うん、今日は起きてるよ。……でも…』

「病室の入口でぼそぼそと話をする俺たちを、由香子が不思議に思ったみたいだった。俺に何かを言いかけていた靖子さんの言葉を遮るように顔を覗かせて…俺と目が合った。それから…言ったんだ」

『だぁれ？靖子の友達？』

「！！？」

ようやく涙が止まりかけていた私の目は、今までにないくらいに大きく見開かれた。言葉を失い、その意味することを瞬間的に必死に考える。

それは…由香子さんが、それくらい先生に対して怒りをもっていたということなのだろうか…？しらばっくれて、わざとらしく言うくらい…？

……それとも……。

「『記憶障害』」

考えないようにしたかった嫌な予感は、先生の次に紡がれたそんな一言で予想通りのものとなった。嘘のようなその現実を、先生は思い出して眉を顰める。この上ないくらいに…痛みを感じている表情。

「嘘だと思った。由香子が俺に対する怒りの余り、演技でもしてるんだと思った。だけど……そうじゃなかった。あいつの頭からは、俺に対する記憶が欠落してた」

「……っ」

「ドラマみたいな話だけどな、医者の話じゃ珍しいことじゃないらしい。完全な記憶喪失ならそう多くはないかもしれないけれど…一

時的で一部分の記憶障害はよくあることなんだと」
「…そんな…」
「それも、思い出したくないことを都合よく忘れられたりするらしい」
言って、先生はまたあの自嘲気味の笑みを唇に浮かべた。

…そんな顔しないで。

そんな目で、そんな悲しいこと言わないで。

それじゃまるで、由香子さんが先生のことを忘れたがってたみたいだ。

「由香子は…多分、本気で苦しんでたんだ。束縛をする自分に、病的だと気づいて。だけど止められない。その葛藤で……俺のことを忘れたかったんだと思う」
「……」
言葉は何も出てこなかった。だけど私は、再び流れ始めた涙を頬に感じながらも…それでも首を大きく左右に振った。

お願いだから…そんな哀しい顔で笑わないで。

先生は、当時の悲しみに耐えるかのように両手で頭を抱え込んだ。放っておけば、その腕は震えてきそうで…。思わず私は、先生を包むようにぎゅっと抱きしめていた。

「結局その日、由香子には何も言えないまま…貴弘たちに連れられて病室を後にした。だけど…そのまま病院を出ようと出口の方へと向かう俺に、後ろから声がかけられた」

『…あの…っ、本城さん…ですか?』

「振り返ったそこにいたのは、丸い黒縁眼鏡の男だった。いかにも真面目そうな…気弱そうな男。呼び止められてそいつを見た瞬間…なんでだかピンときた」

…つまり…その人が由香子さんと一緒にいた人…?私もそこに思い当たって、先生を抱きしめる腕に更に力を込めた。

「あちこち包帯だらけで、まだ安静にしていなくてはいけなかったんだろうけれど…。そうして俺に声をかけてきたその男は、急にその場に土下座をし始めた」

『…あ、あの…っ』

『…何のつもりだ』

何かを言いかけたその男の人に声をかけたのは、先生ではなくなっちゃんだったらしい。

『あの、僕…っ、由香子さんと3ヶ月前からお付き合いさせていただいてます…っ』
『…っ』
『あなたという恋人がいるのを知っていて…それでも、僕も諦めきれなくて…っ。由香子さんも、ようやく僕を受け入れてくれるようになって…』
『…てめぇっ、抜け抜けと…っ！』
『やめろ貴弘！』

「男に殴りかかりそうになった貴弘を修司が必死で止めるのを、俺はどこか他人ごとのように見てた。その間も…頭は何も考えられない状態だった」

『すみません、本当にすみません…！でも僕、あなたには申し訳ないと思ってますけど後悔はしていません！彼女はあなたのことを本気で好きでしたが…それでも、その分苦しんでいた！彼女は僕が癒しだと言ってくれました。僕なら彼女をあんな風に苦しめない…！』
『…てめぇ、一発殴らせろ！』
『やめろって、貴弘！』

「その男は、明らかに俺に怯え切ってた。そりゃそうだろう、真面目そうなあいつに比べて俺はガラが悪かっただろうから。それでも…あの男は、由香子の為に一歩も引かずに俺に挑んできた。土下座をしながらも」
「……」

『あの、それでお願いがあるんです！』
地面に頭をくっつけて、土下座をするその人。そこまでプライドをかなぐり捨ててでも…彼は由香子さんのことを想っていたんだろう。

『由香子さんが、あなたのことを忘れています…。どうか…どうか、このまま彼女と別れてもらえませんか…！』
『！？』
それは、その男の人のどこまでも身勝手な願いだった。
『あなたのことを思い出しても、彼女はまた苦しむだけだ！僕はそんな彼女を見ていられない…っ』
『…っ、ぶっ飛ばしてやる！お前っ』
『おい修司！お前も落ち着けよ！』

今度はその男の言葉に激昂したのは修司さんの方だったらしい。なだめる側に回ったなっちゃんが、彼を羽交い絞めにしたんだそうだ。

『本城さん……あなたは、彼女のことどう思ってるんですか？』
それまで一言も発さなかった先生に、その男の人はそう尋ねた。
『由香子さんの話を聞く限り…あなたが彼女のことを本気で想っていたとは思えない。そんなあなたが…彼女の前にまた姿を現しても、お互いが傷つくだけじゃないですか…！』
『……』
『何度も言うけれど、僕なら彼女を幸せにできる！あなたにはできなくて、僕なら彼女にしてあげられるってこともあると思うんですっ』

「言いたいことを言うその男を、蹴り飛ばしたい衝動にかられた。だけどそんなことできるわけもなくて…それよりそいつの言葉が突き刺さるようだった」

「……」

「結局、俺は何も言わないままそこを後にするしかなかった」

先生は、そこで少し上体を起こす。そのせいで、私は抱きしめていた腕をゆっくりと解かされた。身体を起こした先生が、今度はまっすぐに私を見る。

「後で聞いた話では…そいつと由香子は会社の同僚だったらしい。俺のことで悩んで悩んで…そいつに相談してたんだ」

それから…相談するうちに、癒しを求めて……？でもそれは……。

先生にとったら、ひどい裏切りだ。

由香子さんも、苦しんでいたんだということは分かる。誰かに救いを求めたかったのも分かる。

でも…彼女がやったことは、一番してはいけないことだった。高校時代に女の人に裏切られた先生に対して…一番やっちゃいけないことだったはずだ。

「『私は裏切らない』って、言ったはずなのにな」

苦笑まじりのその笑みは、やっぱりどこかに自嘲の色を帯びていた。

「由香子とは、それきりだ。もうずっと会ってない。聞いた話では…それから一年もしないうちにその男と結婚したって」
「……っ」
「忘れる側の人間はいいよな…って、思ったこともある。『知らない』ってことは、一番残酷なんだ。何もなかった顔して幸せになれる。だけど忘れられた俺はいつまでも…それを引きずって歩くしかなかった」
「……先生…」
呼びかけると、先生は苦い表情のままコツンと額を私の肩に当てた。

「毎年、桜の時期になるとそのことを思い出してた。胸の中をざわざわした不快感が襲い、呼吸すらしづらくなるほど…。涙なんか一度も出なかったけれど、それでも泣きたくなってしまうほど」
その言葉に…思い出す。

そうだ、先生と初めて会ったあの日。学校裏の公園は、桜が満開だった。
吸うわけでもないのに火を点けた煙草は短くなっていて、泣きそうな目でその桜を見上げていた男の人。
その時…由香子さんのことを思い出していたんだ…。

「毎年、それが苦痛だった。思い出したくないのにどうしても思い

出しちまう。でも…そんな苦い思いも、去年までだった」
「…え……？」
小さく聞き返したけれど、先生は私の肩に顔を伏せていて表情がわからない。

「去年の春、同じように思い出していた時に一人の女に会った」
「…っ」
私、だ。
でも先生はどうやら気づいていないらしい。思わず息を飲んで、私は先生の言葉の続きを待った。

「その女の一言に…不思議と気分が軽くなった。苦い過去を、思い出してもいい。思い出した分だけ痛みから早く解放される……そんな言葉に」

私だと気づいていなくても…先生は、私のその時の言葉を覚えてくれていたんだ…。そう思うと、ぶわっと視界が再び熱い涙で潤んでくる。泣き顔を見られたくなくて、私は先生の背中に腕を回した。

「今年の春は、桜を見て胸が痛んでも泣きたくなることはなかった。思い出した分、また忘れることに一歩近づけたと思ったからだ」
でも…と、先生は小さく続ける。
「今度は、別のことが気になり始めた」

「『別のこと』…？」
聞き返すと、私の肩に押し当てた頭を先生はコクリと縦に振った。

「そう言って俺を解放してくれた女のことが、どうしても気になって…。しばらくは気づかないフリをしていたけど、ダメだった」

続けた先生の言葉に、私は胸がドキンと高く跳ね上がるのを感じる。

…それは…つまり……。

「…好き…になったんですか？」

恐る恐る聞くと、先生は少しの間黙り込んだ。それから…小さい声で…だけどはっきりと肯定する。

「…そうだな」

何ともいえない感情が、胸の中で渦巻いた。

先生が好きになったというその人は、私なのに…。それでも、先生はそのことに気づいていない。

今更「あれは私でした」なんて言いづらい。それほどわざとらしいことはないだろうから…。

「だけど…また怖くなった。由香子一人幸せにしてやれなかった俺が…また誰かを好きになる資格なんてないと思ったから。…いや、たとえまた誰かを好きになったとしても…うまくいくはずがないと思ってたから」

「……」

胸が、痛い。
先生は私のことを言ってくれているはずなのに…気づいていない先生からは別の誰かへの恋心を聞かされているようだった。思わず唇を噛み締め、私は涙の流れる目を固く閉じた。

「だから、長いこと自分の気持ちに気づかないフリをしてた。でも…それも無駄だった。そんな感情を…いつまでもなかったことにできるほど俺は自分の制御がうまいわけじゃない」
そこで顔を上げた先生が、しがみつくように背中に回していた私の手をゆっくりと解かせる。留まることを知らない私の涙を、少し前と同じように指で拭い取った。

「はじめは、そいつは貴弘のことが好きなんだろうと思った。そしてそんな嫉妬からか…冷たくあしらってしまう自分に違和感を覚えた」
「……え……」
続いた先生の言葉に、私は思わず目を瞠る。

……今……何て……。

「ようやく自覚した時、それでも過去の傷からそれを伝える勇気はなくて…。ただ、想えるだけでもいいと思った。自分に向けられているわけじゃなくても…その笑顔が見れれば良かった」
「……先生…？」
「都築に突き放すように頼まれた時も、それでもいいと思った。俺が…自分の気持ちに蓋をすればいいだけのことだった。だけど……」
頬に触れた手が、ぐっと引き寄せられる。そしてそのまま、私は

先生に後頭部を支えられる形でぎゅっと抱きしめられていた。
「お前が、俺のことを好きになってくれているとは思わなかった。それを知った時…また怖くなった。求めていたものを得て、また失うのかもしれない…って」

…先生は……覚えてくれていたんだ。
あの時、公園で出会ったのが私だって…。わけのわからない励まし方をしてしまったけれど…それを小さな救いに変えてくれて。

「…っ」
溢れ出した涙を、今度は私は拭おうともしなかった。先生の腕の中で……ただひたすら声もなく泣く。

「だけど…間違ってたみたいだな。…なんでお前に言われるまで気づかなかったんだろう」
言われて、私は抱きしめられた態勢のままわずかに目を見開いた。

……私…何か言ったっけ…？

「俺は、どうして由香子を幸せにしてやらなきゃって思い込んでたんだろう。それは由香子もそうだった。自分を追い詰める人付き合いの仕方をしていた俺を、何とかして救ってやりたいと思ったんだろう」

そこで先生は、私の後頭部を支えていた手にギュッと力をこめた。痛くはなかったけれど…その力強さに胸がキュッと切なさを訴える。

「何かしてやったり、してもらったり…そんなことばかり望むなんて間違ってるのにな」

…それで、思い当たった。

先生が言ってるのは…私の「幸せにしてもらいたいわけじゃない」という言葉のことだ…。

「今なら分かる。俺もお前に…何かしてもらいたいわけじゃないから。かといって、俺がお前を幸せにしてやれる絶対の自信もやっぱりない」

…でも、と、先生は言葉を継ぐ。

そうしてまた…私を抱きしめていた力を緩めた。至近距離で、私の目を覗き込むように見つめる。

「ただ、お前に傍にいてほしいだけなんだ」

先生の瞳は、もう傷ついた色も自分を嘲る影も宿してはいなかった。ただ、まっすぐにこちらを射抜くように見つめる。それが見たことのないくらい優しい光を帯びていたから、私はまた泣きそうになった。

「〜〜っ」
言葉は声にならず、ただ私は大きく頷く。
まさか…まさか、先生も私のことを好きでいてくれていたなんて思わなかったから。
夢を見ているような信じられない思いと、瞬時に溢れ出した胸いっぱいの温かさで…私の目から雫が零れた。
今度は、哀しい涙じゃなかった。
「何度も傷つけて…悪かった」
額がくっつきそうなくらいの距離で、先生が言う。
今度は大きく首を左右に振って…私はその力強い腕の中に飛び込むようにして抱きついた。

8

梅雨で雨続きだった天気が、久しぶりに晴れ間を見せた。

私はその日の朝、目が覚めてから一番に枕元に置いてあった携帯電話を手にした。アドレス帳を開いて、そこにあるはずの名前を探す。それを確認してから、昨日の出来事が夢ではないことを実感した。

「良かった…夢じゃなかった」

初めて教えてもらえた、先生の携帯番号とメールアドレス。そんなことで確認でもしないと、私は昨日の出来事が全て自分の作り出した幻想だったんじゃないかと疑っただろう。

漏れ零れそうな笑みをなんとかこらえて、私は勢いよくベッドから飛び降りた。

「おはよー」

登校時間まではまだまだ余裕があるけれど、私はテンションが高い余り寝なおすことなんてできなくて階下に下りる。ダイニングでは朝食を用意してくれていた母親が「おはよう、早いわね」と顔を出す。部活で毎朝早く出ていく弟の祥太郎は、既にテーブルについてパンにかじりついているところだった。

「姉ちゃん、なんか機嫌いいな今日」
「えっ、そう？…そんなことないよっ」
挨拶を交わしただけで、弟にそう見透かされてしまう。思わず取り繕うように首を振ったけれど、唇は自然とほころんでしまっていた。…うぅ、締まりがない…。

「ま、いいけど。朝から暗い顔されるよりは」
「……う」
ここ数日の私の様子を皮肉っているらしく、祥太郎はニヤリと笑ってみせる。
「昨日帰ってくるの遅かったし、なんかいいことあったんだろ？」
恐らく、頭の回転の速いこの子には大体の事態は把握されているんだろう。前に、少しだけとはいえ余計なことを口走ってしまった自覚もあったから…。それ以上そこにいたらどれだけ突っ込まれるか分からない。
「お母さん、私今日朝ごはんいい」
祥太郎の追及から逃れるべく、私はイイ匂いのするダイニングを諦めがちに後にしてすぐに家を出ることにした。

＊＊＊＊＊＊

まだ大分早い時間だったせいで、高校生はそれほど通学ラッシュではなかった。それでも朝早いサラリーマンというのは結構いるもので、朝の駅は混雑している。黒いスーツの中に紛れ込もうとホームに並んで電車を待つ。うちから学校の駅まではほんの一駅だけれ

ど、それでもこの朝の混み具合にはなかなか慣れない。

ホームに入ってきた電車が、目の前でゆっくりと停車する。前の人にならって、中から流れ出てくる人たちを避けるために左側へ移動した。そうしてそれと入れ替わりに、電車の中に一歩踏み入る。

「……」

その瞬間、思わず私は目を見開いた。

その奥に、一つの影を見つけたからだ。電柱みたいに…高く伸びる影。

後ろからの人の波にも押し出されるようにしながら、私はその影の方へ流れる。顔を仰向けて、見上げてから声をかけた。

「おはようございます」

私の挨拶に、窓の外を見ていた先生は驚いた顔をして振り返った。

「…早いな」

私と場所を変わってくれようとしたらしく、先生は一歩下がる。開かないドアの方へ私を押しやってそう呟いた。

「はい…。ちょっと、早く起きちゃったので」

笑いながら言って見上げた先生は、昨日弱さを見せてくれたことが嘘のようにもういつも通りだった。でも、無口なところは普段のままだけれど、そこに冷たさはない。ギュウギュウ詰めになりそうな電車内の混雑から、私を遠ざけてくれた優しさが嬉しかった。

「先生も、早いですね。しかも電車なんて」
いつもは車通勤のはずだ。小さく小首を傾げながら言うと、先生は私の頭上すら通り越して外を見ながら答える。
「家出ようとしたら、車がぶっ壊れた」
「えぇぇっ？」
「エンジンがかからなくてよ」
先生がそう言った瞬間…電車が再び停まった。反対側のドアが開き、また人の波が流れるようにドッとホームに押し寄せる。学校のある駅はここなので、私は先生と一緒にその波に乗って出た。ホームに降り立つと、休む間もなく階段へとそのまま流される。

先生とはぐれないように必死だったけれど、改札を出られたところでようやく我に返った。邪魔にならない場所で…少し立ち止まってしまう。このまま、学校まで先生について行っていいものかどうか迷ったからだ。

…それは…非常にマズイんじゃないだろうか…。
だって、私たちの関係が周りにバレたりしたら先生は今度は校長先生の説教くらいでは済まされないだろう。思わずそう考えてしまった。

「…何してんだ」
数歩先を行った先生が、私が立ち止まってしまっていることに気づいてそう言いながら振り向いた。怪訝そうな表情を浮かべる先生に、私は困った眼差しを向けてしまう。

「……」

今自分の考えていることを何と説明していいか迷ったけれど…先生がため息まじりにこちらに戻ってきた。握った拳で、コツンと私の頭を叩く。

「考えすぎ」

「!?……」

私の考えていることなんて全てお見通しらしく、先生はそう言った。

「大体、電車で会った教師と生徒が一緒に学校に向かって何がおかしいんだ。むしろ担任とその生徒なのに近距離で別々に歩いてる方が違和感あるだろ」

そういえば…たとえば美術の苑崎先生なんかは、毎朝電車で生徒たちに捕まっているっけ…。

「それくらいで誰も付き合ってるなんて思わねぇって」

「…そうですよね…」

先生の言葉に軽く頷いて、私は「なるほど」と納得して返した。確かに、微妙な距離を開けてお互い話かけずにいる方がおかしいかもしれない。そう思って、私は再び歩き出した先生の隣に並んだ。

学校までは、ほぼ一本道だ。途中で急カーブもあるけれど、それも道なりに行けばいいだけだった。

歩き慣れたその道は、だけど隣にいる人が違うだけでとても新鮮に感じられる。加えてまだ朝早いためにほとんど生徒がいないので、いつもと違って見えた。

「そういやお前、昨日ＣＤ取りに来なかっただろ」
不意に、先生が言う。「え」と顔を上げると、先生は前を見たまま続けた。
「没収されたＣＤ」
言われて、私は「…あぁ…」と少しだけ目線を逸らして頷く。
「行きましたよ。…行きましたけど…」
昨日のことを思い出しながら、私は弱々しい声で言った。
「…ちょうど、相澤先生がいたみたいだったので…」
そして、その時相澤先生が言っていたことまで思い出してしまう。
『高校生ってやっぱりまだまだ子どもでかわいいですよね』
そんな一言に、自分の胸が抉られるように傷ついたことまで…。
「……」
先生は、私の言葉に「そうか」と呟いただけだった。…当たり前だけれど…私の胸中になんて気づいた様子もない。
「…あ」
次に顔を上げた時、私は小さく声を出した。タイミングよく、見知った人影がすぐそこの角から出てきたからだ。
「……」
それほど大きくはなかったはずの私の声に気づき、その人物…相澤先生はこちらを振り返る。自転車に乗った先生は、いつも学校でスカートに着替えているのかパンツスーツ姿だった。そういえば相

澤先生は自宅が近くて自転車通勤だと…前に聞いたことがあった気がする。一瞬止まりかけた彼女に、「おはようございます」と私は声をかけた。

「…おはようございます」

本城先生が、私の隣で同じように挨拶をする。

「……」

だけど、彼女は私たちの姿を認識してから…何の返事もなしに、ぷいっとそっぽを向いてそのまま走り去ってしまった。

「…え？」

思わず眉間に皺を寄せて、私は声を漏らす。その相澤先生の態度に驚いて…目を丸くしてしまった。

…今…確実にこっちには気づいてたよね…。

…私…先生に無視されるようなこと、何かしただろうか…。

「気にすんな」

全く動じていないらしい本城先生が、私の心の声が透けていたかのようにタイミングの良い言葉をかけてくれる。「え？」と顔を上げると、先生はゆっくりと歩いたまま苦笑いを浮かべた。

「お前にじゃねぇから、別に」

「……えぇ？」

意味が分からずに更に解せない表情をした私を、先生は横目でチラリと見やる。手にした鞄を持ち直しながら、小さく首を竦めた。
「俺が気に入らないんだ、気にすんな」
「…先生…相澤先生と何かあったんですか…？」
「まぁな」
言って、先生はその時のことを思い出しているのか、少しだけ子どもっぽく笑う。どこか自嘲するような笑みであるようにも感じられた。
「『まぁな』って…何があったんですか？」
「…ムカつくこと言ってきたから、ちょっと反論しただけだ」

自分でも子どもじみたことをしたと思っているらしく、先生は詳しくは話したがらなかった。でも…その一言で何となく辻褄があった気がした。もしかしたら、私が立ち聞きして傷ついたあの一言に…本城先生が言い返してくれたのかもしれない。

そんな話をしていたら、あっさりと学校に着いてしまった。門をくぐれば、教員用と生徒用の入口は違う。
「じゃあな」
あっさりと片手を挙げて、先生はさっさとそちらの方へ向かう。
「…はい」
名残惜しいと思ってしまうのは自分だけなんだろうか、と、ふと複雑な心境になった。どうせ朝のＨＲもあるのだからすぐに会える。…それでも、私は少しでも長く一緒にいたいと思ってしまうのに…。他の生徒や教師の目もあるから、そんなこと叶わない夢だと分かってはいるけれど。

「あぁ、そうだ」
行きかけた足を止めて、先生は不意にこちらを振り返った。私の方へ少し戻ってきて、身体を近づける。内緒話でもするかのような距離で、少しだけ耳元に口を寄せた。
「お前、今週末の夜空けとけよ」
「…え？」
そんなにすぐ傍に人はいないけれど、声を潜めるために身を寄せたようだった。念のために、声のトーンを落として囁く。
「修司の店のその日のライブに空きが出たんだ。埋めてくれって頼まれたから、ピアノ弾きに行く」
「……っ」
「来ねぇなら別にいいけど…」
「行きますっ。行きたいっ」
力をこめて返事をすると、「そうか」と先生は少し笑った。そして私の頭に大きな手をポンと置くと、今度こそそのまま歩いて行ってしまう。
触れられた頭に自分でも手をやって…私は嬉しさのあまりボーっとしてしまいながら、しばらくその場で浸っていた。

＊＊＊＊＊＊

週末の土曜日、お昼ご飯は駅前で智子たちと一緒に食べた。その時になって、ようやく先生とどういうことがあって…両想いになることができたのかの説明ができた。３人共自分のことのように喜んでくれたし、由実にいたっては「あのままだったらユキサダをシメてやろうかと思ってたよ」と物騒なことまで言った。私と智子と茜

は、その言葉におかしくて笑ってしまう。

早めに皆と別れてからは、急いで家に帰った。先生に誘われた時から、着て行く服をずっと考えていたけれど未だに結論づけられていない。ベッドの上に何着もの服を並べて、ああでもないこうでもないと焦りながら比べる。アクセサリーやら靴やらまで考えると、時間がいくらあっても足りなさそうだ。

結果、自分の持っている中で一番無難なのは白いワンピースだった。

理沙さんにこの前借りたものほど短くなく、胸元の露出も少ない。それにお気に入りのネックレスを引っ張り出してきたところで時計を見ると、もうすぐで先生との約束の時間になりそうだった。

慌てて髪をアップにし、いつもより少しだけ念入りにメイクをする。奇跡的にそれらを全て終えた時には、ギリギリだけどまだ間に合う頃だった。

箱に入れてしまってあったとっておきのミュールを出して、私は勢いよく玄関を飛び出した。

授業を終えた後に先生からメールが来て、待ち合わせ時間と場所を指定された。それは私の家からすぐ近くのＣＤのレンタルショッ

プの駐車場。歩いて行っても間に合う時間だったけれど、私は緊張と楽しみで胸の高鳴りを抑えられず、小走りでそこへ向かった。

行った先に、先生の車はなかった。まだ時間まで数分あるから…到着していないのかもしれない。だけどそう言えば、この前の朝エンジンがかからないと言っていたっけ…。どうするんだろう、と思ったその時、駐車場の奥に先生のものとは別の見知った車を見つける。グレーの大きな車は、以前に見かけたことがあった。

「なっちゃん…？」

車の前まで行くと、運転席にいたなっちゃんが「よぉ」と顔を出した。

「待ち合わせって、なっちゃんが迎えに来てくれるんだったの…？先生は？」

「今タバコ買いに行ってるよ」

乗れ、と後ろを顎で示されたので、私はそのまま後部座席のドアを開ける。外から見るより更に広い車内はキレイに掃除されていたので、少しだけ乗るのに緊張してしまう。シートに座ってスカートの裾を整えると、なっちゃんが先に口を開いた。

「そういや聞いたぞ、ユキから」

「え？」

「良かったな」

何のことを言われているのか、すぐにわかった。そうだ、なっちゃんにも報告しなきゃいけないのに…忘れてしまっていた。

「なっちゃん、ホントにありがとう」
「ん？」
「なっちゃんが応援してくれなかったら、私ちっとも頑張れなかったよ」
言うと、なっちゃんは声をたてて笑う。後ろからフロントのミラーを覗き込むと、目が合った。
「お前は一人でも頑張ってたよ」
「…っ」
そんな優しい言葉をかけられたら、泣きそうになってしまう。鼻の奥がツンとして、気を抜けば涙が零れそうだった。

ちょうどその時、助手席側のドアがガチャっと開けられる。会話を中断してそちらを見やると、先生が車に乗り込んできた。
「待たせたな」
タバコの箱をポケットに入れてから、こちらを振り返る。
「ついで」
ポンとペットボトルのアイスティーを手渡されて、私は後ろの席でそれを受け取った。ここからあのジャズバーまでは車でも一時間ほどかかる。その間に喉が渇くだろうと、気を遣ってくれたようだった。
「ありがとうございます」
お礼を言って受け取ったそれは、まだ冷たい。ちょうど外が蒸し暑かったので、そのひんやりとした感覚が気持ち良かった。

いつも通り先生はあまり喋らず、私となっちゃんが主にくだらない世間話で盛り上がる中、車は走って行く。たまになっちゃんに話

を振られた先生がポツポツと返すけれど、その一言が逆におかしくて私はずっと笑いっぱなしだった。
　1時間なんて、あっという間だった。前に来たところに車を停めて、なっちゃんと先生の後をついていきながらお店の地下への階段を下りる。

「お、来た。ユキ」
　扉を開けて入ったお店の中、隅の方に修司さんが立っていた。会うのはもちろんあの日以来だ。
「あ、あの修司さん、この前は…」
　お礼を言おうとした修司さんが、片手を挙げて私の言葉を制す。口にくわえていた何かを長い指で取ってから、ニッコリ笑って言った。
「堅い挨拶は抜き抜き。こっち座って、和美ちゃん」
　促されるまま、私は修司さんの近くの席に座る。3、4人くらいが半円形に並んで座れるローテーブルで、革素材のソファは高級感ある感じで座ると適度に沈んだ。先生が私の右側に、なっちゃんが左側に自分のタバコやら携帯やらを出して置く。
　修司さんは依然壁際に立ったままで、それを見上げてから私は小首を傾げた。
「修司さん…今日は私服なんですか？」
　この前お店に来た時のように、バーテンダーの格好はしていなかった。私服と言っても前に会った時のようにラフな感じではなく、真っ白いシャツにおしゃれなベストを着ていて女の子なら歓喜の声を上げそう。
　さっきまでくわえていた何かをまたくわえ直しながら、修司さんは再び笑う。
「うん、今日俺ゲスト出演だから」
　そんな答えに首を傾げると、修司さんは笑ったまま足元に手を伸

ばした。

そこから彼が拾い上げたものは…それまでケースに収められていたらしい、金色に輝いたサックスだった。

「えぇぇっ？修司さんが吹くんですかっ？」

尋ねると、笑ったまま「まぁね」と答えてくれる。

どうやら、くわえていたのはサックスのリードというやつみたいだった。ストラップを通した楽器にそれを装着しながら、修司さんは先生を見る。

「ユキ、今日お客さんの入り早いからすぐ始めるけど大丈夫？」

「俺はいつでも。お前が大丈夫かよ、チューニング」

「ステージでちょっと合わせる」

…そうか、修司さんだって先生やなっちゃんと同じジャズサークルに入っていたと言っていたから…楽器ができても不思議はない。サックスを持ったその姿はやたらサマになっていて、思わず見惚れてしまうほどだ。

そう言えば、暗い店内でも周りの女の人たちが修司さんを見ているのが分かる。前に来た時よりサラリーマンよりも女性客が多いのは、常連のお客さんが修司さんが今日演奏することを知って来たからなのだろうか。

「んじゃあ、行きますか。皆もう先に来てるよ」

顎で修司さんが示した先は、これから先生が上るステージ。ドラムの人がドラムセットのネジのようなものを微調整し、ベースの人は楽譜をめくって何かの確認をしているようだった。

「おう」
先生は、それを見て組んでいた足をほどく。スッと立ち上がってから、着ていたスーツの上をソファに放り投げた。
「行くか」
先生と修司さんがそちらに向かうのを見て、ステージに一番近いテーブルに座っていたロングの髪の女性が立ち上がる。その手には銀色のトランペット。

「今日はクインテットか」
私の隣で、なっちゃんが呟いた。初めて見るトリオ以外の生ライブに、私の胸はドキドキと早鐘を打ってやまなかった。

9

先生が出したピアノの音に、ベースとトランペットの人、そして修司さんが楽器の音を出す。そうしてチューニングが始まった頃、私はさっきお店の人が持ってきてくれたドリンクに手を伸ばした。そのストローに口をつけてから、ふと隣のなっちゃんを振り返る。

「そういえば、私、なっちゃんに一つだけ聞きたいことがあったの」

さっき車に乗った時の話の続きを、という振りで、私はそう切り出した。

「何？」

カルピスベースというかわいいチョイスのドリンクを飲みながら、なっちゃんが短く答える。車で来たため、こちらもノンアルコールだ。

「…先生のこと」

前置きすると、なっちゃんは少しだけ片眉を持ち上げた。

「前に、修司さんに聞いたの。なっちゃんが、昔から先生のこと…」

一度そこで言葉を切ったのは、やはり何となく聞きにくいことだったからかもしれない。マイナスな答えが返ってきたらどうしよう…そういう想いが少しだけ残っていたから。

「『誰にも本気になったことがない』って、言ってたって…」

「……」

「でも私、先生の過去の話を聞いて…先生がどれだけ由香子さんのことを大事にしようとしてたのかを知った。だからこそ…分からな

くて。どうしてそれを間近で見ていたはずのなっちゃんが…「先生の本気」をわからなかったのか」

「……」

「…なっちゃん?」

顔色を伺うように…私は少し上目遣いになっちゃんを見る。少しの間黙っていたなっちゃんは、しばらくしてからふーっと長くため息を吐き出した。

「…わかってるよ」

やがて、そう小さく呟く。

「……え?」

その呟きの意味がわからず、私は眉を寄せた。そんな私を横目で見てから、なっちゃんはグラスをテーブルに戻す。小さな吐息と共に、言葉を継いだ。

「…ユキが、由香子さんに本気だったことくらい分かってる」

「…だったら……」

「お前は本気じゃなかった、そう言った方が、ユキは余計に罪悪感を感じるだろ?」

私の言葉を遮るようにそう続けたなっちゃんは…見たことのない表情で笑っていた。不敵とも…嘲笑ともつかない笑み。そんな表情で告げた言葉に、私は思わず耳を疑った。

「それって…」

「あいつがどん底まで落ちればいい、ずっとそう思ってたよ俺は」

続けたなっちゃんは…そう言って今度は正面から私を見る。

…考えたくなかったこと。
なっちゃんのその言葉に…悪意に似た何かがあるなんて。信じたくない。

「……」
ぎゅ、と膝の上で握った拳に、私は力を込める。それを見たなっちゃんは、私が緊張しているのが分かったんだろう。
ふ、と表情を緩めた。

「どん底まで落ちたら、後は上がるだけだろ」
「……え？」
ソファの背もたれ部分に右腕を乗せた態勢で、なっちゃんは今度は苦笑い気味に続ける。一瞬何を言われたのか分からず、私は小さくそう尋ね返していた。

「ユキが罪悪感で自分を追い込んで、苦しんで…それ以上ないってくらいに沈んだら…後は上がるしかねぇじゃねぇか」
「……」

…つまりは、どういうこと…？
なっちゃんが先生にわざと突き放すような…否定的なことを言っていたのは、そこに悪意があったわけでも先生が嫌いだったわけでもなくて。ただ、落ちたところから早く抜けだせるように…？

「…良かった」
呟いてホッと息をついた私に、なっちゃんはまた笑う。今度は嘲笑でも苦笑でもなく…いつもの優しい顔をしていた。

「お前、結構かわいいとこあるな」
髪をグシャグシャとかき回された。

「つまり、なっちゃんはそれだけ先生のこと心配してたってことだよね？」
「さぁなぁ。どうだか」
「素直じゃないなぁ」
私が笑ってそう揶揄した時、ステージ上の音がやんだ。一瞬の静寂の後、修司さんとトランペットを持った女の人がステージのフロント側に立つ。

「始まるぞ、白石」
顎でその様子を指し示したなっちゃんの言葉に、私は少しだけ姿勢を正した。

ドラムの人のカウントを合図に、流れるような音の洪水が押し寄せてきた。

＊＊＊＊＊＊

ドラム、ベース、トランペットの人はここでよくライブをやる人たちらしい。だから必然的に修司さんの知り合いであるらしいけれど、先生は初対面のようだった。それでもこれだけ合うんだから、ジャズはやっぱり不思議だ。まるでずっと知っていた仲のように…音がシンクロする。

それは…少し嫉妬すら感じてしまうほどに。

前に来た時より、ジャズのスタンダードにも少しは詳しくなった。だから先生たちが演奏したうちの数曲は私も知っているものだった。

堅く誠実な音のドラム、心の芯に響くような重みのあるベース、そして明るく突き抜けるようなトランペットの音色。それに修司さんのサックスの音と、先生のピアノの音が重なる。トリオの時より重厚さを感じるそれは、ともすれば鳥肌すら立ちそうなほど。

「…すごい…」

思わず呟いてしまったけれど、その声も音の波に飲まれて消えた。

フロントの2人のソロが終わって、曲はピアノソロに差し掛かる。繊細さと力強さという矛盾した両面を持った先生の音が、長い指から奏でられた。やっぱり、先生はピアノを弾いている時が一番幸せ

そうだ。その顔を見ながらそう思うと、私は自分も自然と微笑んでしまっていることに気がついた。

なっちゃんに言わせれば、先生の指はよく回るらしい。人より速く弾く技術があるらしく、だからこそ音の多さに圧倒される。目を奪われたら、きっとしばらく離すことなんてできない。

それは、周りのお客さんも同じだったようだ。曲が終わったのを知ってから、ハッと我に返る。

すぐ隣のテーブルに来たＯＬらしい女性二人も、数曲のライブが終わった後に意識を現実に戻して吐息を漏らしていた。

「すごい良かったね…！皆良かったけど、あのピアノの人すごい…！」

「ね、しかも結構かっこいいよね」

声を抑えているつもりかもしれないけれど、興奮からか彼女たちの声はこちらにまで届いてしまう。

「……」

むぅ、と頬を膨らませてドリンクに手を伸ばすと、隣でなっちゃんが笑った。

先生は、学校では女子生徒に怖がられているけれど…。やっぱり大人の女の人にはモテるんだ。嬉しいというよりは、何となく複雑な心境だった。

「和美ちゃーん、どうだった?」

ステージを下りてきて、まっすぐに修司さんがこちらにやって来る。その後ろを先生がついてくる途中、当然だけれど隣のテーブルの前を通った。それだけで、さっきのＯＬ２人が「きゃあ」と声を上げる。

「すごくステキでした、修司さん」

ニッコリ笑って、私はできるだけそちらは気にしないように答えた。「ありがと」と同じように笑った修司さんが、すぐそこに置きっぱなしだったケースに丁寧に楽器を戻す。

「ユキ、何飲む？」

尋ねられた先生は、私の隣に座りながら「ジントニック」と答えた。タバコの箱は開けないまま、胸の内ポケットに戻す。

「お酒飲む先生初めて見ます」

「そうだっけ？」

私の言葉に、先生は素っ気無く答えた。突き放すような冷たさはないので、これが先生の素だ。

先生の周りには、入れ替わり立ちかわり人がやってきた。さっきのドラムの人だったり、トランペットの美人さんだったり。昔からの常連さんで、元々先生と顔見知りの人だったり。

その人たちとお酒を飲みながら話をする先生はどこか新鮮で、私はそれを眺めているだけで満足だった。時折こちらに話を振ってくれる人に笑顔で返すくらいだったけれど、黙って隣にいるだけで幸せを感じる。

社交的でもないし話が弾むタイプでもないのに、先生は人から好かれるようだ。話をする相手が楽しそうに笑っているのを見れば分かる。

「どーした？」
なっちゃんが不意に、急に表情を曇らせた私にそう尋ねてきた。
「……なんかちょっと妬けてきただけ」
素直に言うと、なっちゃんはおかしそうに声を上げて笑った。

異変に気づいたのは、それから1時間半くらいたった頃だっただろうか。同じテーブルにいるのに先生は他の人と話していて、私の相手はずっとなっちゃんがしてくれていた。それに不満があったわけではないけれど、そんな近くにいても別々になっていたためにそれまで全く気づかなかったんだ。
「あっはっは！」
急に大きな笑い声が隣でして、私は思わず耳と目を疑った。そしてなっちゃんと顔を見合わせる。隣を振り返ると、上機嫌で笑う先生の姿。

いつも強面で…ちょっと冷めていて。無口で無表情の先生にしては珍しい顔だったから……。
私は自分が夢でも見てるんじゃないかと思った。

「おい修司っ」
なっちゃんが、修司さんの腕を掴む。
「ユキに何を何杯飲ませたんだよっ」
「え？…そんなに飲ませてないと思うけど…」
そう言った修司さんだったけれど、先生の前のテーブルに目を移すとそこには空のグラスが結構な数並んでいた。…普通の人なら相

当酔ってもおかしくない量だと思う。
「多いだろ、これは」
「え、だってユキってザルだからさぁ。いつも通りだと思うけど…」
どうやら修司さんもなっちゃんも、今まで先生が酔ったのを見たことがないほどお酒に強いらしい。だけど今の先生は…私から見ても相当酔っているのが分かる。
…しかも笑い上戸？

「楽しいと酔いも早いって言うからねぇ」
空いたグラスを集めて片付けながら、修司さんはそう呟く。確かに、先生は今日かなり楽しそうだったけれど…。そう思って、未だ誰かと楽しそうに話している隣の先生をチラリと見やった。

「あぁ、違うよ和美ちゃん」
そんな私の視線に気づいたのか、修司さんが耳元で囁くように言う。先生に聞こえないようにの配慮らしかった。
「和美ちゃんが隣にいるから、ユキも楽しいんだよ」
「え……」
ウィンクまじりに言って、修司さんは空のグラスを手に「よいしょっと」と立ち上がった。今日は仕事でもないのに、カウンターの方へ下げに行ってくれる。

「……」
修司さんの言うとおりなら、どれだけいいだろう。私がもう一度隣の先生を振り返った時、なっちゃんが吐息まじりに立ち上がった。
「おいユキ、そろそろ帰るぞ」
その言葉に、スーツ姿のサラリーマンの人と話していた先生が顔

を上げる。
「なんで」
「お前酔いすぎだろ、今日」
「酔ってねー」
「はいはい、酔ってない酔ってない。だから帰るぞ、な?」
無茶苦茶な文脈で先生をたしなめながら、なっちゃんはポケットから車のキーを取り出した。どうやらサラリーマンとの会話を楽しんでいたらしい先生が、少し不満そうに眉を寄せる。
「いい加減白石も送ってやらねぇとまずいだろ」
立ち上がろうとしなかった先生だけど、なっちゃんのトドメのその一言でようやく腰を上げた。

「ん、帰るか」
ソファから立ち上がって、先生は私に手を差し出す。それを握り返すと引かれるようにして立ち上がらされて、私は思わず勢いでよろけそうになった。どうやら、先生も酔っているから力加減ができていないみたいだ。

今日の他の共演者やらマスターやらに挨拶をして、ジャズバーを後にする。車に乗り込む時、今度は先生は私と一緒に後部座席に座った。
「お前なぁ、ちょっとは自分で自制しろよな」
ミラーを直しながら、なっちゃんは後ろの先生にそう言う。
「なにが」
答える先生は、自分の側の窓を開けるとシートに深く身を沈めた。
「飲みすぎ、酔いすぎ」

「だから酔ってねーって」
「そんな口調でよく言うよ」
サイドブレーキを下げて、なっちゃんは車のアクセルを踏んだ。

なっちゃんの話では、先生が酔ったのを見たことは本当に一度もないらしい。サークルでも一番お酒が強かったらしいし、教員同士での飲み会でも潰れることはなかったようだ。…でも、笑い上戸の先生はちょっとかわいいとさえ思ってしまう。

「大体お前はな、白石を放置しすぎだしな」
なっちゃんのお説教タイムが始まったようだ。くどくどと言い出したそんな言葉に、先生ではなく私が慌てて首を振る。
「あ、でも、それは私全く気にしてないし…」
「いいから。あんまり甘やかすとこいつ調子に乗るぞ」
…調子に乗った先生なんて全く想像できない。妄想してみようとしたけれど明らかにギャグのような姿しか想像できず、私は思わずプッと吹き出した。
「…悪かったな」
私にではなく、なっちゃんに向けて先生は少し不機嫌そうにそう返す。

そんな言葉を受けて、なっちゃんは更に運転席でため息を漏らした。
「しかもお前、肝心の物まだ渡してねぇだろ」
……物？何の話だろう？

言われた先生は、そこで我に返ったように「あぁ」と小さく頷く。
何かを思い出したように、脱いで手に持っていたジャケットのポケットを探った。
どこのポケットに入れたものなのかも忘れたのか、何箇所かに手を突っ込んで確認している。

やがて左胸の内ポケットにあったらしい物を取り出して、先生はそれを私の手の上に乗せた。それは、小さな「箱」だった。

「……？」
小首を傾げたけれど、隣の先生はそれっきり別に何も言わない。
酔っているせいで思考が働いているようで働いていないのかもしれなかった。
「…えーっと？」
思わず尋ねるように呟くと、代わりになっちゃんが答えてくれる。
「誕生日プレゼントらしいぜ。この前こいつ、当日にお前フッて台無しにしただろ」
ウィンクしながら答えたなっちゃんと、ミラー越しに目が合った。
だけどそこでようやく…少しだけ正気に返ったように先生が目線を上げる。

「…ちょと待て。そもそもなんでお前がそんなこと知ってんだよ」
「何が」
先生の問いに、なっちゃんがとぼけて見せた。そんなやり取りを

聞きながら、私は手に乗せられた箱に視線を落とす。赤いリボンの巻かれた、すごくおしゃれな感じ。

「…開けていいですか？」

聞くと、先生は前のなっちゃんを睨みすえたまま「どうぞ」といつも通り素っ気無く答えた。

…胸が、ドキドキする。まさか誕生日プレゼントなんてもらえると思っていなかったし。

しかもそれが先生からのものだなんて…夢でも見ているようだった。

「……っ」

開けた箱の中から出てきたのは、かわいいピアスだった。濃いキレイなグリーンと、透明の石が2つついた…とってもシンプルだけどおしゃれなピアス。

「かわいい！」

思わず満面の笑みで感動したけれど、先生はなっちゃんを睨んだままだった。

「だから、何でお前がそんなこと知ってたんだよ」

「だってお前が理沙に聞いたんだろ、白石の欲しがってる物」

…理沙さん？

なっちゃんの口から出てきた名前に、私はもしかして…と思い当たる。

前に理沙さんにメイクしてもらった時…世間話の流れで、かわいいピアスが欲しいというような話をした覚えがあった。だけど私の耳にはまだピアスホールが開いていない。開けたいけれどその勇気もまだ持てていないと、確かに話をした。

「…じゃあ…理沙さんが選んでくれたんですか？」

かざすように掲げると、ピアスはキラキラと光った。雑貨屋さんにあるような…私が見てきた安物のピアスとは違う気がする。もしかしたら…透明の石はダイヤか何かだろうか。私の理想通りのかわいさだったので、理沙さんが選んでくれたのかもしれない。

だけど、そう尋ねると先生がまだ少し機嫌悪そうにシートに背中を押し付ける。それから、窓の外を向いたまま答えた。

「ピアス欲しがってるのは聞いたけど、選んだのは俺だ」

ぶっきらぼうな返答に、私は思わず目を丸くする。それから、そんな先生の横顔を見て「ふふ」と笑みを漏らしてしまった。

「先生、ありがとうございます。ピアス開けたら大事に使います」

「でもなぁ、教師が生徒にピアスをプレゼントするってどうなんだ」

一言多いなっちゃんは、そこでまた余計な言葉を発する。私は苦笑いしたけれど、先生はまた顔を顰めてミラーを睨み据えた。

「うちの校則に『ピアス禁止』なんて書いてねぇだろ」

「そういうのを屁理屈って言うんですよ、本城センセー。僕これでも風紀委員の担当なんですけど」

わざとらしい口調で言うなっちゃんに、先生は半ば本気で後ろから運転席のシートを「うるせぇ」と蹴った。

「ま、まぁまぁ」
笑いをこらえながら、私は先生をなだめる。

お酒のせいかいつもより少し子どもっぽい先生は、やはりどこか新鮮さすら感じられた。

10

「ホントに大丈夫か？そいつだったら放っておいても大丈夫だぜ？」
先生のアパートの前で車を停めたなっちゃんが、私にそう言った。
先生は、お酒の酔いからかあの後すぐに車で眠りこんでしまった。首を傾けて静かに眠る姿は安心しきったように安らかで、まるで子どものようだった。

「大丈夫です、終電までには帰りますから」
「いや、それが危ないから今送ってやるって言ってるんだけどな」
苦笑い気味に言って、なっちゃんは運転席から下りた。

本当は先生より先に私を家まで送ってくれるつもりだったらしいのだけれど、私が自分で頼み込んだ。酔いが本格的に回ってきた上に車の振動でか、先生は眠りながらも時折気分が悪そうにも見えたから。だからそのまま先生を家まで送ってあげてほしいと頼んだんだ。
「でもやっぱり心配なので、ちょっと様子見てから帰ります」
「そっか」
駐車場に降り立ったなっちゃんは、そのままグルリと反対側の後部座席のドアに回る。そこを開けて、「おい、ユキ、着いたぞ」と顔をペチペチと叩きながら言った。
「ん…」
眉を寄せて身じろぎした先生は、ゆっくりと目を開く。まだ頭がボーっとするのか、私となっちゃんを交互に見比べるその瞳は少し

だけ焦点が合っていなかった。

何とか車から先生を引きずりだして、なっちゃんは私に「じゃあ頼んだぞ」と言う。コクリと頷いて返すと、少し笑ってそのままた運転席に戻った。夜の闇の中に走り出すそのグレーの車を見送る間も、先生の目はどこかうつろに見える。

「先生、歩けます?」

足取りはそれほどおぼつかないわけではなさそうだ。だけど少しだけフラついていて、私は支えるように先生の腕に自分のそれを絡めた。そうして引きずるようにして歩きながら、アパートの階段に差しかかる。男の人を一人支えながら上がるには、いつもよりその階段はやけに長く感じられた。

「よいしょっと」と力をこめながら、私は必死でその階段を上る。しかも先生は普通の男の人よりかなり背が高いし、私なんかじゃ大した支えにならなくても不思議じゃない。それでも先生が自力でも歩いてくれるから、何とかなりそうなものだけれど…。

そうやって苦労しながら階段を上がっていた…途中だった。

「…和美」

ふと、私に少し寄りかかった態勢の先生からそんな呟きが漏れ零れる。

「……え？」

聞き逃しそうになった…ううん、空耳かと思わされたその声に、私は思わず聞き返していた。

……今…先生、私のこと名前で呼んだ…？

「…先生？」

呼びかけ返すと、先生は少しの間再び黙り込んだ。怪訝な表情で隣のその顔を見上げると、やがて「…お前さぁ」といつも通りの呼び方で先生が続ける。

「あんま、他の男に触らせんなよ」

「……え？」

継がれたそんな言葉に、私は何度か瞬きを繰り返した。

…先生…今、何て言った…？

普段なら全く聞けそうにない言葉だったので、私は思わず聞き逃しそうだった。

それに…その言葉の意味を数十秒かけて理解しても、どうしてそんなことを言われたのかがわからない。今日の自分を振り返ってみ

たけれど、思い当たる節は……。
「……あ？」
ふと頭をよぎった、ごく短いワンシーン。それは、なっちゃんが私の髪をグシャグシャとかき回した時のことだ。それ以外に、誰かに触られた記憶は一切ない。

「えぇっと…先生…？あれはなっちゃんだし、別に深い意味は…」
「ばーか」
「えぇっ？」
本当に子どものような言葉を返されて、私は思わず戸惑ったように声を上げた。

ちょうどそこで、なんとか先生の部屋の前までたどり着く。私が促さなくても、先生は自分のポケットから鍵を取り出した。

ドアを開けて、中に入る。前に来た時と全然変わらない…先生の部屋の匂いがした。

…そう、思った瞬間だった。

「…！？」
玄関に入った瞬間、グイと引き寄せられる。驚いて目を見開いた時には、もうそのままギュッと抱きしめられていた。私の後ろでドアがパタンと勝手に閉まる。

「…やっぱりお前、何も分かってねぇな」
力強い腕の中で「え」とだけ言葉を零した時、先生がグイと私を離した。解放されたと思った次の刹那、代わりに先生の言葉の意味を尋ね返そうとした唇が塞がれる。

「…んっ」
キスされたのだと気づいた時には、もう頭が真っ白になりかけていた。手首を掴まれて、あまりの力の強さに体の自由はない。そのまま後ろのドアに押し付けられて、角度を変えてそれが段々と深くなる。

「……っせん…っ」
時折一瞬離れそうになるその隙に呼ぼうとするけれど…。すぐにそれも塞がれてしまって、声にならない。

恋愛の経験値なんてほとんど皆無の私は、ろくに呼吸もできなかった。たまに息がうまくできずに苦しさすら感じるのに、それでも溺れるように必死で受け止める。

先生からは、お酒と男の人の匂いがした。
それすら媚薬のような感覚に陥ってしまいそうで、頭がくらくらする。やがて先生の舌に唇をなぞられると、ゾクリとした痺れがそこから腰の辺りまで一気に駆け抜けた気がした。

「…はぁっ」
時折呼吸を整えようと、息を大きく吸う。だけどそのまま歯列を割って入ってきた舌に、吐き出すこともままならないうちに塞がれてしまった。
「んぅ…」
苦しそうに眉を寄せたけれど、それと同時に押し寄せる快感があった。わけがわからないままに先生のキスに応じようとした舌を緩く吸われると、本当に何も考えられなくなる。

「…っ」
長い長いキスの後、ようやく解放された頃には私は全身の力が抜けてしまっていた。先生が手首と身体を解放してくれた瞬間、その場にズルズルと崩れ落ちる。息がうまくできない苦しさもあったせいか、私の目は涙を溜めて潤んでいた。その眼差しで目の前の先生を見上げる。

少女漫画や小説なんかでキスだけで腰くだけになるっていうのを見たことはあったけれど、まさか実際にそうなるのだとは思っていなかった。
「…腰抜かすか、普通」
苦笑いをしながら、先生は私と同じようにその場にかがんだ。だけどその言葉に呆れたりするような響きはない。

「…っ」

分かっていたはずなのに、急に大人の男の人だと意識してしまう。
恋愛素人の私なんかじゃ、全く太刀打ちできなさそうな人。
「…だって…っ初めてでこれは…っ」
あまりの恥ずかしさに、私は自分の顔が真っ赤になるのを感じながら抗議口調で必死に言う。涙目で訴えても、何の意味もなさそうだった。

「初めてじゃねぇよ」
かがんだ先生が、すっかり腰を抜かした私をその場で抱き上げる。軽々と持ち上げられて、私はその事実と先生の言葉の両方に目を瞠った。
「……え？」
「2回目だ」
お姫様抱っこのような格好で、先生は私をそのまま奥の部屋に運んだ。廊下とリビングを抜ける間に…私は驚きを隠せずに「え！？」と声を荒げる。
「いつですか！？」
全く心当たりがない。寝室の部屋のドアを開けながら、先生は「お前が保健室で寝てる時」と悪びれもせずに答えた。

「～っ」
言い返す言葉もなく、パクパクと私は口を開けたり閉じたりを繰り返す。平然とした先生は、そのままドサ、と優しく私をベッドに下ろした。

…これは…もしかして……。

ドキドキと、胸が張り裂けそうなほどの鼓動を刻む。先生に聞かれたくなくて、私は意味もなく息を止めてしまった。

上から私を見下ろす目が、まっすぐに射抜く。麻痺したように動けなくなって、私は止めていた息を飲んだ。そうして、またゆっくりと先生の顔が近づいてきて……。

ドサッ。

「……え？」

思わず目を固く閉じて「その時」を待ってしまっていた私は、予想と違う音がして恐る恐る目を開ける。首の少し下辺りに重みを感じたけれど、目を開けた私の目に映ったのは先生の長い腕だった。

「…先生…？」

眉を顰めて、私はその顔に視線を移す。私のすぐ横で、先生はこちらを向いたまま目を閉じていた。そして聞こえてくる…規則正しい呼吸音。

「…ね、寝てる…？」

拍子抜けして、私は間抜けな声を出してしまう。本格的に眠った人間の重みは力が抜けているせいか思ったよりすごくて、たった腕

一本が絡みついただけなのにそれはなかなか外れそうになかった。

「……」

…まぁ、いいか。眉を下げて眠る先生の顔を見ていたら、そんな風に思える。

今日は父親は出張中、母は夜勤だから祥太郎にメールだけでもしておけば大丈夫だろう。

「…先生ならいいかなと思って、覚悟したのにな…」

少しホッとしたような、残念なような…複雑な気分。デコピンする振りをすると、その気を感じたのか先生が「…うーん」と一瞬だけ眉を寄せて身じろぎした。

子どものような寝顔を見ていたら、何だかそれだけで幸せだとも思える。

微かに微笑んでそれを眺めながら、私は先生のぬくもりに身を寄せた。

＊＊＊＊＊

翌日目が覚めた時には、一瞬そこがどこだか分からなかった。自分の部屋ではないという認識をしてから、段々と昨日のことを思い

出す。目覚めたのが先生のベッドの上だと思い出した時には、寝ぼけていた頭がはっきりと覚醒した。

ガバッと飛び起きると、私の上にはタオルケットが掛けられていた。代わりに、眠るまで乗っかっていた先生の腕はない。慌てて寝室を出ると、リビングのソファに座っていた先生が「おぅ」と普通に挨拶をしてきた。

「…おはようございます」

昨日のあのキスの気恥ずかしさから何となく目を見れないでいたけれど、向こうはいつも通りだった。

先に起きた先生はシャワーを浴びた後らしく、下ろした髪がまだ濡れていた。はずしたコンタクトの代わりに眼鏡をかけていて、いつもより更に知的に見える。

「悪かったな、昨日。帰れなかったんだろ」

そう謝ってくる言葉に…私は「ん？」と内心で眉を寄せた。

……もしかして…。

「…先生、あの…昨日のことなんですけど…」

恐る恐る口を開いたけれど、嫌な予感がする。

昨日酔っていたことが嘘のように先生は普段通りすぎて、一つの疑問が浮かんだんだ。

「昨日？…何かあったっけ」
首を傾げながら言った先生は、「あー頭いてぇ」と二日酔いなのか眉を寄せる。

「……」
思わず私は、唇を開いたまま言葉を失ってしまった。…もしかして、と思ったけれどやっぱり…。

酔っていたせいなのか、先生は全く覚えていないんだ。

私が覚えている中では、初めてのキスだったのに…。昨日、一度だけだけれど私のことを名前で呼んでくれたりもしたのに…。このままなかったことになるのは何だかとても悲しかった。

「お前もシャワー使っていいぜ。服なら貸してやるから」
言いながら、先生はソファから立ち上がる。言葉通り服を取りに行ってくれようとしたのか、寝室の方へ戻ろうとした。

「……」
口を開くとなんだか泣きそうで、私は答えることができない。そんな私の横を素通りしようとする先生の顔を見ることすら叶わなかった。

「…どうした？」
私の様子に気づいたのか、先生がピタリと足を止める。泣きそうな目に力をこめてこらえて、私は顔を上げた。「何でもないです」と答えようとしたその時、一瞬だけ何かが唇を掠める。

それが昨日の先生の唇と同じ感触だったと気づいた頃には、私は驚きの余り身体を硬直させてしまっていた。

「……」
触れるだけの、さらっていくようなキス。昨日のとは違うけれど、甘くて優しい。

「3回目」
先生が、不敵に笑ってそう言うと身を翻した。目を見開く私に構わず、そのまま今度こそ寝室の方へ入って行く。

「…先生っ、覚えてるんじゃないですかっ」
「誰が忘れたっつった？」
クローゼットを開ける音をさせながら、先生の声が向こうの方から聞こえた。

「……もうっ」

持ってきてくれた服を受け取りながら、私は頬を膨らませる。それを笑いながら見ていた先生は本当に意地悪だと思う。

だけどそれでも、やっぱり私は先生が好きなんだ。もう自分でも、それはどうしようもないくらいの想いだった。

そうまるで、身も心も、全て溺れてしまうほどに…。

１０（後書き）

「Ｓｗｅｅｔ&ａｍｐ;Ｂｉｔｔｅｒ」、第１部はここで終了です。
お付き合いくださいましてありがとうございます。

番外編２本をはさんだ後、第２部の両想い編にうつります♪

1（前書き）

「ｂｉｔｔｅｒ」シリーズの名取夫妻のなれそめ話です。
過去編になりますので、２人とユキや修司の大学時代の話です。

1

あの時、私には2つの悩みがあった。

一つは、新たに大学に入って新しい人間関係を築くことへの少しの不安。

そして、もう一つは……。

「りーさ」

間延びするような声に呼ばれたのは、大学のある最寄り駅でホームに降り立ったところだった。後ろを振り返ると、そこには新入生とは思えない貫禄（？）を見せる友人の奈那子。高校時代から仲が良く、大学でも同じ教育学部に進学した。

「おはよ」

ニッコリ笑って応じて、私は奈那子が追いついてくるのを待つ。高校の時から大人っぽい彼女は、やはり新入生のような初々しさは感じられなかった。

「今日は、ガイダンスとオリエンテーションだよね？めんどくさー」

うーん、と伸びをしながら、奈那子はそう言う。入学して2日目の朝だった。授業を登録して本格的に始まるのはまだ先の話だった。

「でもどの授業がいいか、ちゃんと選ばなきゃね」
「うーわー、やっぱ理沙って真面目ー」
私の横に並んで、奈那子はそう言うと苦笑を浮かべて見せた。

真面目…なんだろうか、私は。自分ではあまりそうは思わない。ただ、人より努力しないと報われないタイプだとは思う。奈那子のように生まれつきの天才肌ではないから。

奈那子は、高校の時からそうだった。
本人が努力しているのもあるのだろうけれど…色々な才能に恵まれていて、人より何でもできる。加えて明るい性格でサバサバしているため、すぐに誰とでも仲良くなれる。私のように、新たな人間関係を築くことに不安を覚えることなんてないだろう。

「奈那子は…友達もすぐできるんだろうね…」
思わず呟くように言ってしまうと、奈那子は少し目を丸くした。大きな目が、更に零れ落ちるんじゃないかと思うほど見開かれる。
…それから、ふっと笑って見せた。
「理沙も明るくって人気者なのにねー。隠れ人見知りは損だよね」
笑って言って、奈那子は小首を傾げる。

…そうなのだ、一般的には、私も社交的なように見えるらしい。そのせいで話かけてくれる人は多いけれど…表には出さない努力をしていても、実は私は人見知りだった。
特に軽薄そうな男の人が、一番苦手なタイプ。土足でこちらの内

面にまで入り込んでくるイメージがあるからだ。

加えて、私は人を見る目もあまりないらしい。

高校時代にできた彼氏の数人も…全て付き合ってみたらろくな男じゃなかった。そのたびに「今度こそは！」と慎重になっているはずなのに、うまくいかない。そんな2つの要因のおかげで、私は新たな人間関係をつくっていくのが憂鬱で仕方なかったのだ。

校門にたどりつくと、教育学部の棟に着くまでの間、道は人で埋め尽くされていた。

「すご…何これ」

思わず口から漏れる声。どうやら、上級生たちが私たち新入生のサークル勧誘をしているらしい。

「君たちかわいいねっ。一緒にテニスとかどう？」

私の苦手系な男が、まるでナンパかとツッコミを入れたくなるような軽薄さで寄ってくる。曖昧な笑顔でそれらをかわしながら、私はそれでも堂々としている奈那子の後ろに隠れてしまいたい心境だった。

「理沙さぁ、入りたいサークルとかあんの？」

奈那子は毅然とした態度で、上級生の勧誘を断っていく。その凛とした姿には、思わず尊敬の念すら抱きそうになる。囲まれただけで萎縮しそうになる私とは大違いだ。

「え、…まだわかんない。特に決めてないけど…」

言うと、奈那子の顔が瞬時にパッと明るくなった。

「じゃあさ、じゃあさっ、私とジャズ研入んないっ？」

「…え、『ジャズ研』…？」

戸惑い気味に復唱すると、奈那子は大きく頷いた。

「理沙さ、歌うの好きじゃん。ジャズ研でジャズバンドやろうよ」
「……ジャズかぁ…」
正直、これまでにあまり興味を抱いたことのないジャンルだ。おじさんっぽいか…おしゃれさんのイメージしかなくて、私には縁遠いと思っていたから。
「…て、奈那子ジャズなんて好きだっけ?」
高校時代、ブラスバンドでサックスを吹いていた奈那子だ。ジャズもできないことはないのだろうけれど…。尋ねると、奈那子はニヤッと笑って「それがさぁ」と言葉を継いだ。
「昨日サークル棟覗きに行ったら、ジャズ研の部室の前にテナーサックス持った超イイ男がいてさぁ!」
「……」
思わず、私の口がぽかんと開いてしまった。それと反対に、目は細めて呆れたような眼差しを向けてしまう。
…出た。奈那子の病気だ。

「要はイイ男目当てで入るんだ…」
「それが何よ、理沙。人間いつでも大きな事をやり遂げる時は動機は不純なもんよ?」
もっともらしい適当なことを言って、奈那子は笑った。
特に他にやりたいこともなかった私は…こうして奈那子に誘われるままにジャズ研に入ることになったんだ。

＊＊＊＊＊

そうしてジャズ研に入って数日…新入生歓迎コンパが行われるこ

とになった。周りからは決して見えないらしいけれど、私は実はこういう場も苦手。奈那子はというともちろん萎縮することなく、明るく自己紹介すらハキハキとこなしていた。

「飲んでる？理沙ちゃん」

飲み会が始まって一時間くらいした頃、それまでずっと隣に座っていた崎谷さんが声をかけてくれた。飲み会の間、ずっと周りや私に気を配り続けてくれていたイイ人。２年生らしく、担当はドラムなんだそうだ。

「はい、ありがとうございます」

隣にいたのが、この人で良かったと思う。

まぁ、このジャズ研はやはりおしゃれさんが多くて…私の苦手な軽薄な男はいそうになかった。その中でも崎谷さんはとっても優しくて…ホッと安堵の息を漏らす。

飲み会もある程度の時間が経過した頃、途中でトイレに立つと奈那子が後から追ってきた。

「理沙、隣の人とイイ感じじゃんー」

「…あのね、合コンじゃないんだから」

奈那子の思考に呆れつつも、私も悪い気はしなかった。崎谷さんは真面目そうな清潔感溢れる好青年といった感じの人で…もちろん私に悪い印象があるはずもない。

「そういえば、奈那子のお目当てのテナーサックスの人はいた？」

鏡の前で手を洗いながら尋ねると、奈那子がぷぅっと頬を膨らませた。

「それなんだけどさぁ！いないんだよぉー」

「…私ちょっと思ったんだけどさ、サークル棟のジャズ研部室の向

かいって管弦楽の部室だよね？そこの人と間違えたんじゃ……」
言うと、奈那子は珍しく大げさに表情を曇らせる。少し焦ったような顔で「そうかも…！」と肩を落とした。
「…うわーん…超イケメンだったのにーぃ」
だからと言ってもちろんジャズ研を辞めようとかいう気はもちろんないらしい。嘆く奈那子の背中をポンポンと叩きながら、私はお酒の席へと戻っていった。

「理沙、奈那子、飲んでるー？」
戻った私たちのところへ、すぐに玲奈さんがビール瓶を片手にやってきた。玲奈さんというのは…このサークルの４年生で、副部長というポジションにいる人。新入生のお世話まで色々と率先してやってくれて、男前な性格がかっこいい人だ。さっぱりとした雰囲気は、ベリーショートの髪型にぴったりだった。

「玲奈さん、一つお聞きしたいんですけど…」
ビールをグラスについでもらいながら、恐縮気味に奈那子が口を開く。
「なにー？何でも聞いて」
「あの、このサークルにテナーサックスの超イケメン、いません？」
…まだ諦めてなかったんだ…。向かい側でそれを耳にしながら、私は半ば呆れた目を奈那子に向けた。
「テナーの超イケメン？……あぁ！」
思い当たるところがあるのか、玲奈さんはポンと手を打つ。
「なになに、奈那子はあいつ目当てで入ったの？」
「目当てというか…ちょっと見かけてかっこいいなぁって」
上級生にいきなりこういう話題ができる奈那子を、私は呆れなが

らも本気で尊敬する。私には絶対できそうにない。
「そっかぁ、あいつね、小塚っていうんだけど…確か今日は2次会から来るって言ってた。
奈那子が2次会も来れるんなら、あいつの近くにいけるようにしてあげるけど?」
「マジっすか先輩!」
「マジっす」
いきなり体育会系のキャラになって、奈那子と玲奈さんは笑い合っていた。
「……」
…まったくついていけない、この会話。

「…なんだよ、あいつら…小塚たちやっぱり来んのか」
玲奈さんが朗らかに笑いながら他の人のところへ行ってしまった後、不意にそんな声が聞こえてきた。地を這いそうに低い声は…私の斜め前、奈那子の隣の男の先輩のものだった。
「1次会に来てねぇからラッキーと思ってたのにな」
その更に隣の男の人も、そんな風に同調していた。ボソボソと話してはいるけれど、聞こえてしまっている。奈那子はというと、2次会に思いを馳せているのか聞こえていないみたいだけど…。
…でもなんだか…意味はよくわからないけど、この人たち感じ悪い…。

「やめろよ、そういうこと言うの」
不意に、私の隣で崎谷さんがそう彼らに注意する声が聞こえた。
一瞬驚いて、私も顔を上げる。注意された男の人たちも目を見開いていた。

「新入生の前でする話じゃないだろ」
ビールのグラスを置いて、崎谷さんはそう言う。「…でもよぉ」とかなんとか言い訳しようとした彼らも、崎谷さんの無言の迫力を感じたのか次の瞬間には押し黙った。

「ごめんね、理沙ちゃん。不愉快なセリフ聞かせちゃって」
私が少し感じ悪いと思ってしまったことが分かったのか、崎谷さんはこちらにもそうフォローしてくれる。
「こいつら、悪い奴じゃないんだ。ただ小塚たちが来ると女の子もっていかれるから不満なだけで…」
「…気にしてませんから」
「そう？」
ニッコリ笑って言う崎谷さんの言葉に、向かいの彼らは更に身を小さくしていた。

私は…こっそりと横目で崎谷さんを盗み見た。…やっぱり、この人は大人だなぁと思う。
仲間の間違った発言はこうやってちゃんと正すことができて…正義感も強い。イイ人だな、と、思った。

それだけで、少し気分が軽くなる。
奈那子じゃないけれど…何だか楽しくなってきた。カクテルの入ったグラスを手に、崎谷さんに視線を移せば自然と口元が緩んでしまう。

…その、次の瞬間だった。
上機嫌にグラスに口をつけた時、…その宴会の場が、一瞬ワッと盛り上がった。

……なに…？

何が起こったのか一瞬分からず、会場の奥の方にいた私たちは盛り上がっている手前側の席の方を一斉に見る。そこには今到着したらしい誰かがいて…その人たちが来た瞬間に、周りが盛り上がったようだった。

「り、理沙っ。あの人、あの人っ」
珍しく慌てた様子で、奈那子が言う。
それと同時に、玲奈さんがバッとこちらへ飛んできた。

…早っ。

「小塚ー」
玲奈さんが、その奈那子の言う「テナーサックスの小塚さん」を大声で呼ぶ。
それに顔を上げた彼は…なるほど、奈那子が騒ぐのが分かるくらいに整った顔立ちをしていた。
身長は…多分１７５くらい？かなり細身で、色が白いのに不健康さは一切なくて。茶色い髪は少し長めだったけれど、嫌な感じはし

なかった。
「玲奈さん」
ニッコリ笑ったその人は、手招きされるままにこちらに歩み寄ってくる。
「貴弘、あんたもおいでっ」
玲奈さんは、小塚さんの後ろにいたもう一人にも声をかけた。どうやら彼と一緒に今来たらしい。身長が小塚さんより１０センチは高くて…女の子なら首を傾けないといけないほどだった。そして、驚くくらい小塚さんに負けず劣らず美形。タイプは違うけれど、黒い眼鏡がおしゃれだった。

「玲奈さん、ずるいよー。いっつも２人を独り占めしてぇ」
冗談っぽく、他のテーブルの女の先輩が抗議した。「そうだそうだー」と、何人かが酔っ払ったテンションで笑っている。それを受けて、玲奈さんも豪快に笑った。
「副部長特権！あんたたちはユキが来たら好きにしなー」
大笑いしながら言う玲奈さんの言葉に、その女の先輩たちは「ならいっか」と笑い合いながら言う。

…なんなの、この会話…。

余りにも男前な会話に呆気にとられているうちに、例の２人がこちらへやってきた。そんな彼らに玲奈さんは声をかける。
「あんたたち２次会から参加じゃなかったの？」
「そのつもりだったんですけど、思ったより早く用事が終わったんで」
「ふーん…あ、奈那子、理沙。この２人がうちのサークルの看板イ

ケメン2人」
笑いながら、玲奈さんが紹介してくれる。
「小塚修司と、名取貴弘」
「どうも」
玲奈さんは、ニッコリ笑って挨拶をする小塚さんにごく自然に奈那子の隣を指定した。そうして、自然にもう一人の名取…さんが私の隣に座る。私たちのことも紹介してくれる玲奈さんの言葉に合わせて軽く会釈した時、私はチラリと反対側にも視線をやった。
さっき小塚さんたちが来るのを快く思っていなかった彼らは…やっぱり苦い顔をしていた。嫌悪感を露にした…露骨な顔。

崎谷さんの顔までは…角度が悪くて見れなかった。

「小塚、奈那子はサックスやってたんだって。ジャズ研でもサックス希望だよねぇ?」
玲奈さんがうまく話を振ってくれるおかげで、奈那子は「はいっ」と自然に会話ができていた。でも奈那子も、さすがに緊張はしているらしい。いつもよりしおらしい気がした。
「そうなんだ。ちなみにパートは?」
そんな風に小塚さんに話を振られて、照れ気味に答えている。
「あ、えっと…バリトンなんですけど…」
「バリトン!」
奈那子の言葉に、小塚さんは少し驚いてから笑った。
「すごいなぁ、そんな細いのに大丈夫?」
「えぇっ、細くないですよっ」
恥ずかしそうに顔を赤らめる奈那子は、私から見てもかわいかった。だけどだからこそ…あの彼らの勘に触ったみたいだ。

「出たよ、女その気にさせんのだけは早いよな」
「だからあいつら来るとしらけんだよ」
…さっきの彼らだ。そっぽを向いて話してはいるが、小塚さんたちのことを言っているのは明白だった。しかも、わざと聞こえるように言っている。…まぁ「小塚さんたち」と言っても、もう一人の人はここまでまだ口を開いてないんだけど。

「女持って帰りたいだけならわざわざサークルの飲み会になんて来んなっつーの。軽そうな女と合コンしてりゃいいじゃねぇかよな」
「……っ」
思わず私は、立ち上がりかけた。私が何を言える立場でもないけれど…それでもこの人たちが感じ悪いのはわかったから。

「…せぇな」
その人たちを睨みすえようとしたその瞬間…、私の隣から小さな呟きが漏れ聞こえた。え、と右隣を見ると、煙草の煙を吐き出しながら名取さんが彼らを睨みつける。
「うるせぇっつったんだよ、てめぇら」
「……」
…この人、美形なのに口が悪すぎる。その整った唇から漏れた言葉に、私は目を見開いた。
「しらけんのはてめぇらの方だろうが。言いたいことあるならはっきり言えよ」
大したことを言ったわけではないのに、その凄み方はすさまじいものがあった。一瞬で彼らを黙らせる。
「やめろよ、名取」
それまで黙っていた崎谷さんが…不意に口を挟んだ。

「…お前らも、さっき言っただろ。新入生の前でする話じゃない」
彼らの方にも向き直りながら、崎谷さんはそうたしなめる。…やっぱり、大人な対応だった。

「そうだよ、貴弘。いちいち売られたケンカ買うなって。大人げない」
ため息まじりに、小塚さんもそう崎谷さんに同調して名取さんをなだめる。
…だけど……。

「大体こんなモテないくんの僻みをいちいち真に受けてケンカしてたら、バカみたいだし。ただでさえモテないのにくだらないやっかみで更にモテなくなることに気づいてない奴の相手したって時間の無駄」
…ニッコリ笑って言う小塚さんが、実は一番怖いかもしれない。
この人、今彼らのことを何回「モテない」って言った…？大人な対応かと思ったけれど、嫌味返ししてくる辺り倍怖い。

「はい、そーこーまーで」
それまで黙っていた玲奈さんが、仲裁に入る。
「あんたたちも貴弘も、ちょっと頭冷やしな。崎谷を見習え」
玲奈さんの言葉に、彼らは不満そうに顔を歪めながらも押し黙った。

幸い、それほど大声で怒鳴りあったわけではないので、盛り上がっている他のテーブルの人たちの耳には入っていないようだ。ホッと奈那子と目を合わせて胸を撫で下ろす。

そんな最悪な新歓コンパが、私と名取貴弘との出会いだった。

2

「理沙ぁ、次は一般教養だから総合棟だったよねぇ？」

授業の時間割表を確認しながら、奈那子がそう尋ねてくる。学部も学科も同じなので、取っている授業はほとんど一緒だった。「うん」と短く答えて、私も自分の鞄を持ち直す。…あの最悪な新歓コンパから、数日がたったある日だった。

「あ、そういえば今日バンド練習の日だ」

学部棟を出て総合棟へ向かう途中で、奈那子が不意にそう口にする。ジャズ研は数十名の部員がいて、そのうちのほとんどの人がバンドを組んで活動している。たまに楽器はやらずに聴く専門の人もいるみたいだけれど、それは例外に近かった。新入生はとりあえず全員楽器を持たされ、先輩が「最初だけは」とバンドメンバーを振り分けてくれるのだ。

そこから、バンドごとに部室を練習に使える曜日と時間を指定してくれる。私と奈那子は玲奈さんが気を遣ってくれたらしく、同じバンドに所属することになった。そして今日が初練習日だ。

「3時半だったっけ。忘れないようにしなきゃね」

奈那子に相槌を打つように言う。バンドメンバーとは一度顔あわせはしたけれど、やはり最初は緊張する。奈那子はあれから自主練習と称して部室の方へ何度も行っているようなので、そこへ行くこと自体にもう緊張もしないようだ。

「昨日もそう言えば部室行った時、あの人たちいたよ」
少し嫌そうな表情になりながら、奈那子が不意にそう話を変えた。
…誰のことか聞かなくても分かる。飲み会で奈那子の隣にいた…小塚修司さんたちに絡んでいた人たちのことだ。
「私、あんまり誰かのことを嫌いとか苦手とか思わないタイプだけど…あの人たちは無理だわ」
ため息まじりに言う奈那子は、本当に珍しい。人のことを悪く言うこと自体がめったにないからだ。

「…そっか。…でも私、あの人たちもそうだけど…あっちの人も苦手かも……」
「え?? 誰?」
意外そうな顔で、奈那子がバッと私の方を振り向く。尋ね返されて、私は少しだけ言いづらそうに顔を歪めた。
「えっと、あの……貴弘…さん?」
おそるおそるその名前を口にしたのには、わけがある。

ジャズ研では、大体の先輩のことを男女関わらず下の名前に「さん」付けすることが多いらしい。
崎谷さんのように皆から苗字の方で呼ばれることが浸透している人もいるけれど、それは数少ない例外らしい。…というわけで、新入生もほとんどの先輩たちを下の名前で呼ぶことが半ば義務づけられたのだけれど…。そういったことに免疫がないということに加え、苦手な人なのですんなりと呼ぶには抵抗があった。

「えぇっ、貴弘さん苦手なの? 何で?」
驚いたように奈那子が大声をあげた。慌ててその口を押さえ込ん

で、「しーっ」と人差し指を立てる。
「『何で』って……ほら、あの飲み会の時…」
「えー、でも、あれは明らかにあっちの男の人たちのが悪かったじゃん」
「……そうなんだけどさ…」
あの口の悪さに絶句したのだけれど、奈那子はそれほど気にならなかったらしい。…いやむしろ、奈那子としては相手の男達が気に入らなかったから「やれやれー」くらいの気持ちだったのかもしれない。

「…なんか、口悪いし美形で軽そうだし……苦手」
「あぁー、理沙って真面目そうで暗そうな男の方が好きだもんね」
「…暗い人が好きなわけじゃないけど」
「うん、でもあれでしょ。人当たりのいいイケメン見ると遊んでそうで嫌なんでしょ？」
「全員がそうってわけじゃないけど…あんまり好きなタイプではないかな」
総合棟までの並木道を歩きながら、私は小さくそう答えた。葉桜になってきた桜の木から、最後の花びらが舞い落ちてくる。それらを眺めていると、不意に昔のことが思い出されてきた。

高校時代に付き合ったろくでもない男のうち最初の一人は、結構なイケメンだった。優しくて誰にでも好かれていて…笑顔のステキな人だったけれど、内面はひどいものだった。気づくと私は三股をかけられていて、しかも本命ではなかったらしい。それから、人気者の美形に信頼を寄せることはまずない。

「そういえばそんな理沙に朗報。今日は崎谷さんも部室の方に来るって言ってたよ」
「うそっ」
「ほんとー。良かったね」
奈那子がウィンクして私の背中を叩く。それに私も思わず笑みを零しそうになった…まさにその瞬間、だった。

「…へー」
どこか感心したような、どこか小バカにしたような…不思議な声が後ろから降ってくる。
驚いて奈那子と同時にそちらを振り返った。そうして次の瞬間、2人して身体を硬直させてしまう。固まった私の目に映ったのは、顔を仰向けて見上げないといけない位置にある…整った顔。

「あんた、崎谷のこと好きなんだ」
その口から漏らされた言葉が、つまり私たちの会話を聞いていたことを物語る。
「……」
聞かれてしまった恥ずかしさや何やらから、私は瞬時に顔が赤くなるのを感じた。それから、それをごまかすためにもキッと目線を上げる。
「…っどこから聞いてたんですか…っ」
尋ねると、貴弘さんはしらっとした表情で答えた。
「『あの人たちもそうだけど…あっちの人も苦手かも……』の辺り？」

……めちゃめちゃ初めの方じゃない！
愕然として、私は首をうな垂れる。…ということは、貴弘さん自

身のことを良く言ってなかったのも聞かれているということで…。

「……」

何か言われるかとか怒られるかと思ったけれど、予想に反して貴弘さんはそのまま私たちを追い抜いていこうとした。それ以上別に何を言うわけでもなく、素通りしようとする。

「…あの…っ」

思わず、呼び止めてしまっていた。言ってしまったことは本心なので謝るのもわざとらしいけれど、何となく無意識に声をかけてしまった感じだった。

「？」

振り向いた貴弘さんは、自分の方から話に入ってきたくせに少し面倒くさそうな目をしていた。

「…何で…何も言わないんですか」

自分の悪口を言っていた後輩を目の前にして、そこに反論はないんだろうか。怒られることも覚悟で、私はそう言葉を継ぐ。

「…？」

一瞬だけ怪訝な顔をした後、貴弘さんは「あぁ」と何かを思いついたように小さく頷いた。そうして、私の方へ数歩分戻ってくる。

目線を合わせるように少しかがんだその顔が思いのほか至近距離で…思わず私は目を逸らしたくなった。

「お前さ…」

失礼な呼び方をされるのはこの際甘んじて受けよう。

失礼なことを言ったのはこちらも同じだから。

だけど……。

「男を見る目、なさすぎ」

「……」

一瞬、何を言われたのか分からずに私は目を丸くしてしまった。

てっきり怒られると思っていたのに…。

驚いて固まっている私に、「じゃーな」と鼻で笑って貴弘さんは踵を返す。その後ろ姿を見送っているうちに…私はようやく何を言われたのか理解した。

「…っ何あれ…っ！」

「…ぷぷっ」

気づいて声をあげそうになったのと同時に、隣の奈那子が堪えきれないといった感じで吹き出す。

「笑い事じゃないよ！奈那子！何あの人！！」

「…いやー、良かったじゃん、悪口言ってたこと怒られなくて」

「怒られたほうが良かったよ！」

「貴弘さんナイスだわー。好きだなー私は」

笑って言う奈那子に抗議の視線を向けたけれど、気づいていないのか効果は全くなかった。

＊＊＊＊＊＊

総合棟での一般教養の講義を終えると、その後は昼前の空き時間だった。このコマに関しては取れる授業がなかったんだ。ランチの時間になればカフェテラスは混むだろうから、早めの昼食にしようと奈那子と話していた。そうしてそこへ向かう途中、学部棟へ一度戻ってその中を通り抜ける時にも私は膨れっ面のままだった。

「まだ怒ってんの？理沙」

苦笑い気味に言いながら、奈那子は学部棟の重いドアを開く。尋ねられて、私は更に頬を膨らませた。

「…だって、あの人私のこと『見る目ない』って…！」

「あーはいはい。理沙は前からそのこと気にしてるんだもんねー」

一人目のイケメン彼氏がひどかったせいで、二人目の時は少し慎重になった。

やっぱり、男は顔じゃなくて内面だと思ったんだ。そうして付き合ったのはルックスは普通だけどとても優しい人だった。だけどその優しさも表向きのもので、付き合っていくうちに「お金を貸してほしい」と頼まれるようになった。

もちろん、それが返ってきた試しはない。元々どんなに仲が良い友人でも彼氏でも、金銭的なやりとりはしたくないと思っていたのですぐに別れたけれど。

三人目に関しては最悪だった。

お金にルーズじゃなく、ルックスも特別良いわけではない優しい人を選んだ。だけどそれも表面的なもので、付き合い始めるとものすごい嫉妬深い男だった。おかげで、束縛の余り何度叩かれたか分からない。初めは耐えようとしたけれど、しばらくそれが続いたために鳩尾に再起不能なくらいのケリをくらわせて別れた。

「…ホント、見る目なかったもんねー」

奈那子も同じことを思い出していたのか、苦笑気味にそう言った。

「言わないでよ…自分でも恥ずかしいんだからさ」

穴があったら入りたいとはまさにこういうことだろう。思い出しただけでもへこむ。

「だからこそ、今回はより慎重なんでしょ？」

そうなんだ。慎重に慎重を重ねて色んな男の人を見たけれど…崎谷さんは、大丈夫な気がした。美形！というほどのルックスではないけれど、そこが逆に私のツボだった。そして何より、大人な対応のできる人。

「…どっかの誰かさんとは大違い！」

さっき吐かれた失礼な言葉を思い出しながら、私は毒づいた。

「…あ！」

不意に、そんな私の隣で奈那子が大きな声を上げる。どうやら私との話の後半は聞いていなかったらしい。通り過ぎようとしていた部屋の前で立ち止まり、そちらを見つめていた。

「どうしたの？」

同じようにそこを見ると、その部屋のガラス窓から見えたのは奈那子のテンションを上げそうな人物の姿。椅子の背もたれにもたれ

て雑誌のページを捲っている、修司さんだった。

「ちょっと、寄ってっていい？理沙」

「いいよー」

肩を竦めながら答えたけれど、奈那子は私が返事する前にもうドアに手をかけていた。講義室ではないようなので、入っても問題はないだろう。そのドアの上を見るとそこには「資料室」の表記。そういえば古い文献とか調べものをするにはもってこいの部屋だって…ガイダンスで説明されていたっけ。もっとも、ゼミとかが始まらないと新入生の私たちにまだ用はないだろうけれど。

「失礼しまーす」

そっと声をかけながらドアを開けると、中にいた修司さんがこちらを振り返った。私たちの姿に気づいて、ニッコリ笑う。この前も思ったけれど…笑顔がとても印象的な人だ。

「奈那子ちゃんに理沙ちゃん。何か調べに来たの？」

「え、いえ、修司さんの姿が見えたので…どうしたんですか？うちの学部棟で」

ニコニコして尋ね返しながら、奈那子は中へ入っていく。ドアを後ろ手に閉めてから、私はその後をついていった。

…そうだ、そういえば修司さんは教育学部じゃなくて法学部なはずだ。この学部棟にいることが意外で、私も少し首を捻った。

「あー、俺は付き合い」

読んでいた雑誌を置きながら、修司さんは私と奈那子にも椅子を

勧めてくれる。資料室はそれほど広くはなく、机と椅子も６人くらいが座れる程度のものだった。奈那子が修司さんの隣に、その向かいに私が座る。「そうなんですかー」と、奈那子が座りながら相槌を打った時だった。

「俺は付き合ってくれなんて頼んだ覚えはねぇな」

不意に、後ろから声がした。

低めのバリトンボイス。心地よく耳に届いたその声に、私と奈那子は同時にそちらを見る。資料の並ぶ本棚の影から、一人の男の人が姿を見せた。

白いＴシャツの上にジャケットを羽織ったその人は、かなり背が高かった。１８０台後半くらいありそうなあの貴弘さんと同じか…それ以上かもしれない。短髪を固め、顎髭を生やし…左耳だけにピアスをしていたけれどそれが似合いすぎている。美形と称されるくらいにはかっこいいのだろうけれど、貴弘さんや修司さんとはタイプが違っていた。どちらかというと…「怖いお兄さん」と言った感じの雰囲気。

「またまたぁ、そんなこと言うなよー」

笑ってそう言う修司さんの言葉に、その人は「ふん」と鼻であしらった。

そしてそのままこちらへ近寄ってきて…発掘してきたらしい山ほどある資料を、私の隣に置く。椅子を引いて座ろうとしたそんな彼に、修司さんは改めて声をかけた。

「ユキ、この子たちジャズ研の新入生」
ユキと呼ばれたその男の人は、それからようやく私と奈那子の方を見る。
「来栖奈那子ちゃんと、拓巳理沙ちゃん」
手で私たちを示しながら紹介してくれると、その人は「どうも」と軽く頭を下げた。…どうやら、修司さんのように話すのが得意な方ではないらしい。
「で、こっちの怖いおにーさんが本城行禎。玲奈さんのお気に入り」
そう紹介すると、ユキサダさんは「そりゃ貴弘とお前のことだろ」と興味なさそうに呟いた。…というか、玲奈さんは誰でも分け隔てなくかわいがっている感じがする。

ちょっと強面のユキサダさんにも、奈那子は臆することなく話しかけられるらしい。教育学部、しかも私たちと同じ学科らしいことを知って、更にテンション高く会話をしている。返ってくる彼からの言葉は少ないけれど、あしらうような返事はしなかった。…見かけによらずイイ人なのかもしれない。

「ユキサダさん…って、呼びにくいんですけど」
ユキサダさんと奈那子の間の会話が盛り上がってる（？）のを私は黙って聞いていたけれど、そんないきなりな奈那子の言葉には驚いて目を見開いた。
「あー、わかる。だから俺も『ユキ』って呼んでるし。『サダ』が呼びにくいんだよね」
修司さんが、うんうんと頷きながら相槌を打つ。そんな2人の言葉に、ユキサダさん（…確かに言いにくい）は資料をめくりながら目線を落としたまま言葉を返した。

「知るか。俺の父親に言え」
言葉はぶっきらぼうだけれど、それほど冷たさを感じないのが不思議だ。

「でも『ユキさん』だと女の子みたいだし…」
「あー、確かに」
いちいち頷いて奈那子に同調してくれる修司さん。意外にイイコンビかもしれない。
「ってことで、『ユキ先輩』って呼んでいいですかぁ？」
奈那子の続いた言葉に、ユキサダさんは「…勝手にしろ」と答える。やっぱり興味はなさそうだった。
「ね、理沙もそう呼ぼう」
ニッコリ笑って私を振り返った奈那子に、戸惑いながらも「…う、うん」と頷いた。

「…そう言えば理沙ちゃん、今日大人しいね」
不意に気づいたように、修司さんが私の顔を覗きこむ。「具合悪い？」聞かれた隣で、ユキサダさ…もとい、ユキ先輩もこちらを振り返った。

「え、いえ…そういうわけじゃ…」
手を左右に振って否定するけれど、修司さんはどこか心配そうに私を見る。前に会ったお酒の席では頑張ってテンションも上げていたため、ギャップがあるのかもしれない。…それに…さっきの出来事が未だムカついているせいもあるし。
「あー、理沙はちょっと今ご機嫌ナナメなんです」
私とちょうど同じことに思い至ったのか、奈那子がそんな風に修

司さんに答える。
「ちょっと、奈那子…！」
余計なことを言いそうだったので、私は慌ててその名を呼んだ。

「え、何？何か嫌なことでもあったの？」
「いえ、何でもな…」
「それがさっき貴弘さんがぁ」
言いかけた私の向かいの席で、奈那子が平然とその名前を出す。
修司さんとユキ先輩にとっても出てきたその名前が意外だったようで、少し目を見開いた。
「奈那子っ」
たしなめるように呼んだけれど、もう手遅れだった。修司さんたちだって、自分の友人の名前が出てきたせいで興味津々の顔。机の上に乗り出しかけていた体を、私は諦めて椅子に戻す。それを受けて、奈那子がさっきまでのやり取りを話し始めた。

ささやかな心遣いのつもりか、崎谷さんの名前の部分だけは伏せてくれていた。

＊＊＊＊＊＊

「あっはっはっ！！」
…笑いごとじゃない。
話を聞き終えて豪快に声をたてて笑った修司さんを、私は先輩だということも忘れて軽く睨みつけてしまう。じと、と上目遣いに睨

む私に気づいて、慌てて咳払いでごまかしたけれどもう遅い。再び頬を膨らませた私に、修司さんはもう一度吹きだしかけて寸でのところで堪えた。

「…いや、何があったのかと思ったら……」

膨れっ面の私が面白いんだろうか。それとも貴弘さんの発言が容易に想像できたからだろうか。

おかしそうに笑う修司さんに、私は更に「むー」と眉を寄せた。

「ごめんごめん、笑って。いやぁでも、それは貴弘もちょっとショックだっただろうなぁ」

「そうですか？　悪口言われてるのに全く気にしてない風でしたけど…」

なんといっても自分が言われたことより、私の男の見る目のなさを指摘してきたくらいなのだから…。

そう思って言ったけれど、修司さんは「いやいや」と苦笑いを浮かべながら首を振った。

「貴弘がショックだったのは、理沙ちゃんが悪口言ったことじゃなくて理沙ちゃんに好きな人がいるってところ」

「……はい？」

意味が分からず、私は思いっきり首を横に傾けた。同じように同じ向きに首を傾げて、修司さんはニッコリ笑う。

「あの飲み会の時、貴弘のやつ理沙ちゃんのこと気に入ったみたいだったから」

「……はい！！？」

思わず、大声をあげてしまった。狭い資料室に、私だけの声が響く。他に誰もいなくて良かった、そう思うくらいに大きな声だった。

隣でユキ先輩が思わず耳を塞いだほどだ。

「えぇっ、それって…！」
瞬時に、奈那子の目が輝く。…どうせ、面白くなってきたとか思っているに違いない。

「…でも私、あの飲み会の時確かに隣にいましたけど…ほとんど話してませんよ」
どこをどう気に入ってもらえるのか全く心当たりがない。言ってみたけれど、修司さんは肩を竦めて笑った。
「あんまり関係ないんじゃない？話したかどうかとかは」
「え、じゃあ理沙の顔が気に入ったってことですかねぇ」
奈那子の問いに、ユキ先輩が資料に目を落としたまま口を開く。
「バカな奴らがバカな発言した時に、反論しようとしたからだろ」
飲み会の時にはいなかったはずのユキ先輩が、そう言った。修司さん辺りから聞いたのだろうか。彼らを悪く言うあの人たちに耐えかねて、私が立ち上がりかけたことを。
「貴弘、そういう正義感の強い女の子に弱いんだよねー」
笑顔のステキな修司さんだけれど、この時のニヤニヤ顔は嬉しくない。

「で、でも…！いくらなんでもあの発言は失礼だと思いますっ」
奈那子まで修司さんにつられるように嫌な笑みを浮かべてきたので、私は慌てて話を戻した。大体、気に入っていたと言ったってほとんど話をしたこともない私に「見る目ない」発言は失礼すぎる。

「うーん…ま、そこは俺は何とも言えないけど…。理沙ちゃんの好きな人が誰かわかんないし」

修司さんは首を傾げながらそう言った。
私に気を遣って、奈那子が名前を伏せながら話したのだから当然と言えば当然だ。だけど、ユキ先輩が隣で顔を上げないまま呟く。
「崎谷だろ」
不意に出てきたその名前に、私と奈那子は驚いて椅子から腰を浮かしかけた。

そんなこちらのリアクションを横目で確認して、ユキ先輩は言葉を継ぐ。
「貴弘が『見る目がない』って言うってことは、あいつも知ってる男…つまりうちのサークルの人間だろ。で、まだ飲み会にしか参加してない1年のお前があの場で惚れそうな奴って言ったら崎谷くらいしかいない」
「はー、なるほどねー」
ユキ先輩の向かい側で、修司さんがポンと手を打った。
「そっか、崎谷かー。崎谷ねー」
何かを考えるように、うーんと唸りながらその名を連呼する。

「で、どうなんですか？」
バレてしまったので開き直ったように態度を改めて、奈那子がふとそう尋ねた。
「崎谷さんって、イイ人そうに見えましたけど…貴弘さんが言うように『見る目ない』って思われるような人なんですか？」
「うーん…」
腕を組んだ修司さんが、眉を寄せて首を捻る。
「俺はそんなに悪い奴だとは思わないんだけどなぁ。…ユキは？どう思う？」
「黙秘」
事情聴取を受ける容疑者か何かのように、ユキ先輩は短くそう言い放った。でも「答えない」ということは、ユキ先輩は修司さんの

ように崎谷さんを良く思っていないのかもしれない。
…結局、どっちの言い分が本当なのか全然わからない。

「貴弘さんが、ヤキモチやいて意地悪でそう言ったってことはないんですかね」
奈那子が更に、そう尋ねる。
「うーん…そういうことするタイプじゃないけどなぁ、あいつ」
首を傾げた修司さんが、解せないと言わんばかりに唇を歪める。
でもそれも一瞬のことで、やがて彼は「そうだ！」と何かを思いついたらしく顔を上げた。
「理沙ちゃんさ」
まっすぐに私を見る。その笑顔はいたずらを思いついた子どものようにどこかキラキラしていた。

「俺と貴弘とユキだったら、誰と付き合う？」
「は！？」
思わず、大声で声を上げてしまう。
…何を言い出すのかと思ったら…驚いて、私は目をこれ以上ないくらいに見開いた。
「3人同時に告白してきて、誰かと付き合わなきゃいけないってなったら誰にする？」
ニコニコ笑いながら尋ねる修司さんに、ユキ先輩が「趣味悪い質問だな」とため息まじりに呟く。

誰かと付き合わなきゃいけないとしたら…？

修司さんに尋ねられた問いを、今度は胸の中で自問する。

…まず、貴弘さんはない。

ああいう口が悪くて子どもっぽいケンカの買い方をするタイプは好みじゃないからだ。その上、女遊びの激しそうな軽薄な感じのルックス。美形だから女の子は寄ってくるだろうけれど、私はそういうのが好きじゃない。

次に、修司さん。

彼もかなりの美形だし、本当なら近寄りたくないタイプだけれど…。話してみたら優しいし話しやすいし、嫌いなタイプじゃない。でも…奈那子に遠慮するわけでもないけれど、付き合えるかと聞かれると疑問が残る。

多分…硬派そうで、大人な考え方を持っていて…。私の理想に一番近いとなると、迷いはない。

「ユキ先輩…かな」

答えると、一瞬だけ空気がしんとなった。

奈那子は、意外そうに目を見開く。修司さんは、「…残念、俺じゃなかったか」と言ってニッコリ笑った。

…ユキ先輩は…。

隣を振り返ると、ちょうどユキ先輩の携帯が机の上で音を立てた。誰かからの通話着信を意味するランプが点滅したかと思うと、ユキ先輩は長い指でその携帯を拾い上げる。

「…はい」

低い声で応じた後、相手の声に何度か軽い相槌を打っていた。それを黙然と三人で見守っている中、すぐにごく短い通話を終わらせてそのまま立ち上がる。

「悪い、用事ができた」

机の上に広げていた資料を集めながら、ユキ先輩はそう言った。帰り支度を整え、最後に携帯をズボンのポケットに押し込む。そのまま椅子を机の内側に押し入れて、資料室を出て行こうとした。

「…そうだ、お前さ」

私の横を通り抜けようとした際、ピタッとその場で足を止める。座ったまま見上げると、ユキ先輩は今まで見たことがないような笑みを口元に浮かべていた。そして、続ける。

「やっぱり男見る目ねぇよ」

「……」

言われて、私は思わず目を瞠った。フラッシュバックする、数時間前の貴弘さんの言葉。

だけど今回は、あの時のように怒りというよりも…。

「ユキ、今日はどこのお姉さんの呼び出し？」

「うるせぇ。じゃあな」

修司さんの揶揄するような声を真顔であしらった。そしてそのまま、今度こそ本当に資料室を出ていく。

「…どうして…？」

小さな呟きが、それを見送った私の唇から漏れた。

貴弘さんにもユキ先輩にも、指摘された私のコンプレックス。

この時の私には、どうして崎谷さんを好きになったら見る目がないのか、全くわからなかったんだ。

3

後からサークルの先輩たちに聞いた話では、あの3人の中で一番遊び人なのはユキ先輩らしかった。一番硬派そうに見えて、誰とも付き合わない代わりに誰とでも遊んでしまうという…相当にタチが悪いらしい。意外に一番軽そうな貴弘さんは女の影があまりないらしく、さすがの修司さんも私の男を見る目のなさにフォローを忘れて苦笑いしたほどだ。

「いやー、まさかここまでとは」

その日の授業を終えて、部室にバンド練習に来た私を迎えたのはまさにその苦笑い気味な修司さんだった。昼前に会った時の話の続きらしい。

「ま、別にユキより貴弘の方が誰からみてもイイ男だとは言わないけど、理沙ちゃんは軽い女付き合いしてそうな男が嫌なんでしょ？そういう意味ではやっぱり見る目ないのかもね」

「……ですね…」

がっくりと肩を落としながら、私は部室に入ろうとドアを引いた。バンドのメンバーはまだ来ていないようだった。

「俺が何だって？」

中に楽器を置いてあるらしく、同じように部室に入ってこようとした修司さんの後ろで第三者の声が降ってきた。その聞き覚えのある声に、私は思わずバッと顔を上げる。軽く小首を傾げた、貴弘さんがそこに立っていた。

「おぅ、貴弘。理沙ちゃんのバンド練習でも見学に来た？」
振り返った修司さんが、そう声をかける。その言葉で、貴弘さんが私のことを気に入ってるらしいという修司さんの話を思い出して、私はボッと顔が赤くなるのを感じた。
…うぅ、意識することなんてないのに…！

「はぁ？んなわけねぇだろ。ユキにＣＤ返すからここで待ち合わせしてんだよ」
「あー、そっか」
なるほど、と呟いた修司さんが、私に続いて靴を脱いで部室に上がった。

…なんか…この人が私のこと気に入ってるなんて、何かの間違いじゃないんだろうか…？言葉の節々からは、まったくそれらしいことが感じられない。

「あ、理沙ちゃん」
ふと、部室の奥の方から誰かの声がした。ピアノの影に隠れていたその声の主を探すと、そこにはこちらを見てニッコリ笑っている崎谷さんの姿があった。
椅子に座って、手にしたドラムのスティックをクルクルと回している。準備運動のようにも見えた。

「崎谷さん、こんにちは…っ」
ガバッと頭を下げて挨拶をし、私は奥へ入っていく。それに続い

た修司さんが、後ろでわずかに眉を寄せた。
「崎谷、何してんの？これからここ理沙ちゃんたちがバンド練習で使うよ？」
声をかけながら、修司さんはまっすぐ楽器を置いた棚の方へ向かう。自分のテナーサックスを出しながら、そう尋ねた。

この部屋がある場所は校舎からは少し離れていて、長屋のように様々な部室が並んでいる。ジャズ研ではどこかのバンドが部室を使っている時は、それ以外の自主練習をしたい人は部室の外…つまり屋外で練習することになる。だから、修司さんは楽器を取ったらすぐに外に出るつもりだったようだ。

「あぁ、うん、分かってるよ。ただ一年生もいきなりバンド練習って言われても、何していいかわからないだろうと思って」
笑って、崎谷さんは修司さんに答える。
「俺で良ければ少しは教えてあげられるかな、と思って来たんだ」
「…へぇ」
感嘆の意味の感じられない感嘆詞を口にして、修司さんは意味ありげに笑った。それに崎谷さんが気づいたかどうかは分からないけれど、修司さんはそれ以上何も言わずに素知らぬ顔でそのままテナーサックスのケースを手にもう一度靴を履く。

「じゃあね、理沙ちゃん。練習頑張って」
改めてこちらにそう声をかけてくれた修司さんにペコリと会釈をして、私は崎谷さんと2人部室に取り残された。

面倒見が良い人なんだなぁ、と思う。私たち新入生の世話まで買って出てくれるなんて…。正直、場所と楽器だけ与えられても初めてのことすぎて何をどうすればいいのか分からなかったから。

やがてバンドメンバーがぽつぽつと集まり始め、崎谷さんが面倒を見てくれる中初めてのバンド練習を進めることになった。

＊＊＊＊＊＊

一時間ほどの練習を終えて、私は奈那子と外に出た。そこには何人もの先輩が個人練習をしていて、中には玲奈さんの姿も見かける。

「よ、理沙ー」

手を振ってくれる玲奈さんに笑いながら会釈を返して、私は靴を履いた。

「どうだった？初練習」

部室のドアに一番近いところで練習していた修司さんが、出てきた私たちに一番に声をかけてくれる。それだけで隣の奈那子の目はピンクのハート状態だ。

「難しかったですー、裏拍取るのも今まであんまりやったことなかったし…」

「あー、初めはそうだよね」

奈那子と笑いながら会話をして、修司さんはふと私にも視線を止

める。
「これからさ、ユキと合流してなんか食べに行こうかって話してたんだけど…2人も良かったら来ない？」
「え、いいんですかぁっ？」
私が何か答えるよりも早く、奈那子がズイと身を乗り出して聞き返した。…テンション高いなぁ。仕方ないけど。

「貴弘も行くだろ？」
修司さんが、傍らに座り込んでいた貴弘さんをそう言いながら振り向く。どうやら1時間も待ったのにユキ先輩とはここで会えなかったらしい。待たされたせいなのか、少し不機嫌そうに顔を上げた。
「…いや、俺は…」
言いかけた瞬間、私の後ろで部室のドアが開く。
「理沙ちゃん」
中から顔を出した崎谷さんが、帰り支度を整えて出てくるところだった。

「はい」と振り返り、私は彼の顔を見上げる。するとニッコリ笑った崎谷さんは、「今から時間ある？」と不意打ちで尋ねてきた。
「もし良かったら、お茶でもして帰らない？近くにうちの学生に人気のカフェがあるんだけど…」
「え……」
思わず、突然の誘いに目を見開いて硬直してしまう。驚きの余り戸惑っていると、崎谷さんはふわっと柔らかく笑った。
「無理にとは言わないんだけど…さっき練習した曲でもちょっと困ってた部分あったみたいだし、良かったら教えるよ」
相変わらず爽やかな笑顔で言われて、私は胸のどこかがキュンと音をたてるのを感じる。

ちらっと横目で見た奈那子と修司さんは、「いいよ行っても」という感じで目配せしてくれる。貴弘さんは…座り込んだ態勢のままだったけれど、こちらを見ようとはしなかった。

「あ、ありがとうございます…」

緊張からかしどろもどろになりながら、私は崎谷さんにそうお礼を言う。

「あの、でもちょっと先約があるので…すみません。また誘ってください」

答えた私に、崎谷さんよりも奈那子と修司さんの方が驚いた顔をしていた。

＊＊＊＊＊＊

「で？」

修司さんの車を出して行った少し学校から離れた場所にあるおしゃれなカフェで、合流したユキ先輩が私にそう言った。

「…『で？』とおっしゃられましても…」

妙な威圧感のせいで、なんでだか不必要なほどの尊敬語になってしまう。肩をすぼめて萎縮する私の前で、ユキ先輩はオーダーしたブラックコーヒーを飲みながら続けた。

「なんで断ったんだよ？崎谷からの誘いだったんだろ？」

「そうだよー。遠慮せずに行ってきても良かったのに」

ユキ先輩の言葉に乗っかるように、奈那子も同調してそう口にする。

でも…先に誘ってくれたのは修司さんだったし。あの時、絶対にこっちを見ないようにしていた貴弘さんのことも気になった。…これは、私が自意識過剰すぎるだけかもしれないけれど…。

「でも、崎谷さんも理沙狙いっぽくないですか？」

ホットのストレートティーに、ストロベリーパフェ。それらを前に揃えた奈那子が、首を傾げながらそう言う。

「わざわざ理沙だけ誘ってたし」

続けた奈那子の隣で、修司さんがカフェオレを飲みながら少し笑った。

「あぁ、うん。俺もそれ思った。良かったねー、理沙ちゃん。そんで貴弘残念ー」

あっはっはと笑いながら言うその修司さんの言葉の最後に、私はギョッとしてしまう。本人目の前に、そんなことあけっぴろげに言うと思わなかったからだ。

「……」

アイスコーヒーにガムシロップを入れながら、貴弘さんはそんな修司さんの言葉を無視していた。特に否定するわけでも、反論するわけでもなく…。私は本当にこの人が何を考えてるか分からない。

でも、そう思ったのもつかの間…。貴弘さんは、ストローでコーヒーを混ぜながらふと口を開いた。端正な顔立ちが微妙に不機嫌そうに歪む。

「崎谷はやめとけ」

その言葉がつまりは自分に向けられたものなのだと認識した頃には、私は「え」と眉を寄せていた。

「あいつはやめといた方がいい」
続けられたその言葉に、私はようやく何を言われているのか理解する。頭の中でその意味を整理させた時、思わず顔を歪めて斜め前の貴弘さんを見据えてしまっていた。
「何でそんなこと、あなたに言われなきゃいけないんですか」
「…ちょ、理沙…」
私が本気で言い返し始めたのを悟って、奈那子が少し慌てて隣の私の腕を掴んだ。制止するようなその手すら、私はブンと振りほどく。
「崎谷さんはイイ人ですっ。後輩の面倒見てくれるし、優しいし」
「理沙っ」
「何より、いつだって大人な対応で人のことこんな風に影で悪く言ったりしないし」
そう、あの飲み会の時、目の前にいた男たちが修司さんたちを悪く言ってもむしろそれをなだめていたくらいで…。

「誰かさんみたいに軽薄そうじゃないし。それに…っ」
更にまだ言いかけた私に、貴弘さんが片手を挙げて制した。
「わかった、もういい」
さっきまでの不機嫌そうな表情とはまた異質の苦い顔で、どこか呆れたような…長く細いため息をつく。
「勝手にしろ」
ズボンから取り出した財布からお札を一枚引き抜いて、テーブルにバンと置いた。それから、組んでいた足をほどいて立ち上がる。
「悪かったな、『ケーハクそう』で」
睨むように私を見下ろしてそう捨て台詞を残してから、貴弘さんはそのまま出て行ってしまった。卓上のアイスコーヒーには口をつけないままだった。

「…何あれ…っ」
その後ろ姿を見送りながらも、私はガツンと反論することもままならず唇を噛み締める。そんな私を、奈那子が隣から睨み据えてきた。
「理沙が悪いよ、今のは」
「…何でよっ」
頬を膨らませて、私は言い返す。
「だって、あの人今朝から失礼なんだもん！人のこと見る目ないとか、関係ないくせに『やめとけ』とか！」
言うと、奈那子の向こう側で修司さんが「うーん」と苦笑いをした。
「確かに、貴弘が悪いかな」
「どっちもどっちだろ」
一番冷静なのか、ユキ先輩がテーブルに頬杖をついた態勢でそう言う。

怒りが冷めやらない私は、膨れっ面のまま目の前のチーズケーキの大きな一欠けらを、口に突っ込むように入れた。

＊＊＊＊＊＊

翌日になっても、私の怒りは収まることはなかった。だけど時間がたつにつれ、自分も言い過ぎた面があることは自覚せざるを得なくなっていた。本人目の前に『軽薄』は言っちゃいけなかっただろうと思えてきている。

でも言われた言葉を許すこともできず、私の頭の中はずっと複雑な両極端な思いが交錯していた。反省と自己防衛を繰り返し、疲れたところで「やっぱり向こうが悪い」と結論づける。

そんな反復に自分でも嫌気がさした頃、私は学内の購買にいた。

そこでは今の時期、仮設のプレハブ小屋が建てられている。

そこに各授業の教科書やら指定の本やらが置いてあり、選択する授業を決めた生徒が買いに来るのだ。教授たちの方は授業を最後までやり通す学生が意外に少ないことを見越して、入荷する本も意外に少なめに注文している。早く行かないと、本気で取りたい授業の教科書さえ手に入らないこともあるかもしれないのだ。

「理沙、そう言えば明後日の一般教養の教科書、残り少なくなってたよー」

その日の3限目を終えた時、ふと奈那子がそう声をかけてきた。奈那子はさっきの授業は何も取っていなかった為、もう一足先に購買の方へ行ってきたらしい。

「えっ、ホントに？」

「うん。あの授業、人気ありそうなんだよね。でも入荷数は少ないから、もうなくなりそうだった」

人気があって人が集中する講義ほど、最後まで残る生徒数は少なかったりする。私は絶対に受けたい講義なのに…「とりあえず」で教科書を買った人がいるのかと思うと腹立たしい。

「分かった。私、次は空きだから行ってくる」

「行ってらっしゃーい」

奈那子に見送られて、私は総合棟の近くにある購買へと急いだ。

プレハブ小屋は学生でにぎわっていて、妙な熱気があって気持ちが悪かった。とりあえず取り急ぎ手にしなきゃいけない講義の分だけ教科書を手に取る。必修科目は人数分入荷されているため、急がなくても買えるはずだ。今日じゃなくてもいいだろう。

「えっと、後は奈那子が教えてくれた講義のやつは…っと」

授業リストと購入するべき本の名前を書いた紙を手に、私は人の間を縫うようにかきわけていく。そうして見つけた向こうの棚に、目当ての本があるのを確認した。ただ、どうやら残り1冊だったようだ。ホッと胸を撫で下ろしながら、そちらへ向かった……その時、だった。

「…っあ」

最後の人ごみを掻き分けられずまごついているうちに、サッと目の前でその1冊が誰かの手に収められてしまう。思わず声を上げた私に、その人がこちらを振り返った。

わずかに目を見開いたその人を見て、私も驚いて一瞬その場に固まってしまう。

「…なに、これ買いに来たわけ？」

私を見下ろして、貴弘さんはそう尋ねてきた。

「はい…え、いえ…」

どちらともつかないような返事をしてしまったのは、昨日のこと

から何となく気まずい気分になってしまったからだった。不思議とさっきまで感じていたはずの怒りは湧き出てこなかった。

…どちらかというと…意外に普通に話しかけてきた貴弘さんの声に、むしろさっきまで怒っていた自分の心の狭さを実感させられた気さえする。煮え切らない返事をする私に、貴弘さんは「ふぅん」と小さく呟いた。それから、ポンと手にしていた教科書を私の頭の上に置くようにして叩く。

「やるよ」

「え、でも…っ」

これを手にしていたということは、貴弘さんだって買いたかったはずだ。一般教養の講義だから、2年生だって選択できる授業だし…。

「お前の方が最後まで真面目に講義受けそうだし」

少しだけ笑って、貴弘さんは私の方にその教科書を押し出した。

「……ありがとう…ございます」

素直にお礼を言って、私はそれを受け取ってしまう。多分、遠慮しようとしても無駄だろうと貴弘さんの雰囲気から読み取れたからだ。

お互いに最後の買い物だったのか、何となくそのままレジの方へ一緒に流されてしまう。この人ごみは本当に異常で、気を抜けば流されてどこへ行ってしまうかわからないくらいだった。なんとか長い列も抜け、無事にレジを終える。

プレハブ小屋を出たところで、言い合わせたわけでもないのに貴弘さんと隣同士で「はぁー」とお互いに大きく息をついた。それに気づいて、思わず顔を見合わせてしまう。目が合うと何だかおかしくて、また同じタイミングで吹き出してしまった。

「すげぇ人だったな」
「…ですね。去年もあんなだったんですか？」
「まーな」
見上げた貴弘さんの横顔は、引き続き笑っていた。昨日のような不機嫌そうな色は一切感じられない。

まさかこんなにも普通に話しかけてもらえるとは思っていなかったので、私は少し面食らったような印象も受けていた。だけど…考えてみたら、前もそうだったかもしれない。
偶然とはいえ自分の悪口を言っていた私に…この人は特に何かを言ってきたりはしなかった。代わりに言われた言葉の方が腹立たしかったから忘れていたけれど…実は結構、私が思っていたよりも大人な対応をしてくれていたんじゃないだろうか。
その時も、今も。

「ありがとうございました」
そう思い当たったのでお礼を言ってみたけれど、貴弘さんはどうも教科書のことだと思ったようだった。
「ちゃんと勉強しろよ」
からかうように言って笑い、そのまま「じゃあな」と片手を挙げて行ってしまおうとする。
「あ、あの…っ」
いつかと同じだった。気づくと無意識のうちに声をかけてしまっていた。
「ん？」

歩いて行こうとしていた貴弘さんが、私の声に首だけこちらを振り返る。教科書の入った大きな袋を持つ手にギュッと力を込めて…私は口を開いた。

「昨日は…言いすぎました。すみませんでした」

ペコッと頭を下げて、私はそう言う。その時持っていた勇気を、全て振り絞った気分だった。

「あー…」

何事かと思ったのか、貴弘さんは一瞬考えたような顔をした後にそう声を出す。大きな手で後頭部の辺りを掻きながら、苦笑いを浮かべた。

「気にすんな。俺も余計なこと言ったし」

「……」

「じゃあな、またサークルで」

今度こそ踵を返して、貴弘さんは行ってしまう。その後ろ姿を見送りながら、私は何故かボーっとしてしまいなかなか動けずにいた。

思っていた印象と…実際の貴弘さんが、少しずつ噛みあわなくなってきていた。…私が思っていたより、ずっと大人だった。

今思うと、飲み会の時あの人たちに突っかかろうとしたのは、自分でなく修司さんを悪く言われていたからなのかもしれない。そう気づくと…私はそのギャップの修正をせざるを得なくなった。

「…不思議な人」

ポツリとした呟きが、不意に自分の唇から漏れ零れていた。

4

「…忘れてた」

余りにも入学当初から色々とありすぎたせいで、肝心のことを忘れてしまっていた。…いや、忘れられるならずっとその方が良かったのだけれど…。

この日、帰宅した家で思い出してしまった。

入学する時、私には2つの悩みがあった。

一つは、自分が新しい環境で新しい人間関係を築くことへの少しの不安。そして、もう一つは…。

他でもない、自分の家族のことだった。

「ただいまー」

「……」

玄関のドアを開けた瞬間、ちょうどそこにいた弟と目が合った。

だけど私の挨拶を受けても、弟は返事をすることもなくそそくさと

2階へと上がって行ってしまう。最近、私を悩ませているのはこの弟だった。

弟の准一はまだ小学6年生になったばかりだった。年の離れた姉弟だったので、小さい頃から相当かわいがってきたものだ。だけど5年生の3学期頃から…准一は急に変わりだした。

家の中でもほとんど口もきかない。母とはボソボソと話をしたりもするけれど、仕事で忙しい父や私とは目が合ってもろくに話をしてくれなかった。

それと同時に、准一の学校でのテストの点がボロボロになって返ってくることが多くなった。元々90点以下なんて取ったことがないくらいにクラスでも優秀な方だった子だ。目も当てられない点数を取ることなんてなかったのに…まるでわざとやっているようにも思えた。

私は、本気でこの弟が心配になった。

何か悩みを抱えているんじゃないか、何か嫌なことがあるんじゃないか。だけどそんな私とは裏腹に、母はドンと構えたものだった。

「悩みぃ？あるに決まってるでしょ！思春期よ思春期！男の子はこうでなくっちゃね！」

豪快に笑う母は、私とは違って年の功なのか余裕を見せていた。

「でも今度わざと0点取ってきたらしばく！」

あっはっはと笑いながら言う母の朗らかさに、救われたこともあるけれど今回は私の更なる頭痛のタネだった。もう少し母も父も真剣になればいいのに…私ばかりが准一の心配をしているようにも感

じられる。これでも両親共本気で心配して大人同士で夜遅くまで話し合ったりしていたことを私が知るのは…もっと後のことだ。

話を戻すけれど、とにかく弟のこの豹変ぶりが気になった私は、もしかしたら学校でいじめられているのかもしれないと思った。だけど准一の幼なじみで今も仲の良い愛海ちゃんにそれとなく聞いてみたら、明るく笑い飛ばされたものだ。

「准一がいじめ？そんなことあるわけないよ」

「じゃあさ、どうしてあんなに口きかなくなったかとか分からない？」

「え、准一おうちで口きかないの？学校では普通だよー？」

…つまりは、私たち家族に対してだけ…ということなのだろうか。何かの甘えなのか、それとも家族に対して気に入らないことがあるのか…やはり定かではなかった。

「え、准一くんまだ口きかないの？」

翌日、空き時間に奈那子と大学構内のカフェに行った。昨年度末くらいに、奈那子には一通りの相談に乗ってもらっている。今日この話をするのは二度目だった。真剣に聞いていた奈那子は、意外そうにそう眉を寄せた。

「そうなの。…というか、0点までとってくるんだからもっとひどくなってるかも…」

「…うーん…反抗期だねぇ。小学校高学年だとそんなもんかもよ？」

男の反抗期なんて、中学生くらいで来るもんだと思ってた。大体、反抗期って何よ、と思う。大してそれらしいものがなかった私からしたら、理解しがたい。

「お母さんもお父さんもなんかあんまり真剣に考えてないみたいに見えるし」

「そんなことはないんじゃないー？」

「だって、お母さんなんて笑ってたよ？『今度わざと0点取ったらしばく』って」

「あははっ！それくらい余裕で構えてる方がいいんじゃない？私、佳奈さんのそういうとこ好きだなぁ」

「娘の私からしたら余計頭が痛いんだって」

ため息まじりに呟いて、私はセルフカウンターで買ってきたミルクティーを一口すする。思ったより熱かったそれに、思わず眉を顰めた…その時だった。

「へー、お前弟いるんだ」

いつの間にいたのか、後ろの席から声がした。急にかけられた声に驚いて、バッと振り返った私は思わず呆れ顔になる。

「…いっつもどこから沸いてくるんですか、貴弘さん」

聞くと、代わりにその更に向こうでユキ先輩が「お前らが来る前からずっといたけどな」と呟いた。

どうやら、私が余りにも話に夢中になっていて気がつかなかっただけらしい。

「で、弟が何だって？反抗期だって？」

話を戻してそう聞いてきながら、貴弘さんは座っていた椅子から立ち上がった。代わりに、こちらのテーブルに近寄ってくる。それを見てユキ先輩も、自分の飲んでいたコーヒーのカップを手に移動してきて、奈那子の隣の椅子を引いた。

貴弘さんも、断りもなく私の隣に座りながらこちらを見る。

「はぁ…まぁ…」

曖昧に濁しながら、私は弱々しい返事を返した。

「何だよ、煮えきらねぇ返事だな」

首を捻りながら、貴弘さんはコーヒーを口にする。思ったよりそれが温くなっていたのか、飲んだ瞬間にまずそうに少し顔を顰めた。

「いえ…なんか、弟の反抗期の心配だなんて、ちょっと…」

くだらない、と思われると思った。ブラコンだと思われても仕方ないことだろう。奈那子だから相談できたけれど、他の人に自分から言う勇気はなかったから。

貴弘さんは、濁した私の語尾をしっかりと読み取ったようだった。こちらは見ないまま…前を向いてコーヒーを飲みながら、再び口を開く。

「…んなわけねぇだろ」

わずかに不機嫌そうに唇を歪めて、はっきりとそう言った。

…くだらないなんて思わない、と、そういうことらしかった。

わかりにくい言い回しだったけれど…それが伝わって、私は思わず少し笑ってしまう。そんな私の様子に気づいたかどうかは定かではなかったけれど、構わず貴弘さんは話を続けた。

「まぁでも、小学校高学年だっけ？その頃は色々と悩みがある時期だろ、男としては」
「…そういうものですかね…」
「なぁユキ、お前も色々あっただろ？」
「…俺の経験談でいいなら全部話してやろうか？下ネタになってもいいなら」
「いいぇぇえ！！結構ですっ！！」
真顔でボケ倒すユキ先輩に全力で拒否すると、貴弘さんとユキ先輩は同時におかしそうに笑う。…どうやら、私の気を紛らわすための2人なりの冗談だったようだ。

「でもまぁ真面目な話、誰か話し相手になってやった方がいいんだろうけどな」
ユキ先輩の改まった言葉に、私は「そうですよね…」と小さく同意する。でも、それは一体誰が…？私ならいくらでも准一の話を聞いてあげたいのに、准一の方が家族を拒んでいるんだ。

「俺が話すか？」
ふと、貴弘さんがそう言った。え、と顔を上げると、いつになく真剣な目をした彼と視線がぶつかる。
「姉には話せなくても、男同士なら話せることもあるかもしれねぇだろ？」
冗談で言っているわけではないことは明らかだった。それは、目を見れば分かる。そしてそんな提案に驚きつつ…一緒に真剣に私の悩みを考えてくれたことが嬉しかったのも事実だった。
「でも…さすがに悪いですし…」

ただやはりそこまで甘えるのもどうかと思って、そう言いかけた時だった。

「じゃあ、俺ならどう？」

新たな声がして、私たちは４人そろってその方向を振り返った。いつからいたのか…そこに立っていたのは、ロンＴにジーパンといういつもよりラフな格好をした崎谷さんだった。かなり前から話を聞いていたらしく、ニッコリ笑ってそこに佇んでいた。

「弟さん、小学生なんだよね？だったらちょうどいいかも。俺、小学校の教職取る予定だし」

「……崎谷さん…」

「ね、どうかな？」

いつもの優しい笑顔で、崎谷さんはそう重ねて尋ねる。ありがたい提案なはずなのに…何故か私は一瞬戸惑ってしまった。

「いいんじゃねぇの」

答えに詰まってしまった私の代わりのつもりか…隣で、不意に貴弘さんがそう言う。ガタンと椅子から立ち上がりながら続けた。

「確かに崎谷の方が適役だろうな。本人が言ってくれてんだから、甘えたら？」

コーヒーのカップを手に取って、貴弘さんは「じゃあな」と私の頭の上にポンと大きな手を乗せる。そしてそのまま、崎谷さんの脇をすり抜けてカフェの出口の方へと向かって行ってしまった。それに続いてユキ先輩が、特に言葉なく後を追う。そんな様子を眺めた後、奈那子が小声で「良かったじゃん、理沙」とウィンクしてきた。

…そう、本当なら、良かったはずなのに…。

よりによって崎谷さんに悩みの相談に乗ってもらえる上に協力までしてもらえるなんて、願ってもないことなはずなのに。

それでも、何故かこの時の私の胸の内は複雑だった。

自分でも理由なんて分からない。

ただ、目の前にいる笑顔の崎谷さんではなく、去っていく貴弘さんの後ろ姿を目で追ってしまっている自分には気がついていた。

＊＊＊＊＊＊

「あれから考えてみたんだけどさ」

早速今日の午後の講義を終えて家に来てくれると言ってくれた崎谷さんは、一緒に乗った電車でそう話を切り出した。どうやら、あの後も准一のことを真剣に考えていてくれたらしい。そのことに対しては本気で頭が下がる思いだった。

「いきなり『話をしよう』って行くよりは、成績も下がってるみたいだし…家庭教師って感じから入るのがいいんじゃないかな」

崎谷さんは、そう提案してくれた。…確かに、あの准一が初対面の人にいきなり心を許すわけはない。それなら…崎谷さんの言うことはもっともな気がした。

「すみません、お願いします」

申し訳なさそうに笑って、私はそう崎谷さんに応えた。

大学から数駅のところにある自宅に、父はもちろん母も不在だった。母は週に3日ほど近くの道場で子どもたちに空手を教えていて、忘れていたけれど今日がちょうどその日だったらしい。准一も小さい頃から母に教わっていたけれど、反抗期のような今の状態になってからは一度も道場には顔を出していないようだった。

…この日も、崎谷さんを連れて家に帰ると自分の部屋にこもっていた。

「准一、入るよ」

部屋をノックしたけれど、返ってくる声はない。いつものことだったので、私はしばらく待ってから勝手にドアを開けた。ベッドに座っていた准一は、こちらに視線を返しすらしなかった。だけど…私が崎谷さんを紹介し始めると、知らない誰かもいたことにようやく気づいたらしく顔を上げる。

「准一、今日から家庭教師してくれる崎谷さん」

そう紹介したけれど、准一は何の感情も読めない無表情で崎谷さんを見つめ返した。

「はじめまして、崎谷です。よろしくね」

ニッコリ笑って挨拶をして、崎谷さんはスッと手を差し出す。だけど准一の方は、その手をチラリと見やっただけで、応じようとはしなかった。

「…すみません、崎谷さん」

謝ると、崎谷さんは「気にしないで」とまた優しく笑う。

「じゃあ、2人にしてもらっていい？」

小声で私に耳打ちする崎谷さんに、私はコクリと頷いた。2人きりにして大丈夫か…崎谷さんが気分を悪くしないか心配だったけれ

ど、確かに私がいてはダメだろうから。
「准一くん、何からやろうか。算数からやる？」
准一を机の方に促しながら、崎谷さんは穏やかな声で優しく話しかけていた。

准一が、黙ったまま答えもせずに…それでも言われた通りに机へ向かう。それに一瞬安堵の息を漏らして、私はその部屋を後にした。

「…で、結局どうだったの？崎谷さんの家庭教師っぷりで」
翌日、会って一番に奈那子がそう尋ねてきた。その問いに、私は小さくため息を漏らす。
「…全然ダメ。崎谷さんはすごく優しく教えてくれたりしてるけど」
ブリックの苺ミルクを飲みながら、私は肩を落とした。
「准一が全然心を開かなくて…」
何度か部屋の外で聞き耳を立てたりしてみたけれど、優しい崎谷さんにも准一はろくに喋らなかった。申し訳なさすぎて帰り際に何度も謝った私に、崎谷さんは首を振って「気にしないで」と言ってくれて…。その優しさに、余計に謝りたくなる。

その後、結局2週間のうちに4回ほど崎谷さんに来てもらったけ

れど、准一の態度が変わることはなかった。挙句の果てに3回目の後なんて…准一が珍しく話しかけてきたと思ったら、とんでもないことを言われた。

「あの人と付き合ってるの？」

久々に聞いたんじゃないかと思うくらいの、弟の声。嬉しさと、質問の内容に驚くという複雑な顔をして…私は「ううん、何で？」と答えていた。

「別に。ただ、付き合ってるんだとしたら…」

准一は自分の部屋のドアに手をかけながら、一度そう言葉を切った。

「相当男の趣味が悪いな、と思っただけ」

言われた言葉に、私は大きく目を瞠ることしかできなかった。そんな私の目の前で、准一はパタンとドアを閉めてしまう。私は、崎谷さんに対する弟のそんな暴言を怒る間もなく…ただ驚いて茫然としてしまっていた。

…准一の考えていることが、ますます分からなくなった。

ため息まじりにそんなことを思い出しながら、私は学部棟の外付け非常階段を降りていた。階段なら校舎内にもあるのだけれど、今の時間は移動の生徒でごった返している。人ごみを避けて、静かな階段をゆっくりと下っていった。

「…え」
4階から下りて、2階にさしかかった頃。踊り場の辺りに見慣れた後ろ姿を見つけて、私は思わず声を漏らしていた。
「…おぅ」
その声が聞こえたらしく、こちらを振り返った貴弘さんは煙草を吸っていた。校舎内では吸えるところが少ないから、ここにいるのかもしれない。

「…なんだか、久しぶりですね」
声をかけながら、私は止めてしまった歩みを再び前へ進めた。踊り場に降り立って、背の高い彼を見上げる。「そうだっけ」と、貴弘さんは少し笑いながら答えた。

なんだか随分と会っていない気がした。最後に会ったのがあのカフェでだから……2週間くらい？
「……」
そう思い当たって、私は思わず自分で驚く。2週間……久しぶりとか随分会ってないとか、そんな風に思うほどの期間じゃないような…。

「えぇっと…私毎日部室に練習に行ってるんですけど…貴弘さんには全然会わないから」
自分の胸の内を自分でごまかすかのように、私はそう言葉を継ぐ。言うと、彼は持っていた煙草を携帯灰皿に押し付けながら「あぁ」と頷いた。

「俺、楽器はやんねぇからな。ジャズ研入ったのは、聴くためだし」
「…そうだったんですか…」
「そう。だからたまにしか部室には行かねぇんだ」
灰皿をしまって、貴弘さんは踊り場の壁にもたれかかる。そうして私を見て…「それより」と続けた。
「どうだよ?弟くんの様子は」
聞かれて、私は「…あ」と小さく声を漏らす。
「…相変わらずです…」
「……そっか」
私がどれだけこの件で悩んでいるかが分かっているのか、貴弘さんは同じように真剣な顔でそう答えてくれた。

…忘れて、なかったんだ。
むしろ会ってすぐ聞いてくれるってことは…気にしてくれていたんじゃないだろうか。

でも…貴弘さんは、崎谷さんのことを尋ねてきたりはしなかった。だからこそ…またいつもと同じ疑問が頭をよぎる。

貴弘さんが私のこと気に入ってるなんて…何かの間違いじゃないんだろうか、って…。

本当に私のことが気になってるなら、崎谷さんのことを聞かない?…ううん、むしろ、あの時相談に乗ってくれる役を崎谷さんに譲ったりしないんじゃないだろうか。

「……」

そう思った瞬間、ある予感が胸をよぎった。

入学当初の飲み会で、気に入ってくれたのは本当かもしれない。

でもあの後私は、貴弘さんの悪口を言ってしまったり…相談に乗ってくれようとしたのに結果的に崎谷さんにお願いしたりと、相当ひどいことをしてるんじゃないだろうか。それなら「今は」もう、私のことなんて何とも思ってないのかもしれない。…別に『気に入ってる』だけで、『好き』だったわけじゃないんだから。

そう気づくと何だか自分がバカみたいに思えた。

一人で少し意識して…「実は優しい人かも」なんて見直してきたりして…。意識過剰な自分が恥ずかしい。

「…おい？」

顔を伏せたまましばらく考えこんでいた私に、貴弘さんが声をかけてくる。ハッと我に返って、私は顔を上げた。

だけど…自分自身が恥ずかしくて、まともに彼の目は見られなかった。

＊＊＊＊＊＊

翌日はまたサークルの飲み会があった。このサークルの人たちは、楽器演奏はもちろんお酒を飲みながらジャズ話に花を咲かせるのが本当に好きらしい。参加人数も相当なもので、皆このサークルが好きなんだなぁと分かる。

まだ不慣れな子が多い一年生が先にバラけて席につき、その隣やら周りに上級生たちが陣取っていく。私はまた隅っこの方に奈那子と2人で座っていた。

「崎谷さん、理沙のところに来てくれるかなぁ」

ウィンクしながら奈那子はそう言う。…だから、そういう合コンみたいな飲み会じゃないっていうのに…。奈那子は毎回こればっかりだ。

「ねぇ、理沙ちゃんてさぁ」

奈那子の呟きが聞こえてしまったのか、後ろのテーブルにいた女の子が声をかけてきた。彼女も新入生で…私や奈那子と同じバンドに所属している。

「やっぱり崎谷さんと付き合ってるの？」

「え！？」

急な問いに、私は驚いて目を見開いた。

「あ、ごめん急に…。なんか最近よく一緒にいるの見かけるし、電車で一緒に帰ったりしてるでしょ？なんかお似合いだなぁって思って」

かわいらしい印象の彼女は、そう言って更にかわいらしく笑った。
「う、ううん、付き合ってないよ」
慌てて首を横に振って、否定する。
「そっか、ごめん、勘違いして」
少し意外そうに目を丸くした彼女は、そう言って私に謝った。

…なんだか、複雑な思いだった。崎谷さんとの仲を…誤解されたくないと思ってしまっている自分がいた。あんなに、大人な人だとか…優しいなとか…憧れていたはずなのに。
「…理沙…？」
奈那子も怪訝な表情で、私の顔を伺う。

「さーって、2年以上も好きなとこ座りなー」
玲奈さんの掛け声で、先輩たちが入ってくる。思い思いに好きなところに座り始める人たちの中、見知った影がこちらに向かってくるのが見えた。

「……っ」
崎谷さん、だ。

…ちょっと今は来ないでほしい…。そんな風にまで思ってしまっている自分にも愕然としたけれど…今の正直な気持ちだった。

「理沙ちゃ…」

少し離れたところから、崎谷さんが私に声をかけようとした。だけどそんな彼の前に、すっと横から誰かが割って入る。
「……ここ座るぞ」
煙草の箱とジッポを私の隣の席に投げるように置きながら、ユキ先輩がそう言った。

「…え、あ、はい…どうぞ」
一瞬驚いたように目を瞠った私は、ユキ先輩の顔を茫然と見上げる。そんな私の隣に構わず座った彼に、向かいの席で奈那子が「ちょっとユキ先輩！」と小声で呼びかけた。小声だけれど…雰囲気的には、少し怒っているような口調。

「今せっかく崎谷さんが理沙の隣に来ようとしてたのにぃ！」
声のトーンは落としたまま、奈那子は顔を突き出してユキ先輩に抗議する。それを受けても、ユキ先輩は煙草に火を点けながら「んなもん知るか」と無表情で答えた。
「お前は？別にいいんだろ？」
隣の私を見ながら、彼はそう言う。
「え、は、はい！」
勢いよく答えた私を髭の生えた顎で指し示して、「ほらみろ」と先輩は奈那子に応じた。
…いや、私としては…『いい』というより、むしろ助かったとさえ思っているほどだった。崎谷さんには申し訳ないのだけれど…。

「それに、俺がここにいたらお前の隣に修司が来るかもしれねぇだろ」
「えっ、もしかしてユキ先輩、私のために…！？」
「感謝してもし足りねぇだろ」

煙草をくわえた口元だけを持ち上げて笑って、ユキ先輩はそう言う。すっかり彼にのせられたらしい奈那子は、「先輩ありがとうっ」とか訳のわからないことを感動で涙目になりながら言っていた。

そんな様子に、私は気づいてしまった。

…わざとだ。

ユキ先輩が私の隣に来たのは。私が、崎谷さんの隣になりたくないと思っているのが分かったから…。

「…ありがとうございます」

小さくお礼を言うと、ユキ先輩はチラリとこちらを横目で見て肩を竦めただけだった。

結局、奈那子の隣にはしばらくして女の先輩がやってきた。

「…ユキ先輩、話が違うじゃないっすか」

急に体育会系のテンションになりながら、奈那子は女の先輩が少し席を外した瞬間に恨みがましくそう言った。

「そういうこともある」

しれっと何本めかの煙草を吸いながら、ユキ先輩はやっぱり無表情だ。

「あー、修司さんあんなに遠いしー」

芝居がかった感じで泣き真似をしながら、奈那子はがっくりと肩を落としながら言う。

「そういえば、貴弘さん今日いませんね」
思い出したように言う奈那子の言葉に、私は一瞬胸がドキンと高鳴るのがわかった。

…何で…？

確かに貴弘さんがいないことは気になっていたけれど、その名前が出ただけで何で…。

「あぁ、なんか用事があるっつってたな」
来られないと聞いただけで、寂しいと思ってしまうなんて。
「早く終わったら来るとも言ってたけど…どうだか」
続けたユキ先輩の言葉を聞いて、どうかしてると自分でも思う。
…何で…こんなに会いたいと思ってしまうのか。

「私、ちょっと…暑くなってきたんで熱冷ましてきます」
飲んだカクテルは2杯だったけれど、なんだか酔いがいつもより早く回ってきたようだった。席を立って、私は靴を履くと外に出た。春だけど夜はまだ肌寒く、ビュっと風が吹き抜けていく。わずかに身震いして、私は居酒屋の軒下に出た。頬の火照りが冷めるまで、少し休んでいこうとした。

「……」
しばらくして、ボソボソと誰かが話をする声が聞こえてきた。耳

を澄まさないと聞こえないくらいのその声に、初めは空耳かと思ったほどだ。だけどそれは現実近くから聞こえるもので…。私は思わず、その声のする方を覗き込んだ。

居酒屋の横の、細い裏路地。そこに少し入ったところを覗くと、貴弘さんの後ろ姿を見つけた。

「……」

用事、終わったんだ…。パァッと胸が明るくなるのを感じながら、私はそちらに行こうとした。声を、かけるために。

「…た…」

だけど呼びかけようとした私の声は、次の瞬間闇に飲まれた。貴弘さんの方へ近寄ろうとした時、更に彼の向こう側に一人の女の人の姿が見えたから。

…あれは…確か3年生の先輩。少し涙まじりで俯き加減。どういう状況なのか…考えなくても分かった。

（…告白…されてるんだ…）

思わずヒュっと息を飲んでしまう。胸がドクンドクンと高鳴り始め、抑えていないと鼓動が響いて聞こえてしまいそうだった。

OKしてしまうんだろうか。

彼女と付き合い始めるんだろうか…。

いや、それよりもどうして私はこんなにショックを受けているんだろう。

高鳴る胸を抑えながら、2人に気づかれないよう居酒屋の中へと戻った。

5

それから、また2週間が過ぎた。週に2日は必ず崎谷さんはうちに来てくれた。

いつも優しい笑顔の彼に癒されていたはずの私は、何だか最近ではその笑顔に言いようのない複雑な感情を抱くようになってしまった。それが何故なのか…何となく、自分でも分かりかけていた。

だけど認めたくない自分もいて…未だに私は奈那子の前でも「崎谷さんに憧れている」フリをしてしまっていた。

貴弘さんには、あれ以来会っていない。あの飲み会の日、居酒屋に入ってきた彼は私がいる方とは全然違うテーブルについてしまったから。貴弘さんに告白したらしい3年の彼女はそのまま帰ったようで、姿は見せなかった。だけどそのことが、彼の返事を物語っているようだった。

ある日の朝、私は崎谷さんを探していた。今日はいつもの通り准一の家庭教師に来てくれる日だ。

だけど朝からその准一に熱があって、学校を休んでいる。だから今日はお休みしてほしいとお願いしたかったからだ。

崎谷さんと仲の良い人を見つけると、学部棟の喫煙ルームにいると教えてもらった。小さな個室のようになっているそこは、それでもドアは開けっぱなしなのであまり機能的とは言えないものだ。遠

目に崎谷さんらしい人を見つけて、私は小走りにそちらへ駆け寄った。

「お前そういや、理沙ちゃんの弟の家庭教師やってんだろ？」

部屋の入口近くまで来た時、中から男の人の声が聞こえてきた。

部屋には崎谷さん以外に2，3人いるらしい。そしてその声の張本人は、前に飲み会で感じが悪かった人の一人だと気がついた。

「あぁ、うん」

煙草の煙を吐き出しながら、崎谷さんはどこか遠い目をする。…煙草を吸う人だったんだという事実を知ったのも、この時が初めてだ。

「でもいい加減腹立ってきてさ」

続いた言葉に、私は自分の耳を疑った。声は崎谷さんのものなのに……別の人が言っているんじゃないかと思いたい。…それくらい、彼らしくない衝撃的な言葉だった。

陰に潜んでいるせいか、私に気づく気配はない。吸っていた煙草の灰を灰皿で落としながら、崎谷さんは続ける。

「それがまた、かわいくねぇクソガキでさ。蹴り飛ばしてやろうかと思ったくらい」

「ひでぇなぁ、お前」

相手の人は、言葉ではそう言いながらも声が笑っていた。

崎谷さんが言っているのが…つまり准一のことだと理解するのに、私は驚きすぎて時間がかかる。

……これ、誰…？

爽やかで優しくて、憧れすら感じていたあの崎谷さん…？本当に？

「そもそも何でそんなん引き受けたんだよ」
誰かが、崎谷さんにそう尋ねていた。聞かれた彼は、少し鼻で笑ったようだった。

「初々しい新入生が俺に気ありそうだったから、ちょっとからかってみた」
「うわ、まじでひでぇ」
笑って応じる男の声が、やけに耳につく。私は無意識のうちに、ギュッと唇を引き結んでいた。噛み締めたそこから、気を抜くと血がにじみ出そうだ。
「そのまま落とすにはちょっと堅そうだたったからさ、弟から懐柔してけば遊べるかな、と」
…頭がグラグラする。眩暈に併発して吐き気すら感じるほど。
「ま、マジで付き合う気なんかなかったけどなー。イイ年した女がたかが反抗期の弟のこと本気で心配したりとか、ブラコンでキモイってんだよ」

…それ以上は、正直聞いていられなかった。

いや、聞く必要もなかった。崎谷さんの本音はもう嫌っていうほど良く分かったから。

「…っ」
何かがこみあげてきそうな胸の奥を何とか押し込めて、私はバッと踵を返した。

＊＊＊＊＊＊

早くその場から離れたかった。
授業が始まっている時間だったけれど、出席する気になんてなれない。無我夢中で逃げるように走りながら…私は無意識のうちに非常階段のドアを勢いよく開けてしまっていた。

カンカンと、音をたてながらそれを下りる。胸の中は余りの衝撃と怒りと哀しみでグチャグチャだった。ただ、それを押し留めようとするので精一杯だ。

「うるせぇぞ、静かに下りろー」
2階に差しかかった頃、私の姿を見つけたらしい人物からそんな声がかかった。

…貴弘さん。
からかうように笑いながら言った彼だったけれど、次の瞬間、私のひどい顔を見て少しだけ目を見開いた。
「…おい、どうした？」
眉を顰めて、尋ねてくれる。その表情と声に…私はさっきまで必死でこらえていたはずの感情が一気にあふれ出すのを感じた。留めることもできず…ただ、その感情と共に驚くほどの涙が零れる。
「うわー」と子どものように声をあげて、上を向いてただ泣く。

何があったのか、貴弘さんに説明する余裕なんてもちろんなかった。

「……」

少し驚いていた貴弘さんも、その私の涙で大体何があったのか分かったようだった。ゆっくりとこちらに近寄ってきて…立ち尽くして泣きじゃくる私に、手を伸ばす。

「！」

グイッと引き寄せられたと思った瞬間、次に我に返った時には私はその腕にすっぽり包まれていた。

ギュッと私を抱きしめる手に、貴弘さんが力を込める。後頭部を撫でてくれる手はびっくりするほど優しかった。

「…だから言っただろ」

静かな声が耳元で囁いた。

「崎谷はやめとけって」

言葉ではそういいながらも、その声に私を責める響きはなかった。ただ、優しく包み込んでくれる。

そんな温かい腕の中で、私は泣きながらコクコクと頷いて返した。

＊＊＊＊＊

「え……？」

散々泣きはらした翌日、奇跡的に目は腫れなかった。寝る前にちゃんと冷やしてから寝たのが良かったのかもしれない。普段通りのメイクで泣いたことがバレないように努力しながら、私は崎谷さんを前にしていた。

「…ごめん理沙ちゃん、もう一回言ってくれる…？」

驚いた顔をした崎谷さんが、目を見開く。そんないつも通りの「紳士的な」崎谷さんを目の前に、私はゴクリと息を飲んだ。

「…あの…だから…もう家庭教師は結構です…」

「准一くん、良くなったの？」

「…いえ、そういうわけじゃないんですけど…」

嘘をつくのには慣れていない。かと言ってバカ正直に話す気なんてもちろんない。もう二度と関わることもないだろうこの人に…正面きって接する必要性を感じないから。

「てめーはもう用済みだって言ってんだよ」

何と言っていいか逡巡しかけた時だった。後ろから、そんな乱暴な言葉が降ってくる。…もちろんそれは、私ではなく崎谷さんに向けられたものだった。

「…名取…っ？」

「…貴弘さん！？」

驚いた崎谷さんと、私の声が重なる。私の後ろでこちらを見下ろしていたのは、貴弘さんに他ならなかった。

「身に覚えはいくらでもあると思うけど？」
後ろからガシっと私の肩を抱きながら、彼はそう言って崎谷さんを睨み据える。目を瞠っていた崎谷さんは…しばらくの間の後、「…ふ」とかすかに笑ってみせた。
「よく分からないけど…俺が悪いわけだ？」
「とぼけんじゃねーよ」
貴弘さんがどういう顔をしているのかは、彼に抱きしめられていて振り返れない私には分からない。…ただ…声のトーンがいつもより数段低いのだけは分かった。

「大体、何で名取が出てくるわけ？俺と理沙ちゃんの話じゃない？」
崎谷さんが、最後の抵抗なのかそう言葉を返す。それに今度は貴弘さんが「ふん」と鼻で笑って見せた。
「そんなもん俺達が付き合うことになったからに決まってんだろ」
「……」
「…は！？」
いきなりな爆弾発言に、目を見開いて無言の崎谷さんと、思い切り驚いてしまった私。そんな私をチラリと見やったけれど、崎谷さんはやがて「…わかったよ」と呟いた。
最後まで紳士のフリをして笑顔を見せる。だけどそうして去っていく後ろ姿を見ても、かなり彼が無理をして虚勢を張っていたんだろうってことが分かった。

「……」
なんとか話がついたことにホッと安堵の息を漏らしてから、私はグイッと貴弘さんの腕を振りほどいた。助かったけれど…この人に言いたいことは山ほどある。

「自分で話すから来なくていいって言ったじゃないですかっ」
「んなこと言ったって、実際困ってたじゃねーかよ」
しらっとした顔で言いながら、貴弘さんは腕を自分の方に引き戻す。
「それに、さっきの……何なんですかっ？付き合ってるとか…！」
「ああ言ったらすぐ引いたじゃねぇかよ」
「…それは…そうですけど…っ」

言葉を濁した私に、ふと貴弘さんが表情を戻した。さっきまでの態度とは違う…どこか真剣味を帯びた感じ。
…でも……。
「その気がないのにあんなこと言うの、ずるいです」
気がつくと、私はポツリとそんな言葉を口にしていた。

本気じゃないって分かってる。
崎谷さんを納得させるための嘘だってことも分かってる。それでも…あんなことを言われたらこっちはどうしても意識してしまう。
私のことなんて好きじゃないくせに…そんなのってずるすぎる。

「……」
立ち尽くして、ギュッと拳に力を込める。そうしていないと弱い自分は崩れてしまいそうだったから。

「……俺は…」

俯いた私の頭上で、静かな声で貴弘さんが口を開いた。

「お前に、『そういう態度』で接してきてたつもりだったけど」

「……っ？」

俯いたまま、思わず私は目を見開く。そんな私の顔を、貴弘さんが両手で包み込んでグイッと上げさせた。仰向けるようにして…ようやく目が合う。

「…分かるわけないじゃないですか…あんなのでっ」

「『あんなの』って言うか…お前…」

ガクッと少し肩を落として、貴弘さんは呟いた。

「それに、修司だってお前に色々言ってたじゃねぇかよ。俺がお前のこと気に入ってるとかなんとか」

「…だって…その割には貴弘さんからそんな感じを受けなかったし…っ」

「ユキだってさりげなく後押ししてただろ」

「…ユキ先輩のはさりげなさすぎてよく分かりません」

言うと、そこで貴弘さんは「そりゃそうだ」と吹き出した。だけどすぐに、フッと表情を変える。再び真剣な眼差しを向けて…彼は続けた。

「ずるいのは、お前の方だろ…」

「……え？」

少し困ったような…悲しい笑い方をしていた。

「『その気がないくせに』そんなこと言う方がずるい」

「……っ」

そりゃそうだろう。

貴弘さんや周りの人の中では、私はずっと崎谷さんのことが好きだったはずなんだから。だけど今この場で、それを弁解するのも違う気がした。どんなに言っても…今の私じゃチープな言葉にしかならない。

「俺は、お前が好きだよ」

頬に触れた貴弘さんの冷たい手が、少しだけ撫でるように上下した。

「『その気になったら』、俺のとこ来て」

「……」

答えるべき言葉を、私はこの時持ち合わせていなかった。本当なら、すぐにでも頷きたい気分だったのに。今すぐにでも抱きついて自分の気持ちを表したいくらいだったのに。

…いつからだろう。

私も、こんなに貴弘さんのことが好きになっていたんだ…。

「…さて、んじゃ行くか」

不意に、私から手を離して貴弘さんがそう言った。

「…え？どこに…」
言いかけた私に、彼はニッと笑う。
「お前、今日もう授業ねぇんだったよな？」
聞かれて、私は自分の時間割を思い出す。確かに、この後は何もないけれど…。
「じゃあ、とっとと行くぞ。お前の弟くんに会いに」
「えっえっ？」
グイと手首を引っ張られて、私は慌ててついて行く。貴弘さんが何をしようとしているのか…この時はまだ頭がついていかずに理解できていなかった。

＊＊＊＊＊＊

昨日は熱を出して休んでいた准一も、今日は学校に行ったようだった。家に着くと、今日は母がいた。貴弘さんを連れて行くと、「まぁまぁ」とどこかのおばちゃんさながら嬉しそうに笑う。
「えっと、私の大学の先輩」
「いつも娘がお世話になってます」
頭を下げる母に、貴弘さんは自分で名乗って挨拶をしていた。思ったよりはるかにまともな感じだった……なんて言ったら怒られそうだけれど。

崎谷さんが来る時は、いつも母がいない時だった。…というか、なんだか母がいる時を私が避けていた。何故そうしてしまっていたのかは…今なら自分でも分かる。

２階の准一の部屋へ、貴弘さんを連れて向かう。母は「そこまで心配しなくてもいい」と私に耳打ちしてきたけれど、私としてはやはり気になってしまっていたから。もしかしたら貴弘さんでも、准一はダメかもしれない。それでも、最後の頼みの綱だった。

ノックして、入りかけたドアを急に貴弘さんが後ろから制した。驚いて振り返ると、「どいてろ」と小声で言われる。わけがわからないまま目を見開いて立っていると、貴弘さんは自分で部屋のドアを開けた。そして、開口一番言った言葉が…。

「准一～ぃ、ゲームやろうぜゲーム！」

……崎谷さんのキャラとは正反対の…そんな一言だった。

呆気にとられている私を放置して、貴弘さんは遠慮なく部屋に入っていく。これには、部屋にいた准一も驚いてポカンとしていた。

「ゲームくらい持ってるだろ？…ってなんだよ、シューティングしかねぇのかよー」

人の部屋の私物を勝手に触りながら、貴弘さんはゲームソフトを物色する。

「テレビねぇの？この部屋。んじゃ下行こうぜ。あ、お母さん、リビング借りますー」

ちょうど2階に用事で上がってきた母にもそう声をかけて、貴弘さんは准一の腕を引っ張った。ズルズルと連れて行かれる弟を茫然

と見守りながら、私は開いた口が塞がらない。

「お前シューティング好きなの？男ならアクションバトルをやれ。今度持ってきてやっから」

リビングでゲームのハードをセッティングしながら、貴弘さんはそんな風に准一に話かけている。勝手知ったる家のように動き回りながら、全ての準備を終えて准一の隣に並んだ。コントローラーを手渡している。

「あ、それと、この前まで来てた家庭教師のお兄ちゃんはクビだから」

電源を入れながら貴弘さんがそう言った時、准一が初めてその言葉に反応した。

「……じゃあ、代わりに来たの？」

「ん？『代わり』？いーや、俺は家庭教師なんてガラじゃねぇからな。ゲーム友達だと思ってろ」

ついてきたはいいけれど、私は後ろでハラハラしながらそれを見守っていた。そんな私の隣にやってきた母は、相変わらず落ち着いた表情で2人の後ろ姿を見つめている。

「まぁでも、呼びたかったら俺のこと『名取先生』って呼んでもいいぞ」

「…いや、いいです」

言葉では素っ気無いような返しをした准一だったけれど……。

「…っ」

「笑った…」

母と私は、思わず互いの顔を見合わせてしまっていた。

それからどれくらいの間だろう。
准一と貴弘さんは、シューティングゲームに本気になっていた。いつもはあまりやらないジャンルらしく、貴弘さんはかなり苦戦したりもしていたけれど。それでも小学生相手に手を抜こうともせず本気になっている姿に、私だけでなく母も大笑いしていた。

そして、何より准一が…。時折くだらない話をする貴弘さんの言葉にきちんと耳を傾けているのが分かる。ゲームを終えて2人で准一の部屋に行ってしまった後も、ドア越しに准一の笑い声が聞こえてきたくらいだった。

「いい人ね」
母が、キッチンでお茶を淹れ直しながらそう言う。「うん」と頷いて、淹れたお茶を乗せたトレイを持ち上げて私は笑った。

母の強引な誘いがあって、貴弘さんは一緒に夕飯を食べて行ってくれた。そうして帰りに門のところまで見送った後…家の中に戻った私は、階段付近にいた准一と目が合った。
「……あ、えっと…」
また勝手なことをしたと弟に怒られるかもしれない。そう思って、何か気の利いたことを言おうとしたけれど…残念ながら何も思い浮かばなかった。

「お姉ちゃん」
代わりに、准一の方がそう呼びかけてくる。
「…っ」
どれくらいぶりだろう、そう呼んでくれるのは。

「この前の人じゃなくて…あの人と付き合ってるの？」
崎谷さんの時と同じ問いを、准一は口にした。「え」と目を見開いた私だったけれど、一瞬だけ嫌な予感がよぎる。もしかして…私、また「見る目ない」とか「趣味が悪い」とか言われるんだろうか…。

「……」
余計なことを考えたせいで、答えるのが少し遅くなってしまった。そのせいか、准一が先に言葉を継ぐ。
「…次、いつ来てくれるかな」
無表情だったけれど、少し照れくさそうにしているように見えた。
「名取先生」
「！…っ」
頑なだった心を、開いてくれた証だった。
瞬時に胸の奥がツンと熱くなるのを感じる。涙が出そうだったのを、弟の前なので必死で押し留めた。

「すぐ来てくれるように頼んでおくよ」
手を伸ばして、准一の頭を軽く撫でる。今までのように拒まれることはなかった。
「うん」
代わりに、少し嬉しそうに笑う。

やっぱり、私には男の人を見る目がなかったらしい。
この子は、こんなに小さいのに少し接しただけで崎谷さんの本性も貴弘さんの内面にも気づけたっていうのに…。

「…ホント、ダメだなぁ」
自嘲するように言って、私は苦笑いを浮かべた。

6

「よーし、こんなもんかな」
テーブルの上いっぱいに並んだ料理を満足そうに見やって、私は「うん」と一人で頷いた。今日はかなり手の込んだ料理で、気合が入っている。

「お、うまそう」
並んだそんな中からパプリカのピクルス漬けを指でつまんだ貴弘の手を、私は横からパシンとはたいた。
「…ってぇな」
「つまみ食い禁止っ。皆来るまで待って」

今日は久々のメンツが揃う予定だった。そのために料理も気合を入れたわけだけれど…念のため私は最終チェックをする。
「えっと、お酒も揃ってるでしょー。後はー」
ウキウキと確認していくと、ダイニングテーブルの前に立った貴弘が小さく肩を竦めた。
「なんかいやに気合入ってんな、お前」
言われて、私は「当然」ときっぱり答えてみせた。

各々が会うことはあっても、全員が揃うのはどれくらいぶりだろう。大学を卒業して数えるくらいしかなかったと思う。

「懐かしいなぁ…」
大学時代を思い出しながら、私はそう小さく呟いた。

あれから、数年の間に色んなことがあった。悲しいことも、嬉しいことも。

あの後すぐに貴弘と付き合いだして、大学3年の頃には子どもができてしまった。籍を入れて学生の身分でできちゃった婚になってしまったけれど、それでも自分は幸せだった。

残念ながら、その赤ちゃんは流産してしまった。身も心も傷が癒えないうちに、今度は交通事故で母を亡くした。ボロボロになりそうだった私だけれど、貴弘がいてくれたから今では幸せを感じながら生きていられていると思う。

子どもを失った時も、母が亡くなった時も、誰よりも一緒に泣いてくれたのが貴弘だったから。

あの後、弟は貴弘に心を開いたことをきっかけにあっさりと元に戻った。…というより、大人しいけれどかなりイイ子に育っていると思う。それもこれも、私以上に准一をかわいがってくれる彼がいるからだろう。

母を亡くした今、私たち姉弟になくてはならない存在だった。そして今、私がまた新たな命を授かることができたのも当然彼のおかげだ。

「お、来たぞ」

マンションのインターフォンを鳴らす音に、貴弘が顔を上げた。
それに応じて客人を迎え入れると、久しぶりのテンションの高さの声が部屋の中に響く。
「お邪魔しまーす」
大きな紙袋を提げて、数ヶ月ぶりに会う奈那子が入ってきた。

「あ、理沙ー。ちょっとお腹大きくなった?」
「ほんのちょっとね」
「ほとんど自前だ、自前」
余計なことを言う貴弘の頭を私がはたくと、「相変わらずね、2人は」と奈那子は笑った。

「これお土産。皆で飲むワインとー、マタニティの理沙にはこっち」
言われてプレゼントを広げると、そこにはマタニティ用のかわいい服。
「嬉しい!ありがとう」
「いえいえー」
笑った奈那子は、次にダイニングテーブルに目を移して驚いたように「わぁ」と声を上げた。
「これ全部理沙が作ったの?すごい!」
「ふっふっふ、一日がかりでしたよ」
「すごいすごーい。早く食べたいー」
奈那子がそう言った時、再びインターフォンが鳴る。画面に映った人物を見ると、どうやらこれで全員揃ったようだ。最後の来客が上がってくるのを待っていると、奈那子が少しわざとらしくふてくされた。

「ていうか、主役より遅れてくるってどういうこと！？」
「まぁまぁ」
苦笑いしながら私は玄関を開けに行く。そうして入ってきた2人組にも、奈那子は「遅ぉい！」と突っかかっていた。
「普通は主役の私を全員揃ってお出迎えじゃないですか！？」
言葉では責めながらも、奈那子は笑っている。靴を脱ぎながら、修司くんは「ごめんね」といつものあの極上スマイルで応じていた。後ろのユキ先輩に関しては…無言で無表情でも奈那子も気にしていない。

そして全員が揃ったところで、リビングのテーブルにつく。ワイングラスを片手に、修司くんがその場を取り仕切った。
「えーっと、じゃあ奈那子ちゃんの婚約を祝して、乾杯ー」
チン、と互いのグラスを合わせて、乾杯する。妊娠中の私だけはグレープフルーツジュースだ。
「ありがとうー」
幸せそうに笑いながら、奈那子は嬉しそうだった。

元々美人の奈那子だけれど、幸せだからか今までよりとてもキレイに見えた。婚約相手はどうも合コンで知り合ったらしい商社マンで、とてもイイ人らしかった。食事をしながら、お酒を飲みながら…奈那子のなれそめ話を聞く。私も少ししか聞けていなかったので、本格的に聞くのは今日が初めてだった。
「大丈夫なんだろうなぁ、その男」
からかうように貴弘が言うと、奈那子が笑いながらわざと膨れっ面をしてみせた。
「イイ人ですー。どっかの誰かと違って私は男見る目ありますもん」
「…悪かったわねぇ」

「あははっ、まぁいいじゃん。理沙は遠回りした分、イイ旦那さんゲットできたんだから」
貴弘を指し示しながら、奈那子はそう言う。…確かに、そこまでの男遍歴をを知る奈那子には言い返す言葉もない。

「顔は普通なんだけどー、性格がめちゃめちゃ優しくってね」
ハートを飛ばしながらのろけていた奈那子だったけれど、ふと隣の修司くんを見やる。
「あ、でもやっぱり一番イイ男だと思うのは修司さんなんですけどね」
「それはありがとう」
あっさりそういうことを本人に言えてしまう奈那子と、サラッと受け流せる修司くんと。この2人は結局大学時代からずっとこんな感じで、でも互いにその距離感を楽しんでいるようにも見えた。

「でもびっくりしましたー。ユキ先輩めっちゃかっこ良くなってて！」
お酒が入ってきて饒舌になってきた奈那子は、ポンポンと話の振り幅を変える。
「あ、でも昔からかっこ良かったですよ?でもなんていうか…更に角が取れたというか…」
「あぁ、それはねぇ…」
ニヤッとした修司くんに、ユキ先輩は嫌な予感がしたのか「修司」と厳かにその名を呼ぶ。でもそんなことで怯む修司くんでもなかった。
「最近ユキ、かっわいい彼女ができてさー」
「修司！」
「えぇぇー！見たいー！ユキ先輩の彼女ー。先輩、写真はー?」

「んなもん持ってるわけねぇだろ」
「あ、私携帯に写真入ってるよ。見る？」
言って携帯を出してきた私に、ユキ先輩は「何でお前がそんなもん持ってんだ…」とがっくりと肩を落とす。ニヤニヤ笑いながら、私はその画面を奈那子に見せた。

私と一緒に写っている、ジャズバーに行った時の和美ちゃんの写真。

「うわっ、めちゃめちゃかわいいっ。つうかこの子何歳？２１くらい？若そう！」
「……」
真相を知る面々は、互いの顔を見合わせて笑った。
「ね、ユキ先輩、この子いくつ？」
「…さぁ、何歳だっけな」
とぼけようとしたユキ先輩だったけれど、貴弘が「あっはっは」と豪快に笑いながら「１７だ１７！」と奈那子に答える。
「えぇっ？もしかして援交！？」
「普通に生徒っていう発想にいけ！アホかお前は！」
珍しく声を荒げたユキ先輩のツッコミに、思わず私と修司くんは大爆笑した。怒鳴られた奈那子は、「どっちにしろ犯罪まがいで大差ないじゃん…」と呟きながら携帯を私に返してきた。

「犯罪」と言われてユキ先輩はガラにもなく打撃を受けたらしい。うなだれるようにガクリと肩を落としたので、私はおかしくて笑ってしまった。

「でもさぁ、皆幸せになったよねぇ」
一通り食べて飲んで、男共がバカ騒ぎをしている中少しずつ片付けの手伝いをしてくれながら、奈那子はそう言う。
「理沙も貴弘さんもユキ先輩もさ、色々あったけど…今すっごく幸せそう」
修司さんは知らないけどね、と奈那子は舌を出して言った。
「私も幸せだよ、理沙」
「うん、嬉しいよ私も」
高校の時からの唯一の親友だ。彼女の幸せが嬉しくないわけがない。

「理沙の赤ちゃんが産まれるのと、同じくらいかなぁ、私の結婚式」
どちらも秋を予定していて、もうあと数ヶ月というところだった。言い合わせたわけでもないのに、嬉しい出来事が2つもやってくるのかと思うと今から楽しみだ。
「参加は無理しなくていいからね?体優先してね」
笑ってそう言ってくれる奈那子の結婚式だからこそ、私は絶対に出席したいと思う。
「ありがとう」
笑って答えて、私も思わず幸せに浸ってしまいそうだった。

今の私は、本当に満たされていると思う。奈那子の言うとおり、男の見る目のなさで遠回りもしたかもしれない。でも…それでも、

その時間もきっと無駄ではなかったと今なら思えるから…。

「あっはっは！」
お酒に強いはずの修司くんの酔っ払ったような大きな笑い声が、リビング中に響いた。キッチンで洗い物をしていた私は、何事かと目を瞠る。奈那子と顔を見合わせてから、そちらへ向かった。

「どうしたのー？」
聞いて覗き込むと、３人の手元にはアルバムがある。それは大学時代のサークルの写真で…私は何となく、少しだけ嫌な予感がした。

「いやぁ、写真見てたら色々思い出してさぁ。理沙ちゃんこの時、確か崎谷のこと…」
「あ～っ！それ言わないで修司くん！」
真っ赤になりながら、私は慌ててその口を塞いだ。

…そう、無駄ではなかった。とは思うけれど、まだそういう話をされるにはいたたまれないほど恥ずかしい。

そんな時もあったと笑いながらお酒を飲めるようになるのは、き

っともうちょっと先のことだ。

6（後書き）

理沙と貴弘のなれそめ話でした。
ハルカや和美視点ではしっかり者の理沙も、実は同年代といる時はこんな感じかな、と思います。

小学生の「准一」くんを書くのが楽しかった覚えがあります（笑）

1（前書き）

和美の友達の1人、野崎茜の番外編です。「ｃｏｏｌ」シリーズに出てくる某キャラも登場します。

1

ぶしゅうぅっっっともの凄い音がしたと思った次の瞬間、私は跳ねた水道水が豪快に自分にかかったことを認識した。

「……」

冷たいという感覚はあるのに、どうしてそうなったのかが一瞬では理解できない。驚いて目を丸くしていると、隣の水道にいた先輩が「ごめぇん」と甘えたような声を出した。

「かかっちゃったよね？ごめんねぇ」

申し訳なさそうに言いながら、ハンカチを差し出してくる。それでもその顔は笑っている。

「あ…いえ…」

小さく答えるしかなくて、私は半ば茫然としたまま立ち尽くしていた。

私が受け取らなかったので、先輩はそのままこちらへ手を伸ばす。濡れた髪を手にしたハンカチで拭いてくれながら、笑ったまま続けた。

「まさかそんなとこにボーっと立ってるなんて思わなかったからぁ」

「……」

「ごめんね」

言って、踵を返す。一緒にいた他の女の人と廊下を歩いて行く途中、近くにあったゴミ箱にそのハンカチを投げ捨てた。

「つうか、もう使えないよねこのハンカチー。きったないー」
笑いながら去っていくその3人の後ろ姿を見ることもできず、俯いた私は唇を噛み締めるしかなかった。

最近では、こんなことがしょっちゅうだった。物を隠されたりどこかに呼び出されるようないじめではないけれど、すれ違うたびに何かを言われたりされたり…。相手の先輩は、私が所属する家庭科部の3年生だ。数人が急に私に対する態度を変えたのには訳があった。

私自身は、最初身に覚えがなかった。しかしどうも、同じ家庭科部の一人の男の先輩が絡んでいることらしかった。その先輩は山口先輩と言って…いつもニコニコしているような、優しい人だ。

どうやら私をいじめるグループの一人が、山口先輩に先日告白をしたらしい。そうして先輩はそれを断る時に、彼女にこう言ったらしかった。

『ごめん、俺、野崎のことが好きなんだ』

誰に対しても誠実で、真面目で…。そんな先輩は、彼女にきちんと私の名前を出しながらそう言って断ったらしい。私はというと、まさか山口先輩に好かれているなんて思ってもみなかったのでびっくりした。

女の先輩たちの私に対する態度が豹変したのは、それからだ。びしょびしょに濡れたジャージを、持っていたタオルで拭きながら私はため息をつく。

…もう、いやだ…。

いつまで続くんだろう、こんなこと…。

＊＊＊＊＊＊

豪快に濡れた体はハンドタオルなんかで追いつくはずもなく、私はすごすごとそのまま教室へと戻った。放課後で、もう校舎に人が少なくなっていたのがせめてもの救いだった。ほとんど人に会わずに自分のクラスまで戻れる。

教室にも人がいないことを願いたい。だけどドアに手をかけた時…数人の気配が感じられて、私は小さく息をついた。

でも……。

「あ、茜来たっ」

そこにいたのはたった3人…しかも私と仲の良い子たちだった。

「待ってたよー。委員会だったんだよね？一緒に帰ろ」
行儀悪く椅子の上で胡坐をかいた態勢で、由実が笑う。その隣で笑っていた智子が、ふと私の姿に気づいて眉を寄せた。

「…っ茜？どうしたのその格好！」
「…あ…これは…」
仲が良くても…できれば彼女たちには知られたくない。俯きそうになったけれど、それでは余計に怪しまれる。できるだけ普通を装おうと、ニッコリ笑って見せた。
「それが…手を洗おうとしたら蛇口に近づけすぎたらしくて、ぶしゅーっと…」
「あっはっは！何やってんだよドジだなぁ！」
由実が豪快に笑ってくれたのが救いだ。智子は黙っていたけれど、もう一人の和美は慌てて私のところに飛んでくる。
「大丈夫？」
大きめのタオルを持ってきて、私の頭を優しく拭いてくれた。

「…うん、ありがとう」
そのタオルを借りて、肩やら腕やら濡れたところを一通り拭いた。濡らされたのがジャージで良かった。制服だったら帰る時に電車に乗るのも恥ずかしい。

「茜、今日さぁ、カラオケ寄ってかない？」
「うん。私はいいけど…皆、部活は？」
「全員休み」
「そっか。急いで着替えるから、ちょっと待ってて」
答えて、私は言葉通り大急ぎで着替えに取り掛かった。

絶対に、３人には知られたくない。私がいじめられてるなんてこと…。優しい彼女たちに心配をかけたくなかったのもあるけれど、自分のコンプレックスとも関係していた。

３人とも、親友とはいえずっと私の憧れの存在だった。

由実は中学の時からの付き合いで、ちょっと男勝りだけれどとても優しい。お昼休みには男子と校庭でサッカーや野球をするほど元気いっぱいで、引っ込み思案な私とは正反対だ。運動神経がかなり良くて、バレー部でも１年の時から一人だけレギュラーになっている。明るくて太陽のような快活さは見ていて気持ちが良い。

智子は、少し厳しいところもある姉御肌。そして何より頭が良くて、１年の時から学年１位の座を譲ったことはない。智子の知的さは私の憧れだった。

最後に和美は、おっとりしているように見えてしっかり者。よく笑うしよく泣くけれど、誰よりも友達想いだ。「うちの学年一の美人」なんて噂されるくらいのルックスだけれど、本人は全く気づいていないみたい。そんな謙虚なところも、私は大好きだった。

人より優れているところを持っている3人に比べて、私には何の取り柄もない。だからこそ憧れる。だからこそ自分が一緒にいてもいいのか迷う。矛盾したそんな2つの思いを抱えていたから、いじめられてるなんてこと知られたくなかった。そんなことを知られたら…余計にみじめだ。

「茜、今日元気ないね？」

前を歩いて行く由実と和美の後ろで、智子が私にふと声をかけた。

「えっ？そう？そんなことないよ」

顔の前で手を振ったけれど、鋭い智子をごまかせたかどうか自信はない。だけど「…そっか」とだけ呟いて、智子はそれ以上追及しないでいてくれた。

昇降口を出て門まで歩いている途中、屋外にある教員の喫煙スペースのような場所の前を通った。そこにちょうどいたのがうちのクラスの担任・本城先生と、数学教師の名取先生だった。

「せんせーさよーならー」

半ば棒読みの子どものような挨拶をしながら、由実がそこを通りかかる。

「おぅ」

短く応じた名取先生の隣で、本城先生が片手を挙げて煙草の息を吐き出した。それを見て嫌煙家の由実が眉を寄せる。

「そんな吸ってると肺が真っ黒になるよ」

「…うるせぇ」

「それよりさぁ、うちらこれからカラオケ行くんだけど車で送ってよ」

笑いながら、由実が脈絡もなく急にそんなことを言い出した。私

には真似できないこの奔放さに、驚いたのは智子も和美も同じだった。

「アホかお前。さっさと帰って寝ろ」
「寝ろって…！小学生じゃないんだからさぁ」
「ちなみに校則では『盛り場禁止』だぜ」
「そうそう、それさぁ、その表現はどうかと前から思うわけよ」
「…お前人の話聞いてねぇだろ」
「カラオケぐらいで盛り場とは言わないってぇ」
がははと笑う由実に、先生はそれ以上言っても無駄だと思ったのか小さく息をついた。どうやら今度は煙草の煙を吐いたわけではなく、本気のため息だったらしい。何事にも物怖じしない由実は、生徒たちから怖がられている本城先生に対してですら強気な物腰だ。

「じゃあ帰るね、先生。あ、カラオケ3時間は行く予定だから途中で和美にメールして邪魔したりしないでね」
「ゆゆゆ由実…っ！」
これにはさすがに慌てた和美が、由実の口を塞ぐ。幸い周囲には私たち以外誰もいないけれど。
「…お前ホントにアホだな」
鼻であしらった先生が、再び煙草を口にくわえた。
「早く行け」
「はーい、先生また明日ねー」
手を振る由実を引きずるようにして、和美が足早にそこを離れた。

和美は、ついこの前から本城先生と付き合いだした。もちろん学

校にバレていいことではないので、極秘の恋だけれど。でも和美は本当にここのところ幸せそうで、私はそれが嬉しい。

正直羨ましいとも思うけれど、その一方で今の自分に恋愛絡みで幸せになれる自信はない。人を好きになった故、誰かを恨んだり嫉妬したり…そんなことがあると身を持って知ってしまった今、恋をするのが怖いからだ。

着いたのは駅前のカラオケボックス。たまにこうして皆の部活休みが合うとよく来る場所だ。フロントでマラカスやらタンバリンを借りて、部屋へ向かった。

由実は一度握るとなかなかマイクを離さない。今日も一人で上機嫌に歌っていた。私はというと、あまり歌が得意ではないので聴いていることの方が多い。それでもカラオケという場は嫌いではないので、十分楽しめるものだ。

「この前さぁ、実力テストあったじゃん」

大声で画面の前に出て由実が歌う中、私と智子は聴きながらも話をしていた。和美だけは律儀に手拍子をしながら由実の歌に聞き入っている。「うん」と答えると、智子は眉を寄せながらコーラを一口飲んだ。

「今日個人成績返ってきたっしょ?それがさぁ、2位になっててさ

ぁ」

忌々しそうに顔を歪めて、ストローを少し弄ぶようにいじる。

「珍しいね、智子が」

「でしょ？」

智子は1位の座を明け渡したことがないのが自慢だ。よっぽど悔しいに違いない。

「誰だろうね、智子抜くなんてすごい」

隣の和美も話に入ってきた。

うちの学校では、テスト後に成績が張り出されたりすることはない。だから、生徒本人が学年順位を明かさない限り周りに知られることはないのだ。そのせいで智子の成績が良いことはわかっていても、ずっと1位を守ってきたことは意外にクラスメイトでも知らない事実だったりする。

「今までの学年2位って…生徒会の高橋くんだっけ？あの人が相当頑張ったのかもね」

和美の言葉に、智子は辟易したような表情で「ふん」と鼻を鳴らす。

「あいつには無理だってー。私と相当差があったし」

生徒会の高橋くんは、自分の頭が良いことを結構公言しているので点数や順位まで周囲に知られている。

「私はさ、タイミング的にあの男じゃないかと思ってるんだけどさ」

「『あの男』？」

智子の言葉を、私と和美が同時に復唱した。

「2週間前くらいにさ、F組に転校生来たでしょ？」
智子がそう続けた時、由実がようやく自分の歌を誰も聞いていないことに気づいて「こら和美！」とマイクを通したまま怒鳴る。
「…なんで私だけ…」
苦笑いしながら、仕方なく和美は由実の歌を聴くという重役に戻っていった。

「転校生…？」
確かに、私も噂では聞いたことがある。F組にものすごく美形の転校生が来たのだけど、どうも評判はあまりよくないみたいだった。転校初日に自分のルックスについて大騒ぎする女子たちを「うっとうしい」と一喝したらしかった。
「今まで誰にも抜かれる気配なかったのに、急になんだもん。今までいなかった奴だって考えるのが自然じゃない？」
…なるほど。確かに一理ある気もする。
「あー悔しいーっ。期末テストは挽回しなきゃ」
そんな風に言って意気込みを新たにする智子が、少し羨ましい。それだけ自信とプライドを持てることがあるなんて。

「和美、本城に学年トップ誰だったか聞いといてよ」
冗談っぽく言う智子に、和美は振り返って小さく舌を出した。
「そんなこと聞けませんー」
「だよねぇ」
答えが分かっていたからか、智子は笑う。

その時、前からは「和美っ」という由実の声が再び飛んできた。

「はいはい、聴いてますって」
苦笑い気味に言って、和美は再び私たちから視線を戻して前に向き直った。

2

いじめが始まってから、部活に行くのが嫌で嫌で仕方がなかった。今は大したことはされていなくても、どんどんエスカレートするかもしれない。今のところ部活中は先輩たちも山口先輩の目を気にして表立ったことはしてこないけれど…。顔を見るだけで憂鬱になるのは否めない。

「……」

重い足取りで、家庭科室へ向かう。今日はレーズンの入ったパウンドケーキを作る予定だ。

誰かの希望だったらしく、皆ラッピングのかわいい袋なんかも持ってきている。私も、うまくいったら智子たちにもおすそわけしようと思ってお気に入りのものを鞄に入れていた。

作る時は班ごとで、学年別に作られた班なのでいじめてくる先輩たちや山口先輩と一緒になることはない。とりあえずホッとしながら、私は同学年の友達とケーキを作る工程にとりかかった。

「茜ちゃんは誰かにあげるの？」

隣のクラスの麻紀ちゃんにそう尋ねられて、私は手を動かしながら答える。

「うん。智子たちにあげようかなと思って」

「えー、好きな人とかは？」

「…私、そういうのまだいないから」

苦笑い気味に曖昧に答えたけれど、この答えを後ろの班の先輩たちが聞いているようだった。まさかこんな他愛もない一言が、彼女

たちの怒りに更なる火を灯すことになるなんて思ってもみなかったんだ。

「つうかさ、随分な言い草だよね」

部活を終えてすぐ、私は先輩たちに校舎の裏に呼び出された。反対側は今はもうほとんど使われていない旧校舎しかないため、きっと滅多に人なんて通らない。そんな薄暗い場所で壁を後ろにさせられて、私は鞄を胸の前でぎゅっと抱きしめるように抱え込んだ。

…まさか、ここまでしてくるとは思っていなかったのに…。

これからどうなるんだろう。

怖い、怖い、こわい……。

「あんたさっきさ、好きな人いないみたいなことアピールしてたけどさ」

「山口くんが自分のこと好きだって知っててそんなこと言ってるわけ？」

「なんかさ、『私はあなたになんて興味ないのよ』アピール？」

立て続けに言われて、私は身をすくませる。足がガクガクと震えそうだった。

「私…そんなつもりで言ったんじゃありません…」
「嘘つけよ！山口くんに聞こえるようにわざと言ってただろーが！」
「そんなこと…！」
「口ごたえすんじゃねぇよ！」
言いかけた言葉は全て遮られる。声に反論を乗せることすら叶わない。鬼のような形相でこちらを見下ろす先輩たちの姿に、歯がガチガチと震えて音をたてた。

そんな私の手から、一人の先輩が鞄をバッと奪い取る。急なことで反応できず、私はそれを簡単に許してしまった。
「あ…っ」
手からすり抜けた鞄。それを乱暴に開けて、先輩はさっき作ってラッピングしたばかりのケーキを取り出した。
「これだって、ホントは後で山口くんにあげようとしてたんじゃないのー？」
「あぁ、いるよね。思わせぶりなこと散々しておいて自分にはその気ないって言うやつ」
「さいてー。こういうのなくしておかないとね」
言い終わらないうちに、その先輩はケーキをわざと下に落とす。そして次の瞬間、グシャッと音をたててそれを袋ごと踏み潰した。上履きで何度か踏みにじるようにされて、ケーキは脆く崩れる。

「…ひど…ぃ」
「『ひどい』じゃねーよ」
「これに懲りたらあんまり調子に乗ったこと言わない方が身のためだと思うけど？」

笑いながら去っていく後ろ姿。その場にかがんでグチャグチャになった袋を拾い上げたけれど、それはもう食べられるようなものではなかった。

無残な姿は、今の私に似ていた。

どうしてこんなことをされなくてはいけないのか…。そんな疑問ばかりが頭をかけめぐる。

どうして私なの。
私が何をしたって言うの。

涙が溢れてくる。雫が零れ落ちる頃、私は山口先輩の顔を思い浮かべた。

どうして、先輩は私の名前を口にしたの…？どうして、そのことで私がこんなに…っ。

悪いのはこんな仕打ちをしてくるあの女の先輩たちなのに。それでも私は、限界を迎えて張り裂けそうな心が山口先輩のことすら恨みそうになっていることに気づく。先輩は、自分の気持ちを素直に言っただけかもしれない。でも…そのことでどうして私がこんな目に合わなきゃいけないの…。

そして何より、そんな風に八つ当たりまがいに山口先輩を憎みそうになる自分にも嫌気がさす。

心が、バラバラになりそうだ。

……だれか……、

たすけて。

＊＊＊＊＊＊

うちの学校は県内でも有名な進学校だったので、こんなバカなイジメをする人なんていないと思ってた。だけどそれは私の思惑とは裏腹に日に日にエスカレートしていった。いじめる側も、感覚が麻痺しているんだろうと思う。

その日も、先輩たちに呼び出された。…もう、限界だと思った。さすがに殴られたりするわけではないけれど、言葉の暴力だけでも

私の心をズタボロに引き裂くには十分だったから。

途中で隙を見て、逃げ出した。

「待てよ！」

一瞬呆気にとられた先輩たちが、追ってくる。校舎の中に入って後ろを撒くように走りながら、やがて普段あまり使われることのない資料室のドアに手を伸ばした。

「！？…」

中には人がいたらしい。涙まじりのひどい顔をした私を見て、一瞬驚いたように顔を上げた。だけど、私はそんなことに構っていられない。

背後では先輩たちが怒鳴りながら走ってくる音が迫っていた。

「いた！？」

「いない！」

そんな声が聞こえてくる。どうしよう、隠れなきゃ…そう思った瞬間、その人が私の手をグイと引いた。紙ではない…大きな資料が雑然と並ぶガラクタ置き場のようなところに、私を押し込む。

それから、2重に隠すように私の前にたちはだかるようにして立った。

それと同時に、資料室のドアが開く。

「…っ、あれ…？」

女の先輩の声だった。

「どう？いた？」
「ううん。ここだと思ったんだけどなぁ」
息を切らしながらの声に、私は鼓動がドクドクと早鐘を打つのを感じる。
怖い、怖い…！

「ねぇ、君さぁ」
先輩たちが、声のトーンを変えて私の前に立った男子生徒に呼びかけた。
「ここに2年の女の子来なかった？ポニーテールの子」
ドクンと胸が震える。尋ねられた男の子は、「…さぁ」と低めの声で答えた。
「知りませんけど」
「そ、そっか。ならいいんだ。ごめんね」
やけに先輩たちの声が柔らかい。そうしてドアを閉めると、またバタバタと走って行く音が聞こえた。やがて、聞こえなくなるくらいに遠ざかっていく。

うずくまってガラクタの中に身を潜めていた私は、自分の手がカタカタと震えていることにようやく気がついた。抑えようとギュッと力をこめようとしても、うまくいかない。怖くて怖くて仕方がなかったところから何とか助かったという安堵の意味もあったのか、目からは雫が零れる。
ポロリと落ちたそれが、震える手に落ちた。

「……」
どうやら私をかばってくれたらしい彼は、特に何も言わなかった。

それどころか、私が出てこれるまでずっとそこに立ってくれている。
それが分かったから…ひとしきり泣いた後、私はおずおずとそこから這い出た。
「…あ、あの…どうもありがとうございました」
ペコリと頭を下げると、「…別に」と短い答えが返ってくる。さっきから何かの資料を探しているらしい彼は、そのまま近くの棚に向き合っていた。

いじめられて追いかけられていたことは明白なので、何となく顔は合わせづらい。下を向いていると、彼の履く上履きが私のものと同じ色であることに気がついた。…どうやら同じ学年らしい。

「…あの…」
私が、再び口を開きかけた時だった。
「あぁ、まだここにいた」
資料室のドアが前触れもなく開かれ、そこから男の子の声がする。誰かが来るなんて思っていなかったので、私は慌ててパッと顔を逸らした。泣いた跡のある顔が見えないように…窓の方を向く。
「名取に頼まれた資料、見つかんないの?手伝おうか?」
どうやら私をかばってくれた男の子の、友達のようだった。

「…いや…」
スッと再び私を隠すように、壁になりながら彼が答える。私の姿が見えないように…第三者の視界から遮ったようだった。
「もうすぐ見つかりそうだから、大丈夫だ」
「…ふぅん?わかった」
彼を呼びにきた方の男の子の声には…聞き覚えがあった。1年の頃同じクラスだった男子だ。

「じゃあ教室で待ってるよ、一真」
去年私のクラスメイトだった向井くんは、そう言いながら再びドアを閉めて行ってしまった。

残された私は、ゆっくりと振り返る。一度ならず二度までも助けてもらったことに申し訳なさすら感じて、背の高い彼の顔を見上げた。ようやく、正面から向き合える勇気が出た。
「あの…本当にありがとう」
顔を仰向けないと目が合わないくらいに長身の彼は、私を見下ろして「いや」とだけ小さく答える。

向井くんが「一真」と呼んだ彼の名前に、私は聞き覚えがなかった。というより、きちんと見上げた彼の顔は恐ろしいほど整いすぎていて…。見る者を惹きつけるようなオーラもあるせいか、一度見たらその姿が脳裏に焼きついて離れないだろう。
それほど強烈な印象を持つ彼なのに…私は初めて見る顔だった。同じ学年にこれほどの人がいたら気づかないはずないのに。

そこで、もしかして、と思った。彼が、以前智子との話題にも出た…F組に来た転校生なのかもしれない。美形だと噂されてはいたけれど、それほど興味がなかったのでわざわざ見に行ったりはしなかった。だから私が転校生の顔を知らなくても当然なのだ。

噂では、相当美形だけれど底抜けに性格が悪いという話だった。転校初日に罵声を浴びせるわ、態度が大きすぎるわで…。だけど私

は、本当にこの人が転校生なのだとしたらその噂が信じられない。
噂通りの人なら、きっと私をかばってくれたりしなかった。しかも、泣いている私の顔を他人に見られないようになんて…そんな気遣いをしてくれると思えない。

「…あんた、家は？」
ふと、私を見下ろしていた「一真くん」がそう言った。「え」と目を見開くと、要領を得ない私に小さく息をつきながら言葉を継ぐ。
「家。帰るまであいつらに見つかりたくねぇんだろ？」

どうやら、私を家まで送って行ってくれるということらしかった。彼の言わんとしていることにようやく気がついて、私は慌てて首を左右に振る。
「あの…！そ、そこまではさすがに甘えられないので…っ」
「でも絶対あいつら諦めてないぜ？」
「…ちょっとだけ時間潰して、裏道から帰るから大丈夫…」
笑いながら答えたつもりだったけれど、その笑顔は引きつってしまった。優しい声をかけてくれる人に対してうまく笑うことすらできず、自己嫌悪に陥りそうだ。

「ふーん」
彼の方は、特にそれ以上食い下がったりはしなかった。これ以上迷惑をかけるわけにはいかないので、ほんの少しだけホッとする。

名取先生に頼まれたという資料を見つけたらしい彼が一足先に部屋を出ていくのを見送って、私はその後もしばらくそこに息を潜め

て身を隠していた。

3

一時間ほど資料室に隠れていただろうか。

身を潜めている間も体は時折震え、それを抑えるように私は自分の体を抱きしめるようにしていた。きっともう、いい加減彼女たちも諦めて帰っただろう。手首につけた時計の時間を確認して、私はそろりと資料室のドアを開けた。

そこに、先輩たちの姿はなかった。ホッと息を漏らし、廊下に一歩踏み出す。もう校舎内には生徒があまり残っていないのか、静かなものだった。

教室に戻ると、帰宅したか部活に行った生徒ばかりで誰もそこにはいなかった。静かな部屋に、自分の歩く音だけが響く。たまに風に揺られた何かが小さく音をたてると、それだけでビクリと肩を震わせてしまった。

自分の鞄だけを手に、できるだけ学校には長居をしたくなくて急いで昇降口へ向かう。誰にもすれ違わずにすんだことだけがせめてもの救いだった。

学校から駅までの道は、分かりやすい一本道だ。だから、誰もがその道を通る。私は校門を出てすぐ、右に曲がって違う道を選んだ。人通りの少ない道だから、先輩たちもここを通らないだろう。

だけど……。

自分の考えが甘かったと悟ったのは、駅までの道を半ばほど進んだ頃だった。

「…！」

私は自分の前方に、人影が４つあることに気がついた。

まるで何かを待ち受けるかのように…ううん、実際に待っていたんだ。…私が、ここを通ることを予想して…。

「…よく逃げようなんて考えたよね」

そのうちの一人が、低い声でそう言った。その一瞬で、私はまた足がガクガクと震えだすのを感じる。持った鞄が、手の震えで落ちそうだった。

「山口くんをその気にさせといて、逃げようって？ちょっと調子良すぎるんじゃないの」

「……っ」

「つうかそもそも、どうやって誘惑したわけ？あんたみたいなブサイクな女が」

「言えてるー。どんくさくて何の取り柄もなさそうだしね」

「こいつの友達、見たことある？めっちゃ美人が一人いるじゃん。そいつと一緒にいるから自分もかわいいって勘違いしてんじゃない

の？」
「うわー、ありえる。つうかあんたの友達もあんたみたいなのが友達で嫌だろうねー」
勝手なことをまくしたてながらも、彼女たちは楽しそうだ。私の方に近寄ってきて、そのうちのリーダー格の人が歪んだ笑みを浮かべた。それから、むずっと一つに結んだ私の髪を乱暴に掴む。

「…いた…っ」
後ろにある壁にドンと押し付けられる……そう思ったその時だった。

「……なるほどね」
低い声が、辺りに響く。訪れる衝撃と痛みに備えて目を固く閉じていた私は…その声に耳を疑った。

……どうして…？

引っ張られていた髪から、先輩の手が離れたのが分かる。恐る恐る開けた目に映ったのは、先輩の手を捻るようにして持ち上げた一真くんの姿だった。

「…な、何あんた…！」
彼の手から自分の手首を引き戻した先輩が、唸るように言う。鋭い目で見上げた彼女を、一真くんは「ふん」と鼻であしらった。

「つまりは逆恨みか」
短い言葉は、彼女たちの行動を指している。言われたその瞬間、彼女たちの顔が怒りと恥ずかしさからかカッと紅潮するのが分かった。

「大体のことは想像ついたけどな。まさか本気でそんな醜い理由だとは思わなかったけど」
呆れたような声で言いながら、一真くんは先輩たちと私の間にスッと割って入る。大きな体に阻まれるようにして、私はその後ろに自然と隠される形になった。

「あ、あんたに関係ないじゃない…！」
「まぁ、確かにそうなんだけどな」
悔し紛れに言った先輩の言葉に、一真くんはあっさり肯定の意を返す。それから、彼女たちの斜め後ろを顎で指し示した。
「あっちは関係なくねーんじゃねぇか？」
言われた通りに振り向いた先輩たちと、同じようにそちらを覗きこんだ私は同時に硬直することになった。そこにいた一人の人物に気がついて…その場にいた誰もが驚きの余り声を失う。

「…何…してるんだよ」
驚いているのは向こうも同じらしく、目を丸く見開いて山口先輩が私たちを見ていた。

「お前ら、野崎に何してるんだよ！」
いつも穏やかな山口先輩が、急に激昂したように大声を張り上げ

た。その声に彼女たちはビクリと肩を震わせる。私も驚いて、思わず目を瞠った。

ツカツカとこちらへ歩み寄ってきた山口先輩は、彼女たちに対峙するように立つ。彼のことを好きだという主犯格の一人の前で、厳しい顔をして睨みすえた。

「…違うの、山口くん…これは……」

「何が違うんだよ！」

彼女たちに有無を言わさない声とタイミングで、山口先輩はそう言葉を遮る。いつからいたのか分からないけれど…彼が既に自体を把握していることは間違いなさそうだった。

「野崎が、いつもと違う道から帰ってるのが見えたからどうしたのかと思ったら…」

…それで、山口先輩は私の後をついてきたらしかった。至近距離でそんな彼に睨み据えられて…彼女たちは小さく身を竦める。さっきまでの勢いが嘘のように、小さくなっていた。

「二度とこんなことすんな！」

怒鳴りつけられて、余計に彼女たちは震え上がった。普段怒らない人が怒ると怖いというのは本当のようだ。

「ごめんなさいぃ」

泣きながら謝る彼女たちの声の向かう先は、山口先輩になのか私

になのか定かではなかった。でもそれだけ言い置いて、バタバタと走り去ってしまう。連れ立って去っていくその後ろ姿を眺めながら、山口先輩は肩を上下させていた。怒りの余り、呼吸が乱れたのだろう。

「野崎、大丈…っ」

ふと山口先輩は、私の方をクルっと向き直った。そしてそう言いながらこちらへ一歩踏み出す。

けれどその言葉を言い終わらないうちに、再びスッと私の前に一真くんが立ちはだかった。

「あんたさ、勘違いしてねぇ?」

「……え?」

不意に降ってきた一真くんからの意外な言葉に、山口先輩は眉を顰める。私も驚いてしまって…長身の一真くんの顔を斜め後ろから見上げてしまった。

「誰のせいでこいつがあんなことされたと思ってんだよ」

「……俺だって言いたいのか?」

ギッと目線を上げて、山口先輩は自分より遥かに身長の高い一真くんを見上げる。それに微塵も怯む様子を見せず、一真くんは冷めた視線で先輩を見下ろした。

一真くんの言葉は、まるで私の心の内を晒しているかのようだった。山口先輩のせいにしかけて、自己嫌悪に陥りそうだった私の心。

「もちろん、あの女たちが一番悪いのは当たり前だ。だけど、あんたが余計なこと言わなければこんなことにはならなかったんじゃねぇの？」
「『余計なこと』？俺はあの子に告白されたから…正直に野崎のことが好きだって言っただけだ」
「それが余計なことだっつってんだよ」
私のせいで険悪な雰囲気になりそうな2人を止めようと、私は後ろで口を開きかけた。だけどその気配を読み取ったのか…一真くんが再び背中で私を隠してしまう。まるで、出てくるな、とでも言うように。

「それって言う必要のあったことか？　それを言うことで、お前のこと好きな女がこいつに良い印象を持つわけねぇってことくらい分かるだろ」
「……」
「それでもあんたがこいつの名前を出したのは、自己満足以外の何物でもない。ただ、『俺が好きなのはお前じゃない』って、あの女に言いたかっただけだろ。告白された立場として優越感に浸りたかっただけじゃねぇの？」
「…そんなこと…」
「違うって言えるか？それ以外にこいつの名前出す理由なんてねぇだろ」
「…俺は…ただ自分の気持ちに正直になりたかっただけで…」
「正直になる相手、間違えてんだろ。あんたのしたことは思いやりのかけらもない。本当にこいつのことが好きなら、自分がした発言がどんな迷惑をかけるかまで考えるべきだったな」

何とか言い逃れようとする山口先輩と、まくしたてるように言葉

を継ぐ一真くん。

互いに一歩も引きそうにない睨み合いをしていたけれど…先に目線を逸らしたのは先輩の方だった。

唇を噛み締めながら、わずかに視線を落とす。それから、意を決したように今度は顔を上げて私をまっすぐに見た。

「野崎…」

改めて呼ばれて、私は「はい」と小さく答える。一真くんの背中から少し顔を出すようにして…先輩の続く言葉を待った。

「ごめん、悪かった」

頭を下げて謝る先輩の姿に、私は思わず「いえ！」と大声で首を振る。だけどそれ以上フォローの意味の言葉を継ぐこともできず、それきり互いに黙り込んでしまった。

やがて、先輩の方が先に踵を返す。去って行く背中が寂しそうにうなだれていて、何とも言えない複雑な気分に駆られた。

一真くんも、私の隣で先輩の後ろ姿をただ見送っている。鋭い目線は睨むほどではなかったけれど、怒りの感情が垣間見えるようだった。……私の代わりに、怒ってくれているんだ。

「…あの…ありがとう」

資料室でそのまま去っていったと思っていたけれど、私を心配して後を追いかけてきてくれたんだろう。私が迷惑をかけるのを嫌がっているのがわかったから、気づかないようにそっと…。山口先輩のことすら恨みそうになっていた自分の心はこの上なく醜く感じていたけれど、一真くんがそのことを代弁してくれたおかげで心のどこかでそのドロドロした感情が浄化されたような気さえした。

「……」

一真くんはというと、そんな私を一瞥した後にふと思いがけない言葉を漏らす。

「何で助けを求めなかったんだよ?あんた、友達だっているんだろ?」

「……」

思わず声を詰まらせて、私はわずかに目を見開いた。

「…迷惑を…かけたくなかったから…」

弱々しく答えた声は、風に乗れば掠れて聞こえなくなってしまいそうなほど儚かった。どこかその問いに責められているような響きを感じ取って、意図せず一歩後ずさってしまう。一真くんの方は、そんな私を逸らすことなくまっすぐに見据えていた。

「迷惑？友達がそう思うのかよ？」
「……私の友達…3人ともすっごくイイ子ばっかりで…心配かけたくなかったの」
「……」
「それに…3人共何の取り柄もない私とは違って人気者で、いじめなんかとは無縁なの。…だから、いじめられてるなんて知られたくなかった」
「…そんな自分を知られたら惨めだ、って？」
「……」
その通りだったので、今度は私が黙り込む番だった。

「…」
フーっと長い息を吐き出した後、一真くんは眉を寄せて前髪をかき上げる。地毛ではなく染めていそうだったけれど随分落ち着いた色の髪が、夕日に照らされて艶やかに光った。それを見上げた私を、少し呆れたように見下ろす。…呆れてはいるけれど、その眼差しに冷たさは不思議と感じなかった。

「友達でいるのに取り柄や人気があるかどうかなんて関係ねぇだろ。惨めに感じる必要なんてねぇよ。ああいう嫌がらせはする方に問題があるんであって、あんたの責任じゃねぇし」
「……でも…」
「それに」
言葉を継ぎかけた私に、一真くんは声をかぶせた。遮るように続きを口にする。

「そんな連中じゃなさそうだったけど？あんたの友達」
「……え？」
「昇降口のところで動揺しまくってあんたを追おうとしてたの、友達だろ多分」
「……？」
私が目を見開いて彼を見上げた…その時だった。

「あ、いたっ茜ぇっ！！」
半ば悲鳴にも似たような声で、私を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、学校のある方から走ってきたのは息を切らせた由実たちの姿。
「…え、３人共…どうしてここに…？」
目を白黒させて驚いた私だったけれど、すぐ傍まで走り寄ってきた由実に肩をがしっと掴まれた。
「バカっ！何で言わなかったのよ今まで…！」
いつも明るく元気な由実が、目にいっぱい涙を溜めながら怒っている。見たこともない彼女のそんな姿に、私はぎゅっと胸の辺りを締め付けられる思いだった。

「ごめんなさい…あの…でも何で…」
尋ね返すと、由実の後ろで智子がため息まじりに私を見る。でもその吐いた息に、安堵した意味もこもっていたのが感じられた。
「茜が何となく最近元気ないのは３人共気になってたよ。でも原因は分からなくて…。そしたらさっき、校門を出てすぐにいつもと違う脇道に入っていく茜を見かけたって、本城から和美にメールがあって」
「茜が一人でこんな暗くて人通りのない道に行くことなんてないから…何かあったんじゃないかって、先生が…」
智子の言葉を引き継いだ和美も、どこか泣きそうに眉に力を込め

ている。

「とりあえずうちら2人は和美に呼ばれて、急いで追いかけてきたってわけ」

由実が、説明しながらぎゅっと私を抱きしめた。

あぁ、結局余計に心配をかけちゃったな…そう思った時には、由実は私の肩におでこをくっつけたまま低い声で続けた。

「で、来る途中に泣きながら逃げるように走っていく3年女子と出くわしたから…関係あるかと思って問い詰めてみた」

「…えぇぇ!?」

「ちょっと脅したら最近茜にひどいことしてたって認めたから、シメといたから」

物騒なことを淡々と言い、由実は顔を上げる。涙の浮かんだままの瞳で、少しだけ不敵に笑ってみせた。

「だから、もう大丈夫だよ!茜!」

「……由実…」

「で、何でこんなことになったわけ?」

後ろで腕組みをして、智子が首を傾げている。

「あ、実は色々あって…とりあえず一真くんが…」

説明する前に助けてもらえたことを話すのを兼ねて紹介しようと私が振り返った時…。

「…あ、あれ?」

彼はもう、既にそこにはいなかった。

4

由実たち3人は私がいじめられていたのを知って、怒り狂うほど心配してくれた。一真くんの言った通り、私が惨めに思うようなことは何ひとつなかった。こんなことなら、3人に早く相談していれば良かったとさえ思う。

「昨日はありがとう」

翌日、家で作ったチョコチップクッキーを学校に持って行って私は3人にお礼を兼ねて渡した。

「別にいいのに、お礼なんて」

言う智子の後ろで、由実が「でも茜の作るお菓子はウマイんだよねー」とホクホク笑顔を浮かべている。

「つうかさ、なんか和美のだけ量多くない？」

和美の手に渡ったクッキーの袋を見て、由実が今気がついたように眉を顰めた。

「あ、ホントだ」

和美も自分の手の中を見つめて小首を捻る。

「あの…和美のは本城先生の分も…もしかしたら、先生甘いもの嫌いかもしれないけど…っ」

「あ、そっか。ううん、大丈夫だよ。先生結構甘いもの食べるし」

私がいつもと違う道に行ったというだけで気づいてくれた先生にも、お礼を言いたい気分だったんだ。私は自分が思っているよりずっと、心配してくれる周りの人に恵まれていると思う。

「…じゃあ良かった」

ホッと胸を撫で下ろして、私は鞄を閉めた。

「…あれ？茜、今もう一つ袋なかった？」
鋭い智子が、鞄の中にも気づいたようでそう尋ねてくる。
「え、あ、うん…これは…」
ごまかすように笑った私に、３人は互いの顔を見合わせて首をかしげた。

「…はーっ」
放課後、私はF組の教室の前で大きく深呼吸した。手にはクッキーの袋を入れた鞄。もう生徒たちはほとんど帰ってしまっている為、周囲はシンとして静かだった。

いくらお礼とは言え、手作りのクッキーはやりすぎだったかもしれない…。そんな不安が胸の中で渦を巻くけれど、こんなことしか思いつかなかった。私にできることって言ったら、お菓子を作ることくらいだし。感謝の気持ちを形にするとしたら、それ以外にイイ方法がなかった。

窓から覗いた教室の中に見えたのはたった一つの影だった。一番後ろの窓側の席に座って、外を眺めているのかこちらからは顔が見えない。でも日差しに照らされる独特の髪の色は昨日見たものと同じで、私はゴクンと息を飲んだ。それから、勇気を振り絞るように

カラカラと教室のドアを開く。

一真くんがここ数日、向井くんを待っているらしく放課後遅くまで教室に残っているのはF組の友人から聞きつけた情報だ。たまたま他に誰もいなくて良かった。精一杯の勇気で開いた扉の音に、一真くんはゆっくりとこちらを振り返る。

「…」

私に気づいて、少しだけ眉を持ち上げてみせた。

「あの、一真くん、昨日は…」

ゆっくりと歩み寄りながら言いかけて、私は初めて名前で呼びかけてしまったことに気づく。そしてこの時、彼の苗字を知らないことに今更思い当たった。

「あ、ごめんなさい…苗字を知らなかったのでつい…」

馴れ馴れしく呼んでしまったことを謝ると、一真くんは手にしていた雑誌をパタンと閉じる。

「いい、一真で」

下の名前で呼ぶ許可をもらえたらしく、私は「あ、ありがとう」と自分でも妙に感じながらお礼を言ってしまっていた。

すぐ傍の距離まで辿り着いて小さく咳払いをし、改めて背筋を伸ばす。

「昨日は本当にありがとう」

急に消えてしまったため、ろくにお礼も言えずじまいだった。恐らく、彼としては私と由実たちに気を使ってくれたんだろうけれど。

「別に、礼を言われるほどのことはしてねぇけど。あの男には俺が言いたいこと言っただけだしな」
軽く肩を竦めて、一真くんは言葉通りなんでもないことのように言う。
「…それでも…」
私が、彼の一言一言に救われたのは本当だった。自分が自己嫌悪に陥りながらも吐露しかけた感情を全て代わりに言ってもらえたことで…己の醜い部分も肯定してもらえた気がしたから。
「ありがとう」
ニッコリ笑って言うと、少しだけ目を見開いた後、一真くんも微かに笑ってくれたように見えた。

「あの、それで…迷惑かもしれないけどお礼に」
鞄を開けて袋を取り出し、それを差し出す。心臓がバクバクと鼓動を刻んでいて、痛いぐらいだった。
「私お菓子作りだけはちょっと得意で…これくらいしかお礼が思いつかなくて…」
言い訳するように言いながら、頭を下げる。緊張の余りギュッと目を瞑ると、やがて手の中の重さがフッと消えた。

「…サンキュ」
ためらいなく受け取ってもらえるとは正直思っていなかったので、私は思わず丸くした目で一真くんを見上げる。透明の袋に入ったクッキーを覗くように少し眺めてから、一真くんは再び私を見た。
そして唇の端を持ち上げて笑う。
「あるんじゃねぇか、『取り柄』」
「…え…？…あ…」
昨日の私の話を受けて、彼は笑いながらそう言ってくれた。

…そうか、自分の好きなことってだけで取り柄だなんて思ったこともなかった。

尚も彼の一言に救われた気がした瞬間、胸のどこかでドクンとそれまでと違う不規則な鼓動を感じる。その重い感覚には覚えがあって、自分の感情の意味を完全に自覚する前に私は慌てて再度お礼を言って踵を返した。

今これ以上、一真くんの顔を見たら隠し切れないと思ったから。

急いで教室を出ようとした時、丁度入れ違いに向井くんが入ってきた。

「あれ、野崎」

A組の私がここにいるのが当たり前だけれど意外だったようで、少し目を丸くする。曖昧に笑って挨拶を返して、私はそのまま廊下に出た。

向井くんも、それ以上私のことを気にした様子はなかった。背を向けた後の後ろの気配で、そのまま一真くんの方へ歩み寄って行ったのが分かる。

「お待たせ、一真。…あれ?それ何?」

後ろ手に扉を閉めようとした最中に聞こえた彼の声に、私の胸がもう一度跳ね上がった。

「うまそう。一個ちょうだい」

悪びれずに言う向井くんの声が、静かに教室内に響く。ドクドク

と胸が早鐘を打つ中、一真くんが「やなこった」と低く答えるのが聞こえた。

「欲しけりゃお前も人助けしてみろ」

「何それ」

一真くんの答えに、向井くんがおかしそうに声を立てて笑う。そんなやり取りにホッと胸を撫で下ろしてから、私は足早にそこを後にした。

別に向井くんに食べられたくなかったわけではないけれど、もうただの「お礼」という感情だけじゃないそれを一真くんの手にだけ収めてくれたことが嬉しかった。そんな深い意味の感情にまでは気づいていないだろうけれど、一真くんはもしかしたら私に気を遣ってくれたのかもしれない。

「…ありがとう」

一度だけ振り向いて、私は聞こえるはずのないお礼の言葉を呟いた。

その後、由実の脅しが効いたのかどうかは定かではなかったけれど、女の先輩たちからの嫌がらせは嘘のようになくなった。それどころか、私と目が合うと何かに怯えたようにそそくさと走り去っていく。…一体由実がどんな脅し方をしたのか…。そう思うと苦笑が零れた。

一真くんとは、校内で会えば挨拶をするぐらいだった。向こうもこちらも大体は友達と一緒なので、立ち話をするほどでもなかった。彼の噂は相変わらずろくでもないものばかりだったけれど、私はそれが嘘だと知っている。信憑性のない噂なんかよりも、自分が知っている彼の本当の顔をいつも目で追ってしまっていた。

山口先輩には、あの後一度呼び出された。改めて告白されて、申し訳なさでいっぱいになりながらも丁重にお断りした。

「好きな人でもいる？」

聞いてきた先輩の言葉に、私はためらいがちに首を縦に振る。

「そっか。それが誰か気になるけど…教えてくれるわけないよな」

自分で答えを出しながら、先輩は苦笑を漏らした。

「…すみません」

「いや、本当にあれは俺が無神経だったから…ごめんな」

あの女の先輩に私の名前を出してしまったことを、山口先輩は改

めて謝ってくれた。一真くんに言われて色々と自己反省したんだそうだ。

「…でも先輩…私、今なら少し分かる気がします」

先輩が私の名前を出したのは…自己満足でも、相手に迷惑をかけたかったからでもなくて。ただ、自分の中で温めている感情が誰かに聞いてもらえたら嬉しいくらいにキラキラしたものだってこと。

しばらく恋をしてこなかったせいか…今になってようやく少し分かった気がする。

山口先輩には言えないけれど、あの3人なら今の私の想いを聞いてくれるだろうか。

智子はびっくりするかもしれない。由実は「趣味が悪い」って眉を顰めるかな。和美は笑って「良かったね」と言ってくれるに違いない。

3人の顔を思い浮かべて教室へ戻りながら、私は一人笑顔で廊下から見える晴れた空を見上げた。

4（後書き）

茜主役の番外編でした。
多分、本来ならこういうきっかけで内面を知れない限りは、茜のような大人しい子は一真みたいなタイプに惚れることはなかったと思います。
むしろ茜からしたら本当は苦手なタイプなんじゃないかなぁ、なんて。

この2人の話は今後の「ｂｉｔｔｅｒ」本編でもちょこっと出てくることになります。
…まぁ一真の方は好きな人がいるので進展はするのかしないのか…今はまだ曖昧なところですが…。

ここまで読んでくださってありがとうございました。
次から「ｂｉｔｔｅｒ」本編、和美とユキサダの話に戻ります。

1

6月も半ばになり、私の住んでいる地域でも梅雨が本格化していた。降りしきる雨が、教室の窓を叩く。朝なのに空の色は灰色で、どんよりとした空気が漂っていた。だからか、梅雨はあまり好きじゃない。

「もうすぐ期末テストだね」

私の前の席に鞄を置きながら、茜が不意にそう言った。…そうだ。来週になればまたテスト前の試験準備期間に入る。中間テストと実力テストを終えたばかりだと思っていたけれど…学生の憂鬱は尽きることはないようだ。

昨日、ＨＲで席替えをしたばかりだった。教室の真ん中の列の一番後ろという席を得て、しかも私の前は茜だ。由実や智子とは離れてしまったけれど、結構この席に満足している。

「あ、ねぇ和美。今日私化学で問題当たってるんだけどさ」

前の席でノートを出しながら、茜が顔だけ振り向かせて言った。

「やってきたんだけど…ちょっと自信なくて。教えてくれる？」

「うん、いいよ」

私もノートを出しながら、茜の答えと見比べる。もうすぐ朝のＨＲが始まるから、それまでにやってしまおうと思った。

「答えは合ってるみたいだよ？どこが自信なかったの？」
「あ、ここの化学式、結構勘で書いちゃって…」
「あ、そっか。ここはねぇ…」
茜が迷ったという部分を丁寧に説明しながら、私はノートにシャーペンを走らせる。一通り説明し終えたところで、茜が「なるほどー」と感心したようにため息を漏らした。
「すごい、和美。さすが化学部員」
ありがとう、とニコリと笑って言いながら、茜はそのまま小首を傾げる。そうして、下から私を上目遣いに見た。
「教えてもらったの？」
「……」
どこかからかうような茜の問いに、私は曖昧に笑って応じた。

確かに私も出された宿題に苦戦した。だけど答えを教えてもらえるわけはなく、出されたヒントで答えを導きだすのには本気で大変だった。…しかも、結構なスパルタだった気がする。一生徒だった時は、もう少し優しく教えてもらえていた気がするんだけど…。

「でも先生が彼氏だと色々と教えてもらえていいよね」
「…スパルタじゃなきゃいいんだけどね…」
茜の言葉に、私は今度は苦笑を浮かべる。付き合い始めてからの方が先生は色々と遠慮がなく厳しい気がするからだ。

「それだけ心を許してるってことかなぁ、和美に。本城先生って由実が言ってた通りＳっ気ありそうだよね」
「…いやあれはＳっ気というよりも…」
…言うなれば「ドＳ」だ。言葉を飲み込んで、私は代わりに肩を

竦めて見せた。
しかもそんな先生がむしろ好きなのだから、私も相当変わっているとは思う。由実辺りに言ったら理解してもらえなさそうだ。
「ありがとね、和美」
ノートを持ち上げて言った茜が、再び前を向こうとする。…ちょうど、その時だった。
「見た見た見たーーーっ？」
教室に入ってきた2人の女子が、既に中にいた女の子たちに声をかけていた。なにやらものすごく興奮した様子だったけれど、それは話かけられた方も同じだった。
「見たよ！びっくりしたーー！！」
そう言えば、彼女たちだけじゃなく今日はいつもより教室内が騒がしい気がする。首を傾げながらそれらを見渡した私を、茜が「？」と同じように眉を寄せてもう一度振り返った。
「俺も見たぜー。1年とか3年まで騒いでたし」
「いいよね！なんか見る目変わったかもー！」
同じような会話が、周囲の色んなところから聞こえてくる。
「…なんだろうね」
茜がかわいらしい顔で唇を尖らせた時だった。
「和美ぃ！」
教室の後ろのドアから、弾丸のように由実が飛び込んでくる。
「聞いた！？見た！？本城が…っ！！」

「…先生？」
由実も興奮中らしく、私の肩をガシッと掴みながら前後に大きく揺さぶってきた。ガクガクと揺らされて、私はわけがわからず目を白黒させる。話の内容もろくに見当すらつかなかった。

「本城がさ！」
由実が、もう一度その名前を出して言葉を継ごうとした時だった。

ガラッと教室の前のドアが開く音がする。

入ってきた長身のシルエットに、一瞬教室内がしんと静まり返った。代わりに、始業のチャイムがスピーカーから鳴り響く。
「？　全員席着け」
教壇まで歩いて行った先生が、出席簿を手に教室をぐるりと見渡した。
「！？」
その瞬間、たった一瞬で私はようやく皆の言っていた意味を理解する。水を打ったように静まりかえった生徒たちを眉を寄せて眺めた先生は、だけどすぐに普段通りに名簿を開いた。
そしてそのまま、いつものように生徒の名前を呼び始める。

…その顔には、昨日まであったはずの髭が完全になくなっていた。

「……」
思わず、私までポカンと口を開いたまま呆けてしまう。たった髭

だけれど、ないだけでかなり印象が変わってしまっていたからだ。

昨日までは…いつも通りだったのに。

「今日は6限がＬＨＲだ。文化祭について話し合うから、実行委員は準備しておくように」

出席を取り終えた先生が、そう一日の予定を指示する。

「…ね、今まであんまり興味なかったけど、本城って髭なかったら結構イケてない？」

ボソボソと、左斜め前の女子がそう隣に囁いているのが聞こえた。

「若いよね！あれだったら私全然アリアリ！」

右斜め前の方でも、誰かがそう小声で話している。

「……」

むぅ、と眉を寄せると、肩越しに一瞬だけ振り返った茜が私の顔を見て苦笑いを浮かべた。

「以上だ。日直」

「きりーつ」

礼、の号令で生徒たちが一礼する。1限の授業の準備で散り散りに生徒たちが動き出した頃、先生は出席簿を再び持ち上げて教壇を下りた。

それから、もう一度顔を上げる。

「環境美化委員」

呼ばれて、私ともう一人の男の子が「はい」と短く返事をした。

「取りにきてほしい資料がある。一人一緒に来い」
言われて、「はい」ともう一度だけ答える。
それから同じ委員の男子に「私が行ってくるよ」と声をかけて、先に教室を出た先生の後を追った。先生が出て行った途端にまた教室が騒がしくなったのが、再び私を複雑な気分にさせる。

だから、教室を出て先生に追いついた後も顔はふてくされたまま直せなかった。

「…おはようございます」
そんな顔のまま改めて挨拶をすると、先生は横目でチラリと一瞥してから「何だその顔」と素っ気無く言った。
「生まれつきこういう顔です」
「へぇ」
私の答えに肩を竦めて、先生はそのまま構わず歩いて行く。

……つれない。

今度は唇を尖らせて、私は先生の半歩後ろを足早についていった。

「…先生、何で髭剃っちゃったんですか？」
拗ねついでに、八つ当たりまがいに尋ねてみる。先生の少し後ろを歩いているだけで、周りの生徒たちがコソコソと話をしているのがわかった。そのほとんどが女子から漏れる黄色い声だ。今まで先生は男子からも女子からも「怖い」と恐れられていたのに…。今更何を、と、思ってしまうのは醜い嫉妬心からだろうか。

「明日から三者面談があるから」

答えながら、先生は階段を下りて行く。
「教頭が剃れってうるさくてよ」
そこだけ、声のトーンを少し落とした。先生の声は元々大きくはないので、誰にも聞こえないだろうけれど。

「…それだけ？」
「そう。それだけ」
半ば面倒くさそうに答えたのは、私がうっとうしかったわけではなくて教頭先生の顔を思い出したからのようだ。いつまでたっても相性が良くないらしく、いつも教頭先生には目の敵にされているらしい。

その時ちょうどすれ違った女の子たちが、「かっこいい」という単語を出した時は本気で拗ねそうになった。ただ髭がなくなっただけで…こんなにも変わるものなんだろうか？
「先生、周りの視線、痛くないですか？」
まさか気づいていないということはないだろう。先生は、どちらかというと周囲の声には敏感な方だ。…興味はないのだろうけれど。

「別に。そのうち飽きるだろ」
「かっこいい」という囁き声も聞こえているはずだ。やっぱり何となくおもしろくなくて顔を歪めると、先生はまた微かに苦笑いを漏らしたようだった。

辿り着いた化学準備室。ようやく静かになって、私はホッと安堵の息を漏らした。
「…あれ、まだねぇな」

机の上の物をバサバサとどかして確認しながら、先生は小さく呟く。それに首を傾げて、「何か探し物ですか？」と尋ねてみた。
「お前に持っていってもらうはずの資料。苑崎先生が持ってきてくれるはずだったんだけどな」
先生と一緒に環境美化委員の担当をしている美術教師の名前が出る。
「まぁもう来るだろ。ちょっと待ってろ」
…そんなことを言っても、朝のＳＨＲを終えてから１限が始まるまでは１５分ほどしかない。そう言おうとしたけれど、今日の１限の担当教師がここにいるんだから問題はないかもしれなかった。

「そういやお前さ」
「？はい？」
１限の化学の授業の準備をしながら、先生は再び口を開く。それなりに整頓されている机から教科書と問題集を取り出して言葉を継いだ。
「今日のＬＨＲなんだけどよ」
「…あぁ、文化祭の話し合いするって言ってたやつですか？」
尋ね返すと、先生は小さく頷く。いつもの定位置の椅子に遠慮もなく座った私を、まっすぐに見据えてきた。その目が…少しだけ不機嫌そうに細められる。
「何を頼まれても、引き受けるなよ」
「……え？」
言われた意味が分からず、私は目を丸くした。

……「引き受けるな」……？

…何、を？

聞き返そうとしたその時、部屋のドアが軽くノックされた。
「はい、どうぞ」
本城先生の応じた声に、静かにそれが開く。扉の向こうから姿を見せたのは、ちょうどさっき名前が出てきていた苑崎先生だった。

「遅くなってすみません」
言葉の割には悪びれた様子もなく、穏やかな笑みを口元に浮かべて苑崎先生は中に入ってくる。背はそれほど高くはないけれど、どちらかというと細身なのでスラッとして見える先生だ。物腰は柔らかで、生徒に対しても敬語を使う辺りどこかの「不良教師」とは大違い。男女問わず生徒に人気がありいつも周りを囲まれている印象があった。

「持ってこようとしてそこまで来て、机の上に置いてきてたことに気づいて引き返してました」
何でもないことのように言う苑崎先生。…たまに天然なところがあるとは聞いていたけれど…。
私は思わず笑ってしまったけれど、本城先生は慣れているのかさして気にした様子もなかった。

「あぁ、じゃあ白石さんこれお願いしますね」
苑崎先生に差し出されたのは、３枚の紙。
「今日の放課後の委員会までに、そこに書いてある通り記入しておいて欲しいんですけど…」
そう言えば今日は委員会がある日だ。「はい」とそれを受け取る

と、苑崎先生はそのまま本城先生に向き直った。
「それで本城先生、ちょっとお願いしたいこともあるんですが…」
まだ続きそうだった先生同士の話に、私は椅子から立ち上がる。
ここでこのまま聞いているのもどうかと思ったからだ。

「本城先生、じゃあ私戻ります」
「あぁ、悪いな」
いえ、とペコリと苑崎先生にも頭を下げて、私は化学準備室のドアを引く。

結局、先生のさっきの言葉の真意は聞けないまま終わってしまった。

2

休み時間になっても長い昼休みになっても、相変わらずその日のクラスの話題は先生のことばかりだった。

「髭くらいでそんなに騒ぐもんかね」

ミルクパンを頬張りながら、由実が首を竦めた。

「女子高生には、男は髭があるだけで気持ち悪いって思う子いっぱいいるじゃん？だからそれがなくなったらやっぱり印象違うんじゃない？」

いつも自分で手作りしているというお弁当を広げて、智子は笑う。

「本城先生、確かによく見るとカッコイイもんね」

こちらも同じく自分で作ってきたサンドイッチを手に、茜が頷いた。

「…納得いかない」

不機嫌そうに眉を寄せて、私はブリックのレモンティーを一口含む。だって、髭がなくなっただけで先生の本質は何も変わってないのに。そう思って少し乱暴に紙パックを机に戻した時、後ろから肩を叩かれた。

「和美、今日部活ある？」

クラスメイトの女子だった。

「ううん、ないよ」

買ってきたばかりのパンの袋を開けながら、私はそう答える。

「来週の球技大会、和美バスケでしょ？今日放課後練習しようって

話になったんだけど」
「あ、うん、いいよ。…あ、でも私委員会がある！」
「んーじゃあそれ終わったら体育館来て」
「はーい」
大きく頷いて、それだけ言い置いて去っていこうとする彼女に手を振った。そんな私を見て、「はぁー」と由実が感心したように声を漏らす。
「真面目だねぇ、バスケチーム」
「皆のとこは練習ないの？」
由実はサッカー、智子と茜はソフトボールに参加するはずだ。
「ソフトは知らないけど、うちのサッカーチームが負けるはずないもん」
平然と答えて、由実は笑った。

確かに、由実がいるだけでうちのクラスのサッカーは安泰な気がする。そう思って微かに笑うと、私は手にしたパンをちぎって口に放り入れた。

今日の6限には2学期にある文化祭の話し合い。そして明日からは三者面談。来週は球技大会で、再来週から期末テスト。……学生も色々と盛りだくさんだ。

そう思って、そこでふと先生の朝の言葉を思い出した。『引き受けるな』と、言った一言を…。

その言葉の意味することを知るのは、このもう少し後のことだ。

「…じゃあ多数決で、うちのクラスの出し物はお茶のお店にします」

６限のＬＨＲも終盤に差し掛かった頃、文化祭実行委員がそう案をまとめた。

多数決で決まったそのお店とは、中国茶を出すカフェ（？）だった。無論、中国茶なので女子は全員手作りのチャイナドレスを着る予定…らしい。これに喜んだのは一部の女子と多数の男子だけれど。

それでもそれだけいれば、クラスの多数票にはなる。圧倒的票数で決まったそれに、由実は忌々しそうに舌打ちしていた。由実は確かにチャイナドレスとかそういう特別な女の子らしい格好をするのが嫌いそうだ。

「やっぱ男の夢の一つだよな、チャイナドレスは！」

私の隣の席の男子が拳を握りながら力説している。…なんなんだろう、この熱さは。半ば呆れながら教室の隅に視線を移すと、クラスの男子とはうってかわって涼しげな感じの先生が椅子に座っていた。ＬＨＲの内容は全て実行委員に一任しているのか、ここまで一言も口を挟んでいない。

盛り上がる教室内をいつもの冷めた目で見渡したり手元のノートに何か書き込んだりしながら、ただ黙って聞いている。

「本城先生も喜ぶかな、和美のチャイナドレス姿」
タイミングよく振り返った茜が、コソコソと周りに聞こえないように耳打ちしてくる。
「…バカ」
そのおでこをペシっと叩いて、私は唇を歪めた。…そんなことで喜ぶ先生は全く想像もつかない。

「えぇっと、じゃあクラスの出し物は以上です」
大体の係も決め終えた頃、実行委員が話をそう締めくくった。HRが終わりそうな気配に、私は小さく首を傾げる。
…先生が、言っていたのは何のことだったんだろう。係だって滞りなく決まったし、私が引き受けちゃダメそうなことなんてここまで何もなかった。

「……」
そう思って、再び視線を先生に移す。…ちょうど顔を上げていた先生と、目が合った。それから、ふいと私から目線を逸らしてしまう。
「……？」
尚更意味が分からなくて、眉を寄せたその時だった。

「えっと、じゃあ最後に提案なんですけどー」
クラスでもムードメーカーとして人気者の実行委員の男子が、そんな風に言葉を継いだ。終わりかけていた話し合いの空気が、再び引き戻される。ざわざわしながらも教壇の方を向いたクラス中の視線を受けながら、彼は続けた。

「実は…これは極秘で仕入れた情報なんだけど」
そんな言葉に、ざわめいていたクラスが一瞬静まる。他のクラスには内緒、と前置きした彼が再び口を開きかけた時、先生が不機嫌そうに目を細めたのが見えた。
多分、他の人には気づかれない程度の変化だったけれど。

「今年も文化祭でミスコンがあるんだけど…去年までと景品の質が全然違うらしくて」
続いた彼の言葉に、再び瞬時に教室内がざわっとした。
「何がもらえるかはまだ教えてもらえてないんだけど、すっごくイイ物だって聞いてる」
「そこで、うちのクラスでも本気でミスコン校内優勝を狙いたいと思ってるわけ」
もう一人の実行委員の女子が、ニッと笑って言葉を引き継いだ。

ミスコン…そういえば、そんなものあったかも。クラスで一人を限度に女子をコンテストに出場させることができる。もちろん、不参加のクラスがあってもいい。
投票は生徒はもちろん当日訪れた父兄や他校の生徒たちも参加できる。出場者の中から学年ごとに一人ずつ優勝者を発表し、更にその中で一人だけが学校内の最優秀賞に選ばれるというわけだ。

「ミスコンだって」
茜が肩を竦めながら、こちらを振り返る。
「ね、大変だね出なきゃいけない人は」
興味なさそうに呟いて、私は尚も質問が飛び交う教室内を見渡し

た。

「今年はチャンスだと思うんだよね」

実行委員の女子が、グッと拳に力をこめながら言う。

「ミスコンは、去年優勝した人は出られないことになってるから」

「3年の春日愛海先輩が出られない今年が、狙い目ってわけ」

説明する実行委員の言葉を、私は半ば聞き流していた。早く終わって、委員会の時間にならないかな…。

どちらかというと、委員会で先生が喋っているところの方が見たい。

そんな風に思っていた時だった。

「で、うちのクラスからは白石さんに出てもらおうかと思って！」

自信満々に言ったその実行委員男子の言葉に、全員がこちらを振り返った。

……え？

ヒマを持て余すように頬杖をついていた私は、その視線に一瞬目を丸くした。

…わ、たし……？

「どうかな、和美！」

教壇に立っていたその女子が、懇願するように私に言う。一瞬静まった教室内も、次の瞬間にはわっと沸くように声が溢れた。

「それいい！確かに和美なら優勝できそう！」

「和美ー、引き受けてよ！クラスのために」

「確かに和美と美人具合で競えるって言ったら春日先輩くらいしかいないよねぇー。チャンスかも」

「…っちょ、ちょっと待って！」

大声で制してみようとしたけれど、湧き上がるクラスの歓声は抑えられない。驚きの余りその場で抗議しようと立ち上がってから…私はハッと我に返った。

…これだ。先生が言っていた「引き受けるな」という言葉。

出し物の方じゃなくて…ミスコンのことだったんだ。

「いや、私、ミスコンなんて出られるようなあれじゃないし！」

「何言ってんのー？和美が出なくて誰が出るの？」

「そうだよ白石ー、そもそもなんでお前去年出なかったん？」

勝手に盛り上がる教室内に、私は正直焦りながら口をパクパクさせた。…何と言えばいいんだろう。横目で盗み見た先生が余りにも無表情なのが逆に怖い。

「まぁ皆、待ちなよ」
私の代わりに遠くでそう皆を制したのは、他でもない智子だった。
その落ち着いているのに響く声に…教室内がシンとする。

「ここはさ、まだミスコンエントリーまで時間があるんだし、和美によく考えさせてあげようよ」
智子のそんな言葉が、私の唯一の救いのようだった。
「和美だって彼氏とじっくり相談したいだろうしさ」
「ととと、智子！」
教室の一番端っこにいる智子のそんな発言に、私は慌ててその名を呼ぶ。

な、何てこと言うんだろう…！視界の片隅に映った先生のポーカーフェイスがやっぱり余計に怖い。

「えぇっ、和美、彼氏いたのっ？」
「初耳！！」
「そんなこと全然言ってなかったじゃん」
「誰誰、どこのクラスっ？それとも他校っ？」
「っていうか、彼氏と相談するようなこと？」
「彼氏がミスコン反対するとか？」
「そんな男いねぇだろー」
言いたい放題に再び騒がしくなった教室内の声に、智子がニヤニヤと笑う。まさか本気で反対されている（らしい）ということは皆には言えない。…うぅ、近くだったら智子の口を塞いでやったのに…！

「じゃあ白石さん、まだ時間あるから彼氏と話し合ってきてもらえる？」

終わりの見えないこのＨＲを何とかまとめようと、実行委員の男の子がそう言う。

「…いや、私まだ出るとは…」

「お願いします！」

クラス中から合掌されながら頼まれて、私は続きかけた言葉を飲み込んだ。

「…終わりか？」

とりあえず話がまとまったと判断したのか、そこでようやく先生が立ち上がった。ノートを手に教壇の方へ向かいながら、実行委員に席へ戻るように促す。

「じゃあこのまま帰りのＨＲやるぞ」

表情も声音も、全て平常通り。

先生はそのまま、ノートに書いてあった連絡事項を読み上げ始めた。

＊＊＊＊＊

委員会が始まっても、もう先生とは目が合わなかった。

怒ってる…わけではないと思うんだけれど。
……いや、もしかしたら智子に対しては怒ってるかもしれないけど。

ちゃんと話をしなきゃダメだ。そう思ったけれど、この後はすぐに球技大会の練習にも参加しなきゃいけない。次から次へと押し寄せる予定が今日ほど恨めしかったことはない。

慌てて行った体育館で、もうバスケの練習は始まっていた。

と言っても部活ではないからお喋りをしながらの緩めの練習だ。シュート練習をしながら話す話題は、おおよそがやっぱり先生のことだった。

「本城ってさぁ、彼女いんのかなぁ」
誰かが髭のことだけじゃなく、そんなことまで言い出す。
「さぁ、そう言えば聞いたことないよねぇ。…ていうか興味持ったこともなかったかも」
「いやぁ、でも今はいたらショック」
「私もー」
笑いながら言うクラスメイトたちの言葉に、私は引きつった笑顔で聞き役に徹する。…本気で笑えるわけがない。

「あれ、でもちょっと前に3年の菅原先輩と噂あったよね?」
「あーあれ、ガセらしいよ?うちの部の先輩が言ってた」

「そっかぁ、良かったぁ」
久々に聞いた名前に、一瞬ドキリと胸が跳ね上がる。すっかり忘れていたけれど…そうだ、菅原先輩とのことも今後頭痛の種になりそうだ。

「でもさぁ、こんなにいきなり女子の注目集めちゃったら、菅原先輩もそうだけど相澤先生も気が気じゃないだろね」
誰かが、ふとそんなことを言った。

「…え…？」
私だけが首を傾げてそちらを向くと、皆が意外そうに目を丸くする。
「あれ、和美知らないの？相澤が本城のこと好きなの」
「えぇぇっ？」
寝耳に水、とはまさにこのことだ。驚きの余り自分でもびっくりするくらいの高い声が出て、私は目を見開く。
「結構前から噂あるよね。1年の時からだっけ？」
「つうかあれは噂っつーか見てりゃ分かるって」
「結構顔に出てるよね、相澤先生」
「……」
皆の言葉を聞きながら、私は黙々とゴールに向けてシュートを打つ。思ったより動揺しているのか、何度やってもリングに弾かれた。

そんな話を聞いていて…ようやく色んなことが理解できた気がする。どうして私のCDを没収した相澤先生が、本城先生にあんなことを言ったのか…。相澤先生は、気づいていたんだ。私の好きな「ジャズ好きな人」が、本城先生だということに…。

それで本城先生が何かしらの反論をしたんだとしたら、あの日私と先生が一緒にいた時に無視するようなことをしたのも辻褄が合う。

「和美？順番だよ？」

「え？あ、あぁっ」

考えごとをしているうちに再びシュートを打つ順番が回ってきていることに気づかなかった私は、そんな声にようやく我に返った。

＊＊＊＊＊＊

先生は、知っているんだろうか。相澤先生や菅原先輩が自分に気があること。

聞いてみたいけれど、そういったことを聞くのは無神経だろうか。でも、話したいことはミスコンのことも含めて他にいくらでもある。そう思って練習を終えてから化学準備室に行ってみたけれど、そこに先生の姿はなかった。

代わりに、1年生の女子が3人ほど集まっていた。化学部の後輩たちだ。

「いた？本城」

「いないー」

準備室をノックしたけれど鍵もかかり返事もなかったようで、彼女たちはそんな会話をしている。手にしたノートから恐らく化学の

質問に来たということが分かった。だけど彼女たちは、ついこの前まで先生のことを「怖い」と敬遠していたはずだ。

「あ、白石先輩」

私に気がついた一人が、声をかけてくる。

「こんにちは」と挨拶をされて、私も笑顔でそれに応じた。

「先輩、本城先生知りません？質問したくて探してるんですけど…」

尋ねられて、私は小さく小首を傾げてみせる。

「さぁ…。私も聞きたいことがあって来たんだけど、いないんだ？」

ニッコリ笑って応じると、彼女たちは「そうなんですよ…」と明らかにがっかりした感じで答えた。

「ここにいないとなると、職員室かな…」

彼女たちのうちの一人が、口元に長い指を当ててそう考えるような仕草で言う。

「先輩も、先生見つけたら教えてくださいー」

「うん、わかった」

軽く片手を挙げて応じて、私は元来た道を戻ろうと踵を返した。

彼女たちは正反対の方へ向かって歩いて行ったようだ。

「……さて」

どこにいるのだろうか、見当もつかない。恐らく、彼女たちの行った職員室にはいないはずだ。三者面談が終わるまで、グチグチ説教してくる教頭先生から逃れたいはずだから。となると、なっちゃんの数学準備室か苑崎先生の美術室に雲隠れしたか…。

それとも……。

「…！」

そんなことを考えていた時、ふと視界の片隅に映った影があった。それは窓の外で、旧校舎とを繋ぐ今はほとんど誰も行かないような中庭のベンチだった。

「…先生…っ」

びたっと窓に張り付いて呼ぼうとしたけれど、ここからでは少し遠くて声は聞こえそうになかった。

「…っ」

慌てて走り出した私は、先生のいる方へと向かう。途中で何人かにぶつかりそうになって謝りながら、私は中庭へと急いだ。

「…先生っ」

中庭に辿り着いた時、まだそこに先生はいた。ベンチにもたれかかって、背もたれには右腕を置いている。長い足を組んだその態勢は、およそ学校にいる教師のものとは思えない。

それでも絵になりすぎていたので、私は思わず微笑んでしまった。

「おぅ、どうした」

ちょうど口にした煙草に火を点けたところだったらしく、先生はジッポを閉じてポケットに戻す。…良かった。怒ってはいないみたいだ。

ホッと胸を撫で下ろすと、安堵したのが分かったのか先生は私の顔を見上げてから少し苦笑いを浮かべた。

「…先生、さっきは智子がごめんなさい」
ミスコンのことなんかはここで話せることではないだろう。代わりに智子の話題を出して、私は謝った。言うと、先生はやはり怒った様子もなかったけれど少しだけわざとらしく顔を歪める。
「俺はお前の友達の中ではあいつが一番怖ぇよ」
「…あはは…」
乾いた笑いを返したけれど、それは私も同意見だ。多分、一番頭が良い分一番怖い。

「で？なんか話があったんじゃねぇのか？」
唇から煙草を離して、先生はフーっと煙を吐き出す。煙草の匂いはあまり好きじゃなかったはずだけれど、先生のは嫌いじゃない。花火をする時の火薬の匂いにも似ていて…どこか馴染みのあるものだ。

「…ここじゃちょっと…」
傍らに立ったまま言うと、先生がそんな私を見上げた。一瞥してから、ふと目線をこちらから逸らすように前に戻す。そんな仕草に、「あ、読まれてるな」と思った。
「先生、今日家に行っちゃダメ？」
「……」
再び煙草を口に銜えた先生が、少しだけ目を細める。

「…週末だけって約束しただろ」
「そうだけど…でも…」
先生と、すぐにでもちゃんと話がしたい。メールや電話じゃなく、直接。だけど学校で話して誰かに聞かれるのも困るから…。

何と説明しようかと考えを巡らせているうちに、先生がもう一度大きく息を吐き出した。煙草の煙を吐き出したように見えたけど…もしかしたらため息だったかもしれない。

…怒らせちゃったかな…。

ふと、そんな思いが胸をよぎる。

学業に支障をきたすといけないし、親の目もあるしで先生の家に行けるのは週末だけという約束は私のためのものだった。それをすぐにでも破ろうとしてしまったから…当然と言えば当然かもしれない。

「……あの…」

ふと後悔の念にかられると同時に不安になってきて、私はもう一度先生に呼びかけようとした。

「あ、ユッキーいた!!!」

だけどその瞬間、後ろから華やかな声が聞こえてくる。驚いて振り向いたそこには、クラスの女子が4，5人いた。

「探したよユッキー!何でこんなとこにいんのぉ?」

朝まで「本城」と呼び捨てにしていたグループも、放課後の今ではこの呼び方だ。…本当に、髪の一つくらいでここまで先生に対する女子の態度が変わるとは思ってなかった。

それと同時に、先生がどうしてこんなところにいたのか理解できた気がした。化学準備室に訪れていた後輩たちに加え、このクラス

の女子たち。黙っていれば囲まれそうな境遇にうんざりしたからここに潜んでいたのかもしれない。

「あのさぁ、今球技大会の練習してんだけどユッキーちょっと見に来てよぉ」

「…何で俺が…」

面倒くさいと言わんばかりに顔を歪めたけれど、担任教師の態度としては正しくない気がする。

「えーだって、F組なんてなっちゃんがパス出しまでしてるよぉ！？」

「なっちゃん気合入ってるよねー。打倒A組って言ってたよ！負けちゃうよ！？」

「…面倒くせぇな」

言いながらも、先生は携帯している灰皿に煙草を押し付けた。…確かに、行かないわけにはいかないだろう。先生だって、態度はともかく生徒の面倒見が良くないわけではないから。

「お前ら何の競技だ？」

「バレー。ユッキーできる？」

「…いや」

「えー、ユッキー運痴！？」

「面倒くせぇからやらねぇだけだ」

先生のぶっきらぼうな一言一言にさえ、彼女たちはキャハハと楽しそうに笑う。昨日までは本当に見られなかった光景だ。

「…あ、ごめん、和美もユッキーに用事だったんだよね？」

先にここにいた私にようやく気づいたのか、彼女たちのうちの一

人が私を振り返った。そう尋ねられて、私は慌てて首を左右に振る。
「あ、ううん。部活のことでちょっと聞きたいことがあっただけで…もう終わったから」
そうでも言わないと、怪しまれるかもしれない。私が化学部に所属しているのはクラスの皆が知っていることなので、咄嗟にそんな嘘をついた。

「そっか、じゃあね和美ー」
「うん、またね」
手を振って笑顔で応える私を置いて、先生は彼女たちに腕を引っ張られながら連れて行かれる。

…結局、今日も話せないままか。教師と生徒だったら、おおっぴらにできない分こんなものなのかもしれないけれど…。

それでも、やっぱり少し寂しい。

「…あぁ、そうだ」
グイグイと引っ張られながら連れて行かれかけた先生が、数歩先でピタリと足を止めた。彼女たちもそれにつられるように止まる。
やんわりと絡められた腕を引き抜きながら、先生は私を振り返った。

「白石、これ」
ポケットから取り出した何かを、私にめがけてポンと投げる。宙を舞ったそれは空中で一瞬きらめいた。…金属のようだ。

「……？」
私の手に収まるように落ちてきたのは、一本の鍵だった。キーホルダーもストラップの類も、何もついていないシンプルな鍵。
「さっき化学室に落ちてた。お前のだろ？」
私が何か言うよりも早く、少し強めの口調でそう言う先生。勢いに押されながら、私は訳が分からないまま「あ、はい」と答えてしまっていた。

「えー、和美、それ家の鍵じゃないの？」
「落とすなんて危ないよー。気をつけなよー」
「…うん、そうだね。気をつける…」
笑いながらそう言ってくれる彼女たちの言葉に相槌を返して、私は手の中のそれを見つめた。

私、鍵なんて落としてない。
しかもこれは私の家の鍵じゃない。
そう、これは……。

「……」
ぎゅっと鍵を握りこんで、先生の後ろ姿を見つめる。引きずられるようにして行くその背中がやはり乗り気ではないようで、少し笑

ってしまった。

「…ありがと、先生…」

聞こえないように呟いて、私は両手でそれを包みこむ。先生の部屋のその鍵を、大事に鞄にしまいこんだ。

3

先生にお礼と「我儘言ってごめんなさい」というメールをすると、「これから職員会議があるから少し遅くなる」という一言だけのメールが返ってきた。素っ気無いようにも見えるその一文が、それでも私は嬉しい。ニコニコしていると、隣で智子が呆れたように私を見た。

「で、どうすんの？どっち買うの？」

スパゲティの細いのと太いのをズイと私の目の前に差し出しながら、少しだけ乱暴な口調でそう聞いてくる。「えっと…」と迷いながら細い方を手にとると、智子は残った方を元の場所に戻した。

部活を終えた智子とは、昇降口で一緒になった。下校時刻が重なったこともあり、先生の家は智子のすぐ近くにあることもあり…一緒にここまで帰ってきたのだ。せっかく先生を待つんだったら夕飯でも作ってようかなと思ったことから始まり、スーパーにまで智子に付き合ってもらっている。メニューは前に茜に教えてもらった１５分でできるソースを使ってスパゲティにするつもりだった。

「和美もさぁ、こういうことするようになるもんなんだねぇ」

どこか感心したように、智子は続いてホール缶のトマトを手に取る。２種類あるそれを見比べてから、安いほうを私の持つカゴに入れた。

「ん？どういうこと？」

「だって、料理とか基本的に好きじゃないし苦手でしょ？それでも彼氏のためには作りたいとか思うんだな、って」
「智子は？そういうのないの？」
「私はないなぁ。裕貴の方が料理うまいもん」
中学の時から付き合っているという彼氏の名前を出して、智子は肩を竦めた。
正直、私だって自分で驚いている。自分でもそういうタイプだとは思っていなかったから。

「でも先生って、放っておくと食事しない人だから…っていうのもあるかも」
「何、本城ってそういうタイプなの？」
「うん。食べること自体は良くても、作ったり食べに行ったりする時間がもったいないんだって」
「はー…理解できないわ」
苦笑を浮かべて、智子は次々とカゴの中に必要なものを入れていく。私がメモした紙を見ながら、品物を選んでくれていた。

「で、和美さぁ。話変わるけど、ミスコンどうするつもり？」
尋ねられて、私は思わず「…うっ」と返す言葉に詰まる。今ここで聞かれるとは思っていなかったので、自分の中でも整理できていない。
「…正直言うと、迷ってる…かも」
「まぁそうだよね」
ここまで付き合ったお駄賃だ、と呟きながら、智子は自分が欲しがっているミントガムまでポンとカゴの中に入れた。

「ミスコンなんて出ても優勝できる気がしないし…。皆の期待には応えられないと思う」
「そんなことないと思うけどね、その点に関しては」
「でも、皆があやって盛り上がってる時に自分だけ『イヤイヤ』ばっかり言って雰囲気を盛り下げるのも…」
「うんうん、和美は結構空気読む子だもんね」
「…でも……」
「本城でしょ？何か言われたの？」
「…ミスコンの話が出る前にだけど……『引き受けるな』って…」
「…はぁーん、なるほど」
妙な声で納得の意を表しながら、智子は軽く頷いた。それから、
「ま、よく話し合って来な」とポンポンと私の肩を叩く。
「そうする」
短く答えて、私はそのままカゴを持ってレジへと向かった。

会計を済ませて外に出た頃には、もう大分日が傾いてしまっていた。智子とは道の途中で別れて、私は記憶にある通りを歩いて行った。
誰がいるわけでもないし、辿り着いたところで先生が待っているわけでもないのに、ドキドキと胸が高鳴る。アパートに着いた時には緊張は最高に達していた。鞄に忍ばせていた鍵を取り出して、その鍵穴へ差し込む。

「お邪魔しまーす」
小声で何となく挨拶をしてしまいながら、私はその扉を引いた。玄関の電気を点けて、靴を揃える。振り返った室内は当たり前だけれどシンとしていて、胸中は少しの寂しさとここに来ることを許された歓びが入り混じった。

6月中旬の熱気のせいか、室内は少し蒸し暑くなっていた。リビングの窓を開けると、ふわっと涼しい風が入ってくる。部屋の中は相変わらず男の人らしくなく整頓されていて、私がどうこうする隙もなさそうだった。

持ってきた荷物をキッチンに置いて、早速茜からもらったレシピを取り出す。

先生はやっぱり料理なんかほとんどしないらしく、道具類も一通りは揃っていそうだけれど使った形跡があまり感じられない。

茜には15分でできると言われていたそのレシピも、私が作れば1時間は余裕でかかった。それにサラダとスープの準備をしていると、それだけで時間はあっという間に過ぎてしまう。それら全ての準備がひと段落ついた頃には時計は既に8時を回っていた。

ソファに座って、ふーっと大きく吐息を漏らす。慣れないことをして疲れたけれど、それでもどこか幸福感に満ち足りている感じだった。

そうして、しばらくそこで休んでいた時だった。

「……？」

不意に、ピンポーンとチャイムが鳴らされる。

先生が帰ってきたのかと思って急いで玄関に向かったけれど、その短い間にすら何度も繰り返して鳴らされるそれに少しの違和感を覚えた。…先生だったら、こんなにしつこく鳴らしたりしないだろう。何かに焦っているかのような…そんな鳴らし方だったから。

「…っ！」

覗き窓で覗いたそこにいた人を確認して、私は思わず息を飲んだ。そしてそれから、慌てて鍵をかけてあることを確認する。声を殺して息を潜め、もう一度自分の目を疑うように再度相手を確かめた。

…そこにいたのは、相澤先生だった。

職員会議を終えて、すぐにここへ来たんだろうか。

上下させている肩が、息が切れていることを物語っている。何をしにきたのか…見当もつかなかった。それでも今日クラスの女子たちが、相澤先生が本城先生のことを好きだという噂話をしていたことははっきりと思い出した。

「…本城先生、そこにいますよね？」

ドアを開けようとしない私に痺れを切らしたのか、相澤先生はふと手を止めてそう呼びかけてきた。…まずい。部屋の電気が煌々とついているのは外の廊下からでも分かるだろう。ゴクリと息を飲んで、私はドアから少し身を離して身動きしないよう意識した。

「開けてください！…話があるんですっ」

切羽詰まったような声は、懇願するように響いてドアを叩く。声

を漏らさないように口元を手で覆った私は、それでもその先生の声がほんの少し前の自分と似ている気がしてどこか切なくなった。

「…私…っ」
「…何してるんですか」
何かを言いかけた相澤先生の向こう側から、低い声が聞こえてきた。
「…っ」
本城先生の声だ。

「あ…私…」
言葉が続かなかった相澤先生は、わずかに息を飲んだようだった。だけどそれも一瞬のことで、すぐに再び凛とした彼女特有の声を取り戻す。
「…中に…誰かいらっしゃるんですか？」
聞かれた本城先生は、間を空けることなく平然と「いいえ？」と答えた。
「でも…電気点いてますよね」
「消し忘れたんじゃないですかね、家出る時」
「…インターホン鳴らす前、物音がしてたみたいですけど」
尚も食い下がろうとする相澤先生の言葉に、本城先生は微かに笑ったようだった。その表情は想像できる。どこか相手を揶揄するような…そんな笑み。

「あぁ、最近ネコを預かってるんです」
「アパートなのに？」
「大家には内緒にしてください」
「…ネコが換気扇を点けたりするんですか？」

「最近のネコはジャンプ力がすごいんですよ。ご存知ありませんか？」

そんな会話を聞いて、ようやく私は換気扇を消し忘れていたことに気づく。…先生、ごめんね。心の中で謝りながら、私は尚も声を出さないように注意した。

「…何か御用ですか」

先生の声が、どこか冷たく響く。

「……」

ぐ、と一瞬声を飲み込んだ相澤先生は…それでも再び意を決したように口を開いた。

「…生徒たちのことでお話が」

「学校でできない話ですか」

畳みかけるように言葉を継ぐ先生は、少し意地悪なようにも感じられる。その迫力に相澤先生が気圧されるのは安易に想像できる。それこそ、この前までの私と同じようだったから…。

「今日、うちの生徒たちの様子を見ていて気になったんです」

「？」

「…あの…さしでがましいことを言うようですが…あまり生徒たちに無駄な期待を持たせない方がいいのではないかと…」

「……」

「まだ子どもなのに、夢ばかり見て傷つけるだけじゃ…あまりにも可哀想です」

そう言った相澤先生が何を言わんとしているのか…私は頭を整理させてからようやく理解できた。今日、本城先生を追っかけ始めた女の子たちのことを言っているんだ。

「あの、本城先生…」

何も答えない先生に、相澤先生が控えめに呼びかけた。その時、喉の奥をクッと鳴らして先生が笑うのが分かる。

「『無駄な期待』…ね」

相澤先生の言葉を繰り返すその声が、どこか嫌味に響いた気がした。

「それは確かに『さしでがましいこと』ですね」

「！…」

笑って言う先生の言葉に、相澤先生がヒュッと息を飲む。

「わざわざこんなところまで来たのは、それだけ言うために？」

「…っ」

「話が終わったなら、そこどいてもらえませんか」

その次の瞬間だった。パン！という乾いた音が扉ごしにも聞こえてきた。

「…！」

驚いて覗き窓から一生懸命覗こうとするけれど、ちょうど先生たちの姿は角度が悪くて見えない。だけど代わりに、カンカンという高い音がして相澤先生が階段を下りて帰っていったのだけは分かった。

「……」

それを見送っていたのか、数秒間の沈黙の後で再び部屋のインタ

ーホンが鳴らされる。今度は間違いなく先生のはずだ。恐る恐るドアを開くと、先生はあまり隙間を開けずに中に入ってきた。多分、まだすぐそこにいるだろう相澤先生が振り返った時に私の姿が見えないようにだろう。

「…先生…」

玄関で待っていた私を見て、先生は微かに笑ったようだった。

軽くキュッと抱きしめながら、「ただいま」と耳元で囁かれた。

＊＊＊＊＊＊

「…先生、ほっぺ大丈夫…？」

着替え終えた先生に、私はそう尋ねながら冷えたタオルを差し出す。それを受け取りながら、「音だけ派手で大して痛くねぇからな」と頬に当てた。

「先生…」

「あ？」

冷やした瞬間はやはり少し痛んだのか、先生はわずかに眉を寄せる。確かにそれほど大したことはなさそうだけれど、ほんのり頬が赤みがかっていた。

「相澤先生は……その…先生のことが好きなんでしょうか…？」

じゃなきゃ、彼女の行動も説明がつかないけれど…。私は思わず、そんな質問をしてしまっていた。

「…だろうな」
短く答えた先生は、言って立ち上がる。キッチンへ向かって冷蔵庫を開くと、中からミネラルウォーターのボトルを取り出した。それをコップに注ぎながら、そこに私が下準備しておいた夕飯があることに気づく。
「お前が作ったの？これ」
「え？あ、はい、一応…」
思わず照れた顔で答えてから、私はハッと我に返った。
「先生っ、ごまかさないでくださいっ」
「…別にごまかしたわけじゃねぇけどよ」
コップに注いだ水をグッと飲み干してから、先生は顔を歪める。
「気分悪くなる話を飯の前にするのは趣味じゃねぇんだ」
「でも…」
言いかけると、先生は益々不機嫌そうに目を細めた。それから、リビングの方へ戻ってきてソファにどかっと腰を下ろす。ため息まじりに視線を上げると、傍らに立つ私の手首をグイと引いた。
「！」
驚いたけれど引っ張られる勢いに任せて、私はすとんとそこに座らされる。
「…で？じゃあお前は何が聞きたいんだよ」
「〜〜っ」
膝の上に乗せられて耳元で低い声で囁かれたら、まともに話なんてできるわけがない。言葉を返す余裕すらなくて、私は赤面して唇を噛んだ。

「相澤が俺のこと好きだとして、だからそれが何だって言うんだ」
突き放すような言い方は、私にじゃなくて相澤先生になんだろうけれど。それでも冷たい声には、胸がどこかズキと痛む気がする。

「でも…」
「大体、フェアじゃねぇだろ」
私の言葉を遮るように、先生は重ねてそう言った。
「自分の言いたいこと隠して、生徒の心配してるフリ？いつもやり方が汚ぇんだよ」
「……」
言いながら、先生は私の長い髪を一筋手に掬う。長くてキレイな指が、梳くように撫でていった。
「恋愛なんてな、本音をちゃんとぶつけた人間だけがちゃんと相手と向き合えるんだ。いつでも遠まわしな態度でしか接してこねぇ奴に真っ向から答えてやる義理もねぇだろ」
それは…前にどこかで聞いたような言葉だった。

…そうだ、あれは確か…先生に想いを伝えることをためらっていた私に、祥太郎が言った言葉だ。

「…先生、でも私はちゃんと好きだって言ったのに最初聞き入れてもらえなかった…」
「さて、そろそろ飯食うか」
「先生っ」
あからさまに話をはぐらかして笑う先生に、私は思い切り頬を膨らませてみせた。拗ねついでに、さっきから少しだけ気になっていたことを言ってみる。
「それに先生、私ネコじゃありません」

唇を尖らせたまま言うと、先生は今度こそおかしそうに笑った。
「どう考えても犬タイプじゃねぇだろ」
「そういう意味じゃないですっ」
わざと怒り口調で言うと、先生は笑いながらストンと私を床に下ろす。…もう、どうやったら真面目に取り合ってもらえるんだろう。
先生こそ本音は大人の余裕で包み隠してしまうから、私には推し量ることすらできないのに。

連れられるままキッチンへ行って、夕飯準備の仕上げに取り掛かる。先生も手伝ってくれるらしく、パスタを茹でるために大きめの鍋に水を注いでくれていた。

「先生、あと聞きたかったことがあるんですけど…」
パスタソースを温めるために火を点けながら、私は隣の先生を見つめる。浄水器をつけた水道の水を止めながら、先生は「何？」とこちらを向かないまま返事をした。

「あの…今日のミスコンのことなんですけど…」
言うと、ようやく一瞬だけこちらを見た。
一瞥するような視線は流れるように逸らされて、それから先生は「あぁ」と曖昧に頷く。
「先生が『引き受けるな』って言ってたの…ミスコンのことですよね？」
確認の意味で聞いたけれど、先生は無表情のまま即答はしなかった。手にした鍋をもう一つのコンロに置きながら、同じように火を点ける。

「あれな、別にもういい」
「……え？」
「お前だってああいう空気になったら断りにくいだろ」
それは…そうだけれど。でも、そんな風にあっさり引き下がられたらどうしていいか分からなくなる。

ちゃんと話合わなきゃ、と思ってきたのに、半ば拍子抜けだった。

「なんかもうどうでも良くなった」
続いた先生の言葉に、私は大きく目を見開く。

『どうでもいい』…？

先生の雰囲気からは怒っている様子も見られなかったけれど…。
どこか投げやりにも聞こえたそれは、私を突き放すようにさえ感じられた。

4

「はぁっ!!!?『どうでもいい』っ??」
校舎内に智子のそんな大きな声が響きそうで、私は慌てて「しーっ」と口元に人差し指を当てた。

翌日の昼休み、私は智子と屋上でお弁当を食べていた。昨日先生とどんな話ができたのかとか智子が色々と聞きたがっていたので、人気のないところを探した結果だ。由実はいつも通り男子とサッカーへ、茜は家庭科部のミーティングを兼ねたランチタイムに行くということだったので今はいない。そんな中珍しく2人きりの昼食を終えた頃、ものすごい風が吹きすさんだ。スカートはめくれ、持っているものは飛ばされそうになるわで校舎の中に戻ったところだった。

教室内では話せないことなので、屋上のドアを開いて校舎に入ってすぐのところで立ち話をしていた。その頃には一通りを話し終えた私に、智子がこらえきれずに叫んだというわけだ。昨日の先生の言葉を復唱して、不機嫌そうに眉を寄せる。

「どうでもいいって、どういうことよ!」
「…うーん…」
それが分からないから、私も戸惑っている。
「怒ってんの?本城。ミスコンのこと」
「…うーん…」

腕を組んだ態勢で首を傾げ、私は低く唸った。

「怒ってるわけでは…ないと思うんだ」
「じゃあ、拗ねてんの？」
「…そういうわけでもなさそう」
ミスコンのことを「どうでもいい」と言った以外は、特に機嫌が悪そうでもなかったし。…ただ、私に見える先生がそれで全てだとは思えない。本音を覆い隠されてしまったら気づける自信はないから。

「…意味わかんない、ムカツクなぁ」
「私も、聞き返せばよかったんだけど…『どうでもいい』の意味を」
「『どうでもいい』は『どうでもいい』でしょ。他にどういう意味があんの」
「…うっ、そうだよねぇ…」
階下へ伸びる階段の一番上に座った智子の言葉は手厳しい。その冷たさは私ではなくここにいない人へ向けられたものだということは明らかだった。

「…でも…」

私が次に言葉を継ごうとした時、智子が少しだけ前を見据えたまま目を細めた。
「？智…」

名前を呼ぼうとした私の口を、智子が「シッ」と塞ぐ。
「？」
意味が分からずに言葉を呑んだ私だったけれど、その意図することが次の瞬間には理解できた。

「お前、まだショック受けてんの？」
階下の方から、ふと誰かの声が聞こえてくる。智子は私の手を引いて自分の隣に身を潜めさせ、注意深くそちらを覗いていた。どうやら、うちのクラスの男子がこちらへ来たらしい。
ただ屋上まで来る気配はなく、すぐそこの踊り場のところで数人が座り込んで会話を始めた。確かに、クラスの男子に先生のことを話しているのを聞かれたりしたら大変だ。慌てて口を抑えて、私も黙ってそこに座っていた。

「…場所変える？」
先生の話を聞かれたくないだけで、ここにいたことがバレてはいけないわけではない。今のうちに彼らの前を通って、場所を移すのもいいかもしれない。そう思って智子の問いに頷こうとした。
…その時、だった。

「だって白石に彼氏ができてるなんて思いもしなかったから…」
踊り場から聞こえてきた声に、私は思わず目を見開いた。不意に出てきた自分の名前に、頭が真っ白になる。どうやら、昨日のＬＨＲのうちに智子が皆の前で私の彼氏の話を出したことが話題になっているようだった。

「……」
腰を浮かしかけていた智子は、その話題を受けて、出ていくことを断念してもう一度座りなおした。代わりに「このこの」とでも言うような顔で肘で私をつつく。それを振り払うようにあしらって、私は応えるようにため息をついた。

「確かに、白石って男の影ねぇもんなぁ」
「そのせいでめちゃめちゃモテるのに逆に告白できねぇ奴多いみたいだよ」
「男友達ですらいそうにねぇもんな。人当たりはいいからどいつとも笑顔で話はするけど」
「そうだよ。だからなんか安心しきってた…」
初めに話を振られた男子が、肩を落としてそう答えている。あの声は確か…村木くんだ。

「いやいや、彼氏いなくたって村木にチャンスがあるとは限んねぇだろ」
誰かがからかうように軽口を叩く。
「分かってるよっ。違うんだ、自分に無理だってことも分かってるから、見てるだけでよかったんだよ」
「でも彼氏がいたなんて聞いたらショックってわけだ」
「そりゃそうだよ…」
隣で智子が、ニヤニヤ笑っている。再び吐息まじりにそれを見てから、私は階段の壁にもたれかかった。…こんなことなら、早く移動しておけばよかった。

「でもさぁ、意外に大丈夫かもよ？」
村木くんを慰めるつもりだったのか、誰かがふとそう言った。
「昨日智子が言ってたじゃん、彼氏とミスコン出るの相談した方がいいって」
「あぁ、言ってたな」
誰かが相槌を打つ。
そこで私は昨日のことを思い出して、智子を再び横目で睨んだ。
それに気づかないフリをして、智子はとぼけるかのように口笛でも吹くような素振りで唇を突き出す。
「ってことは、その彼氏ならミスコン出るの反対するかもってことだろ？　そんな男、長続きすると思えないんだけど」
続いた言葉に、私は「え」と思わず目を見開いた。

「何で？」
「だってさ、ミスコンに反対するって意味わかんなくね？」
「…確かに」
「男ならさ、自分の彼女がミスコンに推薦されるくらい美人だったら嬉しいじゃん」
「自慢になるしなぁ」
「確かに、俺だったら自慢しまくるけどな」
「だろ？ってことは、反対するってことは…」
一瞬言葉を切ったその人の続く声を、私は思わず待ってしまった。
ゴクっと息を飲んで、前を見据える。

「自慢したくなるほど本気じゃないか、周りや友達に紹介したくなるような女じゃないってこと」
「……」
「そんな感じだったら別れるのも時間の問題だって」
「…そっか」

「そうそう」
友人たちの必死の慰めの甲斐あってか、村木くんは少し晴れ晴れとした顔を上げる。逆にこっちが憂鬱な気分だ。どうしてこんなことを聞かなきゃいけないの。

「か、和美…」
何と言って声をかけていいのかわからなかったようで、いつも冷静沈着な智子が珍しくうろたえていた。
「……」
折りたたんだ膝に顔を埋めて、私はその彼らの言葉を反芻してしまう。考えれば考えるほど、気分は余計に滅入りそうだった。

やがて5限目の始まる予鈴が鳴って、彼らは先に立ち上がって教室へと戻っていく。それを見送ってから、智子が励まそうとしてくれたようでわざと明るい声を出した。
「ほ、ほら、あいつらの言うことなんて気にすることないって！」
「……でも…それなら『どうでもいい』の意味が理解できた気がする…」
「和美！和美は本城のこと信じてればいいんだよ。本城が和美のこと好きなのは本当なんだからさ」
「……」
「どうせ昨日だって散々ラブラブで好き好き言われたんでしょー？」
必死でテンションを上げようとしているらしく、智子は「このぉっ」とからかうように笑って私をつついた。

だけど私は…そのおかげで、あることに思い当たった。

「…そういえば…」

今までの先生との会話とか、全てを頭の中で整理する。そうして気づいた事実が、一つあった。

「ん？」

階段を先に下り始めた智子に、私は泣きそうな目を向けた。

「…私、先生に『好きだ』って言われたことない…」

「……は！！？」

この上なく驚いたのか、智子が思わずといった感じに大声を上げる。数段下から私を見上げるその目は大きく見開かれていて、私はそれすら泣きそうになって直視できない。

「…言われたこと、ない」

もう一度繰り返した声は、弱々しくポツンと響いた。

＊＊＊＊＊

会話の流れから、私のことを好きだと言ってくれているようなものだという時はもちろんあった。でも、直接言われたことは思えば

一度もない。

どうして今更そんなことに気づいたんだろう…。

「…まぁとにかく、飲みな和美」

放課後になっても気分が浮上しきれない私は、智子に駅前のファストフード店に連れ込まれた。何やら色々な責任を感じているらしく、奢りだと言ってアイスティーを差し出してくれた。

「…ありがと」

「さっきの話だけどさ、和美の勘違いなんじゃないの？実は言われてるのに忘れてたりとか」

「私、先生の言葉だったら一言一句忘れたりしない」

「……あ、そう」

慰めようとしてくれたのに撃沈して、智子は肩をガクリと落とす。私の向かい側に座り、足を組んでアイスコーヒーに口をつけた。

「…やっぱり、先生はそんなに好きじゃないのかも…」

「なに弱気になってんの！」

叱咤するような智子の罵声が飛ぶ。

「じゃあ、鍵は昨日結局どうした？」

尋ねられて、私はストローの入っていた袋を弄びながら力の入らない目線を上げた。

「返そうと思ったら、持っていていいって言われた…」

昨日の先生とのやり取りを思い出しながら答えた私に、智子は活

路を見出したように「でしょ！？」と食いつく。

「合鍵なんて相当好きじゃなきゃ渡さないでしょ！」

そんな説得の言葉に、「…うーん」と今日何度目かの唸り声を漏らした時だった。

「とーもこ」

私の背後から智子を呼ぶ声が降ってきた。

「？」

「裕貴…！あんた何してんの？」

驚いて目を丸くする智子の前で、私は声の主の方を振り返る。そこにいたのは、裕貴くんと言って…智子の彼氏だった。中学が一緒だったようだけれど、今は他校に通っている。智子を通じて何度か会ったことがあった。

「いや、前通ったら見かけたから……和美ちゃんこんにちは」

ニッコリ笑って、裕貴くんは私に挨拶してくれる。「こんにちは」と笑顔で返した私だったけれど、その前で智子は苦い顔をしていた。

「ちょっと裕貴、今大事な話してるんだけど」

放っておくと自分の隣に座ってしまいそうだと思ったのか、「しっし」と言うように手で払うフリをする。

「うわ、ひでぇ」

苦笑い気味に答えた裕貴くんに、私が智子の代わりに椅子を示した。

「どうぞ、裕貴くん」

「ありがと和美ちゃん。やっぱ智子より優しいよなぁ」

笑いながらお礼を言う裕貴くんに、智子は「…悪かったわね」と顔を歪める。

口ではこういいながらも、2人はとても仲が良い。裕貴くんが細かいことを気にしないおおらかな性格だからか、ケンカになることもほとんどないようだった。

「で？何の話してたの？」

準備よく買ってきていたらしいコーラのカップをテーブルに置きながら、裕貴くんは私を見る。

「なんか和美ちゃん、元気ない？」

そう付け足されて、やっぱり今の自分はひどい顔してるのかなと思わされた。

「私、ちょっとトイレ」

ため息まじりに智子が立ち上がる。

別に裕貴くんに本気で怒っているわけではないのだろうけれど、私との話を中断されたからのため息のようだった。本気で私の心配をしてくれているからだろう。こういうところ、智子は優しいと思う。

「そういや和美ちゃん、彼氏できたんだって？」

ニッコリ笑って言われて、私は返す笑顔をひきつらせてしまった。瞬時にさっきまでの話の重さを思い出したからだ。

「…うん…」
「へぇ！どんな人？」
恐らく裕貴くんとしては、私に気を遣って話題を振ってくれているのだろうけれど…。この時ばかりは、ポンポンと嬉しそうに答える気分でもなかった。

そう自覚していたからか…自分でも意図しないうちに、質問返しをしてしまっていた。
「ねぇ、裕貴くんだったらの話なんだけどね？」
「うん？」
コーラを飲みながら、裕貴くんは小さく首を傾げる。

「…もしも…智子がミスコンとかに推薦されるようなことがあったら…どう思う？嬉しい？」
「智子が『ミスコン』！？」
「えっと、例え話例え話」
慌てて首を振ると、裕貴くんは「だよねぇ」と笑った。それから、ふっと真顔に戻ってテーブルに頬杖をつく。

「やっぱり嬉しいんじゃないかな。それだけ周りに認められてるってことだろうし」
「…そうだよね…」
「なんていうかな、別に周りに智子を認められないと嫌なわけじゃないけど……言いたいこと分かる？」
「…うん」
「ちょっと違う話だけど、あいつメチャクチャ頭いいじゃん？そう

いうのやっぱり俺の自慢だし。俺が智子を尊敬してることって、同時に周りに誇りたい気分になる…かな。ま、俺が自慢したって別に俺がすごいわけじゃないんだけどさ」

「……うん、分かる」

「……って、あれ？和美ちゃんなんかへこんでない？」

私の様子に気づいたのか、裕貴くんは「おーい」と私の目の前で手をヒラヒラさせた。

「…バカ裕貴っ、和美に何か言ったでしょ！」

ちょうどその時テーブルに戻ってきた智子が、そんな言葉と同時に裕貴くんの頭にゲンコツを落とす。

「…いってぇぇぇ」

頭を抑えて涙目になりながら、裕貴くんは「え、何、何？」と明らかに戸惑っていた。

自分から振った話とはいえ、裕貴くんにまでダメ押しをされて私は更にずーんと沈む。そんな私の前で、智子が彼にこれまでの事情を説明していた。

「…ごめん、和美ちゃん」

聞き終えた裕貴くんは、第一声にそう謝った。しかも、若干青ざめた顔で。

「ううん、私が自分から聞いたことだから」

笑顔を浮かべて返事をしたけれど、うまく笑えてはいなかったと

思う。こんなにイイ人にまで気を使わせてしまって逆に迷惑をかけてしまった。

「でもほら、ミスコンに反対するとか…『好き』って言葉でちゃんと言ったことないとか…そういうのってその人の性格によると思うから…」

裕貴くんまで、私のフォローに必死なようだ。本気で悪いことをしている気になってしまい、私は首を縦に振った。

「うん、ありがとう」

今度は少しはうまく笑えたようだ。目の前で智子と裕貴くんが少しホッとしたのが分かった。

5

その日智子と別れる時、裕貴くんは「夜また電話する」と言い置いて行った。「まだ何を話すことがあるんだか」と智子は素直じゃない呟きをもらしていたけれど、もちろん本気で嫌がっているわけではない。そんな2人のやり取りを見たからこそ、私はまた自分の思考が嫌な方へ向かっていくのを感じた。

あまり気にしたことはなかったけれど、私が先生と電話やメールをすることはほとんどない。こちらからした時は返事もくれるし電話にも出てくれるけれど、先生からかかってくることは用事がない限りまずなかった。

多分先生はそういうところ器用な方じゃないし…と思っていたから気にしていなかったけれど、普通は智子と裕貴くんみたいなのが一般的なんじゃないだろうか。

「…なんか、考えたら余計に電話しづらくなっちゃった…」

小さく呟いて、私ははぁ、と肩を落とした。

翌日は短縮授業で、三者面談の日だった。ただでさえ何だか先生

の顔を直視できる自信がなくなったところなのに、親と3人で顔を合わせるなんて気が重すぎる。
しかも私は今日の分の一番最後の時間帯で、長い間朝から憂鬱な気分でいることになった。先生の化学の授業が今日はなかったことがまだせめてもの救いだ。

三者面談に来る母親とは、時間の１０分前に来客者用の昇降口で待ち合わせをしていた。時間通りに迎えに行くと、「和美」と声をかけられる。だけどそれは思っていた声とは違い…私は大きく目を見開いて、その声の主を見上げた。

「お父さん!?何で…」
驚きのあまり口をパクパクさせながら指を指したけれど、父親の方はそんな私に構う様子もなく用意されたスリッパを履く。
「出張が早く終わったから、母さんの代わりに来た」
父は医療機器を作っている会社に勤めていて、全国の病院へ出張に行くことが頻繁なくらい忙しい人だ。海外へ行くことですら少なくない。家を留守にしがちで運動会や授業参観にだってろくに来たことがない父が三者面談に来るなんて、驚いて当たり前だった。

「母さん夜勤明けで、今日もまた夜勤だからな」
確かに、施設で介護士をしている母は夜勤が多く、そんな母にゆっくり休めるはずの日中も学校に来てもらうのは申し訳なかった。
でも……。

母より父の方が、先生と面談するのに気まずい気がするのは気のせいだろうか…。別に父に「彼氏です」と紹介するわけではないのだけれど、やっぱりどこか落ち着かない。先生だって、私の親と顔を合わせるのは緊張するんじゃないだろうか…。

内心で冷や汗を流しながら父を連れて歩いて行くと、丁度前の人の面談が終わったところだったようだ。時間ちょうどより少しだけ早く終わっている辺り、先生はすごいと思う。なっちゃんなんて、たまにかなり延長させられる親だっていると言っていたのに。

前の生徒と母親を教室のドアまで見送りに出た先生は、頭を下げてその後ろ姿を見送った後クルリとこちらを向き直った。父を見て少しは目を瞠ったりするかと思ったけれど、いつも通りの表情。

…いや、それどころか営業スマイルとも言えそうな笑顔を浮かべていた。

「白石さん、どうぞ」

短い挨拶をして、先生はそう言って父を中へ促した。

面談中、私はずっと生きた心地がしなかった。「勉強も部活も頑張っています」と先生に娘を褒められて、父は悪い気がしなかったらしく終始ご機嫌だったけれど。ここでこの人がその娘の彼氏だと知ったら激昂しただろうか。

「成績も随分上がっています」
言いながら先生は、この前の実力テストの個人成績を出す。高校生にもなると親にちゃんと報告しない生徒もいると踏んでいるのか、面談で成績を出されるのがこの学校の決まりらしい。
「……」
私は個人成績表をいつもテストのたびに母親に渡すけれど、父はそれに目を通したことはなかったのだろう。私の成績を初めて見て、少しだけ驚いたように目を見開いた。
「…どうかされましたか？」
それに気づいた先生が、少しだけ首を傾げて父を見る。尋ねられて、父はようやく我に返ったように「あ、いえ…」と小さく取り繕った。

「…お恥ずかしい話ですが、娘の成績をあまり見たことがなくて…」
決して無関心なわけでもない。多分私も祥太郎も溺愛されて育った方だと思うけれど、父は成績にはそれほど興味がなかったんだろう。
「かなり無理して入った進学校だったので、もっと悪いものだと思っていました」
「そうですか」
相槌を短く打ちながら、先生はニコリと笑った。…普段では絶対に見れないような笑顔に、失礼だと分かっているけれど背筋を冷たいものが走る。
「真面目に頑張っているので、その結果です」
「化学なんて、特に苦手だと思っていたんですが…」
父は穴が開くんじゃないかというほど成績表を凝視する。…確かに、入学当初の私は化学なんて一番嫌いな教科だった。

「最初は苦手だったようですけれど、克服するためにわざわざ化学部に入って努力しましたから」
笑って言って、先生は「な？」と私に話を振る。
「…」
小さく頷いて、私はわずかに視線を逸らした。化学部に入ったのは「克服するため」でもなかったんだけれど…。それを知っているくせにそんなことを言う辺り、先生は絶対面白がってると思う。

その後少し学校生活の話をしただけで、面談はあっさりと終わった。時間にすればたったの１０分程度だと思う。元々私は小学生の頃から先生に注意されることもほとんどない生徒だったので、本城先生じゃなくてもこんなものだったとは思うけれど。
それでもようやく終わりを迎えたそれに、私がホッと安堵の息を漏らした…その時だった。

「あ、先生すみません」
挨拶を終えて立ち上がりかけた父が、不意にもう一度口を開いた。
「はい」と同じく立ち上がりながら、先生は自分より１５センチは身長の低い父を見下ろす。
「夏休みに、学校説明会と体験入学のようなものがあると聞いたのですが…」
いきなりな話題に、私は「え？」と眉を寄せた。
「家内に頼まれまして…もし日程など書いた配布物なんかがあれば、いただきたいと」
「わかりました、１部でよろしいですか？　一度近隣の中学校に配

り終えていますので、再版して後日になりますが」
「あぁ、結構です。よろしくお願いします」
「ちょ、ちょっと待って！」
先生がいることも忘れて、私はその場で父の腕をがしっと掴んだ。
「何、学校説明会って！」
夏休みに、中学生たちが受験希望の学校を見に行ったり体験入学したりできる行事だ。私も中3の頃に行ったから、その内容は知っている。でも……。

「祥太郎が、この学校を受けるって言ってたから」
「聞いてない聞いてないっ！！」
瞬時に真っ青になりながら、私は頭を振った。
…冗談じゃない。姉弟で同じ学校なんて恥ずかしいことも多いのに、あの鋭い弟が先生を見たら色々と感づかれそうな気がする。

そう思ったけれど、父は当然私の抗議に構うつもりもないようだった。
「先生、今日はありがとうございました」
「お疲れさまでした」
互いに頭を下げる大人2人を、私は大きなため息をつきながら眺めた。

＊＊＊＊＊＊

父と共に家に帰った私は、まっすぐにリビングに飛び込んだ。
「お帰り」
ソファで英単語帳を開いていた祥太郎が、目線だけをこちらに返してそう言う。
「お帰り、じゃない！」
その単語帳をひったくって祥太郎を睨みすえた私を、キッチンで夕飯の支度をしていた母が目を丸くして眺めていた。

「私聞いてないんだけど！祥がうちの学校受けるなんて」
「言ってなかったっけ？」
「聞いてないよ！」
「でも、姉ちゃんの許可が必要なことでもないじゃん」
あっさりと言った祥太郎の言葉に、私はうっと反論に詰まる。

「祥が受験するって聞いてから、ずっとあの調子だ」
父がネクタイを緩めながら、母に苦笑い気味に言っているのが聞こえた。

「…姉ちゃんの高校が一番家から近いし、成績的にも合ってるんだよ」
「祥の成績ならもっと上の…都内の私立の付属高校とかいけるでしょ」
私の通う高校は県立高校で、県内では私立公立含めトップの進学校だ。私は無理して入った学校だけれど、祥の成績なら都内に出ればもっと上の有名大学の高校とかにいけるはず。
そう思って言ったけれど、祥は不満そうに唇を尖らせた。
「金かけて勉強するなんてバカらしい」

塾もいかずに常に学年トップを独走している祥の口癖だ。

「家から近い一番ランク高い高校が金のかからない県立高校なんだから、こんなイイ条件ないじゃん」

「でも…っ」

それでも尚抗議しようとすると、祥太郎は少し面倒くさそうに眉を寄せる。だけど私の顔をチラリと見て、それから何かを思いなおしたのかニヤッと笑った。そして、少しだけ内緒話をするかのように顔を寄せる。

「姉ちゃんの彼氏が教師だってことは黙っててあげるから、大丈夫だよ」

「…っ!!!?」

驚いて、私は弾かれたように顔を離して祥太郎を見た。

「…ななな、なんで……っ」

「『なんで』？　この前部屋で電話してるのが敬語だったから相手は年上だろうと思って。先輩って線もあるけど、俺に同じ学校来られたくないくらい嫌がるってことは教師かな…なんてカマかけてみたんだけど」

「…っ」

絶句した私の反応を確認してから、祥太郎はおかしそうに笑った。

…わが弟ながら、やっぱり侮れない…!!

悔しさを噛み締めながら唇を引き結んだけれど、祥太郎は構わずに「父さーん」とキッチンにいた母と話している父に呼びかける。

「ん?」

「姉ちゃんの担任、どんなだった?イケメン?」

「祥っ!!」

「?何でそんなこと聞くんだ?若い先生だなぁとは思ったけど」

「あら、もしかして眼鏡かけた若いイケメンの先生？　母さん入学式で見かけてちょっとトキめいちゃったのよねー」
ほのぼの口調で会話に入ってくる母が、ニコニコ笑っている。

祥という、強敵を未来に控えることになって…。

前途多難さにうな垂れた私は、母に「それは本城先生じゃなくてなっちゃんの方だよ」とツッコむ余力さえなかった。

6

考え事をしているうちに結局眠ってしまったらしく、気がついたら朝になっていた。充電器に入れていなかったので、携帯の電池は枕元で切れてしまっている。それにコンセントを差込ながら、私は支度をするために部屋を出た。

「おはよ」

ちょうど自分の部屋から出てきたらしい祥太郎と、鉢合わせする。

「……」

かけられた声を完全に無視して、私は階段を下りた。

「まだ怒ってんの？しつこいなぁ」

呆れたように言いながら、祥太郎が後に続く。祥の方はもう完璧に準備を終えていて、ちょうど家から出るところのようだ。

「あのねぇっ、お願いだから父さんとか母さんに余計なこと言わないでよ？」

「父さんが出張、母さんが夜勤の間に何回か外泊したこととか？」

「祥っ！！！」

頭をポカリと叩くフリをしたけれど、祥太郎はそれを笑いながら避けた。…全く、そのうち黙っている代わりにと何か物を請求されたりするようになるんじゃないだろうか。

「行ってきまーす」

朝から爽やかさ全開で玄関を出ていく祥と別れて、私はダイニン

グへと向かった。

「やっぱりメールの1通も来ないし」

身支度を終えて登校する途中、私は少しばかり充電できた携帯電話に電源を入れた。すぐにメールの問い合わせをしたけれど、来ていたのは智子と茜から、モモちゃんという同学年の女の子からのメールだけだった。

先生からは、予想通り来ていない。想定していた事実だけれど半ばへこんで、私は小さくため息を漏らした。

その日学校に着いた時、いつもより教室内が少し騒がしかった。女子がキャアキャア騒いでいるその声に、またしても少しだけ嫌な予感がする。

「おはよー。何の騒ぎ?」

私の後ろからほぼ同じタイミングで教室に入ってきた由実が、小首をかしげながら私に尋ねた。

「さぁ」

小さく首を捻ると、由実も肩を竦める。そして男子のように後ろ手に持っていた鞄を、一番前のすぐそこの自分の席へポンと置いた。

「あ、由実おはよー」
そんな由実に、クラスで騒いでいた女子が数人群がってくる。
「由実もさぁ、昨日いればよかったのにぃ」
「由実の大好きななっちゃんの勇姿が見れたよー。ぷぷぷ」
「何その含み笑い」
「いやいや、なっちゃんにあんな面があるなんて…。ま、ユッキーはマジでかっこよかったけどね」
「？なっちゃんが何？ユキサダには興味ないけど、なっちゃんは気になる」
前からなっちゃんのファンを自称している由実は、再び首を傾げながら女子たちを見つめ返した。そのままスルーしかけた私だけど…本城先生の名前が出たので、一緒にそこに立ち止まってしまう。

「昨日さぁ、三者面談終わった後だからもう夕方だったけど…男子がバスケの練習してたの」
「うん？」
恐らく、球技大会のバスケのメンツだろう。
「F組はなっちゃん交えてバスケの練習してさ、うちのクラスとも練習試合とかしてたんだけど誰かがユッキーまで呼びに行っちゃったからなっちゃんがヒートアップしちゃってさ」
「あー、目に浮かぶ。対抗心バリバリななっちゃんとそれを冷めた目で見てるユキサダが」
おかしそうに笑いながら、由実はそう相槌を打った。

「そうそう、そんな感じでさ。それが余計になっちゃんのやる気に火をつけたらしく、生徒の練習試合だったはずが何故かｏｎｅ　ｏｎｅやるとか言い出して」

「へー…」
「それがユッキーって高校の時バスケ部だったらしくてさぁ。もうドリブルする姿もシュートする姿も何でもかっこいいのなんのって」
「……へー…」
由実の相槌が、興味なさそうにワンランク落ちたので私は周りにバレないように肘で突いた。

「一方なっちゃんは、もうびっくりするくらい…」
誰かが言いかけると、他の誰かが同意する。
「うんうん、あの顔であの身長、まさかあんなに運動音痴だとは思わなかった…」
「えぇぇ!?なっちゃん運動音痴なの!?」
びっくりして目を丸くした由実に、女子たちは同時にコクコクと頷いた。

「初めはユッキーがすごすぎるのかと思ったけど、あれは筋金入りだね」
「意外…!」
「で、しかも勝てないと思ったなっちゃんは、最後の手段とばかりに助っ人を呼んで2対1という卑怯な手を…」
「誰呼んで来たの?」
「それがさぁ、なっちゃんのクラスの副担、苑崎先生だから皆大爆笑!」
「…あー更に目に浮かぶわー」
「でしょ?しかもなっちゃんがパスしたボールを苑崎先生が顔面キャッチしたりしてさぁ」
「うーわー」
「なんかもう大爆笑だったよ。ユッキーだって大笑いしてたもん」

「へー。ユキサダもおかしくて笑ったりすんだね」
ポツリと漏らした由実の感想は皆も同じだったのか、その場にいた全員が大きく頷く。
「ユッキーさぁ、笑うとかわいいよねー」
「あ、私も思った」
それぞれ感想を漏らす女子達の言葉に、その時ちょうどスピーカーから流れる予鈴が重なった。

散り散りに自分の席へ戻っていく彼女たちにならって、私も一番後ろの席へと向かう。

その間、考えるのはたった今聞いたばかりのことだけだった。
大笑いする先生なんて、私だってほとんど見たことないのに、とか。高校時代バスケ部だったなんて話すら聞いたことない、とか。
声にしてみればくだらない、些細な嫉妬心だった。

「おはよう」
丁度教室に入ってくる先生の声に、私は顔を上げる勇気もなかった。

＊＊＊＊＊

結局朝のＨＲの間、私はずっと下を向いたままだった。ウジウジ考えるのは性に合わないと分かっているはずなのに、一向に気分は

上昇しない。
「和美は考えすぎなんだよ」
由実はそう言うけれど、私だってこれだけ立て続けに良くないことがあったら気分も沈む。その一端に責任を感じているのか、いつもは叱咤激励する智子も今回ばかりは優しかった。

「白石」
2限目を終えた休み時間、ふと教室の後ろのドアから声をかけられた。顔を上げると、そこにいた私を呼んだのは先生本人で…。目が合って、私は思わず一瞬声を失ってしまった。

「はい」
返事をしながら立ち上がると、周りの女子たちも何事かと振り返る。
「次の授業の資料運ぶの手伝ってくれ」
そんな周りの子たちに一瞥すら与えることもなく、先生は構わずそう続けた。

だけどそんな先生に、女子の一部が「はいはいっ」と手を挙げる。
「ユッキー、なんならうちら運ぼうか？」
身を翻しかけていた先生は、その言葉にようやく彼女たちの方を振り返った。
「いや、白石だったら教えなくても資料の場所分かってるから」
「そっかー、和美は化学部員だもんねー」
少し残念そうに唇を尖らせた彼女は、そう言って私を見る。
「私も化学部に入部しとけば良かった」
舌を出しながら笑う彼女に愛想笑いを返しておいて、私は教室を出て先生の後に続いた。

人の目もあるから、特別会話が弾むわけでもない。そんなのいつものことだったはずなのに、今日はなんだか余計にへこむ。先生の大きな背中に隠れるように後ろを歩いて行きながら、漠然とそんなことを考えていた。

「あそこの棚に入ってる資料運んでくれ」

化学準備室に入るなり、先生はそう言って奥の棚を顎で指し示す。

「…はい」

短く返事をして、私はそんな先生の脇をすり抜けようとした。

…その時、だった。

「…お前、今日顔色悪…」

「…！」

言いかけた先生が、私の額の辺りに手を伸ばそうとした。恐らく、体調が悪いんじゃないかと思ってくれたんだと思う。熱でも確かめようとしたのか、伸びてきたその手に私は一瞬ビクリと肩を震わせた。

…さすがの先生もそれに気づかないはずがなく、少し目を瞠って手を止める。宙に浮いた手で指を握りこんで、引っ込めながら目線を合わせるように少しかがんだ。

「具合悪いのか？」

「…いえ！」

覗き込むように顔を近づけられて、私は慌てて首を振る。

……最低。避けたいわけでもないのに、体が自然と強張ってしま

った。自分自身に嫌気がさす。

先生は少し何か考えるようにこちらを見ていたけれど、私はそれを気にしないようにした。何もなかったかのように、再び奥へと歩き出す。

早く資料を手にしてここから逃げたかったのは、私の弱さと幼さ故だろう。先生の気持ちを疑いたいわけではないけれど、ここ数日で耳にした良くない話ばかりが脳内を蝕んでいく。

「…白石、昨日お前…」

入口の辺りに立ったままだった先生は、白衣を翻してそう何かを言いかけた。

「…え？」

棚に手をかけながら振り向いた私は、それでも先生の目を直視することはできなかった。何でも見透かされそうな黒い瞳より…少し下の辺りを見つめ返す。

「……いや、なんでもない」

そんな私に気づいたのか、先生はため息と一緒に一度言葉を飲み込んだ。

「……ただ、昨日あれから大丈夫だったかと思って」

「…？」

「弟」

「……あぁ」

曖昧に答えて、私は再び棚の方へ向き直る。昨日の面談中に珍しく私が祥太郎のことで取り乱したから気にしてくれたんだろう。

……でも……。

それなら、何で昨日そうやって声をかけてくれなかったの。今先生が資料運びなんて口実で私を呼んだのが心配してくれていたからだったとしたら…。私は、昨日のうちに先生から電話かメールが欲しかった。

今まで「先生とはこんなもの」とか「大人の男の人だし、忙しいし」と思ってメールが少ないことも気にしてなかったけど…。でも、私だって女子高生らしくそんな「普通な恋愛」がしてみたいと思うことだってある。

…だけどそれとは逆に、我儘だと分かりきっているようなそんなことを考えてしまう自分に、また自己嫌悪に陥るんだ。

「…大丈夫です、昨日はちょっと取り乱しちゃってすみませんでした」

資料を手に、私はそのまま踵を返す。支えを失った棚の扉が、自然と背後で閉まる音を聞いた。

「……」

先生が、私の様子に疑問を持っているのが視線で分かる。でもこ

こでポーカーフェイスを気取れるほど私は大人でも賢明でもなかった。子どもじみた自分の感情を抑えられず、沈みがちな気分を隠すことすらできない。

「……白石」

前を通ろうとした時、先生が再び私を呼び止めた。

ピタリと足を止めて、私はゆるりと顔を上げる。そちらを見上げようとしたけれど、やっぱり目線は正面から合わせることはできなかった。…だから、だろうか。煙草の煙を吐き出す時のように…先生が大きく吐息を漏らしたのがわかった。

「今週末のことだけどな」

言いかけた先生の言葉に、胸がドクンと大きく脈打った。

週末は…今回少しの例外はあったものの、一週間の中で唯一先生の家に行ってもいいと言われていた日で。車で外へ連れて行ってもらうこともあったけれど、いつも私が押しかけるばかりで先生から誘われたことは多分ほとんどない。それをあえてここで話題に出してくるくらいだから…いい話じゃないことは私も分かった。

一瞬でそこまで読み取って、私は先に口を開く。

「週末は…智子の家でテスト勉強することになってて…」

先生の口から、断られたくなかった。だから嘘をついてでも、先に断ろうと思った。それすらも、子どもっぽいせめてもの自己防衛だ。

「……そうか」
一言だけ呟いて、先生はもたれかかっていた壁から背中を離す。
「それ、よろしくな」
私の手にした資料を指し示して、話を変えるように短く言い置くと白衣を翻した。

7

「最近やけに沈んでる気がしたから何かと思えば…」

金曜日までの三者面談も特に何事もなく終わったらしいけれど、週末の土曜日にはなっちゃんは相当疲弊しているようだった。クラス全員の保護者を相手にしなきゃいけない辺り、教師の精神的疲労は尋常じゃないんだろう。いつもより深めに椅子に座り、子どものようにクルクルと回転させながら私の話を聞いてくれていた。

今日は部活もないのに数学準備室にお弁当を持ち込み、なっちゃんに人生相談をしたところだ。なっちゃんは仕事をする気はあまり湧かないらしく、いつも片手間に眺めている資料すら今日は机の上に置いていない。私の長すぎる話を聞き終えて、苦笑い気味にそうはじめに漏らした。

「笑いごとじゃないよなっちゃん」

眉を寄せて言いながら、私は玉子焼きをフォークで突く。あまり食欲は湧かないので、さっきから進んではいない。なっちゃんはこの後職員室で他の先生とお昼を食べるらしく、ただ私の話に耳を傾けてくれていた。ネクタイを長い指で弄びながら、もう一度苦笑する。

「要するに、だ」

背を向けていた椅子を再び半回転させ、なっちゃんはこちらを向いた。身を乗り出して机に頬杖をつき、私を見る。

「ミスコンに出るかどうかをユキに『どうでもいい』って言われて、クラスの連中には『普通男なら好きな女がミスコンに出たら自慢する』って言われた、と」
「…うん」
「加えて相澤先生やら菅原やら強力なライバル出現」
「……」
「電話やメールも他のカップルほどしないし、ユキに直接好きだと言われたこともないし」
「……」
「ユキがホントに自分のこと好きかどうか自信がなくなってきた、と」
私の話を要約したなっちゃんに、沈み気味に小さく頷き返した。言葉にされると余計にへこむ気がして、少しばかりうな垂れ気味になってしまう。

「お前さぁ」
吐息まじりに顔を仰向けて、なっちゃんは呆れたような声を出す。
「ホントにバカだな」
「…バ…っ」
繰り返しかけて、私は思わず絶句した。ダメ押しされるかのような痛烈な一言に、声をなくしてしまう。

「そんなに不安なら本人に聞きゃいいじゃねぇか」
「…何て？」
「『先生、私のことホントに好き？』って」
わざわざ声色を変えて言ったなっちゃんに、私は笑うどころか眉を寄せてしまった。

「…そんなこと聞けるわけないよ」
「何で」
「聞いたって、返ってくる言葉は目に見えてるから」
「…あぁ、だろうな。『アホかお前』で終わりだな」
「分かってるなら言わないでよー…」
うなだれる頭を抑えるように、私はなっちゃんと同じように机に頬杖を突く。そんな私をまたあの苦笑いを浮かべて見ながら、なっちゃんは少し考えるように口元に手をやった。
数秒の沈黙が訪れ、私はなっちゃんが次の言葉を継ぐのをただ待つ。そんな視線に気づいたのか、もう一度私を見てから「…仕方ねぇなぁ」と小さく呟いた。

「ちょっとだけ、答え教えてやる」
「…『答え』？」
「ユキから直接聞いてるわけじゃねぇから、ホントに正解かはわかんねぇけどな」
「…」
「ま、ユキの性格なら分かってるから十中八九当たってると思うけど」
「…何が？」
「何から聞きたい？」
意地悪い笑みを浮かべながら聞き返されて、私は再び眉を顰めた。
…『何から』……って…？

「お前さっき、相澤先生や菅原が強力なライバルっつったよな」
「…うん」

「ホントにそう思うか？相澤や菅原が？？」
念を押すように聞かれて、私は少し思案する。…確かに、本城先生は全く2人を相手にしていないように見えたけれど…でも、私としては彼女たちのあのたくましさが脅威なんだ。
「ユキさぁ、あいつらに結構冷たいだろ。…いや、菅原は生徒だから明らかに邪険にはしねぇか？」
「……そうかも」
相澤先生には、結構私ですら恐ろしくなるくらいに冷たい感じだった。

「俺から見りゃそれだけでユキがお前のこと好きな証拠だけどな。あいつお前には基本甘すぎる」
「…！？どこが…！？結構冷たくされてるんだけど」
「『ツンツン』と『ツンデレ』は大違いだぞ、白石」
意味の分からないことを言うなっちゃんだけど、顔は大真面目なのでツッコミようがない。

「あと、メールや電話が普通の高校生カップルに比べて少ないのはしょうがない。あいつの性格だから」
「……うん」
それは、私も分かっているつもりだった。だから自分の我儘だということも十分理解している。
「『好きだ』って言わないのも、あいつの性格だからなぁ。昔女遊びしてた時の、どうでもいい女には望まれるままいくらでも言ってたんだろうけど」
「……そういうものなんだ…」
「本気で好きなほど言わないタイプだろ、あいつ」
「…それは…『釣った魚には餌はやらない』的な？」
「釣……。…お前、たまにすごいこと言うよな」

今度はなっちゃんが一瞬言葉を失い、それから呆れたように苦々しい笑みを浮かべた。

「違う。単に極度の照れ屋だから」
「先生が？」
「だからツンデレタイプだろ」
「……うーん…」
首を捻って、私は納得できずに腕を組む。なっちゃんの方は、そんな私の反応を気にも留めていないようだったけれど…。

「あと、ミスコンのことだけどな」
「…うん」
「男なんてな、大人になったって子どもなんだよ。高校生なんて尚更ガキだ。そんな奴らの言うこととユキの思考回路を一緒にしない方がいいぜ」
「……ん？」
「はい、ヒント終わり。名取先生の恋愛相談終了～」
「え、ちょっと待ってなっちゃん！」
「ダメ。時間切れ。俺これから苑崎先生と昼飯なんだわ。この前派手にボール顔面にぶつけたから詫びに奢る約束してんだ」
「えぇ～」
「代わりに、今日夜付き合ってやるよ。ユキに先に断ったってことは、どうせ空いてんだろ？」
「…うん…でも私、テスト前なんだけど…」
「んな状況でテスト勉強しねぇだろお前は」
「…うっ」
さすがになっちゃん。私の行動パターンはお見通しらしい。

「夕方5時に、お前の家の近所まで迎えに行くから」
こちらの返事はお構いなしとでも言うように、なっちゃんはそう言い置いた。

＊＊＊＊＊

なっちゃんに指示されたのは、「私服は少なくとも20歳くらいに見えるそれなりの格好」だった。確かに高校生を連れ歩くのは何かと問題だろうから…20歳くらいに見える、という指示は分からなくもない。
でも、「それなり」というのはどういうことだろう?どこへ行くのか聞いておけば良かった。
仕方がないので、私はどんなところへ行っても浮かない程度におしゃれをして5時を待つことにした。

チューブトップの上に薄手のカーディガンを羽織って、玄関でミュールを履いているとちょうど祥太郎が帰ってきた。
「出かけるの?彼氏と」
「違います」
余計な一言を聞いてくる祥に強い口調で返して、私は小さなバッグを手にドアを開いて外へ出る。

「んー」
まだまだ外は明るく、空が高い。大きく伸びをしてから、私は待

ち合わせの場所へと向かった。

約束の場所は前と同じ、うちの近くのレンタルショップだった。必要以上に広すぎる駐車場に、見慣れた車が停まっている。それを見つけて駆け寄りながら…その時初めて、私は少し考えてしまった。

「…どうした？」

近づいてきた私に助手席のドアを開けてくれながら、なっちゃんがそう尋ねる。そのドアに手をかけて…中に乗り込まないまま、私は遠慮がちに口を開いた。

「なんか、いいのかな…と思ってしまって」

「は？何が」

「いくらなっちゃんと先生が仲良しでも、先生に嘘ついたのに男の人と2人で出かけるっていうのも…」

なんだか、先生に対する裏切り行為のような気がしてきた。たとえば逆の立場だったら…嘘をついた上で女の人と出かけられたら絶対に嫌だと思う。

「貴弘と2人きりじゃなきゃいいんじゃない？」

不意に、第3の声が降ってくる。バッと声のしたその車の後部座席に目をやると、そこには笑った2人組がいた。

「修司さん！理沙さん！」

「久しぶりー、和美ちゃん」

2人の眩しい笑顔に、私も思わず自分の顔がパァッと晴れやかになったのがわかった。

「よし、分かったら乗れ」
なっちゃんに促されて、私は今度はためらいなく助手席に乗り込んだ。

久しぶりに会って、妊婦である理沙さんの体調も気になったけれどとても元気そうだった。
修司さんも相変わらずで、今日は2人もいつもよりよそ行きな服装だ。なっちゃんに至ってはきっちりとスーツを着ていて、尚更どこへ行くのか分からない。修司さんがここにいるということは、いつものジャズバーではないのだろうということだけは分かった。

どこに行くのか尋ねても、返ってくるのは意味ありげな3人の笑みだけだった。そうこうしているうちに辿り着いた場所に、私は目を丸くする。車で一時間ほど走ったところにあったそこは、顔をあお向けないと全部見渡せないほどの高い建物。

「うわぁ…」
豪華な門を車でくぐって、建物の前にある車寄せで滑らかに車体が止まる。完全に「おのぼりさん」状態の私は、キョロキョロとその大きなホテルを見上げた。
「かわいいなぁ、和美ちゃんは」
穏やかに笑って言う修司さんにエスコートされながら、私は緊張気味に中に入った。

「なっちゃん、ここで何かあるの？」
後ろを振り返りながら尋ねると、車をホテルマンに預けたなっちゃんが笑う。
「このメンツで来たら大体想像つくだろ」
「ジャズライブ！？」
ぱぁっと目を輝かせて言うと、なっちゃんは「ご名答」とニッと唇を持ち上げた。

ライブハウスやバーでのジャズは何度か聴いたことはあるけれど、高級ホテルでは初めてだった。広すぎるラウンジにステージがあり、吹き抜けの上階からもそこが見渡せる。既にそこではライブが始まっていた。ステージではピアノ・ベース・ドラム・サックスのカルテットが演奏している。

「あ、この曲好き」
先生に借りたお気に入りのＣＤに入っていた曲をちょうど演奏していて、私は思わず頬を綻ばせながら耳を傾けた。
そして修司さんに促されるまま、近くのテーブルの椅子に座る。

アルトサックスの女性は、艶やかな音を会場に響かせていた。ライブを聴きにきたわけではなかったらしい普通の宿泊客も、足を止めていく。ソロと曲を終えるたびに沸き起こる拍手の嵐に、微笑んだその表情は見るものをも魅了しそうだった。

「すごい、かっこいい…」
数曲をあっという間に終えたそのバンドは、穏やかな余韻を残してステージを去って行く。今日はいくつかのバンドが入れ替わりで演奏をするらしく、ホテルのスタッフらしい人たちが次のバンド用にマイクの位置を直していた。

「和美ちゃんはバラード系が好きだね」
お酒を飲みながら、修司さんが言う。
「アップテンポも好きですけど、どっちかっていうとしっとりめが好きです」
ノンアルコールのカクテルを一口飲んで、私も笑って応じた。…まさにその時、だった。

「…何やってんだ、お前」
不意に、上から降ってきた声。

驚いて後ろを見上げると、そこにいたのは本城先生だった。ビシッとしたスーツに身を包み、煙草をくわえたままこちらを見下ろしている。
「先生!?」
驚いて目を丸くした私とは裏腹に、3人はニヤニヤと笑いながら「よ」と手を挙げて先生に挨拶した。

「…え、もしかして…先生も出るんですか?ライブ」
「じゃなきゃこいつらがわざわざテスト前にお前連れてこねぇだろ」

「……そうですよね…」
手にしていた携帯灰皿に煙草を押し付ける先生の言葉は、やはり少し冷たい気がする。…それはそうだろう。智子とテスト勉強するから、と嘘をついてしまったんだから。

「ユキ、そろそろ行こうよ」
ちょうどその時、近くを通った女の人が先生にそう声をかけた。その声に顔を上げた先生が、煙草を灰皿のケースに押し込んで「あぁ」と小さく返事をする。どうやらその女の人は、今日先生と一緒にステージに上がる人のようだった。２０代半ばくらいの…ドレスアップしたキレイな人。

「ケイコ」
先生の低い声が、その人を呼ぶ。少し前を歩いていたケイコと呼ばれた人が、その声に振り向いた。

……呼び捨て…。
くだらない嫉妬がまた胸の中でざわめき始めて、私は膝の上で拳を握った。

「なに？」
「曲目変えてくれ」
「えぇっ？今から？」
「今から」
眉を顰めるケイコさんに、あっさりと答える先生。
「何よー、何の曲にすんのよ」
少し不満そうに聞き返しながら、ケイコさんは先生と一緒にステ

ージの方へ向かっていく。周りのざわめきもあるからお互いの声が聞こえにくくなったせいだろうけれど、先生がケイコさんの耳元に少し口を寄せて何かを答えていた。

「…っ」

その2人の後ろ姿に、私は唇を噛み締める。

私のそんな様子に気づいたらしい修司さんが、ポンポンと頭を撫でてくれた。

その優しさと気遣いが嬉しかったけれど、何だか余計に空しくなった気もした。

8

先生が去った後、私の隣に座っていた修司さんが肩を竦めながらなっちゃんに言った。
「なんかユキ、今日機嫌悪くない？」
「ん～？」
私と同じくノンアルコールのカクテルを飲んでいたなっちゃんが、首を傾げながら修司さんの方を見る。
「…あぁ、まぁな。多分相当怒ってるから」
何気なく言ったそんな一言に、私は余計に萎縮してしまう。

…そうだよね…いくらなんでも嘘をついたことはバレてしまっているんだから、怒らないわけがない。

そう思って身を小さくしてしまったけれど、なっちゃんはそんな私に構わず言葉を継いだ。
「そういやぁな、白石」
「…え？」
力のない目を上げると、なっちゃんはしらっと恐ろしいことを言う。
「お前が今日言ってた話だけどな」
「…うん？」
首を捻って尋ね返すと、なっちゃんは何食わぬ顔で続けた。
「全部ユキに喋っちまった」
あまりに悪びれもせずに平然と言われたせいで、一瞬何のことかわからなかった。だけどその後で、ゆっくりと脳内が整理されていく。ようやくその意味を理解した頃には、「えぇっ！？」と大声を

上げてしまっていた。まだ演奏が始まっていないのがせめてもの救いで、それでも何人かがこちらを振り返ってしまう。

「なななな、何でそんなことすんの!?」

周りの目が気になったので声のトーンを落とし、私はなっちゃんに少し顔を寄せた。

「なんでって、お前。どうせ自分で言う勇気はなかっただろ」

「そうだけど…!」

「普段はここまでのおせっかいはしねぇ主義なんだけどな」

「……」

「ま、悪いようにはしねぇから安心しろ」

そう続けたなっちゃんだけど、私はガクリと肩を落とした。悪いようにはしないって…これ以上悪くなりようがない。嘘をついたことだけじゃなくて…先生は、きっと私が先生の気持ちまで疑うようなことを言っているのを怒っているんだ…。

「なんか話が見えないけど…要はユキ先輩はそれで怒ってるってこと?」

そこで初めて、理沙さんが口を挟む。ワインを飲んでいるわけでもないのに弄ぶようにグラスを回しながら、なっちゃんは小さく頷いた。

「『腹がたつ』って言ってたからなぁ」

「……っ」

「ただし、白石にじゃなくて『自分に』だけど」

「……え?」

続いたなっちゃんの言葉に、私は思わず茫然と目を見開く。

「ユキが黙って怒るんじゃなくてそうやって口にするの珍しいね」
「な」
横からの修司さんの言葉に、なっちゃんが小さく同意した。

「な、なっちゃん…それって…」
「まぁ後はユキとちゃんと話し合えよ」
「……」
驚きの余り目を瞠ったまま、私はなっちゃんの言葉を聞く。…先生が『自分に』怒ってるって……どうして…？

「それと…あぁ、丁度いいや。こいつに聞いてみれば？ミスコンの話」
なっちゃんが修司さんを顎で指し示して、私は「え？」と尋ね返した。要領を得ない返事の私に、なっちゃんは構わず修司さんに質問する。

「お前さ、自分の彼女がミスコンに推薦されたっつったらどう思う？」
「なに、和美ちゃんミスコン出るの？マジで！？」
「おい、質問に答えろ」
修司さんの目の前のおつまみをおあずけと言わんばかりに取り上げながら、なっちゃんは真面目な顔でそう言った。

「ミスコンだろー…ミスコン…そうだなぁ、正直ちょっと複雑かなぁ」
「…え？」

少し考えたらしい後の修司さんの返事に、私は再び目を丸くする。
それにニヤッと笑って、なっちゃんが「なぁ」と続けた。
「こいつのクラスの男連中がよ、自分の彼女がミスコンに出たら自慢だって言ってたんだってよ」
「はぁ、なるほど」
「ユキがさ、最初こいつがミスコンに出ること反対したらしいんだけど」
「うん」
「だからこいつとしては、自分はユキにとって自慢にもならない女なんだと…」
「ちょっと待ってなっちゃん！私何もそこまで言ってない…」
「でもそういうことだろ？」
「…うっ…」
一蹴されて、私は言葉を詰まらせる。一通り聞き終えた修司さんは、「なるほどねぇ」とどこか感心したように呟いた。

「まぁ俺も、高校生ぐらいの頃ならそう思ってたかもなぁ」
「だよな」
「…どういうこと？」
疑問に思った私の心を代弁するように、理沙さんが首を傾げながらそう尋ねる。
「つまりさ」
さっき取り上げられたおつまみのお皿をなっちゃんの手から取り返しながら、修司さんは続けた。

「周りに自慢したいっていうのはさ、まぁもちろん好きだからなのかもしれないけど…『彼女』が自分の『ステータス』だと思ってる可能性もあるってこと」

「…ステータス…？」
「そう。これだけイイ女連れてる、とか、これだけ美人に好かれてる俺、とか」
「…なるほど、若いね」
「だろ？高校生くらいの男なんてそんなんが多いと思うけどね」
相槌を打つ理沙さんに、修司さんは肩を竦めて答える。

「…まぁその男の性格にもよると思うけど…。少なくともユキはそういうタイプじゃないよ。だから、和美ちゃんの同級生の男たちの話はユキのことを考える上では参考にならないと思うよ」
「……」
「どっちかっていうと、ユキはねぇ…。和美ちゃんを見せびらかしたいというよりは、周りから隠したいタイプだと思うよ」
「なぁ」
椅子の背もたれに偉そうに腕を置いたなっちゃんが、苦笑い気味にそう小さく同意した。
「それは…やっぱり自慢にならないから、とか…まだ子どもだから、とか…？」
尋ね返した私の言葉はどうやら的外れだったらしく、修司さんは今度は声をたてて笑う。
「面白いね、和美ちゃん」
「…私は全然面白くないんですが…」
困ったように眉を寄せて言うと、修司さんは更に声高く笑った。

「まぁつまり、独占欲が強いんだよね、ユキは」
「……そんなバカな」
「…『バカ』って、和美ちゃん…」
相当私のリアクションが面白いのか、さっきから修司さんは笑い

っぱなしだ。
「少なくとも、彼女を見せびらかしたいと思う『自分の物』と勘違いしてる男より、よっぽど愛されてると思うよ」
ニッコリ笑って言った修司さんの言葉にかぶせて、なっちゃんが「逆によぉ」と口を開いた。
「お前だったら、どうなんだよ。ユキが周りの女たちに注目されたら」
「……え？」
「『あれが私の彼氏なのよ』って天狗になるか？それとも、余計なライバルを増やしたくないって思うか」
言われて思い当たったのは、ここ数日の女子生徒たちの態度だった。

先生が髭を剃っただけで…少し話しやすくなったというだけで…手のひらを返すように態度を変えた彼女たち。今まで敬遠していたはずなのにベタベタまとわりつく子すらいて、正直私はヤキモキさせられたのだけど…。
「…じゃ、じゃあ…なんでその後先生はミスコンのこと『どうでもいい』なんて言ったの…？」
「それはお前…」
答えかけたなっちゃんは、だけどすぐに何かを思いなおしたらしく口をつぐんだ。

「それは、後でユキに聞け」
そう言い直して、なっちゃんは視線を上げる。その目線を追うと、休憩を挟んでのステージのセットが終わったようだった。
先生はグランドピアノの前に座り、さっきのケイコさんという女の人はフロントのマイクの前に立つ。楽器を一切持っていなかったので、歌い手さんなのだと分かった。ドラムとベースの人もいたけ

れど、照明が当てられているのは先生とケイコさんだけだったから、最初はピアノとボーカルだけなのだろう。

ジャズマンたちの、曲に入る瞬間が私は好きだ。きっちりカウントするバンドももちろんあるけれど、先生は大体すっと息を飲んで、目配せと呼吸を合わせることでメンバーと曲に入る。その言葉のない、それでも心の通じ合っている感じが羨ましくもかっこよくも見えて好きだった。

滑らかで流れるようなピアノのイントロ。

すぐに入ってきた女性ボーカルの声は、澄んだように綺麗だった。私が好きな系統のバラード。一曲目にしてはしんみりした曲調だったけれど、すぐに心に染み渡っていく。

「和美ちゃん」

テーマを一度聴き終えた頃、修司さんが声をひそめて私に耳打ちした。

「ユキはさ、確かに無口な方だし…あんまり肝心なこと言わない方だけど、結構やることは分かりやすいと思うよ」

「…え？」

「知ってる？この曲」

「…いいえ」

知ってるかと尋ねられるということは、恐らく結構メジャーなのだろう。それでも私は聴いたことがなかったので、正直に首を横に振った。すると修司さんが、流暢な英語でそのタイトルを口にする。

「邦題は『あなたの傍に』。ボーカルの歌詞の意味は後で調べてみるといいよ」
「…？はい」
コクリと頷くと、修司さんは満足そうに笑う。
「愛されてるよ、和美ちゃん」

そう修司さんが言った時、ちょうど曲がピアノソロにさしかかった。いつの間に入っていたのか、控えめなベースとドラムも既に参加している。少し厚みの増えた音の中で、先生の早すぎる多彩な音がラウンジ中に溢れた。

修司さんに教えてもらったその曲名を心の中で繰り返し唱えながら、私は先生の弾き出す音に耳を傾けた。

＊＊＊＊＊

先生は、ライブが終わった後ステージに寄ったなっちゃんと少し話した後そのままどこかへ消えてしまった。メンバーと打ち上げなんかがあるらしい。それはきっと当然のことなのだろうし、結局私は先生と話をしないままなっちゃんたちとホテルを後にした。

「お前、本気で待つつもり？あいつ飲みに行ったら何時に帰ってくるかわかんねぇぞ？」

先生の家の前で車を下ろしてもらおうとしたら、なっちゃんにそう聞かれた。
「うん、大丈夫」
それよりも、今日先生と話したい気持ちの方が強かった。…ううん、今日すぐに話さないとその分距離が開いてしまう気がしたから。
「つってもお前…いくら6月だって言っても、ずっと外で待つわけに行かねぇだろ」
「…あ、大丈夫。鍵持ってるから」
聞かれたことに普通に答えたつもりだったけれど、私の言葉はどうやら爆弾発言だったらしく、3人は面白いくらいに飛び上がって見せた。…まるで漫画みたいだ。

「鍵!?鍵って、和美ちゃん!」
「ユキが!?マジで渡したの!?」
「お前それ盗んだだろ!絶対!」
理沙さん、修司さんの言葉まではまだよしとしても、最後のなっちゃんの言葉は聞き流せない。
「失礼な。ちゃんともらいました」
キーケースから取り出してみせると、3人は目を見開いた後「はぁー」と嘆息した。

「ユキがねぇ…今までの彼女に合鍵なんてほとんど渡したことねぇよな、あいつ」
「唯一もらった由香子さんだってもらうの苦労してたもんなぁ」
なっちゃんと修司さんの言葉に、私は目を丸くする。
「え、そうなんですか?」
そんなに苦労してもらった覚えもないのだけれど…。少し意外で、私は首を傾げた。
「由香子さん、頼んだけど全然もらえなくてしまいには隙を見て勝

手に合鍵作ってたもんな」
「…それは…犯罪なんじゃ…」
そう言った理沙さんは、思わずといった感じに苦笑いを浮かべる。

「じゃあまぁ、いいか。親にはちゃんと連絡しとけよ」
「はーい」
ちょうど車が先生のアパートに着いた。3人に今日のお礼を言って深々と頭を下げ、車を降りる。

「貴弘、ユキ先輩にメールくらいしておいてあげた方がいいんじゃないの？」
「ん？するかよ、そんなの。ユキもたまには少しぐらい驚いてうろたえりゃいいんだ」
「あっはっは、悪いなー、貴弘は」
バタンとドアを閉めたせいで、理沙さんとなっちゃん、修司さんがそんな会話をしていたことなんて当然私は知る由もなかった。

9

自分の家でもないので勝手にくつろげるわけもなく、私はちょこんとソファに座って待っていた。テレビをつけるのも何をするのも気が引けて、とりあえず座っているだけ。

「…あ、そうだ」

ふと修司さんに言われたことを思い出して、鞄の中から携帯電話を取り出した。

携帯のインターネット画面を開く。こういう時、パケットし放題のプランにしておいてよかったと思う。

「えーっと…」

さっき修司さんに教えてもらった曲名を声に出して思い出しながら、それを英字で打った。すぐに検索結果が出て、その膨大な量に驚いてしまう。

…相当メジャーな曲らしい。

「……」

検索結果で上位に上がってきている中から、日本語訳した歌詞や曲の由来について語っているサイトを探す。そうしていくつかのサイトを調べてみたけれど…いくつか解釈の違いがあるとはいえ、大体の曲のイメージは掴むことができた。

思い出すのは、ケイコさんに言った先生の言葉。

『曲目変えてくれ』
当初予定していた曲を変更して、先生が新たに加えたのはこの曲だったのかもしれない。

その次に思い出したのは、修司さんの言葉。
『ユキはさ、確かに無口な方だし…あんまり肝心なこと言わない方だけど、結構やることは分かりやすいと思うよ』
そう言ったその意味が、今ようやく分かった気がする。

「あなたのそばに」
そう日本語訳されるその曲は、英語の歌詞ならではの…少し恥ずかしくなるくらいのラブソングだった。

この歌詞の主人公は、よっぽど恋人のことが好きなんだと思う。
自分の胸を高揚させるのも喜ばせるのも、他の何でもない、恋人がそばにいてくれることだけだという歌詞。
「…キザ」
ふふ、と笑いながらも、携帯を眺める目に涙が浮かんだ。

何度も何度もその歌詞を読み返す。ふと、人の解釈の入った訳ではなくいつか自分で訳してみようかなという気にすらなった。

そうして何十分浸っていただろう。

やがて、玄関のドアがガチャガチャと音をたてた。鍵を差し込んで、回したのにドアが開かなかったことに焦ったのか、再びそこに鍵を差す音が聞こえる。

…そういえば、ここへ来て鍵をかけるのを忘れていた。

少し焦ったようにドアを開いた先生は、当然だけどそこに私がいると思っていなかったらしく部屋の中を見て大きく目を瞠った。

「おかえりなさい」

涙目になっていたせいで少しぎこちなかったかもしれないけれど、私はそう言って笑ってみせた。

「…お前…」

驚いた顔をした後、先生は瞬時に表情を厳しくする。

「いるならいるで、鍵くらいかけろ！」

急に怒鳴られて、私はビクリと肩を震わせた。

「…ごめんなさい…」

「何かあったらどうすんだよ…」

言って先生は、乱暴に靴を脱いで部屋に入ってくる。そんな先生の言葉に、私は自分の思っていた意味合いと違うものを読み取ってわずかに目を見開いた。

「危ないだろ」

ソファに座ったままの私のところまで来て、先生はぎゅっと抱きしめる。ふわっとお酒と煙草の匂いがしたけれど、私の目に溢れる涙の理由にはならなそうだった。

「ごめんなさい」

「…何もなかったんならいい」

「…違うの、そうじゃなくて」

先生の腕の中で、私はわずかに首を左右に振った。

「なっちゃんから…聞いたんですよね？」

「……お前が謝ることじゃねぇだろ」

そこでスッと私から離れて先生は立ち上がる。ネクタイを緩めながら目を逸らしたのは…バツが悪かったせいなのか。

「…先生、怒ってるの？」

「……いや」

「私にじゃなくて、自分に？」

「……」

なっちゃんに言われたことをそのまま尋ねると、先生は珍しく黙り込んだ。

「ごめんなさい。先生を疑ったわけじゃないんです。ただ…」

言いかけた私の言葉を、先生は片手を挙げて制した。

「…昔から…何も変わってねぇな、と思った」

ポツリとそう口を開いた先生の言葉に、私は「え？」と目線を上げる。だけど先生の方は決してこっちを見ようとはしなかった。窓の外を眺めながら…それでも本当はもっと遠くを見ているようで。

「昔から口数が足りなくて、変に誤解させたりしてた。それで離れるような女を追う気もなかったし、放置してきた」

「……」

「変わったつもりでいたけど、根本的にはやっぱり変われねぇもんだな」

自嘲するように笑う先生の横顔に、私は胸のどこかがズキンと痛んだのが分かった。きっとそれは先生の痛みに共鳴したんだと思う。

「…放置、しようとしました？」

「…お前を？まさか」

「じゃあやっぱり、先生は変わったんだと思います」

「……」

私の言葉に、先生はゆっくりとこちらを振り向いた。何の感情も映さないいつもの無表情が…少しだけ揺らいだ気がした。

「…和美」

「はい」

たまにしか、私を名前で呼ばない先生。真剣な表情で、ようやく私と目を合わせてくれる。ソファの前に膝をついて、私と目線を同じにした。

「一回しか言わないから、よく聞け」

こんな時でも俺様口調。でもそんな先生らしさが少し嬉しくなって、私は小さく頷く。そんな私の肩から流れ落ちた髪を一掬いして、先生は少し深めに息を吸った。

深呼吸のようなそれを吐き出した後、低い声が囁く。

「好きだ」

「…せん…」

どれほど望んでいた言葉か分からない。

気持ちを疑うわけではないけれど、それでもその「言葉」にはとても重みがあるからだ。

一瞬で嬉し涙で泣きそうになりながら、私は必死でぐっと堪える。そんな私の瞼に、先生がそっと唇を押し当てた。慰められているかのようなそれに、逆にまた泣きそうになる。

徐々に下りてくるその唇が、やがて私のそれと重なった。膝の上に置いてあった手を握る指が、温かい。何度か角度を変えてのその触れ合うだけのキスの後、唇を離すと先生は「…でもな」と小さく言った。

「お前も、悪い」

「……え？」

いきなり言われた意味がよくわからずに、私は目を見開く。握った手を先生が離そうとしたけれど、名残惜しかったので追いかけて掴んでみた。それに小さく苦笑した後、先生は眉を少しだけ顰める。

「俺だってこれでも少しは傷ついたんだ」

「…えーっと…」

もしかしたら、この前化学準備室で触れようとした先生の手に強張った反応をしてしまったことだろうか。そう思い当たったのが分かったらしく、先生は「違う、それだけじゃない」と見透かしたように答えた。

「今日の話。ホテルのライブに来るかって言おうとしたら、お前遮るように断りやがって…」
「えぇぇ！！あれお誘いだったんですかっ？」
「はぁ？じゃなきゃ何々だよ」
「…私はてっきり…週末断られるんだと思って、それならいっそ先手をと…」
「……おま…っいらねぇんだよ、そういう間違った方向の回転の速さは！」
絶句するように言葉に詰まった後のツッコミは、すっかりいつもの先生のような気がした。互いの行き違いに茫然とした後、何故か自然と顔を見合わせてしまった。…そして、思わず同時にぷっと吹き出してしまう。

「あとな、お前、携帯のことだけどよ」
私に手を握られたまま、先生は隣へ移動する。並ぶようにソファに座って続けた。
「電源切れてる間にかかってきた着信も後で知らせてくれるように、設定くらいちゃんとしとけ」
「……はい？」
「この前、一晩中電源切れてただろ。何回かけても出やしねぇし」
子どもを叱る親のように頬を抓る真似をしながら、先生は唇を歪めてそう言う。
「えぇぇっ？あの日電話くれてたんですか？知らなかった…」
「そりゃ知らねぇだろ、設定してねぇんだろお前」
「…というか、そんな便利機能があるなんて今知りました…！」
「…お前…っ、説明書くらい読め！」
携帯電話は、無料通話やらに惹かれて先生と同じ機種を先週買い直したばかりだ。先生はもうその機種を長く使っているので、そんな先生がそういう機能があると言うならその通りなんだろう。

…だからだ。
先生があの日化学準備室で、「昨日お前…」と何かを言いかけた風だったのは。

「…なんだか色々と申し訳ありません」
うなだれるように首を竦めて、私は必要以上の丁寧な口調でそう謝ってしまった。

やっぱりあの日、先生は心配して電話もくれていたんだ。なんだか今まで悶々としていた多くのことが、段々と紐解かれていく。その渦巻いていた不安もいくつかが自分の落ち度によるものだと気づくと、何だか本気で申し訳ない気分になってきた。

「以後気をつけます…」
「そうしてくれ」
…いつの間にか立場が逆転してしまった気がしなくもないけれど。まぁいいか、と思って、私は自分でもゲンキンだと思うほど明るい笑みを浮かべてしまう。

「先生、好きです」
「はいはい」
すっかり立ち直ってしまったらしい先生は、軽く私の言葉を受け流す。でも先生はこの方が「らしい」気がした。ニコニコ笑ってい

ると、先生もふっと笑う。
「お前、立ち直り早ぇなぁ」
自分のことを棚に上げて言う先生の眉を下げて笑うその顔は、学校じゃ滅多に見られるものではなくて何だか余計に嬉しかった。

「…あ」
だけど、ふと思い出す。解決していないことが…後一つ残されていた。

「先生、ミスコンのことなんですけど…」
その単語を出すと、先生がピクリと反応する。感情を映さないあの目に射抜かれそうになりながら、私はそれでも続けた。
「初めに、『引き受けるな』って言ったのは…私が先生にとって自慢できるような彼女じゃないから…？」
なっちゃんと修司さんの答えでは、先生はそういう考えをするタイプじゃないという話だった。それを確認するために、あえてそういう聞き方をした。
「…んなわけねぇだろ」
短く答えて、先生は吐息を漏らす。
「じゃあ、独占欲？」
小首を傾げて覗き込みながら修司さんの言葉を借りると、先生は本格的に呆れた顔をした。
「んなこと聞くか？普通」
「違うの？」
「……」
どうあっても答えてはもらえないらしい。仕方なく、私は質問を変える。

「じゃあ…その後急にミスコンのこと『どうでもいい』って言ったのは…何で？」
「『どうでもいい』なんて言ってねぇだろ。『もうどうでも良くなった』って言ったんだ」
「同じですよ」
「違うだろ、全っ然。お前、なんか最近拓巳に毒されてきてんじゃねぇか。似てきたぞ言動が」
「理沙さんは心の師匠です」
「…最悪」
本気で眉を寄せて、先生は呟いた。それでも手は離さないでいてくれるらしい。

「…ねぇ、先生」
「あーもう、何でもいいじゃねぇかよ、んなこと」
「…ちゃんと説明してくれないと…私変に勘違いしてまた傷ついちゃうかも…」
「……お前たまに本気で俺を脅すよな」
はぁーっとため息をついた先生が、降参したようにソファにもたれかかる。背もたれの一番上に後頭部を置いて、天井を仰ぎながら目を閉じた。その上につないでいない方の手の甲を乗せる。

「…最初は、確かに『余計なもんに出るな』って思った」
「……」
「だけど考え直した。ミスコンに出ようが出まいが…どいつがお前に惚れようが…関係ねぇ、って」
「『関係ない』？」

「…お前、また変な方向に誤解しようとしただろ」
「……先生の言葉の選び方が問題なんだと思います」
小さく反論すると、先生は痛いところを突かれたのか一瞬言葉を失った後再び目を閉じた。

「…つまり、だ」
言いにくそうに、言葉を途切れ途切れ発する。

「お前がどうしようと、誰に注目されようと…俺の傍にいてくれるならそれだけでいいって思ったんだ」

言われた言葉は、どこかで聞いたような…覚えのあるものだった。
…そうだ、さっき穴が開くほど眺めた日本語訳の歌詞。あの一曲のフレーズに、少し似ていたんだ。

「だから…ミスコンは『どうでもいい』？」
「言葉が足りなくて悪かったな」
不機嫌そうに言った先生は、言いたくないことを言わされたせいかプイと顔を背けた。珍しく耳まで真っ赤になっている気がしたのは気のせいじゃないだろう。

「先生」
全ての私の勝手な誤解が解けて、口元が思わず綻んでしまう。繋いだ手はそのまま、私はもう片方の手で先生の腕にしがみついた。

「好きです」
「それはさっき聞いた」

呆れたようにこちらを向いた先生の素直じゃない一言に、もう一度私は笑ってしまう。そうして少しだけ身を乗り出すと、今度はこちらからその唇にキスをした。

10

翌日目が覚めたのは、枕元に置いてあった携帯が低い振動を伝えたからだった。「うーん…」と寝ぼけたまま手を伸ばし、相手を確認すると由実だった。

「もしもし…」

いつもよりテンションもトーンも低い声で出ると、電話の向こうから少し呆れたようなため息が聞こえた。

『まだ寝てたん?』

言われて初めて室内の時計に目をやると、確かにもう「朝」というには日が高く昇りすぎていた。

「…どうしたの?」

段々と覚醒してくる頭で、私は髪をかき上げながら尋ねる。ベッドの上に上体を起こし、声のトーンは落としたまま。

『今からちょっと出てこれる?』

電話の向こうの由実が、私にそう聞き返してきた。

「どこに?」

『智子の家まで』

「どうかしたの?」

質問の応酬を互いに繰り広げて、私は首を捻る。智子の家まで…というのは、どういうことだろう。

『実はさ、詳しくは後で話すけど…智子がユキサダの家に行きたい

んだって』
「…えぇっ？何で？」
『なんか色々と責任感じてるらしいよ。今回の和美とユキサダの一件に』
「……そんなの…気にしなくていいのに」
『まぁとにかく、本人の気に済むようにさせてやってよ。謝りに行くって言ってるから』
「先生はそんなのいいって言うと思うけど」
『まぁまぁ、和美はユキサダに会う日が一日でも増えたと思って喜んでればいいよ』
「…そう言われましても…」
『で？何時に出てこれる？』
こちらの言い分はまるで聞く気がないらしい。あっさりと話を引き戻して、由実はそう聞いてきた。

「…何時、というか…」
声を潜めたまま、私はチラリとベッドの隣に目をやる。そこで先生は、タオルケットに包まって静かに眠ったままだった。
「私、今先生の家にいるんだけど」
『なにぃぃぃ！？』
あまりの由実の大声に、私は思わず携帯電話を耳から離した。それでもその声は響いていたのか、電話を通り越して先生の耳にも届いたようだ。ゆっくりと目を開け、まだ覚醒しきらない瞳をこちらに向ける。「ごめんなさい」と目線で謝って、私はベッドから抜け出た。

『じゃあ、今から行くから！智子と茜と！』
「…いや、ちょっと待ってこっちの話を…」

『智子んちからユキサダのとこなら15分もあれば着くから。じゃあね』

「…ゆ……切られた」

一方的に切られた通話。手にした携帯電話を恨めしげに見つめると、後ろから先生が「…誰」とベッドの上で目を閉じたまま聞いてきた。

「由実です。今から皆で来るって」

「…どこに？」

「ここに？」

小さく首を傾げながら答えると、寝転んだままこちらに目線をやった先生は訝しげにその目を細める。

「何しに」

「…さぁ」

謝りに、とここで私が言っても先生は拒否するだけだろう。また由実に電話して押し問答したりここへ来た時に追い返すのも面倒だ。仕方なくとぼけて返して、私は急いで15分以内に準備することにした。

「……」

先生も諦めたのか、ベッドに上半身を起こす。寝起きの頭を掻きながら、ベッド近くのテーブルに置いてあった眼鏡をかけた。

「ったく、朝っぱらから…」

「先生、もうすぐお昼みたいですよ」

苦笑い気味に言うと、先生は部屋の時計を振り仰ぐ。そして時間を確かめると小さく肩を竦めて部屋を出て行った。

私もクローゼットの中にある引き出しを一段開けて、自分の服を取り出す。前に泊めてもらった時に、服やら何やらを一式置いていかせてもらっていて良かった。昨日のワンピースとは違うラフなシャツとジーンズを取り出して、パジャマ代わりに着ていたキャミソールを脱ぐ。

「コーヒーぐらい飲む時間あんだろうな」

リビングの方から、先生の声がする。

「15分で着くって言ってました」

「…最悪」

先生が普段から家をキレイにしているから、改めて掃除をする必要がないのがせめてもの救いだ。身支度だけでも15分はあっという間で。超高速で支度を終えた頃、予告通りにチャイムが鳴らされた。

「おはよー、和美。ついでにユキサダ」

「…ついでか」

元気良く挨拶して、由実は遠慮なく靴を脱ぐ。煙草に火を点けながら、先生は小さく応じた。

「お邪魔しまーす」

朗らかに言いながら、由実はリビングに入ってくる。その後ろに着いてくる茜が、私に大きな袋を渡してきた。

「朝ごはん。まだ食べてないんでしょ?残りものだけど」

「ありがとう!うわぁ、おいしそうなサンドイッチー。どうしたの?」

「今日智子の家に泊まったから、朝起きて皆で作ったの」

言って茜も部屋へ入りながら、先生に「おはようございます」と丁寧に挨拶する。茜はああ言ったけれど、恐らくこれを作ったのはほとんど茜だろうと思う。

「…あれ？ねぇ、智子は？」
「え？いない？」
2人の後に智子がついてこないのを不自然に思って、私は尋ねた。
その声に振り向いた由実と茜が、「あれ？ホントだ」と首を傾げる。
「智子ー？…うわっ」
どうしたのかと玄関の外を覗くと、ドアを開いた辺りにちょこんと智子が小さくなって立ち尽くしていた。
「どうしたの、入らないの？」
聞くと、智子は合わせる顔がないという風に目線を逸らす。
「私…やっぱりちょっと…」
「いいから、とりあえず入ろうよ」
よっぽど責任を感じているらしい智子に思わず苦笑して、私はその手を引いた。

中に入ると、先生が由実に催促されてコーヒーを淹れていた。それを手伝おうとしてキッチンに入る私についてきて、智子は先生の前に立つ。
「…本城」
「なんだ。『先生』をつけろ」
ギリギリなんとか数のあったマグカップを出しながら、先生は無表情のまま応じた。
「…なんか色々と…ごめん。和美の不安を煽るようなことしちゃって…」
「してないよ、智子」
遮るように私が言ったけれど、智子は首を振る。
「裕貴も、気にしてた。和美に悪いことしたって…」
「……まぁ、気にすんな。何があったかよく知らねぇけど」

私からその辺の話を何も聞いていない先生は、何食わぬ顔でそう続けた。

熱いコーヒーをカップに注いで、由実と茜、智子に順番に差し出す。

「悪いのはすぐグチグチ考えるこいつだしな」

親指を向けて私を指し示す先生。

「えーっ、先生、昨日は『俺が悪い』とか言ってたじゃないですか！」

「そーだっけ」

「そうですよ！」

思わず食いついてしまった私に、すっとぼける先生。そんなやり取りを見て、智子はついにぷっと吹き出した。

「あー良かった。なんか謝ったらスッキリした」

「……たくましいな、お前」

「当たり前じゃん。そういや本城の部屋きれいだねー」

「『先生』をつけろ」

そこから智子たちは1時間ほどコーヒーを飲みながら居座り、やがて元気良く帰っていった。

「…何しにきたんだ、あいつら」

帰った後の片づけをしながら、先生は小さく呟く。

「謝りに来た…はずなんですけどね」

「いやあれは『家庭訪問』くらいの軽い気持ちだろ、絶対」

文句を言いながらも、先生はちゃんと相手をしてくれる辺り優しいと思う。そんな風に思ってふふ、と笑うと、先生は訝しげに首を

傾げるばかりだった。

「…明日、クラスの奴らにミスコンの返事もしてやれよ」
ふと、流しでカップを洗う私に先生がそう言う。
「…いいの？」
「あぁ」
短く答えて、先生は近くの壁にもたれて煙草の煙を吐き出した。
「ありがと、先生」
「お前も大変だよな。ホントはあんまり出たくねぇんだろ？」
「……うーん…」
思いがけないことを言われて、私は思わず苦笑いを浮かべる。…やっぱり先生は、私の性格を良く分かっているらしい。こうして熱心に頼まれでもしなかったら、絶対に出ない。あまり目立つような場所に出るのは好きじゃないからだ。
「でも、クラスのために頑張ります」
スポンジを持ったままガッツポーズを作ると、先生は「あ、そ」と短く答えただけだった。

「先生は、もちろん投票してくれますよね？私に。さすがに一票も入らないと寂しいもん」
「そりゃーお前よりイイ女がいなかったらの話だな。いたらそっちに入れる」
「ひど…っ」
「心配すんな、修司ならお前に甘いから無条件で入れてくれるぜ、きっと」

「修司さん、来てくれるのかなぁ学園祭」
「お前がミスコン出るなら飛んでくるだろ」
「あはは、なんかお父さんみたい」
「…お前、そこは『兄』ぐらいにしといてやれよ」
はは、と珍しく声をたてて笑った先生につられて、私も笑う。だけどその瞬間、『お父さん』という単語が出たせいで「そういえば」と思い出したことがあった。

「…先生、この前の三者面談のことですけど」
「あ?…あぁ、まさか父親が出てくるとは思わなかったな」
「先生って、ああいう時も緊張とかしないんですね」
相手が知らないとは言え、彼女の父親を前にしているというのに…。普通は、手に汗握るくらい緊張するものなんじゃないだろうか。逆に私が先生のご両親に会う日が来たら、きっと食事も喉を通らないくらい固まってしまうだろう。何だか自分でも不思議なのだけれど、あまりにも平然としていられる先生にちょっと寂しさがよぎった。

「……」
そう思って言った言葉だったけれど、少し目を丸くした後先生は煙草を唇から離した。手近の灰皿にそれを押し付けて消しながら、肩を竦める。
「昔から顔に出ねぇとは言われてたけどな」
「…え?」
「緊張しねぇわけねぇだろ、あの状況で」
「…嘘っ、絶対してなかったもん」
「お前…っ、嘘ってなんだ嘘って」
だって、先生が緊張しているのって見たことがない気がする。あ

んなに大勢の前で演奏する時だって緊張どころか…むしろ楽しそうにしてるし。そう言うと、先生は思わずといった感じに苦笑を漏らした。

「ピアノとお前の父親とは全然違うだろ」
「そうかな」
「そうに決まってんだろ」
「良かった。先生にも人間らしいところあったんだ」
「…お前、たまに顔に似合わないびっくりすること言うよな」
言いながらも、先生は笑っていたので私もつい口元をほころばせた。

こんな軽い意味のない会話のやり取りだけで、幸せだなぁと思う。願わくばいつまでもこんな日が続けばいいけど、もしかしたらそう人生うまくはいかないかもしれない。

それでも、ずっと先生の傍にいたい。何があってもその試練を乗り越えて、より絆が深くなるくらいに強くなりたい。

…そう、心から思った。

「よし、飯食ったらテスト勉強するか」
「……うわ、今一気に現実に引き戻されました」
ガクリと肩を落とした私の一言に、先生は大きな声をあげて笑った。

君だけ　ｓｉｄｅ：Ｙｕｋｉｓａｄａ

昔から教師になりたかったわけじゃない。
親とは同じ道を歩きたくはないと思っていたし、自分には何かやりたいことが他にあるはずだと思っていた。だけど縁と運命というのは不思議なもので、いくつかの人間との出会いを経て今ここにいる。結局俺は、自分の父親と同じ高校教師の道を選んでいた。

子どもを相手するのは苦手だし、その対象が高校生になったからといって急に変われるものでもない。貴弘ほど同じ目線で人懐っこく話をしてやることもできないし、苑崎先生のようにただいるだけで癒し系になれるわけでもない。
一応教師なりに生徒と接しようとは思っているけれど、それは「邪険にしない」程度で優しさ溢れるものではないだろう。だがその反面で、一線引いているようなその状況だからか、生徒の性格はかなり的確に把握できる方だと自負している。

「ユッキー、そんでこの子がさぁ」
最近、何が変わったのか生徒の方から寄ってくることが多くなった。こうして化学準備室に用事もないのに遊びに来る奴もいる。今日来てるこいつらは1年の生徒で、俺が化学を担当しているクラスの生徒だ。いつも5人組で固まっていて、今日も例外ではなかった。

くだらない雑談を繰り広げながら、大声を上げて笑う。それが嫌だとか出て行けとまでは思わないが、興味があるはずもなく俺は適

当にあしらいながら自分の仕事をしていた。だがこいつらに言わせれば、「ユッキーは素っ気無いとこがいいよね」らしい。…逆効果だ。

「ユッキーさぁ、好きな食べ物何？」
「食えるもん」
「あははっ、甘いものとかは？」
「まあまあ」
「えー、意外っ。絶対嫌いだと思ってた」
「なんだその『絶対』って」
そんなどうでもいいような話の中、俺はふと部屋の隅に視線をやる。5人組のうちの一人が、さっきからずっと一人でそこにいた。ポツンと椅子に座って、こちらを見向きもせずにいる。

苗字は…確か、高柳。下の名前までは知らない。
いつも5人組で来るとは言っても、高柳だけは常にこの調子だった。俺に興味がないのか、はたまたイヤイヤつき合わされているだけなのか…。どちらかは定かではないけれど、いつもこんな感じだ。
だけど、俺は確信に近い思いで気づいてしまっていた。こいつのこの態度が、何かに対する「反発」ではないことを。…むしろ、自分に気づいて欲しがっている「サイン」だ。

「じゃあさ、彼女はいるー？」
5人組のうちの一人、一番目立っている奴が嬉しそうにそう聞いてきた。…こいつに至っては、悪いが名前も覚えていない。だけど

その質問をした時、一瞬だけあの高柳も視線をこちらに向けたのが分かった。

「いる。だったら何だ」
あっさり答えた俺に、それもまた意外だったらしく連中は一瞬息を飲んだ。
「へ、へー…」
「そうなんだ…ユッキーってそういうとこ見せないから、いないと思ってた」
「ねー彼女、どんな人？」
一瞬の驚きを取り繕うようにまくしたてるあいつらに、俺は「さぁ」と曖昧に濁して答える。
「お前らそろそろ帰れ。予鈴鳴るぞ」
あしらうように言って、俺は再び書類に視線を戻した。

そもそも、昼休みや放課後ならともかく2限終了後の休み時間という短い時間によくこんなとこまで来るな、と思う。確かに2限の休み時間だけは他より5分ほど長いけれど。

「そだね。そろそろ行こっか」
時計を確認して言いながら、連中は立ち上がる。
「じゃあね、ユッキー」
「また来るねー」
「用がなきゃもう来んな」
しっし、と手を振って追い払う仕草をしたけれど、それもまた「きゃはは」と盛り上がりのネタになるらしい。…正直、どうすれば

静かに過ごせるのか見当もつかない。

「…何だ、お前は帰んねぇのか？」

あいつらが出て行った後、同じように立ち上がったはずなのにまだ部屋に残っていた高柳。それに気づいて、俺はそう尋ねた。ポケットから出した煙草に火を点けると、高柳は黙ったまま数歩こちらに近寄ってくる。

「…先生」

やがて、すぐ傍まで来た高柳が小さく俺に呼びかけた。授業以外で聞くことのない声は、思ったより高く控えめだった。

「何」

目を細めて煙を吐き出し、聞き返す。長い髪を肩の辺りで弄びながら、高柳は無表情のまま口を開いた。

「…教えて。先生の彼女ってどんな人？」

「授業始まるぞ」

「そんなの別にいいよ。どんな人かくらい教えてくれたっていいでしょ？」

「……何で」

「好きだから」

平然と言われて、俺は思わず座った態勢のまま高柳の顔を見上げてしまった。

無表情だけど、真剣な目。

そして言われた言葉の意味を理解すると、こいつの出す「サイン」

の意味をようやく正しく解釈できた気がした。

「…私、本気だよ」

答えない俺に、高柳は先に言葉を継ぐ。

「あの子たちみたいにミーハー感覚じゃない。現に髭剃る前から先生のこと好きだったし」

あいつらが出ていったドアを少し振り返りながら…そんなことを言った。

「私は、違う。あんなに子どもじみてないし、あんな一時的な気持ちと一緒にされたくない」

「……」

臨機応変、という言葉がある。

それと同じように、人間に対してもそいつの性格やら何やらを考慮して対応を変えるのが望ましい。そう思ったから俺は火を点けたばかりの煙草を灰皿に押し付けた。高柳には真剣に向き合うのが正しいと思ったからだ。

…多少、傷つける結果になっても。

「俺の彼女がどんなんだか知りたいって言ったっけな」

椅子から立ち上がって、俺は高柳と目線を合わせる。…と言っても立つと俺の方が2～30センチは高いのでそれでも差はあるのだけれど。

「『普通』。ただそれだけ」

「…っ」

俺の答えを受けて、高柳は初めて目にカッと感情を露にした。怒ったのか、キッと俺を睨みつける。

「そんなわけない。先生が選んだんだから、他の子と違う何かがあったはずでしょ？」

「…そりゃあ人間だからな。誰しも個性はある。だけど…」

机に座るようにもたれかかると、軽くかがむような態勢になりようやく高柳と同じくらいの目線になった。

「少なくとも、あいつは自分のこと『特別』だなんて思ってない。普通だって思ってる。自分の友達を『子どもじみてる』なんて言わねぇし、むしろ自分がまだ『子ども』なんだって思ってる。その事実に悩んだり葛藤したりするけど、それを乗り越える強さも持ってる」

「…彼女と私とは違うって言いたいの？」

「お前、自分の友達のことバカだと思ってるだろ」

言うと、高柳は更に俺を睨みつけた。

「あいつらと自分は違う、特別な存在だって思ってるんだろ。だけどな、もっとよく見てみろ。悩み方が違うだけで、あいつらだってちゃんと考えてる。お前が思ってるほど何も考えてないわけじゃねぇよ」

「…私に説教する気？」

「これを説教と捉えるかアドバイスと捉えるかはお前次第だな」

話は終わり、というように、俺はもたれかかっていた態勢を直した。再び胸のポケットに手を入れて、煙草を取り出そうとする。

…いや、正確には、取り出すことはできなかった。

「!!?」

グイっと強い力でネクタイを引っ張られ、驚いた瞬間にはもう遅かった。高柳の顔がすぐ傍にあり、俺を睨みつけていた目が閉じられるのを見る。

反射的にマズイ、と思ったその時、俺が行動するより早く部屋のドアがドンドンと勢いよく叩かれた。その音に驚いて、高柳はパッと俺のネクタイから手を離す。

「本城先生、教頭先生がお呼びです」

ドアも開けずに向こうから、男の声が俺を呼んだ。

「あ、あぁ、今行く」

高柳の手から離れたネクタイを直しながら返事をすると、そんな俺の横をすり抜けてあいつはそのまま乱暴な音を立てながら部屋を出て行った。

俺を呼びにきた誰かは、もうそこにはいなかったようだ。走り去る高柳の足音を聞きながら、俺は深々とため息をついた。

＊＊＊＊＊

俺を呼んだあの男の声には覚えがあったから、教頭が呼んでいるというのは嘘だろうと察しはついた。それでも本当だった時のことを考え、念のために職員室の教頭の元へ向かう。

「私が？呼んどらんよ」

不機嫌そうに俺に答えるのは、俺とこの人が自他共認める犬猿の仲だからだ。と言っても、嫌っているのは向こうの一方的なものであって、俺からしたら口うるさく言われなければどうでもいい存在だ。

仕方なく、そのまま化学準備室へ戻る。今日は3限も4限も空きコマなので、部屋で残った仕事を片付けよう。そう思って没頭していたら、すぐに昼休みを迎えた。

「失礼します」

昼休みになってすぐ、3年の都築が俺の元を訪れた。成績も良く、性格もいい男子生徒だ。

最近失恋したと専らの噂だが、本人は暗い顔することなくいつも通り明るく振舞っている。周りの空気を読む、頭の回転も速い生徒だった。

「…速過ぎるのも問題だな」

小さく呟くと、都築は「は？」とこちらを振り返る。

「いや、なんでもない」

手を左右に振り返して、俺は手にしていた煙草に火を点けた。

都築は今日の部活の当番だ。当番になった日はその日実験で使う器具の準備と確認に来ることになっている。それでここを訪れたのだろう。

「都築」

実験器具の棚の前で俺の書いたメモを眺めているその後ろ姿に、声をかける。再び振り返った都築は、「はい？」と返事をした。

「…あー…その…2限の休み時間は助かった。悪かったな」

言うと、都築は無表情のまま俺を見つめ返す。…俺の解釈が間違いでなければ、こいつは廊下でたまたま俺と高柳の話を聞いてしまっていて…。それで助け舟を出してくれたのだと思った。

俺を無言でしばらく見つめ返した後、都築はフッと表情を崩す。微かな笑みを浮かべて、再び棚に向き直った。

「学校であいう会話、気をつけた方がいいですよ」

「…あぁ、そうだな」

「まぁ、先生が悪いわけじゃなくてあの女の子の方が一方的に食い下がってたみたいですけど」

「…いや、俺も言い過ぎたのは事実だから」

「先生からそういう言葉が聞けるなんて、正直びっくりです」

「お前、俺を何だと思ってんだよ」

軽口を叩くように言い合って、互いに思わず笑ってしまった。

「まぁ、俺もちょっとムッときたので助けただけですから」

「…お前が？」

「だってあの子、自分と白石が違うっていうのか、って食い下がっ

てましたよね？」
…あぁ、それでか。
失恋したとはいえまだ都築が白石のことを好きなのだと、俺はこの時再認識した。

「で言い合ってた感じなのに急に静かになるからこれはマズイな、と思ったんですけど…。キスでもされました？」
「バカかお前」
「ってことは未遂かぁ」
笑って言いながら、都築は棚の中から必要な器具を出し始めた。

「先生、あれからちゃんと話してませんでしたけど…白石と付き合ってるんですよね？」
「……」
「あんなに先生のこと好きだった白石が最近明るくてフラれた感じはしないし、先生も彼女がいるっていうし。間違いないと思ってるんですけど」
「……あぁ」
こいつに隠しても無駄だと思ったので、俺は小さく頷いた。

「大丈夫ですよ、俺誰にも言いませんから。いくら白石にフラれたからって、そんな仕返し意味ないし」
「……悪ぃな」
「先生のためじゃないですよ。俺のためです」
「……お前の？」
「確かに他人に言いふらしたりはしませんけど、俺…」
そこで一度言葉を切って、都築はニッと笑う。

「諦めてませんから、白石のこと。いつか先生から奪えるんじゃないかと画策中です」
「……そりゃ手強いな」
肩を竦めて言ったけれど、それは嘘じゃない。都築も本気で強引に奪おうと思っているわけではなさそうだが、だからこそ余計に怖い存在だ。

俺の返した言葉に、都築はどう思ったのか今度はその表情に苦笑を浮かべた。

＊＊＊＊＊＊

その日から、高柳が俺のところへ来ることはほとんどなくなった。ただその代わりたまに見かける時の様子から、俺の言葉に反発しながらも何かを感じ取ってくれたのは間違いなかった。いつもつるんでいる…あいつがバカにしている連中との距離が、少しだけ縮まっているように見えたからだ。

「先生、何か今日嬉しそう」
放課後の化学準備室で、実験器具を片付けながら白石がそう言った。
「そうか？」
「うん。何かイイことありました？」

俺の機嫌が良いと同じように嬉しいらしい白石は、ニコニコと聞いてくる。

「別に、大したことじゃねぇ」
「えー、教えてくださいよー」
「強いて言うならお前の古文の小テストが赤点をまぬがれたことか」
「う…っ、そういうこと言います？しかも赤点はまぬがれたどころじゃないですよ、１５点は上でしたから」
「どっちにしろギリだろ」
「１５点も差があったらギリじゃないですよー」
頬を膨らませながら言う白石に、俺は思わず笑ってしまう。

高柳も…きっと、そのうち気づくだろう。
今あいつが守ろうとしている自分のプライドより、大切なものがあることに。『特別』なんてものは自分が自分を評価するものじゃなく、他人に思われるものだってことに。

「なぁ白石、俺にとって特別なものって何か分かるか？」
不意に、聞いてみた。珍しく俺から話を振られたことが嬉しかったのか、白石は目を輝かせながら少し考える。
「えーっと…ピアノ？ジャズ？あ、でもこの前買ってたＣＤも気に入ってましたよね…」
一生懸命考えているのは分かるが、全部的外れだ。
「先生、答えなんですか？」
「さぁ」

「『さぁ』って！話振っておいてそれ！？」
口をポカンと開ける白石に、俺はもう一度笑う。

…しばらくは絶対、教えてやらない。

1

1学期の期末試験を終えれば、七夕祭りがある。この地域では結構有名なお祭りで、色んな所から観光客がやってくるほど。

幼い頃から親に連れられて行ったり友達と行ったりしていたけれど、飽きることはなく例年の行事になっている。今年は誰と行こうかと思っていたところに、智子からお誘いがかかった。

「智子はいいの？裕貴くんと行かないの？」

尋ねると、向かいの席でイチゴ牛乳を飲んでいた智子が首を竦める。

「裕貴、今年は部活のメンツで行くらしいんだよねー」

「そっか、じゃあ私はそんな智子に付き合ってやろうかな」

ニヤッと笑って、由実が言った。

「あ、じゃあ私も一緒に行く」

右手を挙げながらニッコリ笑うと、由実が少しだけ目を丸くして私を振り返る。

「和美は、ユキサダと行かないの？」

先生の名前を出した由実は、意外そうに小首を傾げて私を見た。

もちろん、友達と行くお祭りも楽しい。だけど今年は、せっかくだから先生と行きたい気持ちもあった。それでも学校近くの大規模なお祭りに行けるはずもない。きっとうちの学校の生徒なんてウジャウジャいるんだから。

そう言うと納得したように由実は頷いた。

「じゃあ智子と和美に付き合ってやろうかなー」
由実はまだ彼氏もいないし、一緒に行きたい異性がいるわけでもない。だからだろう。私と智子に「可哀想に」と冗談まじりに言いながら笑った。

「あ、それ…私も一緒に行っていい？」
それまで黙っていた茜が、そこで初めて口を開く。もちろんその申し出を拒む気なんてなかったけれど、私たち3人は同時に顔を見合わせてしまった。

「茜はうちらと一緒でいいの？せっかく好きな奴いるんだし、誘ってみればいいのに」
由実が小首を傾げながら言う。私と智子も同じことを思っていたので、一緒に茜の方を振り返った。すると、茜が慌てて首を左右にブンブンと振る。

「そそそ、そんなこと、できるわけないよ…っ！」
引っ込み思案で消極的な茜らしい。大慌てで真っ赤になる。
「でも、せっかくの七夕祭りだよー？カップルのためにあるようなイベントだし」
「カップルじゃなくて、単なる私の片想いだし、それに…」
言いかけた茜は、困ったように眉を寄せた。確かに、茜の性格じゃ自分から男の子をデートに誘うなんて至難の業だろう。

そう思った、その時だった。

「野崎」

教室の後ろのドアから、茜を呼ぶ声がした。低めのその声に、驚いて振り向いたのは茜や私たちだけじゃない。教室の中にいた子たちも何人かがこちらを見やっていた。

「か、一真くん！」

驚いた茜が、座っていた椅子から腰を浮かす。そう、そこにいたのはF組の柴田一真くん…茜の片想いの相手だ。噂をすれば何とやら、何てタイミングだろう。

柴田くんは先月半ばにF組に転校してきた生徒だった。誰もが目を惹くほどの美形なので、転校初日から噂が絶えない。だけどルックスだけでなく顔に似合わない性格も噂の元であり、耳にするのは良い話ばかりではなかった。

俺様、傲慢、自分本位…そんなことばかりを聞いてきた気がする。でもひょんなことから彼は茜と知り合い私たちとも顔見知りになったので、彼が本当は優しい人だと知っている。

「化学の教科書、持ってたら貸してくんねぇ？」

ドアから入ってきながら、柴田くんはそう言う。スラッとした長身から見下ろされて、茜は「えっ」と声を上げた。

「か、化学…！？待ってね、今出すから…」

柴田くんがこうして訪ねてくるなんて初めてのことだから、茜としてもかなり驚きと緊張で頭が真っ白になっているようだ。

慌てて机の中から化学の教科書を取り出して、茜は緊張気味にそれを渡す。

「わ、私のでいいのかな…書き込みとかしちゃってるけど」
「何、ラクガキしてんのお前」
「ちが…っ、ラクガキじゃなくて書き込み！」
「冗談だって」
別の意味で慌てた茜に、柴田くんはハハッと笑って受け取った。
「そもそも俺、まだ他のクラスの知り合いお前くらいしかいねぇしな」
さっきの茜の言葉を受けてなのか、柴田くんはそう言う。それはそうだろう。転校してきてまだ部活にも所属していないらしい彼に、他のクラスの友達を作る機会はあまりないと思う。
「隣の女も教科書忘れるし、助かった。サンキュー」
少しだけ唇の端を持ち上げて笑って、彼は受け取った教科書を示してそう言った。

「…あ、ううん…」
その時、首を横に振って応じる茜の様子が急におかしくなったことに気づき、私は内心で首を傾げる。
だけど、その理由がすぐに分かった。
「柴田くん！」
だから考えるより先に彼を呼び止めてしまっていた。

「？」
振り向いた柴田くんが、今度は茜じゃなくて私を見る。急いで自分の机の中に手を入れた私は、そこから同じように化学の教科書を出した。

「良かったら、これも持って行って。隣の女の子も忘れちゃったん

でしょ？」
差し出した教科書を、柴田くんは一瞥する。それから私の顔を見て、「悪いな」と笑って見せた。
「サンキュー、後で返しに来る」
言って踵を返した彼を見送って、私は小さく息をつく。

「……和美…」
柴田くんがいなくなってしばらくしてから、茜がふと私の名前を呼んだ。「ん？」と小さく聞き返すと、茜は俯きがちに「ありがとう」と言う。智子と由実だけが、その意味が分からずに首を傾げていた。

子どもっぽいと笑う人もいるかもしれないけれど、好きな人に教科書を貸せるって結構ドキドキだと思う。私はそんな茜の気持ちがよく分かる。話せただけでも嬉しいのに、物を通したやり取りができるなんて相手に憧れる立場からしたら嬉しいだろう。
だからこそ、気づいてしまった。茜の胸の痛みにも。

教科書類のまだ揃っていない一真くんにいつも見せてくれていた隣の女の子が忘れた、ということは、きっと彼は、茜の教科書を2人で見るだろう。
自分が貸した物で、好きな人と誰かの距離が縮まるなんて嫌だと思って当然だと思う。その距離が物理的なものであって、2人の間に恋愛絡みの感情がなかったとしても、嫉妬してしまう気持ちは誰にでもあるだろう。

「茜の気持ち、分かるから」
冗談ぽくウィンクして言うと、茜は安堵の息を漏らしながら「ありがとう」ともう一度お礼を言った。

「…なんかよく話が分からんけど」
おーい、と私たちに呼びかけながら、由実が首を捻る。
「でもとにかく、仲良さそうじゃん茜」
ニヤッと笑う由実の言葉に、茜は慌てて首を振った。
「そんなことないよ…っ、今のだって、久しぶりに話せたし」
「でも日ごろから会ったら挨拶くらいしてるじゃん？」
「そんなの私じゃなくてもするでしょ…」
「あんまり女の子と挨拶を交わすタイプには見えないけどなぁ」
由実はどうあっても茜の背中を押して、頑張ってもらいたいようだ。でも、その気持ちは私も分かる。茜は今まで好きな人もいなかったし、こういう話をするタイプじゃなかったから。私だって親友として応援したい気持ちでいっぱいだ。

だけど茜は、また憂鬱そうに息をついた。何かを思い出したかのように、「…実は」と吐息まじりの言葉を漏らす。
「この前…一真くんの噂を、ちょっと耳にしちゃって」
「性格最悪とか、俺様とか？」
「…違う、そういうんじゃなくて」
煮え切らない言葉を返しながら、茜は眉を寄せた。恐らく、眉間に力を入れていないと泣いてしまいそうだったんだろう。
「付き合ってる人が…いるんじゃないか、って」

「えぇぇっ！？」
思わず私たち3人は大声を出してしまい、周囲のクラスメイトたちが何事かと振り返ってしまった。そんな周りの人たちに「何でもない」と愛想笑いを返してごまかし、私たちは更に顔を近づける。至近距離で内緒話をするようにして、茜の言葉の先を促した。

「F組の…ハルカちゃん。去年同じクラスだったから、皆も知ってるでしょ？」
茜が呟いたその名前に、私たちは思わず顔を見合わせる。

夏川悠花ちゃん。茜が言うとおり、去年同じクラスだった。かわいくて明るくて、男女問わず人気があった。何より彼女自身が気取らない自然体な性格なので、大体の人に好感を持たれる。
そんな彼女だから、確かに評判の悪い転校生の柴田くんにも他の人と同じように接することは安易に想像できるけれど…。

「夏川ぁ？ないない」
笑い飛ばすように、由実が片手を顔の前で振った。
「大体夏川は、確かナントカ先輩を追っかけてたんじゃなかったっけ？」
続けた由実の言葉に、私は「そうなの？」と目を丸くする。

「…でも私も、その夏川と柴田の話ちょっと聞いたことあるかも」
向かい側で智子が、苦い顔をしてそう呟いた。それを受けて由実が朗らかに笑う。
「じゃーさ、聞いてみればいいじゃん、本人に」

「本人に!?」
驚いた茜が、珍しく声を荒げた。それにニヤッと笑った由実が「大丈夫」と胸を張る。
「私が聞いてあげるからさ。自然に、さりげなーく」
その「なーく」の辺りが既にわざとらしいのだけれど、仕方なく私はそこではツッコミは入れずに黙っておいた。

＊＊＊＊＊＊

その日最後の授業を終え、由実は宣言通り素早く茜の傍へ行きぴったりとくっついていた。やがて、化学の教科書を持った生徒がこの教室へ入ってくる。ただそれは、私たちが期待していた柴田くんではなかった。
「茜ちゃん」
４人で机の周りに座っていたところへ、その人物は茜に呼びかけながら近寄ってくる。
小野寺真帆ちゃん。ハルカちゃんの親友で、彼女も私たちと去年は同じクラスだった。
「これ、教科書ありがとうって一真が。自分で返しに来れなくてごめんって」
言いながら渡して、真帆ちゃんは次に私の方へ向く。
「白石さんも、ありがとう。ハルカがすごい感謝してた」
「…ハルカちゃん?」
そこで出てきた名前に、私は小首を傾げた。

「あ、一真から聞いてない？一真の隣で、化学の教科書忘れたのってハルカなんだ」
そう言う真帆ちゃんの手から、私は自分の教科書を受け取る。思わぬところで出てきた名前に、キラリと由実が目を光らせたのを私は見逃さなかった。
「小野寺、小野寺」
用事を終えて帰ろうとした真帆ちゃんの肩にがしっと腕を回し、由実は男前な態度で彼女を呼び止める。
「何？由実、怖いんだけど」
苦笑い気味に応じた真帆ちゃんは、少し困惑気味に私たちの顔も見比べた。

「ちょっと聞きたいことあんだけど」
「私のスリーサイズなら教えられんよ」
「んなもん聞くかっ！…あのさ、柴田と夏川のことなんだけど」
「ん？一真とハルカがどうかした？」
「あの2人が付き合ってるって噂…マジ？」
漫才のようなテンポのやり取りの後、真帆ちゃんは思わずといった感じに目を丸くした。

自分のすぐ横にある由実の顔をじっと見て…数回瞬きを繰り返す。それから、プッと吹き出した。
「一真とハルカが！？ないないない」
「……ホントに？」
「あるわけないよ。確かに仲はいいけどね…。あの2人が付き合うとしたら、それは世界が滅亡しかけて世の中の男がすんごい性格悪いブ男と一真の2人だけになった時じゃない？」
「…すんごい言われようだな、柴田」

「それくらいありえないってこと。ハルカ好きな人いるしね」
「あれでしょ？ナントカ先輩」
「そうそう、ナントカ先輩」
由実の言葉を笑って繰り返して、真帆ちゃんはそこで由実の腕からするりと抜け出た。

「じゃあさ、その2人が直接教科書返しに来ないのは何で？」
それまで黙っていた智子の問いに、真帆ちゃんは今度はそちらを向く。
「それがさぁ、さっきの化学の時間に何かふざけてたら本気の口論に発展したらしく」
「…え、大丈夫なの！？」
「ん？あぁ、大丈夫。本気の口論っていっても、じゃれてるだけみたいなもんだから」
「…そう」
「そんで一瞬互いに我を忘れて大声でやりあっちゃったもんだから、本城に教科書で叩かれて今化学準備室行き」
「うーわー…」
「今頃雑用でもさせられてんでしょ」
親友たちのことなのに笑って言って、真帆ちゃんは今度こそ「じゃあね」と手を振って教室を出て行った。

「化学準備室…か」
真帆ちゃんの後ろ姿を見送った智子が、口許に手をやって何かを考えていた。

…非常に、嫌な予感がするのは気のせいだろうか。

「化学準備室っつったら、和美の出番でしょ」
当然のように、由実が智子の語尾を継ぐ。
……やっぱり。
頭を抱えたい心境になりながら、私は2人を見やる。

「でもさ、真帆ちゃんは付き合ってないって言ってたし…」
「そんなん、小野寺が親友たちをかばってるかもしれないじゃん」
「真帆ちゃんが嘘ついてるって言うの？」
「可能性の話だよ、可能性の。ほら行った行った」
私の背中を押す由実は、茜のためというよりもう自分が楽しんでるんじゃないだろうか。

観念して吐息まじりに立ち上がると、私は化学準備室へと向かった。

2

化学準備室が視界に入るくらい近づいた頃、急にそのドアが開いた。

「失礼しました」

その場しのぎのような挨拶をした柴田くんが、中から出てくる。別に表向きにはやましいことなどないはずなのに、私は思わずそのすぐ近くの柱の陰に隠れてしまった。

「お前のせいだからな」

「私!?一真だって自業自得でしょ?」

柴田くんの半歩後ろを小走り気味についていくハルカちゃんが、眉間に皺を寄せてそう抗議をしているのが聞こえる。

柱の陰に隠れていた私に気づくことなく、2人はぎゃあぎゃあ口論しながらそれでも並んで廊下を歩いていった。その後ろ姿を見送って、何となく息をついてしまう。

確かに口論はしているのだけれど、仲は良さそうに見えた。あれじゃ周りに勘違いされても不思議はないかもしれない。ハルカちゃんはいつも笑顔で誰にでも優しい子だから分からないけれど、柴田くんの方は文句を言いながらもふとした時の表情は楽しそうに笑っていたから。

それは、私や茜の前では一度も見せたことのない顔だった。真帆ちゃんの言葉がなければ、私だって彼はハルカちゃんのことが好きなんじゃないかと勘違いしてしまいそうだ。

「……何やってんだ、お前」
物陰に潜んだまま彼らの後ろ姿を見送っていた私に、ふと上から声がかけられた。
「せ、先生…」
「挙動不審。変質者かお前は」
いつの間にそこにいたのか、本城先生が何やら書類の束を持ってそこにいた。

「ちょちょ、ちょっと質問が…」
「……ふーん」
あ、バレてる。
先生に用事があって来たわけじゃないことはお見通しらしく、眼鏡の奥の目が意味深に笑っている。
「先生、何で今日眼鏡なんですか？」
それ以上突っ込まれても嫌だったので、話を逸らす。
「コンタクトの洗浄忘れた」
「…また飲み会から帰ってそのまま寝たんでしょ」
「うるせぇな。意外に苑崎先生がなかなか潰れなかったんだよ」
「いやいや、同僚を潰そうとする時点でどうなんですか」
「白石、コーヒー淹れといてくれ」
「…聞いてます？って、先生どこ行くの？」
「隣にこれ置いてくる」
私の非難の声は無視して、先生は持っていた書類を掲げて見せた。
隣の地学室を見やってから、私は「はーい」と返事をする。とりあえず一旦先生と別れて、私は一足先に化学準備室に入った。

「先生、聞きたいことがあるんですけど」
本城先生の私物であるコーヒーメーカーでコーヒーを沸かし、私は5分くらいして部屋に戻ってきた先生にそう話を切り出す。
「なんだ、質問があるのは嘘じゃなかったのか」
「……先生、生徒のことは結構お見通しですよね？」
コーヒーを淹れたマグカップを受け取りながら、先生は小さく肩を竦めた。

「そんなことねぇよ。お前らは理解できねぇことだらけだ」
「たとえば、誰が誰を好きだとか結構分かったりします？」
「…お前、人の話聞いてる？」
「聞いてますよ、もちろん」
ニッコリ笑って言うと、先生は呆れたようにため息をついた。そしてそれから、少し考えるような仕草をする。やがて机に頬杖をついた態勢でこちらを見やった。

「まぁ、分かりやすい奴なら分かるけどな」
譲歩するように答えて、先生は座ったまま椅子を後ろへ引く。長い足を組んで、尊大な態度でコーヒーを啜った。…とても教師の態度とは思えない。

「で？誰のことが知りたいんだよ？」
試しに言ってみろ、と付けたしながら、先生は言う。促されたので、私は自分もマグカップを手に椅子に座った。軽く首を傾けて、先生を見る。
「柴田くんと、ハルカちゃん」
両手で包み込んだカップにミルクと砂糖を入れながら、そう続け

た。
「付き合ってるって噂があるんですけど…本当ですか？」
先生の性格だから、まともに答えてくれるか分からない。…そう思ったけれど、意外にも先生は私が出した名前に片眉を持ち上げて反応を示した。

「柴田と夏川？…お前それでさっきそこでコソコソしてたのか」
「う…っ、コソコソなんて人聞き悪いです」
「だってそうだろ。…ふーん、柴田と夏川ねぇ…」
何か納得するような顔をしてから、先生はヒラヒラと片手を振ってみせる。
「ないない。あいつらに限ってそれはない」
さっき教室での真帆ちゃんと同じようなリアクションを返して、先生はコーヒーを一口飲んだ。
「…ホントに？」
「分かる奴と分からない奴といるけど、あいつらは分かる」
言い切った先生は、次の瞬間に私をビックリさせるような発言を続ける。
「だから心配すんなって野崎に言っとけ」
「そんなことまで知ってるの！？」
「言っただろ、見てりゃ分かるやつがいるって」
私は一度も茜が柴田くんのことを好きだと話したことはない。それなのに……先生の洞察力が今日ほど怖いと思ったことはないかもしれない。

「…まぁ、夏川と付き合ってないからって安心できるもんでもねぇか」
「え？何？」

「何でもねぇ」
首を振って言葉を濁した先生は、もうその時には私から目を逸らしていてそれ以上答えてくれそうにはなかった。

茜にはとりあえず、柴田くんとハルカちゃんが付き合ってなさそうだということだけ報告しておこう。きっと、先生が言うんだからその点に間違いはなさそうだった。

「先生、そう言えば今週末の土曜日なんですけど」
「んー？」
足を組んだまま、先生は手近の書類に手を伸ばす。何だかここのところずっと忙しそうで、話をしている間も結構こんな感じが多い。それでも追い出したりせず相手をしてくれるのだから先生は実は結構優しいと思う。
「智子たちと、七夕祭りに行こうと思って」
「へぇ」
さして興味がないのか、先生はこちらを見ないまま相槌を打った。
…まぁ、七夕祭りに興味津々な先生もそれはそれでコワイ。

「…土曜日だし…その後行ってもいい？」
先生の家に行くのは週末だけ。一度例外はあったものの、その約束はここのところ復活させられていた。今は試験前だから余計だ。

私がそう尋ねると、先生はそこでようやく顔を上げてこちらを見た。
「別にいいけど…って言いたいとこだけど、俺何時に帰るか分かん

ねぇぞ」
「え、どこか行くんですか？」
「…この前言っただろ。土日の夜はお前ら生徒がハメ外しすぎねぇか七夕祭りに見回りに行くって」
「……あ、そう言えば」
確か毎年、先生たちは分担して見回りをしているはず。それくらい大きなお祭りだし、うちの生徒が数多く訪れるから。

「土曜は多分、毎年の感じでいくとその後飲み会になるからな」
「打ち上げみたいな？」
「そう。日曜だと次の日仕事だから、大体土曜だな毎年」
それはもはや打ち上げと言い訳したいだけのただの飲み会じゃないのかと思うのだけれど。あえて言わずに、私は小さく吐息を漏らした。
「じゃあ、その日は大人しく家に帰ります」
「そうしとけ」
先生だって、私が待っているかと思うと落ち着いて飲めないかもしれないし…。仕方なくそう答えて、私はわざとらしく唇を尖らせた。誓って言うけれど、別に本気で拗ねているわけじゃない。
「じゃあ、先生、来週は？」
「…お前必死だな。もうすぐ夏休みなんだからそんなムキになんなくても…」
「え、夏休みはいつでも行っていいの？」
「来るなっつったってお前来るだろ」
組んでいた足を外しながら、先生は椅子に座りなおす。パソコンに向かい合いながら、言葉だけをそう投げ返してきた。

「ふふ」

思わず堪えきれずに笑みを漏らすと、先生は「気持ち悪いな」と顔を顰めてみせる。何を言われても今は笑っていられそうな気がして、私はニコニコ顔のまま言葉を継いだ。

「先生、土曜日飲みすぎないように気をつけてね」

「俺は酒に酔ったことは過去に一回しかない」

そう言えば先生はザルだとなっちゃんが言っていたっけ。その先生が酔ったという「過去一回」を思い出して、私はボンっと顔が赤くなるのを感じた。それを見た先生が、唇の端を持ち上げてニヤッと笑う。

完全に墓穴を掘ったことを実感して、私は赤い顔のまま手で自分を仰いだ。

3

期末試験を終えた土曜日、空は晴れてお祭り日和だった。

「お、和美かわいいー」

夕方、待ち合わせ場所に浴衣姿で行った私に智子が口笛を吹きながらそうからかうように言う。茜もピンクのかわいい浴衣を着ていて、いつもと違った印象だった。

「茜もかわいい。2人共、せっかくの浴衣姿を好きな奴に見せられなくて残念だねぇ」

ニヤッと笑って言いながら、智子はそう続けた。智子はいつも通りの雰囲気の私服だった。特に着飾った感じはないのに、シンプルでおしゃれ。

「由実は残念だったね…」

待ち合わせした駅前から、お祭り場所へ移動しながら茜が不意にそう言う。由実は今日になって風邪を引いたらしく、期末試験も真っ赤な顔で受けていた。恐らくテスト内容はボロボロだと本人も言うくらいに熱があったようで、「七夕祭りはやめとくわ」と帰っていった。

「これぱっかりはしょうがないよね。土産話でも持ち帰ってやるか」

そう言いながら、智子は私と茜の前を歩き始めた。

例年のことなのだけれど当然ものすごい数の人で、少しでも気を抜くと恐らくすぐにはぐれてしまう。私たちは離れないように注意しながら、辺りの出店を回って行った。途中で買ったあんず飴を舐

めながら、商店街の各お店が出展した巨大な七夕飾りを眺める。
「あれかわいい」とか「これいいね」なんて話して見ているのが楽しくて、3人で夢中になってしまっていた。

「お、補導対象発見」
人の波に流されていた頃、ふと後ろから声が降ってきた。言葉通り頭上からの声だったので、私たちは3人揃って顔をあお向けるようにして振り向く。
「なっちゃん！トッキーも」
後ろを振り返るとそこには珍しい組み合わせの2人組が立っていて、智子が驚いたように声を上げた。七夕祭りの見回りをしているらしいなっちゃんと苑崎先生が、そこにいた。

「お前らあんまり遅くなるなよー。早めに帰れ」
「なっちゃん、まだ7時だよ」
「9時には帰れ。じゃないと後々俺らが面倒くせぇ」
「トッキー、あんなこと言う教師、放置しといていいの？」
「あははは」
智子の問いに、半ば白々しい笑い方をして返す苑崎先生。
「そう言えば何で2人が一緒なの？珍しくない？」
「別に珍しくねぇよ。見回りも2人1組、担任と副担任でコンビだ」
「へー、そういうの決まりがあるんだ先生たちも」
そう言えば、なっちゃんと苑崎先生はF組の担任と副担任だっけ。美形コンビクラスってことで、他のクラスの女子生徒からはF組は羨望の眼差しで見られている。

「…ん？」

そこでふと、私は思い当たったことがあった。
「担任と副担任…？」
不意に呟いてしまった言葉に、なっちゃんが「しまった」という顔をした。だけど苑崎先生もいる場でそれ以上のフォローはできないと判断したらしく、曖昧に苦笑いを浮かべてみせる。
「まぁとにかく、ある程度遊んだら早めに帰れよ」
「はーい」
揃って返事をする智子と茜。その場で別れてすれ違おうとした時、なっちゃんがポンと私の頭に手を乗せて行った。
「……」
やっぱり、そうなんだ。
担任と副担任ってことは、本城先生は相澤先生と一緒なんだ…。
なっちゃんの態度からも、それがよく分かった。

「どうかしたの、和美？」
何も気づいていない智子が、小さく首を傾げてこちらを振り返る。
「ううん、何でもない」
笑って首を振って、私は小走りに2人に追いついた。

＊＊＊＊＊＊

くだらない嫉妬心だってことはわかってる。
先生が相澤先生のことを何とも想ってないことも、あの2人がどうこうなるはずもないことも分かってる。それでも、こういう特別なイベントの場所で先生のことを好きな女の人と2人になってるの

を想像するだけで嫌だった。先生たちは見回りであって、遊びで来ているわけではないと分かっていても。

自分は人目を気にして先生の隣を歩くことができない立場だから、余計かもしれなかった。

「和美、次何食べるー？」
「智子、まだ食べるの？」
「当たり前じゃん。まだまだ食べ足りないー」
たこ焼の屋台と焼きソバの屋台を見比べながら、智子は品定めをしていた。胸の内側のちょっとした嫌な気持ちは押し込んで、私は智子の言葉に苦笑いを浮かべる。小食な茜は早々に脱落し、私もかなり頑張って付き合った方だけどさすがに智子の胃袋には敵わない。由実がいたら2人は拍車がかかって尚更ひどかっただろう。2人共信じられないくらいに食べるのに痩せているんだから不思議だ。

「茜はともかく、和美も小食すぎ」
「いやいや、普通の女子高生以上には食べてるよ」
決して私は小食な方じゃない。多分人並みな方だと思う。智子の気持ちがいいくらいの食べっぷりの方がすごい。

焼きソバを選択したらしい智子が、屋台でそれを買って戻ってきた。道路の隅に移動して縁石の部分に腰を下ろしてそれを食べ、私と茜は智子の隣で雑談していた。
…まさにその時、だった。

「智子？」
かけられた男の声に、私たちは目線を上げる。そこにいたのは、大人数の友達と一緒の智子の彼氏・裕貴くんだった。
「裕貴」
焼きソバを食べていた割り箸を置いて、智子は目を丸くする。こんなに人の多いところで会えるとは思っていなかったんだろう。

「え、なになに、裕貴の彼女さん？」
友達は裕貴くんのサッカー部の人たちらしい。身を乗り出すようにこちらを覗き込んでくる。
「あ、どうも、こんばんは」
焼きソバの容器を茜に手渡しながら立ち上がって、智子は挨拶をしながら軽く頭を下げた。
「彼女さん、今日ごめんね。裕貴借りちゃって」
そのサッカー部の男の子たちは気のいい人たちらしく、申し訳なさそうに智子にそう言う。
「いえいえ、全然。気にしてませんから」
笑って応じて言った智子に、裕貴くんが片手を挙げる。
「じゃあ、智子。帰ったら電話する」
「うん」
「和美ちゃんと茜ちゃんも、智子ほっとくと食いすぎるからよろしくね」
ニッコリ笑って裕貴くんはこちらにも声をかけてくれ、私たちも頷きながら笑って返した。

だけど彼らが踵を返してまた人の波に飲み込まれて行く時、その一番後ろにいた2人の影が目に入った。どうやら、サッカー部のマネージャーさんらしい。女の子2人がこちらを見ていた。

裕貴くんたちから見えない後ろで、こちらを見ながら何かをコソコソと話している。それからクスクス笑いながら智子を上から下までジロリと眺めて、また笑った。

「…ちょっと…！」

何を話しているのかまでは分からなかったけれど、イイことじゃないのは明白だった。そのまま踵を返そうとする態度に思わずカチンと来て、私は立ち上がった。

「和美！」

茜に浴衣の袖を引っ張られ、制止される。

「気持ちは分かるけど、ちょっと抑えて…」

「だって、何よあの態度！」

自分のことならまだ我慢もできるけど、私は自分の友達があんな態度を取られるのは許せない。あざ笑うようなあんな態度、黙っていられない。

「いいよ、和美」

茜の手から焼きソバの容器を受け取りながら、智子はまたそこに座った。

「裕貴は気づいてないみたいだけど、あの右側にいた子が裕貴のこと好きみたいなんだよね」

そう言いながら、智子はまた割り箸を持つ。

「何回かサッカーの試合見に行ったから、何となくわかるんだ」

「……」

苦々しい笑みを浮かべて言う智子の言葉に、私は押し黙った。そのまま、また私もその場に腰を下ろす。

「私さぁ、裕貴と付き合ってもう3年になるからさ」
不意にそう話を切り替えた智子は、焼きソバを口元に運びかけたけれど思い直したように割り箸を置いた。
「ドキドキしたりとかそういう感情、もうあんまりないんだけどさ」
確かに、2人は熟年カップルのようなどこか落ち着いた雰囲気があって…。多少のことで動じたりしない余裕もありそうだし、でもお互いに相手を大事にしているのはよく伝わってくる。私にはそれが憧れでもある。

「だから七夕祭りに一緒に行けないって言われても、『あぁそう。まぁいつも会ってるしね』くらいにしか思わないんだ」
「……」
「でも正直、ああいうのは本当は腹立つ」
「……うん」
「裕貴にその気はないし何とも思ってなくても、裕貴のこと好きな女がすぐ傍にいるかと思うと腹立つ」
「……うん」
「…ごめん、なんか湿っぽくなっちゃった」
言った後にすぐ後悔したように、智子は苦笑を浮かべた。茜と私は大きく首を横に振ることしかできなくて、返す言葉もない。こんな時にうまく言葉をかけてあげることもできない自分が少し悔しかった。

でも、智子の気持ちは痛いほど分かる。それはさっきまで私が持っていた感情と似ているから…。
状況は違うけれど、私たちの痛みは同じだと思った。

＊＊＊＊＊＊

智子の切り替えの早さは頭のイイ証拠だと思う。私たちにそれ以上気を遣わせないようにと思ったのかは定かではなかった。でも、少し沈んだ後すぐに元気な顔を上げる。

引き続き、私たちは七夕祭りを満喫していた。ヨーヨーが欲しいわけでもないのにヨーヨー釣りに挑んでみたり。大人しい顔をして意外に茜が射的上手だったりして、３人で笑いっぱなしだった。

「はー、疲れた。笑い疲れた」

智子がお腹の辺りを抑えながらそう言う。

「何か飲み物買って休憩しよっか」

「ラムネ飲まない？すぐそこに休憩所もあるし」

「あー、じゃあとりあえず休憩所の席を先に取っとこうか」

祭り会場の奥の方まで来ると、ちょうど休憩所とされた場所が開けていた。椅子とテーブルが多く並び、屋台で買ったものを食べている家族や休んでいるカップルが多くいる。そのうちの空いている箇所を見つけて、３人でそちらへ向かった。

「ラッキーだったね、ちょうどテーブル一つ空いて……」

言いながら智子が、テーブルに自分の鞄を置こうとした時だった。言いかけた言葉の先を飲み込み、その動作を止める。後ろからそれ

に続こうとしていた私と茜は、「？どうしたの？」と首を傾げて智子を見た。

智子は、隣のテーブルを見て固まっていた。その視線の先を追うと、そこには一組の男女。それを見て私と茜も目を大きく見開くと、向こうもそれに気づいたように顔を上げた。

「…なんだ、お前らか」

智子と茜、私の顔を見比べて、柴田くんはそう言う。少しだけ唇を持ち上げて笑う彼は、もちろん初めて見る私服姿だった。制服の時にもかっこいいのは分かっていたけれど、私服だと余計にモデルか何かに見えるほどだ。

「柴田くん、お友達？」

彼の向かい側に座っていた女の人が、私たちをニコリと笑って見上げながらそう尋ねる。紫色の浴衣が似合う、ものすごくキレイな人だった。

…しかも、私たちは知ってる。この人を……。

「春日愛海先輩ですよね」

智子が、先に声をかけた。

「私たち、柴田くんと同じ2年なんです。クラスは違うんですけど」

「あ、そうなんだ」

キレイに笑う春日先輩の笑顔を見た瞬間に、茜が後ろでバレないように私の浴衣をギュッと掴んだ。

彼女は、うちの学校の3年生で校内でも有名な人だ。美人で頭も

良くて、加えて運動神経もいい。性格もサバサバしていて気持ちがいいので、憧れるのは男女問わず。去年のミスコンでも校内優勝したほどキレイな人。

「えぇっと…先輩と柴田は2人でここに?」
智子はそう言いながら、2人を見る。
「もしかして付き合ってる…とか?」
茜のために尋ねたんだろう。智子がそう続けた。その瞬間、茜が後ろで息を飲むのが分かった。

「…いや」
椅子の背もたれに背中を預けて、柴田くんが短く答える。
「たまたま、会っただけ」
「…ふぅん?」
たまたま会っただけでこんなところで2人でいるだろうか?私たち3人が同時に思っただろう疑問に、彼は小さく吐息を漏らした。

「俺は直やハルカたちと来てたんだけどよ」
「直?」
「知らねぇ?向井直」
「…あぁ、向井ね。去年同じクラスだった」
そんな名前だったっけ、と呟きながら、智子は首を捻って柴田くんの言葉の続きを待った。
「ハルカが途中ではぐれちまって、今皆が探しに行ってるところだ」
「柴田は行かないの?」
「全員で動くと余計に混乱すんだろ。待ってる奴もいねぇと」
「先輩は、ここに一人で?」

智子の話が、矛先を春日先輩に変更する。あまり追及しすぎるのも怪しいかと思えたけれど、先輩の方はそれを気にした様子もなかった。

「ううん、幼なじみと来たけど…」

一度言葉を切った先輩は、穏やかに笑ってみせる。

「ハルカちゃん探しに行っちゃったから、私もここで留守番」

ニッコリ笑ってそう言った先輩に、智子は「そうなんですか」と呟いただけだった。それ以上尋ねるのはやめて、代わりに「あ！」と何かを思い出したように声を上げる。

「私、さっき焼きソバ食べた場所にハンカチ忘れてきたかも！」

「え…？」

「ちょっと戻っていい？」

「い、いいけど…」

智子のいきなりな言葉に少し戸惑いながらも、私は頷いた。後ろの茜はそうする気力もないのか、ただ黙っている。

「じゃあね、柴田。先輩も、失礼しました」

ペコリと会釈をする智子に、柴田くんは片手を軽く挙げ、春日先輩は「またね」と笑ってみせた。

身を翻して、3人で足早にそこを後にする。ハンカチを忘れたなんて、智子の嘘だ。あの場所から茜を逃がすためにそうしてくれたんだろう。

「茜、大丈夫？」

なぜなら、茜だけじゃない、私も智子も気づいてしまったから。

「…うん、ありがとう」
弱々しく答える茜の声は、小さくてすぐに闇に溶けて消えた。

柴田くんは…恐らく、あの先輩のことが好きなんだ。
それが分かってしまったから、私たちは何も言えずに押し黙るしかなかった。彼は…ハルカちゃんといる時の楽しそうな顔でも、私たちと話している時の少し大人びた顔でもない表情をしていた。
もっと、静かで切なげで、穏やかな顔をしていた。それは「俺様」とか噂されるような彼とは思えないほどで…。

茜自身もそれが分かったから、あの場所にはいたくなかっただろう。智子がそう咄嗟に感じ取ったから、出てきた「嘘」だった。

噂で聞いただけだけれど、確か春日先輩は「幼なじみ」と付き合っているはずだった。もしそれが本当だったら、彼女がさっきの智子の問いに「彼氏」と答えずに「幼なじみと来た」と答えた理由は明白だ。
先輩は、柴田くんの気持ちを知ってるんだ。だから…気を遣って、ああいう言い方をしたんだと思えた。

そこで思い出したのが、本城先生の言葉。

『夏川と付き合ってないからって安心できるもんでもねぇか』
ハルカちゃんと柴田くんのことを、そう先生は確かにそう言った。
先生は、柴田くんが春日先輩のことを好きなのを知ってたんだ…。

「……」
もう私の後ろには隠れていない茜が、隣で大きなため息をついた。
好きな人が他の女の人と一緒にいるだけで感じる胸の痛みは、今の私と智子ならよく分かる。賑やかな七夕祭りの波に乗りながら、私たちは3人並んで思い思いに大きな飾りを見上げた。

…胸が、痛い。

自分だけでなく隣にいる親友たちのそれも感じながら、私は涙の滲みそうな目をきらびやかな七夕の夜に向けた。

4

２０時を回る頃になっても、人は一向に引く気配はなかった。それどころか更に混雑してきた気がする。

人波にのまれてしまわないように注意しながら大きな笹を見上げていた私たちは、誰からともなく「…帰ろうか」とポツリと漏らした。

何となく憂鬱な気分は3人共抜けなくて、帰る方向へ足を向ける。決して一緒にいるのが嫌になったわけではないけれど、こんな顔をして共にいても、相手にも気を使わせてしまうのが悪い気がしたからだ。

飾り付けられた長い商店街を抜けようと祭りの出口を目指す。けれど、あと少しで辿り着くというところで「わっ」と智子が声を上げた。驚いて私と茜も後ろを振り向くと、そこには智子の更に後ろから彼女の肩を掴んだ裕貴くんの姿があった。

「裕貴っ？どうしたの？」

瞬きを繰り返して、智子はその彼の顔を見る。急いで後を追いかけてきていたのか、裕貴くんは肩で息をしていた。

「いや…携帯全然通じないから、探し回ってた」
「え…」
彼の言葉に、智子は慌てて鞄から携帯電話を取り出す。そこには確かに不在着信のお知らせが何件かあったらしく、智子は少し訝しげな目を向けた。
「え、でも部活の人たちは？どうしたの？」
「とりあえず一通り回って、二次会みたいな感じで場所移すっていうから抜けてきた」
笑って言う裕貴くんは、それから私と茜の方に視線を移す。
「…ってことで、和美ちゃんと茜ちゃんには悪いんだけど、俺も一緒に回っていいかな」
もしかしたら裕貴くんは、智子の気持ちをちゃんと分かっていたのかもしれない。裕貴くんのことは信じているし七夕祭りに一緒にいけないのは仕方ないと思っていても、他の女の子と一緒にいると思うと少し寂しい気持ち。
それで…智子のことを思って探し回ってくれたのかも。優しい裕貴くんならありえそうだ。

私も茜も裕貴くんとはもちろん何度も会ったことがあるし、一緒に回るのは全然構わない。帰ろうとしていたところだというのは隠しておいて、せっかくだから裕貴くんと一緒に七夕を楽しもうか。
そう思って「もちろん」と返事しかけた私を、茜の右手が制した。

「ダメっ」
裕貴くんを見上げてはっきりと言った茜の珍しく強い口調の一言に、目を見開いたのは私だけじゃない。智子と裕貴くんも、驚いた

ような表情を浮かべる。
「あ、茜…？」
「ダメだよ、そんなの。裕貴くん、智子ね、寂しかったんだよ」
「ちょっと、茜…私「寂しい」なんて一言も…」
「智子は黙ってて」
智子ですら有無を言わせぬ口調でピシリと言う。「…はい」と小さくなって一歩下がる智子なんて、なかなか見られるものじゃない。

「智子は素直じゃないから言わないかもしれないけど…でも寂しかったんだよ」
「…うん」
茜の言葉に、裕貴くんが小さく頷く。反省しているのか…その声は少し力ない感じがした。

「だったら、智子のために2人きりでデートしてあげるくらいして。『一緒に回っていい？』じゃなくて、『智子連れて行っていい？』って聞いてほしい」
「！……」
真剣な目をした茜を見つめ返して、裕貴くんは小さな苦笑いを浮かべる。まさか、茜みたいな大人しい子に説教されるとは思ってなかったんだろう。それから、改めたように顔を上げると再び口を開く。
「茜ちゃん和美ちゃん、智子連れて行くけどいい？」
言い直した彼の言葉に、茜は「もちろん」とそこでやっとニッコリ笑った。

「茜には敵わないね…」

ため息まじりに、それでも智子はどこか照れくさそうに笑う。
「確かに」
私まで思わず苦笑を漏らしてしまいながら、トンと隣の智子の肩を押した。
「行ってらっしゃい」
「…うん、ありがと」
珍しく素直にお礼を言った智子が、私と茜に手を振る。そして裕貴くんの腕を取ると、元来た道を戻るように祭りの中心の方へ向かって歩いて行った。

「良かったね、智子」
手を振ってそれを見送りながら、茜がポツリと言う。「うん」と応じた私も茜も、智子の嬉しそうな顔を見れたせいか、さっきほど陰鬱な気分ではなくなっていた。

「和美…やっぱりもうちょっと付き合ってくれる?」
茜が改めて私を見上げ、不意にそう尋ねてきた。
「うん、もちろん」
ニコッと笑って応えると、茜は私を路地の隅へつれていく。夜とはいえ暑さのせいで喉が渇いたらしく、すぐそこのお店でお茶のペットボトルを2本買った。

「和美、私ね…」
ペットボトルの蓋を開けながら、茜は口を開く。喉を潤すようにそれを一口含んで、小さく漏らした。
「今日柴田くんの顔見て、『あぁこの先輩のこと好きなんだなぁ』

って気づいて…」
「……」
「でも…」
一度言葉を切って、茜は伏せ目がちに下を向く。
「『でも』？」
尋ね返すと、今度は小さく苦笑いを浮かべた。

「普通なら、春日先輩みたいな人に敵うわけないし…諦めると思う。少なくとも、今までの私だったら」
「……」
「でも…諦められそうにないんだ…」
「茜…」
「陰から想えるだけで幸せ、なんて聖人みたいなことも言えない。やっぱり、好きだから振り向いてほしい気持ちもあるの」
「うん…」
「智子と裕貴くん見てたら羨ましくなっちゃって、余計にそう思っちゃった」
ペットボトルの口に蓋をしながら、茜は少し自嘲気味に笑った。

「茜、私…」
茜の言葉にとにかく何か答えようと口を開きかけた…その時だった。

「何してんだ、お前らこんなとこで」
不意に誰かの声が降ってきて、私と茜は揃って顔を上げた。座ったままの態勢で見上げた相手は、かなり顔をあお向けないと見えないくらいの長身で。私と茜とを交互に見比べるように見下ろしながが

ら、柴田くんは小さく首を傾げていた。

さっきまでの話が話だったので驚いて体を硬直させた茜だったけれど、どうも話を聞かれた様子はなかった。茜の代わりに、私が「休憩中。そろそろ帰ろうかと思ってたとこ」と笑って応じる。

立ち上がって目線を合わせようとした私は、ふと彼の傍にもうあの先輩の姿がないことに気がついた。

「あれ、春日先輩は？」

「ん？帰った」

あっさり答えた柴田くんは、まるで何でもないことのように言う。

「じゃあハルカちゃんたちは？」

「結局バラバラになっちまったから、そのまま解散」

「じゃあ柴田くん一人なんだ」

「…引っかかる言い方するな、お前」

苦笑いを浮かべて、柴田くんは私を見る。それから、私の隣で同じく立ち上がった茜にも視線を移した。

「お前ら、今から帰るんなら送ってってやるよ」

「え！？」

同時に上げた茜と私の驚きの声が見事に重なる。

「ななな、何で…」

気が動転したのか口ごもる茜に、柴田くんは何かを思い出して少しだけ眉を寄せた。

「変なのがうろついてるらしいんだよ、今。ハルカが絡まれたって言ってたからよ」

「えぇっ！？ハルカちゃん大丈夫なの！？」

「あぁ、何とか大丈夫だったみたいだけど」
その答えにホッと胸を撫で下ろして、私は安堵の息を漏らす。確かに、これだけの人がいたら中には変なことを考える人がいてもおかしくはないかもしれない。

だけど…それなら…。

「じゃあ柴田くん、茜だけお願いできる？」
次に私が発したそんな一言に、茜が驚いて「え！？」と声を上げた。柴田くんの方は、片眉を持ち上げて私を見下ろす。

「ちょうど良かった。私これから彼氏と合流するところで、茜とここで別れようって話してたから」
「和美…っ？」
茜の呼びかけはこの際無視することにした。ニッコリ笑って言うと、私の言葉を疑ってもいないらしい柴田くんは「ふぅん」と小さく頷く。
「俺は別にいいけど、彼氏と合流するとこまで送ってやろうか？」
「ううん、大丈夫。もう来る頃だと思うから」
合流できる彼氏なんていないけれど、嘘がバレないように私は微笑んだままだった。茜が物言いたげに口を開きかけたけれど、私が柴田くんにバレないように肘で突いたために押し黙る。
「それじゃ、茜をお願いします」
笑って押し出すと、茜はためらいがちに柴田くんから半歩下がったところに並んだ。

歩き出した2人を見送って、私は手を振る。何度か心配そうに振り返る茜に「いいから」と表情だけで合図をすると、小さくため息をつきながら前を向いた。

おせっかいだったかな…と、思わないこともないけれど。でも確かに変な人がうろついてるなら茜を一人で帰すのは心配だし。それに何より、さっきの茜の「諦められない」と言った言葉があったからこそ、だ。

「…さて、と」

2人の姿が見えなくなってから、私は小さく息をつく。祥太郎でも呼び出して迎えに来させようかとも思ったけれど、それも逆に空しい気がしてやめた。

「…帰ろ」

ポツリと呟いた言葉が、夜の闇に溶け込んで消えた。

5　side：Yukisada

七夕祭りの夜は余りにも眩しくて、俺は頭上に飾られた大きなオブジェを見上げるたびに目を細めていた。

「あ、ユッキー発見ー」

祭り会場はかなりの人でごった返しているというのに、うちの生徒に遭遇することも少なくない。近寄ってくる生徒や遠くから手を振ってくる生徒に「早めに帰れよ」とお決まりのセリフを吐いてはいたけれど、半ばうんざりしていたところだ。

毎年毎年…この行事だけは好きになれない。

教師として借り出されるわけでなければ、もう少しマシだったかもしれないけれど…。

「本城いいなぁ、俺も相澤先生と一緒に歩きてぇー」

絡んできた男子生徒の中にはそんなことを言うやつもいる。

「褒めても何もでないわよ」

ニッコリ笑って応じる相澤とその生徒を無視して、俺は構わずに先に進んでいた。

生徒が羨ましがるのは勝手だが、俺にとってはそれほど恵まれた状況でもない。さっきだってちょっとした段差を踏み外してから、相澤は少し足が痛むらしい。帰るか休んでくれるかしてくれればいいものを、頑としてそれを拒むので歩く歩調を合わせたり気を遣っ

てやらなきゃならない。

面倒くさい仕事ではあるが、うちは県内でもトップレベルな学校だからあまりハメを外しすぎる奴がいないことがせめてもの救いだった。問題を起こすことも少ないだろうけれど、こうして見回りをするのは例年のお決まりだ。去年までは「かったるい」くらいにしか思わなかったけれど、今年はいい加減嫌気が差す。

…その理由は…考えるまでもなく自分でも分かりきっている。

２０時を過ぎた頃、俺と相澤は出口付近から大通りを見回っていた。

特に決められた担当箇所があるわけではないけれど、それなりに教師はお互いに合わせて分散している。そうして何人もの生徒とすれ違う中、一人の生徒に会った。

「…松浦」

「あれ？本城」

相手も俺に気づいて目を丸くした。

「ビックリした、会うとは思わなかったから」

そう言って笑う松浦の隣には、見慣れない男がいた。年は同じ高校生だろうが…うちの学校の生徒じゃないみたいだ。

俺の視線に気づいたんだろう。

その男が、軽く会釈をする。愛想の良さそうな…俺とは正反対の

タイプだ。それを見てから、松浦が「私の彼氏」と言った。

そう言えば白石が、「智子は中学の時から裕貴くんっていう子と付き合ってる」て言ってたような…。相澤がいなければそれなりの挨拶の仕様もあるのだろうけれど、俺はこの時「こんばんは」と頭を下げるだけで留めた。

それから、後ろの相澤に聞かれない程度の声で松浦に尋ねる。

「お前、白石と野崎と一緒じゃねぇのか」

「ん？あぁ、うん…なんか2人が気を遣ってくれてさぁ」

いつも大人びて澄ましたような顔をする松浦が、この時だけは少し照れくさそうに笑った。

「本城もさ、和美も寂しい思いしてると思うから、次に会った時は甘やかしてあげてよー」

「……そりゃ難しいな」

曖昧に首を捻って応じると、「何でよぅ」と松浦は膨れっ面をしてみせたけれど。彼氏が不思議そうに見ていたことと、かなり後ろにいた相澤が俺に追いついてきたことで口を噤んだ。

「じゃーね、先生たちさよーなら」

相澤にもニッコリ笑って、松浦が手を振る。

「気をつけて帰れよ」

教師らしい言葉を返して、その後ろ姿を見送った。

「…さて、戻りますか」

相澤が俺の隣に並んで、そう言う。今日この大通りを何往復した

だろうか…。
　とりあえず見回りは２１時までの予定だから、あと１時間弱の我慢だ。生徒の帰宅状況によっては２２時近くまで見回ることもあるから、会う生徒に「早く帰れ」と強い口調で言ってしまうのは仕方がないことだと思う。

　見回りをしている間の相澤との会話は退屈以外の何物でもなかった。こいつは以前から、聞きたいことや話したいことを直接口にすることはない。どうでもいい話をしてきながら…なかなか核心にも触れない。
　それが分かっているから余計にもどかしくも感じられて、自分でも性格が悪いと思うがかわし気味になってしまう。

「やっぱりこういう場所は、見回りじゃなくて恋人同士で来たいところですよね」
　…また始まった、と思ったけれど口にはせず、俺はポケットに手を入れたまま歩く。
「本城先生は、あまりこういう場所いらっしゃらないんですか？」
　要はこいつが今俺に聞きたいのは「彼女がいるのか」どうかということだ。ストレートに尋ねないその回りくどさが面倒くさくて、俺は「そうですね」と濁して答える。見回りを始めて今までの約２時間、常にこんな感じだ。

そんな会話に飽き飽きしていた時、出口付近で一人の生徒を見つけた。

まだかなり距離は離れていたし、人も多い。だけど…それでも見間違えるはずがなかった。制服でも私服でもなく浴衣を着ていたけれど、気づかないはずもない。斜め後ろから見えた表情が、いつもとどこか違う雰囲気を漂わせていたから余計だった。

「白石！」

少し離れた場所から、大きめの声で呼ぶ。周りの喧騒に飲まれそうだったその呼び声は、それでもあいつの耳に届いたようだった。ピクンと肩を反応させたあいつは、アップにした髪を揺らしてバッとこちらを振り返る。その顔はあまり血色良いものとは言えず、俺は少し足早にそちらに向かった。

「どうした、具合悪いのか？野崎はどうしたんだよ」

「…っ」

「おい？」

目の前まで辿り着いた俺を見た瞬間、白石の顔がクシャっと歪んだ。必死でこらえていた何かがぶわっと溢れてきた感じだった。それを見て、さっきの松浦の言葉を思い出す。

『和美も寂しい思いしてると思うから』

「白石…」

「白石さん？」
思わず今がどういう状況かも忘れて手を伸ばしかけた俺は、再び追いついてきた相澤の声でハッと我に返った。
白石も弾かれたように顔を上げ、相澤を見る。目には涙が浮かんでいたけれど、懸命に零れないように耐えているのが分かった。

「どうしたの？一人？」
「あ、あの…友達とはぐれてしまって…。人波にも酔っちゃったみたいで…」
「具合悪いの？」
「あ、でも大丈夫です！家近いし、あと帰るだけですから…」
相澤から目線を逸らし気味に、白石が答える。彼女の顔を見たくないのか…単に泣きそうな顔を見られたくないからなのかは分からなかった。

「そう。じゃあ気をつけてね」
ニコッと笑って、相澤はそれ以上気にする素振りもなく言う。そうして「行きましょう、先生」と俺の腕を取った。その瞬間迷惑そうに顔を歪めたのは俺だけじゃなく、白石が表情を強張らせたのが分かった。

「…あ、先生。私、さっきくじいた足の痛みが段々ひどくなってきてて…」
白石に背を向けたところで、相澤が俺に言う。
「すみませんが、肩貸していただけます？」
だから先に帰れと言ったのに、という言葉はこの際飲み込むことにした。内心で舌打ちをして、俺は瞬間的にどう返したものかと考

える。
その結果、自分でも珍しいと思うくらいの営業スマイルを浮かべて返していた。

「あぁ、構いませんけど…」
普段滅多に笑わない俺が笑ったことで、相澤も少し驚いたようだった。何より、白石を硬直させてしまったことは不本意だったけれど。
「でも僕とじゃ身長差がありすぎて逆に辛いでしょう。すぐそこに教頭先生がいたので、助けをお願いしましょう」
「え…っ」
「すぐに戻るので待っててください」
絶句した相澤と目を見開いた白石をその場に残して、俺は言葉通り近くにいるはずの教頭のところへ向かった。

教頭はずっと、大した見回りもせず出入り口付近で止まっているはずだ。
何かあった時の連絡係りとして、なんて偉そうなことを言っていたけれど、面倒くさがっているだけに違いない。楽なことと若い女だけが好きな教頭を連れて戻ると、案の定あいつは俺に対する時とは全く違う声で相澤に話かけていた。

「相澤先生、大丈夫かねっ?怪我をしたって…」
「…え、えぇ。大したことありませんわ…」
顔を引きつらせた相澤が、教頭に作り笑いを返す。
「いやでも、くじいた足は甘く見ない方がいい。私は車で来たので

今から送っていこう」
「え…っ、でも教頭先生、この後飲み会もありますし…」
「そんなもんより君の足の方が大事だろう。安静が一番だよ」
相澤と教頭の会話を、まだすぐ傍にいた白石がハラハラした顔で聞いている。俺はというと、この状況を仕掛けた本人だけれど素知らぬ顔で2人を眺めていた。

「教頭先生、うちのクラスの生徒が具合悪くなったようなので僕も彼女を送ってきます」
ある程度教頭の押しに相澤が負けを認めた頃、俺はそう会話に割って入る。それから白石の存在にようやく気づいたらしい教頭は、
「あぁ」と大きく頷いた。
「白石さんだったかな…君。大丈夫かい？あぁ、確かに顔色が良くない」
全校生徒の数が多くて生徒の名前なんてほとんど覚えていないはずなのに、白石の名前は知っていたのはさすがだと思った。

白石を送り届けて戻ってきても、もうその頃には21時は回って見回りの時刻は過ぎているだろう。そう判断して教頭に掛け合うと、そのまま直帰する許可をもらえた。…元より、教頭は俺のことを良く思っていない。飲み会に行かなくたってどうも思わないに違いない。

「それじゃあ本城先生、お願いしますよ。白石さん、帰ったらゆっくり休みなさい」
教頭の言葉に、白石はペコリと頭を下げる。そんな2人を横目に、

相澤が「…本城先生…」と最後に縋るような目でこちらを見たけれど。「お大事に」とニコリと笑って言いおいて、俺は白石を連れてそこを後にした。

「…先生、性格悪」

祭り会場を出て、少し離れたコインパーキングまで歩く。人ごみを抜けて少し顔色が通常に戻ってきていた白石が、周りに誰もいなくなった頃にポツリと呟いた。

「知ってる」

笑って答えて、手を差し出す。

一瞬ためらった白石だったけれど、辺りはもうしんと静まり返って真っ暗であることを確認してゆっくりと俺の手を取った。

6

コインパーキングに車を停めてあると聞いて、飲み会があるのに車で来たのかと一瞬思った。だけど、何かがあった時のために数人の先生は車で見回りに来ていたらしい。

恐らく今の私のように体調の悪くなった生徒を家まで送ったりするためにだろう。その役がちょうど教頭先生や本城先生だったらしい。先生はもちろん当たり前だけれど、その後の飲み会でもお酒を飲むつもりはなかったようだった。

実際のところ私は、相澤先生に言い訳をしたように人波に酔ったわけでも具合が悪いわけでもなかった。ただ、やっぱり重い気分が晴れない時に不意に本城先生の顔を見てしまったから、迷子がお母さんに会えた時に急に泣き出すように、私は声を上げて泣きたい気分になっていた。

会いたかった顔を見られたせいか、安心しきったんだろう。泣きたくなるのを堪えるのが精一杯で、相澤先生の言動は正直ショックだった。ただ、あの時私はどうすることもできなかった。

「先生と付き合ってるのは私なのに」なんて言えるはずもない立場である自分が、ひどく弱く感じられる。だから、先生があいう感じでだけれど相澤先生を拒んでくれてホッとしてしまった自分がいた。

……自分でも、最低だと思うけれど。

「最低なのは相澤の方だろ」
私の言葉に、先生は車の鍵を開けながら言う。助手席に乗り込みながら、私は首を捻った。
「相澤先生って…やっぱり私が本城先生のこと好きなことに気づいてるのかな…」
わざとらしいほどに思えるくらいの露骨さだった気がして、私はそう呟いた。
「付き合ってるとは思ってねぇみたいだけどな」
答えてから先生は、「煙草吸っていいか？」と尋ねる。
「どうぞ」
笑って応じると、先生はスーツのポケットから煙草の箱とライターを取り出した。

最近は先生は、私の前であまり煙草を吸わなくなっていた。だから今日は、よほど先生にとってもストレスを感じる日だったんだろう。

「…で、お前は体調は大丈夫なのか」
煙草に火を点けてから、先生は車を走らせる。膝の上に乗せた小さな鞄の紐を弄びながら、私は頷いた。
「先生の顔見たら、元気になっちゃいました」
「…そういうとこ相変わらずだな、お前」
苦笑いを浮かべて、先生は右腕を窓枠に置いて左手だけでハンドルを回す。それに笑って返して、私はシートに身を沈めた。

茜と智子も、今頃幸せに笑っているだろうか。
智子はともかく、茜は緊張のあまりパニックになってるかもしれない。そう思うと自然と笑みが零れてきて、こらえきれずに私はふふ、と笑った。
「気持ち悪いな」
「『気持ち悪い』って…そんなハッキリ言わなくても」
先生の言葉に今度は苦笑いを浮かべる。…ちょうどその時、私は「あれ」と目を見開いた。

「…先生…どこ行くの？」
交差点を右折したその道は、私の家に続く道じゃない。ましてや先生の家の方向でもなく、私は小首を傾げた。
「ちょっと寄り道」
短く答えて、先生はふーっと煙草の煙を吐き出す。それから先生は、行き先を教えてくれないままただ車を走らせていた。

「うわぁ…っ」
着いたのは、大きな県立の公園だった。小高い丘のようになっている一部分だけは、夜でも閉鎖されることはない。駐車場に車を停めて、丘の上に上がると街が見下ろせた。遠くの方に、七夕祭りで賑わう駅前商店街が見える。

「キレイ…」
手すり部分に手を置いて、私は身を乗り出すようにそちらを見た。
先生とあそこの場所を歩くことはできなかったけれど…それでも今私は幸せだった。
先生は、私の気持ちを良く理解してくれていると思う。七夕祭りに一緒に行けないのは仕方ないと分かっていても、それでも寂しい気持ち。ましてや相澤先生と一緒になんて、本当は仕事でもいてほしくないということを…。

「先生、ありがとう」
何も言わなくても私の気持ちを読み取ってくれていたこと。それと七夕祭りには一緒に行けないけれど、代わりにここに連れてきてくれたこと。
それらを含めてお礼を言うと、先生は唇を持ち上げて応じただけで特に言葉を返しはしなかった。私とは逆に、手すりに背を預けてもたれる。そのまま顔を仰向けて、空を見上げていた。

それを真似するように私も上を見上げると、そこにはなかなか見られないほどの無数の星。都会の電気いっぱいの街中じゃ普段は見られない。ましてや夜にこんな暗い場所に来たこともないから、こんなにキレイな夜空を見たことがなかった。
「天の川見えるかなぁ」
「さすがにここじゃ無理だろ」
七夕らしさに浸ろうとしたのに、先生の冷たい一言に一蹴される。確かに、いくら暗めと言っても都会から見上げる夜空ではきれいな天の川までは見られそうにない。
少し唇を尖らせていると、先生は隣で小さく笑ったようだった。

「俺の地元じゃ結構きれいに見えたけどな」
先生と同じように、私も手すりを背もたれがわりにして真上を見上げる。隣に立った私の手をキュッと握りながら、先生はそんなことを口にした。

「そういえば…先生の地元ってどこですか？聞いたことなかった」
「長野」
「長野！？」
てっきり、少なくとも同じ関東圏だと思っていた。驚いて目を丸くした私に、先生は笑う。

「大学はこっちだからな」
「じゃあ高校までは長野にいたの？」
「まぁな」
今でも実家のご両親はそこに住んでいるらしい。そう言えば付き合って約一ヶ月…。実家の話はあまり聞いたことがなかった。

「長野の田舎だから、街からちょっと外れれば夜なんか真っ暗でよ」
当時のことを思い出しているのか、先生は少しだけ目を細めていた。
「そこからならここよりもっと星も見えるな」
「へぇ…」
いいなぁ、という呟きを漏らすと、先生がこちらを見ているのに気がついた。
「…え？」

その目が少しさっきまでと違う雰囲気な気がしたので、私は首を傾げる。
「いや…」
小さく言葉を濁しかけた先生が、長い指で後頭部を掻いた。
「ん？」
先生のいつもと違うその歯切れの悪さに、私は眉を持ち上げる。顔を覗きこむようにすると、先生は横目で私を見るとようやくと言った感じに言葉を継いだ。

「いつか一緒に行くか」
「…え？」
一瞬、言われた意味が分からなかった。その言葉が嬉しかったせいで瞬間的に頭が真っ白になったんだろう。間抜けな声で聞き返してしまった私に、先生は「嫌なら別にいい」といつも通りのクールな表情に戻ってしまう。

「い、嫌なわけないじゃないですか」
慌てて言って、私はそのままそっぽを向いてしまいそうな先生の腕に絡みついた。

先生は、ただ天の川を見たがっている私によく見える場所で見せてくれようとしているだけかもしれない。でも私にとっては、先生の一言はそれ以上に重い意味があるものだった。

だって、それはまるで…。

「…寒い。帰るぞ」
「えぇぇ!?」
感慨にふけってしまいそうな私は、一瞬にして先生のそんな一言に現実に引き戻された。大体、夏なんだから夜は涼しかったとしても寒いわけはない。照れ隠しなのだろうか、先生はそのまま車の方へ戻って行こうとする。

…こういうところが、たまに子どもっぽいと思う。
いつもは大人な言動で余裕を感じさせるのに、先生は意外に照れ屋だ。

そんなところも好きだとは、悔しいから言わないけれど。

「で、どうすんだ?家帰るのか?」
「先生の家に帰ります」
「…あっそ」
私の言葉に吐息まじりに言った先生は、それでも嫌そうには見えなかった。

「…素直じゃないなぁ」
呟きは聞こえないように言ったつもりだったけれど、地獄耳らしい先生は「あぁ？」と少し凄み気味に振り返る。
「何でもないです。あ、ねぇねぇ先生、私今日浴衣なんですけど」
「見りゃ分かる」
「まだ何も聞いてません、感想を」
「……」
「ちょっとはいつもよりかわいいですか？」
「……死んでも言わねぇ」
「なんでー」
「『素直じゃないから』」
私の言葉を嫌味に繰り返して、先生は唇だけを持ち上げて嫌な笑みを浮かべてみせた。むぅっと頬を膨らませて、私はその後ろをついていく。小走りに追いかけると、先生は一度だけ確かめるように軽く後ろを振り返ってくれた。

いつか本当に、天の川を先生と見ることができるだろうか。
そんな夢を胸に抱いて、私は先生の隣に並ぶともう一度その星空を見上げた。

1

夏休みを一週間ばかり過ぎた頃、私は都内の映画館にいた。今年は猛暑らしく、中の冷房は冷えすぎなほど風を送り出している。10分ほど前までいた外との余りのギャップに少しだけ身震いしていると、隣にいた先生が持ってくれていた私のカーディガンをパサッと肩に落とした。

「…別のにしろよ」

放映中の映画タイトルが並んだ画面を見上げたまま、先生はさっきから何度目かの言葉を漏らした。

映画を見るなんて普通のカップルみたいなことできないと思っていたけれど、先生は私を都内まで連れ出してくれた。確かに県外に出ればそうそう同じ学校の生徒に会うこともないだろう。

念のため原宿や渋谷といった高校生が集いそうなところは避けている。しかも選んだのは小さめの映画館だから、ここなら恐らくそうそう知り合いに会うことはないと思う。

「でも、先生が『何でもいい』って言ったんですよ」

映画に行きたいと言った時、確かに先生はそう言ったはず。だから私は前々から見たかったものを選んだんだから。

「一週間前からこれ見ようと思って、楽しみにしてたのに…」

そう言って私は、さっきそこで配っていた一枚のチラシを先生の前に突きつける。少し涙目で拗ねたように口を歪めると、先生は顔を顰めてそのチラシを振り払う素振りをした。おどろおどろしい長い髪の女の子がこちらに迫り来るそのチラシの絵に、目を背ける。

「大丈夫、怖くない怖くない」
「…ナメてんのかお前」
「…何でもいいって言ったのに」
「まさかお前がホラー映画選ぶとは思わねぇだろ！？」
「私も、先生が怖いの苦手だなんて初めて知りました」
「あのなぁ、俺はホラー映画が怖くて嫌なわけじゃねぇんだよ」
「じゃあ何で？」
「映画なんて娯楽だろ。何で娯楽の時間にまでいちいちビビらされなきゃなんねぇんだよ」
「やっぱり怖いんだ」
「……」

言うと、先生は「しまった」という表情で一瞬黙りこんだ。それを見て私はニヤッと笑う。
「じゃあ別のにしてもいいですけど…後はそれこそ先生が嫌いそうな砂吐きそうな恋愛ものと、子ども向けの特撮ぐらいしかないですよ？」
「……」
指差してそれらを示すと、先生は更に眉間の皺を深くした。
「…これでいい」
譲歩するように言うと、ポケットに両手を突っ込んだまま先を歩きだした。

お昼ご飯を食べた直後だったので、カウンターでコーヒーだけを

買って中に入る。猛暑のせいで涼みたい人が多いのか、そのホラー映画は満員までは行かなくてもかなりの人手だった。大体カップルか友達同士か…若い人が多い。

「ここ数年で一番怖いって評判なんですよねー。見たかったんです」

笑って言いながら席に着く間も、先生は無言だった。本気で怒ったりしているわけでないことは分かっているので、私は構わずに続けた。

「怖かったら手繋ぎますか？」

「いらねぇ」

体を斜めにして肘置きに頬杖をついた先生が、子どもが「イーっ」とするように唇を歪めたので思わず笑ってしまった。

でも結局、映画の間中怖くて手を握ったのは私の方だった。ホラー映画は好きだけれど、決して「平気」なわけじゃない。怖いもの見たさ…というか、興味はあるけど怖いものは怖い。逆に先生は嫌がっていた割には画面から目を背けたりはしていなかった。展開に驚いて腰を浮かしそうなくらいビクリと震えた私のようにもならなかった。…怖すぎて硬直していただけかもしれないけれど。

「あー、面白かったですね」

2時間半の映画を見終え、散々怖い思いをして満足げに私が言うと先生はまだ難しい顔をしていた。

「あ、先生待って。パンフレット買いたいんですけど」
「…買うのか、あれを」
「映画見たら必ず買うことにしてるんですー」
映画館の隅にあるグッズ売場に行って、店員さんにさっきの映画のパンフレットを頼む。だけど鞄からお財布を出している間に、脇から先生が店員さんにお札を手渡ししていた。…こういうところが…大人というか、手馴れていると思う。

「いいです、自分で払いますよ」
「いや、いい。その代わりそれはきっちり持って帰れ。俺の家に置いてくなよ」
「…そんなに嫌なんだ…よく見たらこの長い髪の子だってかわいいかもしれないのに」
ほら、とパンフレットの1ページをめくってそのアップを見せ付けるように差し出す。
「かわいいわけねぇだろうが」
当たり前なことを言って、先生はまた顔を歪めて呟いた。なんだかいつもクールなはずの先生が今日は子どもっぽく見えて、私はバレないようにこっそりと笑みを漏らした。

「…と、電話だ」
ふと先生が、ポケットから携帯電話を取り出した。細かく振動するそれを開いて、少しだけ眉を上げる。
「…誰からですか？」
「いや、知らねぇ番号」
言って、先生は「ちょっと待ってろ」と手で合図をすると電話を

片手に少し離れた。立ち止まっても邪魔にならない隅の方へ移動しながら、通話ボタンを押している。

一応仕事の電話かもしれないし、私があまり聞いていい話じゃないかもしれない。だから私は、さっきのグッズ売場へ引き返した。他の映画のグッズも売っているし、少し時間を潰すのに丁度良かったから。

だけどそこで、一人の女の人が近寄ってきた。背の高い…ボブの髪が似合う、女性っぽいというよりはボーイッシュな印象の美人。すぐ傍まで来てこちらを見ているのに気づいて、私も手にしていた物をそのまま彼女の顔を見つめ返してしまった。

私も女にしては背が高い方だ。それでも彼女は１７０センチちょうどの私よりまだ数センチは高かった。

「あの…」

何か、と言いかけたけれど、私が先に声をかけたことで彼女の方がハッと我に返ったように目を見開いた。それから取り繕うように、少しだけ微笑んでみせる。

「あぁ、ごめんなさい。ちょっと見入っちゃって…」

「…はぁ…」

思い切り間抜けな顔をしてしまっただろう私に、その人は更に苦笑いを浮かべた。それから、「あの」と改めて口を開く。

「変なことお尋ねするけど…さっきあなたと一緒にいた男の人なんだけど」

「…はい？」

先生のことだろうか？それ以外にありえないはずなのに、私はあ

まりの急な話に当たり前なことを考えてしまっていた。
「…あの人……あなたの彼氏？」
「……？はい、そうですけど…」
初対面の人に失礼かもしれないけれど、この時私は思い切り不審な目をしていたんだろうと思う。それが分かったからか、彼女はまたあの苦笑を漏らした。

「…そう。ごめんなさい、変なこと聞いて」
言って、彼女はそれっきりでクルリと踵を返す。
「え、あの、ちょっと…！」
どうしてそんなことを聞いてきたのか、とか、尋ね返したいことはいくつかあった。だけどその人は、そんな私の声を無視してそのままどんどん遠ざかって行く。

「なんなの…」
茫然とその後ろ姿を見送ってしまい、やがて見えなくなった頃に「どうした？」と更に後ろから声をかけられた。振り返ると、首を傾げながら先生が私の視線の先を追っている。
「…いえ、今…なんか美人さんに声かけられちゃって」
「お前そっちにも好かれんのか」
「いやいや、そういう意味の『声』じゃなくてですね…」
呆れ顔で右手をパタパタと振って、私はさっきの女性に尋ねられたことを先生に説明した。

「背の高い美人ねぇ」
「先生の知り合いとか…？」
「んな情報だけじゃわかんねぇよ」

「短めボブで、スラッとした感じの人」
「全然分かんねぇ」
「昔遊んだおねーさんのうちの一人じゃないんですか？」
嫌味っぽくニヤッと笑って言うと、先生は何のダメージを受けた様子もなく平然と言ってのけた。
「お前といる時にわざわざ声かけてくるようなめんどくさい女と遊んだ覚えはねぇ」
「……あぁそうですか」
これはダメだ。何を言っても平気でかわされそう。そう思うと思わず苦笑いが浮かんで、私は「そう言えば」と話題を変えた。

「電話、誰でした？知らない番号」
「ん？あぁ、ケイコだった」
ケイコさん…先生が出したその名前には聞き覚えがあった。確か、前に先生とホテルで演奏した…ジャズボーカルのキレイな人。
「って先生、ケイコさんの番号登録してなかったんですか？」
「あいつとは番号交換した覚えもねぇからな。向こうも修司んとこのマスターに俺のを聞いてかけてきたみたいだったし」
「で、ケイコさんから電話ってことは…またどこかで演奏できるんですか？」
少しばかり目を輝かせ気味に言うと、先生は手にしていた携帯をポケットに捻じ込みながら小さく頷いた。
「今度はビッグバンドでやってみないか、っつー話だ」
「ビッグバンド！！かっこいい！！」
「とりあえず考えとくって返事しといた」
「えー、迷わず返事すればいいのに」
「ビッグバンドだとまたちょっと勝手が違うからなぁ」
多分ピアノじゃなくてキーボードになるし、と付け足してから先生は「うーん」と伸びをした。

「まぁとにかく、せっかく都内まで出てきたからついでにどっか寄ってくか」
「はーい」
歩き出した先生を追うようにして、私もその隣に並んだ。

先生とのデートが嬉しかったのもあるし、ケイコさんとビッグバンドの話に興奮したこともある。そのせいで、私はこの時もう既に、さっきの女の人のことなんて忘れてしまっていたんだ。

その時の出会いが、今後の私と先生との運命を大きく変えてしまうことになるなんて知らずに…。

2

「結局今一番幸せなのはなんだかんだ言っても和美だよなぁ」
不意に由実が、そんな言葉を漏らして唇を尖らせた。

先日先生と映画を見に行ったことと、今日もこれから家に行く予定だと話したことによる言葉だ。それに苦笑した智子が、「まぁまぁ」と由実の肩をポンポンと叩く。
「そうでもないよ、何気に茜だって最近幸せそうだよ」
「えっ!?全然そんなことないよ…!?」
急に話をフラれた茜が、驚いたように目を瞠った。そして大慌てで手を左右に振って否定する。

「何言ってんのー、柴田とついにメアド交換したらしいじゃん」
ニヤッと笑って言う智子の言葉に、私と由実は「えぇ!?そうなの!?」と大声を上げた。
「ち、違うよ…!ちょっとたまたま、そういう話題になっただけで…」
「でも交換したんだから進歩じゃんー」
智子が言うと、茜の顔がみるみる赤くなっていく。それを見た由実が、わざとらしい吐息を漏らしながら言った。
「あーあ、つまんない。誰かに何か起こんないかなぁ」
「ちょっと!不吉なこと言わないでよ!」
由実が本気で言っているわけではないのが分かっているから、智子も怒るフリをして由実の頭にゲンコツを落とすようなジェスチャーをして見せた。

ちょうど別れるところだったので、私たちはそのまま互いに手を振って駅で離れた。家の近い由実と茜は一緒に乗り換え駅の方へ向かう。智子はこれから裕貴くんと約束があるらしく、今いる駅の反対口へと歩いていった。

腕の時計を確認すると、時間はまだ3時過ぎ。先生は今日家にいると言っていたから、このまま散歩がてら歩いて行くことにした。

２０分くらいの距離を進んだ頃、ふと鞄の中の携帯電話が振動したのに気づく。メールかと思って放置しようとしたけれど、少し長めのそれはどうやら着信のようだった。慌てて鞄を開けて、携帯を取り出す。開いた画面に浮かんだのは先生の名前だった。

「もしもし」
『おう。今どこにいる？3時くらいに松浦たちと別れる予定だって言ってただろ』
「もうすぐ先生の家に着くところです。…どうかしました？」
『ん？あぁ、いや…ちょうどちょっと用事ができて、今車で外に出てんだ。今から戻るところだったから、まだ駅付近にいるんだったら拾っていこうかと思ったんだけど』
「じゃあ先にお邪魔してまーす」
笑って答えると、先生は『了解』とだけ言って通話を終わらせた。携帯をしまいながら鞄の中に先生の家の鍵があることをもう一度確

認して、私は軽い足取りで飛び跳ねそうになりながら歩く。

「やっぱり、夏休みはいいなぁ」

平日でも我慢せずに先生に会えることが多い。部活や補習があるから毎日というわけにはいかないし、両親の目もあるから頻繁にお泊りできるわけでもないけれど…。

それでも、やっぱり嬉しいものは嬉しい。

先生のアパートに着いたのは、それから5分ほどしてだった。当たり前だけれど先生の車はいつもの駐車場にはなかった。

「……？」

いつものその静かなアパートの下に、一人の男の人が立っているのに気がついた。どこかの部屋の誰かを待っているのか、暑い中扇子で扇ぎながらポストの辺りに立ち尽くしている。

「…こんにちは」

階段へ行くために前を通るので無視するのもおかしい気がして、私はとりあえず挨拶をしてペコリとお辞儀をした。

４、５０代くらいの男の人は、この暑い中スーツを着ていた。低めの声で「こんにちは」と返してくれる。少し浮かべた微笑みは紳

士的で、「ダンディー」なんて少し前のはやり言葉はこういう人のためにあるんだろうなと思う。

その人の脇をすり抜けて、私は階段を上がる。少し高めのヒールがカンカンと古い金属の音を立てた。そうして先生の部屋の前までまっすぐ行って、鍵を取り出す。

「…あの…」

鍵穴にそれを差し込もうとした時、不意に声をかけられた。驚いて振り返ると、声は下からのものだった。さっきのスーツの中年男性だ。

「…はい…？」

鍵を手にしたまま、私はそちらを見下ろす。年上の人を見下ろすなんて失礼だけど、この場合は仕方がない。その人は少し目を細めながら、一歩階段に近づいた。

「もしかして…行禎のお知り合いですか」

男性の口にした言葉に、私は大きく目を見開く。

「……え…？」

聞き返した声は情けないくらいに小さくて、宙に舞ってすぐにかき消された。

＊＊＊＊＊＊

心臓が、鳴り止まない。
バクバクと音をたてて緊張を掻き立てる。先生の家の鍵を開けて中に入った後も、生きた心地がしなかった。

「すみません、鍵を開けてもらって…。この暑い中さすがに倒れそうでした」
笑って言う男性に、私はハッと我に返る。この人の前で先生の私物に触れていいのかと少し迷ったけれど、冷蔵庫から冷たい麦茶を出すことにした。

ソファに座ったその男の人は、スーツの上着を脱ぎながらさして気にした様子もなく「ありがとう」と微笑んだ。
「行禎にこんなかわいらしい彼女がいたなんてちっとも知りませんでした」
言われて「とんでもないですっ」と首を振る時も、私は手が震えるのを隠すので必死だった。

この人はつまり…先生の、お父さんらしい。
出張で東京に来る予定があったらしく、ついでに寄ったんだそう。
言われてみると先生と似てなくもない…かもしれないけれど、じっくり観察と考察をする余裕は今の私にはなかった。
いきなりご家族の方に…しかも難易度の高そうな「お父さん」に会ってしまうなんて…。緊張で倒れても誰も責めないと思う。

「行禎は今日は…どちらへ？」
「あ、どこかは分からないんですけどもうすぐ帰ってくると思います…近くにいるようなことをさっき言ってたので」
答えながら、私は先生早く帰ってきてー！と心の中で何度も叫んだ。
笑顔が優しそうだし、とても話しやすそうな人だとは思うけれど…彼氏のお父さんとなるとまた話は別だ。

そう、このお父さん…。とても優しそうなんだけれど、何故か萎縮してしまう。好きな人の父親だから…？ううん、それだけじゃない何かが空気感で漂っている気がして。オーラとでも言えばいいんだろうか。感覚的なものでしかないけれど。

麦茶を一口飲んだお父さんと目が合って、私はとりあえずニコリと笑ってみせた。こちらのそんな思いを悟られるのはまた別の意味で怖いので必死で押し隠す。するとちょうどその時、玄関のドアがガチャっと開いた。

「親父…！？」
部屋に入ってきた先生は、私とお父さんが一緒にお茶を飲んでいる不思議な光景に目を丸くした。こんなに驚いている先生なんて、

なかなか見られるものじゃない。いつもの無表情が一瞬で崩れ、明らかに声を失っているのが分かった。

「久しぶりだな、行禎」

どうやら先生は、最近では1年に1，2回実家に帰ればいい方だったらしい。今年にいたってはまだ一度も帰省していないらしく、お父さんは少し責めるような口調で笑っていた。

＊＊＊＊＊

お父さんは「母さんが心配してるからたまには顔を見せろ」とか「電話くらいしなさい」とお説教をしていた。

その言い方が普段の先生に似ていて、私は思わず吹き出しそうになる。バレないようにとそれを堪えていると、先生が横目でジロリと私を睨んだ。

「…で、何の用で来たんだよ」

不機嫌そうに言う先生は、決してお父さんが来たことが嫌なのではなくていちいちお説教されることが嫌らしい。当たり前のように出した煙草に火を点けて、大きく煙を吸う。

「都内まで来たからちょっと顔を見に来ただけだ。元気ならそれでいい」

まだ少ししか話していないのに今すぐに立ち上がりそうなお父さんに驚いていると、今度は私の方を向いてニコリと笑ってくれた。

「和美さん…だったかな、お茶をありがとう」

「いいえ…とんでもないです」
「行禎が選んだ彼女があなたみたいな人で良かった。最近、若い教師が女子生徒と…なんてニュースが多いから少し心配していたんです」
お父さんの言葉に私は思わず硬直し、先生は隣で煙草の煙が変なところに入ったのか「げほっ」と咽ていた。なんと答えていいかわからずに曖昧に笑って返したけれど…一体、お父さんには私は何歳に見えているんだろう。

…まぁ、私服で高校生に見られたことはあまりないのだけれど…。

「もう帰んの」
話を変えようとしたのか、先生が灰皿に灰を落としながらお父さんに尋ねた。
「あぁ、新幹線の時間もあるし…明日は家で予定があるしな」
顔を見られて良かった、と続けて、お父さんは本当に立ち上がる。脱いでいた上着に袖を通しながら続けた。
「明日、平野くんが家に来るんだ」
「へぇ」
短く相槌を打った先生が、どこか感心したように言った。その2人の様子に小さく首を傾げると、先生が説明してくれる。

「親父、長野で高校教師やってんだ。そんで昔の教え子たちが長期休みとかになると遊びに来たりするんだ」
「そうなんですか…！すごく人気の先生なんですね」
昔の教え子がわざわざ会いに来てくれる先生なんて、今のご時勢なかなかいない気がする。

でもそれで何となく分かった。このお父さんの「笑顔なのに萎縮してしまうオーラ」の正体が。教師というオーラを、私は何となく本能的に感じ取ってしまっていたのかもしれない。

「そう言えば行禎、それで思い出したけどな」
鞄を持ち上げながら、お父さんは続けた。座ったままの先生を見下ろして言う。
「この前、何年かぶりに藤枝くんと牧野くんも家に来たんだ」
「！！？」
先生が、灰皿の中に煙草をポトリと落とした。
「……？」
それに気づいて、私は小さく首を傾げる。
「……あぁ、そうなんだ」
違和感を覚えたのは一瞬だけで、先生は小さく相槌を打つと落とした煙草を拾った。そしてそのまま灰皿に押し付けて、火を消す。

「2人共お前に会いたがってたぞ。今仕事で関東にいるらしいから、連絡してみたらどうだ」
お父さんは、先生の一瞬の様子に気づいた素振りもなかった。笑いながら続けて、お父さんは次に私の方に向き直る。
「それじゃ和美さん、行禎をよろしくお願いします」
「え、はいっ、いえ、こちらこそ…っ」
よく分からない挨拶をしてしまいながら、私は頭を深く下げた。

「駅まで車で送ろうか」
言いながら立ち上がりかけた先生を、お父さんは片手で制す。
「いや、近くだから大丈夫だ」

そう言い置いたお父さんを、揃ってアパートの下まで見送りに出た。手を振って去って行くお父さんは、これから長野まで帰るらしい。

「悪かったな、相手させて」

部屋に戻りながら、先生が言う。その声はいつもの調子だったので、私はさっきの違和感は気のせいだったのかとさえ思わされた。何より本当に一瞬だったし、お父さんは気づいた様子もなかった。私の考えすぎだったのかもしれない。

「いいえ、緊張したけどステキなお父さんでよかったです」

「お前絶対２０歳過ぎに見られてたな」

「私やっぱり老けてるんですかねぇ…」

がっくりと肩を落として言うと、先生は声を上げて笑った。

3

「…おかしい…」

夏休みも8月に入った頃、私は教室で呟いた。今日は化学の補習がある日だ。成績で強制的に参加しなくてはいけない由実に付き合って、智子と茜も自主的に補習に来ていた。

私は言わずもがな、元から出席する意志満々だった。

「何がおかしいって？」

補習の昼休憩中に、由実が私の言葉に反応して首を傾げた。それを受けて、私は眉を寄せて腕組みをする。広げたお弁当はちっとも食べ進んでいない。

「先生の様子が…ここのところおかしいんだよね」

「ユキサダ？」

目を丸くして、由実はおにぎりの残り一口分を口に放り込んだ。

「何がどうおかしいの？」

茜も私の隣で尋ねてくる。

「なんか…うまく言えないんだけどね…」

教室の隅っこだから、すぐ近くには他の生徒はいない。それを確認してから私は言葉を継いだ。

「ここ数日…なんかやけに優しい気がするんだよね」

「……はぁ？」

私は至って真面目なのに、由実と智子が思い切り呆れたような顔

をした。

「前なんてメールも電話も向こうからはなかったのに、ここ数日毎晩電話くれるし」

「…はぁ」

「私がこうしたいああしたいって言ったことは、大体聞いてくれるし」

「……なんだ、ただのノロケか」

「ち、違うよ！ノロケじゃなくて私は真剣に…」

「はいはい、ユキサダが和美に甘いのなんて前からじゃん」

あしらうように言って、由実は「ごちそうさま」と両手を合わせた。

確かに、前から私の希望はかなり聞いてくれると思う。だけどそういう時、先生は必ず「文句を言いながら」ということが多かった気がする。この前の映画の時だって、結局はホラー映画にしてくれたけれどその前に随分反対してたし…。

「でもそうだとしたら、噂とは逆だね」

不意に智子が、由実と私の会話にそう言って割って入った。

「噂？」

小首を傾げて、私は智子の方を向く。

「うん、さっきF組の子たちが言ってたんだよね。ユキサダここ数日機嫌悪いって」

「…え…？」

「うちらA組は今日から補習だけど、学年の後半クラスは3日前からだったじゃん？その間機嫌が悪かった…っていうか体調悪そうだったみたい」
「そう……なの…？」
ここ3日ほど、確かに先生の方が補習が始まるから会ってなかった。でも電話では元気そうだったし、いつも通りだと思ったのだけれど…。

「体調悪いのかな…先生」
「うーん…でも和美が気づいてないなら、F組の子たちの気のせいかもねー」
そう締めくくった智子の言葉に重なるように、チャイムが鳴る。午後の補習が始まる合図を示すそれに、私たちは自分の席へと戻った。

＊＊＊＊＊＊

午後の補習の間先生をマジマジと観察してしまったのは仕方がないと思う。それでもいつもと違う風は一切見受けられなかった。顔色だって悪くはないし、体調が悪そうには見えない。
またコンタクトの洗浄を忘れたのか眼鏡をかけていたけれど、その奥の目にも体調の悪さは感じなかった。

「……うーん…」
F組の子たちの気のせい…だと思いたい。だけど何となく放って

おくこともできなくて、私は補習を終えてすぐにある部屋へ向かった。

「ここに来るの久しぶりだなぁ」

前は頻繁に訪れていたのに最近来ることがなかったドアの前に立って、私は上のプレートを見上げる。『数学準備室』の文字を目に止めてから、軽くそのドアをノックした。

「はい」

低めの声が返ってきて、私は「失礼しまーす」と言いながらドアを引く。中にいたなっちゃんは丁度何かの書類を書いていたところらしく、「何だお前か」と顔を上げて言った。

「仕事、忙しい？」

「いや、今は大丈夫」

答えてなっちゃんは、私に近くの椅子を手振りで勧める。なっちゃんのすぐ斜め前のその椅子に座りながら、私は手にしていたチョコレートの袋を差し出した。

「食べる？」

「何しに来たんだ、お前」

苦笑いしながら、なっちゃんは袋に手を伸ばす。個包装されたものを一つ摘み上げてから、「サンキュー」と呟いた。

「ねぇなっちゃん」

包み紙を取ってチョコレートを口に放り入れるなっちゃんを前に、私は話を切り出す。「ん？」と短く聞き返してから、なっちゃんは私を見つめ返した。

「先生のことなんだけど…」
「ユキ？」
軽く頷いて返す。黙ったなっちゃんは私の言葉の続きを待った。

「F組の子たちが、最近様子がおかしいって言ってるみたいなんだけど…なっちゃんもそう思う？」
「…は？誰の？」
「だから、本城先生の」
目をわずかに丸くしたなっちゃんが、眼鏡越しに私をまじまじと見つめる。何となく居心地が悪くて小さく首を捻ると、なっちゃんは小さく肩を竦めた。
「いや、何も気になんねぇけどな…大体、お前はどう思うんだよ」
「私は…全く気づかなかったんだけど…」
「だったらそいつらの気のせいじゃねぇか？俺とお前が気づかなくてそいつらが気づくなんて考えにくいし」
「…そう…だよね…」
確かに私はともかく、鋭いなっちゃんが気づかないはずはないと思う。大体先生とは長い付き合いだし、大抵のことはお見通しだろう。

でも……。

納得しきれない顔で眉を寄せているのが分かったんだろう。なっちゃんが小さく息をついたのが分かった。
「んじゃあ、こういうのはボーっとしてるように見えて意外に鋭い人間に聞いてみようぜ。それが一番手っ取り早いだろ」
「…え？」

聞き返したちょうどその時、タイミングよく部屋のドアがノックされた。
どうやらなっちゃんはこの時間に約束があったらしい。なっちゃんが「どうぞ」と返事をすると静かにドアが開かれる。

「失礼します」
そこにいてこちらに入ってきたのは、美術の苑崎先生だった。年は30代半ば…といっても全然そんな風には見えないんだけど…で、どこかの不良教師2人とは違って生徒に大人気の先生だ。
なっちゃんのクラスの副担任を務める苑崎先生は、今日も何らかの書類を持ってきたようだった。
「名取先生、これお願いします」
そう言いながら差し出したそれを受け取って、なっちゃんは「どうも」と短く応じた。そしてそれから、「苑崎先生」と呼び止める。
「ちょっとお聞きしたいんですけど」
「はい？」
なっちゃんに呼びかけられて、苑崎先生は少しだけ眉を持ち上げた。口元に手を当てて小首を傾げるようにして、振り返る。

「ここんとこ、ユキの様子が変だと思います？」
「…え？」
苑崎先生が、聞き返しながら一瞬チラリとこちらに目線をやった。そしてそれから、なっちゃんがあえて私の前で話しているんだと分かったからかその目線を逸らす。再びなっちゃんの方に向き直りながら答えた。

「様子が変…というよりは、大分お疲れみたいですけど」

「……え？」

尋ねた張本人のなっちゃんも、まさか苑崎先生からそんな言葉が返ってくるとは思っていなかったようだ。私も同じように目を見開き、苑崎先生を見つめた。

確かに苑崎先生は、口数の多い先生ではないけれどその分洞察力がありそうで…。教師の中では本城先生ともそれなりに仲良くしているみたいだし、異変に気づけても不思議じゃない。

それでも…私もなっちゃんも気づかなかったのに…？

ただ確実に、F組の子たちだけでなく苑崎先生までもがそう口にしたことで、私に少しの動揺が生まれたのは事実だった。

＊＊＊＊＊＊

その日の帰り、私は家に戻らずまっすぐに先生の家へと向かった。

電話やメールじゃ分からない。先生の異変は会って話をしないと気づけそうになかった。

もし本当に体調が悪かったり疲れているなら、そうっとしておいた方がいいのかもしれないけれど、気になって仕方がなかったので、私はいつもの駅で電車を降りてそのままアパートへ向かった。

先生は今日は補習だけだと言っていたから、きっとそんなに帰りは遅くならないはず。
合鍵を貰った時に一応いつ来てもいいと言ってもらっているので、そこは甘えることにした。着いたら、勝手に来てしまったことを連絡しておこう。そう思って私は、辿り着いたアパートでいつものドアに鍵を差し込んだ。

「……」
ドアを開いて、一番に私は目を見開くことになる。数日前に来たばかりのその部屋は、見間違いかと思うくらいに物が散乱していた。泥棒に荒らされた…とか、そんなんじゃない。ただ生活している人が乱雑に物を扱っているような…そんな感じ。

一人暮らしの男の人なら、多少物が散らかっていても不思議には思わない。でも先生は、マメだなと思うくらい今まで部屋がキレイだった。
だから、意外だったんだ。

「……」
ベッドの上と床に散乱した服を、拾い上げる。
着た形跡もないのできれいに畳んでクローゼットに戻した。

一体、どうしたんだろう…。朝用意に手間取って急いで出ていった…というわけでもないみたいだった。たった一日でこれほどひどくなるとも思えないから…。

リビングのテーブルの上に出しっぱなしのビールの缶と、煙草の灰が残された灰皿。

それらも片付けようかと手を伸ばしかけた時、床に置いてあった何かに躓いた。

「い、たた…」

小指をぶつけてしまって一瞬言葉が出ないほどの痛みが走り、涙目になる。そうして躓いた何かを見下ろすと、そこにあったのは分厚い雑誌だった。

「……え…」

それは、書店で売っている賃貸物件の雑誌。どうしてそれがこんなところにあるのか…瞬時には分からずに、私は目を瞠った。

「……」

パラとめくると、ところどころ先生がやったのだろう折り目がついている。それはどれも、ここからかなり離れた場所にあるマンションやアパートの間取り図だった。

ドクン、と、胸が高鳴る。鼓動は緊張よりも、嫌な予感を感じ取って震えた。

「…っ」
手にした雑誌を思わず取り落としそうになったその時…、玄関でガチャリと音がした。先生が帰ってきたんだ。メールすらし忘れていたことに今頃気づいて、私は思わず息を飲んだ。

鍵を開けて入ってきた先生は、玄関にある私の靴と、リビングに座り込んでいた私自身を見つけて大きく目を見開く。それから、何でもないようにいつもの無表情に戻った。
「なんだ、来てたのか」
靴を脱いで入ってきながら、そう言う。迷惑そうでも嫌そうでもない表情を浮かべてから、先生は少しだけ苦笑いを漏らした。

「悪ぃな、今部屋散らかってんだろ」
「…珍しいですね」
何と言っていいかわからなかったので、曖昧に言葉を返す。そうしてリビングへやってきた先生は、私が手にした雑誌を見て一瞬硬直した。
「……」
だけどすぐに、態度を戻す。さすがにそれを私が見逃すはずはなかった。

「……先生…引越しするの…？」
「ん？」
知らないフリをしようかとも思った。一瞬とはいえ硬直したということは、聞かれたくないかもしれないと…。でも黙っていて不安を生むのも嫌だったので、そう尋ねる。先生は小さく首を捻ってソファに座ると、「来い」と言うように私に手招きした。

「ここじゃ学校近いからな、この辺に住んでる生徒も多いだろ。お前が来るならもうちょっと遠い、知り合いのいねぇような場所の方がいいんじゃねぇかと思って」
「……それだけ？」
「あと、そろそろピアノ買おうかと思ってる。ここじゃ置けねぇし」
「……」
「それに、再来月アパートの更新料払わなきゃなんねぇし」
隣に私を座らせながら、先生は言った。それらが積み重なって、ちょうど良いタイミングなんだと…。

そう言われたら、私は何も言えなかった。
それ以上問い詰めたら、先生が手の届かない遠いどこかへ行ってしまいそうな予感がしたから。

そう、この時私の胸中は、嫌な予感だけが占めていた。先生の態度にどこか違和感を抱かざるを得なかった。

その異変は、恐らく今朝までの私なら気づかない微かなものだった。でもF組の子たちや苑崎先生の言葉があったからこそ、気づけたんだと思う。

そう思うと…何となく理解できる。

なっちゃんや私が気づかなかった先生の異変に、同級生や苑崎先生が気づいたわけじゃなかったということを。

本城先生の方が…私やなっちゃんに気づかれないようにしていたんだ。

4

どうするのが一番いいのか、この時にはもう分からなくなっていた。先生には今、私やなっちゃんに知られたくない何かがある。それはもはや私の中では確信に変わっていた。

だけど先生自身がそれを悟られないようにしている。私は知らないフリをした方がいいのか…それともあえて尋ねた方がいいのか、もうどうするべきか分からなくなっていた。

「飯食いに行くか。今冷蔵庫何もねぇし」

スーツを着替えた先生は、部屋から出てきながらそう言う。小さく頷いた私に、先生はふっと微かに笑った。

「なんだよ、神妙な顔して」

「……ううん」

何でもないかのように笑う先生。それも無理して作っている表情なのかと思うと、胸のどこかがキリと痛んだ。

「何食いたい？ちょっと遠出するか」

お財布やら携帯やらをズボンのポケットに入れながら、先生は私に尋ねる。「何でも」と答える代わりに、私はリビングで座ったまま先生を見上げた。

「ねぇ先生」

「ん？」

先生は、目線を逸らしたりはしない。むしろ私を見下ろす目は優

しいと思う。でも…何かを隠したい余り気づいていないんだろうか？それはそれで先生らしくないのに。

「今日泊まっていい？」

「……」

私の問いに、先生は一瞬黙った。少しだけ目を細めてから、苦笑いを浮かべる。

「他のクラスの補習でやった小テストの採点しなきゃなんねぇんだ」

「…邪魔しないから」

「そういうわけにいかねぇだろ、テスト類置いてあるところにいさせらんねぇよ」

「……うん」

それは確かにそう…だろう。先生は前からそういうところはきちんと線引きする人だから。

でも…やっぱりいつもなら、もっと意地悪い言い方をしたりするのに。説得して諭そうとするなんて先生らしくない。

小さく吐息を漏らして、私はゆっくりと立ち上がった。

「先生、私ラーメン食べたい」

「そんなんでいいのか」

「都内のおいしいとこのやつ」

ワガママっぽくわざと言ってみたけれど、先生はやっぱり「分かった」しか言わない。なんだかそれが、やけに悲しかった。

「お前体格の割にあんまりカロリーとか考えないよな」
「そうですか？」
札幌から暖簾わけされてきたという有名店のラーメンを食べ終えて車で帰る頃、先生がそんなことを言った。
「お前らくらいの年のダイエットに精を出す女子高生は夜にラーメンは食いたがらねぇだろ」
そう言えば智子はそんなことを気にしたりしてたっけ…。智子もどちらかと言うと細い方なのに、なんて思ったことがあった。
「私はダイエットよりおいしいもの食べる方優先です」
笑って言うと、先生も煙草を片手に微かに笑んでみせた。

ちょうどその時だった。
「……あ」
鞄に入れていた携帯電話が、けたたましい着信音を鳴らした。
「…っ」
その音が車内に鳴り響いた瞬間、私の隣で先生がビクリと大きく肩を震わせる。
「……？」
確かにマナーモードにすることも忘れ、音量も大になったままだ。だけどそんなに反応するものだろうか…？先生のその反応に目を瞠って、思わず私もそちらを見てしまった。

「……」
だけどすぐに、先生は無表情に戻る。前の道路を見据え直し、私

には手振りで「出ろよ」とでも言うように合図した。

開いた携帯電話に浮かんだのは、同級生の女の子の名前。

「もしもーし?」

通話ボタンを押して出ると、向こうからも明るい声が返ってきた。

「うん、うん、いいよー。じゃあメール待ってるね」

2，3のやり取りをして相手との通話を終わらせる。手にしていたその電話をパタンと二つ折りに閉じた途端、先生が隣で煙草の煙を吐いてから言った。

「なんで今時の女子高生の携帯着信音が普通の家電の音なんだよ」

苦笑い気味に言う先生に、私は隣を振り返る。

「かわいくないですか?その辺の変な着メロより」

「全然。音でかいし」

「…う…ちょっとマナーモードにするの忘れてただけじゃないですかぁ」

答えながらもう一度電話を開き、私はマナーモードにするボタンを長押しした。

…そうか…先生がさっきびっくりしたようだったのは、やっぱり着信音の大きさのせいだったのかも。

そう自分に言い聞かせたのは、心のどこかで嫌な予感がしたからかもしれなかった。

＊＊＊＊＊＊

胸の内に渦巻く不安と良くない予感は、漠然としすぎていて言葉にするには難しかった。どれも気のせいかもしれないし、一つ一つには取るに足りないことに思えたから。ただ、塵も積もれば…というか、重なりあうとどうも嫌な気分になる。違和感と不安は、深まるばかりだった。

「適当に酒と食うもん持ってきて。それとこいつにノンアルコールの」

翌日の夜、行き慣れたジャズバーでなっちゃんはメニューも見ずにそうオーダーした。言いようのない不安を智子たちに説明するのは難しく…かといって一人で抱えるには重すぎて、誰かに聞いてほしかった。

それでなっちゃんなら…と思って声をかけたら、ここに連れてきてくれた。内緒話をするには確かに学校よりここの方がいいだろう……けど。

「お客さん、頻繁に女子高生連れてこられると困ります」

バーテンダー姿の修司さんが、呆れたような顔でなっちゃんにそう言った。

「私服着てたらこいつ未成年に見えねぇだろ。そもそも俺そんなに頻繁に連れてきてねぇぞ」

連れてきてんのはユキだろ、と唇を尖らせながら言って、なっちゃんはソファに深く座る。

「大体、親友の彼女連れてくるってどうかと思うけど」
「ユキの許可は取ったから大丈夫」
「理沙は」
「知ってるよ。今日は実家に帰ってる」
「で、お前ら何しに来たの」
「密談。いいからお前は店員らしく仕事しろ」
しっし、と追い払うように手を振ってから、なっちゃんはポケットにもう一方の手を伸ばした。それから二、三度服の上からポケットをポンポンと叩いて、そこに何もないことを思い出してから手を戻す。
最近禁煙を始めたせいで、吸っていた頃の癖が抜けないらしい。こうしてここのところなっちゃんはよくポケットに手をやってしまう。

奥さんが妊娠した途端に煙草を辞めようと決意した辺り、なっちゃんはやっぱりイイ旦那さんだと思う。

「で、どうした?」
尋ねられて私は、なっちゃんにやっぱり本城先生の様子がおかしいらしいことを告げた。しかもそれを、私となっちゃんには悟られないようにしているんじゃないかということも。
「…何で?」
「……それは…分かんないけど…」
「具体的にお前は何にユキの様子がおかしいって感じたんだよ?」
「言葉にすると難しいんだけど……なっちゃん、笑わない?」
「今更?」
鼻であしらうように笑って、なっちゃんはニヤッと嫌な笑みを浮

かべた。

取るに足りない小さな違和感を、私は一つずつ説明した。

まず先生らしくないくらい優しいことと、先生の部屋が今までからは想像もつかないほど散らかっていたこと。そこにあった賃貸情報誌と、引越しを考えているらしいこと。

携帯電話の着信音にこちらが逆に驚かされるほどびっくりしていたこと。口にしだすと、ポロポロといくつも零れてきた。

「…確かにどれも気のせいかもしれねぇぐらいのことだけど…」

腕組みをしていたなっちゃんが、それをほどきながら椅子に座り直す。話の間に運ばれてきたお酒のグラスに口をつけながら、肩を竦めた。

「そんだけ重なると気になるな」

「…そうでしょ？」

小さく応じると、なっちゃんは「うーん」と少し考える素振りをする。おしゃれな黒縁の眼鏡を指で押し上げてから、足を組みなおした。

「あと他に、何かねぇのかよ？最近あった変わったこと。すんげぇ些細なことでもいい」

「他に？……えーっと……」

こめかみの辺りに指を押し当てて、私は記憶の糸を手繰り寄せる。何か忘れている…もっと小さなことがあっただろうか。そう思った

瞬間ふと思い浮かんだのは、ある一人の女の人の顔だった。

「全然関係ないことなんだけどね」
前置きすると、なっちゃんは小さく頷き返した。
「この前都内に映画見に行った時、携帯に電話かかってきて先生が少し離れた時があったの」
「うん？」
相槌を打つなっちゃんの声を聞きながら、私はその時のことを必死で思い出す。
「確かあの時…私、すごく背の高い女の人に話しかけられて」
「女…？」
「『あなたが今さっき一緒にいた男の人、彼氏ですか』って聞かれた」
「……何だそれ」
眉間に皺を寄せて、なっちゃんは首を傾げた。…それはそうだろう。私だって未だにこの問いの意味が分からないんだから…。

「ユキにそれ言ったのか？」
「うん…でも背の高い女の人ってだけじゃ誰か分かんないって…」
「まぁそうだろうな」
「昔先生と付き合ってたお姉さま方の一人じゃないかって言ったんだけど」
「そりゃねぇだろ。お前と一緒の時にそんな声のかけ方してくるめんどくせぇ女と遊んでねぇよ、あいつ」
「先生もそう言ってた」
「……あぁ、そう」
どこか呆れたようにため息をついて、なっちゃんは肩を竦めた。
それを見ながら考えていた私は、もう一つのあることを思い出す。

「あ、あと…先生のお父さんに会った」
「へぇ」
少し意外だったのか、それまでとは声のトーンを変えてなっちゃんが興味深そうにこちらを見た。
「長野で進学校の校長やってる人だから、オーラあっただろ」
「え！校長先生だったんだ…どうりで…」
萎縮しそうなほどの雰囲気を思い出して、私は思わず苦笑いを浮かべる。

「その時…そういえば先生、一回だけ様子がおかしかったことがあった…かも」
「？何かの話の時に？」
「うん……なんだったかな…」
思い出そうとして、あの時の会話を頭の中で再現する。かなり緊張していたので正確に思い出せるかは怪しかった。
でも、確か…。

「先生のお父さんの家に、昔の教え子さんがよく遊びにくるっていう話をしてて…」
あの日も、翌日に「平野さん」って人が来るからと言って帰っていったはずだ。そしてその「平野さん」の名前が出た後だったと思う。

「……『藤枝さんと牧野さん』…」
ポツリとその名前を口にしたけれど、正確さは自信がなかった。
ただ…お父さんは『何年かぶりに藤枝くんと牧野くんも家に来たんだ』と言っていた気がする。

そして私の記憶が確かなら、先生が一瞬固まったように見えたのはその直後。
お父さんがその名前を出した時だったように思う。

「なっちゃん…何か知ってる？」
尋ねると、なっちゃんは少し申し訳なさそうに眉を寄せて「…いや…」と呟いた。
「それだけじゃやっぱり分かんねぇな…」
「そうだよね…」
「まぁ、何か思い出したら言えよ。俺もちょっとユキに探りいれてみるし」
「……うん…」
声は弱々しくて、消え入りそうだったかもしれない。それに苦笑いを漏らすと、なっちゃんは私に目の前のグラスを差し出した。

「まぁ、とりあえず食って飲め。どうせ最近色々考えすぎてろくに食ってねぇんだろ」
「…いや…食べるのはちゃんと食べてるけど…」
「……お前意外に神経図太いな」
「なっちゃんもお酒飲んで…車で来たのにどうするの？」
「ん？あぁ、帰りは運転手呼ぶから大丈夫だ」
「……その運転手って……」
「ユキの仕事もどうせあと1，2時間したら終わるだろ」
…やっぱり。思わず苦笑を漏らした私の前で、なっちゃんは悪びれもせずに笑っていた。

5

「あーぁ、完全に潰れちゃったねぇ」
どこか呆れたような声が降ってきたのは、なっちゃんとこのお店に入って3時間ほどが経過した頃だった。
なっちゃんに先生のことで相談をした後、それからはくだらない話を交えながら雑談していた。なっちゃんはその間結構なペースでお酒を飲んでいて、今ではすっかりテーブルに突っ伏してしまっている。

「ユキ呼んであげるよ。和美ちゃん、もう少し待てる？」
「あ、はい…すみません」
連れてきてもらったはずの相手がすっかり眠ってしまっていることにあたふたし始めた時だったので、修司さんのそんな申し出は天の助けにも思えた。しかも先生を呼ぶにしても…私はまだいくら彼氏とは言え足に使うために呼びつけるのは気がひける。修司さんにペコリと頭を下げると、彼はニッコリ笑ってグラスを下げながら戻っていった。

「なっちゃん…ちょっとくらいセーブしてよー」
スースーと寝息さえたてて眠る横顔にピン、とデコピンをするフリをする。私はお酒なんて飲めないから分からないけれど、どうも体調によって酔い方も違うらしい。なっちゃんは確かいつもはそれほどお酒に弱い方じゃないと聞いているので、疲れているのかもしれなかった。

「ごめんね…」
私がプライベートな時間まで相談に乗ってもらってしまったのも疲れの原因かもしれない。そう思って呟いたけれど、当然返ってくる声はなかった。

その日はカルテットの演奏が一組入っていたので、私は潰れたなっちゃんの隣で流れるメロディーに耳を傾けていた。そうして数曲の演奏を終えたのは、1時間くらいしてからだったと思う。
「何やってんだ、お前ら」
さっきの修司さんと同じように呆れたような声が頭上に降り注いできて、私はバッとそちらを見上げた。

「先生…」
「完全に寝てんな、こいつ」
ベシッとなっちゃんの頭を軽くはたきながら、先生は私となっちゃんを交互に見比べる。それに気づいて近寄ってきた修司さんが、
「悪いな、ユキ」と肩を竦めて苦笑いしていた。
「俺まだ仕事あるから、送ってやれないし」
「あぁ、別にいい。悪かったな」
言いながら先生は、ポケットの財布からクレジットカードを出す。それに慌てて自分のお財布を出そうとしたけれど、先生にも修司さんにも遮られてしまった。

「結構飲んでたのか、こいつ」
「…うーん…そうだな、いつもより少し多めだったかな」

「……ふーん」
修司さんの言葉に、尋ねたのは自分の方なのにどこか興味なさそうに先生は相槌を打つ。それからなっちゃんのポケットの中から車のキーを取り出して、私に向けて放り投げた。
「白石、先に行って車に冷房かけといてくれ。こいつ運ぶから」
「あ、は、はいっ」
勢い良く返事をして、私は立ち上がる。言われるままにそれを受け取って、先にお店の入口ドアをくぐった。

なっちゃんは長身だし、運ぶのも大変だと思う。本人はすっかり眠っていて歩く気もないようだ。仕事中のはずの修司さんと2人がかりで、先生はなっちゃんを運ぶ。指示された通り先に車に戻っていると、2人は後部座席になっちゃんを投げるように押し込んだ。

「悪かったな、修司」
「いや。…和美ちゃん、じゃあ気をつけてね」
先生には小さく首を振った修司さんが、私に向けてまたあの人懐こい笑みを浮かべる。「ご迷惑をおかけしました」と頭を下げてから、私は先生に促されるまま助手席に座った。

「…先生も、ごめんなさい…」
運転席に先生が乗り込んだ時に、私はタイミングよくそう謝る。
「何でお前が謝るんだよ」と小さく笑った先生は、乗り慣れないはずの人の車をそれでも勝手知ったるように走らせ始めた。

「仕事…終わりました？」
「ん？…あぁ…まぁな」
歯切れの悪い返事をして、先生はウィンカーを出す。それからしばらく何かを考えるように黙りこんでしまったので、私は何となく他の話題を続けるのも気が引けてしまった。

先生が何かを隠しているんじゃないかと思ってしまった今…何をどう話していいのか分からなくて。どうでもいいようなくだらない話題さえ、なぜかこの時は浮かんでこなかった。

後部座席では大きな体を曲げて横になったなっちゃんがすっかり眠っている。なっちゃんさえ起きてくれていたらこんなに気まずくはならなかったかもしれないのに…。なんて、そんな八つ当たりもいいところなことを考えながら私はただ流れる風景を眺めていた。

「……白石」
先生が、重そうに口を開いたのはもうすぐで私の家に着くという頃だった。どうやらなっちゃんより先に私を降ろすつもりのようだった。その声音がいつもと少し違って感じたので、嫌な予感がした。先生にこういう声で呼ばれる時は、大体私が聞きたい話だった試しがないからだ。
「…はい？」

恐る恐る聞き返すと、先生はそれが分かったのか小さく息をついたようだった。少しためらうように一瞬黙りこんでから…やがてまた何かを決意したかのように言葉を継ぐ。

「…しばらく…うちで会うのはよそう」

そう続いた声は、決して冷たさを含んでいたわけではなかった。突き放すような言い方でもない。だけど私は自分の耳を疑って、大きく目を見開いた。

「どう…して…？」

「補習のまとめでテスト続きだし、お前も昨日見ただろ。うち今片付いてねぇんだ」

「そんなの、別にいいのに…」

「俺が良くねぇんだ」

苦笑い気味に言った先生は、赤信号に変わったのを見て静かにブレーキを踏む。そしてそれから、なだめるように私の頭をポンポンと軽く叩いた。

「代わりに、明日どっか遠出しようぜ」

「…はぐらかさないで」

「そんなことしてねぇよ」

もう一度笑いながら、先生の手は今度はスイッと髪を撫でていく。

何だろう…言いようのないこの違和感。

突き放すわけではないのに…それでもこんな底知れない優しさの方が嫌だった。

「この前…勝手に行っちゃったから怒ってる?あの時は…、ちゃんと連絡しようとしてたんだけど…」
「いや、そういうことじゃねぇって」
手を軽く振って否定して、先生は信号が変わったのに気づいて再びアクセルを踏んだ。
前を見据えたまま、「ただ」と続ける。
「夏休みらしく、どこかに出かけるのもいいだろ」
「でも…誰かに見られたらどうするの?」
「……その時はその時だ」
先生らしくない投げやりな言い方だった。

ふと思い出したのは、いつか見たテレビのくだらないコーナー。
浮気し始めた男の人は最初は優しくなる、なんて言ってたっけ…。
そうだとしたら、家に来るなと言われるのも分かる気がする。でも…先生はそんな人じゃないはずだ。
浮気をするくらい他に好きな人ができたら、私とはきっぱり別れるだろう。中途半端なことはしないと思う。

「…分かった、鍵返す」
「……だから、そういうことじゃねぇって」
どこか困ったような呆れたような…少し不思議な表情で先生はため息を漏らした。
「っ、全然わかんないよ…っ、先生の言ってること!」
思わず叫んでしまいそうになりながら、私はそう大声で言う。
後部座席のなっちゃんが起きてしまうんじゃないかとチラリと思ったけれど、それに構うほどの余裕はなかった。

先生は、肝心なことは答えずに「…そうだよな」と呟くだけ。
それにまたカッとなりそうで、何かを言いかけたけれどそこで車が停車した。気づけばもう車は家の前に着いている。

「明日、１０時に迎えに来るから」
「無理っ、私明日はモモちゃんとサクラと約束があるから」
「じゃあ明後日」
「知らないっ！」
シートベルトのロックを手早く外して、私は勢い良くドアを開けた。それからそのまま、バタンと乱暴にそれを閉める。

ワケの分からない言葉に振り回され、怒りと不安とで押し潰されそうだった。

振り返ったら、絶対泣いてしまうだろう。

それが分かっていたから、私は決して後ろは見ないまま小走りに家の門を開いた。

6　side：Takahiro

白石の相談を受けて俺がこちらの思惑を一切顔に出さずにすんだのは、自分でも奇跡に近かったと思う。

元々ポーカーフェイスなんてユキの十八番、俺は得意じゃない。言いたいことは言うし、言うべきでないことでもある程度顔に出る。そんな俺が白石の前で顔に出さなかったんだから、褒められてもいいくらいだ。

白石が、乱暴に車のドアを閉めて飛び出して行った。俺の車に何するんだ、という抗議は当然だがする気にすらならない。今のあいつの心境を考えれば当然のことだからだ。

代わりに、俺は再び走り出した車内でゆっくりと上体を起こす。靴を脱いで、運転席のシートを後ろからゴスッと蹴った。

「おい、このままお前の家に行け」

「……やっぱり狸寝入りだったか」

ミラー越しに目が合ったユキは、目を細めて俺を見る。

「もしかしたらと思ってた。サシで連れていった相手を放っておいて酔って潰れるなんて、お前らしくねぇからな」

「分かってんのに俺の前であんな話するってことは…よっぽど切羽詰ってんな、お前」

「……」

ちっと舌打ちをする音が聞こえた。それに「ふん」と鼻で笑うと、俺はもう一度シートを蹴った。

「全部吐いてもらうぜ、ユキ。白石の口から聞き捨てならねぇ名前を聞いたんでな」

「……白石が…何だって？」

「『藤枝と牧野』。白石の頭の良さが仇だったな。一回お前と親父さんの会話に出てきただけの名前を、あいつが覚えてたぜ」

「！……」

「この際、隠し事はなしだろユキ」

「……」

ユキに何があったのかなんて知らない。ただ、白石からその2人の人物の名前を聞いた時、ユキが平常心でいられるはずがないことは安易に想像できた。

ここまで聞かされて想像させられて…引けるわけがない。ユキの話を聞かせてもらうだけの権利があると、俺は断固主張する。

「……頼むから、何を聞いても妙な気は起こすなよ」

ユキの言葉は、普段なら揶揄するような程度のものだっただろう。だけどこの時、あいつの声音は深刻なくらい真剣だった。

＊＊＊＊＊＊

通されたユキの部屋は、何度も行ったことがあったけれどそれでも初めてみるように感じるくらい散らかっていた。こいつの性格から考えても、これだけ部屋中が荒れているのはまず考えられない。

飲みかけのビール缶はまるでヤケ酒でもしたように見えるし、白石の話通り賃貸情報誌が床に散乱している。とりあえずソファの上のものだけを大雑把にどかして、俺はそこに腰を下ろした。

「何から聞けばいいのか分かんねぇけど…とりあえず、お前引越しする気なわけ？」

「……」

俺とは少し離れた位置に壁を背もたれにして立ち、ユキは質問に小さくため息をついて返す。

「白石に言ったらしいな。学校から遠くなった方が都合いいって？」

「…それも事実だ」

「だけどそれだけじゃねぇだろ」

「……」

「逃げたいんだろ、あの2人から」

「……」

ユキは、また黙り込んだ。それが分かったから、俺は逆に苛立ってしまう。

今一番精神的にキツイのは間違いなく白石でもなくユキの方だ。だけど、それでもイライラを収めることができない。

「…ここに来られるのも、時間の問題だ」

「だから白石にもう来るなって言ったのか」

「あいつだけは巻き込みたくない」

「……お前がそうやってかばおうとしても、白石は振り回されて不安なだけだ。もう十分巻き込んでんじゃねぇか」

容赦ない言葉に、ユキは「そうかもな」と自嘲に似た笑みを浮かべた。

そう…白石の相談を受けた時から、俺は気づいていた。ユキに何か変わったことがあったとしたら…何かを隠しているとしたら…。それは全て、ユキなら自分のためじゃなくて白石のためにだということに。

「ユキ、俺はな、怒ってんだよ」
「……分かってる」
「お前にじゃねぇよ、ふざけたあの女にだ」
手の甲を口元に押し当てて、俺は舌打ちまじりに吐き捨てる。何かがあったら噛み切ってやりそうなくらい唇を噛み締めていた。

「全部話せ。お前をここ数日苦しめてるのは何なんだよ!?あの女が何してんだ!?」
「……」
いつも以上に口数が少ないユキが、相当参っていることは分かる。だけどその直接的な原因までは分からない。そう思って尋ねた俺の言葉に、ユキはもう一度吐息を漏らすと何かを決意したかのように顔を上げた。

「貴弘…」
「あ?」
「そこのコンセント、差し込んでくれ」
「コンセント……?」
ユキが指差した方を見やると、そこにはこいつの家の電話があっ

た。
「？」
不審に思いながら、俺はゆっくりと立ち上がる。言われるままそちらへ行くと、確かにユキが言うようにその電話はコンセントが抜かれていた。

家の電話なんて、なかなかコンセントを引っこ抜くもんじゃない。首を捻りながら差し込むと、ディスプレイ画面がパッと明るく点いた。そしてそれを見やったすぐ後…タイミングを計ったかのように、呼び出し音が鳴る。着信を知らせるその音に、俺はユキに「おい、電話だぞ」と声をかけたけれどあいつはその場から動こうとしなかった。
「おい、ユ…」
声をかけようとした瞬間に、コール音が途切れる。どうして出なかったのか尋ねようとしたけれど、その瞬間、またすぐに電話が鳴った。

「おい、ユキ、いい加減に…」
出たらどうだ、と言いかけたけれど、すぐにまた切れる。それでもまたすぐに鳴り出すコール音…さすがにこの時には、俺は異常さを感じていた。

「なん…だ、これ…？」
しばらくそれが繰り返される。ユキは顔を伏せたまま、その場を動こうとはしなかった。
やがて数分たって、やっと電話が鳴り止む。それと同時に、ユキが自分のポケットから携帯電話を取り出した。そうして俺に向けて、軽く放り投げる。

その携帯は、着信音もバイブレータも消されていた。着信があってもディスプレイに表示されるだけで、ライトすら点灯しないようになっている。だけど俺が受け取ったその瞬間から、さっきの家電のようにずっと着信を受け続けていた。その相手の番号は、ユキが登録していない…知らない番号。

思わず背筋をゾッとするものが駆けぬけて、俺は声を失ったままその手にした携帯を見下ろした。

そして、思い出す。

ユキが家電のような音の白石の携帯の着信音に…異常に反応していたという話を。

「携帯は、まだいい。音もライトも消してれば、残された不在着信の件数に嫌気が差すだけで済む」

ユキが、俺から目線を逸らし気味に言った。

「着信拒否もしたし、非通知拒否もした。だけど、番号を変えてすぐにかけてくる」

「ストーカーじゃねぇか…！！」

「俺の方は…家電も携帯も、番号を変えることはできない。社会人にもなるとそんな手間かけてられねぇ」

確かに、学校関係に登録している電話番号を登録しなおすのは骨が折れるし、教員は意外に外部との関わりも多い。下手をしたら各関係者にまで手間をかけさせることになる。

そんな中番号を変えるなんて安易にできるもんじゃない。同じ理由で、指定着信するのも問題だ。登録している番号からしか急用の

電話がかかってこないとも言い切れないから。

こうして話している間も、俺の手の中で携帯電話は着信を訴え続ける。それに腹を立てた俺は、思い切って通話ボタンを押した。

『ユキ…！！！』

耳にあてたそれから、聞き覚えのある女の声が聞こえてくる。

恐らく、ユキは電話にずっと出ていないんだろう。あちらも切羽詰っているらしい様子から、それがよく分かった。

「おい…！」

何を聞いても妙な気は起こすな、と言っていたユキが、小声で俺を制止するように呼びかけてくる。女にバレないように抑えた声に、俺は手を振ってあしらった。

それくらい俺は腹が立っていた。

当たり前だ。どんなに健康な人間でも、こんなに電話攻撃をされれば精神的に病んでもおかしくないんだ。それが、いくらユキでも。

『ユキ、お願い！！会いたいの…っ』

「…おいあんた」

『…っ』

返ってきた声がユキのものでないことに気づき、電話の向こうの女が息を飲むのが分かった。

「今更…行禎に何の用だよ」

『……その声…貴弘くん…？』

「気安く俺の名前を呼ぶんじゃねぇ！！」

…ずっと、俺はこの女が嫌いだった。
かと言って子どもじゃない。この女の目の前で態度に出したことはない。だけど今度ばかりは…抑えきれる自信はなかった。

「おかしいだろ、何であんたが電話してこれるんだ」
『……』
「あんたは俺の中でもユキの中でも、『死んだ』はずだ」
『！……』

言葉を一瞬なくした女に、俺は畳みかけるように叫んだ。

「二度とこいつに電話してくるな！藤枝由香子！！！」

7　side：Yukisada

藤枝由香子に初めて会ったのは、もう何年も前の実家の縁側だった。

大学時代、夏休みに入って帰省した時ちょうど彼女と友人が俺の実家に遊びに来ていた。藤枝由香子と、その親友・牧野靖子は父親の元教え子だった。もう既に彼女たちは社会人になっていたけれど、たまに長期休みに入ると父に会いに遊びに来ていたんだ。

『君がユキくん？』

縁側で寝転がっていた俺に、声をかけてきたのは由香子の方だった。

『先生から聞いたの。息子さんが最近とんでもない不良少年だって』

『「少年」て年じゃない』

『そうかもね』

声を上げて笑った由香子は、そう応じながら断りもなく俺の隣に座った。

『どうしてもっと自分を大事にしないの？どうしてそういう悲しい「人との付き合い方」をするの？』

『……』

あんたに関係ないだろ、と言いかけた言葉を飲み込んで、俺は立ち上がった。だけどその袖を掴んで引き止めたのは、由香子の方だ。

『かわいそうな人』

透明感ある清楚な声が、小さくそう言葉を紡いだ。

その時は、うっとうしい女だとしか思わなかった。だけど帰省を終えて東京へ戻った俺は、そっちで由香子と再会することになる。

社会人になって都内で一人暮らしをして働いていたあいつは、しばらくそれから俺の周りをうろちょろしていた。最初は本気でそれに嫌気がさしていたはずなのに、あいつの言葉が胸に響くようになったのはいつからだっただろう。多分、付き合うことになるまでそれほど時間はかからなかったように思う。

俺の前でその由香子との通話を終わらせた貴弘は、怒りのあまり肩を上下させながら携帯の電源ボタンを乱暴に押した。パタンとそれを閉じると、俺に向けて投げ返す。

「……」

無言のままそれを受け取ると、貴弘の一言が効いたのかそれまでしつこかった着信がパタリと止んだ。

「で、お前はどうなんだよ」

由香子に対する怒りから、俺への言葉もきつめになる。鋭い口調で尋ねながら、貴弘は不機嫌そうにソファに座り直した。
「事故で自分のことを忘れてしまったはずの女が記憶を取り戻して出てきて…心が揺れたか」
「……本気で言ってんのか」
「本気でそう答えたら殴るくらいの用意はしてる」
貴弘はそう続けると、顔を顰めて舌打ちをする。

…由香子とは、もうとっくに終わってる。俺だけの記憶をなくして他の男と結婚した女を、今でも想っているはずもなかった。それは、数年ぶりに声を聞いたって変わらない。恐らく会って直接顔を見ても同じことだろう。
遺恨の念が残っていないことの方が奇跡なんじゃないか。…それも、白石がいてくれなかったら無理だっただろうと思う。

「お前、もう全部ちゃんと白石に話せ」
しばらく自分をクールダウンさせようと息を整えていた貴弘が、やがてそんな言葉を口にした。
「普段はポーカーフェイスのお前も、今回ばかりは態度に出すぎだ」
「……だな」
「白石だってかなり不安になってる」
「……」
本来なら、隠し通せる自信もあったはずなのに。ただここ数日鳴り止まない電話の音に、精神をやられそうで余裕がなかったのは事実だ。
一度目に誰からの電話か分からずに出てしまった時、「二度とかけてくるな」と怒鳴ったのに効果が得られなかったから余計だ。

「とりあえず、今日はここ片付けて俺の家に行くぞ」
「……何で」
「何でって…お前、さすがに今日はもう電話はこねぇだろうけど、ここじゃ安眠できねぇだろ」
「……」
「理沙なら実家に帰ってるから遠慮すんな」
「……あぁ」
荒れ放題の部屋に散乱したものを拾い上げながら、貴弘は率先して片づけを始める。それに習うようにビール缶をゴミ袋に投げ入れながら、俺も久々に部屋を片付けた。

「で、引っ越すのは本気なのか」
手は止めないまま、貴弘がそう尋ねてくる。ちょうど賃貸情報誌を手にしたからしい。その数冊を束ねて本棚に戻している。
「学校から離れた方が白石が来やすいのも本当だし、ピアノを買おうと思ってんのも本当だ」
「…でも、藤枝由香子がここに来ちまった時に白石と鉢合わせないように…ってのもあるんだろ?」
「鉢合わせないように…っていうよりは…」
一度言葉を切って、俺は小さくため息を漏らした。

「正直俺は、由香子は今かなり病んでると思ってる」
「…だろうな、あんだけ電話攻撃するのは普通じゃねぇよな」
「矛先が白石に向かうのだけはごめんなんだ」
「なるほど」
だからしばらく来るなって言ったのか、と、貴弘は頷きながら納

得する。
「…それも全部ちゃんと説明する」
「おぅ、そうしろ。あいつ珍しく相当怒ってたぞ」
「…だな」
多分白石に怒鳴られるのは初めてじゃないはずだ。だけど、あんな聞く耳を持たないような怒鳴り方をされたことはなかったはず。
「…まぁ、俺の自業自得だ」
明日は会えないと言われたけれど、夜になれば帰ってくるだろう。何とか会う方法を算段しながら俺は自嘲気味に呟いた。

小一時間ほどして、部屋はいつも通り整頓された。「悪かったな」と貴弘に呟けば、あいつは「全くだ」とニヤッと笑う。
「帰りにちょっと高いビール買ってこうぜ。お前のおごりで」
「……ちゃっかりしてんな」
貴弘の言葉に苦笑いをして、あいつの車の鍵をテーブルの上から拾い上げた時だった。

「……何だ？」
部屋のインターホンが、鳴らされる音がした。もうすぐ日付の変わりそうなこんな遅い時間に…と首を捻りかけたが、ある予感が胸をよぎって思わず貴弘と顔を見合わせた。
あいつも同じことを思ったんだろう。俺を片手で制止してから、自分が玄関の方へと向かう。

「……っ」

ドアの覗き窓から外を見た貴弘が、一瞬言葉を飲んだのが分かった。そのリアクションに、俺の悪い予感が当たったのかと思った。だけどそれとは逆に、貴弘は次の瞬間にはドアノブに手をかけて勢いよくそれを開く。

…由香子がここへ来たんだったら、決して開けはしないはずだ。

「……ユキくん、いる？」

扉の向こうにいた人物は、貴弘を見てすぐにそう言った。

真夜中なのに色の濃いレンズの眼鏡をかけたその人物は、その眼鏡を外しながらどこかけだるそうに尋ねる。

その声に、聞き覚えはあった。女にしては長身のそのスタイルも、覚えがある。ただ昔と違うのは、長かった髪がボブに短く切りそろえられていたこと。

「……靖子さん…」

由香子の親友の名前を、俺はこの時何年かぶりに口にした。

8　side：Yukisada

貴弘を押しのけるようにして、靖子さんは部屋に入ってきた。外で話をしても近所の迷惑になるだけだし、由香子がいないならその方が都合がいい。そう思って貴弘も俺もそれに反対はせず、ただリビングへと戻った。

「…久しぶりね」

靖子さんは、どちらかというと由香子とは正反対の、男っぽい風貌と性格をしていた。短くなった髪が余計にそれを演出している。昔から落ち着いた大人な人だと思っていたけれど、数年ぶりに会えばそれは更に色濃くなっていた。

「…あなただったんですね、映画館で声をかけてきたのは」

今やっと繋がった、白石から聞いた話。俺が白石の彼氏かどうか確かめたという長身のボブカットの女。誰かなんて見当もつかなかったけれど、今なら分かる。

「ごめんね、彼女に声かけちゃって」

言葉とは裏腹に、彼女は悪びれた様子もなくそう言った。勧める前にソファに座り、俺と貴弘を交互に見比べる。

「でもこれでも由香子をなだめたんだから、感謝して」

「……？由香子は…今…？」

「誰かさんに怒鳴られたせいで家で泣いてるわ」

チラリと貴弘を見て彼女は言ったが、貴弘の方は関係ないと言わ

んばかりにそっぽを向いた。それに小さく苦笑いしてから、靖子さんは再び俺を見据える。

「由香子の話をしてもいいかしら、ユキくん」
「……そのつもりで来たんでしょう」
「…あら、数年たってかわいげがなくなったみたいね」
今度は声をたてて笑って、靖子さんは目を細めた。そしてそれから、話し出す。何かを思い出すように…低めの声で。

「由香子がどうして急に連絡してきたのか…びっくりしたでしょう」
「……」
俺は特に答えず、ただ彼女の言葉の続きを待った。
「今から3ヶ月くらい前かしら…急に…由香子の記憶が戻ったの」
「！……っ」
思わず息を飲んだ俺の肩を、貴弘がグッと掴んだ。何を聞かされてもその重みと衝撃に耐えられるように、だと思う。

「元々由香子の事故による記憶障害は一時的なものだろうって言われてたから…不思議なことじゃないでしょ」
私としては遅かったくらいだわ、と続けて、彼女は少しだけ唇を歪めた。
「記憶を戻してからの由香子は、荒れ放題よ。当然よね、だって好きだった人と別れて、別の男と結婚してるんだもの」
「…それはあの女の勝手だろうが…っ！！」
俺より先に、貴弘が食らいつく。それを一瞥して聞き流しながら、靖子さんは肩を竦めてみせた。
「ユキくんの記憶だけをなくした由香子は、自分はあの男の人のこ

とが好きなんだと信じきって結婚したの。それが、ユキくんの存在を思い出したのよ?矛盾に病んでもおかしくないわ。眠ってる間に婚姻届を出されたようなものだもの」
「だからそれは…っ」
「黙って聞いて」
尚も抗議しようとした貴弘の言葉を、靖子さんは片手を挙げて制した。

「由香子は、すぐに彼と離婚したわ。ユキくん、あなたのことが忘れられないから」
「……」
「でも、さすがにそれは由香子の身勝手。私だってさすがにたしなめたわよ。でも、この前久しぶりに本城先生のお宅に遊びに行った時…由香子はやっぱりあなたのことを諦められないと思ったみたい」
「……」
「その数日後かしら、気分転換に由香子を映画に誘ったわ。…まさかそこで、あなたと彼女に会うとは思わなかったけれど」
足を組み直して、靖子さんは苦い顔をしながら続けた。
「由香子はすぐにあなたに声をかけようとした。だから、私が止めたの。代わりにあなたと一緒にいたのが本当に今の恋人かどうか確かめた。随分若い子みたいだったし、彼女じゃないってこともあるかもしれなかったから」
だけど彼女には随分怪しまれちゃった、と笑って、靖子さんは短い髪を指に絡めてクルクルと回す。

「その日は由香子を無理矢理連れて帰ったけど…余計に火がついたみたいね。それから、ひどいでしょう?由香子の電話」
「……知ってんなら、それも止めたらどうだよ…っ」

「もちろん何度も止めてるわよ。でも無理。由香子、完全に病んでるもの」
貴弘の言葉を何でもないことのように受け流して、あっさりと彼女はそう言った。

「あんたそれでも親友かよ？友達だったら何とかしろよ…！」
「だから、何とかしようとしたわよ。でも無理なの。由香子、何言っても聞かないもの。か弱そうに見えて実は頑固なところあるし、それに何より結局は私は由香子が一番かわいいから」
「……」
「だからね、ユキくん」
一度言葉を切って、彼女は改めて俺を見る。まっすぐなその目は冗談ではなく、本気で真剣な色を宿していた。

「彼女と別れて、由香子のところに戻ってくれない？」
「！？」
「あんた…っ！」
言葉をなくしかけた貴弘の声を無視して、靖子さんはまっすぐ俺を見つめていた。その目に、嘘なんてない。本気で彼女は言っているようだった。

「…ありえません」
はっきりと、そう言い切る。俺が由香子とやり直すなんて考えられない。
ましてや、白石と別れてまで。
「そう言うとは思ってたけど」

クスッと笑って、靖子さんは立ち上がった。
「言いたい放題言ってごめんね。それくらい由香子が本気ってこと、話しておきたくて」
「…無駄だって、伝えてもらえませんか」
「伝えてもいいけど、由香子を余計に炊きつけるだけだと思うわよ」
揶揄するような言葉に、俺は小さく舌打ちをする。
「大人しい女ほど、本気になったら何をするか分からないわよね」
「……」
「私も由香子が暴走しかけたら止めるつもりだけど…あなたも十分気をつけてね」
言いながら片手を後ろ手に振って、靖子さんは玄関へと向かう。
「和美ちゃんが傷つかないように、ね」
「!?」
「何で白石の名前…!」
背筋をぞっとさせた俺の隣で、貴弘が喚きかけた。それを手で制して、靖子さんは苦笑いを浮かべる。どこか複雑そうなその笑みに、悟った。
この人は、本気で由香子を止める気はないはずだ、と。

それだけ…親友である由香子を想っているんだろう。
それが間違った友情だとしても。

「じゃあね、ユキくん」
ヒラヒラと手を振る靖子さんは、静かにドアを開けて夜の闇に消えて行った。

9

私の携帯電話は、昨夜から一度も鳴ることはなかった。

あんな別れ方を自分からしておいて…私も相当身勝手だと思う。だけどそんな簡単に割り切れるものでもなかった。

「……」

センターにメールの問い合わせをするけれど、受信メールはない。その表示を見て小さく息を漏らした時、目の前で一緒にいたサクラが「何か連絡待ち？」とようやく尋ねてきた。

おそらく、半ば無意識のうちにも一日中携帯を気にしてしまっていた私に気づいていたんだろう。彼女がそう尋ねたのは、入ったファミレスで夕食を食べる時になってだった。

「…うん…ちょっとね…。ごめん」

苦笑い気味に答えて、私は今度こそ携帯電話を鞄の中に押し込む。それを見て、サクラの隣でもう一人、一緒に遊びに来ていたモモちゃんが小さく首を傾げた。

「別にいいのに。カズミンは誰かといる時に携帯気にしたりしないタイプだけど、皆結構そんなもんだよ？」

ドリアをスプーンでつつきながら、彼女はそう言う。

確かに、本来なら私は人と会っている時にあまり携帯を触る方じ

ゃない。なんだか相手に失礼な気もするし、実際自分もやられてあまり気分がいいものじゃなかったから。それでも無意識のうちに今日の自分がそうしてしまっていることに気づいて、小さく首を振って鞄を脇に置いた。

「彼氏？」

モモちゃんが、小さく笑って尋ねる。女の子らしいフワフワの髪を揺らして笑う彼女は、こういうわざと意地悪く笑う時はすこし小悪魔的に見える。

「うーん…まぁ…」

濁して曖昧に笑い返したけれど、モモちゃんは「やっぱり！」とどこか感心したように声を上げた。

「噂は本当だったんだー、カズミンに彼氏がいるらしいってこの前うちのクラスの男子たちが嘆いてたから」

「……そんなバカな…」

「そういえば美術部でもそんな話してる男子いたね」

モモちゃんの言葉に同意するように、サクラまで付け足すように言う。２人共、クラスも同じなら、部活も同じ美術部に所属している。

「いや、でも…昨日ちょっとケンカしちゃって…」

肩をすぼめるようにして小さくなって言うと、モモちゃんはまた意外そうに小首を傾げる。本当はケンカじゃなくて一方的に私が怒っただけなのだけれど…便宜上、ここではそういうことにしておいた。

「ケンカ！カズミンも怒ったりするんだー？」

「…私結構怒りっぽいよ？」
うなだれるように言って、私は小さくため息を漏らした。

…そう、昨日のはケンカなんて言えるようなものじゃなかった。
私が、勝手に怒っただけ。それで先生がただ困ってただけだ。

ワケの分からないことだけ言われて…ちゃんと説明もされなくて。
困惑してるのは、こっちの方だって言うのに。

自分の身勝手さを反省していたはずが、思い出せば思い出しただけまた腹が立ってくる。でもその憤りも、電話もメールもせずに何の弁解もしてくれない先生に対するものに段々とすり替わってきている気もした。

「…本気でまたイライラしてきた」
夕飯を食べ終えてサクラとモモちゃんと別れ、家までの帰り道を歩く。さっきまで乗っていた電車は冷房が効きすぎていて、外に出た瞬間にものすごい熱気に眉を寄せた。そんな中、私は恨みがましく小さい呟きを漏らす。その時でも、先生からのメールも着信も何もなかった。

小さく息をついて、私は携帯電話を閉じる。
もう今度こそ気にしない！そう心に決めて、再び鞄の中に携帯を放り込んだ。

家に着こうという時に時計を確かめると既に21時を回る頃で、帰路に着くサラリーマンをたまに見かけることはあったけれどあまり人通りはなかった。もう後5分ほどで家に着くという頃…その時になってようやく、鞄の中で携帯電話が震えたのが分かった。
低い振動音と共に着信を知らせるそれを、私は慌てて取り出す。気にしないと決めていたはずだったのに…自分でも苦笑が漏れた。

だけど取り出した携帯の画面に浮かんだ文字は、その相手が先生ではないことを知らせていた。
「…もしもし」
不機嫌さを押し殺すこともできず、私は遠慮なく低い声で応じる。電話の相手はその私の声に「機嫌悪そうだなー」とのんびりした口調で言った。

「何？もうすぐ家に着くんだけど」
『あぁ、そうなんだ？姉ちゃん帰ってくるの遅いから一応確認しようと思って。最近物騒だし』
「……なんて言っておいて、本当は頼みごとでもあったんでしょ」
弟の祥太郎は、私の呆れたような言葉に「バレたか」と笑った。

「何？」
『コンビニでコーヒー牛乳買ってきて』
「は！？そんな用事！？」
『今モーレツにコンビニのコーヒー牛乳が飲みたいんだよね』
「って言われても、私最後のコンビニもう過ぎちゃってるし…」
言いかけた私は、そこで思わず携帯電話を取り落としそうになった。
「……っ」
声を一瞬失った私に気づいたのか、祥太郎が『…姉ちゃん？』と低く呼びかけてくる。
「ごめん祥！やっぱり私もうちょっと遅くなる…！」
『え！？…って、姉ちゃん！！？』
驚いたような祥太郎の声を最後に、私は遠慮なく携帯のボタンを押した。通話を終わらせて、それを握り締めたまま駆け出してしまう。

角を曲がってすぐに見えたその百メートルほど先に…見知った車が止まっていたから。

「……よぉ」
邪魔にならないように停めた車の外に出てもたれかかるようにしていたその人は、走ってきた私に気づいて短くそう言った。

「……先生…」
怒っていたはずなのに全て吹っ飛んでしまった私に、先生は小さ

く笑う。持っていた煙草を車の灰皿に押し付けてから、細い顎で車を指し示すように合図して見せた。

＊＊＊＊＊＊

先生がいつからそこで待っていたのかは分からなかったけれど、恐らく短い時間ではないだろうと想像できた。それなら一度電話でもメールでもくれれば良かったのに…。そう言うと先生は「昨日のお前だったら何言っても聞いてくれそうになかったから」と言って笑った。

その横顔に、何か吹っ切れたような印象を受けたのは気のせいだろうか。

…何というか…最近の先生とは違う…いつもの先生に戻ったような感じ。

「まぁとりあえず、今日は遅くなったから明日出直す」

車を走らせ始めて言った先生の言葉に、私は「えっ」と声を上げた。車に乗ったはいいものの…このまま送ってもらったら、きっと数分もかからずに家に着いてしまうだろう。

「なんだよ、『え』って」

「だって先生…どうして今日ここに来たの？」

「……話をしようと思って来たけど…さすがに高校生連れまわせる時間じゃねぇからな」

小さく苦笑する先生は、やっぱり教師なんだと思わされる。それはそうだろう、普通の付き合ってる男女じゃなくて私たちは教師と生徒なんだから。

でも……。

「大丈夫です」

言うと、先生は前を見据えたまま片眉を持ち上げてみせた。

「今日父親はまた海外出張だし、母親は夜勤だし」

「弟は」

「口止めしておきます」

ニッコリ笑って言うと、先生は一度ため息をつく。呆れたような…それでもどこか感心したような、不思議な雰囲気で。

「お前の両親はやっぱり多忙だな」

「おかげさまで」

「それと俺は将来娘は育てらんねぇな。こんなんに育ったら心配でしょうがねぇ」

「『こんなん』って何！」

眉を顰めて言うと、先生は今度は声を上げて笑った。そして、家の方向とは逆にウィンカーを出す。

「弟だけにはちゃんと連絡入れとけ」

言われて、私はコクコクと頷きながら携帯電話を取り出した。

先生が連れてきてくれたのは、七夕祭りの日に来た県立公園にある丘の上だった。今日は少し曇り気味で、あの日のようにきれいな星空は見えない。それでも言い合わせたように車を降りて、あの時と同じ場所に立った。

そこで先生は、躊躇する様子もなく話し始めた。ここ数日に渡って、自分を悩ませるその状況を…。

私にとっては驚きの連続で、それはどこか恐怖すら感じさせるものだった。まさかここで、先生のあの前の彼女の名前を聞くとは思っていなかったからだ。

「じゃあ、あの日映画館で会ったのが由香子さんの親友で…」

頭を整理させながら、私は先生の言葉を繰り返すように言う。

「あの日から、由香子さんからの電話が鳴りっぱなしってことですか…？」

尋ねると、先生ははっきりと首を縦に振った。そしてそれから、昨日のなっちゃんとの会話、その後来た靖子さんという人とのやり取りまで教えてくれる。

「…黙ってて悪かったな」

そう締めくくった先生に、私は勢いよく首を左右に振る。それは…きっと私でも、すぐには話せなかっただろう。相手のことを思えば思うほど、巻き込みたくないと思ってくれただろう先生の気持ちは痛いほど理解できた。

「ごめんね、先生」
「……え？」
「昨日…知らずにひどいこと言っちゃって」
私に謝られるとは思っていなかったのか、先生は少しだけ目を見開いた。それからフッと表情を崩して、小さく笑う。何か答える代わりに、隣に並んだ私にその大きな手を伸ばした。ぐいっと引き寄せられて頭をかき抱くように抱きしめられる。

「本当は、昨日貴弘とも話してたんだ」
「…え？」
「正直由香子が、お前に何をしてくるか分からないだろ？そんな状況だったら…」
一度言葉を切った先生は、私の首元に顔を埋めるようにして続けた。
「本当に俺がお前のことを想うなら、別れた方が正解なのかもなって」
「…っ！？それは……っ」
先生の言葉に驚きの余り、声を失う。瞬時に反論する言葉がうまく出てこなくて、私は喉を詰まらせた。

だけど先生は、分かってるという風に首を横に振る。それから顔を上げて、今度は私の目を至近距離で見据えた。

「だけど、それでも俺はお前と別れるなんてできねぇんだ。このままだとお前を巻き込むって分かってても」

大きな手が、私の頬を滑るようになぞっていく。私は硬直したように動かないまま、正面から先生のその目を見つめ返した。

「……悪いな」

続く言葉に、私はようやく大きく首を横に振る。私のために私と別れるなんて…そんな思いやり、望んでなんていなかったから。謝られることでもない。むしろ…その道を選べないと言ってくれた先生の言葉に嬉しくて涙が出そうになったほどだった。

「…先生」

答える代わりに、私は低く先生に呼びかける。

「私は…こんなことで負けません」

相手が見えない何かなら怖いかもしれない。それでも今回のそれは、明らかに生身の人間なのだから。大抵のことには耐えられるし、抵抗も反撃もできないほど大人しい性格でもない。

「…たくましいな、お前」

苦笑いを浮かべるようにした先生が、どこか感心したようにそう呟いた。

…そう、だってきっと、辛いのは私じゃない。

辛いのも苦しいのも先生の方だ。だからむしろ、その由香子さんの矛先が少しでも私に向けばいいとさえ思う。2人なら、きっと立ち向かえるという気がしたから。

「明日不動産屋に行ってくる」

そう言って話題を変えた先生が、「帰るぞ」というように踵を返して駐車場の方へ向かう。

「……」

それについていきながら、私は言葉も返せずに先を行く先生のシャツの裾を引っ張った。

「なんだよ」

答えもせずにグイと引っ張った私を、訝しげに先生が振り返る。その目に覗きこまれるようにして、私は言いにくいことを言うように、小さく首を傾けてみせた。

「……一緒に行っちゃダメですか？」

「不動産屋に？行ってもおもしろいことなんて何もねぇよ」

首を捻りながら答えて、先生は前を向く。さっさと歩き出してしまうそんな先生から自然と手を離してしまい、私は少しうなだれるようにしながら数歩遅れてついていった。

やっぱり先生は分かってない。面白いことがあるかどうかじゃなくて、こんな時だから一緒にいたいだけなのに…。

「……」

肩を落として後ろを歩いていると、いつの間にか車の前までたどり着いた。助手席側に回りこもうとした時に、ドアを開けようとした先生がわずかに下を向いたまま再び口を開く。

「明日11時に迎えに来る」

続いたそんな言葉に、私はわずかに目を見開いた。

だけど、先生はいつもの無表情で。むしろ私とは目線も合わせないまま、運転席に乗り込んでしまう。

その言葉に瞬時に気分が浮上した自分は、本当にゲンキンだと思う。パァッと顔を輝かせて、何度も大きく頷いて返した。

「やっぱりいつもの先生だっ」

助手席に乗り込んで嬉しそうに言うと、先生は「はぁ？」と顔を歪めただけだった。

やっぱり、先生にはこういう態度でいてほしいと思う。

そしてこんな先生とだからこそ…私はこの先に降りかかるかもしれない現実にも、立ち向かえる気がしていたんだ。

10　side：Yukisada

「やけに機嫌良さそうだな、今日は」
書類を持ってくるフリをして化学準備室に来た貴弘が、どこか呆れたような口調でそう言った。
「…は？どこが」
「なんとなく」
眉を顰めて返した俺に、貴弘は肩を竦めながら応じる。単なるヒマ潰しに来たらしいあいつは、当たり前のようにその部屋の椅子に偉そうに座った。

「昨日白石と話できたんだろ？その様子じゃ」
「礼は言わねぇ」
「いや言えよそこは、人として」
勝手知ったるようにここのコーヒーメーカーでカップにコーヒーを注いだ貴弘は、一口それを啜って熱さに眉を顰める。戸棚にファイルを戻しながらそれを横目で見やってから、俺も同じように肩を竦めて返した。

「で？今日は休みじゃなかったっけ？」
「あー、午前中不動産屋回ってる間にやり残した仕事思い出した」
「何だそれ。引越し先は見つかったのかよ」
「何とか」
午前中に行った不動産屋で、紹介された中で希望に合致しそうなのは2件しかなかった。そのうちの一つを白石がやたら気に入っていたので、不動産屋にも強く勧められた。断る理由もなかったので、

その部屋で審査が通るか待ちの状態だ。２ＬＤＫのマンションで今より広めだし、場所も駅からそれほど遠くなくて申し分ない。何より学校からは遠くなるので、白石が来やすくなるのも事実だ。

「で、そういや白石は？」
「ちょうどさっき友達から呼び出しがあってそっち行った」
「あいつ結構顔広いよな」
「まぁな」
その中で、俺とあいつが付き合ってることを知っている人間はどれだけいるんだろう。ふとそう思ったけれど、あいつのことだ。いつもの３人以外にはほとんど話していないに違いない気がした。

「…で、あっちはどうなった？」
不意に貴弘が、少し遠慮がちに再び口を開く。恐らく、本当は一番聞きたかったのはそこだったんだろう。尋ねる貴弘の言葉にわずかに眉を持ち上げて、俺は首を振った。

「今んとこあれから何もねぇな」
「俺が怒鳴ったから引いたのか…？やけにあっさりだな」
「だといいけど…こうぱったり止むと逆に不気味…」
俺が、そう言いかけた時だった。

机の上に放り出してあった携帯電話が、低い振動を伝えた。その小刻みな震えのせいで、少しずつ机の上で携帯が動く。いつも通りのそんな何てことはない光景も、今の俺にはどこか不気味に見える。

今日はそもそも、ケイコから今度のライブについて電話があるはずだった。だから電源を落としはしていない。てっきりその電話だろうと思って携帯を拾いあげた俺は、画面に映った文字に思わず硬直した。

……申し合わせたかのようなタイミングだった。

俺の携帯に登録していないその番号は、嫌でも覚えている。あいつのものだ。着信拒否してもすぐに番号を変えてくるので、今はもう面倒くさくて拒否もせず放置していた。

「藤枝由香子か」

「……」

無言で俺は、携帯を再び机の上に放り投げる。今日は、さすがに貴弘もそれを取り上げようとはしなかった。2人して厳しい顔つきで、それを睨むように見据えてしまう。

「仕事中までこれじゃたまったもんじゃねぇな」

不機嫌そうに言って、貴弘は辟易したように顔を歪めた。ため息まじりに小さく頷いた俺のすぐ傍で、その携帯は途切れたり着信を受けたりを繰り返す。

「警察…に行っても無駄だしな、この段階じゃ」

「だろうな」
「何なら俺がもう一回怒鳴ってやろうか」
「…いや、いい」
恐らく貴弘に何を言われても…由香子に効果があるようには思えない。昨日のようにその時は泣き崩れたとしても、きっとすぐに矛先は俺に戻るはずだ。

何とかしなきゃいけないのは、俺自身だった。今までは無視するのがベストだと思っていたけれど、ここまできたらそうもいかない。何より俺は…昨日の白石の言葉に救われたから。

『私は負けませんよ、こんなことで』
俺の勘違いかもしれない。でも、2人でなら立ち向かえると言われた気がした。そんなあいつの強さに救われた今、そう言ったあいつのためにももう由香子を無視するのは得策ではないと思う。

「……」
目の前の携帯電話が、しつこく鳴り続ける。それを見下ろしていた俺の頭上で、ちょうど校内放送が流れた。電話だかなんだかで、貴弘を呼び出す放送だ。
由香子からの着信と俺の様子を気にしながらも腰を上げたあいつは、ためらいながらも部屋を出て行った。

それを見送って、俺は尚も鳴り続ける携帯にゆっくりと手を伸ば

す。

「……はい」

これまで無視し続けてきた通話ボタンを押して、俺はいつもより低い声でそう応じた。

＊＊＊＊＊＊

ずっと出なかった俺が電話に出たことが意外だったのか、携帯の向こう側で由香子が一瞬声を失ったのが分かった。

でもそれも刹那のことで、すぐに持ち直す。

『ユキ…』

呼びかけてくる声は数年前より少し疲れているようにも聞こえた。

そのせいか、ちょうど思い出す。由香子の声を当時最後に聞いたのも、あいつが俺を必死で呼ぶ声だった。呼び方すら変わらないそれに、どこか寂寥感に似たものを感じたのは当時の胸の痛みを思い出したからだろうか。

「…もう、電話してくるなって言ったよな」

着信地獄に苛まされた一番初め…一度だけ出た電話で、俺は確かにそう言った。ただあの時はここまでひどくなるとは思っていなかったし、今更何だという思いだけだったから由香子の話を聞こうと

いう姿勢は全くなかった。
話し合おうという気もなかった。ただ、無視するのが一番いいと思っていたからだ。

『でも、出てくれたじゃない』
どこか甘えるような声は、あの頃と変わらない。ただ違うのはひどく冷え切ったこの心が互いの距離を感じさせるだけだった。
「それはお前が全く電話かけるのをやめてくれないからだ」
怒鳴るだけなら誰にでもできる。今の由香子にそんなものは通用しないと知り、俺はできるだけ冷静に言葉を選んだ。
『だって、ユキが私の話を聞いてくれないから』
「…じゃあ言ってみろよ。話ってなんだ」
譲歩するように低い声で言うと、由香子は少しだけ向こう側で笑ったようだった。俺の頑なな態度と声に、苦笑を漏らした感じだ。

『会って話がしたいの』
…来ると思った、そのセリフ。だけどさすがの俺も、そこまで譲る気は毛頭なかった。会う必然性が感じられない。…いや、むしろ会えば事態は悪化すると分かっていたからだ。

「…悪ぃな、会ってまでお前と話をする気はねぇんだ」
『……ユキ、いつからそんなに優しくなったの？』
「……え？」
由香子の言葉の意味が分からず、俺は眉間に皺を寄せて思わず携帯を握る手に更なる力をこめてしまっていた。

『私に会わないのは、彼女に悪いから？随分大事にしてるみたい』
「……」
『私と付き合ってる時は、ユキはそんなに優しくなかった』
少しだけ硬くなる、由香子の声。「そんなことない」とはさすがに、白々しすぎて言えなかった。

『…分かった。じゃあ会わなくてもいい』
やがて、今度は由香子の方から譲歩したような言葉が漏れる。静かな声は穏やかというよりもやはりどこか不気味だった。

随分と、あっさり引き下がったように思う。手近の椅子に座り直しながら、俺は由香子の言葉の続きを待った。

『ユキの彼女、とっても美人さんね』
「……？」
あいつは、そう急に話を変えた。映画館で見かけた、と靖子さんが言っていたから、俺はその時のことを言ってるんだと思った。一瞬首を傾げかけた俺の耳に、由香子の続ける言葉が響く。

『青系の服が似合うのね。私は似合わないから羨ましい』
「……おい……？」
『うーん、でも今日のスカートだったらピンク系のTシャツでもかわいかったかもね』
その言葉に、俺は目を見開いた。慌てて記憶を遡り、不動産屋に行った後別れた白石の私服を思い出す。

確か、短めのスカートに淡い青系のTシャツ…だったはずだ。

「由香子、お前……」

『大丈夫よ。今同じ店内にいるだけ』

「！……っ」

『…早く会いたいなぁ』

一度言葉を切った由香子が、クスッと電話の向こう側で笑みを零した。

『ねぇ、ユキ？』

どこか甘えるような声に、俺は逆に背筋をゾッとする何かが走るのを感じる。ゴクッと息を呑むと、乾いた喉から返す声はなかなか出てきそうになかった。

11

「和美ぃ、ごめんね付き合わせて」
申し訳なさそうに言う智子が、レジの方から戻ってきながらそう言う。男物の小物を売っているその店内で、手近のパスケースを眺めていた私は、その声に顔を上げた。目が合った智子は、今買ってきたばかりの袋を少し掲げながらすまなそうに笑う。

「ううん、大丈夫だよ。どうせ今日ヒマだったし」
答えながら踵を返して、智子と並んで店を出た。ショッピングモール内に並んだそのお店は、智子の彼氏の裕貴くんとよく来る場所らしい。

「ヒマ…って、本城と一緒にいたんでしょ？」
尋ねる智子が、少しだけ目を丸くする。
「うん、いたけど…ちょうど先生が仕事を思い出したって言って学校に戻るところだったから、どうせそこで別れることになってただろうし」
「そっか、邪魔したんじゃなかったんなら良かった」
どこかホッとしたような表情を浮かべる智子に、私は逆に少し眉を寄せて横目で彼女を見る。その視線に気づいた智子は、「…何？」と少し引き気味に首を捻った。

「それより、智子の方が問題だよ。裕貴くんの誕生日が今日だってこと忘れてたって…ひどくない！？」

「…うっ、いやぁ…付き合いもこう長くなるとね…」
「言い訳しない！待ち合わせ、間に合うの？」
部活のはずだった裕貴くんと急に今日会えることになったらしい智子だけれど、なんと今日が彼の誕生日だということを思い出したのは待ち合わせの約束をした後だったらしい。
「うん、大丈夫大丈夫。プレゼントも和美のおかげでいいの買えたし、何かお礼にお茶でも奢るわ」
「ケーキ付けてくれたら裕貴くんには黙っててあげようかな」
「……足元見るなぁ」
冗談で言った私の言葉に、智子もふざけて嫌そうな顔をしながら応じる。それでも智子は自分のおススメだというケーキ屋さんの方へ向かって歩き出した。

智子が裕貴くんとよく来ると言っていたそのケーキ屋さんは、２人によく似合いのかわいらしい雰囲気のお店だった。私は入ったことがなかったけれど、確か茜もこのお店が好きだと言っていたはず。
明るい店内の中はほどよく人が入っていて、流れるボサノヴァの音楽が心地よく耳を打った。

窓側の席に智子と向かい合って座ると、かわいい店員さんが水を運んできてくれる。これもまた安くておススメだというケーキセットを私の分まで注文して、智子はそれから話を戻した。

「それで？今日不動産屋行ってきたんでしょ？どうだった？」
「あぁ、うん。１件いいところ見つけたよ。２ＬＤＫで新しめのマンション」
「しかし普通彼氏の家選びに２人で不動産屋行く？夫婦じゃあるま

いし！」
「あぁ…うん、向こうの人も微妙なリアクションだったよ初めは」
笑いながら言うと、智子も苦笑いを浮かべる。不動産屋のお兄さんも、初めは私の扱い…というか何と呼ぶべきかと迷っていたみたいだった。それを思い出しては何となくおかしくなって笑ってしまう。

「それにしても本城、一人暮らしなのに２ＬＤＫ～？ピアノ置くのと和美が来ることを考慮しても広くて贅沢すぎじゃない？」
「あーうん…私のことはあんまり関係ないと思うけど……。先生、狭いところダメなんだって」
「へ？」
私の言葉に、智子が思い切り変な声を返す。
「だから、例えば出張の時のビジネスホテルのシングルルームとか…？息が詰まって苦しくなるから嫌だって」
「どんだけお坊ちゃんだあいつは！」
智子がそう悪態ついた時、ちょうどウェイトレスさんが紅茶とケーキを運んできてくれた。急に声を上げた智子にビクッとしたウェイトレスさんに、私と智子は苦笑いを浮かべながら「すみません…」と謝る。同じように笑った彼女は、「ごゆっくりどうぞ」と言うとクルリと踵を返した。

運ばれてきたケーキは今日のお店のおススメらしく、レアチーズケーキの上に3種類くらいのベリーが乗っていて見た目もかわいらしい。
こういうのを、「食べるのがもったいない」とよく女の子が表現するんだろう。ただし、本当にそう言って食べづらそうにしている人を見たことはないのだけれど。

「おいしぃ～」
「でしょ？」
一口食べて思わず頬をほころばせた私に、智子はどこか得意げにウィンクして見せた。智子と裕貴くんのようなかわいらしいカップルならともかく、私と先生じゃ絶対にこんなお店は来ないだろう。
何より、先生に似合わない気がする。こんな甘い匂いのするふんわりした空気のお店に先生がいるところを想像しただけで何だかおかしく思えた。
妙な想像をしたせいで吹き出しそうになった私を、智子が「何、気持ち悪いなぁ」と眉を顰める。

そんな智子と他愛もないおしゃべりをしながらケーキを食べ終える頃、テーブルの上で智子の携帯電話が細かく振動した。どうやらそれは裕貴くんからのメールらしく、それを開いた智子は文面を読んで大きく目を見開いていた。
「何？」
尋ねると、少し慌てた様子で智子が画面を見せてくれる。そこには、もう裕貴くんが待ち合わせ場所にいることが書かれていた。

「やばい…！！17時って言われてたのを、私19時と勘違いしてたみたい！！！」
「早く行ってあげなよ…ホントに智子、裕貴くんとのことになると抜けてるんだから…」
しっかり者の智子にしては珍しいことだけれど、それだけ裕貴くんには甘えられるということなのかもしれない。私のことは気にしなくていいから、というように手で促すと、智子は慌てて紅茶を流

し込んで席を立った。

「ごめん！和美！！また埋め合わせする！！」

「いいよー、このケーキで十分だよ」

伝票を持って立ち上がった智子に、私は笑って言う。それより早く行ってあげて、というと、智子は少しだけ笑ってお店を出て行った。

…さて、私はどうしようか。

家に帰れば夏休みの課題はたくさんあるし、読まずに溜まった雑誌も本もある。やりたいことはたくさんあるけれど、とりあえず鞄の中から携帯電話を取り出した。

右手で残りのケーキをフォークで口に運びながら、左手の指で携帯を操作する。カチカチとボタンを押して呼び出した電話帳の画面から、発信ボタンを押した。

「…あれ、出ないなぁ」

長めのコール音の後、私は吐息まじりに通話を切る。相手はもちろん先生で、呼び出し音はするけれど留守電設定はされていないようだった。恐らく、あの彼女が先生の携帯にメッセージを残さないようにするためだろう。

もしかしたら、まだまだ仕事が忙しいのかもしれない。今日のところは諦めることにして、私は残ったアールグレイを飲み干して席を立った。

＊＊＊＊＊＊

その翌日はまた補習がある日で、ただし私が楽しみな化学ではなかった。その日は古文の日で、まさに私の苦手科目。これに関しては自主参加ではなく、私の場合成績で強制参加だった。何せ期末テストも赤点ギリギリだったから仕方がない。

「化学は常に９０点台なのになぁ。和美って典型的な理系人間だよね」

補習を終えた後の由実の呟きに、智子がニヤっと笑う。

「それを言うなら理系だからじゃなくて本城の科目だからじゃないのー？実際高校入学したばっかりの頃って、和美化学も成績悪かったじゃん」

「うーるーさーいー」

古文のテキストで智子の頭をポンと叩いて、私はそのままそれを開いた。見るだけでうんざりしてしまう文字を眺めながら、これはもう体質的に受け入れられないんじゃないかとさえ思う。

ため息まじりにテキストを鞄の中にしまい始めた私に、智子が大げさに頭を抑えながら「そういえば」と言葉を継いだ。

「結局、昨日あの後和美はどうしたの？本城とまた会ったの？」
「え？あ、ううん。結局連絡つかなくて」
「そうなんだ」
「うん、だからちょっとこれから顔出してくる」
立ち上がった私に、智子も由実も「行ってらっしゃい」と手を振る。茜だけが同じように慌てて立ち上がり、「あ、じゃあ私も」と言った。
「ちょうど物理の先生に用事があるから、途中まで一緒に行く」
そう言った茜と並んで、私は教室を出る。

「先生、大丈夫そう？」
長い廊下に出たところで、不意に茜がそう尋ねてきた。
「え？」
聞き返して横に並んだ茜を見ると、彼女は少し心配そうに眉を寄せていた。
「ほら…色々大変だって聞いたから」
由香子さんからの電話のことなんかを言っているんだろう。少し語尾を濁した茜に、私は「あぁ」と頷いた。
「うん…精神的にキツイことに変わりはないと思うけど…」
「そうだよね」
「うん、だから昨日連絡取れなかったのもちょっと気になって…。様子見てくる」
「そうだね」
ニッコリ笑った茜の笑顔に、「大丈夫だよ」と励まされる気がする。そんな茜はやはり人を気遣える性格らしく、今度は「和美は？」と尋ねてきた。

「ん？」
「和美は、大丈夫？」
茜の言葉に、私はわずかに微笑み返す。
「大丈夫だよ。私が気に病んでも仕方がないし」
「でも…昔の彼女とか、本当は嫌でしょ…？」
少しだけ遠慮がちに言って、茜はまた心配そうにかわいい顔を歪めていた。

私は、先生が昔付き合いが広かったという話を聞いていたから、過去については気にしても仕方がないと思っていた。
それを承知で好きになったわけだし、付き合うことにもなったわけだし。過去を過去と受け入れて、それに嫉妬をするほど子どもではないつもりでいた。

だけど…本音を言うと、由香子さんのことは話が別だ。
先生が、唯一本気で好きだった人。遊びで人と付き合うような人が、他の女の人との縁を切ってでも真剣に向き合った人。
……気にしたことがないと言ったら、うそになる。
ましてや、向こうが接触を図ろうとしてきている今となっては尚更だ。

「うん…でも、大丈夫」
茜に笑って返して、私はそう答えた。まだ、彼女が先生のことを忘れられずに連絡を取りたがっているだけ。私の知らないところで2人が会っているわけでもないし、今気を揉んでも仕方がない。

笑って答えた私は、そこで化学準備室の近くまで来たことに気づいて茜と別れた。物理教師のいる部屋はこの奥で、茜はそのまま歩いていく。それを見送ってから、化学準備室のドアをノックした。

「どうぞ」

いつも通りの低めの声が返ってきて、私はそのドアをゆっくりと開けた。

「…誰もいない？」

「あぁ、今はな。もうすぐ相澤が来ると思うけど」

「……何しに？」

「何か打ち合わせしたいことがあるって……って、お前、何変な想像してんだ」

仕事だ仕事、と付け足して、先生は苦笑いを浮かべる。

そりゃあ私のクラスの担任をしてる先生と、副担任をしている相澤先生では仕事上の絡みも多いだろう。だけど、相澤先生が本城先生のことを好きだと知っているからこそ面白くないと思っても仕方ないと思う。

それでもそれを先生に言ったって、どうしようもない。

だから話を変えようと、私は再び口を開いた。

「先生、昨日何回か電話かけたんだけど…忙しかった？」

尋ねると、先生は書類に落としていた目線をわずかに上げる。
「あー…マジで？昨日は帰ってそのまま寝ちまったから…気づかなかったな。悪ぃ」
「ううん」
疲れていたのかもしれない。
あと、由香子さんからの着信にうんざりするようになってから着信履歴をチェックしたりはしないのかも…。
「何か用事だったか？」
「ううん、大丈夫。かけてみただけだから」
言って、私は鞄を持ち直した。それを見た先生が、わずかに眉を上げる。
「帰んのか？」
聞かれて、私は曖昧に笑って返した。

「うん…だって相澤先生と鉢合わせるのも嫌だし」
それで何か勘ぐられるのも嫌だ。ただでさえ、相澤先生は私が本城先生のことを好きなのに気づいているし。

「夜メールしまーす」
笑って手を振ってから、私はドアの取っ手に手を伸ばす。それに片手を挙げて先生が応じてくれたのを見てから、来たばかりの廊下へと再び躍り出た。

「…さて、じゃあ帰ろうかな」
明日も古文の補習はあるし、課題も残ってる。帰ってそれを片付けることにして、私はそのまま昇降口へと向かった。

8月上旬のその日は雨が降らない記録を何年かぶりに更新中で、うんざりするほど暑かった。途中で校内にある自販機で買ったミネラルウォーターを頬に当てると、ひんやりとした冷たさが心地よい。ただし、それもすぐにぬるくなってしまうのだろうと思う。

一刻も早く駅にたどり着きたいと思うのは、この時期の学生なら誰もが思うことだろう。冷房の効いた電車に飛び乗りたくて、私は少しだけ小走りに校門を抜けた。

だけど、そこで足を止めてしまう。駅へ続く道の歩道に、この暑い中立っている人がまっすぐにこちらを見つめていたからだ。

「……？」

この暑さの中、汗もほとんどかいていないように見えるその人はどこか異質だった。炎天下の中立っているはずなのに、涼しい顔でこちらを見ている。

「…あの…」

何か、と言いかけたその瞬間、私は思わず息を飲んだ。

言葉では言い表せない…けれど、直感的に気づいてしまったからだ。

私を見つめるその人は…この真夏に不似合いなほど真っ白な肌をした透明感ある女の人。背はそれほど高くなく、多分私と１５～２０センチくらいは差がありそうだった。

美人というよりは、すごくかわいらしい人。どこか儚げで…男の人なら、守ってあげたくなるような。

…だからだろうか、名前を聞いてもいないその女の人が「誰なのか」分かってしまったのは。

息を飲んだ私を見て、彼女は日傘の下でニコリと笑ってみせた。この世の穢れも何も知らないような…純真そうな、清楚な笑み。少し上目使いの目線は、私じゃなかったら誰もが魅了されるに違いない。

「少し…お話したいんだけどお時間もらえますか？」

確か今は３０歳くらいのはずのその人は、どう見ても２０歳くらいにしか見えないかわいらしい雰囲気だった。それでも高いその声は、とても落ち着いている。

その声に返す言葉がなかなか出てこないまま、私は思わずゴクリと唾を飲んだ。

私の緊迫した空気を破るように、彼女はもう一度笑う。それから、

「はじめまして」と首を傾けながら言った。
甘く優しいその声が、私の予想通りの言葉を継ぐ。

「藤枝由香子です」

12

炎天下の中移動したのは、学校の裏にある木陰の多い公園だった。遊具の一つもないけれど、まだ日は高いので遊んでいる親子も数組見られた。けれどそれでも隅にあるベンチの辺りへ移動するとあまり人気はなく、日陰があって静かなものだ。

促した私に、由香子さんは黙ってついてきた。ただその間も、頬には微かな笑みをたたえたまま。それがどこか不気味にも思えて、私はバレないように何度か息を飲んだ。

この公園の隅を選んだのは、他の人に話を聞かれないだろうと思ったから。あと、どこかお店に入って落ち着いて話をしたい相手でもなかったから。…それと、そうして馴れ合うつもりなんて全くなかったから、だ。

「お話って…何ですか？」

ベンチに座った由香子さんは、私の言葉を聞きながら日傘を畳む。自分の座る位置に陰ができているのを確認してから、それを横に置いた。

「前置きなしで、言ってもいいかしら」

やわらかい声音が、トーンとは裏腹にたくましい言葉を告げる。控えめさのかけらもない言葉に、私は鋭く目線を上げた。

「なんでしょうか」
私は彼女のようにベンチには座らず、斜め前辺りに立つ。…それはまるで、あの時初めて本城先生と会った時のようだった。
そう、あの時も…場所はこの公園だった。ベンチも、同じもの。私の立ち位置も同じ。
ただ違うのは…相対するのが先生ではなく彼女だということ。意図してここへつれてきたわけではなかったはずなのに、何故か因縁めいたものを感じてしまった。

本当は、由香子さんの言葉なんて促さなくても分かっている。だけど、私は息を飲んで返る答えを待った。

「ユキと…別れてほしいの」
当然想像していた通りの言葉を、愛らしい由香子さんの唇が紡いだ。だけど自信がある。そんな彼女の不思議な魅力に魅了されないのは、きっと私ぐらいに違いない。…私は、そんなことでごまかされない。

「答えは、わかりきってると思いますけど」
自分でも驚くほど冷たく挑発的な言葉が、口をついて出た。

友達やなっちゃん、修司さんたちはいつも私を「イイ子」だと言

ってくれる。性格が良いとも言われるけれど、私は自分では決してそうは思わない。…むしろ、敵だと見なした相手には露骨に敵対心を出してしまうくらいの我の強さはあると思う。……そうじゃなきゃ、今だって由香子さんにこんな態度で接しないだろう。

「そんなに睨まないで」

苦笑い気味に言う彼女の言葉に、ピクリと眉を持ち上げる。恐ろしいほど冷静な彼女の言動は、全て今の自分の神経を逆撫でしそうなくらいだ。微かに浮かんだ微笑すら、この時にはイライラさせられる。

「あなたの答えは分かりきってるけど…でもね、よく考えてもみて。あなたからじゃないと、ユキはきっと別れられないでしょ？」

「……どうして」

「だって、生徒に手を出してしまった責任があるもの。あなたに飽きて別れたいと思っても、別れ話を切り出してあなたがとんでもない行動に出れば被害を被るのはユキの方でしょう」

「…責任とか被害とか…そういう関係じゃないですから」

唇を噛み締めながら、私はそう低い声を出す。地を這うようなそれは、それでも由香子さんには大した効果はなかった。

「そう思ってるのはあなただけだとしたら？」

「…っ」

……本気で、腹が立つ。さすがの私でもカチンと頭のどこかで音がした気がした。この人に、一体先生と私の何が分かるというのだろう。

「……あなた、まだユキと寝てないでしょ」
「な…っ」
急なその発言が、こんな清楚な人のどこから発せられたのか私は思わず耳を疑った。一瞬声を失い、私は口をパクパクさせて瞬きを繰り返す。すると彼女は、またクスリと小さく笑った。

「図星？」
……いくら私でも、彼女の言う意味が言葉通りの意味を成さないことは分かっている。だからこそ「一緒のベッドで寝たことあります」なんてセリフは意味がないことを知っていた。
多分、私の顔は真っ赤になっていたと思う。どうしてこの人にそんなことを言われなきゃいけないのかという憤怒と、一般的な意味での羞恥心とで。

「それが証拠。もうユキはあなたと別れたいと思ってるはず。…そうでないなら、教師としての義理と同情で付き合ってるだけ」
「……先生は…そんな人じゃないっ」
やっと搾り出した反論は、私の中の苛立ちを全て含んだ響きを持っていた。
「大体、あなたの言うことが図星だとしても、それは先生が……」
「大事にしてくれてるから、って？それはないわ。あなたも聞いてるでしょ？ユキの手の早さ。好きで付き合ってるなら尚更よ」
「それは昔の話でしょ…っ」
悠然とベンチに座ったまま私を見上げる由香子さんを、眉間に力

を込めて思い切り睨み据える。
「あなたが知ってる先生と、今の先生を同じだと思わないで！先生には、あなただって知らない４年間があるんです！」
声を荒げて言うと、由香子さんは初めて表情から笑みを消した。まっすぐ私を見据え返す目に、怒りに似た光が灯る。

「４年が…何よ」
小さく言う彼女は、手近の日傘を持つ手にグッと力を込めた。
「あなたは若いから分からないかもしれないけどね…人間、ハタチを越えたらそう簡単には変わらないわ」
どこかさっきまでの余裕を感じられない声音に、彼女は自分で気づいたのかそこでハッと目を瞠る。それから、取り繕うようにさっきまでの微笑みを口元に浮かべた。

「あなたとユキが出会った時のことを、当ててあげましょうか」
話を切り替えるようにそう言った彼女は、知っているはずはないのにまさにそのベンチで笑う。
「どんな出会い方をしたかまでは分からないけれど…きっとその時、ユキは精神的に参ってたんじゃない？」
言われて、思い出すあの日の情景。今いるまさにこの場所で…吸わない煙草を手にしたまま、泣きそうな目で桜を見上げていた先生の横顔。
「…これも図星みたいね」
由香子さんは私の表情を伺うようにして覗きこんでから、また笑った。

「もしかしたら、そのユキを悩ませてた原因は私かしら。私がユキのことを忘れたまま他の男と結婚して…傷ついてた？」
「…っ何が言いたいんですか！」
認めたくはなかった。認めたら、先生がこの人のことを想っていたことを肯定してしまうから。真実は分かっているはずだけれど、今は認めたくない。

「そのユキを、和美ちゃんが慰めでもしたんじゃないかと思って」
まるで見ていたかのように、由香子さんはそう続ける。この人の底知れぬ怖さのようなものを垣間見た気がして、私は背筋を冷たいものが駆け抜けるのを感じた。

「ユキね…結構あれで精神的に弱いところがあるの。私と付き合い始めたきっかけも、そんな感じだったから」
小さく笑う彼女の言葉に、私は漠然と思い出す。
そう言えば…適当な人付き合いばかりしていた先生の心の底の傷に、気づいたのは唯一この人だったはず。だからこそ、先生も心を開くことができて彼女を好きになったはずだった。

「だからきっと、私を失くした傷をあなたで癒そうとしただけ」
「……めて…」
「今はもう、その傷が癒えてあなたと付き合ってるのは残った同情でしかないの。今私からの連絡を避けてるのも、あなたに悪いと思ってるからで…」
「やめてください！」
叩きつけるような私の声に、彼女は一瞬口を噤んだ。しかしそれは言葉を失くしたとか、そんな殊勝なものではない。私に打撃を与

えることができたことから生まれる、少しの余裕だ。

「…何であなたに…そんなことが分かるんですか…」

目線を逸らし気味に言った私を、彼女の方はまっすぐ見据えているのが分かる。そうしてまたクスッと笑みを漏らすと、「だって」と高めの声が続けた。

「ユキが本当に今でも好きなのは、私だから」

「……そんなこと…っ」

「本当よ。その証拠に、結局ユキは私に会いに来てくれたもの」

「……え…？」

目を見開いて零した声が、私の唇から落ちた。激しく反論しようとしていた口からは、驚きの余り何も出てこない。

「昨日の夜、ようやくユキが私に会う気になってくれたの」

「……嘘…」

「嘘じゃないわ。あなたからの着信も、全部気づいていてもユキは一度も出なかったもの」

「！……」

それが嘘だとはさすがに思えなかった。私が何度か昨夜先生の携

帯に電話したことと、それに先生が出なかったことは、本人以外知らないはずだから。

『先生、昨日何回か電話かけたんだけど…忙しかった?』

『昨日は帰ってそのまま寝ちまったから…気づかなかったな。悪ぃ』

さっき交わしたばかりのはずのそんな会話が、鮮明に思い出される。その時の先生の落ち着いた声を思い出せば思い出すほど、私の頭の中は逆に真っ白になっていくようだった。

そして思い出す、茜と話していた時に自分が考えていたこと。

私は今の状況を、『私の知らないところで2人が会っているわけでもないし、今気を揉んでも仕方がない』と思っていた。

…でも、現実は……。

焦点の合わない目を見開かせたまま動けなかった私に、由香子さんが「和美ちゃん?」と白々しく声をかける。

その透明感ある声すら今は聞きたくなくて、私はそのまま耳と同時に自分の心も閉ざしてしまった。

13

『3日だけ和美ちゃんに考える時間をあげる。その間は私もユキに電話したりするのはやめるわ』

最後にそう言った由香子さんの言葉は、どこか遠くで響いた気がした。まるで、自分には関係のない他人事のような声。半ば真っ白になりかけていた頭のどこかで、そんな言葉を聞いた。

ショックだったのは…先生に嘘をつかれたからじゃなかった。きっと何か理由があったと思いたかったし、そう信じたい気持ちがあったから。

ただ彼女に言われた言葉の一つ一つに、どこか身に覚えのある事実は確かにあった。そのことの方が、私にはショックだったんだ。

そして何より、初めて会った「由香子さん」を前にして払拭しきれない思いがあった。

初対面の彼女は、私じゃなければ女の人ですら見惚れてしまうに違いないほど魅力的で…。いつか修司さんが言っていた、『男なら誰でも守ってあげたくなるようなタイプ』という言葉が納得できた。

こんなにかわいらしい人に再会して、先生は昔の感情を欠片も思い出さなかっただろうか。…それは、無理なんじゃないだろうか。会わずにいた今までならともかく…彼女を前にしたら、また私に出会う前の感情が蘇ってもおかしくはないんだ。

そう実感させられる。全ては結局、私自身の自信のなさに起因している嫉妬に似た感情だったのだろうけれど。

「…っ、何だお前、びっくりさせんな」

膝を抱えてうずくまっていた私の頭上に、明るい照明の光とそんな声が同時に降ってきた。

先生の家のリビングで膝に顔を埋めていた私は、そこでようやく目線を上げる。「おかえりなさい」という声は、どこか白々しく響いたように自分でも思えた。

まさか私が来ているとは思っていなかったらしい先生は、それでもすぐに持ち直したように「ただいま」と苦笑いしながら部屋に入ってくる。

「何やってたんだ、電気ぐらい点けりゃいいのに」

そう言って奥の部屋に鞄を投げ置く姿を見つめながらも、言葉を返す気にはなれなかった。

「…なんかあったのか」

そんな私の様子に、先生がようやく真顔でこちらを振り返る。

８月の暑い部屋に扇風機すらつけずに座っていた私の異常さに気づいたのか、ネクタイを緩めながらエアコンの電源を入れる。
「白石？」
顔を覗きこまれて、私はゆるりとそちらを見上げる。その見据えるような目に少し瞬きを繰り返した先生は、ローテーブルを挟んで私の正面に座った。胡坐をかくような態勢で座り、ネクタイを取りながら首を捻る。

「…先生」
「何」
「今日泊まっていい？」
一番聞きたいことを避けてそう尋ねると、先生は少し意外そうに眉を上げた。核心を逸らした質問だと気づいたんだろう。

「また両親は夜勤と出張か？」
「ううん、今日は家にいます。でも智子の家に泊まるって言っちゃった」
「……俺の許可取る前に決めてんじゃねぇか」
おかしそうに苦笑する先生は、それからふっと表情を緩めた。
「いいけど…俺今日家で仕事しなきゃなんねぇから、あんまり構ってやれねぇぞ」
先生の言葉に、私は軽く頷く。最近ただでさえ忙しそうだから、持ち帰った分も多いのは事実だろう。

「じゃあとりあえず飯食いに行くか」
立ち上がりながら、先生は奥の部屋へ向かう。歩きながらまたこちらを振り返った。

「あーでもこの時間だと、さすがにお前は夕飯食ったか」
「…いいえ、まだです」
「そうか。じゃあ何か食いたいもの…」
「先生」
続きかけた言葉を、低めの呼びかけで遮る。少しトーンダウンした私の声に、先生は足を止めて体ごとこちらを振り返った。

「どうして嘘ついたの？」
「……？」
言った瞬間、先生の表情が変わったのが分かる。
だけどそれは「まずい」とか「バレた」とか気まずそうな顔じゃなくて…。ただ、何のことを言われているのか分からないように眉間に皺を寄せていた。

「昨日、電話に出なかった理由…」
途切れ途切れの声で言うと、先生はようやく目を瞠る。その場に立ち尽くしたまま、ただ私を見下ろしていた。
「着信に気づかなかったって…言いましたよね？」
「……」
「…由香子さんに…聞きました。先生が私からの電話に気づいてたけど出なかったって…」
「会ったのか！？」
そこでようやく言葉を返した先生が、珍しく声を荒げる。すぐ傍に膝をついて、ぐっと私の肩を掴んだ。

「……今日、学校まで来ました。私と話がしたいって…」
「何を……」

「先生と別れてほしい、って」
「っ……」
「どうして嘘ついたの!?どうして電話に出なかったの!?どうして…っ」

そもそも、どうして彼女に会ったりしたの？

最後の問いは、言う前に涙が零れて口にはできなかった。

「…悪かった」
私の肩を掴んでいた手を緩めながら、先生は小さくそう言う。伏せ目がちに目線を逸らして、代わりに自分の手で拳を固く握りこんだ。

「余計な心配かけるだろうから、本当のことを言わない方がいいと思った」
「……」
「電話に出なかったのも、由香子を説得するのに時間がかかってたからだ。…ごめん」
言って先生は、「でも」と言葉を続ける。
「…本当に、お前に言い訳しなきゃいけないようなことは何もないんだ。由香子がお前に言ったことも全部…気にすんな。考えなくて

いい」
先生が、私の首に腕を回した。ぎゅっとそのまま抱きしめられながら、私は開いたままの目から涙が流れ続けるのを感じる。

先生の、言いたいことは分かる。
嘘をついたのも電話に出なかったのも、きっと私のため。本当のことを知ったら不安になると分かってるから…そうしてくれたんだろうってことも。

でも、それならどうしてあの人に会いに行ったのか。

会った瞬間、本当に欠片ほどもあの人の笑顔に懐かしさやそれ以上の感情を想起しなかったのか。

きっと私は、この時泣いて怒鳴ってでもそこを問い詰めれば良かったんだ。そうすれば…先生の腕の温かさも、その愛情すらも微塵も疑わずに信じられたかもしれないのに…。

だけど先生をそれ以上困らせたくなかったから……ううん、ただ私は嫌われたくなかったから。

この時私は、全てを理解して全てを許したフリをして「イイ子」になってしまった。

それが後悔してもやり直すことのできない、重大な過ちだと気づいてはいなかったんだ。

＊＊＊＊＊＊

その後は互いに、夕飯を食べている間も家に戻って話をしている間も「彼女」のことは話題に出さなかった。

無理をしてでもお互い普通を装っていたけれど、不思議と私はだからと言って帰る気にはならなかった。こういう時だからこそ…一緒にいないと全てダメになる気がしたからだ。気まずさから逃げていたら、このまま終わる気がしたのかもしれない。

「明日ケイコがライブやるらしい。お前も見に行くか？」
先生がそう言ったのは、仕事があるという先生より一足先に私が寝ようとした時だった。
「メグミたちも見に行くらしいんだけど、お前連れて来いってうるさくてよ」
「行きます」
笑って答えたその時の表情は、それまでよりはぎこちなさは減っていたはずだ。先生も微かに笑って返して、「おやすみ」と言うと私の頭にポンと大きな手を乗せた。

「おやすみなさい」
そう答えると、先生はそのまま部屋を出て行く。リビングのローテーブルにノートパソコンと書類を広げていたから、そこで仕事をするんだろう。それを見送ってから、私はベッドの中に入る。先生がいつ戻ってきてもいいように手前側を半分空けておいたけれど、それがやけにベッドの広さを感じさせて寂しくなった。

「…寝よ」
眠れば、少しはすっきりするかもしれない。こんなに卑屈で嫉妬深いのも、寝不足で機嫌が良くないせいかもしれない。自分の奥に渦巻く感情をそんな単純なものだと言い聞かせるようにしながら、私は布団にもぐりこんだ。

結局、いつ寝付けたのか記憶はなかった。ただ真夜中に一度目が覚めた時、隣に先生はまだいなかった。リビングの方から明かりが漏れていることと、キーボードを叩く音がするのでまだ仕事をしているようだ。

薄暗い中時計を確認すると、夜中の3時を回る頃だった。こんなに遅くまで仕事をする先生が少し心配になったけれど、その瞬間、向こう側で微かにパソコンの電源が落ちる音がする。

ようやく作業を終えてこちらに戻ってくるのではないかと思って、私は慌てて目を閉じた。…別に、この時寝たフリをする必要はなかったはずなのに。

しばらくしてから、やはり部屋のドアが静かに開いた。先生がほとんど物音も立てずにこちらに歩み寄ってくる気配を感じる。

「……」

寝たフリをしてしまったことからか、何となく緊張で胸がドクドクと高鳴った。

ベッドが少しだけ軋む音がして、先生が隣に入ってきたのが分かる。その間も私は仰向けになったまま微動だにせず、目を閉じていた。

動けないまま、どれほど固まっていただろう。長いその重い空気の後、恐る恐る目を開く。

伺うように先生のいる方に視線を移すと、その私の目に映ったのは横になった先生の広い背中だった。

「…っ」

思わず泣きそうになった声を押し殺したのは、由香子さんの言葉から生まれた言いようのない不安感が瞬時にぶり返したからだ。どうしてだろう。先生の後ろ姿を見た途端に、何故か空気が遮断された気がしたんだ。

壁のような何かを、そこに感じたのかもしれなかった。

こんなに近くにいるのに、どうしてだろう、すごく遠く感じられる。

寝たフリをしたのは私の方。

だけど、それでも寝ている私に言い訳でも何でもしてくれればまだ何かを信じられたかもしれないのに…。

自分勝手だと分かっているけれど、そんな気持ちが胸中でどす黒く渦巻いているのが分かった。

14　side：Yukisada

「ユキ、まだあの子に最後まで手を出してないんでしょう」

『あの可憐な顔からそんな下世話なセリフが出てくるんだ』

どこか感心したような不思議な声で、携帯電話の向こうで修司が言った。

ノートパソコンの前で胡坐をかいていた俺は、電話を持ち直しながら首を竦める。もちろんその仕草は修司に見えるはずもなく、あいつは続けた。

『で、結局話はついたわけ？由香子さんに会って』

「…いや、全く」

小さく返して、俺はため息を漏らした。

それからふと、自分の後方にある寝室を振り返る。時刻は午前１時を回ったところだった。仕事があると言った俺より先に白石がベッドに入ったのが一時間ほど前だから、もう寝ているだろうとは思う。だが念のために、立ち上がるとベランダへの大きなガラス窓を開けた。

真夏でも真夜中にもなると、幾分か涼しい。加えてその日は少し風の強い日で、ベランダへ出た瞬間に冷ためのそれが頬を撫でていく。後ろ手にそのガラス戸を閉めながら、俺はもう一度息を吐いた。

あの日由香子に半ば脅されて会いに行った時、結局何の話もつかなかった。俺は今まで由香子のことを「病んでる」と思っていたけれど…どうやらそれはあながち間違えてもいないように思う。恐ろしいほどのまっすぐさと思い込みは、何をどう言っても聞き入れてくれそうにはなかった。

『つまり由香子さんは…まだユキが自分のこと好きだと思ってるんだ？』

酒でも飲みながら話しているんだろう。修司の方からそんな言葉と共にグラスの中で氷が音を立てるのが聞こえた。

「…みたいだな」

由香子からしたら…4年前のあの時、別れを突きつけられたのは「俺」の方で。嫌で別れたわけじゃないから、きっと再会すればその時の感情を思い出すはずだと思ったようだった。

「ユキは…あの子と付き合い始めた責任感から、自分が本気であの子のことを好きだと思い込んでるのよ」

会った時にそう言った由香子の言葉を、思い出す。それを言いながら小さく舌打ちをした時、修司が少しだけおかしそうに笑った。
『責任感で付き合って好きだと思い込んでる相手なら……手を出さずに理性総動員させるまでする必要ないよなぁ』
揶揄するような声は、それでもどこか感心しているようにも聞こえる。バカにされているわけではないことは分かるから、俺は「ふん」と鼻であしらうだけで留めておいた。

『で、実際問題、何でまだそんな理性的に堪えてるわけ？手出して和美ちゃんに嫌われるのが怖い？』
「……まさか」
『だよね』
電話の向こうで、修司が苦笑いを浮かべたのが分かった。

『…もしかして、教師と生徒じゃなくなるまで手出さないつもり？』
「……」
沈黙をどう取ったのか、修司は「…ふーん」と何か納得したように勝手に相槌を打った。

…何も「高校卒業するまで」とか、「教師じゃなくなるまで」とか、期間を定めて義理立てているわけじゃない。
ただ…「今じゃない」と思うだけだ。

たとえばこの先何かあった時、俺は別にいい。一応どうとでも責任は取れる年だから。ただ、あいつはそうはいかない。２６にもなる俺が「きっとこの先、他に好きな相手なんてできないだろう」と予感するのとは違い、高校生のあいつにはまだ無限の可能性がある。

もし向こうに気持ちがなくなって別れが来たとして、他の男を好きになったとしたら…？

そう考えると、いつか後悔するようなことは「今」させたくなかった。

『深い愛情だけど…随分とらしくないなぁ』

口にはしないこちらのそんな思いを読み取ったのか、修司がそう言う。

『和美ちゃんにとっても、この先好きになれるのはユキだけだと思うけど』

それは、きっと白石もそう言うだろう。だけど俺が言いたいのは、そういう今の「感情」の問題ではなくて。現実としての「可能性」の話だ。

『俺なら和美ちゃんみたいな彼女が目の前にいたら耐えられそうにないけど』

と笑って言うと、修司は少しそこで声のトーンを落として続ける。

『で、結局由香子さんの方はどうだった？会って少しくらい懐かしさと一緒に何か感じた？』

「…そんなわけねぇだろ」

由香子が何と言おうと、あいつの顔を見た時、俺の胸には何の感情も沸かなかった。好きだった気持ちを思い出すなんてこともなく、懐かしさを感じることすらなく。むしろ、嫌悪と憎悪のような負の感情も抱かなかったことの方が自分では意外だったくらいだ。

ただ、わずかに感じたのは欠片ほどの「畏怖」。過去への執着から人間はここまでできるのかと思うと、少し恐ろしくなったのは事実だった。

…そう、由香子と会って俺は確信したことがある。あいつは何も、俺のことを今でも好きなわけじゃない。ただ自分が記憶をなくしていた空白の時間を埋めたくて…過去に執着しているだけだ。そうしないと、自分の犯した「罪」を認めてその重さに苛むだけだからだ。

『和美ちゃんにそれをちゃんと言えばいいのに。多分、その辺気にしてるんじゃない？ユキが、由香子さんに会って揺れちゃうんじゃないかって』

「聞かれてもないのにこっちからか？…おかしいだろ」

『……おかしいか』

「おかしい」

はっきり言い切って、俺はベランダの壁に背を預けた。

大体それじゃ、やましいことがあるのを先手を打って言い訳しているようにしか聞こえないだろう。特に白石は、そういう性格だ。

「今のあいつには何を言っても無駄だ」

由香子に何を言っても無駄なように、白石も同じだ。恐らく俺がどんなに白石のことだけが好きだと言っても、由香子の影が周りでチラつく限りその不安は拭えないだろう。

それは、俺を信用してないからとかじゃなく…。

人間なんてそんなものだから、仕方がない。言葉なんてものはいつだって陳腐で正にも負にも受け取りやすい。

『損な性分だねぇ、ユキ』

また苦笑いを浮かべたような声で、修司は小さくそう言った。

「ところでお前、何か用があって電話してきたんじゃねぇのか？」

かけてきたと思ったら由香子やら何やらの近況を一番に聞いてきたので、電話の用件を聞けずにいた。そう話を戻すと、修司は瞬間黙り込んだ。

でもそれは刹那のことで、すぐにいつも通りの明るめの声を出す。

『いや、一人で酒飲んでたから誰かと話したかっただけ』

そうは言うけれど、その一瞬の沈黙を俺は見逃さなかった。

「何だよ、何かあったんじゃねぇのか？」

重ねて聞くと、修司は向こう側で再び黙り込む。少し考えたような間の後、「うーん」と何かを渋るような声を出した。

『…やっぱり、今日はいいや。また今度聞いてもらうよ』

「……あぁ」

修司がこういうことを言うこと自体が、珍しい。普段はあまり自分の話はしないし、何か悩みがあっても大体自分の中で消化してしまう。だから恐らく何かがあったことは事実なのだろうけれど、今

は言える段階ではないということなんだろう。
それが分かったから、俺もあえてそれ以上の追及はしなかった。

それから2，3の他愛ない話をして、どちらからともなく通話を終わらせる。その携帯電話を閉じる時に、そういえば今日は由香子からの電話攻撃がないなとふと思った。
今日、白石に会いに来たと言っていたから…それで気がすんだとか…？　不意に浮かんだそんな考えに、「まさかな」と自嘲に似た笑みを浮かべると、俺は部屋の中へと戻った。

ローテーブルの上に残された、パソコンと書類の束。やらなければいけないことは山積みで、今はその方がありがたい気もした。今日は静かな携帯をテーブルの上に置くと、俺はため息まじりに再び仕事の山に向き直った。

＊＊＊＊＊＊

その日のうちに終えたい仕事がひと段落したのは、午前3時を回る頃だった。パソコンの前で大きく伸びをして、不意に手元の携帯電話に視線を落とす。結局、今まで真夜中だろうがなんだろうがお構いなしだった由香子からの着信はその日一度もなかった。

昨日俺と結論の出ない話をしただけで、引くとは思えない。白石

と直接話して気が済んだとはもっと思えない。何となく嫌な予感が胸をよぎったけれど、俺はそれをごまかすように頭をガシガシと掻いた。できるだけ考えないようにして、パソコンの電源を落とすとゆっくりと立ち上がる。

そのままソファで寝てしまおうかとも思った。恐らく自分のためにはその方がまだいい。だけどそれでは、きっと朝起きた時白石がまた余計な勘違いと思い込みをするだろう。それが分かっていたから、寝室のドアを静かに開いた。

広めのベッドの片側をきちんと空けて、仰向けに眠る姿。ため息をつきたい心境にかられながら、修司のさっきの一言を思い出しては舌打ちしたくなる。

…とっくに、俺だってこれ以上耐えるのは限界に近いっていうのに……。

好きな女を前にして何とも思わない男がいるなら、目の前に引きずり出してきてほしいくらいだ。

せめて、この暑さの中汗すらかかずに静かに眠る白石の髪に、手を伸ばしかけた。だけどその一動を許してしまえば自分の中で箍が外れる気がする。引っ込めた手を吐息まじりに引き寄せながら、俺はそのままベッドの空いたスペースに滑り込むと背を向けた。

余計なことを考える前に、寝てしまえばいい。どうせ平穏だったのは今日くらいで、またすぐに由香子からの電話に悩まされる日は来るに違いないんだ。

今のうちに安眠を貪ることにして、俺は大きな欠伸を一つ漏らした。

1（前書き）

キャリアウーマンな女性の番外編です。
ユキや貴弘も少しだけ出てきます。

1

「前田さん」
厳かに名前を呼ぶと、目の前の女の子は萎縮したように首を竦めた。小さくなって顔を俯け、決して私を見上げようとはしない。その様子に吐息を漏らしながら、私は手にしていたファイルを彼女の前に突き出した。

「在庫チェック、ちゃんとしておいてって頼んだわよね？」
「…すみません」
「それと、さっきお客様から電話があったわ。あなたに頼んだはずの商品、取り置きしてなかったって」
「…あ…！」
「お客様にはこちらからお詫びしてご理解いただいたから、気をつけなさい。今までにも何度も注意してるけど、その場でメモを取っておけばすむことでしょう？」
「すみません…！」
「二度と同じこと言わせないで。それと、今からしばらくは事務所整理して。そんな顔で売り場に出られたら迷惑だから」
「……」
「ほら、泣いてるヒマがあったら仕事しなさい！」
一喝すると、前田さんは言葉なく頭を下げると急いで踵を返して行った。その後ろ姿を見ていると、またため息が漏れる。

悪い子ではない…。だけど、仕事ができるかと聞かれると決して「はい」とは言えない。何度も同じことを注意させられるし、仕事中にメモすらとらない。そもそもの仕事に対する姿勢がなっていな

いのだ。

普通は、部下の不出来さは上司のせいだと思う。だけど何度注意しても理解していないのかしようとしていないのか…ここまで言うことを聞かないと、逆に嫌がらせされている気分にすらなる。某アパレル会社の、私が店長を勤めているこの店の中で彼女は一番仕事に向いていなかった。

だから、キツイ言い方になってしまうこともある。だけど決して、別に彼女のことが嫌いなわけではない。私は彼女とは違って、自分の仕事に一切の妥協を許せないだけだ。

大学を出てすぐに就職し、たった2年弱で店長を任されるという異例の昇進をさせてもらってきたから、余計だった。

「店長、18時になりますけど…」

「…あぁ、うん。あがるわ」

前田さんを思うと頭を抱えたい心境になっていた私は、そこで熊野という後輩に声をかけられた。今日は私は18時あがりの予定になっている。いつも夜遅くまで仕事していく私だから、彼女が気を使って声をかけてくれたようだ。

「後お願いね」

熊野さんにそう声をかけて、私は手早く着替えると店の外へと出た。

8月上旬、うだるような暑さはこの時間でも変わらなかった。少し歩けばすぐに汗をかきそうな気温の中、それでも日は長く18時を過ぎたとは思えない明るさ。毎日真っ暗になってから帰る私だから、こんな明るい時間に外にいることが自分でも不思議だった。

今日は、特例だった。朝は早くから夜は遅くまで、しかも休みもろくに取らずに仕事をしている私がこんな時間に帰ることはまずない。だけど、今日は一年に一度の自分の誕生日だ。最近ずっと会えていない彼氏と、久しぶりに会えるはずの日だった。

「……メール…？」

歩いて駅まで向かう途中、ふと鞄の中で携帯電話が振動したのが分かった。長さが異様に短かったから恐らく通話着信ではなさそうだ。首を傾げながらそれを取り出すと、まさにその彼氏からのメールを受信していた。

「……」

開いたその携帯電話に浮かび上がった文面は、今日の待ち合わせに行けなくなったという知らせだった。全く会えないわけではなく、何時になるか分からないということみたいだったけれど…。

「……」

パタン、と携帯を閉じて、私は返信もしないまま踵を返す。不思議とショックはなかった。ただ、「またか」という思いがよぎるだけ。そもそもこのメール自体も驚くほど久しぶりで、本当に約束を

していたかどうかも怪しいくらいだ。最後に会ったのなんて確か数ヶ月前。そんな状況で「私の誕生日くらいは」なんて期待する年でもない。

「…仕事に戻ろ」

今日どうしてもやらなきゃいけない仕事は、もちろん終えている。でもやるべきことはいくらでもあるし、こういう空いた時間を他のことで有意義に過ごせるほど多趣味でもなかった。

そう思って店の方に引き返しながら、私は携帯電話を鞄の中に放り入れた。

＊＊＊＊＊＊

店は繁華街の一画に建てられたかわいらしい外観で、女子大生、ＯＬなんていう年代に人気だった。営業時間は２０時までで、まだ照明は煌々と照らされている。そんな店の裏側へ回り、私は事務室へそのまま入ろうとした。

「つうかホントに、何とかしてくださいよ熊野さんー」

事務室の扉を数センチ開いたところで聞こえてきた前田さんの声に、私はふと手を止めた。さっきまで泣きそうだった彼女とはうって変わった…どこか不機嫌そうな声。

「もうホント勘弁なんですけどー。仲村店長って、私のこと目ぇつけてません？」

話の内容が自分のことだと気づいて、私はその場でわずかに目を

見開く。
「私ばっかり怒鳴り散らして、こっちはいい迷惑ですよ」
自分の不出来さには気づいていないのか棚上げしているのか…彼女はしらっとそんなことを呟いた。

「まぁまぁ…店長、仕事人間だからねー」
苦笑い気味に、熊野さんが答えている。
「それですよ！自分が仕事大好きなんだかしらないけど、こっちにまで同じように求めんなって感じなんですよねー」
椅子に座っているらしく、前田さんがそう口を開くたびにギシギシと事務椅子の軋む音がする。背もたれにもたれかかって体を前後に大きく揺らしているんだろうと思う。
「大体、今日は早く帰って珍しいけど…いつも夜遅くまで仕事じゃないですか？なんか女捨ててるっていうか…あんなんじゃ彼氏もできませんよねー」
私には考えらんない、と付け足して、前田さんは辟易するように言った。

「あれ、知らなかった？店長って超イケメンの彼氏いるよ」
そんな前田さんに、熊野さんがそう答える。
「え！？マジですか！？」
「うん、一回ここに来たことあるから……あ、でも…」
一度言葉を切った熊野さんが、何かを思い出したらしく小さく声を上げた。
「そういえば、私見ちゃったんだよねー…店長の彼氏が、この前イタリアンレストランで他の女と楽しそうに食事してるとこ」
「えー！？浮気じゃないですか！」
「多分ね。店長あれだけ忙しい人だから彼氏とろくに会えてないっ

て言ってたし、あのイケメン彼氏だったら寄ってくる女も多いだろうから会えない彼女よりそっちに行くだろうし」
「つうかそもそも、付き合ってると思ってるの店長だけだったりしてぇ」
「あはは、それはさすがにないだろうけど…でも金ヅルぐらいには思われてたりしてね」
「金ヅル？」
「だって店長、あんだけ働いてお金持ってるでしょ？浮気相手の女の子は店長より明らかに若い子だったから、店長とは都合いいから付き合ってるだけなのかも」
「あははは！！それありえますねぇー！！」

前田さんの高笑いと、控えめだけれど堪えきれないような熊野さんの笑い声が頭の中で響いて離れない。立ち尽くしていた私は、意識する間もなく事務所のドアから手を離してしまった。

音もなくパタンと閉まったそれが、何の遠慮もなくその空間を遮断する。頭は真っ白になったようで、なかなか働いてはくれなかった。

ただ……

……限界だ、と思った。

彼女たちの言うように、私の彼氏が「都合いいから」私と付き合っているわけではないことは分かっている。でも、浮気は否定できない。前から、これだけ会っていないのだから陰で何しているか分からないとは思っていたから。そして今の自分を支えている唯一の仕事においても、部下にこんな風に言われてしまう始末。

昔は…こうじゃなかったのに。でも、本当はもうとっくに私も彼氏も限界だったのかもしれない。ただ私は、仕事が忙しいフリをしてそのことを見てみぬふりしてきただけだったんだ。

＊＊＊＊＊＊

結局事務所に入れるわけもなく、私は仕方なくまた駅への道に戻った。たださっきより足取りは重く、陰鬱な気分を物語っている。こんなひどい顔を職場の人間に見られなくて良かった…。そう思った、その時だった。

「諒子さん…？」

ようやく夏の夜も暗くなり始めた頃、人ごみの中で誰かが私を呼ぶ声がした。振り向いた私は、そこにいた人影を見て目を瞠る。それからその懐かしい姿に、思わず顔がパァッと明るくなるのを感じ

た。

「貴弘！貴弘でしょ！？」

そこにいたのは、大学時代のサークルの後輩、名取貴弘だった。

理学部に通う大学時代、私はジャズサークルに所属していた。貴弘はその時の２つ後輩で、卒業してからは一度も会っていなかった。

「ユキは？今でもつるんでる？元気？」

せっかくだからと入ったカフェで、２人して同じカフェオレを頼んだ。それを飲みながら聞くと、貴弘は「あぁ」と笑う。

「基本的には元気ですよ」

その答えに、私は思わずぷっと吹き出した。

「何、『基本的には』って」

「今ちょっと元カノにストーカーされてて病み気味です」

「えっ、大変じゃない」

元カノって確か…すーんごくかわいい小動物系の女の子だっけ。

…ただし、すごい束縛系の…。色々あるんだなぁと思ったけれど、あまりこの話題は突っ込まない方がいい気がしたので話題を変えた。

「理沙ちゃんは？この前おめでただって聞いたんだけど」

「あぁ、そうなんですよ。１１月予定日です」

「そうなんだ！おめでとうー。貴弘もお父さんになるんだねー」

理沙ちゃんというのは貴弘の更に1つ下で、彼女も当時ジャズ研にいた。貴弘と結婚して何年かたつけれど、最近待望の子どもができたんだという話は聞いていた。「ありがとうございます」と笑う貴弘は、やっぱり数年ぶりに見ると更に大人っぽくなったようだった。

県内で高校教師をしているはずだから、学生の時とは雰囲気がまるで違って見える。

こうやって、皆変わっていくのに…。

私だけ、数年前のまま止まってしまっているみたいだった。

「諒子さんは？最近どうですか」

尋ねた貴弘の言葉は、別に恋愛に関して聞きたかったわけじゃないのかもしれない。それでもさっきまで考えていたことがまさにそれだったので、私は少し顔を俯けた。

「……私は…多分、もうダメ」

呟いた言葉に、貴弘がわずかに片眉を持ち上げたのが分かった。

ずっと、気づかないフリをしてきたことがある。

誰にも言わなかっただけ、自分でも気づかないフリをしていただけで、私はきっとずっと彼氏に不満があった。

好きだという、そんな付き合い始めた時の気持ちが跡形もなくなくなったとは思わない。でも、付き合いもこう長くなるとそれだけじゃなくなるのだ。

「就職した頃は、私…自分のことで精一杯だった」

プライベートも何もないくらい、仕事ばかりだった。先輩たちに追いついていくのに必死で、朝から晩まで働き通しだった。

1才年下で、その時まだ大学生だった彼氏とは、思えばその頃から溝ができていたのかもしれない。今になって…そう思う。

「あいつのことなんて見向きもしないくらいがむしゃらに働いて…。だから、やがてあいつが卒業した時にもそれは変わらなかったのかもしれない」

私の彼氏は、大学の法学部に通っていた。法律関係の仕事をしたくて、司法試験を受けるために法科大学院に通いたいとも言っていた。だけど彼の実家はそれほど裕福なわけではなく、彼自身も特待生として授業料を免除してもらえるほど成績が特別優秀だったわけでもない。

大学院にすぐに行けるわけではなかったので、卒業してしばらくは働いてお金を貯めるのだと言っていた。

応援したい気持ちはもちろんあったけれど、彼が仕事に選んだの

は夜の仕事だった。…もちろん、夜の仕事をする人を否定するわけじゃない。給料の割がいいことも分かるし、働きながら学費を稼ぐならそれが一番だっただろう。

でも…私は、それが寂しかった。もうその頃に私は２４，５になっていて、働きながらも漠然と将来のことを考えるようになっていたから。

女なら…結婚なんてことを考え始めてもおかしくない年だ。何も今すぐに、というわけじゃない。今から視野に入れて数年後に…そんなことを全く考えていないわけではなかったから。

だけど彼氏が夜の仕事を始めてから、元々仕事が忙しかった私と時間が合うことはほとんどなかった。はじめの頃は頑張って時間を取るようにもしていたけれど、段々とその努力も減っていった。お互いがお互いの仕事を優先した結果だ。

それでもそれを不満に思っている自覚はあまりなかった。ただ、遠距離恋愛をしているような感覚で「仕方がないこと」として自分の中で処理していたんだと思う。

でも…狂い始めたのはいつからだろう。段々とあいつは、大学院に通う夢を諦め始めたように見えた。現実を見据え始めたのかもしれない。…でも、いつかはやめるのだろうと思っていた夜の仕事をやめることはなかった。今では大学院や司法試験の話はしなくなり、ただ毎日を夢を追うこともなく普通に暮らしているだけ。

「…私は、夜の仕事がダメだと思ってるわけじゃない。だけど…」
蚊の鳴くような声の私の呟きを、貴弘は黙って聞いてくれていた。

「私は…無理なの。結婚を視野に入れた時…やっぱりそういう仕事をしている人とは無理だと思う」
特段の理由がない限り…しっかり定職について、昼間に働いてほしい。そう思うのは私が古い人間なのだろうか。しかも夢のためならともかく、特別の理由なくただ水商売のような仕事をしているだけだったら尚更だ。

「…諒子さん、それは…」
何かを言いかけた貴弘の言葉を、私は片手で制した。…昔から、この子は人の話を聞くのがうまい。悩みなんかを打ち明ければ、いつだって欲しい言葉を言って慰めてくれていた。

「ごめん、貴弘。今…貴弘に何か言われたら、私慰められて立ち直っちゃうかもしれない」
出てきそうな涙を必死でこらえながら、私は揺れる視界をテーブルの上に落とした。
「聞いてもらっておいてごめん…。でも今は…落ち込みたい気分なんだ」
それは、自分への戒めだったから。

今まで自分と彼氏の間の問題を見ないフリをしてきた自分への、罰のようなものだ。

＊＊＊＊＊＊

散々落ち込んだ私の話を、貴弘は結局黙って最後まで聞いてくれた。それから最後に店を出て別れる時には、ようやく私も笑って挨拶はできた。貴弘は言葉通り慰めるわけでもなく、ただ笑って「また」と言って夜の闇に消えて行く。その後ろ姿を見えなくなるまで見送った後、ようやく私は駅から電車に乗った。

いつもの帰り道のはずが…随分遠く感じる。

重い気分はまだ晴れることなく、自分の上にのしかかるようだった。

3階建てのマンションに着いた頃…時刻は21時になろうとしているところだった。いつもならまだ事務仕事を片付けている時間。こんな時間に家に着くのが珍しいから…私は、自分が夢か幻でも見ているんじゃないかという気になった。

そのマンションの下に…一つの影を見つけたのだ。

目を疑っていた私に気づいたその「影」は、こちらを振り向いて「おかえり」とニッコリ笑った。

……この笑顔がずっと好きだったはずなのに。

…ううん、好きだという気持ちは変わらないはずなのに。

それでも今となっては、胸が痛い。

「…何で…ここに？」

私の小さな問いに、数ヶ月ぶりに会うあいつは少し笑った。

「ちょっと用事があったんだけど、結局早めに終わったから」

「……」

「誕生日おめでとう」

浮気してるなら…きっと今日はもう来ないと思っていた。会えないだろうと思っていた。そんなことを私が考えているとは知らずに、あいつは笑ったままポンと私の手にケーキの箱を差し出す。

私が昔から好きなちょっと高めのケーキ屋の箱。都内まで行かないと買えないから、わざわざ買いに行ってくれたんだろうと思う。

でも、私は…もう……。

「……修司」

そのケーキの箱を手に乗せたまま、私は小さく呼びかける。「…ん？」と聞き返したその顔を、直視はできなかった。

「話があるの」

「うん。俺も今日、諒子に話したいことが…」

「別れて欲しいの」

何かを言いかけた修司の言葉すら遮って、私はそう早口に言葉を継いだ。

「……」

笑顔でも怒った顔でもない修司の無表情をこの時見たのは、きっと数年ぶりだった。

2

「とりあえず…入って。中で話そう」
そう言って歩き出した私は、マンションの入り口のドアを押した。だけど数歩進んでも、後ろから修司がついてくる気配はない。そんな後方を振り返ると、修司が黙って立ち尽くしたままこちらを見つめていた。

「…修司…？」
「ん？」
「…入らないの？」
尋ねた私に、あいつは小さく苦笑を浮かべる。そのどこか傷ついたような顔に、私は自分がどれだけ重大な言葉を口にしたのか今更気づいた。

「…今日は…帰るよ。冷静に聞けそうにない」
後ろ手に持っていた鞄を持ち直しながら、修司は踵を返す。
「それ、いらなかったら捨てて」
私の手の中に残したケーキの箱を指して、悲しそうな笑みを浮かべたままそう言った。

「修…」
「おやすみ」
背を向けて歩いて行ってしまうその後ろ姿を、私が見送ったのはきっと初めてだった。だって、私はいつも修司の前を歩いていたか

ら。年も上で社会人としても先輩で、私は後ろを振り向くことなく今まで走り続けてきた。振り向かなかったのは、修司がちゃんとすぐ後ろにいてくれていることが分かっていたからだ。きっと、あのいつもの人好きのする笑みを浮かべて…。

弾みで別れを口にしたわけじゃなかった。でも私は、もう自分の言葉を後悔している。

自分の言葉に自分で傷ついて…、修司の背中を追うことすらできなかった。

戻った部屋は、真っ暗だった。

一人暮らしなのだからそんなのはいつものことなのに、何故か今日は闇が深い気さえする。電気も点けず、暗い中を記憶通りにテーブルまでたどり着いた。そこで手にしていたケーキの箱を開けると、私の好きなショートケーキの白さが闇に映える。

「…甘…」

指で掬った生クリームを一口舐めると、口内に広がった甘い香りと共に何故か一筋の涙が零れ落ちた。

＊＊＊＊＊＊

今までの私なら、プライベートで何があろうがそれを仕事に影響させることはなかった。でも今回ばかりはそうもいかず…何せ、仕事に対する姿勢も後輩や部下に否定されたところだったから。

だからその翌日は、自分でも珍しいと思うほど「使い物」にならなかった。売り場に出ている時はともかく、事務所に下がった時には思わずといった感じにぼんやりしてしまう。

「ど、どうしたんですかね店長」

前田さんが熊野さんに驚いたようにそう尋ねているのが頭の片隅のどこかに聞こえてくる。

「た、確かに…ちょっとおかしいよね」

熊野さんも思わずどもりながら、そう返事をしていた。

2人の会話をぼんやりと耳にしながらも椅子に座ったまま空を見つめていると、やがて頭を何か固いもので叩かれる。ポン、なんてかわいいものじゃない音をたてたそれに驚いて「いた!」と声を上げると、そこにいたもう一人の後輩が意地悪く笑っていた。

「諒子さん、ぼーっとするならもっと隅っこ行ってくださいよ」

しっし、と手で追いやる振りをしてみせながらそう言ったのは、この店の副店長を努める寺島美佳だ。私の一つ後輩で、仕事に関しては何でも相談できる、一番信用している人物だ。

ファイルの束で叩かれた頭を「痛いなぁ」と撫でながら、私はそれでも言われるまま椅子を隅に移動させる。空いたスペースに書類

を広げながら仕事を始めた美佳を眺めて、私はまたぼんやりと呟いてしまう。
「隅っこ行けって…ぼーっとすることは怒らないのね」
「諒子さんはたまにはぼーっとするくらいじゃないとダメだと思いますよ」
ファイルに視線を落としたまま、美佳はそう平然と言ってのけた。

「何かありました？　悩みがあるなら彼氏さんのところのジャズバーに行ってきたらどうです？　諒子さん前から、ストレス溜まった時はジャズ聴くと落ち着くって言ってたでしょ？」
「……その彼氏とちょっと…」
「…あらら、珍しいですね」
心底意外そうな顔をして、美佳は小さく苦笑する。だけどそれ以上は気を遣ってくれたらしく、言葉を継ぐことはなかった。

修司からあの後、連絡が入ることはなかった。元々こちらが切り出した別れだし、もうこのまま終わってしまうのかもしれないと漠然と思う。そう諦める気持ちがないわけじゃなかったけれど…でも、終わる時はこんな風にあっさり終わってしまうのかと思うとなんだか悲しかった。
メールをするのも電話をかけるのも、無視された時のことを考えると実際に行動に移せない。今まで思うように行動してきた私にしては珍しく保守的だと思うと、自分でもため息が漏れた。

…でも、こうしてばかりもいられない。

このまま別れるにしろ別れないにしろ、自分の気持ちは全部話すべきだと思うから。その機会を作るために、私は直接会いに行くのが自分にとっても一番良い方法だと思った。顔を見ずにメールや電話で済ませるには、話が深刻すぎるはずだ。

「…ねぇ、今日また18時にあがってもいいかな…」

早上がりしたいなんて私が口にしたことが初めてだったので、美佳は少し驚いたように目を見開いた。だけど、すぐにニッコリ微笑んで見せる。

「どうぞ?たまにはいいんじゃないですか。今日の諒子さんじゃいなくても影響なさそうだし」

「…う…っ、ごめん…」

嫌味でなくて気を遣わせないように言ってくれたのだろうけれど、私は恐縮して身を縮めた。それを見てもう一度笑ってから、美佳は仕事に戻る。

私は決意を新たに、18時までの後数時間をせめて真面目に仕事しようとようやく重い腰を上げた。

＊＊＊＊＊＊

修司がバーテンダーをしているジャズバーに、私は一度も訪れたことがなかった。…いや、正確に言うと大学時代は何度も来たことがある。私が所属していたジャズサークルのメンバーの行きつけの

場所だったし、確かに居心地の良いバーではあったから。

だけど修司がここでバーテンダーという夜の仕事を始めてからは、一度も来たことがない。ささやかな抵抗と、小さな反発心からだったのかもしれない。

記憶にある通りの場所に店はたたずんでいて、地下への急な階段を降りるとシックなドアがある。重いそれを押し開くと、それと同時に流れてくるジャズのメロディーと、酒と煙草の匂い。仕事帰りの修司と同じ匂いがして、それだけで私は何となく胸がズキンと痛む気がした。

「いらっしゃいませ」

修司より少し若そうな店員さんが、ニコリと微笑んで挨拶してくれる。それにペコリと会釈を返して、私は周囲を見渡した。仕事中に来たことなんて初めてだから…驚くだろうか。怒られないといいのだけれど、なんて思っていたけれど、肝心の修司がいない。

「…あの…」

近くにいたその店員に尋ねようとした時、カウンターの方から「あれ!?」という声が聞こえてきた。

「諒子ちゃんだろ？　修司の彼女の！」

気のいいマスターが、髭をさすりながらニコニコとこちらを見ていた。

「ご無沙汰しています…覚えてくださってたんですか」
大学を卒業してからだから、もう6年くらいはここに来ていないというのに…。
「もちろん覚えてるよ」
ニッコリ笑ったマスターは、確かにこちらの記憶にあるとおりの笑顔だ。
「今日はどうしたの？　あ、ちょうど今日はカルテットのライブがあるから良かったら…」
言いかけたマスターの言葉に曖昧に笑みを返して、私はもう一度周囲を見渡す。勧められたカウンターの一席に座りながら、鞄を置いてから再びマスターを見上げた。

「…あの…今日、修司は…」
「……え？」
尋ねた瞬間、マスターの表情がフッとそれまでと変わったのが分かった。
一瞬困惑したような…そんな顔。

「…？あの…」
「もしかして…聞いてないのかな…」
台に手をつき、もう片方の手で顎をさするマスターは、少し言いにくそうに眉を寄せる。…ただ、嘘はつけないと判断したのか次の瞬間にはフッと息を吐いた。

「修司なら…辞めたよ、昨日」
「え……！？」

続けられた言葉はあまりにも予想外で、私は大きく目を見開く。思わず失った声は空気に飲まれ、発することはできなかった。

そんなこと一言も聞いてない…とか、様々な思いが駆け巡る。でも、聞かなかったのはきっと自分。

昨日だって何かを言いかけた修司の話を遮ってまで別れを告げたのは私の方だ。

…頭が、真っ白になりそうだった。

マスターも気遣わしげに私を見つめていたけれど、かけるべき言葉が見つからないのかそれ以上は何も言わなかった。

代わりに、私の後方…店内に入ってきた新たな客に「よぉ」と声をかける。それにつられるようにそちらを何気なく振り返った私は、思わず目を瞠った。

そこにいたのは、座ったこの態勢からだと首を仰向けないと顔が見えないほどの長身。

「何やってんだ、諒子」

「…ユキ!?」

驚いて声を上げた私に、ユキは隣にものすごい美人を連れて、小首を傾げていた。

3

「ジントニック」
私の隣に座りながら、ユキがマスターにそうお酒を注文する。それから私に向けて少しだけ唇を持ち上げて意地悪く笑った気がした。
「珍しいな、ここに来るの。お前はてっきりこの店避けてるんだと思ってたけど」
普通なら言いにくいだろうことをズバリと言い当て、それでもユキはそ知らぬ顔だ。
「…あんたホントにかわいくない。それより、私これでも2歳も年上なんだからもっと敬いなさいよ」
ちょうどマスターが、そこで私にスクリュードライバーを出してくれる。それに軽くお礼を言ってから、口をつける前に唇を尖らせてみせた。

「昨日貴弘にバッタリ会った時は、ちゃんと敬語だったし『諒子さん』って呼んでくれてたわよ」
まだお酒を飲んでもいないのに酔った時のようなテンションで絡んでしまったのは、恐らく拗ねたい気持ちがどこかにあったからだ。それを感じ取ったのかどうか…ユキの隣に座ろうとしていた女の子が、鞄を手にしたまま彼の服をクイと引っ張った。

「先生、あっちにメグミさんたちがいるから挨拶してきていいですか？」
「あぁ」
「じゃあ行ってきます」

ニッコリ笑って言う彼女は、私にもペコリと会釈をして踵を返して行った。

……ん？ちょっと待って……。

「…ねぇユキ、あの美人さんあんたの彼女？」
尋ねると、ユキは胸ポケットから煙草とジッポを取り出しながら「まぁな」と小さく答える。
「で、『先生』って…！！！？　あんた生徒に手出してんの！？つうかあの子高校生！？　それともう卒業した元教え子！？」
「いや、今担任してるクラスの生徒だよ」
まくしたてる私にそう答えたのは、ユキじゃなくカウンターの向こうのマスターの方だった。何が嬉しいのかマスターはニコニコしている。
「本当なら未成年は立ち入り禁止なんだけど…。まぁ和美ちゃんは幸いというか、高校生に見えないし」
確かに、スラッとした長身に細身の体はモデルのようで、顔立ちも恐ろしいぐらいに整っている。多分、その辺の芸能人よりそれらしいと思う。大人っぽくて高校生に見えないくらいだ。

「何よりうちの常連さんたちとすぐに仲良くなっちゃったからねぇ。皆も和美ちゃんに会いたいみたいだし」
「…いやいやいやマスター、それもどうなのよ…」
商売人として、それはどうなのか。そう思ったけれど、マスターの気持ちもその常連たちの気持ちも分かる気がしたのでそれ以上は追求しなかった。

だって、高校生とは思えない気の使い方。
私が落ち込んで拗ねていることがわかったから、ユキと2人にしてくれたに違いない。しかも自分が「他の人に挨拶をしたいから」という理由づけで…。

「イイ子そうね」
グラスに口をつけながら言うと、ユキは煙草に火を点けてから「ふん」と鼻であしらった。

「最近新しい彼女ができたのは聞いてたのよ。まさか高校生だとは思わなかったけど」
「そーかよ」
「…あいつ、そんな話はするのにね…自分のことは話してくれないんだもん」
そう言うと、ユキは前を向いたまま煙草の息をフーッと長く吐き出す。それから「今更だろ」という顔で、肩を竦めてみせた。

「修司が自分の話をしないのなんて昔からだろ」
「……そうよね…」
「それでもあいつは肝心なことは必ず言う」

…そんなことは私だって分かってる。でも……。

「でも、私…あいつがここを辞めた話も、辞めようと思ってる話も聞いたことなかった」
「…何？　あいつ辞めたのか？」
私の言葉を受けて珍しく少し驚いたような顔をしたユキは、私とマスターを見比べるように交互に見た。
出過ぎないように配慮してくれたのか、マスターが小さく頷いて答えるだけ。昨日のことらしいから、まだユキが知らなくても不思議はない。

「仕事辞めるって…そんなに簡単なことじゃないでしょ？　それも事後報告なんて…」
「……言わせなかったんじゃねぇの、お前が」
「！？　…っ」
一瞬言葉をなくしたのは、ユキが私の一番痛いところをついたせいだ。本当なら責任転嫁して、気づかずにいたかったこと。

「仕事が忙しくて周りも見ずに走り続けてきて…お前が修司を一度でも振り返ったことあったかよ」
「…っそれは…」
確かに、それは自覚があることだ。修司の優しさに甘えていた…必ずついてきてくれていると信じていたから。
「修司が何でこの仕事を選んだか…お前知らねぇだろ」
「……？」
夜の仕事の方が…割が良いからじゃないの…？
加えて、ジャズ好きの修司にはうってつけの店のはずだ。

そう思ったけれど、隣で煙草を吸うユキの前でマスターが微かに

笑って見せた。
「諒子ちゃんは朝早くから夜遅くまで働いてて…時間があまり取れない生活をしてるだろう？　同じように修司が昼間忙しく働いたら…それこそ2人共家に寝に帰るだけで、ろくに会えないと思ったんだろうなぁ」
　マスターの言葉に、私は大きく目を見開く。妙な緊張感からか喉が渇きかけたけれど、手近のグラスに口をつける気にはなれなかった。
「諒子ちゃん、前に言ってただろ？　ストレスが溜まった時にジャズ聴くと落ち着くって…。だからだよ。修司は多分…ずっとここで、仕事で疲れた諒子ちゃんが来るのを待ってたんだと思うよ」

　でも…私は、一度もここに来ることはなかった。
　ジャズを聴きたい気持ちよりも、この仕事を選んだ修司に不満があったから。なのにあいつは…私がいつか疲れて休みたくなった時に、戻る場所を残してくれていたんだ。

「…っ」
　涙が溢れそうになる。
　視界がぶわっと歪みかけたけれど、それを必死で押し殺した。

　私は…夢をなくしたようにただ毎夜働くだけの修司に嫌気がさしていた。でも実際は、彼が何を思い、そうしているのかは全く知ろうともしていなかった。
　修司が何を考えているのかよりも、自分の仕事ばかりを優先した結果だ。

…なんてつまらない人間なのだろう、と思う。
くだらない人間なのは、何も考えずに夜の仕事に走ったように見えた修司じゃなくて、私の方だった。仕事をするだけしか能がなくて、彼氏の考えていることも理解しようとしてこなかった自分の方だ。

「……」
手にしていたグラスのお酒を、今度こそ勢いよく呷る。

ユキが「おい」と制するのも聞かず、マスターにおかわりを頼んだ。

＊＊＊＊＊＊

「……？」
気がついた時は、薄いクリーム色の見慣れた天井が目に映った。
一瞬どういう状況なのかも飲み込めず、ただいつも通り朝を迎えただけなのかと思った。

だけど目を開いた瞬間に感じたただならぬ頭痛に、大学の時に味わったきりの二日酔いを自覚する。そういえば昨日、あの後ユキを

道連れに結構飲んだっけ…。そう思い出しながら、頭を抑えながら私は何とか上体を起こした。

…あれ…？

でもそうだとしたら…どうして今ここに…。

疑問に思いかけたけれど、その答えはすぐに得られた。私が体を起こしたベッドにもたれるように、眠っている修司の姿がそこにある。恐らく、私が潰れた後にユキが呼んだんだろう。

「……」

二日酔いのせいだけではない頭痛を感じて、私は眉根を寄せた。だって、どの世界に一方的に別れを告げた彼氏に酔い潰れて介抱させる女がいるというのだろう。自分の身勝手さと浅はかさにうんざりしかけて、思わずため息が漏れた。

静かな寝息をたてて眠る修司は、どこか疲れているようにも見える。久しぶりに見るその寝顔に、胸のどこかが軋んだ気がした。

「…修司…」

もう一度…今度こそ手を伸ばしたら、その腕を掴むことができるだろうか。

それとも……。

覚悟を決めたように小さく息を飲みながら…私は、ゆっくりとその髪に自分の指を伸ばした。

4

目を覚ました修司は、一瞬ここがどこか分からなかったのかボーっとした目を何度か瞬きさせた。やがてゆっくりと覚醒したのか、すぐ傍にいる私を見て少し複雑そうに笑う。

「おはよう」

言って、長い指で茶色い髪をかきあげると欠伸を一つ漏らした。

「…疲れてるの？」

「ん？　……いや」

軽く首を捻ると、修司は手首につけたままだった腕時計に視線を落とす。その文字盤を確認すると、この後予定があるのか…まだ少しは時間に余裕があったらしく、安堵に似た息を零した。

「用事？」

「…うん」

何の、とは聞けなかった。今の自分にその質問をする資格があるとは思えなかったし、修司が答えてくれるとも思えなかったからだ。だから…代わりに立ち上がりかけたその手を掴んでいた。

「話したいことがあるの…」

「……」

手首の辺りを掴まれて、修司はこちらを振り返る。だけどその目を、私は直視することはできなかった。少し逸らし気味に、返る言葉を待つだけ。

「……分かった。まだ1時間くらいは余裕あるから」
ベッド脇に座り直した修司は、小さく息を漏らしながらそう言った。
「あ、でもちょっと待って、電話だけしないと。今日かけるように言われてるんだ」
そう言って、ポケットから携帯電話を取り出す。この後の用事の相手にかと思ったけれど、どうもその会話を聞いていると違うようだった。

「昨日はごめんね、ありがとう」
いつもより幾分か優しい口調の修司。電話の向こうから漏れ聞こえてきたのは、明らかに女の声だった。何を言っているかまでは聞こえないけれど、若い女の子だということだけは分かる。
「朝起きたら電話してって言われてたからさ…今大丈夫?」
私に構わず、修司はそんな会話をしていた。

…私がいるのに……こんな時に、何?
怒りにも似たような空しさが胸中を駆け巡ったけれど、そんな私に次の瞬間修司は「ん」と自分の携帯を差し出してきた。

「…え、何…?」
困惑してその電話と修司の顔を見比べる。だけど修司は答えないまま、軽く肩を竦めながら立ち上がった。そしてそのまま窓を開けてベランダに出て行く。
私が誰かと電話している時の、修司の癖だ。気を遣っているのか、

会話を聞かないように席をはずす。

「……もしもし、お電話かわりました」

ワケが分からないままでも常識的な態度で接してしまうのは職業病に近いと思った。まだ二日酔いで鈍い痛みを訴え続ける頭を抑えながらそう言って電話に出ると、向こうの相手は少しだけ息を飲んだようだ。

『あの…おはようございます、急にすみません。私、白石和美といいます』

その名前に、聞き覚えがあった私は少しだけ目を見開いた。そうだ…確か、昨日…。

「和美ちゃん…って、ユキの彼女の…？」

『…はい…朝からすみません』

謝るのは私の方だ。恐らく昨日私は、あの後ユキに絡むようにお酒を飲んでいたはず。彼女だってユキと一緒にいたかっただろうし、私に気を遣ってくれていたというのに。

「いえ…こちらこそ、昨日はごめんなさい」

素直にそう言うと、和美ちゃんは電話の向こうで微かに笑ったようだった。その笑みの漏らし方が何故かこちらが安堵してしまうもので、漠然と「やっぱりイイ子だな」と思わされる。

「あの…何か…？もしかして私昨日、酔ってあなたの前でユキに何か……」

『え！？　いえいえ！』

嫌な予感を感じつつ、ためらいがちにそう尋ねると逆に彼女が驚いたように声を上げて否定した。ホッと胸を撫で下ろし、私は吐息

を漏らす。さすがにこの年でユキ相手にないと思いたいけど…私には大学時代酔っ払ったせいで貴弘にキスをしでかした前科があるからだ。

『あの…実は、諒子さんにお話しておきたいことがあって…』
「…うん。なぁに？」
遠慮がちな彼女は、何と切り出していいか少し思案したようだった。ほんの一瞬の間の後、「あの」と改めて切り出す。

『そこに修司さん…います？』
「え？　…あ、ううん。外に出てるけど…何、聞かれちゃマズイ話？」
『いえ…あ、はい…』
どちらなのかはっきりしない答えを言いながら、彼女は少し困ったように笑った。
「大丈夫だよ、今聞こえる範囲にはいないから」
言うと、「すみません」と小さく言う。何だか謝られてばかりで、逆にこちらが恐縮してしまいそうだ。

『昨日…諒子さん、酔ってる時に「修司さんが浮気してる」って仰ってて…』
「え！」
驚いて声を上げた私に、和美ちゃんは「…やっぱり、覚えてないですよね…」と小さく呟いた。

『職場の後輩の方が、噂してるの聞いちゃったって…。修司さんが

女の子とイタリアンレストランで楽しそうに食事してた、って』
「……私…そんなことまで愚痴ってたんだ…」
恐らく、ユキの胸倉を掴みながら文句でも言っていたに違いない。
簡単に想像できるその光景に眩暈すら覚えながら、私は自分に呆れ返ってしまいそうだった。

『昨日は諒子さん酔ってらっしゃったので…そこで言っても仕方がないかと思ったんです。諒子さんが今日目が覚めたらちゃんとお話したいと思って、修司さんに連絡いただけるようにお願いしました』
「……？どういうこと？」
『あの…その修司さんがイタリアンレストランに一緒に行ったの、多分私だと思うんです…』
「……え？」
思わず眉を顰めて、私は携帯電話からの声に耳を傾ける。話がまだよく分からず、恐らくこの上ないくらいに怪訝な顔をしていただろう。

『私…2ヶ月ほど前に、修司さんにイタリアンレストランに連れて行っていただいたことがあって…。あ！あのそれも…私が先生にフラれたりして、修司さんが励ましてくれようとして…』
「……」
『だからあの…もしそれだったら、浮気とかじゃないんです！修司さん優しいから…私にすごく気を遣ってくださってて』
「……うん…」
『あの私…正直、修司さんにはいつも話を聞いてもらうばかりで…今回も、修司さんに彼女がいたって初めて知ったくらいで…。だからそんな私が言えることじゃないんですけど……修司さんは、浮気とかするような人じゃないと思うんです』

「……うん」
『昨日、諒子さんを迎えに来た修司さんを見て…ステキなカップルだなぁと思いました』
「……」
『だから…あの……』
「うん、分かった」
言いにくそうな彼女の言葉を制して、私は小さく頷く。
「ありがとう、和美ちゃん」
少し笑みを漏らして言った私の声に、彼女は安心したようにホッと息を漏らした。ほとんど話したことのない、１０以上も年上の私と話をするだけでも緊張していたのだろう。
それ以上は何と言っていいかわからず困っていそうだったので、あえて言葉を遮った。彼女の気持ちは、痛いくらいに伝わってきたから。それと同時に、彼女がどれほど優しい子なのかも。

「…ねぇ、和美ちゃんさぁ」
だから思わず、尋ねてしまう。
「何でユキと付き合ってるの？　和美ちゃんだったらもっとイイ男いっぱいいるでしょ」
『え！？　いえ…！』
笑いながら言うと、電話の向こうで彼女は本当に困ったような声を出した。その反応がまたかわいくて、私は今度こそ声をたてて笑ってしまう。

「…ありがとね、和美ちゃん」
改めて言うと、彼女は最後まで恐縮しまくりだった。丁寧に挨拶をした彼女と通話を終わらせ、私はその修司の携帯電話を閉じる。
そして大きめの窓を開けると、修司に「はい」と電話を差し出した。

「和美ちゃん、何だった？」
電話をズボンのポケットに戻しながら、修司はそう尋ねてくる。
部屋に入ってくると後ろ手にその窓を閉めた。
「…女同士の話」
「ふぅん？」
短くごまかすと、修司はそれ以上追及したりはしなかった。代わりに、ローテーブルの前に腰を下ろす。この部屋に来た時の、修司の定位置だ。

「で、話たいことって？」
そう尋ねる修司の前に、お茶も出さずに私も座る。今度はまっすぐ見つめ返して、私は小さく深呼吸した。
面と向かって話をする勇気を…和美ちゃんにもらった気がする。
「…全部話していい？私が今、考えてること」
小さく言うと、修司はあの顔でいつもの苦笑いを浮かべた。

「覚悟はできてるよ」
私の言うところの意味とは少し違う意味合いで、修司はそう呟く。

その顔を見据え、私はもう一度覚悟を決めるように息を吸った。

5

覚悟はできていると言った修司は、私が切り出した別れを受け入れているようにも思えた。引き止める気もないのか、修司からは抗う言葉すら聞けない。それが何だかやけに切なく感じるのは、私の身勝手に他ならないだろう。

「私…修司があのバーで働いてるのを、ずっと快く思ってなかった」

そう切り出した私は、今まで気づかないフリをしてきたことを口にすることで自身に言い聞かせているようだった。

「大学院に行く学費を稼ぐためだって言ってたから、初めは仕方ないと思ってた。でも段々修司からそんな夢を見てた頃の様子が感じられなくなって、がっかりし始めてた」

「……」

黙って私の話を聞く修司は、途中で口を挟もうとはしない。ただ感情の読めない無表情で、真剣に私の言葉に耳を傾けるだけ。

「初めは…それでも仕方ないと思ってたんだと思う。だけど、この年になるとそうも言ってられなくなってきたの」

もう私は、２８歳になった。将来のことを全く考えない年でもない。

「今の仕事は大好きだし、今私は仕事人間みたいに思われてるけど、本当は、いつまでも仕事を続けたいと思ってるわけじゃない。結婚したらあっさり辞めて家庭に入って、子ども産んで楽しく育児して

みたいなとも思う」
　仕事にしがみつくつもりは、毛頭なかった。ただ結婚をきっかけに、今までがむしゃらに働いてきた分、今度は家庭に専念してもいいと思う。
　私はあまり器用じゃないから、今目の前にあることを全力で努力しないとダメなタイプだ。だから社会人になった途端に、仕事しかできない人間になっていた。結婚して家族を持ったら、自分の性格では仕事は続けられないに違いない。

「２８にもなると、さすがに先のことを考えちゃって…。だけどそうした時、正直今のままだと不安なの」
「……うん」
　そこで初めて、修司が小さく返事をする。私のその不安な気持ちは受け止めてくれるのか、目を逸らし気味の私に頷き返した。
「男の人は…そうじゃないって分かってるつもり。男なんて３０代になってもまだまだこれからって感じだし…。修司がまだ結婚とか全然考えてないって分かってる。でも、私は無理なの…。夜の仕事で、将来の見えない人とこのままずるずる付き合っていくのは無理なの」
「……うん」
　また、修司が頷く。それが分かったから、私の目から堪えていたはずの涙が一滴零れ落ちた。

「だから…別れようと思った。もう無理だと思ったから。だけど…」

「『だけど』？」

一瞬言葉を切った私に、修司が優しい声で繰り返す。
妙な緊張感からか、この時私はろくに息ができていなかった。
「あの時修司の後ろ姿を見送った時…私はもうすぐに自分の言葉を後悔してた。それから、昨日バーで修司がどうしてあそこでの仕事を選んだかマスターに聞いた。ユキには、私が修司の話を聞かずに今まで来たんだろうって言われた。浮気を疑ったりもしたけど…それも誤解だって、さっき和美ちゃんに教えてもらった」
「……」
私は、ただ不安だったんだ。ただ寂しくて仕方がなかっただけなんだ。
「将来が不安になるのは気持ちがなくなったわけでもなくて…逆に、それくらい好きだったから」
流れる涙は拭いもせず、私は続ける。
「不安から別れを選ぼうとしたのは…このままずるずる付き合って、将来、結局修司が私から離れる時が来るのが怖かったから」
今のうちに傷ついてしまえば、年を取ってから何かを失うよりダメージは少なくて済むと思った。だけど…そんなのは、間違いだったんだ。
だって結局、職業に不安があろうが何を考えているのか分からなかろうが…それでも、自分の気持ちの在り処は一つなんだから。
「…ごめん…」
小さく謝りながら、私は手を伸ばす。指先は修司の服の袖を掴み、縋るのにも似た思いで続けた。

「別れたいって言ったこと…取り消したい」

それでも無理だと修司が思うなら、私にはもうどうしようもない。だから…今の私には、そう言うのが精一杯の勇気だった。

「……」

少し何かを思案するような表情を見せた修司は、やがて「ふーっ」と長いため息をついた。

そしてそれから、真顔のままポケットから名刺入れを取り出す。その中の一枚を出して、私の前に差し出した。

「……何？」

促されるままに受け取って、私は首を捻る。そこには、都内の法律事務所の所長さんの名前があった。

「大学時代にお世話になった教授の、知り合いの弁護士。その人のところでようやく空きが出て…今日からそこで働くことになってる」

「……え！！？」

続いた修司の言葉に、私は思わず自分の耳を疑った。上げた目線で、修司と名刺を交互に見比べる。

「俺は…まぁ、弁護士になれれば一番良かったけど、いつか法律関

係の仕事ができればそれで良かった。だからずっと働きながら勉強は続けてたよ。結局大学院に入って司法試験を目指すより、パラリーガルとして法律事務所で働ければ俺にとってはそれが一番現実的だと思った」

「『パラ』…？」

「弁護士の補佐的な職業、ってこと」

専門的には詳しくないので、修司が簡単にそう説明してくれた。

「法律関係の仕事をしたいと思っても…なかなか雇ってくれるところもなかったんだ。何の実績もないし、俺は特別成績が優秀だったわけでもないから」

「……」

「だけどようやく、その弁護士の先生が事務所に呼んでくれた。この前急な話で呼ばれて…待ち合わせに行けなかったのも、そのせい」

修司はあの時…この話をしようとしていたんだ。今ようやくそれが分かって、私はその名刺を持つ手に少し力をこめた。

「バーのマスターにはすぐに事情を説明して、その日づけで辞めさせてもらった。マスターは前から俺が将来どうしようと思ってるか知ってたから…快く送り出してもらえたよ」

「……そう…だったんだ…」

小さく呟いて、私はその名刺を修司の手に返した。それを受け取ってから、修司はそれを持っていた名刺入れに戻す。

「俺はさ、諒子」

改めて呼びかけられて、私はようやく顔を上げた。長めの前髪をかきあげながら、修司は少し困ったように苦笑いを浮かべる。

「あんまり、自分の話をするのは得意じゃないんだ。知ってると思うけど」
「…うん」
「そのせいで不安にさせてたなら…ごめん。話したくなかったわけじゃない」
……そう、分かっているつもりだったはずだ。
修司は自分の話をする時間があるなら、私の話を一つでも多く聞いてくれようとするような人だってこと。
でもいつの間にかそれが不満に変わっていて……こうして、きちんと話をすればお互いに分かり合えるはずだったのに。

「特に諒子には…仕事の話は決まってから、と思ってたから」
だってかっこ悪いだろ、と続けて、修司はまた少し笑う。

「だからそのことで…諒子が『私が話を聞かなかったからだ』って自分を責めるのは、違うよ」
「……」
涙の浮かぶ私の目元を長い指で拭って、修司はそう言った。だけどそのすぐ後、少しだけどこか複雑そうな表情を浮かべる。
「ただ…一つだけ、諒子は俺のこと誤解してる」
「……え？」
「……考えてないわけじゃなかったんだ」
小さな修司の呟きは、どこか言いにくそうにしているせいで囁き程度のものだった。油断すれば聞き流してしまいそうなそれに、私は首を捻って尋ね返す。

修司はそんな私の怪訝な顔を至近距離で見つめ返すと、あの苦笑いをもう一度浮かべた。そしてそれから、手近にあった鞄に手を伸ばす。その中から小さな何かを取り出し、私の手のひらにポンと乗せた。

「……何…これ」

聞き返さなくても、頭で考えれば分かったはずだ。ただ、その小さな箱を見た瞬間、頭が真っ白になって理解したくてもすぐにはできなかった。

「近いうちに渡そうと思って…ずっと持ってた。この前仕事が決まったのが諒子の誕生日だったから…ちょうどその日がいいと思って、あの時渡すつもりだったんだ」

そんな修司の言葉を聞きながら、私は震える手でその箱を開ける。リボンをほどいたその箱の中から出てきたのは、手触りのいい、それでもどこか重厚な雰囲気の「ケース」。

「…これ…」

開いたそこにあったのは、キレイな石のついた指輪。部屋の照明に当たって、きらきらと輝いていた。

「正直、意気揚々と渡しに言った日に別れてほしいって言われるとは思ってなかったけど」

修司はそう言って「はは」と笑ってから、ふっと表情を緩める。優しい顔で私を見つめ直してから、その開けたケースから指輪を取

った。反対の手で私の左手を取り、その薬指にはめる。

「修……」

「俺と、結婚してください」

「！……」

驚きの余り、止まりかけていた涙がまたぶわっと溢れてきた。熱い雫はすぐに目の淵に溜まり、今度は堪えることもできずにすぐに零れ落ちる。

「…はい…っ」

それだけ、答えるのが精一杯。

私は指輪をした指を離さないように固く握りこみながら、目の前の修司に勢いよく抱きついた。

＊＊＊＊＊＊

「うん？…うん、そう。修司と話し合って、式と披露宴は親族だけでひっそりやろうって話になって。

友達にはまた別に集まってもらって、レストラン貸切にしてウェディングパーティーみたいにしようかなって。もちろん、今すぐにってわけじゃないんだけどね」

あれから数日後、それまでが長すぎたせいか今は勢いよくトントン拍子に話を進めていた。今日も仕事の休憩中に、ファイル整理をしながら携帯電話でそんな話をしていた。

「で、そのレストランを何箇所か下見に行きたいんだけど…和美ちゃん、一緒に行ってもらえない？」

夏休み中だという和美ちゃんに電話をかけて、私はそう続ける。彼女とは、あの後無事に修司とうまくいった話を報告して以来電話をしたりメールをする仲になっていた。

まだたった数日の付き合いだけど、高校生にしては落ち着いているせいか私も話しやすい。

「ん？大丈夫大丈夫。修司は仕事変わったばっかりで忙しくて行けないって…。式の下調べの方で精一杯みたいで、パーティーの方は私に任せるんだって」

一度言葉を切って、私はニヤリと笑うと「それに」と付け足した。

「和美ちゃんも、将来に備えてこういうの見ておくのも悪くないでしょー？」

言うと、予想通り焦ったのか電話の向こうからかわいらしい悲鳴が聞こえてくる。

まぁまだ高校生だから結婚なんて現実的には考えていないだろうけれど、夢くらいは見ていいに決まってる。

「理沙ちゃんも誘うつもり。彼女、年下だけど結婚に関しては先輩だから」

続けた私に、和美ちゃんは恐縮しながらも喜んで引き受けてくれた。

その時ちょうど、店舗と事務所をつなぐドアが開いて「店長ー、ちょっとお願いしますー！」という声が聞こえてくる。

「はーい。…あ、和美ちゃん、ごめん、また連絡するね。ありがとう」

お礼を言って、私は携帯電話をしまうと声のした方へ向かう。
アルバイトの女の子が山のような在庫を両腕に抱えて、縋るような目でこちらを見ていた。

「本部からの指示があったこれの処理、どうすればいいのか分からなくて…」
「あぁじゃあ、とりあえず奥に運びましょ」
彼女の腕からその半分を引き受けると、私はそのまま事務所の方へ引き返す。
そんな様子を少し離れたところで見ていた前田さんが、熊野さんに「…店長、最近なんかちょっと変わりましたよね」と囁いているのが聞こえた。

変わった…のだろうか、私は。
これからの自分には仕事だけじゃないと思えば、不思議と肩の力が抜けたのかもしれなかった。「辞めてもいい」と思っていたはずの仕事は、「いつでも辞められる」と思えばリラックスできたのか今までより順調に運んでいる気がする。

「店長！こっちもお願いします！！」
別の場所から飛んでくるヘルプの声に、私は顔を上げる。
「はーい」
と大きく返事をして、持っていた在庫の処理を詳しく指示すると忙しくすぐにそちらへ向かった。

今の自分なら、プライベートでも仕事でもうまくやっていける気がする。

だってここから、私の新しい未来を描いていくのだから。

5（後書き）

番外編を読んでくださってありがとうございました。

次から本編に戻ります。

1

束の間の安息は本当に一瞬のものだった。

あの日から3日たつ前に私は由香子さんの要求を呑めるわけもなく、あっという間に事態は元へと戻っていった。今では先生の家の電話と携帯電話は相変わらず彼女からの着信で鳴り止まないらしい。3日時間をあげる、と私に言った彼女とのやり取りを知らない先生は、何もなかったその空白の3日に首を捻っていた。

でも、それを説明する勇気はなかった。だって、彼女の要求を呑まなかったのは私だ。私が今、先生を苦しめているようなものだからだ。

「…先生、ごめんね…」

私が別れを選べたなら、彼女の気も収まるのかもしれない。先生だって、もしかしたら少しは彼女に気持ちが揺れているかもしれないけれど…。

それでも私は、あの日の先生の言葉を信じたかった。

由香子さんが私に直接害を及ぼすかもしれないという可能性を考えたら、先生は自分から私と別れた方がいいのかもしれないと言った。だけどそれはできない、と、はっきり言ってくれたはずだ。

私はその一言が嬉しかった。由香子さんから何をされようと、それだけで頑張れる気がした。

だからこそ、私だって先生との別れは考えられない。不安に想う気持ちは今だってなくなったわけではないけれど、だ。

先生が、あれから由香子さんからの電話を取ることは一度もなかった。全く気にしていない風にも見えるけれど、やっぱり精神的に疲れているのが分かる。それを見ていると胸がギュッと鷲づかみされるような感覚で痛んだけれど、やはり身を引く勇気は出なかった。

電話が鳴り止まなくなってから、先生は再び私を家に招き入れなくなった。余計な心配をかけたくないからだということは分かっているけれど、あまりにも先生が由香子さんのことを一言も口にしないことが私には辛かった。

やっぱり、何らかの言い訳でもなんでもしてほしい。

今思っていることを全部話してほしい。そうじゃなきゃ、あの日由香子さんに会って揺れた感情を私に悟られないように押し殺しているだけなんじゃないか、なんて、変な邪推をしてしまいそうだった。

「姉ちゃん、いる?」

夏休みも残すところ後1週間程度になった頃。ノックの音と共にドアを開けながら、弟の祥太郎が部屋に入ってきた。…返事を待たずに開けたらノックの意味もないんじゃないの。そうツッコミたか

った言葉を飲み込んで、私はベッドを背もたれに座っていた態勢で顔を上げる。

「何？」

「あのさぁ、姉ちゃん前にＭＭ／ＪのＣＤ持ってたじゃん？　あれ貸してほしいんだけど」

「あんたジャズなんて聴かないでしょ」

「いやそれが、２学期にある文化祭でクラスで使うんだよね。ちょうどＣＭで流れてるあの曲がいいって話題になったんだけど、誰も持ってなくて。頼むから貸してよ。ちゃんと傷つけずに返すからさ」

「…仕方ないなぁ…」

立ち上がりながら、私は部屋の隅にあるオーディオラックの方へ行く。そこには今までに買ったジャズやらポップスやら、ジャンルは様々のＣＤが並んでいる。

ジャズを集めるようになったのは、先生の影響だ。…まぁ買ったものより、もらったものの方が多いかもしれないけれど。

「……あ」

手近の部分を探しながら、私はふと声を上げる。その呟きに、ドアの辺りで立ったままＣＤを待っている祥太郎がわずかに首を傾げた。

「…ごめん、そのＣＤ今ここにないわ」

最後にそのＣＤを見た場所を思い出して、私は苦い顔で祥太郎を振り返る。

「今度でもいいでしょ？　近いうちに渡すから」

「……彼氏の家か」

ニヤリと笑ってそう言った祥太郎は、だけどすぐに眉を顰めた。

「困るよ。明日クラスの連中と集まって打ち合わせする約束してんだもん」
「知らないわよそんなの」
「そこを何とか！　どうせ姉ちゃん今日ヒマなんだろ？　彼氏に会いがてら取ってきてよ」
パン、と顔の前で両手を合わせて、祥太郎は私に拝むような姿勢でお願いする。昔からこうだ。祥太郎はこういう時甘え上手。しかも私が拒むわけがないのも分かった上で、だ。

「……」
時計を見れば、まだ時刻は１５時を回ったところ。
先生は今日は学校で仕事があると言っていたから…メールで断って、取りにだけ行かせてもらおう。
「一緒に行こうか？」
「何でよ」
からかうような祥太郎の言葉を、私は呆れたようにあしらった。
「サンキュー姉ちゃん、代わりにこの前また朝帰りしたのは父さんと母さんに黙っとくから」
「そういうことあえて言わないのっ」
しっと口元に手を当てて苦い顔をして見せると、祥太郎は今度は声を上げて笑う。口止めなんてしなくても、祥太郎が誰かにそんな話をするような子じゃないとは分かってはいるつもりだ。

そんな祥太郎を部屋から追い出し、私はすぐに外に出られるような格好に着替える。
真夏の暑い中に家を出るのは嫌だったけれど、長い髪をアップにして私は少しでも涼しくなるようにし、思い切って外へ出た。

＊＊＊＊＊＊

電車に乗って目的の駅で降りると、そこから先生の家までは少し歩く。

その大したことのないはずの距離もこの気温ではうんざりするほどで、真上の太陽が恨めしかった。家を出る時に先生には事情を説明するメールは送ったけれど、今のところ返事はない。仕事が忙しいのだろう。今日は1年生の補習だって言ってたっけ。

アパートのドアの前で、勝手知ったる家のように鍵を開ける。中は外より陰がある分少し涼しい気もしたけれど、気休め程度のものでしかなかった。

開いたドアを後ろ手に閉めて、誰もいないのに「おじゃましまーす」と呟くように言う。ヒールの高いミュールを脱いで上がると、自分の荷物置きにと一部分を空けてもらったクローゼットにまっすぐ向かった。

服やらお泊りグッズやらを置いてある中に、目当てのCDを見つける。

CMでも使われているほど有名なバンドで、メジャーすぎて先生と私の好みではなかった。だから、ここに置きっぱなしにしてしまっていたんだった。

それを鞄にしまって部屋を出た途端、リビングに置いてある電話がふと目に止まった。その回線が乱暴に引き抜かれているのも。恐らく音量は最小限にしているのだろうけれど、それでも鳴り続けるそれに頭を痛めるのは容易に想像できる。

誰かから重要な電話がかかってくることもあるかもしれないと言っていたので、帰ってきたらさすがに線を抜いておくこともできないのだろう。

「……」

この時手を伸ばしたのは、どうしてだったんだろう。

興味本位だったのか、それとも…。先生を少しでも助けたい、そんな自惚れた気持ちだったのか。

……どちらにせよ、ろくな思いじゃなかった。

手にした回線を、電話に差し込む。抜かれた電話のコンセント自体も、壁にあるそこに差し入れた。

途端に電源が入ったことを示すように、カチッと音を立てて表示部分がオレンジ色に点く。そして1分もたたないうちにその電話が着信を知らせるように鳴り出したので、私は思わず目を見開いた。

電源を入れてこんなにすぐに鳴るということは…。

あの人が、繋がらなくてもずっとかけ続けている証拠？その底知れぬ執念のようなものを垣間見た気がして、私は思わず身震いした。

そして、次の瞬間には憤りに似た感情を抱く。震えそうな手を再び電話に伸ばした私は、少しためらいがちに今度は受話器を掴んだ。

「もしもし」

私が出るとは思っていなかっただろう。一瞬、向こうで空気を飲む音が聞こえた気がした。

そんな一瞬の間のあと、予想通りの女の声が「…和美ちゃん？」と呼びかけてくる。それには答えずに、私は代わりに「…何の御用ですか」と尋ねた。

『和美ちゃんに用はないの。…ユキ出して』

「いません」

『嘘言わないで！』

可憐なあの声が、少し語尾を強める。今までのような余裕さを感じられないそれに、私は内心で首を捻った。私の知っている彼女ではないように思えたからだ。この前は、私を半ばからかうかのように余裕で話をしていたのに…。

『出しなさいよ…！　ユキが、そこにいないわけないんだから』

何を根拠に、と思ったけれど、そこでふとなっちゃんたちの以前の言葉を思い出す。

由香子さんは…付き合っている時もなかなか合鍵をもらえなかったんだって…。強引にそれを手にした由香子さん以外の過去の彼女たちは、そもそも渡してももらえなかったとか。そうだとしたら、

彼女の中では先生が私に鍵を渡すこともありえないんだ。

「…本当です。そもそも、先生がいたら私を電話に出させるわけないじゃないですか」

彼女が珍しく感情的だからか、今日は私が冷静になれた。スーッと冷えていく頭の中で、選びながら言葉を口にする。

『……』

私の言葉で納得せざるを得なかったのか、一瞬、由香子さんが黙りこんだ。だけどすぐに、再び不機嫌そうに口火を切った。

『和美ちゃん…私の言うこと、聞かなかったのね』

3日だけ待つからその間に先生と別れろ、と要求されたことを言っているようだった。受話器から漏れるそんな声に、私は「…当たり前です」とはっきり告げる。

「そんな要求、呑めるわけありません。…呑む意味もないですし」

『どうしてよ！』

声を荒げる由香子さんは、やっぱり私の知る彼女ではない気がした。何かを焦るような…追い詰められたような声だ。

『あなたなら…まだいくらでも先があるじゃない…』

急にストンと声のトーンを落としたのは、彼女の感情の不安定さを物語っているようにも聞こえる。

『私には…もう何も残ってないのに』

泣いているのか、声が震えているのが分かった。思わぬ展開に、私は息を詰めて耳を傾けることしかできない。

『ユキが……ううん、ユキしかもう私にはいないの。お願いだから…ユキを返して…っ』

「…っ」

そんなこと、できるわけがない。ただ、限界に来ているような声音の彼女の言葉は、耳を突き刺すようですぐに返事ができなかった。

『……ユキに、伝えて。あなたから』

少しクールダウンするように深呼吸をした由香子さんは、次の瞬間にそう改めて言った。言葉を返すのも忘れて、私はただ続く声を待つ。

『例の場所で、一晩待ってるって…』

その言葉の指す場所を私は知らなかったけれど、恐らく先生なら分かるんだろう。それが何だかやけに悔しくて、私は唇をギリと噛んだ。

「…伝えるわけ…ないじゃないですか」

それだけ何とか答えた私に、由香子さんはまた小さくため息を漏らす。

『和美ちゃん、私…もう疲れたの』

それはこっちのセリフだ、という言葉を返しかけたけれど、続いた彼女の発言に私は思わずそれを飲み込んだ。

『一晩待って、ユキが来なかったら私はもう…』

「…『もう』？」

嫌な予感がして、ドクンと胸が脈打った。思わず聞き返した私に、由香子さんが『来なかったら、そこで…』と言葉を継ごうとする。

…その時、だった。

玄関のドアが、開く音がした。

そして覗いた、背の高いシルエット。

思わずそちらを振り向いた私と目が合った先生は、「何だ来てたのか」と少し口元に笑みを浮かべた。メールは見ていなかったらしい。そして次の瞬間、私が受話器を持っていることと恐らく顔面蒼白なことに気づいてハッと顔を上げる。

それから乱暴に靴を脱ぎ捨てると、一瞬で状況を把握したように急いで私から受話器を取り上げた。

それと同時に、由香子さんの方も電話越しに状況を把握したらしい。『ユキ!?』と呼ぶ声が、受話器から私のところまで漏れ聞こえる。

『ユキ……私……っ』

今までの由香子さんとは違う様子に、先生も一瞬で気づいたらしかった。受話器を耳に当て、声も発さないままだったけれどわずかに目を見開いた。

『もう限界なの…。あの場所で待ってるから、今すぐ来て…っ』

スピーカー機能を使わなくても、聞こえてくる声。さっき私に託そうとした言葉を告げて、由香子さんはしゃくりあげながら泣いているようだった。

『一晩待っても来なかったら、私…』
さっき私には最後まで言い切れなかった言葉を、今度は続ける。

『そこで、死ぬから』

それは覚悟を秘めたような、悲痛な声だった。

本気か嘘かなんて分からない。
だけど、その言葉に先生は目を見開いた。
そこで途切れる通話音。プープーという空しい音だけが響いているのに、先生は硬直したように動かなかった。

それを見た瞬間に、言いようのない不安に襲われる。「…先生」と気づくと震えそうな声で呼びかけていた。

「先生っ」
ハッと我に返ったように、私に腕を掴まれた先生がこちらを振り返る。取り繕うように唇の端を持ち上げようとして失敗した先生の顔を見た瞬間、私は不安と同時に嫌な予感がした。
「まさか」という思いから、縋るようにその腕を更に強く掴む。

「先生、行かないですよね…？」
感じた不安は、先生が私を置いて由香子さんのところへ行ってしまうんじゃないかと思ったから。それはそうだろう。「来なければ

死ぬ」なんて言われて、平然と無視できるわけがない。でも…それでも、私が不安だったのは先生が行ってしまうのが、それだけが理由じゃない気がしたから。

先生は、やっぱり由香子さんのこと…。

私の言葉に、先生はまたわずかに目を瞠った。まっすぐに私の目を見つめ返して、こちらの真意を探ろうとしたのかもしれない。

そしてやがて、「…白石」と静かな低めの声で私を呼んだ。

呼ばれた瞬間に、嫌な気分が胸の中を支配する。あまりの気持ち悪さに吐き気すら覚えそうになったけれど、私は先生にしがみつくようにしてその体を揺さぶった。

「先生、行きませんよね…!?」

「白石、」

「嫌だ！　行かないで！」

涙すら浮かんできた目で、それでも逸らさずに叫ぶ。心の底からの声に、先生はハッと顔を上げた。そして改めて私をまっすぐに見つめ返すと、やがて申し訳なさそうに目を伏せる。

嫌だ、嫌だ、嫌だ……！！

置いて行かないで、という言葉は、うまく声にならなかった。

再び目を開いた先生は、私の髪に手を伸ばす。なだめるようにそれを撫でながら、非情な言葉を継いだ。
「白石、ここで待ってろ」
「どうして！」
いやいやをする子どものように、私は力いっぱい頭を左右に振る。

「どうして、先生が行かなくちゃならないの!?　どうして私を置いて行くの!?　先生は…やっぱり由香子さんが好きなの!?」
「…っそんなわけねぇだろ！」
暴れる私を抑えつけるように、先生はぎゅっとそのまま抱きしめた。それでも抗うように、私は全身でその体を押す。
「じゃあ何で…!!　全然分かんない！　由香子さんが好きなんじゃないならどうして行くの…!」
そんな思い出の場所に…私の知らない場所に、行ってほしくなんてなかった。

「……」
困ったような…ううん、どこか傷ついたような複雑な表情をした先生が、再び目を伏せる。私の質問に答える気はないのか、それ以上の説明をしようとはしてくれなかった。それを見て、私は一旦全身の力を緩める。
それに気づいた先生が、抑えるように掴んでいた私の手首から手を離した。

「……もう…分かんないことだらけ」

ボロボロと涙を零しながら、私は小さくそう言うのがやっとだった。

「もう、無理です」

右手の手の甲を眉間の辺りに押し付けながら、私はそう言葉を搾り出す。先生はそのまま、黙ったまま私を見つめていた。

「それでも由香子さんのところに行くなら…私はもう、無理だと思います」

手の下で、涙が止まらない。唇を噛み締めてもそれは留まることを知らなかった。

「先生が今私を置いて行くなら、別れます」

弾みで口にした言葉ではなかった。ポーズのつもりもなかった。ただその時、本当に限界だと思ったんだ。

理由なんて知らない。先生の気持ちなんて分からない。だけど、今「目の前で」先生が私より由香子さんを選ぼうとしたことだけは事実だ。それが先生の言うように「由香子さんのことが好きなんじゃない」としたら、他に何があるというのだろう？

私には、その事実だけで十分な重荷だった。ここで大人しく待ってなんていられるわけがない。

「……ごめん」

やがて先生から、ポツリとそんな言葉が漏れた。頭上に降ってきたその一言に、私は目を見開いて顔を上げる。

ポーズのつもりはなくてもこんなにあっさり切り捨てられると思っていなかった現実に、頭が真っ白になった。

一言だけ謝った先生は、そのまま踵を返す。

テーブルの上に置いてあった車のキーを乱暴に取り上げると、そのまま走って部屋を出て行ってしまった。

残されたのは、茫然と立ち尽くす私と無情な沈黙。

それと、それまでの何もかもを断ち切ってしまうかのように閉まる、ドアの音だけだった。

2

茫然と見開いた目からは、とめどなく涙が流れ続ける。ズルズルと膝から崩れ落ちて、私はそのままどれだけ泣いていただろう。訪れたのは夕方だったはずなのに、気づけば外は暗くなっていた。動けないままでいた私の鞄の中で、携帯電話が鳴っている。それを取る気になれるはずもなくしばらく放置して、私は泣き続けていた。

…今頃、先生はもう由香子さんのところに着いているのだろうか。来なければ死ぬと言って泣いた彼女を、どんな風に慰めているのかなんて考えたくもなかった。

鞄の中の携帯電話は、私がそんな思いを抱いている間も何度か着信を受け直しながら鳴り止まなかった。

どうせ先生からの電話ではないだろうし、そうだとしても今出られる自信はない。そう思いながらとりあえず出したそれを確認すると、着信相手は祥太郎だった。恐らく、ＣＤを取りに行っただけにしては帰りが遅いから心配しているんだろう。それでもそれに出られる余裕もなく、ただ力なく床にポトリと投げ出してしまった。

やがてやんだ、祥太郎からの電話。

だけどすぐ後に、また電話が鳴る。涙でぐちゃぐちゃになった目で視線だけを送ると、今度は違う名前が画面に浮かび上がっていた。それにわずかに目を見開いてから、私は思わず電話に手を伸ばす。

縋るような思いだったのかもしれない。
普段めったに電話をくれる相手ではないからこそ、その時何かを感じたのかもしれなかった。
「はい…」
小さめの声で出たけれど、それだけでは向こうは私の異変には気づかなかったようだった。街中にいるらしく、後ろがうるさいのも原因かもしれない。
『もしもし、和美ちゃん?』
いつも通りの明るめの声が携帯から漏れる。
『今夜、予定ある?もしなかったら今から夕飯でもどうかと思って…って、もう食べちゃったかな』
「……いえ」
『そっか。実は諒子が和美ちゃんにこの前のお礼もしたいって言ってるんだ。ついでに貴弘も呼んだし、もし仕事終わってたらユキも連れて…』
「…修司さん…っ」
『!?　和美ちゃん、どうした!?』
朗らかに話を続けていた修司さんは、一度私がその名前を呼んだ声でこちらの様子に気づいたようだった。急に態度を変えて、慌ててこちらに呼びかけ直す。
『何かあった?　えっと…今どこ?』
「…先生の…」
『ユキの家!?　分かった、そこで待ってて。すぐに行くから』
それだけ言って、修司さんはこちらの返事を待たずに通話を終わらせる。

その慌しさに一瞬キョトンとしかけたけれど、すぐに来てくれるなんてまるでヒーローみたいだ、と漠然と思った。

そんなことを考えたから、また由香子さんの元へ走っていった先生の後ろ姿を思い出す。泣いて駆けつけてくれるのがヒーローなら…由香子さんにとっての先生もまさにそれだ。

「〜っ」

悔しさと嫉妬と悲しみとで、グチャグチャになった感情が落ち着くことはない。涙でボロボロの顔を手の甲で拭って、私はその部屋で小さくうずくまっていた。

＊＊＊＊＊＊

1時間ほどしてここへたどり着いた修司さんは、諒子さんとなっちゃんを連れていた。心配そうな2人の後ろで、なっちゃんは不機嫌そうに顔を歪めている。

私に怒っているわけではないことは分かっていたけれど、「全部話せ、白石」と言われると思わず身を竦めるほどの迫力はあった。

いつもと違う私の様子だけで、恐らくどれだけ事態が深刻なのかを理解してくれているんだろう。

ポツリポツリと、涙のせいで途切れがちな言葉を紡ぎながら私は今日のこととこれまでのことを全部3人を前に話し始めた。

「…の野郎っ」
話を聞き終えたなっちゃんは、予想通り一番に怒ってくれた。ギリ、と唇を噛む仕草は、湧き上がる苛立ちを何とか抑えようと努力している証拠のようにも思う。諒子さんはソファで私の隣に座り、ずっと背中をさすってくれていた。修司さんは、ただ壁にもたれたまま手を口元で覆って何かを考えているようにも見える。恐らく、私を含めたこの中で一番冷静なのは彼だろうと思う。

「殴りに行く！」
「貴弘…っ」
今にも立ち上がりそうななっちゃんに、諒子さんが制止するような声をかけた。
「ユキが向かった場所も分からないでしょ？無茶言わないの」
「…っじゃあここで待って、殴り倒してやる！」
再び床に胡坐をかいてドカッと座ったなっちゃんは、その鋭い目線を今度は私に向ける。

「お前も…ユキに何とか言ってやれよ！何黙ったまま好き勝手させてんだ！」
「……」
黙っていたわけじゃない。由香子さんのところへ行くなら別れると、はっきり告げた。それでもその手を振り切って走って行ってしまったのは、先生の方だ。

そう答えたい気持ちもあったけれど、この時私は別のことを口にしていた。

「もう…無理」

あの時、先生本人に告げた言葉だ。

「これで私が何かを言って、それで先生が戻ってきたとしても…無理なの。先生が由香子さんのところに行ったのは事実で…」

膝の上で握っていた拳に、ぎゅっと力を込める。

「何もかもなかったことにして、元通りになるなんて不可能なの」

「…和美ちゃん…」

まるで自分の痛みのように、諒子さんが眉を寄せる。そんな私の様子を見て、なっちゃんはちっと舌打ちをするとガシガシと頭を掻いた。

分かってる。なっちゃんが怒ってるのは、私にじゃない。私のために怒ってくれるその気持ちは嬉しかったけれど、それでも涙が止まることはなかった。

3　side：Syuji

しばらくしてようやく落ち着いた和美ちゃんを、諒子は自分の家に連れて行くと言った。この状態じゃ一人にするには不安だし、家の人にも必要以上に心配をかけるだろう。ソファに座らせたままの彼女の代わりに家に電話をした後、諒子は「ちょっと」と言うように俺に顎で別の部屋を示した。

リビングに残る2人に声の届かない位置まで移動して、諒子はボソボソと言う。

「貴弘は自分一人でここに残るって言ってるけど…あんたもここに残って」

「…そのつもりだよ」

軽く頷いて、俺は小さく息を吐いた。今の貴弘だけでユキに対面させるわけにはいかない。そこは諒子と俺の共通の意見だった。

「じゃあお願いね。…ちゃんと止めてよ？」

「まぁ一発ぐらいは大目に見ようかな」

苦笑い気味に言った俺に、諒子は呆れたように冷めた目を向ける。

「…これだから男は」とかなんとか、文句を口の中で転がしていた。

そうしてリビングに戻って和美ちゃんを立たせると、憮然とした面持ちのままの貴弘に一声だけかけて部屋を出て行く。車の鍵を持たせたので、俺と貴弘は帰る時には徒歩になるだろう。

その頃に見上げた時計は、もう22時になる頃だった。

ユキが出て行ったのが夕方らしいので、もう5時間ほどはたっているだろう。

そもそも由香子さんとの約束の場所がどこかも俺には分からないし、往復してもどれくらいかかるのか見当もつかない。

だから、何時に帰ってくるのかなんて分からない。夜のうちに帰ってくるという保証もない。

「…貴弘、一回出直した方がいいんじゃない？」

そう声をかけた。だけど貴弘は、当然首を縦には振らなかった。俺とも目を合わせないようにしているかのように、少し顔を俯かせて黙ったままだ。

いつまでそうしているつもりなのか…。たとえば、ユキが今日朝になって帰ってこなかったとしても？　その可能性だってないわけじゃないんだ。

「……の、せいだ」

やがてポツリと、そんな声が聞こえた。

か細いそれは室内がこれほどの静寂に包まれていなければ聞き逃してしまいそうなほどだ。

その声が、つまり貴弘が呟いたものだと気づいて、俺はそちらを振り返る。エアコンもつけずに窓を開けただけの状態で暑いはずなのに、貴弘の顔はどこか青ざめているようにも見えた。

「…俺…は、白石が一年の時からユキのことを好きなのを知ってた」

そう言う声は、どこか震えそうにも聞こえる。貴弘の言葉は、和美ちゃんにも聞いたことがある。1年生の時から、和美ちゃんは貴弘に相談に乗ってもらってたって…。彼女がどれだけ貴弘を信頼しているのか、容易に分かる気がする。

「それで、その背中を押し続けてきた。うまくいけばいいと思ってた。でも、本当は……」

眉間の辺りに手の甲を当てながら、貴弘は顰めた顔のまま仰向く。何かの痛みに耐えるような顔を、俺はじっと見据えていた。

「それは、白石の為なんかじゃなかったんだ」

「……え？」

思いもよらない告白のような言葉に、俺はわずかに目を瞠る。こちらを見返しはしないまま、貴弘は眉をひそめて目を閉じていた。

「ただ、俺は…あいつなら、ユキを変えてやれるんじゃないかと思ったんだ」

全ては、和美ちゃんを応援しようと思ったわけじゃなかった…？いや、もちろん健気な彼女を応援したい気持ちはもちろんあったの

だろうけれど。それよりも先に、貴弘が心配していたのは由香子さんを失くして4年も傷ついたままだったユキの方。そのユキを変えてくれるんじゃないかと、和美ちゃんに期待したということか。

「…やめさせりゃ良かった」

ポツリと呟いた貴弘が、全ての力をなくしてしまったかのように壁にもたれたまま手足を投げ出す。糸を切られた操り人形のようにダラリと脱力し、弱々しく続けた。

「…あの時…、俺が止めてりゃ白石がこんな形で裏切られることはなかったのに…」

「……」

貴弘のせいじゃない、とは、言えなかった。もちろん本音ではそう思ってる。だけど、今何を言っても貴弘には無意味な慰めでしかないような気がしたからだ。

……こういうことか、ユキ。

お前が、今の和美ちゃんには何を言っても無駄だって言ってたのは…。

こちらがどれだけ本当のことを口にしても、相手の耳には入らないってこともあるんだ。今なら、その意味が分かる気がした。

言葉を返せずにいた俺につられるように、貴弘もそれっきり黙りこむ。そうして長い間、2人で部屋の隅と隅で向かい合うように座り込んでいた。何時間微動だにしなかっただろう。

玄関のドアが音を立てたのは、もう空が明るくなり始めた頃だった。

＊＊＊＊＊＊

ドアを開いた瞬間に中にいる俺たちに気づいて、ユキは目を丸くした。だけどそれも一瞬のことで、すぐに事態を把握したようにいつもの表情に戻る。…ユキのこういう頭の回転の速さが、俺は昔から好きだ。

「どこ行ってたんだよ」

それまで座ったままでいた貴弘が、ゆらりと立ち上がる。重い腰を上げながらそう尋ねると、ユキは靴を脱いでこちらに入ってきた。貴弘の横をすり抜けて、俺の前を通りすぎて…そのままソファにドカッと腰を下ろす。その横顔は、当然だろうけれど疲れているように見えた。

「こんな時間まであの女と一緒だったのか。それともキョーハク通り死んだか？」

「……」

揶揄するような口調の貴弘の皮肉に、そこでようやくユキが目線を上げる。ピクリと眉を持ち上げて、貴弘を睨み据えるその目は違う人間だったら怯んでいただろう。

「何とか言えよ！お前…っ、白石がどんな気持ちで…」

大股で俺の前を抜けて、貴弘は怒鳴りながらユキに近づく。そしてそのまま、ガッとユキの胸倉を掴み上げた。ソファに座るユキの長身さえ、腰が浮いてしまうんじゃないかというぐらい引っ張る。それでもユキは、どこか冷めたような冷静な目でただ貴弘を見据えていた。

「俺は…」

やがてユキが、いつもより少し低めの声で言う。

「白石に話さなきゃならねぇことはある…けど、お前に弁解して許しを請うようなことはしてない」

「…てめぇ…っ！」

ガッと鈍い音をたてて、貴弘の右拳がユキの頬に叩きつけられた。思わずその嫌な音に眉を寄せた俺は、だけどユキが無抵抗なのはわざと殴られたんだと気づく。貴弘もそれに気づいたのか、余計に激昂したようにもう一度拳を振り上げた。

「…貴弘っ」

その手を、俺は後ろから掴む。

ユキはというと、貴弘のもう片方の手に胸倉を掴まれた態勢のままで俺たち2人をどこか他人事のように見つめていた。

「俺が見逃せるのは、一回までだよ」

放っておけば何度ユキを殴るか分からない。そう悟って、俺は言

いながらその腕を掴む手に力を込めた。ググ、と音がしそうなほど握ると、貴弘はようやく少し落ち着いたのか、怒りのあまり震えていた拳から徐々に力を抜く。
それに気づいて俺も手の力を緩めると、貴弘はもうユキに殴りかかろうとはしなかった。その代わり、悔しそうに唇を噛み締めてからまた重く口を開く。

「お前…分かってんだろうな」
拳は下ろしたと言っても、怒りの矛先が変わるわけじゃない。目の前のユキを睨むように見下ろして、貴弘はかけている眼鏡を押し上げた。
「お前があの女の元に行ったことは、白石だけじゃねぇ…」
一度そこで言葉を切った貴弘を、ユキは目を逸らしもせず聞いている。
「俺への裏切りでもあるんだからな…！」
言い捨てて、貴弘は俊敏な動作でもう一度拳を繰り出した。
もう殴らないだろうと思っていた俺は隙を突かれて、今度は止められなかった。
「…貴弘っ」
非難するように顔を仰ぎ見ると、貴弘は悪びれた様子もなく「…帰る」と踵を返す。
それから、
「お前との腐れ縁もこれまでだな」
鼻であしらうようにユキにそう言って、さっさと玄関ドアを開けて出て行ってしまった。

「……」
殴られた頬はもちろん痛むだろう。そこを手の甲で抑えながら、ユキはソファに身を沈めたまま目を閉じた。眉を寄せて固く閉じら

れるそれを見て、俺は小さく息をつく。
キッチンに戻って手近のタオルを冷たい水で濡らすと、それをユキに手渡した。
「……悪ぃ」
呟いたユキのその言葉には、タオルのことだけじゃなくて色々な意味が含まれている気がした。

「和美ちゃんは、諒子と一緒にいるよ」
「……」
俺の言葉を黙って聞きながら、ユキは冷えたタオルを頬に押し付ける。唇の端からは、薄っすらと血の色が滲み出ていた。

「このまま何も言わないで、本当に別れるつもり？」
「……」
ユキの沈黙は、肯定とも否定とも取れる。だから、分かる気がした。

きっとユキは、和美ちゃんが「無理」だというなら強引に押し切ろうとはしないはずだってことが。

それは、自分のしたことがそれだけ相手にとって傷つけることだという自覚があるから。
でもそれじゃあまりにも…。

「和美ちゃんがかわいそうだよ、ユキ」
「……」
それでも、ユキは何も言わなかった。俺と貴弘にですら、その胸の内は明かさないということだろうか。…いや、ただユキはきっと、自分が本当に考えていることを一番に話すべき相手が、俺でも貴弘でもないということを知っているだけだ。

「……俺も帰るよ」
今のユキには何を話しても、貴弘や和美ちゃんと同じで無駄なだけだ。
そう思って、俺はそう言って踵を返す。
「和美ちゃんの様子だけ、後で連絡する」
「……修司」
「ん？」
「お前は…殴んねぇのか」
ユキのいつもとは違う弱々しい雰囲気のその問いかけに、俺は思わず目を丸くした。
そしてそれから、思わずフッと笑みを零してしまう。大学時代によく女の子たちから「俺様」なんて言われていた奴のセリフとは思えない。

「まぁ…しょうがない」
わざと笑いながら言って、俺は靴を履きながら答える。
「俺は貴弘の気持ちは分かるし、和美ちゃんの味方でもあるけど…」
一度言葉を切って、俺は肩越しにユキを振り返った。
「それ以前に、お前のことも信じてるからさ」

「……」

言うと、ユキは言葉をなくして目を瞠る。

それにもう一度笑うと、「じゃあ」と片手を挙げて俺は玄関のドアを開けた。

さて、とりあえず諒子の家へ向かうか…。

そう思ったけれど、この時間じゃもしかしたら和美ちゃんは眠れなくてもようやく落ち着いてきた頃かもしれない。今朝は仕事が休みだし、昼前に行くことにして俺はとりあえず自分の家の方へ足を向けた。

4

夏休みを残すところ一週間となったあの日、私は諒子さんの家で昼過ぎまで泣いていた。声すら出ない。ただ、涙が次から次へと溢れる。こんなに静かに…それでもずっと泣き続けたことが今まであっただろうか。

正直、その後どうやって帰ったのかは覚えていない。諒子さんと修司さんに車で送ってもらったのだろうけれど…あまり記憶になかった。後で気になったのは、これほど散々迷惑をかけておいてその時お礼をきちんと言えたかどうかというところだった。

記憶が曖昧なのは、あの日の帰りだけじゃない。それから一週間、夏休みが終わる最終日までどうやって自分が過ごしたかあまり覚えがなかった。ただ、部屋からほとんど出ずに何も考えずにボーっと過ごしていた気はする。何かを考えようとすれば、自分はまた泣いてしまうと分かっていたからだ。

由実たちやそれ以外のクラスメイト、中学時代の友達なんかからメールが入ることも少なくなかった。遅れ気味でもとりあえず元気を装って返事だけはしたけれど、そのどの誘いにも乗る気にはなれない。だからここ一週間まともに誰かと会話をした覚えもなかった。

あの日から毎日、先生からは何度も着信があった。鳴り続ける携帯電話を半ば虚ろな目で見やるけれど、それに出る気もなかった。そんな気力はなかったからだ。

だけどこのままでいいはずもなくて、私は、８月３１日に鳴った電話にようやく手を伸ばした。

明日からは学校が始まる。

どうしても顔を合わせるのだから、電話を無視し続けるわけにもいかないと思った。

「…はい」

『……白石』

１週間ぶりに聞く先生の声は、たった数日なのになぜかすごく懐かしく感じた。耳元で低く響くそれに、ぎゅっと胸が締め付けられる。それだけで思わず泣いてしまいそうになったのは、気のせいじゃないはずだ。

「…ごめんなさい、電話、全然出られなかった」

『……いや』

先に謝られるとは思っていなかったのか、先生は少しの間の後にそう小さく呟いた。

「……」

そして続く、沈黙。何をどう話していいのか迷っているのか、先

生は電話の向こうで少し息を吐いたようだった。

『虫のいい話だと思われるだろうけど…』

やがて先生がそう切り出したのは、どれくらい経った頃だっただろう。今の私にはとてつもなく長い時間に感じたのは確かだ。

『会って、話したいことがある』

「……」

即答できなかったのは、なぜか。

まだ私の中で躊躇してしまう何かがあるのか。

…でもどちらにせよ、もうあの日に「答え」は決まってしまっていた。

「私…ずっと、先生の口から聞きたいことがあったんです」

電話を持つ手に少し力を込めて、そう切り出す。黙って聞いている先生に、そのまま続けた。

「由香子さんと会ったこと、会ってどう思ったのかってこと…。それ以外にも、色々」

一度言葉を切ると、途切れたその一瞬の間に気を抜けば涙が出そうだった。

「言い訳でも、何でも良かった。ただ、安心したかった。先生の口から聞けるなら…きっと、嘘でも気休めでも良かった」
『……』
「でも、…もう無理なんです」
あの日と同じ言葉を、私は静かに…だけどはっきりと口にする。
俯きがちにベッドに腰かけて、眉間に力を込めた。

「今から何を聞いても…もう、先生が由香子さんのところに行ったっていう事実だけで…」
その現実だけで、押しつぶされる。きっと不安は拭えず、何を聞いても意味を為さないと思う。

『…そうだな』
低い声が、吐息まじりに同意を返した。

『結局ここんとこ…お前の無理した笑顔しか見てなかった気がする』
先生の声が、どこか自嘲気味に響いた。まるで、それが自分のせいだとでも言うように。
『……ごめん』

あの日由香子さんを追いかける時に聞いた、最後の言葉。できればもう二度と聞きたくなかったそれと同じものを告げられて、私は胸の痛みに耐えるように目を伏せた。

先生から、電話は切らなかった。

だから私から携帯の電源ボタンを押す。プツッと途切れた音を立てたそれは、今の私たちの関係を模しているようにも思えた。

あんなに大好きだった人と、一緒にいられたのは結局2ヶ月ほど。それでもその短期間で色々なことがあって、幸せを感じられることもたくさんあったはずだ。だからきっと、無駄なんかじゃなかったはずだ。もう、一緒にいられないとしても…。

「…さよなら、先生」

小さな呟きを漏らして、私は携帯電話を放るようにベッドの上に投げ出す。

17歳の夏、私が好きな人との別れを選んだのは、太陽が照りつけるような…まだ残暑の厳しい日だった。

1

「彼氏と別れたぁ？」
小学生の頃からの友人である美咲は、私の言葉を聞いて驚いたようにそんな声を上げた。

ここは彼女の部屋で、小学生の頃から私は何度も訪れたことがある。勝手知ったるようにベッドの前に腰を落ち着けていた私は、美咲の声に軽く頷いて返した。
私の話を聞きながらも片手間にゲームをしていた美咲は、呆気にとられたように口を大きく開けている。コントローラを持つ手も止まり、画面では美咲が操作していた柔道着の男が相手にコテンパンにやられるところだった。

「何で！？　どうして急に！？」
「何でって……まぁ、もうここ数ヶ月ろくに会ってもなかったし…」
出されたアイスティーをストローでゆるりとかき回しながら、口ごもるように私は答える。

「でも、あんなに仲良かったじゃん」
「仲は良いよ？今でも。でも…」
言いかけた瞬間、美咲は私の答えを先回りしたのか「ははーん」と意味ありげに笑った。
「あれかぁ。彼氏は和美のこと溺愛してる風だったけど、和美はそうでもなさそうだったから…」
ぐさっとくるようなことを平然と言ってのけてくれて、美咲は構

わず続ける。
「もうすぐ高校入学だし、今の彼氏とはさっさと別れて高校で新しい彼氏を見つけようって魂胆ね！」
「違う違う違う！！！」
勝手にうんうんと納得しそうな美咲に、慌てて私は否定を返した。

「いや…違うけどでも…」
否定はしたものの何と言っていいか困った私は、そう口ごもる。
それに呆れた顔をした美咲は、「何よ。ちゃんと説明しなさいよ」とわざと怒ったような口調で促した。

「違う…けど、もっとひどいかも……」
「何が？　別れた理由が？」
「……うーん……」

そもそも私は、一般的には幼稚園や小学校で初恋を済ませる女の子たちと違ってあまり恋愛に関心がもてないでいた。…いや、正確に言うと興味がないわけでは決してない。ただ、それほどまでに好きという感情を抱く相手にまだ出会っていなかったのかもしれない。

中学に入って周りが段々とそういう意識を色濃くしていく中、そんな自分に何の焦りも何の疑問も抱かなかった。もしかしたら自分はそういう人間なのかも、とすら思っていた。
だから特に恋愛に夢も抱いていなかったせいで、中学3年になって自分を好きだと言ってくれる人に押し切られて付き合うことにな

った。きっかけなんてそんな程度のものだと思ったせいもある。

それは近所に住む、昔から仲の良い兄的存在の人で、他の男の子たちより人間的には好感を持っていたのでそれでもいいと思っていた。彼は6歳上の大学生だったので、私の友達からはロリコンなんて言われていたりもしたけれど…。

私の元々中学生に見られない容姿と、自分でも変に自覚のある性格的な落ち着きのせいで、彼も中学生と付き合っている気はしていなかったのだろう。

だけど付き合い始めると言っても、中学生の私には大人との付き合い方なんて分かるわけもない。自分にその気がそれほどないのもあってか、2人の仲が「彼氏彼女」という関係にしては進展することもなかった。それでもいいと思ってくれていたのか、彼の方がそれに嫌気をさすこともなかった。でも私の高校受験もあって、ここ数ヶ月はろくに会えてもいなかった。

向こうも大学やバイトで忙しかったりしたし、このままだと自然消滅になったかもしれなかった。受験が終わって落ち着いたらきちんと話すべきだとは前から思っていたのだけれど。

「ひどいって、何がよ？　彼氏に対する裏切り的な？」
「……そのような…そうでないような…」

「和美、わけ分かんないんだけど」
呆れたように言って、美咲は放棄しかけていたコントローラを握りなおす。私が理路整然と話をできるようになるまで時間がかかると踏んだのか、再び画面に向いた。

「昨日、高校見に行ったの…」
美咲に見捨てられる前にと、私は慌ててポツリと呟く。ゲームをやり直そうとリセットボタンを押したところだった美咲は、その言葉に首を傾げて振り返った。

「中には入ってないんだけど…外からでもどんな感じか入学前に見てみたくて…」
「それで？」
「…その学校の裏側にある公園で、一人の男の人に会った」
「……？」

美咲の訝しげな目線から少し逃げ気味に目を泳がせて、私はその時のことを思い出す。

ベンチに座って、吸いもしない煙草を持って桜を見上げた…今にも泣きそうな目をした男の人。思い出すだけで胸のどこかがギュッと掴まれるような感覚に襲われる。どうしてこんなに見知らぬ人が気になるのか…どうしてこんなに、その姿をキレイだと思ってしまったのか…。

「一目惚れじゃん」
「う～っ、だからひどいことだって言ったじゃん」
頭を抱え込みたい心境にかられながら、私はあっさり言ってくれる美咲にそう返す。だけど美咲の方は、肩を竦めて少し笑った。コントローラを投げ出し、ゲームの電源ボタンを切る。

「そんで、その日のうちに彼氏に別れ話を持ちかけたってこと？」
「ひどいよね…一般的には『浮気』だもんね…」
「浮気かぁ…？　別に他の男と付き合ったわけじゃないし。和美は彼氏のことそんなに好きじゃなかったんだし、その男には浮ついた気持ちっていうより『本気』みたいだし？」
「……そっちの方が最低な気がする…」
「あははは っ」
こちらの気も知らないで、美咲は豪快に笑う。…笑いごとじゃない、そんな言葉が口から出そうだった。

「まぁでもさぁ…あのままだと自然消滅したかもしれない彼氏にきちんと別れ話を切り出す辺りは、和美の誠意を感じるよ」
「……」
「で、その一目惚れ男はどこのどんな人なの？」
急にそう尋ねられて、私は思わず目を丸くした。
「え、知らない」
「知らない！！？」
驚いたように、美咲は大声を上げる。そのリアクションにこちらも驚いてしまい、思わず身を竦めた。

「知らないって、何で!?　その場で聞かなかったの？　名前とか連絡先とか！」
「…聞かなかった…」
「じゃあ何で彼氏と別れたの!?　その男と恋愛する気だったからじゃないの？」
「そんなとこまで考えてないよ…」
ただ、自分にも本気で誰かを好きになれるかもしれないという可能性を見つけたから。
そしてそれが今の彼氏にじゃないと分かってしまった以上、今のままの関係を続けるのは彼氏に失礼だと思ったから。

「堅い、堅いよ和美」
「……うぅ…っ」
そう言われても、これが自分の性分だから仕方がない。

だけどこの時、私は知らなかった。もう会えないと思っていたその人に、このたった数日後に運命とも言える再会を果たすことを…。

＊＊＊＊＊

念願だった高校に進学できることになって、私はその時浮かれていたと思う。

普段なら眠くなりそうな入学式にさえどこか心踊り、しかもすぐに友達もできそうでワクワクしていた。

「戸田中から来たの？　私、新上中からなの。よろしくね」

新しいクラスで席が近くになった子は、野崎茜と名乗った。とても穏やかそうな子で、仲良くできそうだった。

「うん、よろしくね」

そうしてクラスにも希望が持てそうだと思いつつ、私は他の新入生たちと同じように入学式を行う体育館へと向かった。

長い長い校長先生やらＰＴＡ会長やらの話を終えて、入学式は無事に終わる。そしてそのまま、新入生への担任紹介が始まった。１年生だけでＡ組からＪ組まであるので、教師の紹介だけでも結構な時間がかかる。

その最中、Ｃ組の担任紹介の時だけ周りが一瞬ざわついた。司会の主任の先生に紹介されて一歩前に出た教師が、マイクを手渡されて自己紹介する。

「Ｃ組を担任します、数学の名取です」

そう挨拶するその人を見て、私はさっきのざわめきが何だったのか瞬時に理解した。その名取先生は、目を引くくらいの長身で美形だった。ざわめきは女の子たちの歓声のようなものだったらしい。

私のクラスは次のＤ組で、担任は中年の男教師だった。少し嫌味っぽい口調の自己紹介をした、少し頭の薄いその先生に同じクラスメイトたちのテンションが下がるのが感じられる。Ｃ組の女の子た

ちはまだ盛り上がっているので、仕方ないと思うと苦笑が漏れた。

「俺、C組のが良かったなぁ」

近くにいる男子たちまでそんなことを言い出すので、何だか不思議だ。

担任紹介なんて、自分の担当の教師以外はそれほど興味がないものだ。その後は私は何となくその場の成り行きを眺めていただけで、あまりきちんと他のクラスの先生の自己紹介を聞いていなかった。

どこかボーっとしていたのかもしれない。だけど、そんな私も目を瞠ったのが最後のJ組の時だった。

「……」

ざわ、と、再び周囲までもが反応する。C組の名取先生の時と同じくらいのざわめきだけど、内容は異質なようだった。

「J組の本城です。よろしく」

中には熱く自分の理論を語る先生もいた中、一番短い自己紹介。簡潔すぎるそれは、名取先生と同じくらいの長身のせいかどこか迫力があった。…いや、身長のせいだけじゃないんだろう。美形なのかもしれないけれど、纏うオーラ自体が、どこか柔らかい名取先生とは違っていた。

色でたとえるなら名取先生は淡いブルー。本城先生は…先が一切

見えない闇みたいな「黒」。

「怖ぇぇ」

どこかで男子がポツリと、呟くくらい。ざわめきは、どの生徒もその迫力に気圧されたからだろう。

だけど私は…その教師から、目が逸らせないでいた。

瞬きすることすら忘れていたと思う。

なぜならそれが…、あの日のあの男の人との再会だったからだ。

2

その人は本城行禎といい、１年Ｊ組を担任する化学の教師だった。黒い短髪で顎ひげを生やしていて、１８０センチ後半ほどの長身から見下ろされると思わず萎縮しそうになる。入学式の時はさすがにスーツを着ていたけれど、普段はいつも白衣を翻している。

ところ構わず煙草を吸うし口は悪いし、「不良教師」なんてあだ名がついているらしい。名取先生にも同じあだ名がつけられているらしいが、その内容と質は全く違うものだ。

だからこそ、名取先生のクラスの女子がイケメン担任に浮かれている間、Ｊ組の生徒たちは静まり返っていたことだろう。

そんな教師だったから、私はその後高校生活が本格的にスタートしても何の行動も起こせずにいた。ただその代わり、だからと言ってあの日抱いた自分の想いが消えうせてしまうこともなかった。

教師と生徒で、何かが発展するとは思えない。

ましてやあれほど他人に興味のなさそうな目をした人と。見ているだけでいい、なんて考えるには苦しすぎる想いだったけれど、積極的に何かを働きかけられるはずはなかった。

「和美は何の部活入んの？」
入学して数日たった頃、同じクラスで仲良くなった由実にそう聞かれた。最初に友達になった茜と由実は、同じ中学出身らしい。その時から仲が良かったという2人に、私が混ざった形だった。

「…まだ、考えてなくて…えっと、茜と由実は？」
「私はバレー。茜は家庭科部だよね？　料理も裁縫も好きだし」
2人共、きちんとやりたいことがあるらしい。私も中学の時はずっと陸上をやってきたけれど、高校でそれをやる気はなかった。

「でも確か、明日の授業後体育館で新入生向けの部活紹介あるよね？それ見て決めてもいいんじゃない？」
ニコリと笑った茜が、私を見ながら言った。
「そうだね…」
陸上以外には特に得意なこともやりたいこともあるわけじゃない。小さく頷いて、廊下の角を曲がろうとした……その時、だった。

「おわっ」
「きゃあっ！」
ドン、と向こうから来た誰かにぶつかって、結構な音がした。いた、と痛みを実感してそう思った瞬間に相手が「悪ぃ」と先に謝ってくる。かなりの長身の相手にぶつかったせいでよろめいた私を、その人はグッと腕を掴んで支えてくれた。

「先生…」

「大丈夫か？悪ぃ悪ぃ」
苦笑い気味に言って、そのぶつかった張本人である名取先生は私から手を離す。「こちらこそすみません」と言おうとした瞬間、私はその名取先生の隣の影に気づいた。更に長身の…本城先生が、私と名取先生を一瞥している。

目が合ったのは、一瞬だけ。けれどそれを先生はすぐにフイと逸らした。
当たり前のことだけれど、私を見ても何の反応もないかのように…。その態度に、やっぱり入学式前に一度会ったのが私だとは気づいていないんだと知った。

ズキンと胸が軋む。
その痛みに眉を顰めた時、名取先生が「急いでんだ、ホントに悪いな」ともう一度謝って先を行こうとした。そうして私から離れようとした瞬間―。

「いたい！」
「えぇっ！？」
頭に瞬間的な痛みを感じて、私は思わず叫んでいた。それに驚いたように振り向いた名取先生と、同時に状態を把握する。私の下ろした長い髪が、先生のスーツのボタンに絡みついてしまっていたんだ。

「大丈夫？和美！」
「え、うん…大丈夫だけど…」

由実に尋ねられて、私は頷く。…できるだけ頭は動かさないように、小さく。

「つーかこんな漫画みたいなことあんのかマジで」

また苦笑を漏らしながら、離れかけていた体を私に向き合う形に戻して名取先生は呟いた。そして私の髪を外そうと試みるけれど、あの一瞬でどう絡まったのか「それ」はなかなか外れる気配がない。

「どーなってんだ、これ」

「…茜、ハサミ持ってる？」

眉を顰める名取先生の前で、私は後ろに向けてそう呼びかけた。

「え…持ってるけど…」

「切っちゃってくれる？　取れそうにないし、この辺で」

ボタンに絡みついた辺りを指差すと、名取先生が「いや、」と強めの口調で言う。

「それはダメだろ、ちょっと待ってろ」

「でも…先生急いでるんですよね…？」

「いいから黙ってろ」

強く言われて、私は思わず言われるままに黙った。そしてそのままなかなか取れない髪と格闘する先生。その後ろにいた本城先生が、小さくため息を漏らしたのが分かった。

「…先行きますよ、名取センセイ」

手にした出席簿で自分の首の後ろの辺りをトントンとしながら、本城先生は言う。

「え、ちょ、お前待ってろよ！薄情な奴だな！」

「何とでも」

唇の端を持ち上げて笑ったその化学の教師は、本当に同僚を置いて白衣を翻して行ってしまった。

「……」
自分の今の状況も忘れて、思わずその後ろ姿を見送ってしまう。
遠慮のかけらもなくさっさと行ってしまうその人が、結局私の方を見ることはなかった。

だから、思い知らされる。
教師と生徒の距離を。手も…もしかしたらプライベートでは、声すらも届かない存在なんじゃないかと…。

胸の痛みを抱えながらその後ろ姿を見やっていた私は、ハッと我に返ったけれど遅かった。私の髪をボタンから外す作業をしながら…名取先生は、私の目線に気づいたようだった。
「……」
射抜くような先生の目は、全てを見透かされたかのような気がするほど。後ろにいた由実や茜にはばれなかっただろうけれど、私が傷ついた顔をしてしまっていたことにも気づいたかもしれない。

「…取れねぇな」
だけど先生は、それについては何のコメントもせずに再び下を向いた。
「お前、どうでもいいけどこんだけ長い髪だったら結ぶかなんとかしたらどうだ」
「……すみません…」
先生の口調は冗談まじりだったけれど思わず謝った私に、後ろか

ら由実の助け舟が届く。
「先生も、急いでるからって廊下を小走りしちゃダメなんじゃないですか」
「……スミマセン」
ニヤニヤと言った由実の一言に、複雑な表情をしながら答えた名取先生は次の瞬間にプッと吹き出した。そのやり取りに私も思わず口元をほころばせる。

先生の言うことはもっともだったけれど、私はそもそも入学してからあまり髪を結ぶつもりはなかった。中学の頃はいつも束ねていたし、下ろすのは休日の時くらいだった。
だけど高校に入ったら…願かけのようなものもあったのかもしれない。

入学式前のあの春休みのある日…、高校裏の公園であの人に会った時は、髪を結んでいなかったから…。
入学してからそれがここの教師だと知ってから、できるだけあの日と同じ状態でいたいと思った。髪型が変われば、分からないかもしれないから。あの日と同じように下ろしていたら、もしかしたら分かってもらえるんじゃないか…なんて。

結果、至近距離で私を見ても本城先生は気づいた様子もなかったのだけれど。

私の小さな願いも、届かないんだ。

全ては無駄だった。そんなこと、分かりきっていたはずだったのに。

「おし、取れたっ」

そんなことを考えていたうちに、やがて名取先生が満足そうに声を上げた。言葉通りボタンから髪を外してくれる。

「すみません、ありがとうございます」

ペコリと頭を下げた私に、名取先生は小さく微笑んだ。眼鏡の奥の目が、何となくさっきまでと違う色をたたえて私を見下ろす。

「…お前、名前は？」

「？　D組の…白石和美です」

「ふーん……お前あれだな、理系弱そうな顔してんな」

いきなり何を言うのか。思わず眉を寄せて先生の顔を訝しげに見上げると、彼は笑ったままだった。

「理系苦手だったらおススメの部活あるぜ？化学部。うちの学校の化学部は優秀なんだ。苦手だったのに得意教科になったって奴、結構いるな」

「…化学部…」

「そう。顧問がスパルタだから脱落する奴も多いけどな」

呟きながら繰り返した私は、ハッと目を瞠る。……やっぱり、さっきの一瞬で私の気持ちに気づかれたんだ。

「…ありがとうございます、考えてみます」

「おぅ」

白衣のポケットに手を入れたまま去っていったさっきの化学教師の後ろ姿を思い出しながら、私は素直にそう言った。…恐らく…名

取先生は、私の想いに気づいたって誰にもそれを話したりはしないだろうし。
私の気持ちを、面白がっている素振りもない。不思議と、ほぼ初対面なのにどこか信用できてしまう人だった。

「えー、じゃあ私も化学部入った方がいいかなぁ。化学苦手なんだよねー」
頭の後ろで手を組みながら、由実がふとそんなことを言う。
「お前はどう見ても『理系苦手』っていうより『運動したい』って顔してんだろ。」
「あ、分かります？　バレー部に入るつもりなんですけど」
「ふーん、いいんじゃねぇ？」
笑って答えてから、先生は私たちに手を振って「じゃーな」と職員室の方へ戻っていった。恐らくこれから会議に参加するのだろう。ただ明らかにゆっくり歩いているので、急ぐことはもう諦めたようだ。

「噂通りのイケメンだなぁ。話やすくてイイ先生っぽいよね」
「…だね」
由実の言葉に、小さく頷く。そして先生の姿が見えなくなるまで、その方向を眺めていた。

＊＊＊＊＊

「で、結局化学部に入った、と」

４月下旬にさしかかろうとした頃、週末に私はまた美咲の家に遊びに行った。相変わらずゲームのコントローラーを手にした美咲は、私の話をそうまとめる。ゲームをしながらなのにきちんと漏らさず話を聞ける辺りは本気ですごいと思う。

「でもさぁ、和美。あの日会ったのが自分だって気づいてもらえないのが傷つくなら、自分から言っちゃえばいいじゃん」

「…そういうことで話かけられるような先生じゃないんだよ…」

泣いているように見えたあの日、私は気づくと声をかけていた。でも今の先生は…言いようのないオーラというか威圧感というか…おいそれと話しかけられるような存在じゃない。

「それに…」

「『それに』？」

私の言葉を繰り返した美咲に、小さくため息を漏らして返した。

可能性の話でしかないけれど…もしかしたら、先生は私に気づいていないわけじゃないかもしれない。ただ忘れているだけ、「あの日会った女」が私だと気づかないだけ、ならまだいい。

本当は気づいていたとしたら…？

校内であんなに恐れられている教師だ。しかも大人の男だ。泣きそうな顔をしていたところを見てしまった私に、「もう会いたくない」と思っている可能性もある。

そうだとしたら…私から話かけるのは先生には迷惑なだけかもしれないと思えた。

「難しいもんだね、大人の男も」
美咲はそう言って肩を竦めたけれど、……違う。難しいのは私の気持ちの方だ。

もう一度会いたい、そう思っていただけなはずなのに、それが叶えば欲が出る。気づいてほしいのに、気づかれるのも怖い。避けられたくないし、でも正面きって話をする勇気もない。

そんな、矛盾した想いばかりだった。

3

部活が本格的に始まるのは、４月も下旬にさしかかる頃になってようやくといった時だった。

実験、研究熱心な先輩たちに、装い通りクールに指導する先生。無駄話なんてほとんどない真剣そのもののその部活に、ついていけるか心配になる。元々化学は苦手な方だ。だけど、入った以上はきっちりやるつもりだった。入った動機は不純でも、だからと言って手を抜ける性格でもない。

「どうしよう…っ、遅れちゃう！」

これまでは体験入部の期間だったけれど、今日からは本入部が始まる。そんな大事な一日目に遅れそうになって、私は廊下を急いでいた。担任の先生に捕まって、雑用を押し付けられたのが痛い。

部活へ遅れて行ってもそれを言えば誰も咎めはしないのだろうけれど、初日から遅れて入って注目を浴びることは避けたかった。

ほとんどの生徒たちがそれぞれの部活へ行って静かになり始めた校舎。

学年棟から教科棟へ駆け込むと、そこは更に人が少なく暗かったので、明るい場所から入り込んだ私は一瞬目がくらんだ。

１階にある化学実験室へと、教師の誰かに会っても怒られない程度に早足で急ぐ。そうしてたどり着くことばかりに意識を集中させていたせいで、一箇所だけある足元の小さな段差に気づくことがで

きなかった。

「きゃ…っ！」

思いっきり前のめりに倒れ、手にしていた鞄が前方へ飛ぶ。ビタンっと派手な音をたてた私は、それでも何とか膝と手をついて完全に倒れることは免れた。

「…いたた…」

床で膝を擦ったらしく、摩擦の熱と共にピリとした痛みが走る。眉を寄せてそれを確認しながら何とか体を起こすと、視界に一つの影が映った。

「……」

「っ…」

首ごと顔を仰向けて見上げたのは、いつも通り白衣を着た本城先生。いつから見ていたのか後ろにいたらしい先生は、特に感情の読めないあの無表情でこちらを一瞥しただけ。

「…っ」

目の前で転んだ恥ずかしさから、慌てて立ち上がる。倒れたあの一瞬にスカートがめくれていなかったことだけがせめてもの救いだ。

「……」

すっと、先生はそのまま私を追い越す。何も言わず、当たり前だけどこちらもろくに見ないまま。

やっぱり見向きもされない程度の一生徒でしかないという実感が、また沸き起こる。

そしてこの前名取先生と廊下でぶつかった時の、何の興味もなさそうにさっさと行ってしまった後ろ姿を思い出してしまった。その

時のことをフラッシュバックしたせいで、胸の痛みは相乗効果なのか肥大した気がする。

教師が、単なる新入生の一人を気にすることなんてあるはずがないのに。しかも自分の担任するクラスでもない学生を。

そんなことは分かりきっているのだけれど、それでも少し悲しかった。

「……」

手のひらも床についた時に擦ったらしく、薄く血が滲んでいた。それを空しく見つめていると、俯けた頭上に影が落ちた。一瞬視界が暗くなって、私はゆるりと再び顔を上げる。

そこには、私を追い抜いてさっさと行ってしまったと思っていた先生が、こちらを向いてすぐそこに立っていた。その手には私が転んだ時にかなり前へ飛ばしてしまった鞄。

「あ…っ、すみません…っ」

差し出されたそれを、無傷の方の右手で受け取った。

「気をつけろよ」

一言ポツリと言うと、先生は再び踵を返す。相変わらず愛想のかけらもないクールな表情だったけれど、その一言が「私に」向けて発されたものだと実感すると思わず目を見開いた。

「ありがとうございます」と慌ててその背中に声をかける。そうするとそのまま行ってしまうと思った後ろ姿が、ふと再び何かを思い出したようにこちらを向いた。

「白石、保健室行って手当てしてもらってから部活に来い。遅刻扱いは避けてやるから」
「え…？　えっと…」
予想外にかけられた言葉に、私は思わず目を瞠る。

…今…先生、私の苗字を呼んだ……？

返事に戸惑った私の表情をどう受け取ったのか、先生は小首を捻りながら私の手と足を顎で指し示す。
「血が出てる」
「…あ…っ、はいっ、すみません…」
最後の謝罪は何の意味があるのか自分でも分からなかったが、口をついて出てしまっていた。そんなこちらの様子は気にしないまま行こうとした先生に、頭で考えるよりも先に「…あの…っ」と思い切って声をかけてしまう。それも全て無意識のうちの行動だった。

「？」
先生が振り返るたびに、白衣の裾がなびく。それを見ながら、私はまた意図せず思ったことを口に出してしまった。
「先生……私の名前…」
どうして知っているのか、という質問は最後まで告げることはできなかった。
ただそれだけをポツリと呟く。だけど自分の意識外の行動に自身で驚いてしまったせいで、そこで口を噤んでしまった。

その私の様子に、先生が首を傾げる。

「白石だろ？お前」
「え、あ、はい…そうですけど…」
目を丸くしたまましどろもどろで、訳の分からないことを言う生徒だと思われただろう。倍増する恥ずかしさに顔を真っ赤にして俯きかけた。だけど先生は、一瞬不思議そうな顔をして私を見た後「ははは」と小さく声をたてて笑う。

「…！　……」
それは、あの日の公園で見た無理をした苦笑いでもなくて。この前名取先生とぶつかった時に唇に浮かべたような冷たいものでもなくて。ただ、ごく普通の自然な笑みだった。

「保健室行くのに、急いでまたこけるなよ」
それだけ言い置いて、今度こそ踵を返して実験室の方へ行ってしまう。

苗字を覚えられていただけで、私にとっては奇跡のようだった。目の前で転んでしまったことはこの上なく恥ずかしいけれど、それでも声をかけてもらえたことが嘘のようだった。

先生には、きっとこの先気にかけてもらえることなんてないと思っていたから…。

「……」

手渡された鞄を、キュッと強く握る。背の高いその姿が、角を曲がって見えなくなるまで私はじっとそちらを見つめていた。

＊＊＊＊＊＊

窓から差し込む光が、朝を告げる。

確か寝入る頃にもう外は薄く明るくなり始めていたはずだ。…ということは、数時間しか眠れていないようだ。しかも見た夢をはっきり覚えている。眠っている間も、その睡眠は深いものとは言えないようだった。

「…懐かしい夢…」

入学当初の夢を見ていたらしい。どこか感慨にふけりそうな感情を抑えて、カーテンを開けながら私は小さくそう呟いた。

あの頃、教師と生徒という立場でその隔たりは越えられないものだと思っていた。

手も、声も届かない。名前だって、本当はきっとなかなか覚えてもらえないだろうと思っていた。

だからこそ、あの低い声で苗字を呼ばれるとドキドキしたし、目

の前を素通りされなかっただけでホッとした。
…そう、あの時は、それだけで満足だとすら思えたはずだったんだ。

「……よしっ」
今日から新学期だ。長い夏休みを終えて、新たに学校が始まる。
鏡の前で制服に手早く着替え、髪をグッとアップにした。入学当初は先生に気づいてほしくて願かけのように下ろしたままだった長い髪。
今までその名残でそのままだったけれど、私はこの時多分初めてそれを上げた。体育の時のように緩くまとめるのではなくて、固く結んでピンで留める。
大きな鏡の前でクルリと一度回って、自分のその様子を確認した。

部屋を出ると、ちょうど隣の部屋から出てきた祥太郎と出くわした。
「おはよ」
短く言うと、祥太郎は驚いたように目を丸くしている。

「姉ちゃん、髪切った?」
「え?」
眉を顰めて見つめ返すと、祥太郎もまじまじとこちらを凝視してきた。
「切ってないわよ。上げただけ」

答えると、祥は「…あぁ、そう」と呟く。
「髪型一つで変わるもんだなぁ。別人かと思った」
「大げさだなぁ。別に家では結んだりとかしてたじゃない」
「いや、制服だとまた印象が違うっつーか…」
階段を下り始めた私に続いて、祥太郎も階下へ下りる。その途中で、私は思わず小さく呟いてしまった。
「大体、失恋するたびに髪切るわけにいかないし」
自嘲のような囁きを、祥は聞き逃さなかったらしい。「え？」と後ろで漏れる声を聞いた途端、私は自分が余計なことを口走ったことに気づいて「しまった」と口元を抑えた。

「何、姉ちゃん。教師の彼氏にフラれたの？」
「フラれた？　……うーん…どうかな」
フラれたのかフッたのか…この場合は判断が難しい。別れると言ったのは私だけれど、私を置いて由香子さんのところへ走ったのは先生の方だ。

「まぁ、どっちでも同じことよ」
祥とリビングへ一緒に入りながら、私は自分に言い聞かせるように言った。

そう、今となってはそこは問題じゃないんだ。
フッたとかフラれたとか…そんなことよりも、別れを選んだことが事実だから。

だけど、いつまでも落ち込んでいるわけにはいかない。泣くだけ泣いた。落ちるところまで落ちた。

いつかなっちゃんが言っていたっけ。落ちるところまでいけば、後は上がるだけだ。

心機一転するように変えた髪型は、私の気合を表しているようなものだ。いつまでも同じ場所で足踏みをしないように、自分を浮上させるための…。

そこまで思って、私はさっきまで考えていたはずのことを思い出す。

…そう、本来なら、先生に名前を覚えてもらえて話しかけてもらえて、それだけで十分だったはず。だけど実際には、私はそれよりもかなり幸せだったと思う。

届かないと思っていた手は届き、声には振り向いてもらえた。あの日の公園での出会いも覚えてくれていて、好きだと言ってもらえた。

それだけで、本当なら十分だったんじゃないか。

「さて、学校行こうかな」

手早く朝食とその後の身支度を終え、私はリビングを出る。

「あ、俺ももう出る。姉ちゃん、駅まで後ろ乗ってく？」
いつも学校まで自転車で行く祥太郎は、同じように鞄を手にしてそう声をかけてきた。
「ううん、いい。まだ早いし歩いて行く」
「そう」
駅までと言っても、祥の自転車の後ろに乗ったらその間に何をどれだけ質問されるか分かったもんじゃない。追求の手から逃れるべく、私はそのまま一人で先に玄関を出た。

昨日までの私の気分とは裏腹に、外に出た瞬間に広がる空は真っ青で晴れ晴れとしていた。
「よっと」
門を出た先の段差を飛び越えると、私はその空を見上げる。

先生と付き合っていた数ヶ月を、なかったことにはしない。
落ち込んでばかりもいられない。
気合を入れた髪にもう一度触れ、私は新たな気持ちで学校への道を一歩踏み出した。

1

早めに目が覚めたので、始業式の朝は早くに学校に着いた。既に登校してきている生徒は部活の朝練がある人たちばかりだ。校内はまだ静かなもので、私は教室へ向かう前に教科棟の方へと歩いた。

確か、風紀委員が今日から1週間ほど登校指導をするからなっちゃんは早めに出勤すると思う。そこに一緒に立つかは分からないけれど、まさか生徒に任せるだけ任せて自分は来ないなんてことはないだろう。そう思って私は、数学準備室の方へ足を向けた。

コンコン、と小さくノックをすると「はい」と思った通り低めの声が返ってくる。

「おはようございます」

ドアを開けてそーっと顔を出した私を見て、なっちゃんが少し目を丸くしたのが分かった。

「随分雰囲気変わったなぁ」

「そう？　弟にもそう言われたけど」

アップにした髪に触れながら、私は少し照れ笑いを浮かべる。

そんな私の様子を見て、なっちゃんはフッと微かに笑みを漏らした。

「元気そうだな、思ったより」
何のことを言っているのかは尋ね返さなくても当然わかった。だから、唇を持ち上げて少しだけ笑う。
「落ち込んでばかりもいられないよ」
言うと、「強いなお前」とどこか感心したような声が返ってきた。

「そういやお前、ミスコンに出る時の衣装は自分で用意しなきゃいけねぇんだって？」
それ以上その話をするのもどうかと思ったのか、話題を変えてなっちゃんはそう尋ねる。風紀委員の活動場所へ向かうのか、Ｙシャツの上に腕章をはめながら言った。
「うん、そう。でも何を着ればいいか検討もつかなくて…」
「うちのクラスの真山は思い切って水着で出るかって言ってたぜ」
「……ノリノリだね、Ｆ組」
「優勝狙いだからなぁ。…まぁ水着で出たら盛り上がるか大外しするか両極端だろうけど」
苦笑いを浮かべるなっちゃんにつられるように、私も同じような表情をする。

…さすがに私には、水着で出るまでの勇気はない。去年ミスコンに出ていた人はどんな格好をしていただろう。ドレスやらコスプレやら、それぞれ個性的だった気もする。

「今度の休みに諒子さんに一緒に選んでもらう約束してるんです」
諒子さんならアパレル会社の店舗を一店任されるほどの人だし、何よりおしゃれだ。自分ではどうしていいか分からないので、協力

してもらおうと夏休みが明ける前にお願いしておいた。何より、あの時迷惑をかけたお礼をまだ直接は言えていないから、会いたかったのもある。

「そうそう、それ。理沙が拗ねてるぜ」

携帯やらをポケットに入れながら、なっちゃんはそう言うと小さく肩を竦めた。

「え？」

聞き返すと、「修司からそれを聞いたらしい」と続ける。それから理沙さんの真似なのか、高い泣き声を作った。

「『和美ちゃんが私には相談してくれなかった～。私も行きたいのにぃ～』って」

「えぇ！？」

全然似ていない物まねをして、なっちゃんは笑う。

「いや、あの、もちろん理沙さんにもお願いしたいところだったんだけど…買い物とか、もうお腹も大きい理沙さんには迷惑かなって思って…」

慌てて弁解じみた言葉を羅列すると、なっちゃんは一層おかしそうに笑った。

「冗談だよ。理沙だって本気で拗ねてねぇよ」

その言葉にホッと安堵の息を漏らして、私は胸を撫で下ろす。もちろん、本来なら理沙さんも誘いたかった。だけど予定日を後2～3ヶ月後に控えた妊婦さんを、自分の都合で付き合わせるには気が引ける。

「ミスコンかぁ…多分一番気合入ってんの修司だろうなぁ」

身支度を整え終えたなっちゃんは、なにやら机に置いてあったファイルを手にした。そしてそのまま数学準備室を出ようとするので、

私もそれに続く。
「？　修司さん？」
首を傾げながら廊下に出てなっちゃんの隣に並び、その高い背を見上げた。
「あいつデジカメ買い直すらしいぜ、お前がミスコン出るから」
「えぇぇ！！？　ホントに来てくれるんだ！？」
最近、法律事務所に転職して朝から夜遅くまで働いていると聞いていたのに…。多忙なはずなのに、わざわざ貴重な休みに文化祭まで来てくれるらしい。

「…なんか…ホントにお父さんみたい、修司さんって」
「お前…そこはせめて『兄』にしとけって」
なっちゃんがそう言うので、私は一層おかしくて笑ってしまう。
「そうそう、それと同じこと前に……」
本城先生にも言われた、と続けそうになって、私は自分が自然に出しかけた名前にハッと我に返った。そして思わず口を噤んでしまう。自分で口にしそうになった名前に、一瞬で色んなことを思い出して胸がズキンと痛んだ。

「『前に』？」
閉ざした言葉を不思議に思ったのか、なっちゃんが繰り返す。それに曖昧に笑って返して、「ううん何でもない」と首を振った。

ちょうどその時、だった。正門に向かうらしいなっちゃんと、並んで教科棟の１階を歩いていた。
そこに廊下の反対側から一つの影がこちらへ向かってくる。その

姿を見つけると、より一層胸がドクンと跳ね上がるのが分かった。

「……っ」

思わず息を飲んだ私の目線に気づいたなっちゃんが、同じように前を見て目を細めたのが分かる。怜悧なその瞳が、不機嫌そうな色を放った。

こちらへ向かってくる本城先生は、私やなっちゃんの方は見ないままいつもの歩調で歩く。化学準備室は私たちの後方にあるから、すれ違うことは避けられないだろう。

「……」

約一週間ぶりに見る先生の姿に、胸がどこかで震えるのが分かる。先生はまた髭を生やし始めたのか、顎にあるそれは数ヶ月前までのようだった。それ以外はいつもと何ら変わらない。電柱のような長身に、真っ白の白衣。

なっちゃんが、すれ違う前に目線を逸らした。窓の外を向いて、先生の方を見ないようにする。

私はというと、同じようにするわけにもいかなくてすれ違いざまにペコリと頭を小さく下げた。

「おはようございます」

会釈をしたのは、本城先生の表情を見ないように。それと、私の

表情を見られないように、だ。

「おはよう」

小さく返事をして、先生はそのまま行ってしまう。勇気を持って挨拶をした瞬間の顔を見られずにすんだようで、私はホッと息をついた。顔を見られたくなかったのは、私の感情までバレてしまいそうだったから。

教師と生徒という立場に戻った今、挨拶すら交わさないというわけにはいかない。

だけど、その顔を見られたら私がまだ本当は先生が好きだということがバレてしまいそうで。その姿を見ただけで、こんなにも胸が痛んでしまうくらいなのだから。

後ろで化学準備室に入ったのか、ドアがパタンと閉められる音がした。それを確認してから、私は隣のなっちゃんを見上げる。

「なっちゃん、先生のことまだ怒ってるの？」

私のために怒ってくれているのは明白だけど、あんなに仲の良かった2人が未だに口もきかないのが少し悲しい気がしてそう尋ねた。

「当たり前だろ。2発殴ったぐらいで収まるかってんだよ」

「な…殴ったの！！？」

あの時は私は泣いて泣いて、自分のことで精一杯だった。だから、先生となっちゃんや修司さんの間にどんなやり取りがあったのかは全く聞いていない。

「修司が止めなかったら後10発は殴ってる」

ふん、と鼻を鳴らして言うなっちゃんの言葉に、私は心の中で本気で修司さんにお礼を言いたい気分だった。

「私の為に怒ってもらえるのはありがたいけど…」
「お前のためじゃねぇよ。俺があいつを許せねぇだけだ」
曲がったことが嫌いななっちゃんらしいセリフ。多分、一番正義感が強いのはなっちゃんだと思う。それが分かったから、私はそれ以上言うのをやめた。

「なっちゃん、実は今朝会いに来たのはちゃんと報告したかったからで…」
話を改めるように口火を切ると、なっちゃんは「何の」と問い返したりはしなかった。気かなくても、何のことか分かっているからだろう。

「私、あれから先生と話す勇気もなくて…だけどこのままじゃダメだと思って、昨日やっと電話に出られたの」
昨日のことなはずなのに、どこか遠い昔のような気さえする。
辛い思いを抱えていると…どうして時間の流れはこうも遅く感じるのだろう。

「その時…ちゃんと別れたよ」
告げた私に、なっちゃんは「そうか」と返事をしただけだった。
それきり、お互いに黙り込んでしまう。

そうしているうちに、正門へ向かうなっちゃんと分かれる場所に辿り着いた。
無理してでも唇の端を持ち上げて笑い、私はなっちゃんに手を振って背を向けた。

2

「かぁずみぃー！！」

パラパラと生徒が登校し始めた頃、後ろからかけられたそんな声と共にドンと背中を強く押された。廊下にある水道で手を洗っていた私は、「いたっ」と眉を寄せて振り返る。ハンカチで手を拭きながら、「何すんのよ」とそこに立っている由実に抗議した。

「昨日のメール、何!?　どういうこと!?」

「え？　…あぁ…」

歯切れの悪い返事をして、私は首を竦める。そんなこちらの様子に由実は更に目を鋭く光らせた。ただし、気を遣ってくれたのか声のトーンだけはワンランク落とす。

「『別れた』って…どういうこと!?　しかもその後、理由聞いても返事くれないし！」

「…ごめん、とりあえず報告だけでもと思って…」

ボソボソと返して、思わず苦笑いを浮かべてしまった。

先生と別れたのはほんの昨日のことだ。だけどとりあえずいつも相談に乗ってもらっている3人には報告はしておいたほうがいいと思い、事実だけはメールで送っていた。ただし、そうなるに至った経緯はまだ話せる状況じゃなかった。しかも長すぎてメールで書く内容じゃないだろうとも思う。

「また落ち着いたら話すよ」

「……大丈夫なの、和美は」
「うん、何とか」
思ったより元気そうだと思ったのか、由実は少しだけ安心したらしく深いため息をついた。この分だと茜や智子にも相当の心配をかけているんだろうなと思う。

だけど、どう話すべきか迷う。
由香子さんのこと、先生のこと…事実だけを話すなら簡単だ。でも、またそれを口にしているうちに涙が出てくるんじゃないか。強がっていたって、そんなにすぐに好きだった気持ちがなくなるわけじゃないんだから。

話せるようになったら話すという私の言葉に由実は納得してくれた。そしてそれからは昨日のテレビの話とか、そんなどうでもいいような話題をわざと振ってくれる。
気を遣わせているのが申し訳ない気もしながら、私はそんな由実と並んで教室へと向かった。その途中の廊下で、何事かを騒いでいる男子たちに出くわす。
「相澤ってさぁ、本城のこと好きだって噂あったよなぁ？」
「あーでも、なんかさっきの見たら…なぁ」
すれ違いざまに聞こえたそんな声に、私だけでなく由実もハッと顔を上げた。

名前を聞くだけでドキンと跳ね上がる胸。しかも話の内容がどうも聞き逃せないようなものだった。気にならないわけがないけれど、聞き返す勇気もなかった。でもそんな私の隣で由実が立ち止まる。

「何なに、相澤先生がどうしたの？」
うちのクラスの男子たちではなかったけれど、由実がいつもサッカーやらバスケやらをやっているグループらしかった。

「おー由実」
「いや、それがさっきさぁ」
男子たちは口々に軽い挨拶を返し、そのうちの一人が少し内緒話でもするかのように声を落とした。

「相澤が本城のこと好きらしいって噂、お前も聞いたことあんだろ？」
「あるね」
男子の言葉に軽く頷く。私はというと、そんな由実の隣で彼の声にただ興味ない素振りをしながら耳だけを傾けていた。
「それなのにさっき、相澤が別のメガネのイケメンと歩いててよ。その顔がなんつーかこう…もう蕩けそうな乙女顔で…」
「ふーん…実は彼氏がいたとかじゃないの？」
なんだ、と言いたそうに由実が唇を尖らせながら言う。恐らく私のために聞いてくれたのもあるんだろうけれど、思ったより面白い情報でもなかったこともあってつまらなさそうだ。

「そりゃねぇだろ。だって校内でだぜ？」
「え、生徒！？」
「いや、見たことねぇけどスーツだったから教師じゃねぇの？　新しく来た先生とか」

メガネのイケメン教師と言えば、うちの学校にはなっちゃんと美術の苑崎先生くらいしかいない。それ以外にかっこいい教師なんてものがいれば生徒の間でも有名で、彼らが「見たことない」はずもない。そうだとしたら、確かに彼らが言うように新しい教師が来たのだと考えられる。

「なんなの、相澤はユキサダがなびかないからそっちに路線変えたのかな」

「いや、意外に同僚キラーなんかも…」

「キラーって…本城は落とせてねぇじゃん」

揶揄するような声で誰かがそう応じた時、廊下の向こうが少しざわついた。

何事かと振り返れば、ちょうど噂の張本人がこちらに向かってくるところだった。始業式だからかいつもより高そうなスーツを着て、いつもよりキレイにしている相澤先生。その目は明らかに「女」の色が濃く、男の人なら簡単になびいてしまいそうな雰囲気。ただし、女から見たら「媚びている」ようにしか見えないだろうけれど。

その隣には、確かに彼らが口にしたように一人の男の人がいた。相澤先生に何かを説明され、メモを取りながら時折頷き返し、並んで歩いている。

「……っ」

その男の人の姿を見て、私は全身が瞬時に固まってしまうのを感じた。目はこの上なく見開かれ、指先すらうまく動かない。そんな

こちらの様子に気づいたのか、その男の人がゆっくりと顔を上げて私を見た。

少し色素の薄い髪に、線の細い体。

整った顔立ちに、メガネの奥は人の良さを表しているように優しい。一瞬で人を惹きつけてしまうような、魅力的な人だ。その証拠に、すれ違った生徒たちが皆振り返るのは初めて見る顔だからという理由だけではないだろう。

１７０後半くらいの身長に、グレーのスーツが映える。

「…れ…」

目を瞠ったまま、私は無意識に声を発していた。だけどすぐにハッと我に返り、慌てて口元を抑える。由実が「…和美？」と訝しげに私を見るのと、目の前の彼がスッとこちらから視線を逸らすのが同時だった。

「成川先生、どうかしました？」

相澤先生が、いつもより高めの声で問う。成川と呼ばれた彼は、「いえ」と柔らかく笑って再び手にしたメモ帳に視線を落とした。

＊＊＊＊＊＊

幻を、見ているのかと思った。
この時ほど自分の目が信じられないなんてことはなかったかもしれない。

「……」
始業式が終わった後、壇上に上げられたあの教師は教頭先生の紹介と共に頭を下げた。どうやら男子たちの予想は当たったらしい。夏休み中に急に入院することになってしまった英語の三山先生の代わりに来た、臨時の教師のようだ。

「和美、大丈夫？」
私の様子がおかしいのは、まだ気分が浮上しきれないからだと思ったらしい智子が心配そうに声をかけてくる。
「…うん、大丈夫」
始業式後のＨＲで本城先生を見て胸を痛めなかったわけではないけれど、何とか私はそう答えた。今は、先生のことよりも朝受けた衝撃と驚きの方がやっかいだった。

その日は始業式と簡単なＨＲで終える。あっという間に放課後になり、私は部活のない智子たち3人と下校しようと昇降口に向かっていた。途中、智子が用事があるという音楽準備室へ寄る。音楽室があるのは教科棟の中でも最上階で、一番静かな人気のない場所だ。

用事を終えて「さぁ帰ろう」という頃になって、珍しく由実が低い声で「和美」と私を呼びとめた。
「…何？」
聞き返すと、由実は心配そうだけれど、どこか難しい顔をしてそこに立っている。

「何か隠してるでしょ」
由実の言葉に、私の胸は一瞬ドキっと跳ねた。
「朝から様子がおかしいもん」
続けた由実は、珍しく鋭い。だけど茜は首を傾げ、智子は眉を顰めていた。
「由実、和美が昨日本城と別れたこと知ってるでしょ？　和美だって今辛いんだから、無理に聞かなくても…」
「違う。和美が隠してんのはユキサダのことじゃない」
はっきりとそう言い切った由実が、まっすぐこちらを見つめる。教科棟は静かなもので、他に誰の声もしない。
先生たちも、恐らく今は昼食を摂るために食堂や職員室に行っているんだろう。物音のしないそこに響くのは私たちの足音だけ。階段を下りながら、私は諦めたように小さく息をついた。

「今日、相澤先生と一緒にいた男の先生…」
言いかけた私の言葉に、由実が「うん？」と頷きながら続きを促す。
「成川先生、だっけ？　若いしイケメンだってもう女子たちが騒いでたよね」
智子もそう言いながら、興味津々な目をこちらに向けた。

「何、和美？　あの先生が気になるの？」
「…そういや和美、あの時あの先生のことじっと見てたよね」
智子の問いに被せるように、由実が言葉を継ぐ。

…そう、幻を見ているようだった。
だから思わず、食い入るように凝視してしまったんだ。

「……成川、蓮」
さっき教頭先生が紹介していたフルネームを、私は静かに繰り返した。

「中学の時…私が、1年くらい付き合ってた人」
当時のことを思い出しながら、私は小さく…だけどはっきりと告げる。その瞬間、3人が飛び上がりそうなほど「えぇぇぇ！！！？」と大声を上げた。悲鳴にも似た声だった。

「和美が前に言ってた…中学時代の彼氏…！！？　近所の大学生で、昔からかわいがってくれてたっていう…」
幼馴染というには年が離れていた。だけど近所に住んでいたので、彼には弟の祥太郎と共によく面倒を見てもらった。親同士が仲が良かったし、互いの家を行き来することも多かったからだ。

「成川先生が、和美の元カレ…！！！！！」

思わずと言った感じで大声でそう言った由実に、私は「しぃっ」と唇に指を寄せた。慌てて自分の口を抑えた由実だけれど、智子が階段を下りながら肩を竦める。

「大丈夫でしょ、今の時間、こんなとこ通る人いないって……、…っ」

言いかけた智子が、階段を下り終えてすぐそこの角を曲がろうとして言葉を飲んだ。

そこに、あちら側からやってきた人影があったからだ。その人物を見て、私たちは4人共驚いてしまう。絶句すると同時に思わず立ち止まってしまい、息を飲んだ。

…このタイミングだと、絶対聞かれた…。

愕然とする思いで、私はショックのあまり自分の視界がまるで白黒になってしまうような気分に陥る。

「ゆ、ユキサダ…」

やっとの思いで金縛りのような状態を抜け出して声を発したのは、由実が最初だった。

そこにいた本城先生は、歩みを止めるわけもなくそのまま私たち

とすれ違おうとする。だけどその瞬間、由実が私のフォローでもしようとしたのか先生の白衣をガシっと掴んだ。

「ちょっと待って、ユキサダ…！　今のは…！！」

「早く帰れよ、お前ら」

由実の言葉を遮るように、先生は唇を少し持ち上げてそう言う。いつもは冷たい無表情であしらったりするのに、この時笑った先生の表情に逆に違和感を覚えてしまった。

そしてそのままスッと離れ、私たちが来た階段を上がって行ってしまう。

「…ごめん、和美…」

由実が真っ青な顔になりながら言う。先生の後ろ姿を見送っていた私は、やがてゆっくりと頭を左右に振った。

「由実のせいじゃないよ」

「でも…！」

「それに、先生に聞かれたって関係ないと思う」

私は正直、本音を言えばこの学校に来た「彼」が元カレだなんて本城先生には知られたくなかった。だけど、先生にとってはそれはきっとどうでもいいことだ。

私が、昔誰と付き合っていようが…。そしてその元カレと、先生が近くにいる「学校」という場所で再会しようが。別れた今、そんなことは本城先生が気にかけるはずなんてこれっぽっちもない。

「……っ」

分かっているはずなのに、どうして胸がこんなに痛むんだろう。

理解できたのは、私の方はどうしたって先生を「どうでもいい」なんて思えるはずがないということだけだった。

3　side：Yukisada

「…落ちましたよ」
柔らかい声が降ってきたと思ったら、ふっと視界の片隅に影が落ちた。職員室の自分の席で仕事をしていた俺は、その声にゆるりと顔を上げる。俺が落としたらしい、床に落ちた資料を拾う一人の男がそこにいた。

「…どうも」
軽く頭を下げて礼を言い、その紙を受け取る。俺の言葉にかすかに微笑んだだけのその男は、１つ席を挟んだ向こう側に座った。

確か、名前は覚えていないけれど今日からやって来た臨時の教師だったはずだ。始業式より前に職員たちに向けて教頭が紹介していたので、間違いない。去年教師になったばかりのようで、今年２４になると言っていた気がする。

「本城先生」
そんなことを漠然と思い出していた俺を、反対側から呼ぶ声がした。再び顔を上げると、あまり見たくない人物がそこにいる。眼鏡の奥の目を少し細めた、教頭が立っていた。

「はい」
立ち上がりもせず、目線だけを上げたことが気に入らないのだろ

う。教頭の細い目は更に細くなったが、俺は構わず無言で先を促す。それに気づいたのか、教頭は「ゴホン」と一つわざとらしい咳払いをした。

「生徒の進路希望調査書が提出されていると思うが…確認はしたかね」

教頭の言葉に、俺は自然と視線を机の端へ移す。確か、夏休み中に記入して持ってこいと生徒に渡していたものだ。

「…いえ、まだですが」

確認したかと言われても、提出されたのは始業式の後のＨＲで、ほんの１時間ほど前のことだ。そんな時間があったわけがない。

「きちんと目を通して確認しておくように。相澤先生は今回は手伝えんよ。彼女には別の仕事を頼んでいる」

「…はぁ」

確かに俺のクラスの副担任は相澤だが、今まで担任がするべき仕事を彼女に押し付けたことは一度もない。だけど反論するのもバカバカしくて、俺は曖昧な返事をした。

相澤は確か、例の若い臨時教師の指導役…というか世話役を頼まれたはずだ。教頭の言葉はそのことを指しているのだろうが、別に俺には何の関係もないことだ。

「本城先生、聞いとるのかね」

「…聞いてますよ。善処します」

うんざり気味に答えると、教頭はいつも通り感情を露にして少し目を剥いた。そもそも、どうしてこいつが俺ばかりを目の仇にするのか未だに釈然としない。根本的に気に入らないタイプなのだとし

たら、放っておいてくれればいいのにとさえ思う。俺の隣で相澤が、更にその向こう側で臨時教師がこちらを見ているのが分かった。

「少しは名取先生を見習いたまえ。彼はここに戻ってきてすぐに目を通していたよ」

まだ続くらしい教頭の説教に、意図したわけではなく顔を上げる。斜め前の貴弘は、教頭の言葉通り生徒の出した調査書を手にしていた。話の矛先が自分の方にまで向いてきたことに少し迷惑そうにしながら、視線を上げる。そのせいで俺とかち合ってしまったそれを、あいつはふっと瞬時に逸らした。

……ここまで来ると小気味いいな。

今朝、廊下で白石と一緒だった貴弘が俺の方を一切見ないようにしていたことを思い出すと自然とそう思ってしまう。子どものようなその態度には、腹が立ったりするよりもむしろ逆に微笑ましい気がしてくるから不思議だ。貴弘を怒らせた張本人は俺なはずだけれど、どこか他人事のように感心しながらそう思う。

「本城先生」

返事のない俺に尚も呼びかけてくる教頭。俺はその顔を再び見上げると、「以後気をつけます」とこの上なく便利なお決まりのセリフを吐いた。話を終わらせるにはこの言葉が一番効果的だと知っている。

話を終わらされた教頭は、それ以上言葉を継げず…だが面白くなさそうに顔を歪めながら歩いて行った。

その後ろ姿を見送った後、完全に無視するわけにもいかずに俺はその例の調査書に手を伸ばす。パラパラとめくりながら、生徒たちも大変だなと素直な感想を胸の内で転がした。

確か、2年になる前にも一度進路希望調査を行われているはずだ。いくら進学校といっても、3年の受験期でもないのにこれほど頻繁に調査をする必要はあるのだろうか。大体、生徒の全員が本当のことを書くとも限らないのに…。

一枚一枚めくるのではなく、手にした束が柔らかい風に任せて自然とめくれるのを眺めるだけだ。だがやがて、そのうちの一枚のところで俺の目が止まった。

第一希望から第三希望まで、都内の4年制である女子大の名前が書かれている紙だった。ただ、一度書いたものを修正したらしく、白いテープの上に書かれている。

「……」

思わず、その紙を裏返して透かしてみた。そうして浮かび上がった、その紙の持ち主が元々書いていたはずの文字に、俺は思わず目を細めてしまう。

そこにあったのは、都内私立のW大の名前だった。

それを見た瞬間に、思い出す。あれは夏休みに入ってすぐのことだった。

『そう言えば先生って、どこの大学出身なんですか？』

そう尋ねてきた白石の顔は、今でも鮮明に脳内に蘇る。W大だと答えると、あいつは少し驚いた後、目を輝かせていた。

『すごい！　先生もなっちゃんも頭いいんですね…！！』

『…そうか？　入っちまえば大したことないぜ』

『そこの大学に入るまでが大変なんじゃないですか…！』

ニッコリ笑った白石は、確かその後こう続けたはずだ。

『私も、頑張ったら受けられるかなぁ…』

そんなことを言い出すとは思っていなかったので、内心少し驚いた。

『何で？』

尋ねた俺に、あいつは大学受験案内の分厚い冊子をめくりながら言う。

『だって、先生が見てきたものを見てみたいじゃないですか』

その言葉を聞いた瞬間に自分の胸に沸いた感情も、今でもはっきり覚えているのに……。

『…受けるだけなら誰でもできるぜ。受験料さえ払えばな』

『ひどっ！！』

そんな感情を悟られたくなくて叩いた憎まれ口に、あいつはそれ

でも笑っていた。

透かした調査書を机の上に戻す。
そうすると自然とため息が零れた。

あいつが一度夏休み中に書いただろうその大学名を、修正テープを使ってまで元に戻してきた理由は考えるまでもなく分かった。
「……」
そんな些細なことで実感させられる。本当にもう自分の手なんて届かないところへ行ってしまったんだと。

…いや、きっと俺は本気で理解はしていなかったんだ。
あいつが俺との別れを選んだことを。
昨日電話で告げられたそれに抗うことも許されなかったけれど、頭のどこかではまだどうにかなるとでも思っていたんじゃないか。

「…」
自分の認識の甘さに、反吐が出る。苦虫を噛み潰したように顔を歪めた瞬間、隣の相澤が「…本城先生?」と顔を覗きこみながら声をかけてきた。

「…え、あぁ…何ですか」
どうやら何度も呼びかけていたらしい。ようやく顔を上げた俺は、内心を押し隠して無表情を装った。

「これから成川先生を案内がてら食堂でお昼を食べようかと思うんですけど…先生もご一緒にいかがですか？」
隣の臨時教師を指して、相澤は言う。…そうだ、確か「成川」。そんな苗字だったことを今更思い出した。

「いや、俺は遠慮しておきます」
「…先生…」
何を勘違いしているのか、相澤が少し寂しそうな表情をする。すぐに悲劇のヒロインぶるのは相変わらずで、いい加減にしてほしい。そうでなくても相澤がわざとらしく俺の前でその若い臨時教師と仲良くしているのがうっとうしいのに、だ。

「…昼食は苑崎先生と約束があるので」
尚も縋られても面倒で、俺はそう続けた。そして手早く机の上を片付け、立ち上がる。
美術の苑崎先生と先約があるのは嘘ではない。だけど俺はこの時半ば口実のように言って、椅子を机の中に入れた。

約束の時間より早くなってしまったけれど、まぁいいだろう。それ以上職員室にいるのもわずらわしくて、俺は美術準備室へと向か

った。

生徒たちはもう下校したか部活へ向かったかで、教室のない教科棟はさらに静かなものだ。白衣のポケットに両手を突っ込み、長い廊下を歩く。それほどうるさく足音をたてているつもりもなかったが、それでも誰もいない校舎だと一人分の靴音が少し響いた。

驚いたのは、長い廊下の向こう側にある階段にさしかかろうとした時だった。階段から何人かが下りてくる気配がして、やがてそのうちの一人が大声を上げた。

「成川先生が和美の元カレ…！！！！！」

聞き覚えのあるその声よりも、その発言の意味の方が俺の胸に重く響く。目を瞠ったけれど足を止めるわけにはいかず、そのうち階段を下りてきたあいつらも俺に気づいた。４人は絶句したように、立ち尽くす。俺に話を聞かれてしまったことが分かったからだろう。

「ゆ、ユキサダ…」

一番に声を発したのは、さっきの叫びに似た言葉を口にした江口由実だった。狼狽したように俺の名前を呼ぶ。だけどそれでも、俺は平静を装って、立ち止まるわけにはいかなかった。

「ちょっと待って、ユキサダ…！　今のは…！！」

何をどう弁解しようとしたのか、慌てて江口が俺の白衣を掴む。だけど本来なら、白石にとってもこいつらにとっても、俺に言い訳するようなことではないはずだった。そして、その「言い訳」を聞く資格すら、俺にはない。

「早く帰れよ、お前ら」
江口が何か言うより先に言葉を遮り、そう言って笑う。
自分でも不自然さのかけらもない笑みを浮かべられた自信があって、そんな事実に逆に背筋がゾッとした。

何でもないことのように江口の手を振り切り、俺はそのままあいつらが下りてきた階段を上る。後ろは振り返らないまま、４階にある美術準備室へと向かった。

「……」
たどり着いたその部屋で、ノックもそこそこにドアを開ける。中にいた苑崎先生は、約束の時間より早い来訪に驚きはしたが迷惑そうな顔一つ見せなかった。ただ、無言でしばらく俺の顔を見つめていた。

やがて、ふと表情を崩してその整った顔に苦笑に似た笑みを浮かべる。そんな笑みを漏らさせるほど、今の俺がひどい顔をしているんだろうという自覚はあった。さっきまでの職員室と階段とで、平然を装って押し込めていた胸の痛みにもう耐えられそうになかったからだ。

「…コーヒーでもお淹れしましょうか？」
そう言った苑崎先生は、こちらの返事を待たずにカップを手にし

ていた。

4

少しでも陰鬱な気分を払拭するためにと気分転換に駅ビルに寄った。好きな雑貨屋さんで新商品を眺めたりＣＤ屋に立ち寄ったりしたけれど、そんなことですぐに重い気持ちが晴れるわけもなかった。それでも家に帰ってじっとしているよりはマシだろうと思う。何軒目かに立ち寄った本屋では、平台に置かれたファッション誌を何となくパラパラとめくっていた。

私の気持ちは飽和状態になってしまっていて、もう自分の感情がぐちゃぐちゃで整理ができない。前を向こうと決意して今朝家を出たはずだけれど、先生の顔を見たらそんなにうまくいくわけもなかった。

…加えて、「彼」と学校で再会して、昔付き合っていた事実を本城先生に知られることになって…。「それ」を聞いてもピクリとも表情を変えなかった先生に、また傷ついては落ち込むの繰り返しだ。

「…はーぁ」

『忘れる』ということは、こんなに難しいことだっただろうか。先生のことを忘れようとすればするほど、胸は痛んで目的とは逆方向に向かっている気がする。

そう思ってため息をついた時、後ろでクスリと笑みが聞こえてきた。

「…でかいため息」

その声にパッと振り返り、私は「…あ」と声を漏らす。そこに立っていたのは、他でもない例の「元カレ」だった。

「久しぶり、和美」
声を聞くのは1年と数ヶ月ぶりだ。別れたのは入学前の春休みで、その後連絡を取ったとしても専らメールだったから。しかも先生と付き合い始めてからは、そのメールも一度も交わしたことがなかった気がする。

柔らかい声と笑顔は相変わらずで、瞬時に懐かしさがこみ上げた。微かに笑みを口元に浮かべたけれど、うまく笑えただろうか。
「…蓮くん」
教師姿の彼は、鞄を片手にニコリと笑って返した。

「夏休み終わる頃に急な辞令が出てさ。和美の学校だったからびっくりした」
駅ビルを出て家への帰り道、並んで歩きながら蓮くんはそう言った。
「…教えてくれれば良かったのに」
言うと、また笑う。
「祥太郎には連絡しといたけど…聞いてない？」
そんな言葉に、私は思わず眉を寄せた。
「…あいつぅ…」
家に帰ったら文句を言ってやりたいくらいだった。蓮くんがうちの学校に来るという事実を前もって知っていたら、もう少し気持ちの準備の仕方もあったのに…。

「あれ、俺があの学校に行ったら何かマズイ事情でもあった？」
「…っ、そんなことは…」
「あぁ、今彼氏が同じ学校にいるとか？」
確かにそれじゃちょっと和美としては気まずいか、と続けて、蓮くんは苦笑いを浮かべる。…「今」彼氏がいるわけでもないし、恐らく蓮くんとしてはそれがまさか教師だとは思いもしていないのだろう。

「…いないよ、今彼氏は」
ため息まじりに呟いたけれど、蓮くんは何をどう思ったのか「あぁ、そう」としか言わなかった。私としては当然それ以上の事情を説明する気も意味も感じられず、代わりに話題を変えた。

「ところで蓮くん、今日は実家に帰るの？」
自然と私と並んで帰っている蓮くんに、そう尋ねる。教師になったと同時に、彼は家を出たはずだ。今では2駅だけだけど離れた町に住んでいて、実家に帰ってくることも稀になっておばさんが嘆いていたっけ。
そう思い出しながら言うと、「あぁ」と小さく頷いて返した。
「正確に言うと今日は『白石さん家』にお邪魔することになってる」
「え！？　うち！！？」
何で、と言いかけたけれど、事情は瞬時に理解できた気がした。
それほど遠くではないところに住んでいるとはいえ、今まで蓮くんはほとんど戻ってこなかったんだ。
その彼が私と同じ高校に教師として赴任してきたとなると、うち

の両親が黙っているとは思えない。歓迎やら「お帰りなさい」やらの意味を込めて、蓮くんを呼んだに違いない。

「和美と同じ学校になるのも何かの縁だから、夕飯でも食べにおいでって」

「……ごめんね…」

うちの両親は普段は忙しくてあまり家でゆっくりしていないタイプだけれど、仕事がない時はやたらと人を呼びたがる。私とは違って、賑やかなことが好きなんだ。蓮くんのご両親もそれは同じで、そんな4人がお互い子連れで集まる…なんてケースは昔から多かった。ただ、蓮くんが家を出てからは一度もなかったので口実にしたかったに違いない。

「いや、俺も久々に祥太郎にも会いたいし」

笑う蓮くんの横顔は、相変わらずだけれどやっぱり少し大人っぽくなったようだった。7歳も年上の人にこんな言い方、おかしいのかもしれないけれど。

「…蓮くんは…」

ふと再び違う話題を振ろうとして横を仰ぎ見た。

だけどその瞬間、蓮くんの顔がフッと厳しいものに変わる。そう思ってその視線を追おうとした瞬間には、彼はもう次の行動に移っていた。大股で地面を蹴り、前を横切ろうとして走っていた子どもの体を「危ない！」と咄嗟に手を伸ばして支える。

「…っ？」

大通りでもないし車が通ったわけでもない。何事かと思って目を

見開いた私だったけれど、それでもすぐに事情が理解できた。

その子どもが走って行こうとした先には、その子に気づかず携帯で誰かと電話したまま歩いている一人の男の人がいた。子どもはその人のすぐ脇を横切ろうとしたのだけれど、その男の人の手には火がついたままの煙草。歩いているためにその手は自然と前後に振られていて、その子がそのまま無邪気に走って行ったら目の高さにそれがあった。

「…すみません…っ」

追いついてきた子どもの親が、蓮くんからわが子を引き取りながら頭を下げる。「いいえ」とニコリと笑った蓮くんは、「無事でよかったです」と付け足した。

だけど、それだけでは終わらなかった。そのまま子どもに笑顔で手を振るとパッと踵を返す。携帯電話で話している男の人を追いかけて、その肩をトントンと叩いた。

初めは何事かと眉間に皺を寄せた男だったけれど、落ち着いた口調で事情を説明した蓮くんにやがてペコペコと頭を下げる。慌てて足で煙草の火を消したけれど、それをそのままに行こうとしたところでまた蓮くんに注意されていた。

いつもの癖なのだろう。言われて気づいて、その煙草を拾い上げるともう一度頭を下げながら去っていく。

素直に聞き入れてくれる人で良かった。逆恨みというか、逆ギレするような人も今のご時世少なくないだろう。

「…良かった、分かってくれる人で」
こちらへ戻ってきた蓮くんに向かってホッと胸を撫で下ろしながら言ったけれど、本当は私は知っていた。

蓮くんは、こういう時人より「うまい」。
相手の性格がどうこうより、あの声音で静かに話されると大抵の人間は逆に怒るなんて気がしなくなる。上から目線で偉そうに注意するわけでもないのに、逆らえない静の威圧感があるんだ。だからこそ彼は、教師が天職だとさえ私は思う。

相変わらずの正義感。
だけど蓮くんはいつでも正義を振りかざすだけの人じゃない。正義感の強いだけの人間なら、この世にいくらでもいる。ただ彼は、非難するだけでなくきっちりと説得をする辺り他の人とは違うんだ。

「…相変わらず嫌い？　煙草」
再び歩き出した横で、苦笑い気味にそう尋ねる。蓮くんが煙草を吸っているのは一度も見たことがない。いや、それどころか嫌煙家だったはず。
「嫌いだね。人に迷惑をかけるだけの代物だよ」
肩を竦めてそう言う彼の言葉に、私は少し遠い目をする。

そんな会話の最中に思い出したのは、煙草を吸うのが絵になりすぎる本城先生の姿だったからだ。

＊＊＊＊＊＊

久々に我が家を訪れた蓮くんに、うちの両親はとても嬉しそうだった。彼のご両親ももう既に到着していて、大人たちは一足先にお茶の時間を楽しんでいたようだ。そこに蓮くんが加わると、彼はすぐにうちの両親から質問攻めにされていた。

一人暮らしをしてからどうなのか、とか、教師の仕事はどうなのか、とか。それらを横目に、私は一旦着替えるためにリビングを抜け出して部屋へ向かう。

2階への階段を上がると、そこに祥太郎が立っていた。入れ替わりでこれから階下へ向かうのか、既に制服から私服に着替えている。

「おかえり」

声をかけれて、「ただいま」と小さく返す。それから階段を下りようとした腕をグイと引っ張って、そのまま祥太郎の部屋に連れ込んだ。

「いて！　いてぇって姉ちゃん！　何だよ！」

抗議する祥の声を完全に無視して、私は半ば乱暴に部屋のドアを閉める。

「あんたねぇ！　蓮くんが私の学校に来るって知ってたなら、何で教えてくれなかったのよ…！」

「何でって…」

引っ張った腕を放すと、祥太郎は本気で痛かったのか眉を顰めてそれを自分の方へ引き戻した。

「別に、関係ないじゃん？　もう蓮くんとは終わってるんだし？」
「…あのねぇ…！」
「それに、蓮くんからその連絡もらったの1週間前くらいで。話そうとしたけど、姉ちゃんずっと篭りっぱなしだったからさ」
悪びれる様子もなく、祥太郎は平然とそう言う。一週間前…そう、きっと先生の部屋から泣いて帰ってきた辺りだ。それなら確かに、祥太郎がそんな話を私に切り出せなかったのも分かる。

「それより、なに仲良く一緒に帰ってきてんの？」
少し真剣みを帯びるかのようにトーンを落とした、祥太郎の声。
「…え？」と聞き返すと、ため息まじりに祥太郎は目線を逸らしてすぐそこにあった私の部屋のラックに腕をのせた。
けだるそうに体を傾けて、再度顔を上げたかと思うとわずかに顎を仰向けて挑発的にも見える。
「蓮くんとだよ。何考えてんの」
「何って…駅で会ったんだから、仕方ないでしょ？うちに来るって言ってるのに別々に帰るのもおかしいし…」
「姉ちゃんってそういうとこ本当に無神経だよな」
言われた意味が瞬時には理解できず、私は思い切り怪訝な表情を浮かべた。分からないなりにも、もちろん褒められたわけではないことは認識している。

「別れて一年半くらいだっけ？　相手がまだ姉ちゃんのこと好きだったらどうすんの」
「…何言ってんの？」
続けた言葉に、私はようやく祥が何を言っているのかを理解した。呆れたように肩を落とし、吐息を漏らしながら自分より数センチ高

い位置にある弟の顔を見つめ返す。

「蓮くんがまだ私のこと…とか、そんなのありえないよ」

別れる前からお互い忙しくて、ほとんど会えてなかった。それでもけじめとして持ちかけた別れ話に、彼は抗うことも嘆くこともなかった。ただ、「分かった」と了承してくれただけ。

その後も用事があればメールをしていたけれど、もし彼が私のことを想っていたならもっとドロドロしていたに違いない。そう思って言った言葉に、今度こそ祥太郎は呆れた目をして息をついた。

「やっぱり分かってないね、姉ちゃん。フッた側の姉ちゃんがそうでも、相手もそうだとは限らないだろ」

「……」

「フラれた側は、いつだってそんなに簡単に割り切れるものじゃないんだよ。乗り越えたつもりでも、再会すれば感情が蘇ることだってある」

「……っ」

「…姉ちゃん？」

言いたいことを言った祥太郎だけど、突然反論もやめて口を噤んだ私の顔を訝しげに覗きこんだ。私はというと、思わず噛んだ唇の痛みで、胸の痛みをごまかす。俯いた目に映った手で、拳をギュッと握りこんだ。

…先生も…結局は「そう」だったんだろうか。

４年前に由香子さんに突然忘れられて別れることになってしまっ

て、結果としてフラれてしまって。
それでもそれを乗り越えたように思えたけれど、やはり彼女に会えば昔の想いで胸がいっぱいになったんだろうか。

だから…置いて行った？　私を…。

「姉ちゃん」
再度呼びかけられて、私はハッと顔を上げた。それ以上余計なことで頭を悩ませたくなくて、私は身を翻す。
「言いたいことはそれだけ？」
背を向けてそう尋ねると、祥太郎は何かを言いかけたようだったけれど口を閉ざしたようだった。恐らく、私に何を言っても無駄だと思ったんだろう。

昔から、そもそも祥太郎は私と蓮くんが付き合っていること自体を快く思っていなかった。祥太郎だって蓮くんのことは兄のように昔から慕っているから、嫌いなわけではない。ただ、私が本気で彼のことを好きじゃなかったことに気づいていたからだ。

話すことはそれ以上なかった。だから、私は勢いよくその部屋のドアを開いた。
自分の部屋に戻って着替えて階下に下りなきゃいけない。あまりにもたついていると、両家の両親から文句を言われそうだからだ。

だけどそう思って開いた扉の向こうに、佇む一つの影があった。

「……蓮くん…」

ちょうどノックしようとしていたところだったのか、軽く握った拳を宙に浮かせていた彼はその手を引き戻しながら苦笑いを浮かべた。

「ごめん、皆が『遅いから呼んでこい』って言うから来たんだけど…」

どうやら話を聞かれてしまったらしい。

一瞬息を飲んだ私だけれど、何かを言い訳するのもおかしい気がした。だからろくに言葉を継げなかった。それでも先に、蓮くんの方が再び口を開く。

「祥」

柔らかい声音で呼ばれて、私の後ろで祥太郎が目線を上げて彼を見据え返したのが分かった。

「相変わらずのシスコンだなぁ」

揶揄するような言葉は、それでも冗談まじりのものでバカにする響きは含まれていなかった。どこか感心したように呟いてから、蓮くんは口元に微笑みを浮かべる。

「俺さ、今、結婚を前提に付き合ってる彼女がいるんだ」

続けた彼の言葉に、祥太郎だけでなく私もわずかに目を見開いた。

「…あ、あぁ…そうなんだ」

取り繕うようにとりあえず返事だけした祥太郎に、蓮くんは再びフッと笑みを漏らす。

「だから余計な心配しなくていいよ」

「……」

祥太郎は、特に何も答えなかった。

蓮くんはそれを気にした様子もなく、私の頭に手をポンと軽く置くと踵を返して元来た階段を先に下りて行った。

5

その週は土曜日が休みで、私は約束通り諒子さんにミスコンの衣装選びに付き合ってもらっていた。ただどんなものがいいかの物色と打ち合わせのようなもので、実際に買うのはまた検討してからだ。そうして何軒かのお店を回った後お茶をしようと入ったカフェで、並んでケーキセットを頼む。

「で、臨時で赴任してきた成川蓮がお前の元カレなんだって？」

…ただし、その向かい側になっちゃんが座っているのは甚だ疑問だ。

「…何でそんなことなっちゃんが知ってんの」

ガトーショコラを運んだフォークの先を口元に当てたまま、私は目を細めて目の前の彼を見やる。

「それより何でそもそも貴弘がここにいんのよ」

隣で諒子さんも、訝しげに眉を寄せてそう言葉を重ねた。

細かいことは気にするなと返事をしたなっちゃんは、素知らぬ顔でホットコーヒーを啜る。それをしばらく眺めた後、諒子さんは少し意地悪そうに笑った。

「ははーん、今理沙ちゃんが実家に帰ってるからあんたヒマなんでしょ」

「…大きなお世話です」

図星だったのか、なっちゃんは口を歪めてそう答えるとフイとそ

っぽを向いた。

「で、なっちゃんがなんで蓮くんが私の元カレだってこと知ってるの？」

嫌な予感がして尋ねると、なっちゃんは平然と「江口と松浦に聞いた」と答える。予想通りに出てきた由実と智子の名前に、私は開いた口が塞がらなかった。

「そういう話をしてんのをユキサダに聞かれた、どうしよう。和美に悪いことしちゃったって俺のところに相談に来た」

「……そんなの由実のせいじゃないのに…」

「俺もそう言っといたけど」

カップをテーブルに戻して、なっちゃんは小さく肩を竦める。

「そもそも、ユキにゃもう関係ねぇ話だろ。今お前と付き合ってるんだったら当然気になるかもしれねぇけど、あいつにそんな権利やらねぇ」

「…まだ怒ってんの、貴弘」

「当然です」

諒子さんの言葉にはきっちり敬語で返して、なっちゃんは更に顔を顰めた。

「で？　その元カレって何なの？　和美ちゃん」

諒子さんはアイスコーヒーにミルクを注ぎながらそう話をこちらに戻す。その問いを受けて何と説明しようか迷っている間に、なっちゃんが頼んでもないのに事情をかいつまんで話した。

一連のその話を聞いた諒子さんは、元々大きな目を少しだけ丸く

する。
「和美ちゃんの元カレが学校に…！？　そんな偶然あるのね！　…で、どんな人なの？」
感想を漏らすよりもそう質問してくる辺り、諒子さんは私の「元カレ」に興味を持ったらしかった。ストローでコーヒーをかき混ぜるその彼女の仕草を横目で見ながら、私は「うぅーん」と首を捻る。一言で説明するには難しかったからだ。

「強いて言うなら、『漫画から出てきましたー』って感じの王子様みたいなキャラ」
またもや返事に詰まっていた私の代わりに、なっちゃんがそう答えた。当たらずとも遠からずな表現だ。
「へぇ！　和美ちゃんてそういうのタイプなの？　ユキと付き合ってたから、結構悪そうな男が好きなのかと思ってた」
「『悪そう』って…諒子さん」
苦笑いをして曖昧に返事をし、私は手にしていたフォークをお皿の上に戻す。確かに、言葉にするとしたら蓮くんと本城先生は全く逆のタイプだ。

「貴弘から見ても『王子キャラ』なの？　その人」
尋ねられたなっちゃんは、椅子の背もたれに尊大に背を預けると小さく肩を竦める。
「なんていうか…メガネかけたインテリ風で、でも物腰は柔らかで…非のうちどころのないタイプですかね」
「男からもそう言われる『男』ってあんまりいないわよね」
「言うなれば、完璧が歩いてる感じ。そういうところでもユキとは正反対ですよ」
あいつは欠点だらけだ、と付け足したなっちゃんは、まだそんな

ことを言う。だけどそれは子どもが拗ねているだけのようにも見えて、私も諒子さんも諌める気にはならなかった。

「で、お前はどうなんだよ？　元カレの出現でちょっとはヨリ戻す気になったりとかは？」

「蓮くんと？　…まさか」

中学時代、蓮くんのことを本気で好きだったかと言われれば疑問が残る。だから今ここで彼と再会したからと言って、やり直す気持ちになるわけもない。先生と別れたことによる傷を癒すだけの拠り所にするつもりも、そもそもあるわけがない。だけどそれをここで言うのも相手に失礼な気がしたので、私は言葉を継ぐことを止めておいた。

「でもそれだけ完璧な元カレが更にかっこよくなって目の前に現れたら…ちょっとドキっとしない？」

諒子さんが、そう尋ねる。問われた意味をしばらく考えてみたけれど、それでもやっぱり自分にはあり得ないことだった。

昔から…少しだけ感じていた「違和感」がある。

蓮くんは確かに、誰からみても完璧だった。

優しくて強くて、包容力もあって…まだ子どもだった私をそれでも大きく包み込んでくれていたと思う。曲がったことは嫌いで、正しいことをはっきりと言える人。頭も運動神経も良くて、女の子が憧れるような甘いマスクで…彼氏として不満があったわけもない。

ただ、当時から誰にも言えなかった、そんな蓮くんに感じる小さな違和感。漠然としすぎていて、はっきりと認識するには頼りない。でもその感情に名前をつけるとすれば…きっと、「恐怖」という言葉が合うのだと思う。完璧すぎる故に、たまに何故か彼が怖くなることがある。

「私…正直もう、自信がないんです」

完璧で優しい人を「怖い」とは言えるわけがなく、全く別のことを口にした。なっちゃんと諒子さんが、その言葉に同時に顔を上げてこちらを見る。

「蓮くんと学校で再会して初めに思ったのは、懐かしくて嬉しいとかドキッとしたとか…そんなものじゃなかったんです。昔の彼氏との再会を先生に見られたくなかった、ってことだけだった」

「和美ちゃん…」

「先生とははっきり別れたつもりで、ちゃんと諦めるつもりだったのに…。でも結局、蓮くんと話してもどうしても先生と比べてしまう自分がいるんです。それは、クラスの男子を見ていてもそう。『先生だったらこうなのに』とか、そんなことばっかりで」

「……」

「諦めるつもりだったのにここ数日、結局考えるのは先生のことばっかりで」

諦められる自信が、自分にはもうない。

このままでいいはずはないと分かっているし、開き直る勇気もないのに未練だけが取り残される。

目を細めて、諒子さんが私を労わるように見つめているのが分かる。

「そんなの当たり前よ、和美ちゃん。まだ別れて数日しか経ってないんだから…」
背中に添えられた手が慰めてくれるように優しく上下して、その温かさに涙が出そうだった。だけど、正面でなっちゃんは厳しい顔を更に歪める。テーブルの脇で長い足を組みなおして、不機嫌そうに眉を寄せた。
「自信がなかろうがなんだろうが、お前は立ち直らなきゃならねぇんだよ。ユキのことはさっぱり忘れてな」
言ったなっちゃんの言葉に、諒子さんが「…貴弘」と諌めるように呼ぶ。
「そうするのに新しい恋愛が必要なら、他の男にだって目を向けるのもいい。ただ、今と同じ場所でずっとグダグダすんのだけはやめろ」
「……でも…」
言いかけた私を、なっちゃんは更に表情を歪めて正面から睨むように見た。その迫力に一瞬息を飲んだ瞬間、彼の口が非情な言葉を継ぐ。
「あの時…お前を置いてあの女のところへユキが行った時」
「…」
「あいつは結局、朝まで帰ってこなかった」
「……っ」
「お前だってそれがどういうことかくらい分かってんだろ!?」
ダン、とテーブルに手をついたなっちゃんの言葉に、周りの数人が振り向く。それでもそれに構う余裕なんてあるはずもなく、私はただ何も言い返すこともできなかった。自分でも無自覚のうちに、一筋の雫が頬を伝う。
「…貴弘…っ、何もそこまで言わなくても……。ごめんね、和美ちゃん。貴弘は和美ちゃんのこと心配して…」

諒子さんがフォローを入れるように、慌ててそう取り繕うように言う。だけど、そんなことは分かっていた。いつだってなっちゃんは私を思って言ってくれているんだから。

「…っ」

でも、あふれ出した涙が止まらない。それはきっと、なっちゃんに言われた言葉が悲しかったからじゃない。ただあの日の胸の痛みをはっきりと思い出してしまったからだ。

＊＊＊＊＊

「あら、今日は早かったのね」

夕方には帰った私に、キッチンで夕飯の用意をしていた母がのんびりとそう言った。今日はどうやら普段は忙しい母も仕事が休みのようだ。鼻歌まじりに鍋の中の物をかき混ぜている様子は、一週間のうちで見られることは数少ない。

「…うん」とだけ曖昧に答えて、私はそのまま階段を上る。ここ数日の上がったり下がったりし続ける自分の胸のうちに、疲れきっていたから会話をするのも億劫だった。

「あ、待って和美」

そんなこちらの様子に気づいているのかいないのか…どちらかは分からなかったけれど、母の少しのんきな声が私を呼び止めた。階

段を数段上がったところで振り返ると、母がお玉を手にしたまま私を見上げる。
「悪いんだけど、今からこれ成川さんの家に持っていって」
「…？　どうしたの？」
母が指差したのは、言うまでもなく今向き合っている鍋だ。その中身をキレイな深皿に盛り付けながら、母は続ける。
「和美と祥太郎には言ってなかったんだけどね、ここのところ蓮くんのお母さん体調悪いことが多いのよ」
「…え？」
初めて聞く話に、私は思わず目を見開いた。聞き流すような話でもない気がして、数段上がりかけていた階段からリビングのフロアに戻る。そうして下りてきた私の前で忙しく動きまわりながら、母は煮物やらお手製の漬物やらといったものを持ちやすいように袋に入れた。
「この前うちに来た時は大丈夫だったみたいだけど…今日またちょっと寝込んでるみたいなのよ」
少しはしゃぎすぎちゃったのかしら、と母は心配そうに首を捻った。

「…大丈夫なの？　おばさん」
「うん、病院で薬はもらってるみたいだからね。でもたまに起き上がるのも辛い時があるって」
「……そう…なんだ」
いつも明るくて優しいおばさんだけど、確かに昔から体が丈夫な方じゃなかった。ここのところ悪化したのだと言われても想像に難くない。

「結局、蓮くんが少しの間戻ってくることになったみたいだけど」

「…えっ？」
「ほら、今も蓮くんはすぐ近くで一人暮らししてるわけだけど、それでも仕事してると帰ってくることも稀だったでしょう？　お母さんのことも心配だし、和美の学校ならアパートからよりこっちから通った方が近いから、臨時で赴任してる間は実家から通うことにしたんですって」
「…そう…なんだ…」
この前会った時は、誰もそんな話はしていなかったのに…。そう思いながら曖昧に相槌を打っていると、母は準備を終えた大きな袋を私にズイと差し出した。
「蓮くんなら料理もできるだろうけど、やっぱりね。助け合える時は何かしたいじゃない」
そう言いながら手渡してきた物を受け取ると、ズシと結構な重みがあった。そう思うなら自分で行ってくれればいいのに、とは、思ったけれど口にはできない。母の中では、私は未だに蓮くんに懐いている幼稚園くらいの頃のイメージのままに違いない。

「…行ってきます」
諦めたように肩を下げ、私は着替えもしないまま帰ってきたばかりの玄関を出た。

＊＊＊＊＊

どれくらいぶりかに成川家のインターホンを押した。「はい」とそれに対応したのは、母の言葉通り蓮くんだった。

名乗ると、「開いてるよ」と声が返ってくる。それもほんの1，2年前までと全く同じで、何だか懐かしくも感じたけれど浸るようなものではなかった。

「お邪魔します」

玄関のドアをそろそろと開けると、ちょうどリビングの方から蓮くんが出てくる。

「どうかした？」

学校で見るよりラフな格好をした蓮くんの姿は、当たり前だけれど昔の通りで少しだけホッとする。

「お母さんがこれ持って行ってって…おばさんの様子どう？」

「…あぁ…今は父親が病院連れて行ってる」

ありがとう、と付け足して袋を受け取る蓮くんの言葉に、私は安堵の息を漏らした。

「私、おばさんの体調が良くないなんて知らなかった」

「余計な心配かけるのもどうかと思ったから。…でも、助かるよ。ありがとう」

受け取った袋を少し掲げて見せて、蓮くんは笑う。なっちゃんとのさっきの会話があったからか、そんなソツのない完璧な笑顔でさえも何故か違和感を感じた。

先生の時は…たった少し唇の端を持ち上げて笑うだけでも、胸がしめつけられるように嬉しかったのに。

「……っ」

そんなことをふっと考えてしまった瞬間、また先生と他人を比較

している自分に気がついて愕然とする。

「どうぞ？　せっかく来たんだし、上がったら？」
スリッパを出しながら、蓮くんはこちらの様子に気づいた素振りもなくそう言った。その言葉に顔を上げ、私は慌てて首を横に振る。
「あ、ううん…今日は帰るね。おばさんによろしく」
ニッコリ笑ってみせたけれど、うまく笑えたかは分からなかった。蓮くんには、全て見透かされている気さえするからだ。それは先生やなっちゃんにも感じることはあるけれど…だからと言って今のように恐怖に似た何かを抱くのは今目の前にいる「彼」だけだった。

「…もしかして警戒してる？」
いたずらっぽく笑って、蓮くんは首を傾けた角度でこちらを見やる。深い色の瞳に見据えられると言葉がうまく出てこなくなりそうで、瞬時に目を逸らしてしまった。
それが間違いだったということまで一瞬で認識はできていなかったと思う。

「…ちが…っ、ただ、……えぇっと…ほら、蓮くんの彼女に悪いし…」
咄嗟に思いついた言い訳を口にはしたけれど、苦しかっただろう。完璧にどもってしまったし、逸らした目が自分でも後ろめたさを物語っている気がした。

だけど、そうして口をついて出た言い訳もあながち間違ってはいないと自分に言い聞かせる。もし自分が蓮くんの彼女の立場だった

ら、いくら今ではただの幼馴染だとは言っても他の女が家を訪れるのを快くは思わないはずだから。

でも…。

「…ふっ」

何がおかしかったのか、蓮くんが堪えきれずに笑みを漏らした。口元を手で覆って、それからこちらを向く。その笑みの意味を考えているうちに何故か体は硬直していて、思うようには動いてくれなかった。

そんな私に向けて伸ばされた蓮くんの指が、サイドに少し垂らされた長い髪に触れる。

「もしかして、和美も信じた?」

からかうような笑みを浮かべながら言って、蓮くんの指が私の髪を滑り下りた。

「あんな嘘」

「…っ?」

弾かれたように顔を上げようとしたけれど、うまくはいかずに目を見開くしかできない。

蓮くんの触れる箇所が冷たく凍っていくような感覚に陥ったのに、私の足は意に反してすぐに動くことはなかった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6376v/

Sweet&Bitter

2011年10月11日09時53分発行